
死にたがりな主人公とその仲間たち

自殺志願

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死にたがりな主人公とその仲間たち

【Nコード】

N1562Q

【作者名】

自殺志願

【あらすじ】

テンプレな展開で神様に殺された普通？の高校生、風峯蓮。

殺してしまった代わりに異世界に転生させてくれることになったが、その時レンが取った行動は……

生きること否定的な主人公とそれをそれぞれのやり方で矯正しようとするヒロインたち、個性的な仲間達が繰り広げるほのぼの？コメディ

PV140万、ユニーク13万突破

終わって、始まって、終わって、始まる人生

「さて、ここはどこだ？」

いつし意識を失ったかもよく思い出せず、目が覚めたら真っ白い空間で目を覚ましていた。

「俺は風峯蓮^{かざみね れん}、16歳のごく普通の高校生……うん、たぶん俺だ。」

意識を失う直前までの記憶は問題ないと確認できたので改めて周りを見回してみるがどこをどう見ても真っ白い世界が広がっていた。

「誰かいませんか？」

とりあえず叫んでみるが返答はないので

「寝るか。」

眠ろうとした時

「寝るなー!!」

突然耳元で叫ばれた。

叫ばれた方を見ると銀髪の美少女が立っていた。

「こういう場面に瀕した時どういう行動を取るかと思えばまさか寝ようとするとは予想外だったわ。」

「それはすみません、所でここはどこであなたは誰？」

「ここは生と死の狭間の空間よ。」

「なぜ俺がそんなところに？」

これはまさか間違えて殺してしまったとか言うテンプレ的な

「その通りよ。」

「あ、やっぱり心読めるんですか。」

「これでも一応神様ですから。」

しかし改めて見るとすさまじい美少女だな

「見るな変態。」

「すみません、ところでこんなところに呼び出したってことは他の世界に転生させてやる的なべたな展開が待ってたりしますか。」

「まあ、あなたが死んじゃったのはこっちの責任だからね、何か希望があれば受け付けるわよ。」

本当にテンプレだなあ

「それじゃあ、抱かせ・・・」

最後まで言わない内に蹴り飛ばされ、感覚的に数十メートルは跳ばされた。

死んでも痛い物は痛いんだなあ。

「と、突然なに言ってるのよ!?!」

顔を赤くしながら叫ぶ女神。

やばい可愛すぎる。

「いや俺そういうのには興味ないし、完全に死ぬ前に一回くらいは経験してみたいなあ」と。

「そ、そんなことできるわけないでしょ!?!」

軽い冗談のつもりで言ったつもりだったが予想以上の反応を見せてくれた女神に対し加虐心が湧いた蓮は口の端を釣り上げる。

「つまり俺の命はその程度価値しかなかったってことか、そりゃ神様から見たら人1人なんてその程度だよな。」

「だ、だからお詫びに他の世界に転生させてあげるって言ってるでしょ。」

懸命に反論する女神を見てゾクゾクとしたものが背筋を走る。

やばい、楽しい。

俺ってこんなだったけ

「だから言ってるだろ、俺はそんなものに興味はない。

それとも神様は人の意思を無視して偽善を押し付けるものなのか。」

「そ、それは・・・」

「抱かせるつもりがないなら早く死の世界へ連れて行け、そんな偽善は迷惑だ。」

「うっ・・・ごめん・・・なさい・・・」

あれ？　もしかして泣かせた？

「分かりました・・・ぐすっ・・・あなたがそれで満足するなら・・・」

そう言っつて本当に脱ぎだす女神。

あれ？　どうしてこうなった？

「ちょ、ちよつと待て！！　冗談だ冗談！！」

俺に弱みに付け込んでやる趣味はない、まさか本気にするとは・・・

「それじゃあ転生してください。」

どうして転生をお願いされなければならないのだろうか？　普通なら逆なのでは？

「分かった、分かったからもう泣くな。」

「ぐすっ・・・はい。」

ようやく泣きやんだか、自分で泣かせたとはいえやはり女を泣かせる奴は最低だな。

「何か転生する際に希望はありますか？」

最初の威厳などなくすっかりなくなり子犬キャラと化した女神

「とりあえず肉体はこのままで、あと武器を創造する力が欲しいかな。」

「分かりました、それでは転生させます。
本当にすみませんでした。」

足元に魔法陣のようなものが現れ体が足元から消えていき、風峯蓮の第二の人生が始まった。

「んっ、夢じゃなかったんだな。」

見渡す限り木に囲まれ、どこをどう見ても森である。

「ここなら大丈夫か。」

早速女神からもらった能力を使い拳銃を創造する。

「おお、本当に出てきた。」

さて、それではさようなら。」

拳銃を頭に押し付け躊躇なく引き金を引いた。
こうして風峯連の第二の人生が終了した。

「なにやってるんですか！！！」

目を覚ますと先程までいた空間に戻っており、いかにもご立腹な女神が立っていた。

ああ、これを見れたなら死んだ価値はあったかな。

「どうしてせっかく転生したのに、20行ももたずに死んじゃうんですか！！！」

泣かれたら困るから今度は手加減して虐めるとしよう。

「真剣に言ってるときになんてこと考えてるんですか！！！」

そう言えば心読まれてるんだった。

はあ、人生最後の楽しみが……

「そんなことを楽しまないで転生先で人生を楽しんでください！！！」

「いやだから、俺はそんなものに興味はないって。

さっき転生を受けたのはそうでもないと思えばまた泣きだすと思

「つたからで、俺には第2の人生になんて興味はない。」

「で、でも魔法とかに憧れたりしないんですか、あなたのいた世界では経験できないことですよ!!」

「興味がないと言えばうそになるがそういうのは本やゲームの中だけで十分。」

「もういいだろう、さっさと死の世界に連れてってくれ。」

「ぐすつ……」

「はあ!?! 　なぜだ、なぜ泣きだす!?!」

「お願いです……ぐすつ……お願いですからちゃんと生きてください。」

「どうしてそこまで転生させたがるんだよ？」

「俺は別に間違っただけで殺したことは恨むどころかむしろお礼を言いたいぐらいだ。」

「肉親はもういなかったがそれでもいろいろなしがらみがあったせいで自殺はできなかつたからな。」

「ようやく死ねたんだからさっさと永眠したいのに」

「どうして……ひつく……そんなに死にたがるんですか？」

「端的に言えば人生に満足してたからだな。」

「そりゃ俺はまだ生まれて20年も生きてないが後悔はしないように生きてたし、それに思い出したが俺が死んだ時子供を助けることができたからな、それだけで俺は十分だ。」

はあ、ようやく泣きやんでくれたか

「分かりました。」

私も一緒に転生先で暮らします。」

ハ？ ナニイツテノコイツ

「待て！！ いったいどこをどうしたらその結論にたどり着く！！
俺はさつさと永眠したい、転生なんてまっぴらだ！！」

冗談じゃない、やっと生から解放されたつてのに、それにこんな情緒不安定な奴と一緒に暮らすなんてごめんだ。

「でも、私を抱きたいって言ったじゃないですか！！」

「いちいち心を読むな！！ それにあれは冗談だと言っただろうが！！」

「だってそうでもしないとまた転生した瞬間に自殺しちゃっつじやないですか！！」

「当然だ！！ 俺はもうこれ以上生きるつもりはない、もしおまえと一緒に来たとしても隙を見て自殺してやる。」

ここまで言えば流石に引き下がるだろう

「それならあなたを限定的な不老不死にします。
100歳になつたら死ぬますから安心してください。」

「ふざけるな！！ 転生する前にも言ったがそんな偽善の押し付けは迷惑だ！！」

1000年だと、死ぬ前の世界でも後30年後にはひっそりと自殺するつもりだったのに

「偽善じゃありません！！ 好きになった人には一緒にいて欲しいと思うのは当たり前です。」

幻聴か？ 幻聴だよな？ さっきこいつ俺のことを好きとか言ったのは幻聴だよな？

「幻聴じゃありません！！ 乙女が勇気を振り絞って告白したのに幻聴扱いしないでください！！」

「知るか！！ そもそもお前は神で俺は人間だ！！ 俺にそんな趣味はない！！」

どこかの神話にはそんな話があったような気がするが今はそんなことどうでもいい

「そんなの関係ありません！！ 私は神様でも生まれてまだ一万年くらいしか生きてない女の子です！！」

「神の尺度で考えるな！！ 人間で一万年も生きてたら女の子どころか妖怪だ！！」

「私のこと可愛いって言うてくれたじゃないですか！！ 見た目さえ女の子ならそれでいいんです！！」

「そもそもどこに俺のことを好きになる要素があった!！」

急に顔を赤くしやがって、くそ可愛い

「そ、その私が泣いた時に優しくしてくれたところです・・・」

まさかあの時、虐めたことがこんな形で帰ってくるとは・・・

「いいのか？ 俺と一緒に来てみる、本当に犯すぞ。」

優しくされたところに惚れたのなら、心苦しいが酷い態度を取れば熱も冷めるはず

「私初めてなので優しくしてくださいね／＼／」

こいつMなのか？ どうしてここの毎回裏目に出るんだ!!
それに顔を赤くして瞳を潤ませるな、本当に襲いたくなる。

「その、服は脱いだ方がいいでしょうか？」

「脱がなくていい!! それにお前を抱くつもりはない!!」

当然だ、ここで抱いてしまったら転生して100年間も生き続けることになってしまう。

言っておくが俺はへたれではないぞ。

「これから一緒に暮らす恋人をお前なんて呼ばないでください。
私の名はフリッグです。」

それって北欧神話の最高位の女神の名前だろ。

オーディーンはいいのか？

「そんな些細なことはいいんです！！」

「お願いします、私と一緒に生きましよう！！」

「だが断る！！」

どんな美女からのお願いだろうが知ったことじゃない。
俺は何も考える必要がない永眠に就くんだ。

「もういいです！！ こうなったら無理矢理転生させます。」

「ふざけるな！！ 俺はまだ納得してないぞ！！」

そう言っている間に足元に魔法陣が！！

俺の永眠が！！

「愛してます、レン。」

最後にとびつきりの笑顔を魅せられ後、3度目の人生が始まった。

キャラ設定 その1

かざみね れん
風峯蓮

性別 男

年齢 16歳

身長 172cm

体重 65kg

職業 高校生

備考

黒目黒髪の典型的な日本人で容姿は中の上くらい。成績は上の下、運動は中の上とそこそこ優秀である程度のごくにはできないようになるが一定の所からはあまり上達しない。

良い言い方でいえずぐになんでもできる、悪言い方では器用貧乏。テンプレな死に方をした本作の主人公。

しかしそこからはぶっ飛んだ行動の連続でフリッグを困らせた。生前から自殺願望はあったが肉親はいないとはいえ親戚の家族に引き取られ面倒を見てもらっているため迷惑を考えて自殺できないでいた。

自殺したい理由なんかは本編で語られますのでここでは書きません。

フリッグ

性別 女

年齢 1万歳以上

身長 163cm

体重 不明

B84 / W56 / H83

職業 神様

備考

銀髪、赤目で容姿は上の上、神としての実力は原初の神と互角と神の中でも最強クラス。

キャラクターは少しマイナーで分かる人にしか分からないと思いますが某エロゲーのこんぼくのロリ担当が成長した姿。

間違つて蓮を殺し転生させようと思つたらまつたくその気のない蓮にからかわれ泣かされてしまう。

しかし、そこから蓮に優しくされ惚れてしまった。

蓮の死にたがりを矯正するために一緒に転生先で暮らすことになり、蓮に冷たくされるとすぐに泣いてしまう。

泣き虫女神との現状把握

「マジか……」

あの女、マジで転生させやがった。
しかも、第2の人生が終わった場所
しつかりと俺の死体が置いてある。

「よし、死のう。」

武器を創造する力は健在みたいだな。

「駄目です!!」

あれ？ 拳銃が消えたんだけど……
仕方ないもう一度。

「だから死のうとしないでください!!」

くそ、やはりいたのか。

「一緒に暮らすって言ったじゃないですか。」

「だから心を読むな。」

それに俺はまだ納得してない。
自殺の邪魔をするな。」

「でももう不老不死になってますから死ねませんよ。」

・・・・・・は？

「すまないもう一回言ってくれ。」

「でももう不老不死になってますから死ねませんよ。」

丁寧にも”でも”から言ってくれてありがとう。
そして死ね。

「はははは・・・・・・」

乾いた笑いしか出てこねえ・・・・・・終わった。

「生きていれば希望はあります、これから一緒に頑張りましょう。」
希望どころか絶望しかねえよ。
後100年だと？ 何が悲しくてそんなに長生きしかきゃならないんだ。

「100年なんてあつという間だから大丈夫です。」

だから心を読むな。

それと神の尺度で考えるな、人の100年は長すぎる。
なにもやる気が出ねえ、どうせ死ねないならなにも食べなくても平気だろう。

このまま100年寝て過ごすか。

「どうしてそうなるんですか！！ せつかく転生したんですから生を謳歌しましょうよ！！」

「だから心を読むなと言ってるだろう!! それにこうなった原因の張本人が言っつな!!」

「たく、とりあえず1000年寝て過ぐすつもりはないがとりあえず少し寝よう。」

「ぐすつ……」

またか……

こいつ涙もろすぎだろう。

「ごめんなさい……ひつく……なんでもしますから。」

ああもう!!

「分かったからいちいち泣くな、ちょっといろいろありすぎて疲れたから少し寝るだけだ。」

「本当に?」

いちいち可愛すぎんだよこいつ。

「本当だ。」

「まだ諦めるつもりはないがとりあえずいまのところは寝るだけだ。」

「寝ると言っても森の中だから寝心地は悪そうだが木に寄りかかって寝るか。」

「あ、あの一緒に寝ても良いですか!!」

駄目って言ったらまた泣くんだろつな

「勝手にしろ。」

「それじゃあ。」

なぜそんなにくっつく必要がある？
突っ込むの面倒だし寝るか。

side フリッゲ

はあ、幸せです。

隣で愛する人が私に寄りかかって寝ています。
神として生まれ一万年、他の神々と比べると千分の一も生きてい
せんが力だけなら最古参の神々にも負けないほど強い私です。
しかし、レンの前になると力なんてどうでもよくなってきました。
本来なら神は人の世に出てはいけないのですが力づくで黙らせまし
た。

我が儘で嫉妬深い私ですけどこれからよろしく願いますレン。

side out

んっ。

そう言えば寝てたんだつたな。

「起きたんですかレン。」

そういえばいたんだつたな。

「ああ、ところでお願いがあるんだが。」

「なんですか？」

「死なせてく「駄目です。「せめて最後まで言わせる。」

やっぱり駄目だったか。

となるとどうするか、こいつの言う通りならあと百年は生き続けなければならぬ……面倒だ。

「はあ、とにかく今俺はどんな状態なのか説明してくれ。」

「えっと、とりあえず百年間は不老不死となります。

なので心臓を貫かれても頭を吹き飛ばされてもすぐに回復します。もちろん痛みは残りますが。

それに空腹にはなりますが餓死はしません。」

面倒な体になつたな……

つまり殺されても死なないということか、拷問にあつたら最悪だな。死ぬ痛みを延々と繰り返されるなんて普通に精神が壊れる。

「他には何かあるか？」

「前の転生の時に望んだ武器の創造が使えるくらいです。

しかし、今のレンが使える物は銃くらいだと思います。」

剣を出したからって使いこなせるわけじゃないってことか。

まあ、反動が少ない銃ならなんとかなるだろう。

「次はこの世界についてだが、前の世界と違うところは？」

「レンがいた世界と比べると文明はかなり劣っていますですがその代わりに魔法が発展しています。」

「なのでお金さえあれば向こうの世界と同様豊かに暮らせると思いますが。」

魔法か、本当にファンタジーの世界だな。

まあ、こいつ自身が神様だから今更特に驚くことはないが

「元の世界には帰れないのか？」

「できないことはないですが、向こうの世界ではレンは一度死んでますから不審に思われますよ。」

確かにそうだ。

それに元の世界でお金を稼ごうと思ったら戸籍が必要だからな、こっちはどうだか知らんが魔法があるくらいならギルドくらいはあるだろう。

「大体状況は分かった。」

だが、俺は戦闘に関してはまるっきりの素人だ。

魔法があるくらいなら魔物とかもいるんだろう？ そっついうやつらに捕まったらどうすればいい？」

死なない体と武器を創造する力を使えば勝てないことはないと思うができれば痛い思いはしたくない。

「そこは私が守ります。」

「これでも私は神様ですから。」

それはありがたいがこんな事態に陥ってるのはお前のせいだぞ。

「とりあえず近くの村か町に行こう。」

これからの行動を話しあうのはそれからだ。」

「はい。」

変なことを言いださなきゃ俺好みの女なのに。

「なにか言いましたか？」

「言われた通り心は読んでないんだな。」

「はい。」

レンには嫌われたくありませんから。」

こいつはどうして俺なんかのことを気にいったんだろう？
もしかして友達いないのか？

「どうかしましたか？」

「なんでもない。」

町や村の方向は分かるか？」

「北西の方向にたくさんの方の気配がしますからそこに行けば大丈夫だと思います。」

「とりあえず行くか。」

「はい」

やっぱり泣いているより笑っている方がいいよな。

side フリッゲ

寝る前より機嫌が良くなった気がします。
無理矢理転生したことを許してくれたんでしょうか？
ちよつと怖いですけどやはり確かめなければ

「あ、あのレンちよつといいですか。」

「なんだ？」

「その無理矢理転生させたこと怒ってますか？」

「当然だ。」

やっぱりそうですよね。

レンは早く死にたいって言うってたのに私の我が儘でこうしてるんですから怒っていて当たり前です。

うっ・・・泣きそうになってきた。

でもレンを困らせたくないから我慢しなくちゃ。

「はあ、さつさと死にたいから気にするなとは言わないがこうなったからには仕方ないからもう諦めてるよ。

お前も俺を死なせるつもりはないんだろっ？」

当然です。

死んだ人間は魂を一度リセットしますから同じ魂を持っていたとしてもそれはレンではありません。
そしてリセットされたらいくら私でもどうすることもできません。

「それなら泣くな。」

そんな奴に俺の望みを潰されたかと思うと気が滅入る。」

ああ、愛する人に頭をなでられるってこんなに気持ちいいものなんですね。

もう駄目です、こんなに優しくされたら離れられません。

「ほら行くぞ。」

「は、はい。」

あまりの心地良さに呆けてしまいました。
もうこの気持ちは抑えられそうにありません。
ずっと傍にいますレン。

side out

まずい。

どうして俺はあんなことしてしまっただんだ!!
たぶんまたあいつの俺に対する好感度が上がってしまった。
このままでは百年経っても死ぬるか分からなくなってきた。
だいたい女の涙は反則だ、あんなもの見せられたら男ならだれだって慰めたくなるだろう。
とにかくこれ以上好感度を上げないように気をつけなければ。

「レン、人の気配が強くなってきました。」

そろそろ街に着くと思います。」

あれから二時間歩いてようやくか、インドア派にはなかなか堪えるな。

「大丈夫ですかレン？」

「疲れているようですけど。」

流石に神様だけあってまったく疲れてるようには見えないな。

そういえば今さらだがチート化できないのか？

「なあ、転生する前に希望をかなえてくれるって言うてただらう。

それで身体強化できないのか？」

「すみません。」

それは魂を改ざんするものであまりにも手を加え過ぎると精神に影響が出やすいので三つまでが限界なんです。」

3つ？

1つは武器の創造だろ、体をそのままって言うので2つ目として、残りの1つは？」

「俺が望んだことって2つだよな。」

残りの1つはどうなったんだ？」

「それは……不老不死です。」

なるほど、それがあつたな。

まあいまさらだからしょうがないか

「えっと、その代わりと言っては何ですが私が神術で補助しますからそれで身体への負担はかなり減らせます。」

確かにかなり体が軽くなった。

これなら反動の強い銃でも扱えるだろう。

「これはどれくらい保つんだ？」

「私が傍にいる限り半永久的です。」

それなら大丈夫だろう。

こいつがそう簡単には離れるはずもないしな。

「分かった。」

ありがとう。」

かなり驚いた眼で見られたが俺だって普通に感謝くらいはする。ただその機会が少ないだけだ。

「レン、街が見えました。」

結構大きな街だな。

はあ、これからどうなることやら。

平穩な生活を目指して

とりあえず無事街に着くことができた。

ちなみにこの街はアルフ Heim っていうエルフの街らしい。

そんなところに人間が入っても大丈夫か不安だったがこの世界ではどの種族も結構友好的らしい。

「さて、まずはどうやって金を稼ぐかだ。

何かいい案はないか？」

「私が何か造って売れば一気に大金持ちになれると思いますよ。」

さすが神様、考えもつかなかったことはさらりと。
でもそれっていいのか？

「ちなみにどんなものを造るつもりだ？」

「例えば、どんなものでも切れる剣でしょうか。」

「そんなもの世界に持ち込んでいいのか？」

「当然駄目です。」

でもレンが望むなら・・・」

その続きは何だよ。

だが聞いたらなにか終わりそうな気がするからあえて聞かないが。

「その案は却下だ。」

そもそもこの世界に戸籍って必要なのか？」

戸籍が必要なら絶望的だ。
最悪、裏の仕事をするはめになってしまう。

「ちょっと待ってください。」

そこらへんに歩いているエルフに触れただけ？
あ、またか。

「お待たせしました。」

どうやらこの世界は1つの国で成り立っているようです。
そして9つの街がそれぞれの地域を治めているそう。戸籍のようなものはあるみたいですが申請さえ行えば簡単に手に入るそうです。
・・・お金は必要ですけど。」

「まさか、記憶を奪ったのか？」

「違います。」

この世界の常識を複数の人間・・・エルフですけど、収集して照合したんです。
もちろんプライバシーのようなものは覗いていませんし、後遺症のようなものもありません。」

それなら・・・まあぎりぎり許容範囲だな。

俺は自分の為に他人に迷惑をかけることが大嫌いだからな。

「結局、問題は振り出しに戻るわけか。」

まさか異世界に来てまで金の心配をしなければならぬとは。
現実は厳しいな。

「いつそのこと貨幣を複製しましょうか？」

「それができるなら早く言えー!!」

あんまりやりすぎると経済バランスが崩れるから駄目だが、少しなら問題ないだろう。

「とりあえず戸籍を申請するか。」

「分かりました。

こっちです。」

それにしても本とかでもよくあるがエルフって皆美形ばかりだな。まあそれ以上の奴が近くにいるからどうとも思わないが。

「着きましたよ。」

今更だが言葉が通じて文字が読める。

これはデフォなのか？

「どうかしましたか？」

「なんでもない。

それより早く申請を終わらせてしまおう。」

記入項目多いな・・・

まず名前、これはレン・カザミネでいいか

生年月日、この世界は元の世界と同じでいいのかな？

適当に書い

ておこつ。

次は家族構成、こいつとの関係か……とりあえず兄妹ということにしておこう

次は住所？ 戸籍申請してきてるやつにそんなこと聞くのか？ 後回し

次は職業？ 戸籍がないなら職に着けるわけないだろう、とりあえず無職。

・
・
・
・
ようやく記入が終わった。

「承りました。」

レン・カザミネ様とフリッグ・カザミネ様ですね。

初めて戸籍を申請した人には仮住居が与えられます、貸し出し期限は1年です。

もし引越す際にはここで申請してください。

職業は何かお決まりですか？」

「いや、まだ決まってない。」

「それならばいくつかご紹介しますがどうなさいますか？」

「見せてくれ。」

飲食店に魔法薬、魔法具の見習いに自警団かいろいろ求人があるもんだな。

他には、教師、神父、役員、農業、芸術、医療関係、最後の2つはどう考えても素人じゃ勤まらないな。

「何かやりたいことあるか？」

「そういえば神様って腹減るのかな？」

「そもそもこいつ殺せるの？」

「私はレンに従います。」

「予想通りの答えだがせっかく神様がいるんだから上手く利用できる職業がいいな。」

「となると魔物退治とか荒事が向いてるな。」

「俺もこいつの補助があればそこそこ戦えるだろう。」

「魔物を狩って収入になる職業はあるか？」

「それだけというわけではありませんが国から出された依頼で魔物を倒して収入とする職業ならあります。」

「もちろん魔物退治だけでなく犯罪組織の壊滅や人探しなど危険が付きますが受けるか受けないかは自由に選択できる職業です。」

「最初はランクが低いと難易度の高い依頼は受けることはできませんが。」

「それはそうだろう。」

「いきなり素人に犯罪組織に乗り込む依頼なんて頼んだら失敗するにきまつてる。」

「なら俺とこいつの職業をそれにしといてくれ。」

「承りました。」

「それではこちらに記入をお願いします。」

またか・・・

・
・
・
・

「ありがとうございます。

ギルドカード申請を行いますのでしばらくお待ちください。」

見たことない文字をかけるってすごいな。

元の世界でこの力があつたら翻訳の仕事とか簡単にできたのに。

「レン、お腹すいてませんか？」

そういえばこっちの世界に来てから何も食べてなかったな

「どうぞ。」

サンドイッチみたいなものだけど中身がグロイ。

まあ空腹で倒れるよりましだろう。

「以外と美味しい。」

「それはよかったです。」

なぜ俺はこうもこいつに懐かれてるんだろう？

懐かれて悪い気はしないが相手がこうも美少女（見た目が）だと対応に困る。

「お待たせしました。」

これがギルドカードになります。

紛失したら再発行の為、お金がかかりますので紛失しないようお気を付けてください。

依頼の受け付けは街にあるホームギルドで行っていますのでそちらでお願いします。」

とりあえず住むところと職は手に入った。

後は衣と食だが………造ってもらった方が早くね？

「食べるもの造れないのか？」

「私生命は造ることできないんです。」

流石に無理だったか。

だが衣は大丈夫そうだ。

後は一番大事な食だが金を複製できるからあまり困ることはないだろう。

あまり多用するつもりはないけど。

「あの、いつになったら名前で読んでくれるんですか？」

そういえばそうだな。

「お前が俺を死なせてくれたら。」

「やっぱり諦めてないんですね。」

当然だ、早く解放されるに越したことはない。

それに名前で読んだら取り返しをつかないところまでいってしまうような気がする。

「とりあえずホームギルドに行くぞ。」

そんな目で見られても無駄だ。

「レンのばか。」

拗ねられたけど、すぐに治るだろう。

とりあえず最優先は豊かな生活だ。

貧乏なまま百年間も苦しみたくないしな。

side フリッゲ

レンのばか!!

名前で呼ぶくらいしてくれたっていいのに……

やっぱり私って嫌われてるのかなあ

もう怒ってないって言ってたけど怒っていると嫌ってるって別物だし・

……

最近すぐ泣きたくなってくる。

私ってこんなに涙もろかったんだ……

side out

またか!!

どうしようか、慰めたらまた好感度が上がってしまっがこれを放っておくと罪悪感が……

そもそも今回は俺は何もしてないはずだ、だから俺の責任ではない

はず……だよね？

とりあえず気を逸らしやれば泣きやむかな？

「着いたみたいだぞ。」

「ふえ……ぐすつ、なんですか？」

駄目だ……

こいつほんとに神様か？ 俺の中の神様のイメージ像が崩壊して
いく。

とにかくこの情緒不安定なのをどうにかしないと精神衛生的につら
い。

「はあ、今度はどうして泣いてるんだ？」

「ごめんなさい。」

もう泣きませんからこれ以上嫌いにならないでください。」

そういうわけか。

別に俺はこいつのことを嫌いなわけではない。

こいつが俺を殺さなかったら元の世界で普通どおりに暮らしていた
だけでこいつがいればこっちの世界の方が暮らしやすいだろう。

それに、なんだかんだ言ってもこいつの外見は俺の好みだ。

見てるだけで眼福で和む。

まあ、中身がこれでなければ最高なんだが。

「なにを勘違いしてるかは知らないが別に俺はお前のことを嫌いな
わけじゃない。

転生に関しては迷惑してるがもう割り切ってるから死なせる気がな
いなら無駄に気にするな。」

「ありがとうございます。」

やっと泣きやんだか。

やっぱり美少女は笑っていた方が世の為だ。

「さて、初仕事だ。

期待してるぞ。」

「頑張ります。」

こいつがいればどんな仕事でも楽にこなせるだろうが他人に迷惑を
かけっぱなしというのは俺が耐えられないから邪魔にならない程度
に頑張るとしますか。

初めての仕事

とりあえず今の気持ちを一言でいうと逃げたいだな。

よく考えればギルドの仕事って荒事がメインなわけで基本的に野郎しかいないわけだ。

なにが言いたいかというとそんな中、俺みたいな若造が女を引き連れて来ると視線で人を殺せるんじゃないかというくらいの冷たい視線が突き刺さってくる。

「どうしたんですかレン？ 早く仕事を貰いましょう。」

お前はこの視線が気にならないのか？

さつきから俺の精神がガリガリ削られてるんだが。

「最初は簡単なのにしますか？ 自分がどれくらい戦えるか知る必要もありますから。」

「あ、ああ、その辺はお前に任せる。」

「はい」

視線が背中に突き刺さってる。

視線って物理的に来るなんて初めて知った。

「申請も終わりましたし、行きましょう。」

ようやくこの重圧から解放

「女連れていい身分だなあ。」

されなかった。
それどころかめんどくさいのに絡まれた。
さて、どうやって切り抜けたものか……

「おい、聞いてんのか？」

こういうタイプは反応すると逆につけあがるから冷めた反応を返せば興味を無くすはず。

「何か用だ」レンを馬鹿にすると許しませんよ。「……」

やりやがった。

俺が一番恐れていた事態、こいつが前に出ると

「はっ、女に庇われてやがるやつを馬鹿にして何が悪い。」

こんなふうになって、この馬鹿女は

「レンはあなたたちなんかよりずっと強いです！..」

言うと思ったよ。

こうなるともつどうしようもないな。

逃げたらこの街での仕事を取りにくくなるし、そもそも周りが逃がしてくれそうにない。

こうなったら開き直った方が得策だな。

「お前らこそ女に言い負かされる程度なのか？」

「てめえ、女ともども殺されてえのか。」

ちよろいな、あの程度の挑発にこつも簡単に乗ってくれるとは。

「死ぬのはお前らになるんじゃないか？ 見た目でしか判断できない飾りの目を持つてるんだからな。」

「ぶっ殺してやる！！」

これだから馬鹿は単純で助かる。

「目がああ！！！！」

考えなしに突っ込んでくる馬鹿は閃光弾1つで無力化できる。

それで駄目なら次はスタングレネードで聴覚奪ってしまえばあとは簡単だ。

知ってるか三半規管を潰してしまえば平衡感覚が狂ってかなり動きが鈍るらしい。

「飾りの目なんていらないだろう。今潰してやる。」

目が見えない状態で相手に剣を突きつけられれば流石に噛みついてはこないだろう。

下手をすれば自分で目をぶすりだ。

「行くぞ。」

「はい」

はあ、疲れた。

「で、結局どんな仕事なんだ？」

とりあえずホームギルドから出て、こいつのいく方向へついていつてるがどんな仕事なのか聞いていない。

「薬に使う野草を採取する仕事です。」

野草の生息する地域には魔物がうろついているそうなので実力試しの為にもちようどいいと思ひまして。」

「悪くないチヨイスだな。」

その場所はここから遠いのか？」

「ここに来るときに通った森です。」

すぐに見つかればすぐに終わると思ひますが、見つからなかったらかなり時間がかかりますね。」

いざとなつたらこいつがなんとかするだろう。」

そう考えると面倒になつてくるな。」

「行きましようレン。」

仕方ないか、はあ。」

side ????

傷1つつけずに無力化したさっきの男、それに付き添いの女、退屈な街だったけどあの2人が手に入ればきつと楽しくなる。

「兄さん、さっきの2人を仲間にしよう。」

「突然なにを言ってるんだ。」

確かに手際は良かったがあれはまるっきりの素人だぞ。」

「鍛えれば伸びるよ・・・たぶん。」

そんなことよりもあの2人といると面白いことが起こりそうな気がする。

「俺は反対だ。」

お前がそんなことを言った時はたいていろくなことが起きん。

それに・・・」

またか・・・

これさえなければ尊敬できる兄だというのに

「俺の可愛い妹をどこの誰とも知らん奴に渡すわけにはいかん。」

「いい加減妹離れしようよ。」

「お前に相応しい貰い手が見つかるまでな。」

そういつて悉く男を撥ね退けるくせに。

とりあえず兄さんは無視して2人を追いかけよう。」

「あれ？ 兄さんあの2人どこに行つたか分かる？」

「魔力をたどれば分かるだろう。」

「その魔力を感じないんだけど。」

「………確かに。」

「ここまで完璧に隠蔽できる者など滅多におらんぞ。」

魔法が得意なエルフの民である私たちの索敵から逃れるなんて……

今度見つけたら絶対に捕まえよう。

兄さんの意見は………まあいいか。

side out

「ようやく諦めたみたいですね。」

「俺はまだ諦めてないぞ。」

お前が俺に飽きて死なせてくれれば百年も生きずに済むからな。

「違いますよ。」

ホームギルドにいたエルフの1人が私たちを見張ろうとしていたみたいなのでレンの魔力を隠蔽して諦めてもらったんです。

ちなみに私はレンを死なせるどころかレンが望んでくれれば永遠に生きて欲しいです。」

絶対にごめんだ。

それにしても俺たちをねえ、こいつの正体に気付けばそうしようと思っ気持ちもわかないではないがあ程度のことでいちいち見張ろうなんて思っものなのか？

「そういえばさっきおれの魔力を隠ぺいって言ったよな、お前には魔力はないのか？」

「本来神には魔力は存在せず神力が存在します。

神力は神にしか感知できないはずですから問題ないんです。

まあ、私は特別なので魔力を持っていますけどこれでも神の端くれなので千年も生きていない人には見つかりませんよ。」

千年って、エルフは長寿つてのがお約束だけどそこまで長生きするものなのか？

俺なら頑張っても50年が限界だな。

「レン、このまま進むと30メートルほど先に魔物がいます。さほど強くないみたいですがどうしますか。」

流石は神様か木が生い茂って先なんて見えないのに。

こいつがいれば奇襲なんて無意味だな。

「練習相手になってもらおう。

案内してくれ。」

「分かりました。」

武器は銃が一番だな。

銃には詳しくはないが造ったやつは引き金を引く度に発射されるセ

ミオート。

ちなみに引き金を引きっぱなしで引いている間弾が発射され続けるのをフルオートって言うらしい。

威力も自由自在ということでもりあえず警察なんかもってる位の威力で。

「いました、あれです。」

RPGでいかにも初期に出てきそうな狼のような魔物だな。とりあえず撃ってみるか

「レン、どこを狙ってるんですか？」

もちろん純粋な日本人の俺に射撃の経験などあるわけがない

「初めてなんだよ。」

何度か撃つてればそのうち慣れるだろう。」

痛い思いをしたくないので近づきたくはないが近づかないと当たらないからな。

まあ、こっちが近付くまでもなく向こうから近づいてきているんだが

「つて、くんなこの野郎!!」

数うちや当たる。

まあ、直線的に向かってくるきたところに乱射されればかわせないよな何発か当たって動きは鈍ったが火力足りないな。

今度からは毒でも塗って撃とう。

今は、弾の大きさを変更して火力もあげるか。

「レン、手助け必要ですか？」

「いらん。」

次は威力をあげたからこれなら行けるだろう。」

予想通り一発で眉間を貫けた。

最初みたいに動かれた当て切れなかったがあれくらいならいけるな。最初はフルオートの銃で動きをにぶらせた後、威力の高い奴で撃つ。これが基本戦術になりそうだな。

「お疲れ様です。」

目的の野草は採取してきましたから帰りましょうか。」

いつのまに……まあいいか。

「帰るとするか。」

とりあえず初めての仕事は無事終了……

「おい、あれはなんだ……」

「大きい狼ですね。」

こいつはこんなふうに言ってるが大きいなんてもんじゃない。本とかで見る狼の5倍以上の大きさはあるぞ。普通に丸呑みされそうだ。

その場合って俺あいつの胃の中で生きるのか……

「おい、あれをどうにかしろ。」

「レンは戦わないんですか？」

「俺は初心者だ。」

いきなり中ボスみたいなやつに勝てるわけないだろう。」

「レンならなんとかしそうですけど。」

確かに倒そうと思えばいくつか考えはあるがやっぱり痛い思いはしたくない。

「ちょっとだけ戦ってみませんか？」

危なくなったらすぐ助けますから。」

「どうしてそこまで戦わせたがるんだよ。」

俺は戦闘狂でもないし自衛のための最低限の力さえ持っていればそれ以上強くなりたいとも思わん。

「戦ってるレンを見たいから……。」

人が命がけで戦ってる姿を見たいからだと……死にはしないが。

そんなくだらない理由でこんな化け物と相対しろってのか……

「駄目ですか？」

くっ、なんだかんだ言ってもこいつはかなりの美少女だ。

こんなふうに頼まれた断りづらい、自覚してないのが唯一の救いだな。

自覚してやっってるのならすぐに断るが。

「分かったよ。」

そのかわり危なくなったらすぐに助けるよ。」

「はい!!」

はぁ、甘いな俺。

美少女の笑顔を見ただけまだましか。
眼福、眼福。

本当の理由

さて、自分より強い相手と戦う時は突っ込んだら負けだ。

わざわざ相手と同じ土俵に立つ必要はない、そんなことしたらあつという間にはくりだ。

つまり受け身になりながらも相手の隙を窺い一撃で仕留める。

とは言ったものの、今は様子見のつもりか距離置いているが突っ込んでこられたら素人の俺がかわせるはずもない。

これらのことから導き出される結論は畏に嵌めることだが、そんな経験なんてあるわけがない。

もう1つは敵がかわせない状況を作ることだがさっきの雑魚とは違って易々と突っ込んできたりもしないのでそれも難しい。

これって詰んでね。

「頑張ってください。」

くそ、なぜこんなことに。

冷静に考える、あれがこちらに攻撃するにはどうしても接近する必要があるはず。

だが、畏を仕掛ける技術もなければそれに引っ掛かってくれる相手でもない。

さらにあれだけの巨体だ、仕留めるにはそれ相応の威力のあるものでないと話しにならない。

しかし、威力が上がると命中率が下がる。

さらに付け加えれば一撃で仕留めないと暴れ出して手がつけられなくなる。

それらすべてを考慮した作戦は……

side フリッゲ

はあく、真剣な目になっているレンは素敵です。
生きることに関してもあるくらい真剣になってくれればいいのに。
そして私の想いにも真剣に伝えてくれて……

はっ！！ トリップしてしまいました
レンの雄姿を見る機会なんてそう簡単にはないでしょうからここは
見逃せません。

とはいえレンはどうするつもりでしょうか。

私なら力押しで片付けられますけど、レンは戦闘に関して完全な素
人であれを仕留めようと思えばかなり限定されてた条件下でないと
難しいはずです。

レンには肉を切つて骨を断つといった戦法をとれば確実に仕留めら
れると思いますが痛いのは嫌だと言ってからにはその戦法は取らな
いでしょうし。

そう考えれば私って相当な無茶ぶりですね。

まあ、レンの真剣な目を見れたということで良しとしましょう。

何かあれば私が消せばいいだけですから。

s i d e o u t

あいつを仕留める為の論理は組み立てた。

後はどれだけその論理通りに動けるかだが、いけるかなあ。

どうして野草摘みにきただけでこんな化け物と戦わなきゃいけない
んだよ。

愚痴ってもしかない、腹をくくるか。

「行くぞ化け物！！」

s i d e フリック

「行くぞ化け物!!」

ついにやるつもりなんですねって、あれ？

いきなり木に隠れて乱射ですか？

あんな威力じゃ効かないってことくらいさっきの戦いで分かっているはずなのに。

どんな作戦かお手並み拝見ですね。

s i d e o u t

よし、狙い通りこっちに向かってきたな。

ここは森だ、隠れるところなんてそこらじゅうにある後は木を転々としながら……

「嘘だろ……」

さっきまで隠れてた木がへし折れた。

どんな威力してんだよ。

まずいなこのままじゃいずれ追い詰められる。

少し早いが始めるとするか。

s i d e フリック

木を折られたことにレンが驚いています。

そんなに予想外のことだったんでしょとか、レンは初心者だから仕

方ありませんか。

どんだん木がおられて隠れる場所がなくなってきました。
どうするつもりですかレン。

そう思った時大きな音を立てて木が爆発した。

side out

仕掛けは単純、死角となつている木の裏側に衝撃で爆発する爆弾を作る。

流石に木を折つてくるとは予想外だが誤差の範囲内だ。

「あれくらいで仕留めさせてくれないよなあ。」

俺が巻き込まれないため高威力の物ではないとはいえ仕留めるところか傷一つ付かないか。

元々あれで仕留められるとは思っていないがほんとに倒せるのか疑問に思えてきた。

あ、また木が折られた。

手当たりしだいな、それも狙い通りだが見ているだけで寒気がする。あれ喰らったら体の一部が吹っ飛ぶな。

そういえばそうなつたらどう言っふうに治るんだ？

吹っ飛んだ部分が元に戻ってくるのか再生するのか、どっちにしても嫌過ぎる。

お、また掛かったな、これで5つ目。

俺の作戦通りならそろそろだな。

side フリッゲ

レンの狙いがまったく分かりませんね。

今のレンにあれを仕留められるほどのこう威力の銃を当てることは難しいはずなので、こう威力の爆弾を仕掛けた方が多少の被害は出るでしょうが確実なはずなのにあんな目くらまし程度の物しか使っていない。

冷静さを失わせることは悪いとは言いませんが獣相手では予想外に暴れたり逆効果になることもあります。

また、これで7つ目。

そろそろ隠れるところがなくなってきました。

そろそろ私が……えっ!?

動きが止まった……

side out

読み通りだ。

最初に対峙した時、警戒するために様子見をするくらいだ。

初めて戦った雑魚とは違ってまともな知性がある証拠。

たとえば言葉が通じなくても学習させることはできる。

良い例としては犬だな。

言うことを聞けば餌がもらえる、そういうふうに教育すれば犬は餌の為に言葉が伝わらなくても人の言うことがある程度なら分かる。

つまりこの場合では木に衝撃を与えれば爆発し傷はつかなくとも痛むから学習して、木に衝撃を与えないようにする。

そしてこの時の為に効かないと分かっているても威力の低い銃を乱射し止まってもダメージはなく俺の場所を見極めることができる
と思いきませる。

そして止まっている相手になら威力の高い銃でも当てることができ
る。

「終わりだ、くたばりやがれ化け物。」

side フリツゲ

凄いです。

どんな手を使ったか分かりませんが魔物の動きを止め、高威力の銃を当てました。

でも惜しかったですね、一発で仕留められなければもう動きを止めることはないでしょう。

さらに素人だから仕方ありませんが、当たったとはいえ致命傷には程遠い一撃、あれでは魔物も生きる為に最大の力を発揮しようとするはず。

そうなればレンに勝ち目はありません。

善戦でした、後は私が・・・って、動きませんね。

まさか、本当にレンが仕留めちゃったんですか？

side out

これが最後の不安だったが効いてよかった。

そもそも見つからないように背後から射撃して一撃で仕留められるほど俺は熟練者じゃない。

それを考慮した上で弾に麻酔薬を塗り込んで仕留める。

人間追い詰められればなんとかなるもんだな。

俺がこの化け物を仕留めたなんて自分でも信じられん。

「レンー！！」

どうやって動きを止めたんですかー！！

どうやって仕留めたんですかー！！」

俺のような素人でも思いつくようなことを理解できないのか？
いや、神にこんな小細工は必要ないのか。
結局、こんな小細工は弱い奴が強い奴に勝つための物だからな。
こいつの場合小細工もろとも消し去りそうだからな。

「教えてくださいよレン！！」

「黙れ！！」

あんまり騒ぐとこいつが起きるだろうが。」

「えっ！？」

殺してないんですか？」

「俺みたいな素人が背後からの致命傷の部分なんて分かるわけない
だろうが。」

ただの麻酔薬で眠ってるだけだ。」

「じゃあどうやって動きを止めたんですか？」

説明がめんどくさいな。

そつえばこいつのせいで無駄に疲れたんだっただな……少しか
らかうか。

「レン！！」

教えてく「黙れ。」「ひゃ！！」

女ってやつぱり柔らかいんだな。

それにいい匂いもするし、これがこいつじゃなきゃ最高なのに。

「れれれれれれれれれれれん！！！！！！！」

「黙れ。」

side フリッゲ

あわわわわわわわ、突然抱きしられるなんてもしかしてようやくレ
ンが私のこと

「これがさっきの質問の答えだ。」

えっ？

「えっと、どついうことですか？」

「お前は俺に抱きしめられて俺の言うことに従ったよな。
それはなぜだ。」

それはせつかく抱きしめてくれたんだからレンが機嫌を損ねて離れ
て行かないようにですけど、それとどう関係が？

「もう一つヒントだ。」

俺はお前が黙らなければすぐに離れるつもりでいた。」

それなら私は絶対に黙ります。

黙ってなかったらこの幸福感が離れて行くと分かり切っているのに
そんなことするはずが、あつ！！

「気付いたか？」

どんな行動を起こせば良いことが起きるか悪いことが起きるか分か

りやすく示してやれば誰だって悪いこと起きる方は選びたくないよな。

それはその奴も同じだ。

俺はそれを利用して下手に動けば爆発するということを示し、心理的に動きを制限した。

それに最初の様子見の時に攻撃されても痛みはあってもたいしたことじゃないと先入観を持たせることで二重に心理的制限を加え動きを止めたんだ。」

す、すごいです。

こんなことをあの瞬間に考えるなんて

「レンって死ぬ前に何かやってたんですか？」

「なにも。

人間いざとなればあれくらいのことはできる。」

初めてあの大きさの魔物を見たらうつろたえるだけであんな考え浮かびませんよ。

流石レンです。

ますます好きになってしまいました。

そういえば起きる前にこれを始末しないと。

「寝てる間に殺さなくていいんですか？」

「どうして殺す必要があるんだ。」

そう言われればそうですね、自慢したいとかないんですかね。

「俺は無駄な殺生が嫌いなんだ。」

殺さずに済むならそれに越したことはない。」

「優しいんですね。」

殺されそうになった相手にそんなことを言えるなんて

「なにを勘違いしてるか知らないが、少なくとも俺は優しくはないぞ。」

こいつを殺さないのもすべて俺の為だ。」

「どづいつことですか？」

「知ってると思うが俺は死にたがりだ。」

そんな奴の為に失われる命があつたら可哀相だろ。」

それに俺自身に他の命と同等の価値など感じない。」

レンはなにを言っているんですか？

まったく理解ができません。」

「例えば俺を助けようとして助けようとした奴が怪我をするとするだろう。」

その時俺に浮かぶものは感謝じゃなく怒りだ。」

どんなつもりかは知らないし、知りたくもないが俺の為に怪我をされるなんてとんだ迷惑だ。」

誰だって石ころの代わりに宝石を傷つけられたら嫌だろ？

それと同じだ。」

死にたいと願っている俺なんかの為に生きたいと願っている奴が怪我をするなんて馬鹿らしいにも程がある。」

さつき殺した魔物だって俺が死ねなければ殺されてもよかつたぐらいいだ。」

なんなんですかそれは……
どんな生き方をしたら20年も生きていないのにそんな考えに至る
んですか。

「どうして、どうしてそんなに死にたがるんですか？」

「言っただろう、人生に満足していたからだ。」

「それなら、もっと別のことで満足しようとは思わないんですか？」

レンはまだまだ若い。

1つのことで満足してもまだまだやれることはたくさんあるはずなの
に。

「ないな。」

そもそも俺が満足したことは平和な日常だ。

なにも変わらず緩やかに過ぎ去って行く日常。

それが俺の幸せだ。」

「それならどうしてその幸せを手放そうとするんですか!?!」

分かりません。

私が話している相手は本当に人間なんですか？

会話が成立していることが逆に怖い。

「言っただろう満足していたからだ。」

いや満足しているだな。

常に幸福な時間だったら誰だってそれを幸福とは思えなくなる。
良い例が離婚する夫婦だ。

結婚した当初は幸せの絶頂だとしてもそれが毎日過ぎて行くと幸せを感じなくなる。

そうだったら新しい幸せを求めて離婚しようとするだろう?」

「なら、どうしてレンは新しい幸せ求めようとしませんか!」

レンが言った通りなら平和な日常を抜け出して危険が付きまとうフアンタジーの世界へ行こうとしてもおかしくないのに、どうしてそんなに拒むんですか。

「幸せが幸せでなくなる。」

これがどういふことか分かるか?

それはたぶんとても恐ろしいことだと思う。

だからこそ俺は幸せが幸せであるうちに死にたい。」

これが、これがレンが死にたがる本当の理由。

あまりにも単純で、あまりにも強固な理由。

「レンは何を支えに生きてきたんですか。」

常に付きまとう喪失への恐怖。

そんなものを感じながらどうしてそんなに正気でいられるんですか。

「死だ。」

なにも考えることもなく、なにも存在しない絶対の無。

死への憧れだけが俺を支え、正気を保ってきた。」

「どうしてそうなってしまったんですか・・・」

そんなに歪んでしまったからには理由が必ずあるはずですよ。

それさえ解決できれば

「普通に生活してただけだ。

普通に学校に通って、部活で友達と過ごして、肉親はいなかったが普通の家族と暮らしてこの結論に至った。」

そんな・・・

当たり前の日常を過ごしながら当たり前の日常に幸せを感じてしま
ってるだけだなんて・・・

これじゃあ、レンが生きたいって思わせるなんて

「俺も1つお前に聞きたい。

お前は本当に俺のことを好きなのか？」

本当の想い（前書き）

エルフやドワーフなどあらゆる種族の総称を人レンのような生粋の人を人間と表現しています。

本当の想い

side フリッゲ

「お前は本当に俺のことが好きなのか？」

「どついうことですか。」

私はレンが好き。

近くにいるだけで心臓が高鳴って、安心できる。

この気持ちは嘘じゃない。

「さっきの話を続きになるが、喪失の恐怖に気付かなければ幸せが続くと新しい幸せを求めたくなる。

つまり、永遠の幸せなんてものよりその刹那の幸せを求めてるってことだろう？」

お前は刹那の幸せを感じたくて俺のことを好きだと勘違いしているだけじゃないのか？」

「違います!!」

この気持ちは勘違いじゃありません!!」

違う、この気持ちだけは勘違いなわけがない。

こんなにも好きって思えるのにこれが勘違いだなんてあるはずがない。

「自分で言ってるで恥ずかしいがお前は確かに俺のことが好きだという感情があるでしょう。」

それは恋に恋していないと言い切れるか？」

お前がどう生きてきたか知らんが勝手に転生や魂の改竄をできるくらいだ。

神のルールなんてものは分からないがそんなことをできるってことは、それなりに高い地位にいるか大きな力を持っているかどちらかだ。

それにお前は1万年しか生きていないと言った、それを考慮に入れて前者なら媚びへつらう輩しか周りにいないし、後者ならくだらないプライドを刺激される輩からの嫉妬やよくても羨望の対象にしかならない。

つまり、お前には今まで対等に接してきたやつがいなかったんじゃないのか？

そこで、なにも知らない俺が対等に接してきたことが嬉しくてその気持ちを好きだと勘違いしているんじゃないのか？」

「た、たしかに私は神の中でトップレベルの力を所持しています。レンの言うとおりくだらない嫌がらせを受けたり、羨望のまなざしを向けられました。

でも、私がレンを好きって気持ちは……………」

気持ちは……………」

この気持ちはレンの言うとおり勘違いなのでしょう。

レンの言うとおり私には友達といえる者はいませんでした。

この気持ちはレンの言うとおりなのでしょう……………」

side out

かなり揺らいでいるな。

別にここまで言う必要はなかったんだが後になって傷つくより傷が浅いうちに自覚したほうが治りも早いだろう。

それに、これで俺のことを諦められたら俺と居ずらくなるはずだ。そうなれば後百年も生きなくて済む。

少し可哀相な気もするがこれも一つの経験だ。

こいつはかなり優秀なんだろうが、感覚に任せっぱなしなところがあるからな、これで少しは考えるということの大切さが理解できただろう。

「気持ちは、なんだ？」

そこで詰まるってことはそういうことだ。

お前は恋に恋していただけで、言い方は悪いが対等に接してくれる奴なら誰だって良いってことだ。

それが理解できたらもう俺とは居ずらいだろう？

別にいますぐ殺されても恨みはしない。

俺を殺して、神の世界で他にいい男を見つける。」

やっぱり、追い詰めるってのは良い気分じゃないな。

だが、これでもう大丈夫だろう。

こいつは罪滅ぼしの為に俺を殺すだろう。

もうすぐ、もうすぐだ。

side フリッゲ

レンの一言一言が胸に突き刺さります。

私は恋に恋しているだけなんでしょうか？

この温かな気持ちは偽りで、ただ幸せでいたいという私の勘違いなんでしょうか？

でも、それでも私はレンが好きって気持ちは消えてくれません。

私が泣きそうになったら不器用に慰めてくれたレン。

「レンは私のことが嫌いですか？」

私がレンに望む答えは……

side out

別にこいつのことは嫌いでも何でもないが突き放したほうがこいつも楽だろう。

俺を殺すことに罪悪感を覚えるだろうが少しでも軽減するために言いたくないが

「嫌いだ。」

そもそも俺の望みを知りながら、潰した奴のことをどうやって好きになれるんだ？」

これでやっと解放される。

「私はレンのことが好きです。」

side フリッゲ

やっぱり私はレンのことが好きです。

レンが私のことを本当に嫌いなら”嫌い”の一言だけで済ませるはずです。

レンは私が罪悪感を感じることを分かっていたから少しでも感じないで済むようにあえて後の言葉をつけたしてくれたんですね。

「だからその気持ちは勘違いだ。
お前は恋に恋しているだけなんだよ。」

レンはからかいはしても傷つけることはしないはずですよ。
この言葉も私を突き放して嫌ってもらえるように言っているだけですよね。

「確かに私は恋に恋していたのかもしれませんが。
でも、過去はどうであれ私はレンのことが好きです。」

side out

正直予想外だ、まさかあれだけ揺らいでいた気持ちが固まっている俺の負けか。

はあ、ままならないなあ。

「お前は俺のどこが好きなんだ？」

最後の悪あがき、今更こいつの気持ちはそう簡単には変わらないだろうがやらないよりましだろ。

「レンの優しいところが好きです。

さっきまでの言葉は私を諦めさせるつもりで言ったんだと思います。でも、言葉の隅々に私を気遣って言ってる言葉がありますよね。

私はそんな不器用な優しさがとても愛おしいです。」

余計なことを言わなければよかった。

まあ、反省したところで結局こんな場面になったら同じことを繰り返

返すんだろつな。

この甘さはどうにかしないとな。

「レンは信じるのが怖いんですか？」

「当然だ。」

この世に永遠なんてものは存在しない。

俺から言わせてもらえばそんなものを信じている連中の気がしれない。」

どんなものだって時間がたてば風化する。

それは物であるうが気持ちだろつが同じだ。

だからこそ風化する前に綺麗なままの幸せを抱いたまま死にたい。

「それなら私はレンに永遠を信じさせてあげます。」

「なに？」

「永遠に続くものあるんだって、信じるからこそ得られるものがあるんだってこの百年の間に教えてあげます。」

はあ、これは百年間は死ねないな。

それにうかうかしているとこいつに染められそうだ。

外見だと思っただが中身もなかなか良い物持つてるみたいだしな。

「精々頑張れ。」

そろそろ帰るぞ、この化物と戦ったせいで結構時間が取られたからな。」

「はい」

私百年で絶対にレンのこと振り向かせて見せます。」

くそ、やっぱりこいつ可愛い。

今はそうでもないが本当に惚れさせられそうだ。

s i d e フリック

やっぱりこの気持ちは偽りなんかじゃありません。

レンの近くにいるだけでこんなに幸せなんです。

絶対にレンにもこの幸せを感じさせてあげます。

そしてこの気持ちは信じてても良いんだって、永遠に続くものだって
教えてあげます。

これから百年、覚悟してくださいねレン。

s i d e o u t

さて、とりあえず野草を納品して仕事は終わりだな。

今回はなんとかあったが、次もこう上手くいくとは思えないし手札
を増やすか持っている手札を磨くかとりあえず自分を磨く必要がある
な。

・
・
・
・
忘れてた。

最初の時よりも視線が突き刺さる。

特に俺が倒した奴の視線なんてマジの殺気がこもってる。

これから毎日この視線を浴びせられるってのか？
最悪変装する必要があるな。

「ご苦労様です。」

これは報酬の金貨三枚です。」

ちなみに金貨一枚で1万円くらいだ。

その下に銀貨、銅貨、鉄貨と続き、それぞれ千円、百円、十円だ。

1日で三万円稼げるって割よすぎだろう。

まあ、その分危険が付きまとうっていう点を考えれば妥当なところか。

怪我しても自己責任、下手すれば治療費だけでお金がとんでいく可能性があるので、普通なら武器の整備なんかも必要だからな。

「帰るか。」

「また明日頑張りましょう。」

さて、食材買って適当に作るか。

自慢じゃないがそこそこ料理はできる。

養ってくれてた親戚は仕事が忙しくて家事は俺と義理の妹担当だったからな。

その妹は料理が壊滅だから必然的に俺の役目になったからそれなりにできるようになった。

この世界の食物は知らんがなんとかなるだろう。

「ちょっと待て。」

ん？

また絡まれるのか？

「なん・・・」

振り向いた時には既に刃が振り下ろされていた。

新たな面倒事

危なかった。

言っておくが俺に背後から突然攻撃されてとっさに対処できるような超人的な力は持っていない。

「なんのつもりですか？」

俺の眼前で刃は止まっていた。

冷静に考えればこいつがいる限り俺に怪我することはないんだよな。女に守られる男って、情けない限りだがこいつは神だし例外だろう。

「もう一度聞きます、なんのつもりですか？」

もしかしてこいつ切れてる？

さっきから震えが止まらない。

これが神の力ってやつか。

side フリッグ

おかしいですね、口だけは動くはずなんです但答えてくれませんか。私のレンに手を出すなんて、いますぐにでも存在を消し去ってあげたいんですがそれをやっちゃうとレンが良い思いをしないですからやりませんけど。

しかし、突然切りかかってきた理由くらいは聞いておかないとまた襲われたら面倒ですからね。

ふざけた理由だったら記憶をすべて破壊するか精神を壊してあげま

しょう。

もちろんレンの許可を取ってからになりますけど。

「もう一度聞きます、なんのつもりですか？」

side out

side ???

参った、体がピクリとも動かない。

男の方は改めてみても完全な素人だがあの女は別格だな。

これでも腕に自信はあったんだが、勝てるイメージが湧かない。

それに俺だけじゃなくホームギルドにいる全員を動かさないようにしている。

動くのは俺の口だけ、どうやらあの女にとって男は逆鱗だったようだな。

下手に答えれば最悪ここにいる全員を殺されかねない。

だが、ミナだけは何としても生き残らせた。

さて、どうするか……

side out

「悪かった。

実際に当てるつもりはなかったんだ。

ただその男の実力を確かめたかっただけで本気で殺そうと思っていただけじゃない。」

たぶんこの言葉に嘘はないだろう。

この世界でどうかは知らないが人殺しは地球のどの文化でも禁忌とされてきたことだ。

おそらくだがこの世界でも禁忌とされているだろう。

それなのにこんな公共の場で堂々と人殺しをしようとするはずがないからな。

それにしても俺の実力を確かめたいか、見ただけで実力が分かるような能力なんて持ってないが外見を見ると俺の百倍は強そうだ。

そんな奴がわざわざ俺みたいな素人の実力を探る意味が分からない。とりあえず

「もう良いから落ち着け。」

「こればかりはレンのいうことでも聞けません。

どういうつもりなのかもう少し詳しく説明してもらって、場合によっては記憶を破壊するか精神を破壊して二度とレンの前に立てないようにします。」

駄目か。

こいつ意外と頑固なところがあるからな。

仕方ない奥の手を使うとしよう。

side フリッゲ

私はそんな言葉に騙されません。

話すつもりがないのなら記憶を読ませて貰いましょう。

「だから落ち着け。」

しかし、止まると分かっては抱きしめるだけでここまで効果があるとは……
これ以上好感度を上げたくないからあんまりやろうとは思わないし、そもそもこれ以上好感度が上がるか疑問だが。

「で、いったいどういつつもりだ？

俺の実力なんて確かめる必要すらないはずだろう？

そここのところ答えてもらおうか。

もちろんの前に拒否権なんてものはない。

断ればこいつがお前の記憶を読めば済むだけの話で、そうならばお前の記憶が正常のまま保たれるか俺にも分からないぞ。」

最後のはブラフだが効果は絶大だろう。

最初にあれだけの力を見せられたら俺の言葉を疑おうとも思わないだろうし、もし疑ったとしても実際にやれるだけの力はあるし、もしかしらたと思えば不安で黙りこむことはできないはずだ。

「後十秒待つてやる。」

さて、どうでるか……

side ????

どうする、このままでは記憶を奪われてミナのこと知られてしまう。

そうなればミナの身もただで済むとは思えない。

動けるうちに逃げるか？

無理だな、あの女から逃げ切れると思えないし、調べられればミナが俺の妹なんてことはすぐにばれる。

「後十秒待つてやる。」

まずい、良い考えが浮かばない。

このままではミナが!!

「私がお願いしたの。」

side out

「私がお願いしたの。」

「誰だお前は？」

「私はミナ。」

ジンの妹よ。」

なるほど妹をかばってのことか。

そついうやつは嫌いじゃないがまた襲われたらかなわなからなきつちり突き詰めるとしよう。

「その妹がなぜ兄に俺を襲わせた？」

「あなたたちの実力が知りたいってことは本当よ。」

あなたは見た目は素人だったけどその手際の良さは申し分ないし、そつちの女の人はまったく実力が見えなかったから、あなたに危害を加えようとすれば実力が分かるかと思つてね。」

「質問の答えになつてないな。」

俺はなぜ実力を試すために兄を仕向けたかを聞いているんだ。

答える必要ないが、正直に答えた方が長生きできるぞ。」

「ふふっ、あなたってやつぱり面白そうね。
使えるものは何でも使っけど、根が甘い。」

「うち、見抜かれたか。」

「まあ、最後のセリフはいらないな。」

正直に答えれば、つまりあいつの言葉に嘘がなさそうなら記憶を読まないと言っているようなものだ。

俺みたいに甘い奴じゃなかったら問答無用で記憶を読もうとするだろう。

「甘いのは自覚してる。」

「だから俺が甘いうちにしゃべってくれと助かるんだが。」

「私はあなたたちが気に入ったわ。」

「私たちの仲間になりなさい。」

「また面倒くさいのに絡まれたな・・・」

「断る。」

「お前らが何をやってるか知らないし、知る必要もない。」

「それにお前らが何をしようとかいつには絶対に勝てないからな。」

「俺たちはここで働いてのんびり過ごすつもりなんだ。」

「邪魔をするつもりなら消すぞ。」

「そんな退屈なことつまらないでしょう。」

「あなたたちと私たちが組めばきっと面白くなる。」

「知るか、それに俺はこの退屈で変わらない日常が好きなんだ。」

「それなのに誰が好きこのんで厄介事に首を突っ込もうとするんだ。」

せっかく安定した収入源を手に入れたというのに手放してたまるか。俺はこの退屈な日常で生きて死ぬんだ。

「そう。」

ところでその娘はあなたの彼女？」

今度はこいつの方から攻めるつもりか。

これだから頭が切れるやつは面倒くさいんだ。

「答える必要はないな。」

「妹さんでしょ？」

戸籍にはそう記載されてたよ。」

森に行くまで感じてたっていうやつはこいつだったか。

「人のことを無断で調べるなんて趣味が悪いぞ。」

「それはごめんなさい。」

でも、それじゃあ彼女はいないんでしょう？」

仲間になってくれたら私が付き合っただけでも良いわよ。」

「ストーカーに欲情するほど堕ちてないんでな。」

「こんな美少女を前にストーカー呼ばわりって、あなたそっちの人？それなら兄を差し出すけど？」

「もういいか？」

これ以上くだらない話に付き合っている程暇じゃないんだ。」

これから買い出しに行ったり部屋の整理をしたりいろいろと忙しいんだよ。

「冗談よ。」

本当に仲間になるつもりはない？

お金なら融通するけど？」

「興味はない。」

金ならここの仕事で間に合ってる。」

これ以上付き合つのも面倒だな。

「帰るぞ。」

「ふぁい。」

こいついつまでこうしてるつもりだ。

side ミナ

なかなか手強いわね。

根は甘いけど、頭は回るし、妹さんを出されたら私たちが負けるのは目に見えてる。

「どうするんだミナ？」

あれだけ断られてるんだから素直に諦めたらどうだ？」

それは私の選択肢の中に入っていない。

あの2人さえ手に入れば私がやりたいことに手が届く。

「兄さん、あの2人の住所わかる？」

「調べたらわかると思うが一応犯罪だぞ。」

「権力と金は使う時に使うものよ。」

「いますぐ調べて、何としても口説き落とすから。」

「待ってなさい……」

「そういえばあの2人の名前って聞いてなかったわね。」

敗者との約束

今俺はホームギルドを無事脱出し食材の買い出しに来ている。

ていうかこれからの職場となる場所から脱出という言葉を使わなければいけないことに絶望する。

それに、あのミナとかいう女がそう簡単に諦めてくれるとも思えないしな。

はあ、早く平穏な日常を手に入れないと。

「レン、これおいしそうですよ。」

人の気も知らないではしゃぎやがって

「そつえば神って食事を取る必要はあるのか？」

「いえ、神は必要なエネルギーを自己生成しますから外から取り入れる必要はありません。」

でも趣味娯楽でこつそり神界からおりて食べに行く神も少なくありませんよ。」

なるほど、神にも五感はあるらしい。

それにしても神って結構自由なんだな。

「お前って好きなものとかあるのか？」

「私はあんまり食事を取りませんでしたからそついうのはあんまりないです。」

好き嫌いがないことは素晴らしい。

家の義妹に見習わせたいくらいだ。

「それじゃあ適当に作るか。」

「お前も食べるんだろ？」

「はい!！」

こっちの食材は呼び方は違うが地球にあるものが多い。

この世界って言ったが俺がいるところは別の世界の惑星の1つだ。

そもそもこの世界に惑星という概念はあるのか？

重力が存在するということは地球のような惑星ということだ。

そして昼と夜が存在しているということは太陽が存在して惑星が回っている証拠だ。

まあ、こんなこと考えても仕方ないか。

ここには空気があつて人が暮らしていて食べ物があつて社会がある、それだけで十分だろう。

「どうかしたんですか？」

「なんでもない。」

この幸せはいつまで続くんだろうか……

「ずっとです。」

side フリック

「ずっとです。」

この平穏な日常は必ず私が守ります。
そしてこの幸せを一生感じ取れるように私がレンを支え続けます。

「心を読むなといっただろう。」

「読んでませんよ。」

でも、レンの顔を見たら分かります。」

いつか訪れるかもしれない喪失への恐怖を感じている無表情ながらもどこか怯えている表情。

「大丈夫です。」

百年の間にレンを変えて見せます。」

「言ってる。」

俺は百年後まで変わりはないし、それ以上生きるつもりもない。」

「それでは勝負ですね。」

私がレンを変えられたら私の勝ち、レンが百年間変わらなかったらレンの勝ちです。」

「お前も物好きな奴だ。」

どうして俺なんかのことをそこまで想えるか理解できないな。」

「いくらレンでも私の好きな人を卑下することは許しませんよ。」

レンは自分のことを過小評価しすぎてます。

常に先のことを考えて行動できる賢い人です。

だからこそ喪失への恐怖に気付いてしまったんでしょう。」

「分かったよ。」

「とりあえず食材は買ったから帰るぞ。」

「はい」

それなら私はその恐怖に勝るぐらい私のことを好きになってもらいます。

そうになったらレンも永遠を信じてくれますよね。

side out

「遅かったわね。」

「お邪魔してるわよ。」

「こいつらを引っ張り出せ。」

「はい。」

「ちょっといきなり何すんのよ!?!」

「黙れ不法侵入者、警察に突き出されないだけありがたいがたく思え。」

「警察? なにそれ?」

どうして家の中までこいつと付き合い合わなければならないんだ。家といたら安らぎの象徴だぞ。

そこで何が悲しくて爆弾を抱えなきゃならないんだ。

「話しがあるのよ。」

「俺にはない、さっさと帰れ。」

どうせまた勧誘だろう。

何度来たって結果は同じだ。

「いいの？」

私たち兄妹はこの街を治めている長の血縁よ。

この意味、あなたなら分かるわよね？」

厄介な。

つまり住む場所と仕事を人質というわけか。

これなら俺たちの戸籍のことを知っていてもおかしくはないか。

「お前こそこいつの力を知らない訳じゃないだろう。」

そんなことをしてみる街を人質に取るぞ。

それにこいつは俺の言うことは一部例外を除くと従うからな。」

「平穏な日常を愛するあなたにそんなことができるの？」

元からやる気はないがこいつに俺の甘さを知られたことはまずいな。

そこを突かれたら反撃が難しい。

「できないと思うか？」

別に街すべてを人質にする必要はない。

この街を治めている連中を脅せばいくらお前が血縁だろうが問題ない。」

これで押し切れるか

「確かにそれなら私はどうしようもないけど、そんなことをしたら他の街から応援が来るわよ。そうなれば一般人にもあなたたちのことが知られて平穏な日常は望めないわよね。」

やっぱりこいつ相手になるとこれで誤魔化せないか。仕方ないこの手はあまり使いたくはないんだが

「それならお前たち兄妹を殺すだけだ。

それならお前たち2人の命で俺の平穏は保たれる。

こつちにはこいつがいるんだ。

完全犯罪なんて簡単にやれる。」

「無理ね。

あなたは甘いもの。

自分の都合の為に人を殺すなんてことできるわけない、そうでしょ、レン・カザミネ。」

ああ、確かにそうだよ。

だがそれで勝ったと思うなよ。

「確かにお前の言うとおりだよ。

だが、何度も言うがこつちにはこいつがいるんだ。

お前が俺たちと会ったという記憶を消せば問題ないよな。

それにお前の兄は俺たちを仲間にすることに乗り気じゃなかったみたいだしな。

そこにお前という人質を突き付ければあの兄はお前を俺たちから遠ざけるだろう。」

「あなたにそれができるの?」

「できないと思うか？」

side ミナ

「できないと思うか？」

予想以上だわ。

彼の甘さを突けば簡単に落ちると思ってたんだけどきついわね。

恐らく彼はさつき言ったことを実行できる。

多少の罪悪感を感じるだろうが所詮私1人、それもちよっとの間の記憶を奪うだけだ。

この街にも私にすらも何の支障も及ぼさない。

それに兄さんのことだ、そうなれば徹底的に私を彼から離そうとするだろう。

ならば

「勝負しない？」

side out

「勝負しない？」

諦めが悪いな。

そこまで俺たちが欲しいのか？

「断る。」

そんなことを行うメリットが見えないからな。」

「あるわよ。」

あなたが勝てば罪悪感を感じずに済むじゃない。」

「残念だがそれと仲間に入れられるとでは等価にはならない。

そっちが持ちかけてるんだ、少なくとも同等、あるいはこちらが得になるようにならないと勝負する必要はない。」

後はこいつから記憶を奪ってしまえば俺の勝ちだ。

「ぐすつ……」

は？

side フリッゲ

なんだか話について行きません。

さつきからお互い睨みあいながら口論を続けてます。

結局、レンの方が勝ったみたいですがよく分からないので凄いでしょうが今いちすごいと思えないですね。

でも、これで私とレンの生活を邪魔することはないでしょう。

「ぐすつ……」

まずいです。

レンが女性の涙に弱いことは実体験を伴って実証済みです。

レン、どうか負けないで。

side ミナ

「ぐすつ……」

なによ、別にいいじゃない、ちょっと仲間になってってお願いして
るだけなのに。

やっと、これから面白くなるはずなのに。

それなのにどうして記憶を消されなきゃいけないのよ。

そりゃちよつと強引なところもあったかもしれないけど、そこまで
言わなくてもいいでしょう。

「ひつく……うう……」

side out

「ひつく……うう……」

なぜお前が泣くんだ！！

こっちは公衆の前で襲われて、ようやく安心できると思ったら不法
侵入されて、さらに権力にものを言わせて無理矢理引き込まれよう
としたんだぞ。

むしろ俺が泣きたいわ！！

だから頼むから泣きやんでくれよ。

女の泣って本当に反則だろう。

「分かった。

勝負でも何でもしてやるからいますぐ泣き止め。」

はぁ、言ってしまった。

本当に自分の甘さ加減には心底嫌になる。

「絶対？」

「対等な条件下の勝負ならな。」

これくらいは許されるだろう。

こっちは受ける必要のないものを受けてやってるんだ。

対等どころかこっちが有利な条件で初めてもいいくらいだ。

「じゃあ、約束の指きり。」

こいつ幼児退行してないか？

この年で指きりとか恥ずかしすぎる。

「約束してくれないの？・・・う」

「分かったよ、その代わりにお前が負けたらもう俺の前に現れるなよ。」

本当に指きりなんてもので約束を守るとでも思っているんだろうか。

「もう今日は帰れ。」

勝負の内容についてはまた明日だ。」

今日はもう休みたい。

「うん。」

あの、ありがとう。」

やっぱり駄目だな。

あの笑顔を見せられただけで全部許せてしまう。
本当に世界って不平等だなあ。

とりあえずあの女を追い返すことに成功したが次はこいつがむくれてやがる。

大方、俺があの子の涙に負けたから嫉妬しているんだろうが、それをわざわざ指摘して地雷を踏みたくない。

いちいちこの程度のことには嫉妬されて気にしてたらきりがない。つまり、ここは何もせず料理でもするとしよう。

そうはいつでも調理器具がまともに揃っていない上にこの世界では魔法で火を起こすようでそんなものを使えない俺は少々物騒だが火炎放射気で火を起こすことになる。

この力でびっくりしたのはフライパンが作れたことだ。

どこかの漫画やゲームなんかでフライパンや箒を武器にしてるものがあったから試してみたなら普通にできた。

どうやらこの力は俺が武器と認識していれば造れるものらしい。

話は脱線したが料理をしてみるとここは日本じゃないから調味料を簡単に買えはしない。

さらに時間がなかったからよく調べずに買ってきてしまったから味が乱れるかもしれない。

そうはいつでも食べないよりましなので試行錯誤しながらやって行くしかないわけだ。

「レンー!!」

どうして私を無視してるんですか!?!」

うち、無視してればそのうち落ち着くと思ったが予想外だな。

「聞いているんですか!?!」

「聞いてるよ。」

「それでお前は俺にどうして欲しいんだ。」

「レンは女の涙に弱すぎです。」

「だから、あんな女なんか騙されちゃうんです。」

「失敬な。」

「嘘泣きかそうじゃないかなんて詐欺師レベルになると分からないが、そうじゃない限り義妹に散々鍛えられたから騙されることなんてない。」

「いいですか、レンが好きになっていい女性は私だけなんです。だからレンはもう少し私のことを気遣うべきです。」

「どこの暴君だ。」

「お前の目的は俺の自殺願望を無くさせることじゃなかったのか？」

「そういうが、俺がもしあいつのことを好きになったらもう死のうとはしないと思うぞ。」

「そうなればお前の目的は果たされる訳だからむしろ歓迎すべきことじゃないのか？」

side フリック

「そういうが、俺がもしあいつのことを好きになったらもう死のうとはしないと思うぞ。」

「そうなればお前の目的は果たされる訳だからむしろ歓迎すべきことじゃないのか？」

いったい何を言ってるんでしょつかこの人は。
目的が果たされるから歓迎すべき？

私の気持ちを知っていてあえてこのセリフを言ってるようであれば
私にも考えがありますよ。

「レン。」

「なん、ん!!」

side out

「なん、ん!!」

この馬鹿いったい何のつもりだ。

「はあ、これで私がどれだけ本気が分かりましたか？」

そんなものキスなんかしないで分かってる。

「もう二度とこんなことはするな。」

「嫌です。」

この馬鹿女は・・・

「いいか、俺はお前のことを好きでも何でもないんだ。
それに俺なんかの為に自分の身を安売りするな!!」

イライラする。

少しは見直したともらったらこれか？
失望もいいところだ。

「私は生涯レン以外に体を許すつもりなんてありません。
だから安売りなんてしてません！！」

ああ、くそ。

どうしてこいつはここまで一直線なんだよ。

「っちー！

いいか、俺がお前の気持ちに応えるまで絶対にもうするなよ。
今度やってみるお前の目の前で死に続けてやる。」

「……分かりました。

その代わりレンもあまり他の女性に目移りしないでくださいね。」

こいつ自分の姿を見たことないのか？

こいつ以上の外見をもってる奴なんてそうそういるはずがない。
それにこいつは危険だ。

いつも軽く流していたがマジで距離を取っていないと百年持たない
かもしれない。

side フリッゲ

「……分かりました。

その代わりレンもあまり他の女性に目移りしないでくださいね。」

レンを変えるのは私です。

この役目は誰にも譲るわけにはいきません。

レンが欲しい。

レンを独占したい。

レンを私に縛り付けたい。

レンに会うまでの私では考えられないことです。

もしレンが他の女性の所に行ってしまうたらその時私がどうなるか想像すらできません。

絶対にその心を奪って見せます。

s i d e o u t

あんなことがあったから空気が重い。

せつかくの食事だというのにまったく味が分からない。

こいつが俺のこと好きだとは知っていたがあそこまで積極的だとは予想外だった。

この分なら明日にでも元に戻ってると思うがあれを毎日受けてたら理性が持つ訳がない。

そうなればこいつは永遠に俺を離すことはないだろう。

厄介な奴に惚れられたもんだ。

「皿は浸けといてくれ。

明日洗っておく。」

「いえ、食べるばかりでは悪いのでそれくらいはやらせてください。」

「それなら頼む。

俺は部屋の整理をしているから何かあったら呼んでくれ。」

side フリッゲ

「それなら頼む。

俺は部屋の整理をしているから何かあつたら呼んでくれ。」

ああああああああああああああああ／／／／／／／／

私はいったい何をしてしまったんでしよう。

恥ずかしすぎてレンと顔を合わせられません。

あの時の私が別人みたいに思えます。

嫉妬深いことは自覚してましたが性格が変わってしまつとまでは思つていませんでした。

でも、やっぱりあれは私なんだと思います。

キスした時頭が真っ白になつてなにも考えられないほどの幸福でした。

あの幸福を他の誰かに譲ることなんてできるはずありません。

はあ、レンは怒ってるでしようか？

レンの言葉を聞く限り相変わらず自分のことはそつちのけで私のことだけを心配してましたから私の軽はずみな行動に対して怒ってるんでしようね。

でも、それはレンが私を無視するからいけないんです。

私が嫉妬して構つて欲しいって分かつてるのに無視するからです。

でもレンとこのままの雰囲気は耐えられないので明日にでも謝りましょう。

side out

さて、あいつのことは今は置いておくとして、問題はどんな勝負を

持ちかけてくるかだな。

分かっていることは対等な条件下の勝負ということだけ。まず戦闘方面ではあいつがいる限り挑んでこないとはいはずだ。

俺とあいつの兄貴の1対1なら話は別だがそれだと対等という条件を満たしてない。

つまり、戦闘より頭脳を試される戦いになるはず。

そして勝負の方法はどちらが決めると明言していない。

だがこつちには最悪勝負を破棄することができる。

故にこつち側から勝負の内容を決めてやれば対等な条件下とはいえ下準備ができる。

しかし、この勝負はあいつに諦めてもらわなければ俺の勝利条件が満たされない。

よって、勝負の内容は運の要素が強いものでなおかつ俺が確実に勝利できるものだ。

その条件を満たしているものは……

side ミナ

昨日は不覚を取ったけど今日は負けない。

ただでさえ昨日死ぬほどはずかしいところを見られてしまったんだから名誉挽回、汚名返上、絶対に負けるわけにはいかない。

こつちが勝負内容を決めてもたぶん意味がないからなにも用意していない。

対等な条件下のもとというのがあいつの出した条件。

恐らく運の要素が大きく関わる勝負になるはず。

だけど、そんなものは関係ない。
これはあいつが私を騙せるか、私があいつのトリックを見破るかの勝負。

絶対に見破って見せる。

s i d e o u t

「よく来たな。

俺たちは今日も仕事をするつもりなんだ。

だから手っ取り早い方法にするぞ。

ここに2つの水が入ったコップと2つの粉がある。

昨日、街を探して見つけたものだが、片方はただの甘い粉、片方は痺れ薬だ。

見た目ではまったく分からないだろう？

これを水に溶かし痺れ薬を引いた方が負けだ。」

「その粉は誰が入れるの？」

まあ、当然疑ってくるよな。

「お前の後ろにいる兄でいい。

もちろん俺たちの見えないところでやってくれて構わない。」

「分かったわ。」

さあ、俺の仕掛けを読み切れるか？

s i d e ミナ

今のところ怪しい動きはない。

コップの水もあの後コップそのものを変えて、水も変えた。
これで仕掛けがあるとすればあとはあの粉だけ。

「準備できたわ。」

s i d e o u t

「準備できたわ。」

コップにはなにも仕掛けはしていないがあいつの立場が俺なら同じ
ことをするだろう。

「分かった。」

どっちから先に行く？

お前から先に行ってもかまわないが両方とも痺れ薬だなんて難癖つ
けられたら面倒だから俺からでいいか？」

「……わかったわ。」

「それじゃあ俺は右の方にする。」

さあ、勝負だ。

そして俺は一気にコップの水を飲み干した。

s i d e フリッグ

飲みきった。
結果は

「何ともないただの甘い水だった。
これで俺の勝ちだな。」

いえ、この勝負私の勝ちよ。

「そうかしら？

確かにあなたは甘い水を引いたみたいだけど、本当に片方は痺れ薬
だったの？

あなたは建前上両方痺れ薬という不正をなくすためと言って先に水
を飲んだ。

それが痺れ薬でなければ必然的に私の方が痺れ薬入りの水になり私
が負ける。

でも、両方甘い粉だとしたら話は変わってくるわよね。

最初に選んで私の負けを認めさせるつもりだったんでしょうけどこ
の勝負私の勝ちよ!!」

後は甘い水を飲めば私の勝ち!!

「ん!!!!」

そんな・・・
体が痺れる・・・

「その様子だと痺れ薬を引いたのはお前のようだな。
この勝負俺の勝ちだ。」

まさか本当に片方が痺れ薬の5分5分の勝負だったっていうの？

「心配せずともそう聞き目の強いものじゃないらしいから1時間もすれば痺れは取れる。」

また私が負けたの？

「約束通り、二度と俺の前に現れなくてもらうぞ。」

本当に運だけの勝負？

でも、これを飲んだらすぐに体が痺れてすぐに分かる。そしてこの場にいる誰もが魔法を使った様子もなかった。

「さあ、俺はこれから仕事に行くんだ。

用がすんだらさっさと帰ってくれ。」

私の負け……………

side out

ようやく帰ったか。

「流石レンです。」

本当に2分の1を引き当てるなんて。」

「そんなわけあるか。」

あの勝負は100%俺が勝つ仕掛けがあったんだよ。」

俺の平穩がかかっているってのにそんな博打を打つわけないだろう。

「でもレンは実際に痺れてなかったわけですし。」

「お前は俺に何をしたか忘れたのか？」

「なにつて、不老不死に……あつ!!」

やっと気付きやがったか。

昨日試してみたんだがこの体毒を飲んでもすぐに分解してしまうらしい。

常に健康状態に保てるってわけだ。

種明かしをすればあれは両方とも痺れ薬だ。

俺が先に飲むと言ったのは不正がないと示す建前もあるがあいつから先に飲まれて痺れても両方痺れ薬と疑われ俺のコップを取られたらばれてしまうからだ。

だから、先にすべて飲み干した。

そうすれば疑っても証拠がない。

もっともあの様子じゃそこまで疑ってはいなかったみたいだが。

「本当にレンってすごいですね。」

「そうはいつでも一応穴はあつたんだがな。」

あいつの兄に薬を混ぜさせた時、少なからず薬が隠れてしまう。

その時に両方とも少しずつ取って後で調べられればすぐにはれてしまう。

まあ、そうなたたとしても実際に俺が不老不死だって知らなければたどり着けないだろうがな。

「仕事貰いに行くぞ。」

「まだまだ足りないものが山ほどある。
今日は少なくとも三件はこなすぞ。」

「はい。」

V S ミナ (後書き)

フリッグがヤンデレっぽくなってしまった

つかの間の平穩

改めて思うが神様つてのは本当に人間とは別格だな。

俺が無駄な殺生が嫌いとか分かってるからか討伐対象になっ
て生物以外一匹すら殺すどころか怪我ひとつ負わせることなく無力化
してる。

中には俺が倒した狼よりも圧倒的にでかい魔物もこいつの姿を見た
瞬間ひれ伏した。

「これが目的の鉱石ですね。

それにしても本当にレンは上達が早いんですね。」

もちろんこいつばかりに戦わせていたわけではなく俺も最低限身を
守れるようになるために俺の実力でも戦えるような奴とは戦ってき
た。

俺はこいつみたいな圧倒的な力なんて持ってないから殺すしかなか
ったけどな。

「まあ、いつも最初だけは跳び抜けるからな。

後半になると結局抜かれるんだが。」

何事もそうだ。

最初は他の誰よりも早く上達するんだが一定以上から先はなかなか
上達できない器用貧乏ってやつだな。

それにあくまでも一般人と比べてだ、本当の天才と比べると圧倒的
に見劣りする。

実際義妹は本当の天才だったからな。

同じ時期に同じことを始めても料理以外はあいつが圧倒的に上だっ
たからな。

「採掘は終わったな。」

これで今日のノルマは終わりだ。
帰って休むとするか。」

「はい。」

ところで、よければ料理を教えてくださいませんか？」

「別にいいが、突然どうした？」

「やっぱり女として家事はできた方が魅力的だと思いますし、レンに頼りっぱなしというのも悪い気がしますから。」

「そういうことなら問題ない。」

あくまで一般家庭レベルだが俺が知ってることなら教えてやるよ。」

「ありがとうございます。」

しかし、こいつが料理ねえ。

別に俺は家事ができようができまいが女として見るときにあまり評価対象には入れるつもりはないができないよりできた方が後々助かるだろう。

side フリッゲ

意外と簡単に聞いてもらえましたね。

本当は内緒でレンを驚かせてみたかったんですが私1人でやっても失敗は目に見えてますから変な意地より実益を取ります。

平和な日常が幸せというくらいです。
きつと、レンだって家庭的な女性は嫌いなわけではないでしょう。
少しでもレンの好みに近づけるように日々努力をしましょう。
レンは長いと言っていました。私にとってはたった百年です。
私が生きてきた百分の一しかありません。
その間にレンを落とさないとレンは間違いなく死んでしまいますか
らね。

s i d e o u t

相変わらず物理的に突き刺さる視線を背に受けながらホームギルド
で仕事の報告。

ノルマの三件をこなし金貨13枚貰った。

仮住居の家賃は月金貨2枚だからそれを差し引いても金貨11枚。

これだけあれば最低限の生活必需品は揃えられるだろう。

そうと決まれば早速

「少し話をしたいんだが、いいか？」

これは予想外な客だな。

あいつの兄が俺の所に訪ねてくるなんて。

「勧誘のつもりなら聞く気はないぞ。」

「違う。」

それはあくまでミナが言ってることだ。

兄として叶えてあげたい気持ちはあるがお前たちの意思を尊重せず
に無理強いさせるつもりない。」

あいつの兄とは思えない殊勝ぶりだ。

「要件と言うのは先日の勝負のことだ。
単刀直入に言おう、いかさまをしていなかったか。」

これは驚いた。

まさかこいつが気付くとは。

考えることは妹担当だと思っていたがこれは認識改める必要があり
そうだな。

「証拠はあるのか？」

くだらない濡れ衣を着せられても迷惑なんだが。」

「それでも俺はそこそ腕の立つハンターだ。

ギルドの仕事でもかなりの魔物を狩ってきた。

その仕事で毒を使うことも少くはない。

話を戻すがあの時2つの粉からは同じ痺れ薬の臭いがしていた。」

なるほど経験談から来るものだったか。

さすがここまででは予想できなかったが言い方が悪かったな、そんな
直球じゃ俺から真実は引き出せない。

「気のせいじゃないのか？」

現に俺はあの時何ともなかった。

それとも何か魔法を使ったような気配でもあったのか？」

「いや、そんな気配はなかったがお前の妹ならそれくらいのこと
きても不自然ではない。」

残念ながら的外れだ。

その方法でも可能だったがああ勝負は俺とあいつのものだ。そこに部外者を入れるような無粋な真似なんてしない。

「確かにこいつは強いが治癒系統は苦手なんだ。」

嘘は言っていない。

こいつは確かに治癒系統の魔法、こいつの場合は神術だが、本当に苦手な分野らしい。

それでも神が行使する術だ。

人が行使する魔法とは比べ物にならない効力だ。

「そうか。」

疑って悪かったな。

お前に負けた後、ミナがふてくされてるから慰めになるかと思ったんだが俺の見間違いだったようだ。」

本当に見間違いだ。

そもそもあの勝負はいかに相手を騙すか見抜かの勝負だ。運の問題なんてものは一切関与していない。

だからこそふてくされてるんだろっが。

しかし、こいつはなかなか良い奴だ。

あの女のがなければ是非お近づきになりたかった。

「あれは俺の運が良かっただけだ。」

「そうか。」

もう一度謝礼させてくれ。

いろいろと迷惑をかけてすまなかった。

どうかミナのことは恨まないでやってくれ。」

「元々そんなに気にしてない。
もっともあいつが約束を破らなければだがな。」

「しつかり言い聞かせておく。
時間を取らせてすまなかつた。」

「ああ、それじゃあな。」

ふむ、半信半疑と言ったところか。

自分の感覚を信じていいのか迷ってる。

そもそも臭いだなんて不確かなものだし、証拠能力は皆無だからな。
そこから攻められたところでかわすのは容易い。

それにあいつはこういう騙し合いには向いていないみたいだしな。

side ジン

気のせいか……

確かにあの時、同じ痺れ薬の匂いだった。

しかし、調べてみても確かに痺れ薬と甘い粉両方購入している。

だからと言って甘い粉を使ったと断言できないがなによりあいつが
何ともなかった所を見るとやはり俺の気のせいだったのか。

「ミナ、少しは落ち着いたか？」

「ごめん兄さん。」

もう大丈夫。」

なんとか大丈夫そうだな。

まあ、二分の一を当てる勝負で負けたんだから自分の運のなさを嘆くのは分かるがな。

「今回は運が悪かったただけだ。

あいつらとは約束したからもう駄目だがまた他に見つけなければいいだろう。」

まあ、男なんてミナに近づけさせはしないがな。

「うん。」

あれは運なんかじゃない。

あいつはどうやったか知らないけど何かトリックを使ってるはずだよ。

表向きは二分の一の勝負だけど、実際は騙すか暴くかで勝敗が決まってるんだから。」

「だがあいつは運が良かったただけだって言ってたぞ。

妹さんは治癒系統の魔法は苦手だと言ってたし、あの場で魔法を使った痕跡はなかった。」

コップは変えたし、水だつて入れ直した。

薬は違和感はぬぐえないが水に溶かしたのは俺だ。

何か仕掛けを打つような機会なんてなかったはずだ。

「なににせよ、もう過ぎたことだ。

お前が負けるなんて珍しいがそれも人生だ。」

「うん。」

もうミナはあの2人関わることはできない。

だが、またあの2人とは縁がありそうな気がするな。

side out

良い買い物だった。

金貨11枚の内6枚程度である程度そろえることができた。

買ったものの中には魔力を通すだけで火を起こす魔石なんかもある。だいたい1週間程度で使い物にならなくなるらしいが火炎放射気を危なげに使うよりずっとましだ。

そういえば俺にも魔力は微量だが存在するらしい。

とても魔法を使えるような量じゃないがこの魔石を使うくらいなら問題ないそうだ。

それに今日は時間があつたから調味料や香辛料もそろえることができた。

これで食事には困らない。

そしてお金をためて仮住居を出れば完全に自立できたことになり平穩な日常を取り戻すことができる。

「レン、レン!!」

「ここはどうすればいいんですか?」

「そういえば今こいつに料理を教えているんだつた。」

「今までまともに食ってなかつたやつが料理を作つたら真つ黒焦げのなにかができたり食べただけで吐きそうになるといったお約束の展開にはならず、むしろちよつと教えただけである程度1人で出来るようになつていた。」

「あ、そこはこつすれば美味しくなるぞ。」

「へえ〜。」

それにかなり料理を覚えることに積極的だから説明する方もやる気が出るし、なによりの見込みが早いから手間が掛からない。

そういえば義妹はちゃんと食ってるだろうか？

あの家の両親は共働きだからあんまり家にいないし俺がいなくなっ
てどうしてるんだろうか？

あいつのことだ、なんだかんだで上手くやってるだろう。

あいつは俺が知る限り最高の天才だからな。

「どうかしたんですか？」

「なんでもない。

そろそろ出来上がるな。

皿の準備をしておいてくれ。」

「はい。」

このまま何事もなければいいんだがなにか嫌な予感がする。

再会と再戦

こつちの世界に来て一週間。
人の適応力はすごいと思う。

なんだかかんだでこつちの生活に慣れてきた。

あれからあいつらも約束通りちよっかいを出してきたりもしない。
それにこの物理的に突き刺さりそうな視線も流せるようになった。
こいつもいまのところ素直に料理の指導を受けるだけで行動を起こさないし平穩で何よりだ。

問題は仕事の内容が日によって違うことだがそれは職業柄しようがないと言えるだろう。

つまり、俺はこの世界でも無事平穩な生活を手に入れた。

後はこの幸せを感じていられる間に死にたいんだが、後百年……
大丈夫かなあ。

「レン、今日はこの仕事やってみませんか？」

なになに

内容は隣街、ヴァナヘイムとアルフヘイム間の護衛。

期間は明後日から5日後。

ヴァナヘイムには3日宿泊予定、その間の宿泊費用は依頼主持ち。

報酬は金貨15枚。

定員は4名。

「ヴァナヘイムとここの距離はどれくらいだ？」

「だいたい1日で到着します。」

その間、魔物がうろついてたりたまたまに盗賊なんかも出るそうです。」

ふむ、実際働く時間は初日と最後の2日。

こっちに来ていろいろ忙しかったから息抜きに旅行というのも悪くないのかもしれない。

それに、1日金貨10枚は利益が出るから1日2日働かなくてもたいした問題じゃない。

こいつも他の街を見てみたいようだし

「別にいいぞ。

だが、定員がいっぱいだったら諦めるよ。」

「ありがとうございます。」

ギルドって国からの依頼って聞いてたけど、個人でも申請できるんだな。

この内容ってどう見ても個人の依頼だからな。

「レン、定員は大丈夫みたいで、最近たくさん仕事しているから実力も認められているみたいですから大丈夫みたいです。」

そりゃ誰だって神と組んでればそうなるだろう。

「そりゃよかったな。

3日間は働かないんだからその分今日働くぞ。
向こうで遊ぶための金も必要だからな。」

「はい。

頑張ります。」

そんなに張りきらなくてもお前は大丈夫だろう。

side フリッゲ

駄目もとで聞いてみたんですがまさかOKがもらえるなんて!!
生活を始めてからずっと仕事で家に帰ってからは料理を一緒にした
りそこそこ一緒にいられる時間はありましたがイベントがありません
んでしたからね。

でも、これで3日間はデートができます。

これでレンの好感度を上げて、私のことを好きになってもらいまし
よう。

できればこの3日間で最後までいきたいんですがレンはそういうの
あんまり好きじゃないですからね、焦ったら負けです。

私たちの邪魔をするものも先日撃退しましたからそうそう出てこな
いでしょう。

ふふっ、楽しみです。

side out

唐突だが金貨15枚、約15万、それを4人分、つまり60万だ。

そんな金を出せるってことは金持ってことになるだろう？

さらに言えば護衛を4人もつけるってことはそれなりに危険に晒さ
れることがあるってことだ。

つまり完全に一般人とは掛け離れてる。

さて、結論から言おう。

集合場所に10分前(社会人として当然)に行っただよ。

そしたら奴等がいた。

向こうもかなり驚いていたがこっちはそれどころじゃない。

あいつらはこの街の長の血縁、つまり子供ってことだ。

そんな奴等が親を伴って、さらに言えば公衆で護衛を募集して隣町に行くってことはそれは街同士が関わる会合があるってことだ。前にも説明したがこの世界は9つの街で治められている。そしてその街はほぼ独立して国と言っても間違いない。むしろなぜ1つの国で治まっているか不思議だ。

1つの街に城なんかがあったりするんだぞ、さらに言えば代表議員だって300人を超えてそれぞれの分野で活躍してる。

話しが脱線したがこいつらに関わると嫌でも名が知れ渡ってしまう。そうなたら平穏な生活が壊される可能性すら出てくる。

しかし、今更逃げようとしても既に旅立ちの準備はできてるよう出発まじか逃げ道はなかった。

• •
ていうか、兵隊がいるならなぜ護衛を募集する必要があるんだよ• •

side ミナ

まさかあいつが護衛に着くなんて。

街にも兵隊を置いておかないと小さな町や村なんかがもしものことがあつたら救援に向かえない。

それでも十分兵は連れているから一般募集は念のためだったんだけどこれはチャンスだわ。

約束では私はいつの目の前に出たら駄目という内容だった。

それなら父さんに実力を見せて街の兵に組み込んでしまえばいい。

そうなればたぶんこいつは拒否するはずだけどあの街にいる限り父さんの発言は絶対だ。

それを私が個人として引き抜けばあの2人を手に入れられる。

問題は実力を試す時に妹さんは大丈夫だと思うけどあいつが勝てるかどうか。

圧倒的な実力で勝たない限り父さんが引き込もうと思わない。

上手く行くかな？

side out

厄介なことになった。

あいつとの約束は俺の目に現れないこと。

だが、人伝いに関わることは出来る。

そして俺にその約束を撤回させれば堂々と俺の前に現れることができる。

面倒なことにならなきゃいいんだがたぶん無理だろう。

side フリッゲ

せつかくのレンとのデートだというのにまたあの女ですか。

仕事の関係上どうすることもできませんが、レンが頭を抱えているところを見るとまたなにか仕掛けてくるんでしょう。

本当に記憶を消してしまいましたよ。

目に余るようでしたらそれも考えておきましょう。

とりあえずせつかくのデートです。

すこしでもレンの近くにいきましょう。

side out

side ミナ

待っていた休憩の時間。

流石に丸1日走りっぱなしというわけにはいかない。

一度軽い休憩を入れて再びヴァナヘイムへと向かう。
そしてこの時間こそ唯一のチャンス

「父さん……」

絶対に手に入れて見せる。

side out

side ジン

まさかあの2人が来るとは思わなかったがこれで絶対に安心だな。
あの妹さんがいれば他の兵なんて必要ないくらいだ。

ミナも約束は守る娘だから大丈夫だろう。

おっ、休憩か。

あいつらに挨拶くらいはしておくか。

「兄さん、ちょっとお願いがあるんだけど。」

なんだ？

とんでもなく嫌な予感がする。

「兄さん、あいつと戦ってくれない？」

side out

side ミナ

「兄さん、あいつと戦ってくれない？」

父さんは金を払ってまで雇ってるんだから実力を見てみたいと言えば2つ返事で納得してくれた。
あとは兵士の中でも最強の部類に入る兄さん相手に勝てないまでも善戦を演じてくれれば私の計画は成功する。

「ミナ、約束を忘れたのか？」

お前はあの2人と関わることを禁止されたはずだろう。」

「禁止されたのは目の前に現れることよ。
間接的に関わることは約束に反してないわ。」

「はあ、なぜ俺があいつと戦う必要がある？
前にも言ったがあいつは素人だ。」

確かに少しは腕を上げたようだが俺にはどうやっても勝てないぞ。」

「分かってる。」

ただ兄さんはいつと戦ってくればそれでいいの。」

下手に手加減なんてされても意味がない。

全力とは言わないけど手加減なしの兄さんと戦って善戦してもらわなきゃいけない。

あいつも仕事の信頼上、明らかかな手抜きはしないはず。

それに絡め手を使えば兄さんだつてそう簡単には勝たせてはくれないはず。」

「分かった。」

この休憩しか時間がないからちよつと行ってくる。」

「ありがとう。」

side out

さて、俺があいつならこの時間に仕掛けてくるはず。
どんな手でくるか……

「また会ったな。」

まさかお前たちが来るとは思ってたぞ。」

「俺もまさか護衛の対象があいつだとは思わなかった。

それで何の用だ。」

ただの挨拶だというわけじゃないだろう。」

「ああ、ミナがお前たちが本当に護衛として役に立つか見たいそう
だ。」

悪が俺と一戦お願いできるか？」

そう来たか……だが甘いな。

お前は俺たちを兵に組み込むつもりなんだろうがそうはいかない。
確かに俺たちは立场上それなりの実力を示す必要がある。
だが、それにも抜け道はあるんだよ。」

「その相手は俺じゃなくてもいいんだろう？」

それじゃ相手はこいつだ。」

side ミナ

「それじゃあ、ちょっとした模擬戦を始める。」

随分ギャラリーが多いわね。」

まあその分、証言がはつきりするから好都合だけどね。

「アルフヘイム代表は我らが隊長、ジン・レグス。
護衛代表はフリッグ・カザミネだ。」

えー！

どうして妹さんが！？

妹さんが出ればそれこそ引き抜きたくなる。
だからこそあいつが出ると思ってたのに。

「よろしくお願いします。」

「いちらこそ。」

どういつつもりなの？

s i d e o u t

s i d e フリッグ

「よろしくお願いします。」

「いちらこそ。」

確かにこの人とは人としてはかなり優秀ですけど、所詮は人。
神である私に勝てるはずありません。

それにレンから頼まれたことを私が断るはずも失敗するはずもありません。

「始め！！」

さて、それではレンの指示通りに

side out

「始め!!」

始まったか……これで俺の勝ちだ。

「隊長!!」

大丈夫ですか!!」

指示通り。

相変わらずあいつは反則だな。

side ジン

俺じゃあ妹さんにはどうやっても勝てない。
胸を借りるつもりでいくか。

「始め!!」

先手必勝だ……なん……だ……これは?

「隊長!!」

大丈夫ですか!!」

・ 体が……うご……かねえ……いった……い……な……にが……

s i d e o u t

s i d e ミナ

いったい何が起きたの？

突然兄さんが倒れて、そのまま模擬戦は終わってしまった。

医者の見立てでは疲れて気を失ってるだけだった言ってた。

確かに兄さんは忙しい中私に付き合ってくれたりもしたけどさっきまで何ともなかったはずなのに……

s i d e o u t

「あれでよかったですか？」

「ああ、ところでいったい何やったんだ？」

戦闘開始と同時に意識を奪えとは言ったが

「ちょっとした呪いのようなものです。

どんだん体が重くなってきて意識が遠くなるんです。

目が覚めたら元通りになります。」

期待通りの仕事をしてくれたな。

これで俺たちを引き込めはしないだろう。

こいつの使ったものは魔法じゃないからばれはしないだろうからな。

それにこいつが気付かれないように大きな結界を張って危害を加え

ようとする奴等は50m以上近づけないようにしてるらしいから護

衛の仕事なんてないと同じだ。

残念だったな

ヴァナヘイム その？ デートとミナの夢（前書き）

総合評価100P突破。

これからもよろしく願います。

ヴァナヘイム その？ デートとミナの夢

あれから特に何事もなく無事に隣の街、ヴァナヘイムへと到着。

アルフヘイムが魔法を主体としている街とするならヴァナヘイムは自然との調和を主体としている街だ。

そして、この国の食物の五割はここで生産され、各街へそして街が管理している小さな村に供給されている。

もちろんその食物を狙って魔物や盗人が後を絶えないらしいが森の民と呼ばれる一部の人外じみた民族がヴァナヘイムが治めている近隣すべてを守っているためそこまでの被害はないらしい。

「ここはいいところですね。」

空気がきれいで、この人たちも生き生きして食べ物もおいしいです。」

そして今俺はこいつと街を観光中。

これがデートってことくらいは普通に分かるがそれを言ってしまうとこいつが暴走するビジョンが鮮明に浮かんでしまうから絶対に言えない。

まあ、本当にここの食べ物美味しい。

現地で作られているだけあって鮮度が高く料理する方の腕もかなり高い。

「レ、レン、あ、あーん／＼／＼」

何をやってるんだこいつは……

「馬鹿なことやってないでさっさと食べ。」

うん、美味い。

どうやったたらこの味が出せるか是非聞いてみたいところだ。

「ぐすつ……」

……またか。

最近、泣かないからようやく安定してきたと思ったがまだまだ情緒不安定なところは直っていなかったらしい。

「おい、こんな公衆の前で泣くな。」

言い忘れたがこの街は自然との調和、つまり豊穡の街だがそれとは別にもう一つある。

それは愛の街。

それを謳っただけあって近親婚から同性婚まで認められている愛さえあれば問題ないと本気で言ってるような街だ。

そんなところで若い男女が女を泣かせている。

この構図はかなりまずい。

既に周りには人がちらほらと集まり、早く慰めると視線で伝わってくる。

「ひっく……うっ……ぐすつ……あーん……」

これをやれというのかこいつは……

しかも周りの連中が増えてやがる。

なんだこの状況？ いったい何の羞恥プレイだ。

だがこのままやり過ぎそうとしてもその内、周りから強制させられそうさ。

仕方がない、腹をくくるか。

「おい、やるなら早くやれ。」

「ふえ……あーん。」

やばいこれは予想以上に恥ずかしい。

これは俺が死にたがりでなくても死にたくなるような場面だ。

「えへへへ／＼／＼」

こいつはこいつで滅茶苦茶幸せそうに笑ってやがる。

「レン、あーん。」

しかもまだ続くのか……

周りの奴らはいなくなったがこれ無視するとまた寄ってくるんだろ
うな………

死にてえ………

side フリッゲ

はあ〜。

今の気分を一言で表すと幸せ、その一言に尽きます。

レンが恥ずかしながらも私が差し出した物を食べてくれる。

幸せすぎてこれは夢じゃないかと思うくらいです。

「レン、私にもください。」

「………ほら。」

美味しいです。

もちろんこの料理自体も美味しいのですが、なによりレンから食べさせてもらうということが最高のスパイスになっています。どうかこのささやかな幸せがいつまでも続きますように。

side out

疲れた……

あの後結局食べ終わるまで、食べさせ合いが続いて、ようやく終わったと思っただらその店の店長が何を言っかと思えば

「お前ら2人の愛に感動した。」

訳が分からん。

そして、サービスと言ってジュースを置いて行きやつが。

もちろん2つのストローが1つのグラスにはいったあれだ。

すぐ逃げようとしたが周りが逃がしてくれず観衆の中、2人で飲みきった後観衆の拍手だ。

もう乾いた笑いしか湧いてこねえ。

そしてようやく宿泊施設に着いたかと思えば2人1部屋。

さらにベットは1つだけ。

流石に死なないと分かかっていても頭に銃を突きつけてしまった。

もちろんあいつに止められたが。

そして今はというと

「レン、もう寝ましたか？」

1つのベットに2人で寝ている。

もちろん端と端だ。

ただでさえ理性が崩壊しそうな奴なのに、そんなことになってみる、間違いなく襲ってしまつて永遠にこいつに付きまとわれる。

「レン、ごめんなさい。」

私こういつの初めてではしやぎすぎてしまいました。

でも、レンは優しいから付き合つてくれるって甘えちゃつて、レンに迷惑をかけてごめんなさい。

寝てる時に言つても分からないですよ。

でも、正面からだと言えないと思いますからずるいですけどごめんなさい。

そして、ありがとう。

今日は楽しかったです。」

ああ、くそ！！

そんなこと言われて怒れるような性格してないんだよ！！
はあ〜。

また明日もこうやつて許してしまうんだろうな。

それでも、誰かが笑つていてくれるなら少しは我慢するか。

side フリッグ

本当に寝てしまつたんですね。

実はレンが起きてることには気づいていました。

レンはきつと許してくれるでしょう。

私はまたレンの優しさに甘えてしまいました。

でも、レンの優しさに甘えることになつたとしても私はレンと一緒に幸せになりたい。

レンにも誰かと分け合える幸せがあることを知って欲しい。

私はレンからたくさん幸せを貰いました。

だから私もレンにたくさん幸せを返してあげたい。
だからこそ私は引くことはできません。
変わらない日常に囚われ止まってしまったレンが変わるうと思える
まで。

愛していますレン。

side out

ヴァナ Heim 滞在 2 日目

とりあえず昨日のような目に会うのはごめんだからな。
とりあえず郊外をうろつくことにした。
だが何か運命なのだろうか

「あっ!!」

またこの女と会ってしまった。
だが冷静になれ、こいつは俺の前に現れてはいけない約束だ。
つまりこいつは俺たちが離れれば追いかけてこられない。

「ちょっと待ちなさいよ!!」

知るか!!

こっちは息抜きに来てるんだ。
どうして息抜きで溜めこまなきゃいけないんだ。

「うっ……ぐすっ……」

俺が女の涙に弱いと知ってのことか？
残念だが嘘泣きなら義妹の演技で何度も見慣れている。
嘘泣きなんて俺が最も嫌いな行為だ。

side 三ナ

あれ？

確かあいつは女の涙に弱いはずなのに。

もしかして嘘泣きがばれた？

ちよつと待って！！

置いて行かないでよ！！

「ひつく……うぁ……ぐすつ……」

待ってよう

side out

やばいあれはマジで泣いてやがる。

俺の脚よ前に進め！！

頼むから、これであいつ慰めたら面倒くさいことは目に見えてる。

動け！！

「はぁ、なんだよ？」

俺は本当に馬鹿なんじゃないんだろうか？

「ぐすつ……はなしきいて。」

ああ、あいつが不機嫌になってる。
今夜、理性保つかない……

「分かったから、手を離せ。」

「や、またにげるから。」

こいつの幼児退行は面倒だな。

これを置いて行くと思うととんでもない罪悪感が……
最近こんなのばかりだな……

「逃げねえよ。」

こんな状態のお前を放っておけるか。」

「うん。」

side ミナ

「どうしてそんなに嫌なの？」

泣きやんだ後、自分がどんなことをしたか自覚した時、本気で逃げようかと思ったわ。
会って数日の男に泣きながらすすがるって、兄さんが聞いたら爆発するわね。

「お前がいると俺の平穏が崩れるからだ。」

また平穏……

確かにそれが大事なのは分かるけど若いうちは退屈に感じるもの
しよ？

「ちなみにお前は俺たちを仲間にして何がしたいんだ？」

やっと聞いてくれた。

ここまで付きまとわれてまだ聞かなかったらどういうつもりか逆に
問い詰めそうだったわ。

「私は世界中を旅したいの。」

アルフヘイムはいいところだけど、ずっと同じところにいたら他の
所にも行きたいと思うでしょ？

私はアルフヘイムではかなり特別な存在だから他の街へは何度か行
ったことあるけど、それは街だけ。

私はいろいろなところを旅しているいろいろなところを見て回りたいの
よ。」

それが私の夢。

世界の広さをこの身で感じたい。

いずれ私がこの街を治める時にもきつとその経験は役に立つ。
でもそれには私と兄さんだけじゃ駄目。

せつかくの旅なのにハプニングの1つもないと楽しくないし、なに
より兄さんが強いとはいえ1人じゃ不安だ。

そこに、妹さんは言わずともこいつだって頭は回る。
この2人が同行してくれればそれに勝るものはない。

「悪いな。」

俺はあの街から出るつもりはない。

たまにはこうやって仕事で他の街へ行くことはあったとしても、自
ら作り上げた生活を捨てるつもりはない。」

「どうしてそこまで平穩にこだわるの!?!」

「お前の夢は旅をすること、俺にも生涯平穩で過ごすっていう夢があるんだよ。」

「質問の答えになってない!!」

「どうして平穩を求めるかを聞いているの!?!」

「それが俺の幸せだからだ。」

世界なんて絶妙なバランスで成り立ってる。

ちよつと揺れただけで世界は崩れる。

それは平穩も同じだ。

だからこそ俺はその平穩を保ってみせる。」

駄目だ。

こいつは絶対に折れることはない。

いくら女の涙に弱いと言ってもこの一線だけは守り通すはずだ。

「それなら私に雇われない？」

「仕事でなら他の所にも行くんでしょう?」

もうこれしかこいつを引き込める要素はない。

「断る。」

今収入は安定している。

わざわざ危険を冒す必要はない。」

やっぱり駄目か……

s i d e o u t

やっと諦めたか。

「レン、あの女のことを尾行している者が何人かいます。」

「どついつ心境の変化だ？」

お前にとってあいつは邪魔以外何物でもないだろう？」

俺がそれを聞いたら間違いなく助けに行く。

俺の命と引き換えに誰かの命を救えるのならそれは俺が一番望むこと。

こんな俺に生きている意味を見いだせる。

そんなことこいつなら分かっているはずだが。

s i d e フリッゲ

「どついつ心境の変化だ？」

お前にとってあいつは邪魔以外何物でもないだろう？」

違いますよ。

私は私の為、レンの為にしか動きません。

「レンはあの女の願いを断ったことに罪悪感を感じてますよね？」

それならここであの女を助けたら少しは罪悪感が晴れると思ったからです。」

「お前も良い性格してるな。」

そつだな、ここで助けてすっぱりと縁を断ち切るか。」

私のすべてはレンの為に。
いつまでも傍にいます。

s i d e o u t

ヴァナヘイム その？ ヤンデレ再び

「レン、武器を造ってくれませんか？」

「別にいいが、お前だって造れるだろう。」

むしろ俺よりはるかに高性能な武器を造れるだろうし、そもそもこいつに武器なんて必要あるのか？

「私が造っても良いんですがこの世界で最高クラスの武器しか造れないんです。」

魔法は威力が高すぎて加減しても殺してしまうかもしれないし、レン以外に触れたくないんです。」

相変わらずのチート能力だな。

「分かった。」

形状はどんなのがいい？」

「剣でいいです。」

一番シンプルで誰でも使っていそうですから。」

剣ね。

普通に両刃の剣でいいか。

「これでいいか？」

「はい。」

でも、レンから初めてもらうものが剣っていうのはちょっと残念で

す。」

これから下手しなくても殺し合いになるかもしれないのに緊張感のない奴だ。

しかし、初めてじゃないか？ こいつが戦うところ。

いつも、そこに立っているだけで魔物を屈服させてきたから、こいつが接近戦で戦う姿はなかなか見ものかもしれない。

「まだ襲いかかっていないみたいですけどどうしますか？」

「もちろん襲われるまで待つ。」

こっちが助けたってことにする必要はあるからな。」

俺は甘いと自覚はしてるが善人ではない。

利用できるものは利用させてもらおう。

「動きました。」

「それじゃあ行くか。」

「はい。」

side フリック

剣を持つのは久しぶりですね。

まあ、剣だけでなく武器を持つこと自体6千年ぶりくらいですか・・・

あの時は私の力を恐れ消そうとした神を返り討ちにした時です。

あの時も剣でしたね。

我ながらあの時は凄かったと思います。
一夜にして死体の山を築き、地面を血で染め上げました。
あの時はすべてを壊してしまおうと思ったぐらいなのに今はたった
1人の人間に心を奪われ従っているなんてあのころだと思いません。
せん。

「どうかしたのか？」

「ちよつと昔を思い出してました。」

「お前の過去ねえ。」

興味ないな。」

「私の過去なんてつまらないものです。」

そんなものよりレンと過ごす1日が何倍も大切です。」

「残念ながら俺はお前がいなかったときと変わらねえよ。」

「それは嬉しいですね。」

つまり私はレンの中ですでに平穩の一部になっているってことですよね。」

「そつだが俺の平穩の一部ってことはそこから変わらないってことを意味するんだけどな。」

分かっていますよ。

レンは変わらない、もしかしたら変われないのかもしれませんが。
でもそれを変えるには止まっているところにはいないと無理ですよね。
つまり私は1歩前進しているってことです。

「変えて見せますよレン。
絶対に私のことを好きになってもらいます。」

「本当に物好きな奴だ。」

side out

敵は3人。

盗賊にしては身なりが綺麗だな。
となると誘拐か。

あいつの価値なんてアルフ Heim にいる人ならだれでも分かる。
だが逆にヴァナ Heim で知っている人となると限られてくる。
たぶんだが街でかなり高い地位にいる人だろう。

「またあのバカ息子の御使いつてわけ？
私は何度も断ってるはずよ。」

状況を見る限りこの街のあいつのような立場の人があいつに求婚で
もしてるのか。
いつまでも良い返事がもらえないから力づくで手に入れようとして
るってとこだな。

「離しなさいよー!!」

大の男、それも3人がかりで抑え込まれたらあいつにはどうしよう
もないだろう。

そもそも、あいつはどうしてこんなところで1人でいたんだ？
気にしても仕方がないか。

「行くぞ。」

「分かりました。」

まずはサイレンサー付きの銃で適当に撃つ。

「ぐあああああああー!!」

「何事だ!!」

この世界に文明の武器である銃を説明したって意味がないだろうな。1人は撃ち抜かれて行動不能、1人はあの女を抑えているから行動不能、1人は突然の襲撃に混乱しながらも周りを警戒か。予想通りの結果だ。あとは

「悪いがそいつを返してもらおう。」

「何者だ!!」

「ただの一般人だ。目の前で誘拐現場を見てしまったからには助けようとするのが人情というものだろう?」

注目は集めた、後は頼んだぞ。

side フリック

相変わらずレンの作戦はすごいですね。

すべてレンの言う通りのことが進んでいます。

「ただの一般人だ。

目の前で誘拐現場を見てしまったからには助けようとするのが人情というものだろう?」

全員がレンに目を向けてます。

後は私の役割です。

音を出さず、気配を悟られず、迅速に意識を刈り取る。

それが私がレンに与えられた役目。

これだけレンに注意が向いていれば問題ありません。

そうでなくても私が人相手に気付かれるはずなんてありえないんですけどね。

あくまで目立たないということが優先ですからね。

side out

「死にたくなければそいつを返してもらおうか。」

「お前のような小僧に俺が負けるか!!」

1人目。

これで人質は使えない。

「やってみなきゃ分からないだろ?

もっともその必要もなくなっただがな。」

「なに?」

2人目。

こいつで最後だ。

「後ろを見てみる。

お仲間が倒れてるぞ。」

「そんな幼稚な嘘に騙されるも……」

「ご苦労様。」

「この程度に疲れなんてしませんけど、せつかくのレンの労いの言葉なのでありがたく受け取っておきます。」

それにしても音が一切なかった。

かなり無茶な注文だと思ってたんだが杞憂だったみたいだな。

「どづいつつもり？」

忘れるところだった。

side ミナ

まさかあんな力技でくるとは思わなかったから油断してた。

結果的には助かったんだけど……

「どづいつつもり？」

この際どづやって気付いたかはどづでもいい。

気になるのはなぜ私を助けたか。

私があいつらに捕まれば確実に私を離すことができるのに。

「俺がお前の頼みを断つただろう。それがどうにも悪い気がしてな、ここでお前を助けて自己満足する為だ。」

「本当のことを言いなさい。」

そんな適当なことを言ったて誤魔化されない。なにかもつと打算的な理由があるはず。

「別に信じてもらう必要はない。」

これは俺の自己満足以外のなにものでもないからな。これで気持ちよくお前と縁が切れそうだ。」

本当にそれだけの理由なの？

私の願いを断つたから？

だって、あれは私が押しつけようとしたもので断られて当然のことなのに。

「これに懲りたら1人で動きまわるのは止めることだ。じゃあな。」

「待つて!!」

「俺は観光したいんだ。手短にしろ。」

やっぱりこの2人は欲しいけど・・・

「助けてくれてありがとう。」

「気にするな。」

さっき言ったがこれは俺の自己満足の為だ。」

「ねえ、たまにでいいから、あなたの平穩を崩さない程度いいから私が他の所へ行く時護衛をお願いしていい?」

これで駄目だったらもう諦めよう。

「月に1回。」

これが限界だ。」

「ありがとう!」

あっ、嬉しさ余って抱きついちゃった。

side out

「ありがとう!」

「離れる!」

この状況はやばい。

後ろの奴の機嫌が秒ごとに悪くなってる。

このままではキスだけじゃ済まなくなる。

「ごめん。」

お礼と言ったらなんだけど観光なら私が案内しようか?」

「お前は早く兄の所に戻れ。
次は助けないぞ。」

そこで残念そうな顔をするな。
また妙なフラグを立ててしまったみたいだな。

「またね。」

さて、ここまで後ろを振り向くことが怖いだなんて過去にないな。

「レン……」

こいつ独占欲強すぎだろ！！
そもそも俺はお前の物になんてなつたつもりはないぞ。
それなのにちよつと仕事の話をしただけなのにそこまで機嫌を悪く
するんだよ。

「お前が何を思っているか知らないがとりあえず落ち着け。」

「私は落ち着いています。」

「レンがあの子になびく前に私が……」

「私が、なんだよ！！」

お前ときどき性格変わりすぎだ。

「レン……」

やばい体が動かない。

あいつの顔が目の前に

「んっ……」

またか!!

しかも、今度は舌まで入れてきやがった。

「はあ、レンは私の物なんですからあんまり他の女のことを見ない
てくださいね。」

性格が変わった時のこいつはいろいろ危険だな。

「ちなみに俺が他の女の所に行ったら？」

「レンの記憶からその女のことを消して、その女は殺します。」

これがヤンデレってやつか。
マジで怖すぎる。

「そこまでするなら俺の感情を操った方が早いだろ。」

「私はレンに愛されたいんです。」

人形に愛されたいわけじゃありませんから。」

とりあえず洗脳はされないみたいだな。

でもこれって百年後死ぬるのか？

「おまえ「いい加減名前で呼んでください。」フリッグは俺が百年
間振り向かなかつたら死なせてくれるのか？」

今のこいつに逆らえるやつがいたら見てみたい。

「その時は諦めます。
レンが自主的に生きると思ってくれなければ目の前で何度も自殺さ
れそうですから。」

間違はなくそうするだろうな。
とりあえず百年後の死は問題ないようだ。

「ちなみに俺はあいつの依頼は受けようと思うがお前はどっと思う。」

「私はレンに従いますよ。
ただし、必要以上にべたべたしないでくださいね。」

「分かってるよ。」

誰だって分かっている地雷を踏む勇気なんてない。
そんなことができるのは本の中にいる鈍感な主人公だけだ。

「それじゃあ観光を続けましょうか。」

元に戻った。

嫉妬が引き金みたいだな。

しかも、ただ抱きつかれたただだ。

あの女は俺に好意は持っているようだがこいつのように積極的に気
持ちじゃないはずだ。

あれは本当に嬉しさ余っての行動だったのにあれだ。
迂闊な行動はできないな。

ヴァナヘイム その？ 新しい日常

ヴァナヘイム滞在3日目

最終日も結局観光以外することがない、だがせっかく滅多に来ない旅行にきたんだ。

存分にヴァナヘイムを堪能しよう。

「あつ、やっと見つけた。」

いきなり出鼻をくじかれたな。

なぜお前がいるんだよ？

お前が近づく度にこいつの機嫌がどんどん悪くなるんだよ。

「なんの「何の用ですか？」・・・」

こいつ最近切れるの早くないか？

「昨日助けてもらったお礼にこの街のいいところ案内しようと思っ
て。」

「結構です。」

俺は口出ししない方がいいんだろうな。

「妹さんには聞いてないわよ。」

どう？ この街には結構来てるから良いところ知ってるわよ。」

ここで俺に振るのか？

さつきから重力が10倍になったんじゃないかってくらい体が重い。ここで誘いに乗ったらどうなるのか気になるのところではあるが、いにく俺はそこまで勇者じゃない。

「気持ち嬉しいが昨日の分までこいつの機嫌を取ってやらなきゃいけないからな。」

流石に昨日のことを引き合いに出せば強くは出れないだろう。

「それこそ昨日のお返しにいろいろ案内してあげる。」

「聞いてなかったんですか。」

私はレンと2人きりがいいんです。

昨日のお返しと言っなら邪魔しないでください。」

これはやばい。

そろそろ引いてくれないとこいつがどんな行動に出るか分からない。

「そついつことなら今日は諦めてあげる。」

今日は？ 諦める？ 聞きたくないような単語が……

「言っておくけどアルフ Heim は近親婚は認めてないわよ。」

「ご心配なく。」

私とレンは戸籍上だけの兄妹ですから。」

これはあれか？

漫画や小説でありがちな修羅場というやつか？

どうしてこつなる？

俺が何をした？

「それじゃあね、レン。

あなたのこと好きになっただみだい。

また会いましょう。」

とんでもない爆弾を投下していきやがった……

「レン、分かっていますよね？」

なにを？ とは聞けない。

そんなことを聞いたら昨日の再現どころじゃ済まなくなる。

「大丈夫だ。

俺が自ら平穩を崩すような真似をするはずがないだろう。」

「そうですよね。

レンは私が変わるんです。

私だけが……」

こいつマジで怖すぎる。

こいつもあの女も滅多に見れない程の美少女だというのに好きと言われてもまったく喜べない。

どう転んだとしても受ける気はないんだが、それを知ってなお迫ってくるから厄介だ。

どうして俺の周りの女は美少女率が高いというのにこうも面倒な奴ばかりなんだ。

「とりあえず今日が最後だ。

時間ももつたいないから行くぞ。」

なにもせずこの場に留まるより行動していた方が気が紛れて落ち着くだろう。
そもそも落ち着いてくれないと俺のいろいろなものがやばい。

「はい。」

side フリッゲ

あの女どうしてくれましょうか……
レンの手前殺すどころか記憶を操作することもできません。
もちろんレンにはれないように好意だけを取り除くことはできませんが、勘が鋭いレンにはれる可能性がありますし、なによりレンの主義に背くことはできません。
いっそのこと既成事実を……
しかし、レンは快く思わないでしょうし。
結局、早くレンを落とす必要がありますね。

side out

なんだ？
さつき俺の貞操の危機を感じたんだが……
気にしたら負けのような気がするな。
それにしても息抜きに来たつもりだったのに心休まる時がない。
こいつが早く諦めてくれればいいんだが、難しいだろうな……

「どうかしましたか？」

「なんでもない。」

それより何か食いたい物あるか？」

「レンが食べたいものでいいですよ。」

それじゃあ適当に食べ歩きでもするか。

せつかく来たんだから楽しまなきや損だしな。

ここは街の中心街に向かえば見渡す限り飲食系統の店ばかりだ。ちなみにどこの店もかなり美味しいからいくらでも食べられる。

あれ美味そうだな。

side フリッゲ

美味しいですね。

どうやってこの味を出してるか分ければレンを満足させてあげられるのですがそれにしてもやはり人はすごいですね。

神は世界を管理するものとして均衡を保つ必要がありますからどうしても停滞的になりがちです。

だから日々進化し続ける人というものは素直にすごいと思います。

「次は向こうの方に行ってみるか。」

「そうですね。」

こっちの方はあらかた見終わりましたから。」

私ももっと自分を磨いてレンに振り向いてもらえる努力を続けましょう。

そして、いつかレンが平穩の為じゃなく私を求めてくれるように。

s i d e o u t

なんだかんだでヴァナヘイム滞在が終了しアルフヘイムへ護衛をしながら帰ることになった。

それは仕事だから別に問題はない。

だがこの状況は何だ？

「聞いているのか！！

よくも俺の妹を毒牙に掛けやがって！！」

「兄さんうるさい。

レンは私を助けてくれただけっていつてるでしょ！！」

「私とレンの時間を邪魔しないでください！！」

ヴァナヘイムを出発することになった時、こいつが俺の所に来て魅せつけるように腕を取ったと思ったら、こいつの兄が突然切れ出して、いつもの通りあいつは切れた。

「こうなったら決闘だ！！

ミナが欲しかったら俺を倒してからにしろ！！」

「いい加減にしろシスコン！！

そもそも俺はお前の妹に興味なんてない、こいつの関係は仕事だけだ！！」

「お前も男なら少しはミナの魅力に気付け！！」

「お前は俺にどうして欲しいんだよ!!」

妹想いの良い奴だと思っていたがただのシスコンだったとは。

「兄さんのことは良いからこれからのことを話しましょう。
とりあえず式はいつ挙げる？」

「レンは私のものです!!」

あなたなんかが入り込む隙間なんてありません!!」

「あなたは妹でしょ!!」

それなら兄の幸せを願って私に譲りなさい!!」

「だから戸籍上の関係だけです。」

その内兄弟じゃなくて夫婦に変わりますから諦めてください!!」

「なんでお前ばかりこんな美少女の妹にもてるんだ!!」

頭痛くなってきた……

これって帰っても俺の平穩ってあるのか？

せっかく変わらない日常を手に入れてたのにたった数日で崩れ去る
とは……

確かに平穩つてのは絶妙なバランスで成り立っているものだがここ
まで早くくずれることはないじゃないか……

「そもそもレンは平穩が一番いいんです。」

あなたたちのような厄介事の塊がレンの近くにいたらレンの心が休
まりません!!」

確かにそうなのだが、その厄介事の塊にお前も入ってるってこと忘

れてないか？

「それじゃあ平穩が一番じゃなくなればいいんでしょ！！
私を変えてあげるわよ！！！」

「そんなに簡単にいくなら私だつて苦労してません！！
そしてレンを変えるのは私だけの役目です！！！」

どうするよこの状況。

間違いなく家に帰つてもこの調子だろう。

こうなつた以上、こいつらを含めた新しい日常を安定させる必要があるんだが厄介事の塊を抱え込む日常が安定するはずがない。
そうなるをやっぱりこの兄妹をどうにかする必要があるわけで、こいつに頼めば嬉々として記憶を消すだろうがそうするとまた罪悪感に悩まさせることは目に見えてる。

「レンからも言つてやってください！！！」

「どうなのよ！！！」

「俺のミナが……」

お前らまだやってたのか、それと兄よ見苦しいぞ。
しかし、これはチャンスだ。

あくまでこの兄妹は俺の言うことは聞いてくれるらしい。
つまり俺が断れば仕事だけの関係になるだろう。
そうなれば

「駄目なの？」

俺は全人類の男に聞きたい。
美少女が涙目で上目づかいで頼まれて断れるだろうか？
無理じゃね？

「だ、駄目じゃないができるだけ厄介事は持ち込まないでくれ。」

「うん！！」

そんな目で見ろな。

お前だって似たような手で俺に妥協させただろう。
くそ！！ ところで選択肢を誤った。

「そういうわけでよろしくね、レン、ついでに妹さん。」

どうしてこいつはいちいち挑発するんだろうか。

お前らがいなくなった後、こいつが起こす行動に戦々恐々するのは
俺なんだぞ？

「レン、後で話し合しましょう。」

それは会話でだよな？

肉体言語とか言わないよな？

「やはり決闘だ！！」

お前はまだやってのか……

折れそうな心

仕事という建前の元、ヴァナヘイムへの観光旅行から帰ってきたわけだが……

「どうしてあなたたちがいるんですか!!」

ここは私とレンの愛の巣です!!

早く出て行ってください!!」

誰と誰の愛の巣だ。

言うておくが俺は誰の物にもなるつもりはないからな。

「私がいる限りこの街では近親婚はさせないって言うてるでしょ!!」
レンは私が婿にもらうんだから邪魔しないで!!」

「私とレンは血の繋がった兄弟じゃありません!!」
そして、レンと私は将来を誓った仲なんですからそんなこと言われ
ても迷惑なだけです!!」

お前と何を誓った?

不老不死と言う呪いは受けたが。

「レン、これ美味しいな。

どうやって作った?」

「ああ、それはこれとそれを混ぜただけだ。
簡単だが美味いだろ。」

「ほー、お前料理もできるのか。」

これなら良い嫁を貰えそうだな。
もちろんミナはやらんぞ。」

なんだかんだでジンとは仲良くなったがこのシスコンはどうにかして欲しい。

そもそも、お前の妹なんていらぬ。

そういうとこいつはうるさいから言わないが。

「レン！！」

この人たちの記憶を抹消する許可をください。

大丈夫です、違和感がないように私の全身全霊の力を使ってこの街全体から私とレンのことをぼかしてみせます。」

なんとという力の無駄遣い。

神の力ってそんな個人的な理由で使っていないものなのか？

「そのばかな妹さんより私の方が絶対良いわよ。

私ならレンの平穏を保てるようにありとあらゆる権力を使って守ってあげる。」

こっちは権力の濫用。

同じく個人的に使っていいものなのか？

「レン、今晚どうだ。

良い店紹介するぜ。」

「ああ、今夜は酔いたい。」

なんだろう、ジンがまともな奴に見えてきた……………
シスコンなのに。」

ちなみに俺は酒は未成年だがそこそ酒は飲める。

「どうしてさつきからその人とはっきり話してるんですか!!
前にも言いましたけどレンはもっと私を気遣うべきです!!
いい加減にしないとまたキスしますよ!!」

誰かこの馬鹿女をどうにかしてくれないかなあ

「妹さんばかりずるい!!
私もキスする!!」

普段は凜々しい奴なのにどうしてこう幼児退行するかなあ

「レン、分かっているとと思うがミナに手を出したら……」

「分かっている。」

お前の妹は俺には到底釣り合わない。」

「よく分かっているな。」

ミナは………

こいつと付き合いだして数日だがこいつの扱い方が分かってきた。
妹を馬鹿にするのは許せない、しかし褒めすぎると妹を狙っていると勘違いする。
つまり褒めながらもその気はないと言えば後は妹の自慢話に入る。
もちろん無視だ。

「レン!!」

おっと、3度目ともなれば俺も学習する。

「前に言った言葉を忘れたのか？
俺が応えるまでキスなんてするなと言ったはずだが。」

死に続けるなんて言葉を使えないから曖昧になるがそれでも理解できらるだろう。

まあ、2度目の時はこいつが怖すぎて何も言えなかったんだが。

「それじゃあ私と……」

「レン……」

「分かっている。」

それは死亡フラグへの一直線だ。
はっきり言ってジンはかなり強い。

真っ向から戦ったら俺なんかじゃ3秒で無力化される。

いざとなったらあいつが助けしてくれるだろうがジンを殺すような真似はしたくない。

「とりあえず今日はもう遅いからお前ら兄弟は帰れ。
仕事云々はまた後日だ。」

俺も長旅で疲れてるんだ。

少しは休ませてくれ。」

「……分かった。」

また明日ね。」

「またな、レン。」

お前とはいい友達なれそうだ。」

やっと帰ったか。

「レン・・・・・・・・」

まだこいつがいたな。

「レンは平穩が大事じゃないんですか!!」

「確かに俺にとってそれは大事なもので俺が唯一欲しいものだが前にも言った通り俺の命が他の命と比べられないように俺の願いも同じだ。

流石に波乱万丈な生き方はしたくないが俺が叶えてやれる願いは多少俺の平穩を削っても問題ない。」

「もういいです!!」

怒らせたかな・・・・・・・・

まあ、あれだけ尽くしてもらって悪い気はするがそう簡単に人は変わらない。

俺が特別ってわけじゃないんだろぅが特に俺みたいな人は人生がひっくりかえるようなことでもない限り変わらない。

悪いなフリッグ。

side フリッグ

腹が立ちます。

あの女にはもちろんですがレンをまったく変えることができている自分自身に。

今頃レンは私を怒らせてしまったことに罪悪感を感じているんじゃないかね。

本当はいけないことなんでしょうがそれでもレンが私のことを想ってくれることに嬉しくなっています。

「レン……」

どうやったたら自分のことを大切にしてくれるんでしょうか？

どうやったたら永遠を信じてくれるんでしょうか？

どうやったたら生きようと思ってくれるんでしょうか？

どうやったたら

「振り向いてくれるんですか？……レン」

side out

さて、とりあえず厄介な問題がいきなり増えた。

まずは月に一回、あの兄妹を護衛しながらの旅をする必要があるってこと。

これは約束してしまったからしょうがないか。

次に、妹からの告白だ。

これは本当に厄介だ。

これがあるせいであいつは切れるし、ジンは面倒くさい。

どうにかならないものか……

次はこの兄妹の立場だ。

新参者の俺たちのもとに街を治める長の子息子女が来たということ
で少なからず噂になってる。

これからもあの兄妹はここを訪れる可能性が高い。

噂だけで終わればいいんだが長に取り回している為に俺たちに言いよって

くる奴が現れる可能性だつてある。

最後はこいつだ。

昨日のことがあったからか空気が重い。

これから百年生きる可能性があるのにこの空気はきつい。

他にもこまごまとした物はあるんだがそれは少しずつ解決していけば問題ない。

とりあえず一番最初はこいつとの問題だな。

side フリッゲ

「なあ、昨日は悪かった。

だから機嫌直してくれ。」

「何に対して悪いと思っっているんですか……」

悪いのは私なのに。

レンを困らせばかりいるのは私なのに……

「それは俺がお前の気持ちを知っていながらあいつの願いを断れなかったからだ。

それで怒ってるんだろ？」

「違います。」

私は怒ってなんかいないんです。

逆に申し訳に気持ちでいっぱいなんです。

「それじゃあ、なんだ？」

お前は俺の平穩の一部なんだ。

その一部がいつもどおりじゃなかったら困るんだよ。」

「レンが……レンが自分を大切にしないからです。」

「そのことか。」

それはお前が気にすることじゃない。」

どうして怒ってくれないんですか？

私はレンを無理矢理生かして苦しめてるのに、レンから平穏を奪ったのに！！

私がレンを殺さなかったら退屈で平和で繰り返される日常を過ごせていたのに！！

「どうして……ひっく……レンは……ぐす……そんなに優しいんですか……」

side out

参ったな。

女の涙に弱いつてこと、お前は知ってるだろう？

それに俺は優しくなんかない。

俺のはすべて偽善だ。

自分を犠牲にして、誰かを助けてこんな俺でも生れた価値が、生きている価値があるんだって実感していたかっただけだ。

俺が生きて犠牲になった命に価値を持たせたかった、俺の死に意味を持たせたかった。

今だって罪悪感を消したくてお前を慰めてやりたいと思ってる偽善者だ。

それが女で美少女だったら罪悪感だって大きくなるからお前たちの涙には弱いだけなんだよ。

「なあ、お前は俺を転生させたこと後悔しているのか？」

似たような質問を前にもしたな。

「……うつ……分かりません。」

ぐすつ……レンが好きで……ひつく……ずっと一緒にいたいんです。

でも……私はレンを苦しめたくないんです。」

なるほど。

こいつは折れかかっているのか、俺を変えられないと、俺に生きる喜びを教えてやれないと。

まったく、お前がそこまで俺に尽くす必要はないってのに。

「お前が背負う必要はないんだよ。」

別に俺が頼んだわけでもないし、死ぬ前と比べても少し長生きするだけで結局たいして変わりはない。

それにお前の願いは完全に叶えてやれないが、自暴自棄になったりはしないから。」

別に俺は騒がしいのが嫌いなわけじゃない。

どれだけ騒がしくても俺がそれを嫌いじゃなくて毎日繰り返されるならそれは俺の平穏となる。

駄目なのは問題を抱え続けていることだ。

それは平穏じゃない。

だからこそこいつにはいつも通りに戻ってもらわなきゃ困る。

「レンは私が邪魔だっと思って思わないんですか？」

「俺が女の涙に弱いつて分かって聞いてるのか？
そんなことを聞くならまず泣きやんでから聞け。」

「はい。」

ようやく泣きやんだか。

「レンは私が邪魔だつて思わないんですか？」

「思わないな。」

お前が死なせてくれるならどうでもいいんだが俺が生きる上でお前の存在は必要不可欠だ。」

こいつがいないとまともに仕事がこなせない。

アルフ Heim 周辺の魔物のレベルはこの国でトップレベルらしい。
多少慣れたとはいえ 1 人でそんなところに行く勇氣なんてない。

今気付いたがこれ聞き様によっては告白に聞こえね？

「つまりレンは私が欲しいということですか？」

まずい、やっぱり勘違いしてやがる。

「誤解するなよ。」

俺が言っているのはあくまでお前がいないと仕事にならないという
意味だ。」

「紛らわしい言い方しないでください！！

せつかくレンが私になびいたと思ったのに……」

残念だがお前のようなヤンデレもあの妹のような幼児退行するやつ

はストライクどころか暴投でボールを捕ることさえできないところだ。

そしてさらに残念ことがこいつらの外見はストライクと言うことだ。

「話はそれだが別に俺はお前が邪魔だとも今の生活が苦しいとも思っていない。

死にたいというのは一回死ぬ前も同じだ。

そもそも苦しめたくないんだっただらさっさと俺を死なせろ。」

そうならば俺は何も考えずに終われるんだが

「それは嫌です。

でも、私はレンに負担をかけているわけではないんですね？」

精神的な部分では相当かかっているがな。

「お前がもう少し自重してくれれば非常に助かるところだが、もう半ば諦めてる。」

「すみません。

私はこの想いを抑えることも抑えるつもりもありません。」

「それなら今まで通りに戻れ。

俺を変えるだの惚れさせるだの言ってる。

それが今の日常で平穩だ。」

「はい！！

これからもレンを変える為に尽くします。」

だから尽くす必要はないというのに。

まあ、とりあえず問題の1つは解決した。
あとはあの兄弟、というか妹の方だな。
ジンはそれなりに抑制は効くがあの妹はまったくだからな。

「レン、いい加減に名前で呼びませんか？」

断ってもいいんだが今更こいつの気持ちなんてそうそう変わるわけでもないようだし特に断る理由もないな。

「分かった。」

その代わり無駄にはしゃぐなよ、フリッグ。」

「はい」

言った傍からはしゃぐな……

友達とライバル

「いきなりだが、今日は仕事は休みだ。」

この世界で仕事を初めて休んだことないからここらで休みを入れても問題ない。

それに昨日1つ問題を解決したとはいえ一番厄介な問題が残ってる。それを解決しないで平穩を堪能できるとは思えない。

「それはいいですけど、本当にいきなりですね。」

今日はなにかあるんですか？」

あの女と会ってくるって言ったらかいつ切れるよなあ

「ちょっとした用事だ。」

おまえ「レン・・・」悪かった。

フリッグも1人でやりたいことくらいあるだろう？」

「私はレンと一緒にいらればそれでいいです。」

その用事には私はついて行っては駄目なんですか？」

「駄目だ。」

今日は適当に暇を潰してくれ。」

「・・・分かりました。」

あからさまに納得してないような表情で言われてもな。

「言っておくが絶対についてくるなよ。」

これは予定を変更する必要があるな。
一旦ジンを挟むとするか。

「それじゃあちよっど行ってくる。」

side フリツゲ

怪しいですよレン。

まさかとは思いますがあの女の所とは言いませんよね？

もしそうだとしたら容赦はしません。

まずはレンからあの女の記憶を抜き取り、この街からレンと私の記憶をすべて消して、その後押し倒して既成事実を作ってレンを私に縛り付けてあげます。

どうせ1人でやることなんてありませんから後をつけさせてもらいますよ。

side out

さて、出てきたは良いがそつえばあの兄弟がどこにいるか知らなかった。

とりあえずホームギルドに行ってみるか。

それにしてもつけられている気配はまったくないんだがあいつから見られている感じがする。

疑うまでもなく見張られてるんだろつな……………
これだからヤンデレは困る。

「あら？」

こんなところでどうしたのレン？」

最悪のタイミングだ………
しかも、ジンがいない。
なにも知らない奴が見れば逢瀬に見えてしまう。

「レン……！」

やっぱりいやだったか。

「落ち着け、今お前が考えていることはすべて勘違いだ。」

「ふふっ、そうです、最初からレンを縛りつけておけばよかったんです。」

俺の声が届いていないどころかやばいことを口走って目が虚ろになっている。

「えっと、どうかしたの？」

今はこいつのことは後回しだ。
とにかくどうにかしないとマジで監禁されかねない。

「大丈夫ですよレン。
何も怖いことはありません。
すぐにその忌まわしい記憶を消して、この街から私たちのことを忘れさせてあげます。
そして、また2人でどこか新しいところに行きましょう。」

これは駄目だ。

たぶん何を言っても聞きはしない。
こうなれば最後の手段しかないわけだがまさかこれを街中でやることになるとは。

「さあ、一緒に行きま、んっ!!」

「落ち着いたか？」

「ふあい……………」

マジで恥ずかしい。

人前でしかも知り合いがいる前でキスする羽目になるとは。それにしてもこいつは自分からは舌を入れたりするくせに、俺からだと触れるだけのキスでここまでふにゃふにゃになるんだな。本気で中身が病んでなければ最高なのに。

「えっと、それはなに？」

私に対する挑戦？

ラブラブなどこ見せつけて私に諦めてもらおうってこと？」

次から次へと……………」

「お前も落ち着け。」

さっきのはこいつを落ち着かせるための応急処置だ。それとジンの奴を呼んでくれ、話したいことがある。」

こいつは頭いいのにどうしてこいついう時変な勘違いするんだらう？

「もしかしてついに兄さんを説得して私を貰ってくれる気になったの……」

「さっきの私とレンの熱いキスを見てどうしてそうなるんですか！」

お前らここは街中だぞ？

しかも白昼堂々となぜ修羅場を演じなきゃならないんだ……

「お前らちょっと来い！！」

とりあえずジンを見つけて静かな場所で話し合わなければこの街での俺の評判が最悪になってしまう。

・
・
・
・
・
・

「兄さん、レンがようやく兄さんを説得する気になったみたい。」

「なるほど、遺言は聞いてやるわ。」

「落ち着けジン。」

前にも行ったがお前の妹と俺は釣り合わない。

お前の妹はお前のような奴と付き合うべきだ。」

何が悲しくてあった瞬間に殺されそうにならなきゃいけないんだ。

「つまりだなミナは……」

またやってたのか……

「お前の妹が凄いのは分かったからとりあえず俺の話聞いてくれ。」

「む、なんだ？」

「妹、お前もだ。」

「なに？」

「ついでにフリッグも聞いておけ。」

「はい。」

ようやく話ができる。

それにしても豪華なメンバーだな。
俺を除くと美男美女ばかりだ。

「話と言うのは他でもないお前たち兄妹のことだ。
俺たちはこの街来てまだ1ヶ月もたっていない。
それなのに、その家にお前たちが来たもんだから街で変な噂が立っている。」

「つまり私たちに取り回る為にレンたちに近づいてくる奴等が出てくるってこと？」

頭がいい奴は嫌いじゃない、こういう時の妹には好感を持てる。

「そういつことだ。」

そんな奴らの相手をしたくないから、とりあえずお前たちは俺たちの家にはよほどのことがない限り来るな。」

「だが、そうするとどこで会えばいいんだ？」

「それはこの街をよく知ってるお前たちが考えてくれ。」

「そういつことならホームギルドでいいんじゃない？」

あそこなら仕事の関係ってみられるから大丈夫でしょ。」

「俺も賛成だな。」

あそこなら俺たちに関わろうとする奴等はいない。

それに俺がいえばある程度口止めもできるしな。」

「分かった。」

用がある時は受付の人にも伝言を入れといてくれ。

俺たちはほぼ毎日あそこで仕事貰ってるから。」

これで問題はあと1つ。

これが一番難しいものなんだが。

「ジン、悪いが妹と少し話をさせてくれないか？」

もちろん口説くような真似はしないし、フリッグはこの場に残らせ
る。」

「そんな前もって言わなくてもお前のことは信じてる。」

ただし、本当にミナが欲しかったらまず俺に言いに来いよ。」

まったく本当にいい奴だなジンは。

あいつとならいい関係が結べそうだ。
だからこそ妹との問題は早めに解決しなきゃな。

「話って何？」

「他でもない俺とお前のことだ。

俺はお前たちとは仲良くやって行きたいと思ってるんだがそれにはお前の気持ちははっきり言って迷惑だ。」

「分かってるよ。

私が行動を起こせばまず兄さんが絡んでくるし妹さんも不快になるしね。

でも、私は諦めないよ。」

本当にこいつも幼児退行さえなければ良い女なのに。

「それにレンはまだ誰とも付き合っていないんでしょ？
それなら私にだってまだチャンスはあるよね。」

「レンは私の「フリッグ、ちょっと黙れ。」……はい。」

「確かに俺はこいつとはキスはしたが別に特別な関係というわけじゃない。

だがこいつはこいつなりに俺の為を想って行動してる。
だから、そうそう大きな問題にはならないんだがお前は違う。

これ以上、周りを騒がせるというなら流石に俺だって黙ってはもらえない。」

「それはレンが平穏な日常を望んでいるから？」

それじゃあどうして私の護衛を引き受けたの？」

「お前も知つての通り俺は甘いんだ。
お前が俺の日常を大きく脅かさない限りはある程度は妥協するつもりだ。」

できればこいつは敵に回したくない。

今は勝っているが甘さを知られている相手はかなりやりづらい。

「レンはそんなに平穏な日常が大事なの？」

よく大切なものは失ってから気付くって言うよね。

それって逆にいえば失ってみないと大切って分からないってことでしょ？

それと同じで適度に距離を置かないと本当に大切か分からなくなっちゃわない？」

そういう考えもあるか。

確かに、間隔を挟めば平穏を幸せと長く感じ続けることはできる。
だが

「お前の言いたいことは分かるが平穏の反対は波乱だ。

そうなれば誰かを危険にさらすことも敵を作ることにもなる。

俺は偽善者だからな。

俺の為に誰かが犠牲になるのは罪悪感を感じるから嫌なんだよ。」

「それでよく死にたいって思わないね？」

「俺が死ぬとこいつがうるさいからな。」

「なるほど。」

それならやっぱり私はレンを諦めてあげられない。

私が諦めなければそれはレンを繋ぎ止める楔になるから。」

これは諦めてもらうのは無理そうだ。

今更どう嫌われようとしたところで無駄だろう。

「はあ、分かったよ。」

その代わり、積極的な行動はよしてくれ。

俺はきちんとした関係同士でないとそういうことはしたくないんだ。」

「それは、レンがいつかいなくなって傷つけちゃうから？」

やっぱりレンは優しいね。

いつも他の人のことばかり考えて気遣ってる。

分かった、レンが応えてくれるまでは我慢する。

だから、妹さんと対等な立場になる為にキスして。」

「断ったら？」

「どうなると思っ？」

今まで通りってことか。

そうなればこの街には居ずらくなる。

キスすれば問題は解決するがばれたらジンに殺される。

「もちろん兄さんには黙っておいてあげる。」

逃げ道をふさがれたか。

俺はべつに美少女とキスできるするだけなんだから男として願って
もないが最後の問題だいは

「フリッグ、いいか？」

「正直、いますぐその女を消し去ってこの街からその女の記憶を抹消してやりたいところですけどレンの平穩の為ですから我慢します。」

その割には空気がとてつもなく重いんだが。

「それじゃあ、来てレン。」

「分かったよ。」

「んっ・・・」

あーあ、やっちまった。

「これで平等だね妹さん。」

「腹立たしいですがそのようです。」

客観的に見たら俺って最低じゃね？

堂々と2股宣言してるようなものだろ？

「でも、最終的にレンを変えるのは私です。」

「分からないわよ。」

あなたがどう変えるのかは知らないけど私はレンを思いっきり振り回してつかの間の平穩を思いっきり楽しませてあげる。」

「私はレンに永遠を信じさせます。」

こいつらって結構仲いいんじゃない？

「よろしくね、フリッグ。」

「こちらこそ、ミナ。」

美少女同士は絵になるな。

どっちも中身は残念だが。

でも、うかうかしてたらその残念な奴等に落とされかねないから俺も気をしっかり持つてるとしよう。

俺が心おきなく死ぬるように、俺の死に誰も悲しむことがないように。

噂の吸血鬼（前書き）

今日は頑張って2話登校したいと思います。

噂の吸血鬼

「なあ、レン、最近街を騒がせてる吸血鬼の話し知ってるか？」

「何人も血を吸われてるってやつか？」

別に死人が出てるってわけでも噛まれた奴が吸血鬼になってるとか
そういうことはないんだろう？」

「そうなんだがミナが探しに行くって聞かなくてな。
よかつたら「拒否する。」最後まで話は聞いてくれ。」

ふざけるな。

ようやく今日の分の仕事が終わって息抜き程度に思っていたジンとの
会話で面倒事を抱え込まなきゃいけないんだよ。

「これは一種の依頼だ。

ミナはきちんと報酬は出すと言ってる。
それでも断るか？」

くっ、俺のギリギリのラインを突いてきやがる。

「いくらだ……」

まだ了承したわけじゃないぞ。

ただ報酬がどの程度か気になったただけだからな。」

「前金、金貨10枚、捕獲成功でプラス15枚だ。」

「乗った!!!」

当然だ。

1日で最低金貨10枚、成功したら25枚だぞ。
最近仕事が少なくなってきたらからこんな実のいい仕事を断れるはずがない。

「それじゃあ、今夜ここにきてくれ。」

「分かった。」

どんな仕事だってあいつがいれば問題ないだろう。

side フリッゲ

さて、今の状況を軽く説明させていたたきます。
軽く街を滅ぼしたい気分ですね。

レンから頼まれ吸血鬼を捕まえるということになり私、レン、ミナ、ジンと集まり2手に別れて探すということになりました。
ここまでは別にいいんですが

「どうして私がレンと一緒にじゃないんですか!?!」

よりもよってミナと、なにかの嫌がらせですか？

「だから言ってるだろう。」

パワーバランスの問題だ。

お前は正直問題ないが妹は戦力にならない、俺は戦えると言っても
まだまだだからな。

そこで経験豊富なジンが俺と一緒に。

これなら吸血鬼と会っても捕まえられるだろう?」

「それなら私とレン、その兄弟でいいじゃないですか!」

「それは不公平でしょ。」

ただでさえフリッグはレンと一緒に住んでるんだから不公平にならないための措置よ。」

「うう、分かりました。」

「よし、それじゃあ行きましようか!」

言っておくけど殺しちゃ駄目だからね。

ちゃんと生け捕りしてよ。」

side out

あつちは大丈夫だろうがこっちは大丈夫か?

いくらジンがいるとはいえあいては本物の吸血鬼なのかもしれないだろう?

吸血鬼の弱点と言えば太陽、十字架、流水、銀の弾丸、思いつくのはこれくらいか。

大丈夫かなあ……

「そういえばレン、いつの間にミナと妹さんは仲良くなったんだ?」

あれで仲良く見えるのか?

「実際仲がいいかは知らないが数日前くらいだ。」

俺があの時残らせただろう、その時に話し合わせたんだよ。」

「そうか、俺たちは立場立場でなかなか友達が作りにくい環境だからレンたちには感謝してる。」

これでシスコンじゃなかったら……どうして俺の周りの奴は受け入れがたい欠点を持ってるんだろう。

「気にするな。」

打算的に言えば長の子息子女であるお前たちと仲良くなれて損はない。

それに、俺たちもこの街に友達と呼べる奴はいないからお前たちの存在はありがたい。」

「俺はお前のその遠慮のなさが結構気に入ってる。」

俺たちに関わろうとする奴は父に取り入ろうと近づいてくる奴ばかりだからな。

そういう奴はミナが追い返していたんだがミナも友達ができて嬉し
いだろう。」

こいつらの立場も結構疲れるんだろうな。

「なにかあつたら相談くらいには乗ってやるよ。」

「そりゃありがたい。」

やっぱり男友達ってのは良いものだな。

向こうにも何人がいたが……あいつら元気でやってるか
なあ。

「どうかしたのかレン？」

「なんでもない。」

「それより来たみたいだな。」

10歳くらいの少女だが見た目にそぐわない程、危険な感じがする。

「確かにあれのようだ。」

「濃い血の臭いがする。」

「ちをちようだい。」

「悪いがおとなしく同行してくれないか？」

「子供に危害を加える趣味は持ってないんだ。」

「ちをちようだい。」

「駄目か。」

「話を通じない。」

「どうするレン？」

「できるだけ穏便にことを済ませたかったが仕方ない。」

「ジン、なるべく無駄な怪我を負わせないように意識を刈り取れるか？」

「任せろ！！！」

最初見た時は驚いたがジンが使う武器は片刃の刃に鞘。つまり刀だ。

まさか刀がこの世界にあるとは思ってなかったらから驚いた。
刀つてのは想像以上に扱いが難しい。

「いただきます。」

なんだこの嫌な予感は……

side ジン

任せるとは言ったが正直ぎりぎりかもしれない。

見た目は子供だが、その力は俺と同等、もしくはそれ以上。
手加減はいらぬ、一撃で意識を刈り取る!!

「おにいちゃんはいいや。」

それよりうしろのおにいちゃんはおいしそう。」

まったく最近、俺の自身が粉々に碎かれそうだ。

全力で放った一撃がこうも簡単に、しかも魔法で障壁を張っている
とはいえ片手で受け止められるとは。

「どいて。」

まずい!!

side out

おいおい、なんだあの化け物。

ジンの一撃を防いだどころか吹き飛ばしやがった。

「ちをちようだい。」

「ジン無事か!!！」

「なんとかな。」

こうなった以上フリッグが来てくれるのを待つか、手加減無用で倒しきるか。

「ジン、まだいけるよな。」

俺が援護する、油断しないで殺しに行け。」

「分かってる。」

ジンの一撃を受け止めた時、刀と手の間に隙間があったてことは何か障壁みたいなものがあるってこと。それなりの威力じゃないと駄目か。

「ジン、少し時間稼ぎを頼む。」

「分かった。」

あれを倒す、最低でも動きを鈍らせる必要がある。拳銃じゃ火力不足。なら

「ジン引け!!！」

吹き飛びやがれ化け物。

side ジン

「ジン引け!!」

いつの間にあいつの背後に行っただんだ?

それに何だあの武器は?

レンの使う武器は知らないものばかりだな。

とりあえず離脱を……

離脱した瞬間大きな爆音とともに視界が掻き消された。

side out

完全に対人専用の武器じゃないがこれなら威力は申し分ないだろう。
RPG、ソ連が使っていた携帯用対戦車用グレネードランチャー。
これなら

「いたいよおにいちゃん。」

おいおい、倒すどころか傷が治ってやがる。

どんな回復能力だ。

「レン、どつする?」

「正直あれで駄目なら敵しいな。」

あれって携帯できる武器で一番強い奴なんだけど、足止めが精一杯か。

「なにか手はあるか？」

あるにはあるがこれをやっているものか……

「なあ、ジン、俺たちってまだお前たちに言っていないことがあるんだよ。」

「こんな時にどうした？」

「これからそれを見せてやるよ。」

一度で覚えるよ、作戦は……

side ジン

本当に大丈夫なのか？

さっきの一撃は吸血鬼の障壁を貫通してあれだけのダメージを与えた。

それをレンが隙を作るからその隙に撃ち込め、それがレンが言った作戦。

これは引き金を引くだけだから俺にだって使えるが、問題はレンだ。あの一撃を間近で受けて無事で済むはずかない。

「おいレン、やっぱりこれは止める。」

「大丈夫だ。」

俺を信じろ。」

「だが……！」

「心配するな。」

俺は約束は守る男だ。」

「分かった。

必ず生きて帰ってこいよ。」

くそ！！ 自分の無力さに腹が立つ。

side out

作戦は単純明快。

俺が吸血鬼に隙を作り、障壁を作らせずにあれを撃ち込む。
これなら再生にも時間がかかりあいつが駆け付ける。

「行くぞ吸血鬼。」

拳銃を乱射しながらの接近。

気休め程度だがやらないよりはましだろう。

「おなかへった。」

速い！！

「いただきます。」

痛つつつ！！

首から血を吸われているのが分かる。
だが今なら油断してる。

「いまだジン！！」

撃った。

そしてこいつを弾頭に向ければ……

side ジン

どうなった？

レンは無事なのか？

「レン、レン！！ 無事なら返事をしろ！！」

「ああ、作戦通り。

死んではいないが当分は動けないだろう。」

本当にあの爆発から生き残ったのか……

これがレンの言いたかったことなのか？

side out

これはやばいな。

体中が焼けるような痛みに襲われたかと思えばすぐに何ともなくな
った。

いくら無事だとは言え何度も体験したいことじゃないな。

「レン、お前は何者なんだ？」

「俺は人間だよ。

ただし限定的な不老不死だがな。」

受け入れられるかかなり不安だな。

駄目なら駄目で構わないが変なうわさを流されたら困る。

「レン無事ですか!!」

「やっときたか。」

吸血鬼ならそこで寝てる。」

「へえ〜。」

これが吸血鬼か、意外と普通なのね。」

「ちょうどよかった。」

お前ら兄弟に聞いて欲しい話がある。」

「なに?」

「俺とフリッグのことだ。」

「言っちゃっていいんですか?」

「こいつらならいいだろう。」

それに知られても特に問題はない。」

「レンがそういうなら私は何も言いません。」

神って正体ばれてもいいのか?

「信じられないかもしれないがフリッグは神様で俺は別世界から来てこいつに連れてこられて限定的に不老不死にされた人間だ。」

「「は?」

side ジン

レンから詳しい話を聞いたが正直半信半疑だ。

レンが一度死んで妹さんが生き返らせてこの世界にきた。

不老不死なのはさっきのことを見れば信じるしかないが……

「それでレンはどうかしたいの？」

「別に。」

ただジンに不老不死の証拠を見られたから黙っている必要がなくなっただけだ。」

「それじゃあ別にいいじゃない。」

それに百年なんてエルフじや寿命の三分の一くらいだし、不老不死なのも別にどうでもいいわ。」

そうだな。

レンたちは俺たちの友達。

それでいいか。

「それよりこの吸血鬼どうする？」

私は一目見ればそれでいいんだけど。」

そんな理由でレンはあんな目にあつたのか……

ミナよレンがかなり微妙な顔になってるぞ。

side out

とりあえず吸血鬼は俺たちが預かることになった。

いざとなればフリッグが抑えてくれるからな。
それにしてもああも簡単に受け入れられるとは予想外だったな。

「よかったですね、レン。」

「フリッグも嬉しそうだな？
妹とは仲良くなれたのか？」

「いえ、ミナとはレンを巡るライバルです。
レンを諦めてくれるまで仲良くなんてなれません。」

こういつてるが内心ではそれなりにほっとしてるんだろう。
最初に来た街がここでよかったな。

新しい妹

吸血鬼退治から翌日

「どうだ吸血鬼の様子は？」

「傷はふさがっていますし、呼吸も安定してるので眠ってるだけのようです。」

やっぱりあれはやりすぎたか？

いくら化物だとしてもRPGをなんの防御もなしにくらわせたからな。

「それよりレン、この吸血鬼をどうするつもりですか？」

「とりあえず話を聞いてどうするか決める。」

こいつは血は吸っているが人は殺していない、ただ腹が減ってただけだろう。

それに精神がまだ子供みたいだったしできれば乱暴なことはしたくない。

「分かりました。」

しかし、私は吸血鬼を癒すことはできませんよ。暴れ出したら殺すかもしれせん。」

「その時はその時だ。」

どうやら吸血鬼には神術との相性が悪いらしい。

それにしても遅いな。

「来たぞレン。」

「お邪魔します。」

噂をすれば

「どうだあの後。」

「ずっと目を覚まさない。

このままだと思うと罪悪感で死にたくなる。」

「気にしすぎよレン。」

吸血鬼は血さえあれば生命力は最強クラスなんだから。」

なぜこの兄妹をこの家に呼んだかという吸血鬼に対しての情報が欲しかったからだ。

もちろんこの兄妹だと分からないように変装に家周辺にはフリッグが結界を張っていて気付かれることはない。

「で、調べてくれたか？」

「そりゃ、愛しのレンの頼みだもの。」

「ミナ、ここで私のレンを誘惑するなら追い出しますよ。」

「レン、分かっていると思うが……」

またこのやり取りか、いい加減飽きるよ。

「とりあえず吸血鬼のことを教えてくれ。」

「分かったわ。」

吸血鬼って種族は結構希少種で文字通り個体数が少ないのよ。

一応九つの街の一つヨトウンヘイムに集落があるらしいけど実際にあるかはつきりしてないみたい。」

「ちなみにヨトウンヘイムは修羅の街って呼ばれててな強い奴ほど偉い。」

力こそ正義ってところだ。

だからあそこにいる奴等はかなり強い。」

ふむ、どんな事情が分からないがこいつが噂になり始めたのはつい最近の話だ。

地図からするとヨトウンヘイムはアルフヘイムからかなり離れている。

血が欲しいならもつと近くの街に行った方が賢明な判断だし、なにより子供がわざわざ遠くを選ぶとも思えない。

つまり、誰かが意図してここに放ったか、他の所まで運ぶ途中にこいつが逃げ出したか、こいつの親がここまで逃がしたかだが

「この国に奴隷制度ってやつはあるか？」

「言いたくないけど、一部の金持ちにそういうことをやってる奴がいるわ。」

もちろん国は認めてないけど暗黙の了解になってる。」

「この街にそういう奴はいるか？」

「分からないけど、いないとは言い切れない。」

とりあえず一番目の理由は考えずらいな。

可能性は二番目か三番目だが、どうも二番目のような気がするな。

「お前らはこいつをどうすればいいと思うっ？」

「できれば親元に帰してあげたいけどヨトウンヘイムは結構遠いから。」

私もそうそう簡単にこの街から出ていける立場じゃないし。」

さて、どうしたものか。

「んっ……」

「レン、目を覚ましたみたいです。」

「フリッグはいつでも抑えられるようにしておいてくれ。」

「分かりました。」

暴れ出さなきゃいいんだが

「おなかすいた。」

そつえばあの時少し血を吸っただけで何も食べてないんだつたな。

「吸血鬼って血以外で何か食べられるのか？」

「さあ？」

吸血鬼の実態なんてそうそう知ってる人いないんじゃない。」

困ったな。

なんとかしてやりたいがフリッグは神だから吸血鬼には相性が悪い。この兄妹も血を吸われて良い気はしないだろうし、やっぱり俺しくないか。

「ほら、血が飲みたいんだろ？」

いくらでも飲んでいいから来い。」

「「「レン!!!」」」

「いいの？」

「ああ、お前みたいなお前は放っておけないしな。」

それに俺は不老不死だしどれだけ血を吸われても問題ない。

「ありがとうございます。」

痛っ

やっぱり牙が刺さる時は痛むな。

「ちょっとレン、大丈夫なの!!!」

「俺は不老不死だって言っただろう。」

だから俺は常に健康状態を保てるんだよ。」

あっ、これはやばいこと言ったか？

「常に健康状態？」

それってあの時の勝負は両方とも痺れ薬だったってことよね。」

怒ってるよなあ。

そりゃこんな反則技使われたら俺だって怒る。

「卑怯よレン!!」

「知るか!!」

そもそもお前だってあれは運の勝負じゃないってことくらい分かってただろう!!」

「そんな反則技は卑怯よ!!」

分かるわけないじゃない!!」

分からないようにしたんだから当たり前だろう。

「だがジンは気付いてたぞ。」

「兄さん、ほんと!!」

「ああ、あの二つの粉からは同じ匂いがしたから怪しいとは思ってたがレンに聞いたら違うって言われたから気のせいかと思ったが。」

「それ早く言ってよ!!」

ああ、こいつがこうなると幼児退行するんだよな。

「……名前。」

ん？

「名前で呼んでくれた許してあげる。」

こういう時にうかつに行動するとジンとフリッグが切れるからな。まずは様子見だ。

ジンは………問題ない。

フリッグは………そりゃあ切れるよなあ。

「………いいですよレン。」

そういうならこの圧力をどうにかしろ。

「分かったよ、ミナ。

これでいいか？」

「うん！！」

「どさくさにまぎれて抱きつかないでください。」

ミナの体が俺の前でピタリと止まった。

よほど切れてるなこれは。

「いちそうさま。」

そういえば忘れてた。

「お前名前は？」

「あります。」

いかにもって名前だな。

長い銀髪に青い瞳、人形のような容姿。

成長したらフリッグやミナと同じくらいの美少女になるな。

「アリスはどこから来たんだ？」

おいおいお前らいくら名前で呼んだからってこんな子供に嫉妬するなよ。

「わかんない。

まえにいたところでへんなひとたちにちをくれるっていつからついてきた。

だけどあんまりくれなかったからにげてきた。」

「両親は？」

「知らない。」

「これからどうするつもりだ？」

「わかんない。」

アリスの話を書く限り俺の予想はほとんど当たりだな。

こいつをどうやって抑えていたか気になってたんだがそれなら納得できる。

しかし、一つだけ疑問が残る。

「どうして人を殺さなかった？」

「わかんない。
でも、ひとはころしちゃいけないってだれかにおしえられたきがある。」

最低限のことは分かっているようだな。

だが、空腹が限界に来ればそれを守るか分からない。

「フリッグ、こいつここに置いていいか？」

「駄目です。」

即答。

お前はこんな小さな小さな子供を追い出すのか？
神って器量狭いな。

「一応理由を聞いておこう。」

「レンにこれ以上女を近づけたくありません。」

「その意見はどうかと思うけど私も賛成かな。
今はおとなしいけどいつ暴れ出すか分からないし。」

「レン、悪いが俺も賛成だ。」

そいつの力は身をもって経験したが危険すぎる。」

「対三か……」

こいつらが言ってることは分かるし正しいとも思うんだがやっぱり俺は甘いんだよ。

「おにいちゃん。」

「どつした、んー!」

「「ああっ!」!」

「レン、ロリコンは犯罪だぞ。」

黙れジン。

シスコンだつて行きすぎると犯罪だ。

「どづいう」「しゅじゅうのけいやく。」「なに?」

「これでアリスはおにいちゃんにさからえない。」

なるほど。

子供と思つてたがそこそこ頭は回るらしい。

「俺とアリスは主従の契約を交わした。

つまり俺がこの街に危害を加えようとない限りアリスは安全だ。それに血はすべて俺が提供する。」

これで兄妹は抑えた。

後は……

「レン……」

ミナの際は許しましたが今度ばかりは許しませんよ。

レンは私の物なんですから他の女なんかに触れたら許しません。」

マジで怖い。

最近本気で貞操の危機を感じ始めてるぞ。

だが、やってやれないことはない。

「落ちて着けフリツグ。
俺はお前みたいな外見が好きだからアリスのことを好きになったり
はしない。」

恥ずかしい。

最近人前でこんなことするの増えたなあ……

「ふえー!!」

レレレレレ、レンー!!

そ、その、あの私「だからアリスのこと許してやってくれないか？」
も、もちろんです。」

我ながら最低だな。

でも、アリスのこと放っておくわけにはいかないし割り切ろう。
ちなみに嘘は言っていないからな。
外見は好きだが中身は別だ。

「レン、私はどう?」

また厄介な。

下手な答え方をすればジンが切れる。

「ジンも言ってる通りミナも相当な美少女だと思っぞ。」
「
これならどうだ?」

「分かってるなレン。」

よし。

「おにいちゃん、ありすは？」

アリスよどうしてお前は俺を追い詰めるようなことを言っただ。

好きだと言えば間違いなくフリッグとミナが暴走する。

嫌いだと言えばアリスが悲しむ。

考える、なにか道はあるはずだ！！

「ア、アリスは俺の妹のようなもんだ。

兄が妹を嫌えるわけないだろう。」

これがギリギリのライン。

女として見ているわけでも好きと断言したわけもなく、かといって嫌いと言っているわけでもない。

フリッグは………まだ悶えているのか、これなら大丈夫だ。

ミナは………若干危ないが大丈夫だろう。

ジンは

「流石だレン。

そつだよな、兄が妹を嫌えるわけないよな！！」

よく考えればシスコンのこいつが妹と聞いて否定的になるわけないか。

「おにいちゃん、だいすき。」

やばい！！

なんだこれは！？ 超和むぞ！！

フリッグやミナのような美少女を見ていても眼福だが、残念なこと
に中身が面倒くさいの一言に尽きる奴らだからな。

それに比べてアリスは………

俺もジンのことシスコンって言えなくなるかも………

新しい妹（後書き）

とりあえずメインはこの5人です。
その内増えるかもしれませんが・・・

日常を守るために

アリスと主従契約を結んで数日、最初は渋っていたフリッグも同じ髪の色だからなのか本当の妹のように扱っている。
アリスもフリッグに懐いて受け入れられていた。

「そろそろ仕事を再開するか。」

「そうですね。」

アリスも大丈夫みたいですし。」

「ありすもおしごとする。」

最近ジンの気持치가マジで分かる。
アリスが可愛くて仕方がない。
もちろん恋愛感情ではなく家族愛としてだ。

「どうする？」

確かにアリスは強いが危険な目に遭わせたくないし、アリスをここ
まで連れてきた奴等もまだ見つかっていない。

「いいんじゃないでしょうか。」

アリスも家に閉じ込めてばかりでは可哀相です。」

「そうだな。」

行くかアリス。」

「うん。」

神と吸血鬼か。

向こうの世界では天敵みたいなものだけど現実では普通なんだよな。

side フリッグ

どうもフリッグです。

とりあえず数日前の私を殴り飛ばしてやりたい気分です。

「どうしての、おねえちゃん？」

アリスが、アリスが可愛すぎます！！

レンもかなり溺愛してるみたいですし私たちの娘みたいです。

私が母でレンが父でアリスが娘。

これってもう家族ですよね？

もう身を固めてもいいんじゃないんでしょうか？

実際アリスを引き合いに出せばレンも応じてくれるような気がします。

「なんでもありませんよ。」

相変わらず食事はレンの血だけですがいつか普通の食べ物も食べて欲しいですね。

そして、アリスを酷い目に合わせようとした奴等は許しません。

レンの手前殺しはしませんが、生まれたことを後悔させるくらいは許してくれるでしょう。

side out

まあ、分かっていたことだけどやっぱり吸血鬼って凄いな。

「違いますよアリス。」

相手が魔法を使ってきたらこうするんです。」

「どう?」

「そうです。」

神と吸血鬼が無双してる。

ここら一体の魔物いなくなるんじゃない?

ちなみにアリスは純粹な吸血鬼で真祖と呼ばれるものらしい。

最近では吸血鬼と他の種族のハーフだったり、吸血鬼の眷族といった死徒がほとんどで真祖はそうそういないらしい。

それだけあってアリスの強さは出鱈目だ。

自分の3倍はある大剣を片手で振り回してる。

しかも、魔力だけならフリッグを越える素質を持っているらしい。俺っていらなくね?

「駄目ですよアリス。」

魔物も生き物なんですから無暗に殺してはいけませんよ。」

「わかった。」

しかも滅茶苦茶素直だ。

正直俺がアリスの主でいいのか本気で悩む。

「はい、おにいちゃん。」

「ありがとう。」

「優しいアリスは。」

「あたまなでて。」

言われた通り頭をなでてやると気持ちよさそうに目を細める。

もう駄目かも、これ以上アリスを可愛がってしまつと死ぬに死ねなくなる。

俺が死んだらアリスは悲しむだろう。

でも、やっぱりこの恐怖だけは拭えないんだよ。

「どうしたのにおにいちゃん？」

「なんでもない、帰るか。」

「うん。」

どうか俺がいなくなっても悲しみに囚われなく過ごせますように。

side フリッゲ

アリスならと思ったんですがやっぱり駄目みたいですね。

それはそれで嬉しいような、悲しいような微妙なところなんですけど。

私はレンがいてアリスがいてあの兄妹がいて、そんな日常を永遠に送って行きたい。

もちろん、レンは渡しません。

だから、レン気付いてください。

あなたはたったこれだけの期間でこんなにも必要としてくれる人が

いるってことを。

side out

「見つけた!!」

やっと現れたか。

「アリス知り合いか？」

「ううん、知らない。」

アリスは見た目の割にかなり頭がいい。

これからいろいろ教えて行けばミナや俺のように頭脳戦でも戦えるようになる。

そういえばアリスって何歳なんだろう？

「人違いじゃないんですか？」

「そんなはずは。」

ほら血だ、戻っておいで。」

「いない。」

そういつてフリッグの後ろに隠れた。
それでいい。

「もう止めてもらえませんか？
アリスも怯えています。」

「あの子はどこで拾ったんですか？」

「アリスは私たちの親戚の子ですよ。
あなたたちは何者ですか？」

その言い方から予想するにアリスと似たような子に逃げられたようですね。

逃げられるということは虐待、またはそれに類することをしたということですか？」

「し、失礼します！！」

「どうするつもりですか？」

「ほっとけば勝手に捕まるだろう。
俺たちが関与する必要はない。」

「そうですか、生まれたことを後悔させてあげようと思っていたんですが。」

こいつは自分が好意を持っている相手に手を出されるとこころなるのか？

生れたことを後悔ってどんなことをするつもりだよ。

「とりあえず帰るぞ。」

アリスもお腹すいただろう？」

「うん。」

「そうですね。」

後はミナに任せましょう。」

そうなるミナに手を出す奴がいたら生れたこと後悔させるつもりなのか？

side ????

「どうしますか？」

「取り返すに決まっている。」

せっかく手に入れた真祖だぞ。

もうすぐ金が手に入ったのに。」

「でも、どうやって？」

「真祖は力づくでは捕まえるのは困難ですよ。」

「吸血鬼には神だ。」

「アースガルドから応援を呼んでる。」

「いくら真祖といえど相手は子供だ。」

「適当に痛みつけければもう逃げ出さないだろう。」

「それでは俺はあいつらの家を探ります。」

「ああ、任せた。」

今だ自分の末路が分かっていない愚か者たちは勝利を疑わず闇夜の中で笑っていた。

side out

「なるほど。」

でもそれって所詮使い捨ての駒でしょ。

そんなの捕まえたって根本の解決にはならないわよ。」

「分かってる。」

だが、アリスを捕まえるにはそれなりの専門家が必要だろ？
その専門家との交渉に下っ端は使えない。

つまりそいつを捕まえて吐かせればいい。」

最悪、フリッグに記憶を読ませればいいしな。
罪悪感はあるだろうが背に腹は代えられない。

「相変わらずね。」

まあ、そういうところが好きになったんだけど。」

「そういうことはジンのいないところで言ってくれ。
あいつに聞かれたら面倒くさい。」

「分かってるわよ。」

それよりフリッグは？

よく私と2人でなんて許可してくれたわね。」

今までは確信犯かよ。

「アリスを頼んでる。」

いつ襲われるか分からないからな。

あいつもかなりアリスを溺愛してるからな。

かなり迷った末に許可してもらえたよ。」

「尻に敷かれてるわね。
たまには私の所にも来ない？
フリッグばかり不公平よ。
私もレンとアリスを侍らかしたいわ。」

こいつも結局アリスの可愛さに負けたか。

「そういう交渉はフリッグと頼む。
俺が勝手に決めるとこの街が滅びかねない。」

真祖の吸血鬼でも神には勝てない。
それもフリッグだと尚更だ。
あれは神の中でも最強と言えるレベルらしいからな。

「確かにあの娘は嫉妬深いわよね。
そついうのって重くない？」

「重いに決まってる。
そもそもお前なら分かるだろ？」

こいつほどの奴に分らないはずがない。
俺が

「死にたがりってこと？
それに、かなり甘いしね。」

レンにとって自分の周りにいる人の想いはすべて重荷でしょうね。
自分が死んだら悲しむからって、そんなところ？。」

「分かってるなら、俺のことは諦めてくれ。」

「嫌よ。」

私はレンが好きなの。

レンが思っている以上にこの気持ちは強いわよ。

それに死んだら悲しむなんて今更よ。

レンが死んだら私だけじゃなく兄さんも、アリスもフリッグも悲しむ。」

それが重いんだよ。

喪失への恐怖と悲しませる罪悪感との板挟み。

いつそ記憶が消えてしまえと思ってしまっ。

「そもそも幸せが幸せでなくなるなんて私には当たり前のことだけどね。」

まあ、レンの場合はそれが日常だから厄介なのよね。

でも、大丈夫よ。

私がつっかり振りまわして平穩なんて感じさせてあげないから。」

こいつは鬼か。

「それになんだかんだ言っても問題に直面した時のレンは余計なことを考えなくていいでしょ。」

それで解決したらつかの間の平穩を感じて私が次の問題を持ってきてあげる。」

吸血鬼の問題も俺の為か。

どうして俺みたいなのやつにこんな良い女が惚れるんだか。

こいつならもつといい奴がいるだろうに。

「無理はしないでくれよ。」

俺の為に怪我なんてしたらそれこそ罪悪感に苛まれる。」

「分かってるわよ。」

私はレンを幸せにしてあげるのが目的なんだから。」

ああ、良い笑顔だ。

ジンが言ってることも満更嘘じゃないみたいだな。

「それじゃあよろしく頼む。」

俺たちの新しい仲間、アリスの為に。」

「ええ、もちろん協力は惜しまないわよ。」

日常を守るために（後書き）

もうすぐお気に入り100件を突破しそうなので記念としてレインハ
の質問集を書きます。

そこで、読者の皆様に質問の内容を募集したいと思います。
ご協力お願いします。

神罰

「動きはあった？」

「いや、大方専門家の用意に手間取ってるだけだろ。」

アリスを狙う輩が出た時から毎日行っている定例報告ももちろん俺とミナの2人だけだ。

アリスは頭がいいから会話の断片で理解するだろうからな。

「そういえば最近ジンを見ないがなにかあったのか？」

「一応兄さんは長男だからね。」

いずれ長を継ぐ可能性があるから覚えることがいろいろあるのよ。」

あのジンかねえ。

あいつはそういう政治より街を外敵から守る職業が向いてる気がする。

「ミナはいいのか？」

「私？」

私は覚えることはもうないから。」

哀れだなジン。

「そういえばレンに接触してきた奴の素性が分かったわ。」

一応、戸籍はアースガルド、この国の首都ね。」

ちなみにアースガルドは信仰の国だそうだ。
実際近くに神がいる俺にしてみればあれを信仰している人たちが可
哀相になってくる。

「それは本物か？」

「さあ？」

たぶん偽造じゃないかしら。

戸籍を作る時に一応魔力で本人確認できるけど、最近は魔力を誤魔
化す物があるらしいから複数戸籍を持っていてもおかしくないのよ。

「

当然だが戸籍は1人につき1つ。

登録するときに魔力で既に持っているかそうでないかは判断するら
しい。

「下っ端に偽造戸籍か。」

思ったよりでかいのが釣れるかもな。」

「それはそれで楽しいそうだからいいんだけど、そういうところで
お偉いさんに繋がってるから決定的証拠を叩きつけないと壊滅は厳
しいわよ。」

そりゃあ、フリッグとアリスがいれば物理的な壊滅はできるでしょ
うけどそれはレンが嫌でしょう？」

最悪フリッグに頼むつもりではあるができれば敵であっても殺しは
やりたくない。

どんな奴にも家族や友人はいるものだ。

「そこはミナの出番だろ？」

もみ消そうとした証拠をつかめばこの街の膿を取り除ける。」

「もとからそのつもりよ。」

私はレンのことも好きだけどこの街も好きだからね。」

ついでに膿も切り捨てさせてもらうわ。」

そのためにもアリスを狙っている奴を生きたまま捕獲してね。」

確かにきちんと言い聞かせておかないとフリッグが殺しはしないまでも廃人くらいにはするかもしれない。」

「努力はする。」

ただ、フリッグはときどき制御できなくなる時があるからな。」

「厄介な娘に惚れられたものね。」

「それはお前もだ。」

それにあいつが制御できなくなる時は基本的に好意を持つ奴になにかあった時だけだから、お前が変な奴に絡まれたら暴走するかもしれないぞ?」

「それは嬉しいわね。」

私も気をつけるわ。」

フリッグもミナも友達いないみたいだから嬉しいだろう。
どっちも人付き合い苦手そうだな。

「それじゃあ、またな。」

「ええ、またね。」

さて、そろそろだと思っただが。

s i d e ミナ

接触から三日。

そろそろ来るころね。

ふふっ、やっぱり私の勘は当たってた。

「面白くなってきたわね。」

本当に最近は毎日が充実してる。

いろいろな問題について考えたり、動いたり。

それにフリッグってういう友達もできたし好きな人もできた。

まあ、今のところ脈なしだけど。

でも、レンは大丈夫かしら？

確かにアリスは狙われるでしょうけど居場所が分からなければ捕まえようがない。

居場所を知っていてもレンを脅せば手に入るかもしれないと考えるでしょうし。

ちなみに私に手を出そうものならこの街すべてが敵になる。

私はいろいろな意味で目立つしね。

私を公衆で誘拐なんてしようものなら国が動くでしょうし、そんなればいくら大きい組織でも危険にさらされる。

ま、レンならどうにかするでしょう。

s i d e o u t

「動くな。」

やっとか、待ちくたびれたぞ。

「吸血鬼はどこだ？」

「何のことでしょう？」

「とぼけるな。」

居場所を吐け。」

やっぱりフリッグの結界は破れなかったか。
いや気付かれなかったという方が正しいか。

「わ、分かりましたから刃物を突き付けしないでください。」

「逃げたら殺すぞ。」

やっと掛かった。

俺が1人でうろついていることくらいこいつら把握済み。
そして、アリスが見つからなければ俺に聞くしかない。
だから、それを逆手にとって敵を引きつける。

「こつちです。」

神の裁きを受ける。

side フリッグ

来ましたね。

相変わらずレンのやることは凄いですね。

すべてレンの手の上で事が運んでいます。

「アリス、準備はいいですか？」

「うん。」

さて、行きましようか。

s i d e o u t

「おにいちゃん！！」

「レン！！」

「おっと、動くなよ。」

動けばこいつを殺す。」

三流が。

俺が何の対策もなく捕まっていたと思ってるのか？

お前らはアリスの力だけを警戒してるだけだろうからな。

つまり、アリスの力を発揮させなければ後ろについてる奴等は引っ張ってこれない。

そして、引っ張ってきたところを計画のイレギュラーであるフリッグに捕まえさせるためにもフリッグの力は使えない。

つまり、俺がどうにかするしかないわけだ。

そこまで分かっていたいれば拘束された時のことを考えておけばいい。

まさか、後ろから首に刃物を突き付けるだけで両手両足を自由にしておくとはな。

「なあ、あんた下っ端だろっ?」

「なに?」

まずは銃を創造、こいつから死角になつて足撃ち抜く。

「ぐああああ!」

そして、拘束が緩んだ隙に刃物を奪って逆に突きつける。

「さて、お前らのバックのことを話してもらおうか。」

「な、お前、まさかわざと……」

「ようやく理解したか三流。」

俺が狙われることくらい分かっていた。

後はアリスさえいればお前らは敵じゃないしな。

さあ、話してもらおうか。」

「三流はお前だ。」

私たちが吸血鬼に対して何の対策もないと思つたか?」

どこまでも三流だな。

「なに?」

芝居を打つのは面倒だな。

「じつじつことだよ。」

「つち!!」

いかにも神父様って感じだな。
しかし、神父様が魔法ってどうよ？

「汚らわしい吸血鬼め、神の名のもとに肅清してくれる。」

ようやく俺の出番は終わりか。
やりすぎるなよフリッグ。

side フリッグ

神の名のもとにですか・・・
なかなか笑える冗談ですね。

たまにですが人の身で神力を有する人がいる時があります。
そんな人は神子として神の言葉を受け取る役目なんかをやってたり
しましたね。

まあ、ほとんどが偽物ですがこれは本物のようです。
流石に神術が相手ではアリスは厳しいでしょう。
あれは魔の者に対してはより強い効力を発揮しますからね。
ですが、私がそれを許すと思いますか？

「どけ女。」

これは神の意志だ。
どかぬならお前にも神の裁きが下ることになるぞ。」

「知ってますか？」

神も結局人と大して変わらないんですよ。
いえ、力を持っているだけで人よりつまらないものかもしれないで

すね。」

くだらないプライドや嫉妬、進化し続ける人の方がよっぽど凄いです。

「貴様、神を侮辱するか。

いいだろう、貴様にも神罰を与えよう。」

下級の雷ですか、いかにもそれらしいですが……
この程度が神罰？

「なに!!！」

笑わせてくれますね。

最高位の女神であるこの私にその程度で神罰？
私を罰したいのなら最高神を連れてくるくらいして欲しいものです。

「消えてください目ざわりです。」

side out

圧倒的だな。

そもそもあいつ何したんだ？
立っているだけにしか見えなかったがいつの間にか神父は吹き飛んでた。

「な、なんだあいつは!!！」

「おっと、逃げるなよ。」

こいつも一応捕まえておかないとな。

「フリッグ、そいつを拘束しておいてくれ。」

「はい。」

さて、後は鬼が出るか蛇が出るか。

できれば厄介な組織じゃなきゃいいんだがな。

掃討戦

「どうだった？」

「結構あっさり吐いてくれたわ。

よほどシヨックだったんでしよう。

組織の名はニーズヘッグ。

予想以上過ぎる組織よ。」

ニーズヘッグ、別名嘲笑する虐殺者ねえ。

随分と大層な名前だな。

「一応聞いておくがどんな組織だ？」

「金のためなら犯罪を一通りやっているような組織よ。

裏の組織なのに有名すぎて表にまで名が知れ渡るほど、これは流石に予想外だったわ。」

それだけの組織となるとそう簡単には尻尾を出してはくれないか。

「どうする？」

流石に相手取るには大きすぎる相手だけど。」

「そうだな、こういうのはどうだ？」

「……………なるほどね。」

確かにそれならいけるかも。」

「それじゃあ早速頼む。」

「こつちも準備しておく。」

「分かったわ。」

大至急調べておく。」

これが上手く行けばアリスを助けだせる上にニーズヘッグからの追撃も避けることができる。精々踊ってもらうぞ。

side ミナ

まさかニーズヘッグとはね。

本当にレンと居ると退屈しないわ。

さて、アリスの為に私の仕事をやりますか。

私がレンに頼まれたことはアリスを買おうとした奴。

あの神父はアリス対策に連れてこられただけだからそれは知らないはず、そうなると残るはレンが捕まえた三流だけ。

ふふっ、腕が鳴るわ。

side out

「……………ってわけだ。」

頼めるか？」

「それくらいならお安い御用だ。」

「それじゃあ頼むぞ、ジン。」

これであとはミナが聞き出せるのだが……

「おにいちゃん。」

「なにかあつたんですか？」

「アリスを捕まえようとした奴等は意外とでかい組織だ。力だけでどうこうなるような相手じゃなさそうだから今いろいろ動いている。」

うん、俺の癒しであるアリスを犯罪組織になんて渡せないな。

「私は何もしなくていいんですか？」

「もちろん2人にも働いてもらう。」

この2人は主に荒事だけだな。

「任せてください。」

アリスは必ず守ります。」

「ああ、もう少しだからなアリス。」

「ありがとう。」

さて、ニーズヘッグの奴らには悪いがアリスの為だ多少の罪悪感はい我慢するでしょう。

「レン、聞き出せたわ。」

ちなみに、あいつらがこの街に潜んでいる場所も。」

まさか、そこまで聞き出せるとは。
こいつかなり優秀なんだな。

「それは助かる。」

潜んでいる場所を探し出すのが最後の問題だったからな。
これで準備は終わりだ。」

「ええ、誰に手を出したか分からせてあげるわ。」

こういうときのミナは本当に頼りなる。
今回の作戦は俺だけじゃ難しかったからな。

「それじゃあみんな頼んだぞ。」

side ミナ

「ラムザさん、ちょっといいですか？」

「レグスのお嬢さんが私に何か用かな？」

「ええ、この国で禁止されている奴隷のことについてちょっとお聞きしたいんです。」

優位な立場って久しぶりね。

最近レン相手だったから負けっぱなしだったし。

「風の噂でラムザさんが奴隷を何人が買っているという噂を聞いた

んですが本当ですか？」

「なにを馬鹿な、証拠はあるのか？」

まあ、そう来るわよねえ。

「昨晚、ニーズヘッグの一味と思われる者を街の警備団が捕まえましてその中の1人がラムザさんのことを知っていたんです。」

「私はこの街でそこそ有名だからな、苦し紛れに知っている名前を適当に言っただけだろう。」

苦しい言い訳ね。

まあ、これで止めなわけだけど。

「今、兄さん率いる街の兵がニーズヘッグの拠点へと乗り出しています。」

もし、ラムザさんが奴隷を購入しているならなにかしらの契約書があるはずですよね。」

「くっ、そこまでされてはしたがない。」

悪いが私がこの街から逃げる為の人質になってもらう。」

これで本当に止めた。

「だそうですよ父さん。」

「ラムザよ、詳しい話を聞かせてもらおうか。」

私がこのこ1人でくるわけないでしょ？

これで私の仕事はおしまい。
後は頼んだわよ兄さん。

side out

side ジン

俺がレンに頼まれたこと、それはこの街に残っているはずのニーズ
ヘッグを可能な限り捕えること。
今頃はミナが街の膿を取り払っている頃だろう。

「行くぞ!!」

レンからはできるだけ派手にやって欲しいということだから俺を含
め百人以上の兵で向かっている。

「それにしても隊長。」

よく、ニーズヘッグなんて大物の拠点見つけましたね。」

「俺の妹だからな。」

それくらい当然だ。」

「そうですか……」

呆れたような顔をするな。

実際、今回の作戦はミナの力が大きい。

「着いたな。」

野郎ども、1人も逃がすなよ。
突撃！！」

やっぱり俺は考えるよりこういっのが向いてるな。
さて、俺も行くでしょう。

side out

side フリッゲ

私たちの役目はジンたちが逃した残党を逃がさずに捕えること。
私が殲滅した方が早いと思うんですが目立ち過ぎるとレンに止められ
れました。

アリスも同じ理由です。

「きたよ、おねえちゃん。」

それにしても本当にアリスは可愛いです。
今度時間があったらミナを誘って服を買いに行きましょう。
私が造ったものより人が作った物の方が可愛いですからね。

「そっいえばアリスは血は吸わなくていいんですか？」

別に殺さなければそれくらい許可してくれそうですけど。

「ありすはもうおにいちゃんからしかすわない。」

「どうしてですか？」

「おにいちゃんが好きだから。」

これは……

レン、ミナの次はアリスですか？

うふふつ、今回はアリスだから我慢してあげましょう。

でも、次他の女を引っかけたら次は監禁ですね。

流石にこれ以上レンに好意を持つ女性が近くにいては我慢できません。

「アリス、レンは渡しませんよ。」

「まけない。」

アリス相手なのでいろいろとぶつけることができませんね。
となればうさばらさしにちょうどいい人もいますし

「私の八当たりにつき合ってもらいましょう。」

side out

派手にやってるな。

今回俺はやることがないのでお留守番。

ちなみに今回の作戦は意外と単純だ。

大きな組織、それも裏となれば知られたくない秘密が山のようにある。

だからこそ知られたら消そうとするんだがそれは個人の場合だ。
知ったのが街という集団なら話は違ってくる。

だからこそジンとミナに表立って動いてもらい取引を邪魔したのは俺という個人ではなくアフル Heim という集団だと思わせる。俺たちがアリスを奪ったことは俺たちに接触してきた奴らしか知らない。

それに、アリスのことも真祖の吸血鬼でただで顔を知ってる奴も少数だろう。

話はそれたがどんな大きな組織だろうが国を相手取って勝てるわけがない。

今回は国じゃないがそれでも強力な集団である街の一つだ。

そこにはれたとなれば消そうとはせず、逆に一時期はなりをひそめるはず。

それに捕まえた連中から話を聞ければこの街の膿も一気に取り除けてこの街からニーズヘッグの影を一掃できる。

そうなればアルフ Heim は安全でアリスを守ることができる。

さて、俺は勝利の祝杯の準備でもしておくか。

side ミナ

あの後、兄さんがニーズヘッグの一味を捕まえて一通り吐かせた後街でニーズヘッグと繋がっている人は一掃。

父さんもご機嫌で言うことなしね。

このことは首都であるアースガルドにも伝えられ大々的に公表された。

すべて計画通り、これならアリスに手を出すことも難しいでしょう。

「それにしてもいつの間にかこんなことを考えたんだ？」

「それは秘密。」

「一応協力者はいるんだけど目立つのが嫌いだからね。」

「ふむ、今回の件を指揮したのなら是非欲しいところなんだが。」

それは同感。

レンがいればフリッグとアリスも自動的についてきて武力面では文句なし。

それに私とレンが組めばそうそう付け込まれもしないけど

「たぶん無理だと思うわよ。」

言っとくけど私の後をつけて無理矢理引き込もうとしないでね。せつかくできた友達を失いたくないから。」

「分かった。」

それは約束しよう。

それよりその友達の所へ行くんだらう？

早く行つてきなさい。」

「うん。」

いろいろ助かったわ。

ありがとう父さん。」

さて、行きますか。

side out

「それじゃあ、作戦の成功と新しい仲間、アリスを祝って、乾杯！

！」

「「「乾杯！」「」「」

ちなみに音頭をとってるの俺じゃなくジン。

「こういうのは俺の役目じゃないしな。」

「美味しいかアリス？」

「うん。」

俺たちの飲み物はジュースや酒だがアリスは俺の血だ。手を切ってグラスに血を注ぐのはなかなかシユールだった。

「それにしてもレンと居ると退屈しないで毎日楽しいわ。やっぱり私の目に狂いはなかったわね。」

俺としてはこんなことは二度と会って欲しくないがな。

「ミナ、今度アリスの服をも身に行きたいんですがどこかいいところありませんか？」

「それならいいところ紹介するわ。ついでにいろいろな穴場も紹介してあげる。」

アリスの服か。

いつも同じ奴じゃかわいそうだしな。

それにフリッグが造った物は見た目は商品そのものだが肌触りとか中身はぼろぼろだからな。

「レン、込んだ隊の奴等と飲みに行くんだがお前もどうだ？」

交友関係を広げておいて損はないな。

「分かった。」

「おお！！ まさか受けてくれるとは思わなかった。
俺の隊の奴等はいい奴ばかりだからレンもすぐ馴染めるはずだ。」

「そりゃ楽しみだ。」

「おにいちゃん。」

「どうした？」

「それたべたい。」

「アリスは普通の食べ物も食べられるのか？」

「うん。」

アリスがいろいろ言ってるならいいか。

「ほら。」

やっぱりアリスは可愛いな。
本当に癒される。

「ああ！！ アリス抜け駆けはするんですよ！！」

何を言ってるんだこの馬鹿は。
アリスは妹だぞ。

「おにいちゃん。」

「どっし、んー！」

「だいすき。」

・・・マジ？

「アリスばかりずるいですー！！
レン、私にもキスしてください。」

「アリスもライバルね。
負けるつもりなんてないけど。」

「大変だなレンは。
分かってると思うがミナは渡さないぞ。」

本当に騒がしい奴らだ。
まあ、こんな日常も悪くはないか。

キャラ設定 その2

ミナ・レグス

性別 女

年齢 17歳

身長 159cm

体重 不明

B77・W57・H80

職業 役員

備考

おのれの直感でレンたちを引き入れようとして反撃を貰ってしまい2度と前に現れないよう約束されたが、ヴァナヘイムで和解しレンに惚れてしまった。

戦闘面ではあまり活躍できないが頭脳面ではレンが一番敵に回したくない相手。

戦闘能力は無いとはいえ魔法の腕は一流で補助系統の魔法はかなりの腕前。

パニックに陥ると幼児退行してしまう欠点の持ち主。
イメージは某運命のあかいあくま。

ジン・レグス

性別 男

年齢 19歳

身長 187cm

体重 76kg

職業 街の兵の隊長

備考

ミナの兄であり極度のシスコン。
そこに恋愛感情は無く純粋な家族愛として。
隊長というだけあって実力はかなり高いが、フリッグやアリスと徹底的に負けているので若干落ち込んでいる。
レンとは気の合う友達として良好的な関係を結んでいる。
イメージはCLAMP作品のツバサに登場する忍者。

アリス

性別 女

年齢 11歳

身長 133cm

体重 不明

B 61・ W 47・ H 62

職業 吸血鬼

備考

ニーズヘッグに血を提供する代わりにいつていたが量が足りなくなり逃げ出したところをレンたちに捕獲され、そのままレンの家に住まわせることになった。

純粋な吸血鬼として真祖に区分され、幼いながらも吸血鬼の中でも最強レベルの力を持つ。

まともな教育を受けていないので言葉がおぼつかない。

現在はレンからのみ血を貰っている。

その為、レンに好意を持っている。

イメージは某運命のロリブルマ

女だけの平穩

side フリッグ

「それでは行ってきます。」

「行ってきます。」

「ああ、俺も夜になったらジンと飲みに行くから夜は頼むぞ。」

ニーズヘッグを一掃してからかれこれ1週間が経ちました。

その間ミナはあちこちへの根回しに忙しそうで、私たちもお金に余裕があるとはいえアリスが新しく住み始めるので仕事に追われていました。

とは言いましても、私が本気を出せばどんな仕事もすぐに終わってしまいますし、新しい戦力としてアリスも加わり前より効率的に仕事をこなせるようになってます。

もちろん、レンも実力はあげていますがアリスは真祖の吸血鬼、私が指導しているのもうレンでは太刀打ちできないくらいの力を持っています。

そして今日は仕事をお休みして前に言っていたアリスの服を買いにミナと街を巡ることになってます。

ついでに私の服も買ってこいとのことだったので思いっきりおめかししてレンを驚かせましょう。

「それじゃあ行きましようか、アリス。」

「うん。」

それにしても可愛いです。

これでレンのことを恋愛対象として見てなければ最高なんですけど今更言っても仕方がないのでミナと同様諦めてます。
次は許しませんけどね。

side out

side ミナ

ようやくニーズヘッグの件に片がついて今日はようやく休める。

こういつてはなんなんだけど私って結構天才の部類に入ってると思うのよ。

それに、生まれがいいからあんまり友達っていなかったし、1人が楽かなと思ってたけどやっぱり友達はいた方がいいわね。

フリッグとは友達でもありレンをとりあうライバルでもある。

アリスは友達というより妹っていう感覚が強いかな、同じくレンをとりあうライバルだけど。

それにしてもレンは罪な男ね。

こんな美少女3人に迫られて誰にもなびかないんで。

まあ、その方が燃えるからやりがいはあるんだけどね。

「ミナ、待ちましたか？」

「今来たところよ。」

それじゃあ行きましようか。」

今日は女だけで精一杯楽しましようか。

side out

side フリッグ

「へえ」。

アリスってやっぱり凄いんだ。」

「流石、真祖の吸血鬼といったところですね。

私は魔力と神力を両方使いますけど魔力だけなら将来的に私に匹敵する素質があります。」

神は本来魔力を有しませんが極稀に魔力を持つ神が生まれることがあります。

それでも普通は神力しか使わないので魔力は衰えてしまっただけど私は前代未聞の魔力保持者でしたから衰えるどころか日に日に増し、神力の10分の1くらいの魔力を持っています。

その魔力だけで中級程度の神格を持つ神になら余裕で勝てます。

流石に吸血鬼と神では相性が悪いでしょうからアリスでは勝てないと思いますがいずれ下級の神なら倒せるところまで行けるかもしれません。

「戦闘面はフリッグが指導してるんでしょ？」

それじゃあ、学問の方は私が指導してあげる。」

「どうしますか、アリス？」

「おねがいします、みなさん。」

「私もおねえちゃんって呼んでくれていいのに。」

「みなおねえちゃん?」

「ねえ、フリッグ、アリス引き取らせて。」

「駄目です。」

気持ちは分かります。

首をかしげてあんなことを言われたら誰だってそうなります。

「まあ、アリスはレンの近くにいないとお腹すいちゃうしね。」

最近レンの血以外でも食べるようになりましたが私と同じく食物から栄養を摂取することはありません。

その代わりに血から必要な栄養を摂取するので1日最低1回はレンから血を貰う必要があります。

「アリスに学問を教えるのはいいとして、いつならいい?」

「レンと相談してみないと正確には分かりませんが仕事を早めに切り上げてからなら大丈夫だと思いますし、アリスのこと溺愛してるレンなら仕事より学問の用を優先させそうです。」

もちろん溺愛といっても妹としてです。

女として溺愛してるなら最低でも監禁ですね。

「分かったわ。」

とりあえず語学から生活に必要な常識、アリスは頭もいいみたいだから私やレン見たいに頭脳戦で戦えるように指導してあげる。」

言っておきますが私は頭が悪いわけではありませんよ。
レンとミナが良すぎるだけです。
そもそも私に頭脳戦なんて必要なかつたんですから出来なくて当たり前です。

「がんばる。」

それにしても可愛いです。

ミナも悶えてますね、分かります。

アリスの可愛さはもう凶器ですね。

レン以外のことならアリスの言うことなんでも聞いてあげますよ。

「ねえ、君たち、暇なら俺たちと遊ばない？」

side out

side ミナ

「ねえ、君たち、暇なら俺たちと遊ばない？」

まさかこの街でまだ私に軟派しようとする奴がいるなんて驚きね。
前に1度、しつこく軟派されたところを兄さんに見つかって街中の男を脅してたからもうないと思ってたんだけど。

まあ、私もだけどフリッグも相当な美少女だし、アリスだって成長したら私たちくらいの美少女になることは間違いない。

だから、男として声をかけたいのは分からないわけじゃないけど

「お断りします。」

私たち全員レンのことが好きだからねえ。

時々、レンって女に興味がないのかって思っくらいよ。

「まあまあ、今日1日だけでいいからさ。」

それにしても神と真祖の吸血鬼って随分豪華よねえ。

街の跡取り娘って随分と小さく感じるわ。

「じゃま。」

しっかり躡ができてるのか無暗に力を振るおうともしないし、なにより可愛い。

どうにか来てくれないかなあ。

「お前らああ!!」

やっと来たわね。

「俺の妹に手を出すとはどういいうことだ？」

まさか2度もこの光景を見るとは思わなかったわ。

レンもアリスに手を出されたらこうなるのかしら？

「な、なんだあいつ。」

「逃げようぜ。」

「待てこらア!!」

これでまたしばらく寄ってこないでしょう。

「さあ、行きましょう。」

2人とも意外と反応薄いわね。

普通だったらどん引きしてもおかしくないんだけど。

side out

「お邪魔します。」

「ん、もう帰ったのか？」

「あれ？今日はジンと飲みに行くんじゃないかなかったですか？」

「おにいちゃん、おなかすいた。」

「そうか、ほら来い。」

最近何度も噛まれてるからか痛み慣れたおかげで血を吸われることになにも違和感を覚えなくってる。

まあ、多少痛くてもアリスの為なら我慢するがな。

「ジンの奴がどこか行ったらしくて今日は中止だと。」

ジンがこないとは予想外だったな、なにかあったんだろうか？」

「ああ、たぶんそれ私たちのせいね。」

こいつが絡んでいるということは例のあれか。

「軟派でもされたのか？」

「御明答、たぶん今頃街中を走り回ってるんでしょ。」

あいつのシスコンはそこまでののか……

俺もアリスに手を出されたらジンみたいになるのかなあ。

「何か食うか？」

有り合わせでよければ作るぞ。」

「そうね、お願いするわ。」

「手伝います。」

「アリス、ちょっと後ろに回ってくれ。」

ちなみにアリスは一度血を吸い始めるとなかなか離れない。だから、俺が動くときは後ろにしがみついて血を吸ってもらっている。

「レン、いろいろ服を買ったので後で見てくださいね。」

「それいいわね。」

私も新しいの買ったし、レンの評価を聞きたいわ。」

「ありすも。」

ミナだけじゃなくアリスも反応するとはこの前のは冗談じゃないみたいだな。

もちろん、俺はアリスを妹のようにしか思っていない。
俺はロリコンじゃないしな。

「言っておくが俺はセンスもなければ、今までそんなものに評価をつけたこともないぞ。」

「そんなの関係ないです。」

他の誰かの評価よりレン1人の評価だけあればいいんです。」

「それには同感ね。」

やっぱり好きな人の好みは知っておきたいじゃない。」

「どうかん。」

逃げ場がないな。

そもそもお前らは元が良すぎるんだから似合うとしか言えないだろう。

「分かったよ。」

その代わり気のきいたこと言えなくても文句は言つなよ。」

特にフリッグはな。

俺がミナやアリスを褒めたら切れるようなことは無いようにしてほしい。

「それじゃあご飯を食べたら早速やりましょう。」

「それなら、私も手伝つわ。」

「ありすも。」

平和だなあ。

アリスの楔

「カザミネさん、あなた方の実力を見込んで受けて欲しい仕事があるんですが。」

アリスを引き取って早1月、フリッグの指導のおかげで力の制御から魔法の効率的運用まで日に日に強くなってきている。それに、引き取るころはおぼつかなかった言葉もミナの指導で

「お兄ちゃん、どうかしたの？」

この通り、違和感がないように話せるようになっていた。

流石に、俺やミナのように作戦を立てて戦うなんてことはできないがそれでもとんでもない成長だ。

「受けて欲しい仕事があるんだと。」

ちなみにホームギルドの役員も国から指令された依頼を一定以上消化しなければいけないらしい。

最近は俺たちがかかりの頻度で受けているのでこのホームギルドの役員は大喜びらしい。

「どんな仕事？」

「どんな仕事でもお兄ちゃんはアリスが守るね。」

いくら成長してもアリスの可愛さは健在。

むしろ物をはつきり言えるようになったぶんその破壊力は増してる。

「いつにもまして可愛らしい妹さんですね。」

もう1人の妹さんはどこにいらっしやるんですか？」

ちなみにフリッグはミナとどこに行くか決めている。

一応、月に1度は遠出をする際護衛すると約束したからな。

ちなみに、あいつのヤンデレはもちろん健在。

あまりにアリスに構いすぎると切れる。

一週間前はマジで監禁されかけた。

ちなみにミナは最近幼児退行はしていない。

そうそう、慌てるようなことは起きてないしな。

「あいつは今、旅行の準備中だ。」

「いいですね、旅行。」

カザミネ兄妹が来てからは仕事が次々捌けるので私たちも楽をできて助かってます。

それで受けてくれますか？」

「ちなみにどんな仕事だ？」

流石に内容を聞かないで受けるような馬鹿な真似はしない。

アリスがいるとはいえエニーズヘッグを潰せなんてのは無理だからな。

「アルフヘイムの管轄下にある中規模の町にドラゴンが出たらしいんです。

今はまだ被害が出てないみたいですが、知能の低いドラゴンはかなり危険が高いので被害が出る前に討伐して欲しいとのことです。」

ドラゴンか、この世界でもドラゴンというのは最強の生命体らしい。最強といっても上から下まであって下の方は普通に人でも倒せるらしい。

ちなみに上に行けば行くほど生きた年数が長く、知能も高い。なので今回はそんなに強くはないが腐ってもドラゴンだ。はっきり言って俺が勝てるような相手じゃない。

「報酬は？」

「前金が金貨15枚、成功報酬がプラス20枚です。さらに、ドラゴンの牙や鱗などを持ち帰ってくれた場合、こちらで買い取らせていただきます。」

報酬は悪くない。

ドラゴンの牙や鱗は入手が困難なためかなり高価なものになる。今回は、レベルの低いドラゴンだから相場より低めだろうがそれでも十分な収入になる。

「どうするのお兄ちゃん？」

「アリスはドラゴンに勝てると思うか？」

「うん、まだ戦ったことがないからはっきり言えないけどお姉ちゃんより強くないよね？」

そりゃそうだろう。

フリッグを相手取れるのは今のところアリスだけだ。それもかなり手加減を加えた状態だ。

「いざとなればフリッグが飛んでくるだろう。行くか、アリス。」

「うん」

やっぱりアリスは和むなあ。

side アリス

初めまして、アリス・カザミネです。

今までは上手くしゃべれなかったからアリス視点は無かったんだけどミナお姉ちゃんの指導のおかげでこの場に立てるようになったよ。

「それにしてもいい天気だ。

大丈夫か、アリス。」

「うん。

太陽は苦手だけどそれでどうこうなったりしないから。」

死徒は駄目な人もいるらしいけど、真祖ともなれば太陽は生れた時から克服してる。

私は生れてまだ十数年くらいしか経ってないけど真祖だからまったく問題ない。

「お兄ちゃん、血を貰っていい?」

「もうそんな時間か。

いいぞ、ほら来い。」

アリスが一番好きな時間。

それはお兄ちゃんに抱きついて血を吸う時。

最初に血をくれるって聞いた時は本当に驚いたんだよ。

お兄ちゃんに会う前、他の人から吸おうとしたら逃げられたり攻撃

されたりしたから。

今はお兄ちゃんがいるから他の人の血なんてどうでもいいんだけど、お兄ちゃんの血は今まで飲んだどんな血より美味しいし、好きな人に堂々と抱きつける唯一の時間。

それ以外にあんまりべたべたするとお姉ちゃんが怖くなるからできないしね。

それよりも、お兄ちゃんはアリスが好きって言っても本気で捕えてくれてない。

やっぱり妹って言うのが駄目なのかな？

「どうかしたか？」

基本的にお兄ちゃんは鋭い。

だからこそ、お姉ちゃんやミナお姉ちゃんから告白されても先回りして上手く流してる。

「なんでもないよ。

御馳走様。」

「それじゃあ行くか。」

本当にどうやってたらお兄ちゃんって落ちるんだろう？

side out

さて、目撃された町へと着いたわけだがドラゴンなんて見当たらない。

そりゃ、町の近くで見つかったら大変だがいちいち探すのも手間だ。

こういう時フリッグがいてくれたら助かるんだが。

「お兄ちゃん、たぶんあっち。」

「分かるのか？」

「うん。」

やっぱり人間とは基本スペックが違いすぎるな。本当にいたよ。

背中に翼があつて尻尾が生えてる。

典型的なドラゴンって感じだな。

あれなら固定大砲をいくつか配置すれば俺でも倒せそうだ。

まあ、やる必要はない、というかやれない。

「はあ！！」

改めてみるとんでもないな……

武器も使わず素手で強靭なはずのドラゴンの鱗を砕き、プレスをかき消す。

「止め！！」

あれは死んだな。

どうやったかは知らないが外面に傷は無いのにその下にはクレーターが出来てる。

鱗がお金になるから極力破壊しないようにしたんだろう。

「終わったよ、お兄ちゃん。」

まあ、どんなに人外でもアリスは俺の可愛い妹ということに変わりはないがな。

side アリス

弱かったなあ。

魔法を使う必要もなかったよ。

「それにしても強くなったな、アリスは。」

「お姉ちゃんがいろいろ教えてくれたから。」

お兄ちゃんには負けちゃったしね。

いまなら、あの爆撃が来ても大丈夫。

障壁を使わないでも耐えられるだろうし、かわせる。

「でもな、別にアリスは戦う必要なんてないし俺たちに迷惑をかけるとか考えないでいいからな。」

「大丈夫だよ。」

アリスはお兄ちゃんを守りたいっていうアリスの気持ちの為に戦ってるんだから。」

「そうか、それならいい。」

「それとねお兄ちゃん。」

私はもうお兄ちゃん以外から血を吸わないよ。

だからお兄ちゃんが死んじゃったらアリスも死ぬね。」

「それは許さない。」

主従の契約は使いたくないが俺が死んでも生き続ける。」

「嫌。」

例え、契約がアリスを生かそうとしても絶対に死ぬ。」

お兄ちゃんがない世界なんて興味ない。

それに、アリスがこう言えばお兄ちゃんは死ねないよね。

「アリス!!!」

「絶対に死なせないよ。」

お兄ちゃんは皆から必要とされてるんだから。

それを抜きにしても好きな人を目の前で死なせるわけないよ。」

ミナお姉ちゃんも言った。

お兄ちゃんにたくさんのお楔を打ち込んで死なせないようにした後、

お兄ちゃんを変えるんだって。

お姉ちゃんは永遠を信じさせるって、ミナお姉ちゃんは振り回して別のことで幸せを感じさせるって言った。

それじゃあアリスは

「アリスはお兄ちゃんに愛してもらおう。」

たくさん、たくさん、妹としても恋人としてもそうすればお兄ちゃんは死なないよね?」

いっぱいアリスのこと想って、アリスを中心に考えてもらえるように。

「分かったよ。」

その代わり約束してくれ、百年後、俺が変わることがなかったら俺

が死んでも生き続けてくれ。」

「これでお姉ちゃんたちと同じだね。」

「ああ、まったくアリスには敵わないな。」

「大好きだよ、お兄ちゃん。」

例え、お兄ちゃんがどんなことになってもずっと好きだよ。

side out

参ったな。

まさかアリスがあそこまで考えてるとは思わなかった。

また死ねない理由が一つ増えた。

フリッグは永遠、ミナは刹那、アリスは平穏なんて関係なし。

三者三様、どうして俺なんかにここまで尽くしてくれるのか。

どう転んだところで変わりはないというのに。

俺が誰かを好きになっても結局、失ってしまうことを先に考えてしまおう。

傷つきたくないから、先に逃げておく。

信じるのが怖くて逃げているだけの俺だっただけなのに。

アリスの楔（後書き）

三人の中で誰が一番ですか？

波乱の予兆

「記念すべき一回目の目的地は首都、アースガルドに決まったわ。」

「やっぱり首都は見てみたいですね。」

お前ら本当に仲良くなったな。

それにしても最初から首都か。

まあ、気持ちは分からないわけじゃない。

九つの街の一つであるアルフ Heim でもこの賑わいだ、首都がどれほどのものか興味がないわけじゃないが

「ニーズヘッグは大丈夫なのか？」

いくらなりを潜めているとはいえ偽装戸籍を作ったとこだぞ。

最悪、アースガルドに本拠地があってもおかしくないぞ。」

いくら顔が割れてないとはいえあの事件からまだ一月ほどしか経っていない。

アルフ Heim は安全だが、他の所は安全とは言えないし特にミナはまずい。

あの事件で顔が広く知れ渡りすぎてる。

「大丈夫ですよ。」

いざとなれば私が守ります。」

「それに堂々と手を出そうものならそれこそ組織の秘密がばれる可能性が高くなるから、そう簡単には手を出してこないでしょう。」

確かにそうなんだが用心したことに損は無いからな。

「……………分かったが、ミナはフリッグかアリスの側を離れるなよ。」

「可能な限り1人になるな。」

「分かってるわよ。」

「意外と過保護なのね。」

「一応、護衛という建前があるからな。」

護衛の報酬だつて貰ってるんだ。

護衛対象に危害を加えられては俺たちの意味がない。

「それじゃあ、2日後に出発するから準備しておいてね。」

side フリッグ

この国の首都、アースガルド、楽しみですね。

信仰の街というのがアースガルドの別名だそうですですがそこはとってもいいですね。

信仰してもらえるのは悪い気はしませんけど私たちが神は結局、世界が滅びることがないように均衡を保つことしかやりませんから敬われなくても返すことはできませんからね。

それに、神の名を借りてやりたい放題やってるといっうらしいですから。

そんなものより国の首都で人はどれほど賑わって進化を遂げているか見て回る方が何倍も楽しみです。

本当はレンと2人きりが一番なんですけど今回はみんな一緒です。

それも悪くは無いんですけどね。

side out

side ミナ

やっと夢への第一歩が踏み出せる。

アースガルドへは何度か行ったことあるけど、街を見て回ることはあんまりできなかったから本当に楽しみだわ。

それに、何か面白いことがある予感がする。

流石にニースヘッグと戦うのは勘弁して欲しいけど旅にハプニングはつきもの。

そして、異端は異端を呼び寄せる。

フリッグは神だしアリスは真祖の吸血鬼、私たち兄妹は街の跡取り、そしてその中心にいるレン。

これだけ揃って何も起きないはずがない。

ふふっ、ほんとに楽しみだわ。

side out

アースガルド、信仰の街にしてこの国の中心。

ちなみにこの国は王制だから当然王様がいる。

今はそんなことはどうでもいいが、問題は信仰の街ということだ。

フリッグは能天気だから何とも思っていないかもしれないが神であるフリッグの正体がばれたときは果てしなく厄介だ。

人でも神力を持っている奴もいるようだし、何かのきっかけでばれる可能性だつてある。

それに、アリスは吸血鬼だから忌み嫌われる存在でもある。

これもばれたら面倒くさい。

それに、ニーズヘッグのこともある。
本当に厄介事ばかりの旅になりそうだ。

「お兄ちゃん大丈夫？」

「ん？ ああ、大丈夫だ。」

なにがあっても俺の日常は侵させない。
最悪、この手を汚そうともこの日常だけは守ってみえる。

・ ・ ・ ・ ・

「それじゃあ行きましょう。」

ちなみに移動は魔力を利用した自動車だ。
作成者はミナ、しかも自作らしい。
元の世界のようなスピードは出ないが魔法陣に魔力を注げば後は全
自動で動くので舵をとるだけでいい。
それにアリスとフリッグがいれば魔力には困らないし、そもそもミ
かとジンだけでも十分らしい。

「それにしても人の発想にはいつも驚かされます。」

「そうですね。」

もっと褒めていいわよ。」

最高速度は50〜60km/時、さらに地面から少し浮いているので振動もない。
魔力も最小限で済むよう何度も魔法陣を描き直したらしく燃費もいい。

「どう、レン、驚いた？」

「ああ、流石にこれには驚いた。

ジンが自慢したくなるのも分かる。」

「そうだろう。」

俺の自慢の妹だからな。」

「そ、そう。」

面と向かってそう言われると照れるわね……………」

こういうところは本当に可愛いんだよな。

言ったらフリッグとジンは切れて、ミナは暴走するだろうつから言えないがな。

「この調子で何事もなければ明日の昼ごろには着くと思うわ。

だから、適当なところで今日は泊まることになるから。」

不吉なことを言うな。

ミナが言うつと本当に何か起きそうで怖い。

「レン、気をつける。」

ミナがこういうときは経験上何か起きるぞ。」

お前も苦労してるんだな。

「いいじゃない。」

せつかくの長旅なんだから思い出になることが起きないとつまらないわ。」

俺はお前のように瞬間瞬間を楽しめるような精神してないんだよ。

「諦めなさい、レン。」

これから何度もこんなことがあるんだから開き直って楽しみなさい。」

やっぱり本気なんだよなあ。

「む、残念ですがレンは私が変わりますからミナは頑張らなくていいですよ。」

「アリスも負けない。」

「大人気だなレン。」

ミナとは友達までにしておけよ。」

相変わらずのシスコンだなジン、そして空気を読め。

「喧嘩はしないでくれよ。」

俺の為に傷つく人なんていて欲しくない。

自然に薄れればいいんだが無理そうなんだよなあ。

だから、俺に出来ることは現状維持。

俺が変わらなければ当分はこのままだろうし、そもそも変わらない

と思うがな。

・
・
・
・
・
・
・
・

とりあえず何事もなく、九つの街よりは小さいがそこそこ大きい町で今日は宿泊することになった。
しかし、不気味なほど何も無い。

「気を抜くなよ、レン。」

ミナの直感は嫌というほど当たる。」

「だが、ここまで来て何が「誰か捕まえて!!」……」

こっちに向かって男が走って来て、その後ろから追いかけてる人がいる。

ひったくりか、思ったより大した出来事じゃなかったな。

「どけ!!」

それにしても間が悪かったな。

俺たちが通らなければ無事に済んでももの。

「危ないよ。」

可哀相に、よりによってアリスの所に行くなんて。

まあ、一番小さいから分からないわけじゃないがそこは一番の鬼門だ。

「アリスに触れていいのは私たちだけです。」

アリスが魔眼で動きを止めてフリッグが重力で押し潰す。
見事な連係プレイ、ひったくりに同情してしまう。

「ありがとうございます。」

「気をつけるよ、それじゃあな。」

なんだ、この嫌な予感は……

一刻も早くこの場を離れろと本能が告げている。

「ま、待ってください。」

あなたの名前は？」

聞かれたのは俺じゃない、男が男の名前を呼びとめてまで聞くなんて気持ち悪すぎる。

呼びとめられたのは

「私ですか？」

まあ、見た目だけならかなり目を引く美少女だから呼びとめたくなるのは分かるがな。

最近、家事も完璧にこなすようになってるし、戦闘能力は無敵だし、これで病んでなければ言うことないんだが。

「フリッグ・カザミネです。」

「フリッ」名前では呼ばないでください。「カザミネさんですね。」

本当にお気に入り以外のやつ以外には厳しいんだよな。

一目惚れした相手にこの仕打ち、自覚は無いだろうが同情したくなる。

「僕の名前は、グレイ・セシリアと言います。」

あの、よかつたら僕と付き合ってください。」

「嫌です。」

展開が早すぎる。

あつて30秒で告白して即答で断ってる。

それにしてもセシリア、どこかで聞いたような。

「行きましよう。」

レン、後でちよつと付き合つて。」

ミナが滅茶苦茶面白そうな顔をしてやがる。

くつ、やはり面倒事か!!

「あの、どこに住んでるか」嫌です。「・・・」

頑張るなあ。

・
・
・
・
・

結局あの後、渋々引き下がって行ったが問題はその後

「まったくしつこい人です。」

私はレン一筋なんですから他の男なんかに興味なんてありません。」

さりげなくアピールするな。

「それで、あいつはいったい何者だ？」

フリッグがアリスを相手している間に聞いておくか。

「セシリアってのはアースガルドの王族の名よ。」

まさか、ここで王子が登場するとは。

「偽名の可能性は？」

「偽名で王族の名前なんて語ると思っ？」

「逆に、こんなところで王族の名を出すか？」

護衛もなしに王族が独り歩きなんて危険すぎるだろう。

ここはアースガルドの管轄とはいえ、アースガルドではないんだから。

「ちなみに、王子の中の1人に神の力を受け賜わったって言う噂があつてね、これは結構信憑性が高いのよ。」

おいおい、いったい何の偶然だ。

「面白くなってきたわね。」

「王族と関わりを持つなんて冗談じゃないぞ。」

「ま、あくまで推測の域を出ないから本当にあの子が王族か分からないけどね。」

もし、さっきの奴が王族なら厄介極まりない。

近くに護衛の影は無かった。

いくらお忍びにしても危険すぎる。

つまり

「あの子が王族だとしたら、逃げ出したか、誘拐されたか、身なりがまだきれいだったから前者かな。」

または、追放されたか。

どれをとっても厄介なことには変わらない。

今日の様子からフリッグを諦めたとは思えない。

そのことを含めて考えると、やっぱり息抜きに抜け出したという線が高いか。

「本当にレンと居ると退屈しなくて楽しいわ。」

他人事だからって言いたい放題言いやがって

まあ、フリッグだったのが唯一の救いか。

ミナだとジンが切れるし、アリスだとフリッグとミナが切れる。

アリスだと俺も切れるかもしれないし。

前途多難だなあ。

不意打ち

「また会いましたね。」

「消えてください。」

とりあえず今の状況を説明しよう。

結局あの日は何事もなく終わり、次の日の朝、アースガルドへと再出発しようとする宿を出て最初に目にしたのはこいつだった。

そして、さっきのやり取りとなるわけだ。

それにしても王子がストーカーとかどうよ？

「グレイ・セシリアって言ったな。

単刀直入に聞くがお前は王族か？」

「はい。」

やっぱり偽名を使ったほうがよかったみたいだね。」

これで神の力とやらを持っているたら最悪だな。

フリッグの正体がばれでもしたら王族でありながら信仰の街を治める長の跡取りの1人。

担ぎあげられでもしたら面倒くさいのは目に見えてる。

「王子がどうして護衛もつけずこんなところをうろついてる？」

「すみませんが、あなたは？」

「私のこい「フリッグの兄だ。」」

少しは状況を考えろよ。

「それでは将来、僕の義兄になる人ですか。えっと、なぜこんなところにいるかでしたね。」

それは、天啓というか信託というかとりあえずここに来ればとにかくあると感じたからです。」

本当に最悪だな。

幸いなのはフリッグが神だと気づいていないところだ。それなら、後はどうやってこいつを引き離すかだが。

「カザミネさん、僕と一緒にしてください。きっと幸せにしてみせます。」

「おと断ります。私はレンと一緒にいられればそれで幸せですから。」

ん？
さっきとんでもないことを口走らなかつたか？

「でも、こちらの方はお兄さんではないんですか？」

「戸籍上だけで血はつながってません。」

これはやばいなあ。

片思いをしている相手が片思いしてる相手、これが意味するは

「それでは僕がこの男を倒せば僕のことを振り向いてくれますか？」

だよなあ。

特に神の力がどうこうで持て囃された王子ならそんな都合のいい展開を考えるよなあ。

「ありえません。」

「レンと言いましたね。」

僕と戦って僕が勝ったらカザミネさんとの関係を切ってください。」

やっぱり止まらないか。

「どうするのレン？」

お前この状況楽しんでるよな？

下手を打てば考えるだけでも恐ろしい事態が待ってるってのに。

「本人の意思を無視していいのか？」

まず、フリッグの意思を聞いてからにしてくれ。」

「私はレン一筋です。」

これで諦めて

「あなたを倒せばきつと振り向いてくれるはずです。」

くれないかあ。

「早く構えた方がいいですよ。」

それでも僕は神の力を持ってますから常人より遥かに強いです。」

こんな町中ですか？

常識を考えろよ。

「まあ、待ちなさい。

王子の気持ちは分かったわ。

でも、ここで戦ったら被害が出るから場所変えない？」

「そもそも戦う必要ありませんよ。」

「あら？」

レンがフリッグを守るために戦ってくれるのよ？

素敵なシチュエーションじゃない。」

「ふえー！！

そ、そう言われれば………私の為に頑張ってください、レン！！」

あの馬鹿女、簡単に籠絡されやがって。

後で覚えとけよ。

「どうするのお兄ちゃん？

あの人、お兄ちゃんじゃちよつと厳しいよ。

言ってくればアリスが眠らせてくれるけど。」

やっぱりアリスはいい子だな。

本当にあの馬鹿女に見習わせたい。

「アリスが出て、吸血鬼とばれたらそれも厄介だから俺が行くよ。

それに、あいつは単純そうだからいくつか勝つ手段はある。

自分より強い相手と戦う術を見ておけ。」

「頑張つてね、お兄ちゃん。」

side ミナ

ふふっ、面白いわ。

思った通りあの王子様単純ですぐに乗ってくれたし、レンも逃げられない状況だしね。

「どういうつもりだ？」

「言ったでしょ。」

思いつき振り回してあげるって。」

目の前の問題に立ち向かっているときは他のことなんて考える余裕なんてないしね。

その瞬間だけは恐怖なんて感じなくていいでしょ？

「できればもう少し手加減してくれ。」

もし負けたらどうするつもりなんだ。」

「その時その時よ。」

しっかり今を生きなさい。」

side out

「ジン、ちょっと武器貸してくれないか？」

「別にいいが、レンは刀使えるのか？」

「今回は刀として使うつもりはないから大丈夫だろう。」

造ってもいいんだが俺が刀剣類を造ると脆くて困る。

「そうか。」

ほら、負けるなよ。」

「ああ。」

最近ジンがアリスの次にまともを感じてきた。俺もシスコンになりかけだからか？それはそれで嫌だがアリス可愛いしなあ。

「準備はできたかい。」

「できたが、フリッグは諦めた方がいいぞ。」

「そう言っても無駄だよ。」

きつと彼女を手に入れて見せる。」

駄目だこりゃ。

自分を過信して、できないことは無いと思ってやがる。案外簡単に倒せるかもな。

「それじゃあ、始め。」

こうなったら踊ってもらおうぞ王子様

s i d e フリッグ

レンが私を巡って戦ってくれてるこの状況。最高です。

これならあの鬱陶しい人から言い寄られたのは無駄じゃありませんね。

あの人からは神力を感じますがレンならきっと大丈夫でしょう。今までも、自分より遥かに強い相手に勝ってきたんですから。

s i d e o u t

s i d e ミナ

うん。

送りだしたのはいいんだけど本当に勝てるかなあ？
噂じゃ王宮の騎士団を圧倒したって聞いてるけど。
ま、なるようになるわよね。

負けたら負けたでフリッグに処理してもらえばいいわけだし。
それに、レンが簡単に負けるとは思えないしね。
楽しませてね、レン。

s i d e o u t

「神の力を見せてあげます。」

「あぶね!!!」

アリスの時の神父との戦いを見ておいてよかった。

あの神父とは比べ物にならないが同じように上から雷みたいなもの

が降ってきやがった。
しかも、絶対殺す気でやったなあいつ。

「降参するなら今の内ですよ。」

させてくれるならやってるよ。

お前がフリッグを落としてくれたら俺がどれだけ救われるか。

「残念だがストーカーに妹は渡せないんでな。」

さて、反撃開始だ。

side ジン

「残念だがストーカーに妹は渡せないんでな。」

当然だな。

俺だってミナをストーカーになんて絶対に渡さない。
ようやくレンも分かってきたな。

「喰らいやがれ!!」

あれは、閃光弾か。

単純な相手には有効な手段だな。

「くっ、目が!!」

「これで終わりだ!!」

当然無理だろうな。

ホームギルドにいたころつきとは違ってちゃんと障壁を張ってる。それもかなり堅そうだ。

「つち!!」

さて、どうするレン？

side out

そう簡単にはいかないよなあ。

「不意打ちとは卑怯な真似をするね。だけでもう同じ手は効かないよ。」

もう視力が回復したか。

まあ、気付いてないだろうがそれも計算通りだ。

「君は彼女に相応しくない。

ここで僕が倒す!!」

これだから自分に酔ってる奴は相手にしたくないんだ。こつちの話なんて聞かないからな。

「知ってるか？

不意打ちってのは相手に気付かれず、一撃で相手を仕留めることを言うんだ。」

「それなら君の不意打ちは失敗だね。もう、同じ手は食わない。」

だから単純な奴はやりやすい。
あれが不意打ちなわけないだろう。
あれはただの布石だ。

「そうか？」

それならこれはどうだ？」

今の俺はフリッグの加護のおかげで人外の動きができる。
とはいっても地球の人と比べてだ。

この世界の人外と比べると圧倒的の劣るがな

「ただ突っ込んでくるだけで僕に勝てると思ってるのかい？」

「ああ、喰らえ!!」

「同じ手は食わないといったはずだよ。」

「どうかな？」

side ミナ

なるほど。

最初の一撃はただの様子見だと思ってたけど、次の一手の布石にも
なってたってわけね。

閃光で目が潰せるか、物理攻撃が効くか試すだけじゃなく、レンが
投げつけるものは閃光だけを発すると思込ませる。

その上でもう一度同じようなものを投げ今度は光と、音。

あれを至近距離で喰らったらしばらく耳は使えないし、三半規管が
やられてバランスがとれなくなる。

そうならば、いくら目が見えてもレンが背後に回れば視界から姿を消せる。

そして、いくら神の力で守られているとはいえ、あの至近距離で本気で振り下ろせば傷一つくらいは付けられる。

そこまでいけば後は刃に毒でも塗っておけば一瞬だけでも集中が乱れて障壁は無くなる。

流石ねレン。

side out

終わったか。

力だけの単純な相手でよかった。

これがジンなら耳を潰された時点で魔法を使って俺を遠ざけようとするだろうが苦戦を知らないこいつはその事態に混乱するだろうか
らな。

実際俺はこいつに勝ててもジンには勝てないしな。

「レン、やっぱり私の為に勝ってくれたんですね!!」

疲れて何も言う気力が湧かない。

「とりあえずあいつが目を覚ます前にアースガルドに行くぞ。」

「はい

大好きですレン。」

結局、この笑顔に誤魔化されるんだよな。

不意打ち（後書き）

タグにハーレムつけた方がいいのかな？

アースガルド その？ ミナの嫉妬

「ここがアースガルドですか！！」

「大きい……」

確かにここに初めて来れば驚くのも無理はない。

中央にでかい城があってその周りには重役たちの大きな屋敷、そしてさらにその周りには市民たちで賑わっている。

ちなみにあの後、王子は襲われたりしないよう適当なところに隠して置いてきた。

あの様子だとフリッグのことは諦めてないだろうからな。

懸念することは王族の権力にものを言わせてフリッグを探し出さないから不安で仕方がない。

そうなれば面倒過ぎる。

一応俺が勝ったんだから諦めてくれれば一番なんだけどなあ。

「辛気臭い顔してるわね。」

せつかく首都にきたんだかだから楽しむわよ。」

「半分くらいはミナの責任だからな。」

「いいじゃない。」

厄介事が片付いた後の平穩はいつもよりいいものでしょ？」

まあ、それはそうなんだが毎回あんな思いをさせられるのは勘弁して欲しい。

「それを開き直れたら私がレンを変えたことになるから頑張っ

き直ってね。」

このまま流されるのも癪だな。

「いいのか？」

俺が変わるってことはミナを貰うってことだぞ。

言っとくが俺は一度手にした物は絶対に離さないから、ミナが嫌と
いっても愛し続けるぞ。」

「え、あの、その、レ、レン？」

顔を真っ赤にしてうろたえるところは本当に可愛いな。
振り回され分、こっちはからかってやることにしよう。

「ミナは美少女だから他の男の目を引くだろうがそれも許さないぞ。
あんまり目立つようなら監禁して俺だけのものにするからな。」

「レ、レン!？」

そ、その気持ちは嬉しいけど……………」

楽しいなあ。

そう言えば最初にフリッグと会った時もこんな風だったな。

ん？ フリッグ？

「なにをやってるんですか……………」

やばい。

からかうことに夢中になってフリッグのこと忘れてた。

しかも、今の構図を見ると俺がミナに詰め寄ってるように見えてしま
う。

「少し前はアリスばっかりに構ってると思えば次はミナですか？
前にも言いましたがレンが女として見ていいのは私だけですよ。
あんまり度が過ぎると………壊しますよ。」

冷や汗が止まらない。

ここで判断を間違えたら最低で監禁、最悪記憶抹消で一からやり直
しだ。

「とりあえず落ち着け。」

これはからかってただけだ。

フリッグと初めて会った時もやっただろう。」

「私は落ち着いています。」

これ程ないまでに冷静ですよ。

私はミナとは友達でいたいんです。

いいですかレン？」

ここで頷く以外の行動がとれるだろうか？

「それじゃあ誠意を見せてください。」

これはやるしかないよな？

フリッグのヤンデレが日に日に進化してるのは気のせいかな？

「んっ。」

悔しいという言い方はおかしかもしれないがフリッグに限らずミナ
やアリスとのキスは驚くほど気持ちいい。

近づけばいい匂いはするし唇は柔らかく甘い味がする。

「えへへ、大好きですレン。」

なんとかことなきを得たか。

おちおちからかうこともできないな。

side 三十

もやもやする。

あんなふうにいよいよってきたかと思えば簡単にフリッグにキスして。

「レン、ちょっと来て。」

「なんだ？」

「ちょっと話したいことがあるの。」

フリッグ、悪いんだけど近くに変な奴等が来ないか見ててくれない。

「

「なにかあつたんですか？」

「ちょっと嫌な予感がしてね。」

レンと対策考えるから変な奴が来たら教えて。」

「分かりました。」

「レン、ごつちよ。」

「...んっ...」

私だって女だ。

好きな男に詰め寄られたらドキドキだってするし期待だってする。それなのにからかっただけで目の前でキスされれば不愉快に決まってる。

side out

いきなりキスされたが流石に今回ばかりは強く言えないな。

「あゝ、その悪かった。」

「ほんとうにそうおもってるの？」

久しぶりの幼児退行だな。

今回は俺が完全に悪いから何とも言えない。

「からかい半分で言っていていいことじゃなかったな。でもあれは本当のことだからな。」

からかうつもりで言ったが嘘は言ってない。
俺が誰かを好きになるなんて想像できないが、もしそうなら手放さないようにするだろう。

「じゃあ、私にもレンからキスして。」

一日に2人の女、しかも美少女にキスをするなんて。普段なら喜ぶべきところなんだろうが相手が相手だけに素直に喜べない。

「分かったよ。」

相変わらずこいつらとのキスは気持ちいいんだがそれと比例するよ
うに罪悪感も募る。

「レン、大好きよ。」

いくらキスしてもその気持ちには応えてやれないから。

・
・
・
・
・
・
・
・

「フリッグ、アースガルドにいる間魔法で認証をぼかしておいてく
れ。」

「どづいづことですか？」

「あの王子に見つかるとアースガルド内では逃げられないからよ。
フリッグだって観光楽しみたいでしょ？」

「そういうことなら仕方ありません。
しかしどうして魔法なんですか？」

「神術だと神だとばれる危険があるから念の為だ。」

「分かりました。」

とりあえず誤魔化せたかな？

もしあの場面がばれでもしたら間違いなく記憶抹消コース一直線だからな。

後はミナの浮かれた表情を読待なれなければ大丈夫だろう。

「お兄ちゃん、お姉ちゃんたちばっかりずるい。」

読まれてたか。

それがアリスだったことは不幸中の幸いだ。

フリッグはもちろんだがジンにはれても厄介だ。

最近、ミナをやけにくっつけたがるからな殺されるか責任取らされるか分からない。

「許してくれ。」

ああでもないしと收拾できなかつたんだ。」

「あとでアリスにもキスしてね。」

断れないよなあ。

アリスのことだから駄目といえは聞いてくれるだろうが落ち込むアリスは見たくない。

それにしてもなんだこのハーレム状態。

はつきり言つて誰も恋愛対象に取れない。

フリッグは手を出したら最後だし、ミナは恋人というより友達という印象が強いし、なにより手を出そうものならフリッグに記憶を抹消される。

それに、妹であるアリスに手を出す程俺は終わってないしな。

「2人になれた時ならな。」

「約束。」

好意は嬉しいんだが男としてじゃなく兄として見て欲しい。

そうなれば思いつきり構ってやれるんだが今の状況で構いすぎると変な期待を持たせてしまうからな。

俺が死んだときに悲しむことが避けられないならできるだけ長引かないよう一線は引いとかなきゃな。

「そういえばアリスは大丈夫なのか？」

「ここは信仰の街だろ、気分が悪くなったりしないのか？」

「信仰と言っても人それぞれだから。

異端を許さない人もいれば、すべての人を愛する人もいる。

流石に前者ばかりの街だったらつらかったかもしれないけど、そうじゃないみたいだから大丈夫。」

「それは良かった。」

「レン、早く行きましょう!!」

「分かったから、はしゃぐな。

行くぞアリス。」

「うん。」

せつかく来たんだから楽しむとするか。

side フリッゲ

それにしてもすごい人です。

これが首都ですか。

アルフヘイムやヴァナヘイムも凄かったです。が首都は別格ですね。なにより人の数が違いますし各街から特産品が集められて見て回るだけで楽しそうです。

それに一般人でも城の見学もできるそうなので後では是非行ってみましょう。

見ただ目から主神の神殿より大きいです。

流石に神殿と比べると構造や城としての防衛機能は比べ物になりませんがそれでも立派です。

「それにしても信仰というか神への祈りを捧げるみたいな道具が多いな。」

信仰の街なのでそれは仕方ないのかもしれない。

「神って言ってもこんななのにな。」

「それは酷いですよ、レン。」

確かに私はちよつと人の考えに染まってきてますけど立派な神です。まあ、世界の管理とかやったことないんですけどね。でも仕方ないじゃないですか！！

私の力を恐れて誰も近づいてこなかったんですから。

「悪い、悪い。」

あまりにも身近になりすぎてたからな。」

「それなら仕方ありませんね。」

私はもうレンの平穩の一部。

それはいいんですけど、最近自分を抑えられませんか。さっきのことだって本当にミナをからかってただけだと分かっている。でも私以外でそんなことして欲しくありません。

好きになるって大変なんですね。

レンには負担はかけたくないんですが、今の私は確実にレンの負担になっています。

それでも私はこの気持ちを抑えることも抑えるつもりもないんですから。

でも、できるか分かりませんがちょっとは我慢しましょう。

せっかくできた友達を失いたくありませんからね。

アースガルド その？ ミナの嫉妬（後書き）

フリッグのヤンデレ、ミナの幼児退行とクーデレは上手く書けてる
でしょうか？

アースガルド その？ レンの平穩と幸せ（前書き）

今回はちょっとシリアスです

アースガルド その？ レンの平穩と幸せ

いろいろあつたがアースガルドに到着して適当に歩きまわった後、本格的な観光は明日なので早めに宿をとることになった。

「いいところですね。」

「本当、部屋は広いし清潔に保つてある。」

当然男女は別れてるので俺とジンは他の部屋だ。

「それじゃあ、早く休めよ。」

それと、できるだけ目立つ行動は避けるように。」

「分かつてるわよ。」

「おやすみなさい。」

「また明日です。」

「ばいばい、お兄ちゃん。」

さて、俺も寝るとするか。

「レン、ちょっといいか？」

「どうした？」

「ちょっと飲まないか？」

「・・・・・・・・分かった。」

飲まなきゃ話せないような内容か。

ジンがそんな話を俺に持ちかけるとすれば内容はミナだろうな。

・
・
・
・
・
・
・

「とりあえず、乾杯。」

「ああ、乾杯。」

ここの酒は美味しいな。

ヴァナヘイムから取り寄せてるのか？

「大体予想はついてると思うが話がある。」

「聞こう。」

「話つてのはミナのことだ。」

ミナは間違いないくレンのことが好きだ。」

「それを認めていいのか？

大切な妹なんだろう？」

「ああそつだ。」

ミナは俺の大切な妹。

だからこそ、信頼できるレンになら任せられる。」

「考え直せ、あつてまだ2ヶ月だ。

その程度で簡単に大切なものを預けようとするな。」

そもそも、俺はあいつの気持ちに應えるつもりはない。

「そうだ。

たった2ヶ月、それだけの期間で俺とミナを信じさせたんだ。

ミナは頭がいい、だから裏がある奴が近付いても信用しない。

そのミナが信用してる。

そして、俺もレンを信用している。」

「信用してくれるのは嬉しいがはっきり言わせてもらえばミナの気持ちは迷惑だ。」

耐えろ

「それは、どうしてだ？」

「俺が死にたがりだとジンも知ってるだろう？」

その俺にミナの想いは重荷でしかない。

それに、俺がミナの想いに應えれば今の日常は崩壊する。」

耐えろ

「話しはそれだけか？」

「明日も観光するんだ、早めに休もう。」

「俺にとってミナは本当に大切な妹だ。だが、俺にはミナの幸せを祈ることはできても幸せにすることはできない。」

「それは分からないだろう？」

ジンはミナの家族だ。

赤の他人である俺よりミナに近い存在だ。

俺より確実幸せにしてやれる。」

耐えろ

「ミナはレンたちが来るまで退屈だと言っていた。それは境遇に不満を持っていたわけじゃない。

ただ、なにかが満たされなかったんだ。

その何かをレンは満たしてくれた。

今のミナは本当に楽しそうに笑う。」

「それなら今まで通りの友達同士で十分だろう？
なぜ今になってそんなことを俺に言う？」

耐えろ

「俺の存在がレンからミナを遠ざけてると思ったからだ。」

「何度も言うが俺はミナを女としては見ていない。

それジンがいてもいなくても同じことだ。

だから、他の男が現れるまで守ってやれ。」

耐えろ

「そうか。」

悪かったな、いきなりこんな話をして。ただこれは知っておいてくれ。

俺はレンにならミナを任せられる。」

「言っただろう。」

俺にそれは重すぎる。」

耐えろ！！

「悪かった。」

付き合ってくれたありがとな。」

耐えてくれ。

今、俺が言ってしまったら期待させてしまう。

そうなれば、いずれ絶対に悲しませることになってしまう。だから、耐えてくれ。

「あ、ああ……。」

止まれ、止まれ！！

俺がやるうとしてることはその場しのぎだ。

問題の先送りではない。

だから、止まれ！！

「どうしたレン？」

いずれ悲しませるくらいなら、傷が浅い内に切っておくべきだ。こんな罪悪感で俺の友達を悲しませることはあってはならない。いずれ、ミナを任せられる男が現れる。

俺は死にたいんだ！！

「な．．．んでも．．．ない。」

だから耐える、何でもないふりをしろ！！
耐える、耐える、耐える、耐える、耐える、耐える、耐える！！！！！！

「ジン、俺は人間だ。

エルフより確實早く死ぬ。

それでも、ミナを任せられると言えるのか？」

「ああ。

もちろんだ。」

止める、それ以上口にするな！！

「今、俺はジンの期待には応えられない。

だが、いつか俺が本当にミナを．．．．．」

止まれ、頼む、止まってくれ！！

「俺がミナを好きになったら責任は持つ。

責任を持ってミナを幸せにする。

これが俺に今の俺に出来る最大の譲歩だ。」

やっぱり無理だったか．．．．．

俺は結局、甘いだけで優しくなれないな。

「ああ！！

ありがとう、レン。」

本当に最低だな俺は……

side ジン

やっぱり、レンは信用できる奴だ。
きつとあいつならミナを幸せにしてやれる。

「こんなとこでなにしてるの兄さん？」

「喜べミナ。

今はまだ無理だと言ってたがレンがミナのことを好きになったら責任を持つと言ってくれたぞ。」

「えっ？」

驚いてるな。

やっぱりミナも女の子だからな。

「それはレンが言ったの……」

「ああ、俺がミナを任せると言ったら今は無理だがと譲歩してくれた。」

「レンはどこ……」

「ん？」

眠れないからもう少し飲むって言ってたが。」

「兄さんの馬鹿!!」

あのレンがそんなこと言うわけないでしょ!!

レンはどこまでも甘いだよ、そのレンが兄さんの頼みを断れるはずないじゃない!!」

side out

side ミナ

どうしてそこまで無理するのよ。

今頃、兄さんに期待させたって罪悪感に苛まれてる。

私の片思いの為にレンがそこまで傷つく必要なんてないのに!!

「レン!!」

「どうした？」

できるだけ1人になるなって言っただろう。」

そんな泣きそうな顔で言わないでよ。

「どうして兄さんにあんなこと言ったの……」

「もう聞いたのか。」

心配せずともいずれ答えは出す。

それまで期待せずに待っていてくれ。」

「どうして!!」

レンは死にたいんでしょ!!

それなのにどうして期待させること言っの……

それで傷ついているのはレンなのに……」

死にたがりだから。

だからこそ、私やフリッグの気持ちを知っていても期待を持たせるようなことはしなかった。

私たちができるだけ傷つかないように悲しまないでいいように。

いつも他の人のことばかり考えて、自分のことを省みないで傷ついているくせに

「最後に傷つくのはレンでしょ？」

死ぬ最後の時まで、ようやく望みが叶ってもそれじゃあ喜べないでしょう？」

「それでも、俺が答えを出せばジンの思いは報われる。

ジンは本当にミナの幸せを願ってる。

だからこそ、俺が答えを出さないことに苛立ってたんだ。」

「巫山戯ないで!!」

私がそんな答えを望んだと本当に思ってるの!!

私はそんなに弱くない!!

私を幸せにする？

それならまずレンが幸せになってから言いなさい!!」

私はレンに幸せになって欲しい。

死への願望とそれに伴う悲しみへの罪悪感で苦しんでるレンを助けてたい。

私は死ぬなどと言わない。

でも

「せめて、最期の時くらい、レンの望みが叶う時くらい幸せでいてよ……」

皆勘違いしてた。

平穏な日常が幸せ。

それは誰も傷つけず、自分も傷つかないから。

それがレンが唯一心が休まる時。

レンがそれを失ってしまつたら絶対に壊れる。

それが風化なんてするはずがない。

なにもない日常があまりにも安心できるから幸せと勘違いしてる。

今のレンの本当の幸せは死だけだ。

「ごめんな。

俺が甘いからミナを悲しませてる。」

どこまで、どこまで甘いのよ。

自己犠牲で人を助けたって自己満足の偽善でしかない。

それを分かっていながら

「決めた。

もう容赦しない。

私はレンを変える。

レンが自分の幸せを見つけて傷ついてもその幸せを離さないように
変えてみせる。」

その末に選ぶのが私じゃなくてもいい。

それでも私は尽くす。

大好きな人が幸せでいられるように。

s i d e o u t

本当の幸せ。

俺の幸せは何も変わらない平穏な日常だ。
でもそれは、傷つかなくて済むから幸せなのか？

「レンは怖いよ。」

他人を傷つけることで自分が傷つくことを極端に怖がってる。

だから、なにもない日常が幸せだった。

でも、それは逃避よ。

幸せなんかじゃない。」

そうなのか？

俺は勘違いしてたのか？

「俺の幸せは何なんだろうな……」

「それを一緒に探してあげる。」

レンが勘違いだって気付いても変わらない。

私は力の限り振り回してその時その時を楽しんで、いつか幸せを見
つけられるように。」

「………そうか。」

本当にミナはいい女だ。

本気で幸せになって欲しいと思う。

なら、俺は変わらないといけないのか。

「ミナ、俺はまだ答えは出せない。

だが、百年で必ず答えを出す。

それまで頼む。」

「ええ、任されたわ。」

綺麗だな・・・

アースガルド その？ レンの平穩と幸せ（後書き）

作者的に一番お気に入りのキャラはミナです。

アースガルド その？ 変わらぬ想い（前書き）

総合PV10万、ユニーク1万突破！！

読んでくれている方々、ありがとうございます。

そして、これからもよろしくおねがします

アースガルド その？ 変わらぬ想い

side ミナ

とりあえずあの後、レンは部屋に戻って行った。

たぶん兄さんと話をつけるつもりでしょう。

それなら、私も話しをつけとかなきゃね。

「フリッグ、アリス、ちょっと話があるんだけど。」

「なんですか？」

「どうしたのミナお姉ちゃん。」

フリッグが暴れ出さなきゃいいんだけどね。

「もちろん私たちの話って言ったらレンのことよ。」

「レンがどうしたんですか？」

「レンが百年の間に答えを出さずと言ってくれたわ。」

「レンがですか？」

やっぱりおかしいと思うわよね。

まったく兄さんは。

「私もおかしいと思って問い詰めたら兄さんがレンに私のことを頼んだからだそうよ。」

「……………消します。」

やっぱりこうなったか。

本当に厄介ねこの娘。

「落ち着いて!!」

話しはまだ終わってないわ。」

「レンを苦しめる存在は許せません。

今のレンに答えを出すなんて言えるはずありませんから。」

「アリスもお姉ちゃんに同感だよ。」

この2人を抑えられる存在ってレン以外にいるの？

「だから落ち着きなさい!!」

私もそう思ったから撤回させたわ。

だけど、そこで気付いたの。

レンにとって平穩は幸せでも何でもない。

レンの平穩は傷つけることで傷つくのが怖くて唯一心が休まる場所。だから幸せだと勘違いしてる。

レンは逃げてるのよ。」

「……………やっぱりそうでしたか。」

フリッグも気付いていたのね。

そりゃそうよね。

フリッグが一番レンの近くにいる存在だもの。

「それでも、レンは答えを出してくれると言ってくれた。ようやく前に歩き出そうとしてくれてる。だから私は前に進む手助けをしてあげたい。レンが傷から逃げ出さないように。」

例え、それがレンを苦しめることになったとしても。それはきつとレンが変わる為に必要なことだから。

「アリスは変わらないよ。」

元々アリスはお兄ちゃんの前で平穩なんてどうでもいい。

アリスはアリスの事を中心に考えてもらえればそれでいい。お兄ちゃんがそうなってくればアリスの眷族としてずっと一緒にいてもらう。」

「私も変わりませんよ。」

例え今の平穩が逃避だとしても、いずれ本当の幸せにしてみせます。それに傷つくこともですがレンは信じることも怖がっています。私は変わらずレンに永遠を信じさせるだけです。」

意思は変わらずか。

やっぱりそうでなくちゃね。

「私も変わらない。」

レンを振り回してたくさんを経験してもらおう。

その上で傷つくことも悪くないものだって教えてあげる。

そして、その人生を全うさせて死なせる。

その最期の瞬間に幸せだったと言わせるために。」

レンがどうであろうと私たちは変わらない。

結局、それぞれの方法でレンを手に入れるだけ。

「だから、兄さんのこと許してくれない？」

「……分りました。」

レンだってジンを傷つけることを望んでないでしょうし。」

「もう一つ。」

私やアリスがレンに構ってるときに独占欲を我慢して欲しいんだけど。」

それがある限りレンは私とアリスを選べないしね。」

「……善処します。」

できれば、私を見てないところでお願いします。」

私の目の前でいちゃつかれたら我慢できそうにありません。」

ここが妥協点ね。」

これ以上は無理でしょう。」

「ありがとう。」

それじゃあもう休みましょうか。」

side out

side フリツグ

ミナに一步リードされましたね。」

でも負けませんよ。」

レンを変えて手に入れるのは私です。」

しかし、約束してしまったからには多少は我慢しないといけません。」

ね。

できるでしょうか？

ミナの方はアリスを愛でてれば我慢できるかもしれないですけどアリスの方はどうでしょうか？

side out

side アリス

ミナお姉ちゃんがちょっと有利かな。

とりあえずお兄ちゃんには妹としてでもいいから目を離せない存在になろう。

アリスも後5年もしたらお姉ちゃんたちに負けなくらいになるはず。

女として見てもらうのはそこからいい。

今はお姉ちゃんたちに取られないようにいっぱいアピールしとかなきゃ。

負けないよ。

side out

気が重い。

あんなことをミナに約束したからにはジンにも言っとくべきなんだがジンの約束はしばらく果たせそうにない。

それでも、いい加減前を向くと言ったからな。

「ジ」すまん、レン！」「は？」

なぜ、いきなり土下座？

そもそもこの世界に土下座ってあったんだな。

「どうしたんだ？」

「すまん。」

俺はお前に甘さに付け込むような真似をしてしまった。

もう、俺との約束は気にしなくていい。

悪かった。」

「気にするな。」

俺も今回の件で気付かされたこともある。

それに、いずれ答えは出す。

それはジンが望むものじゃないかもしれないけどな。」

「それこそ気にするな。」

レンが出した答えならミナも納得できるはずだ。

それにレンは俺の友達だ。

どんな答えを出そうと俺は応援すると約束する。」

「それじゃあこの話は終わりだ。」

明日は一日観光するから休もう。」

「そうだな。」

これから変われるのか分からないがとりあえずあの3人に任せっぱなしってのは止めよう。

俺は歩き出したぞ、舞華。

・
・
・

・ ・ ・ ・ ・
アースガルド滞在2日目

ジンとは和解したからいいが問題はフリッグだ。
いざ、会ったら即監禁になったら笑えない。

「おはよう。」

「おはようございます。」

「おはよう。」

「おはよう、お兄ちゃん。」

「おや？」

「なんだこの普通の反応。」

「もしかし、ミナは何も言っていないのか？」

「心配しなくても2人にはちゃんと書いてあるわよ。
最終的にはフリッグも納得してくれたわ。」

「レンがどうであれ今まで通りと変わりありませんよ。」

よく説得できたな。

俺だったら怖くて何も言えない気がする。

「みんな、悪かった。

俺はミナの兄だからやっぱりミナのことを推すと思うがレンが選んだ相手なら応援する。

もう出過ぎた真似はしない。」

「次は許しませんよ。」

とりあえずまるく収まったか。

俺が原因でなくても皆には仲良くして欲しい。

ここだけ聞くと本当に俺最低じゃね？

堂々と三股発言に加え、その中の1人の兄にも分かって欲しいって
・・・

流石にあの王子は無理だが他にいい男いないものか・・・

side アリス

今まで通りの空気になってよかった。

やっぱり、お兄ちゃんを取り合ってもお姉ちゃんたちとは喧嘩したくないしね。

そつえば、アリス昨日キスしてもらってないや。

「お兄ちゃん、血貰っていい？」

「いいぞ。」

お姉ちゃんたちも何度も見た光景だから警戒してないね。
それじゃあ、いただきます。

「んっ。」

「こら、アリス!!」

「駄目だよお兄ちゃん。」

騒いだら気付かれちゃう。

それに昨日キスしてなかったからその分だよ。」

「はあ。」

2人の時って言っただろう。」

そう言っているにも許してくれるんだよねお兄ちゃん。

やっぱり欲しいなあ。

ずっと一緒にいて欲しい。

お姉ちゃんに影響されちゃったかな？

「それじゃあ、いただきます。」

血も美味しいし、後百年……

頑張ろう!!

side out

side ミナ

それにしてもアリス油断ならぬわね。

他の2人は気付いてないみたいだけど血を吸うふりしてさりげなくキスするなんて。

今は妹として見てるからいいけど成長したら厄介だわ。

今のところ私がちょっと優勢だからってうかうかしてられない。

まあ、今回は許してあげる。

せっかくの観光だしね。

「それじゃあ今日どこに行く？」

「お城を見てみたいです！！」

王子から狙われてるって自覚あるのかしら？

でも、他に意見は出ないみたいだし

「それじゃあ見に行きましょうか。」

けど、フリッグはちゃんと顔を隠しておくこと。」

あの王子のことだからフリッグとレン以外の顔なんて覚えてないでしょうし、こう言っただけでレンって目立つような顔立ちじゃないし大丈夫でしょう。

「分かってます。」

人の王が住むところ、楽しみです。」

テンション高いわね。

城だったら規模は小さいけどアルフヘイムにもあるのに。

まあ、あそこは会議で使ったり役員が仕事するときに使ったりするものだから、実際にはだれもすんでないし、ただのシンボルみたいなものだけ。

「それじゃあ行くわよ。」

どんなハプニングが待っているか楽しみだわ。

side out

あの夜ミナに平穩は幸せじゃないと言われたが何年もそう思ってたんだ。

幸せじゃないとしても平穩は嫌いじゃない。

何が言いたいかというと、俺が変わったとしてもやっぱり平穩な一時つてのは必要だと思っただよ。
それなのに

「なんだこれは……」

城に向かう途中に張り出された掲示

内容は

フリッグ・カザミネの情報提供者に褒美を取らせる。

なんという権力の濫用。

いくら王子だからといってこれは許されるのか？

別に俺たちは犯罪を犯したわけじゃないんだぞ、これだけ見たらそう勘違いされても無理ないぞ。

「派手に来たわね。」

「念のために偽名で宿取ってよかった。」

顔は似てはいるが所詮は似顔絵。

顔を知られないようにしてるフリッグの顔が分かるはずないし大丈夫だと思っただが

「城に行くのは止めないか？

かなり嫌な予感がする。」

予感なんて生易しいものじゃない、これはすでに確信に近い。

「気にしすぎですよ。」

「そうよ。」

それにこんな面白そうなことを逃す理由はないわ。」

くっ、やっぱり避けられないのか？

そうだ、この2人だけ行かせるといっつのはどうだ？

それなら少なくとも俺は巻き込まれることはないはず……………無理だな。

この2人が巻き込まれた時点で俺も道連れだ。

こうなったら何もないうよう祈るしかないか……………

「大丈夫、お兄ちゃん？」

ああ、俺の癒しはアリスだけだ。

アリスが俺を兄として見てるなら抱きしめたいくらだ。

「大丈夫だ。」

何事ありませんように……………

こう言っつて何もなかったためしがないんだがな

アースガルド その？ 変わらぬ想い（後書き）

伏線を張ってみました。

いつか回収すると思いますので期待せずに待っていてください

アースガルド その？ 神の力と人の力

side グレイ

「ようやく僕の花嫁を見つけました。

次こそは手に入れて見せます。

どうか見守っていてくださいわが神よ。」

「熱心だな、グレイ。」

「父様、僕は今回のお告げで花嫁を見つけました。そして今、探しだしているところです。

名をフリッグ・カザミネと言います。

父様、僕たちの仲を認めてくれますか？」

「お前が連れてきたものならもちろん歓迎しよう。しかし、神の教えに背くことがないようにな。」

「もちろんです。」

必ず、幸せにしてしみせます。

「今、フリッグと言ったかしら？」

「あ、あなたは……。」

「ええ、あなたの想像通りこの世界を治める神よ。」

side out

おかしい。
なぜ何も起きない？

何も起きないのはいいことなんだがここはあの王子がいる城だぞ。
それなのに、何も起きないなんてことがあるはずがないのに

「流石、王様が住む城ね。
アルフヘイムとは比べ物にならないわ。」

「人が作るものは芸術性があつて本当に素敵です。
架けられている絵画も調和の取れた内装も頭の固い神に見習わせた
いものです。」

「神聖な気配に当てられて気持ち悪い。」

「いい城だ。」

これを攻めるのはなかなか骨が折れるな。」

今、俺たちは城の外へと出ようとしている。

これは本当に何も無いのか？
あと一歩で

「止まってください。」

「どうしたのフリッグ？」

フリッグだけじゃなくアリスも警戒態勢に入ってる。

だが、ジンが気付けない相手となるとかなりやばい相手だな。
期待させて落とすか。

なかなか鬼畜なやり方だな。

「また会いましたね。」

「私は会いたくありませんでしたけど。」

王子様？

ただ力だけの奴にジーンが反応できない訳がない。

「それと、後ろに隠れても丸分かりですから姿を現わしてください。」

後ろ？

なにもないようにしか見えないが。

「流石、僕の花嫁だ。」

どうやら、君にも神が見えるみたいだね。」

「お兄ちゃん、下がって。」

お姉ちゃんと同じ気配がする。」

「本当に神がいるってのか。」

やっぱり何事もなくてわけにはいかないようだな。

「流石、一夜にして幾多の神を滅ぼした”鮮血の女神”ね。」

「ああ、貴女でしたか。」

ここは貴女が管理しているところだったんですね。」

鮮血の女神？

過去に何かあったのか？

「驚いたわ。」

まさか、貴方がここにいるなんて。

この子が教えてくれなければ一生気付かなかったかも知れないわね。

「

「くだらない話は終わりですか？

私はまだ観光を楽しみたいのですが？」

「相変わらずね。」

それにしても、貴女ほどの存在が人と一緒にいるなんてね。

それも、1人は吸血鬼じゃない。」

見えないのに声だけが聞こえる。

どうやら、本当に神がいるようだね。

だからと言って俺がどうこうできる問題じゃないんだが。

「アリスは私の大切な妹です。」

侮辱するというなら、また、叩き伏せますよ。」

「私があこの時のままと思っているなら大間違いよ。」

私は貴女を殺すために力を磨いてきた。

あの時からずっと。

ようやく、私の願いが叶う。

ここが貴方の最期よフリッグ。」

「なにかと思えばそんなことですか。」

器量が狭いですね、シェヴン。」

素人の俺でもやばいと分かる。

神同士がこんなところで戦ったらとんでもない被害が出るぞ。

「減らず口もそこまですよ。

消えなさい!!」

「神よ、僕たちを祝福してくれるはずでは!!」

「ええ、私に屈服させたら貴方の思う通りにしていいわよ。

だから、貴方はその人たちを相手にしてなさい。」

あの馬鹿王子、利用されてるって気付かないのか!!

「アリス、行けるか?」

「前のあれだったら大丈夫だけど、今のあれは力が増してる。

それに、神術相手だったら相性悪いから厳しいかも。」

どうする。

ここは、あいつのホームグラウンドだ。

地形の理はあいつにある。

それに、どういう原理か知らないがフリッグとシェヴンが消えた。

「僕の花嫁の為に消えてください。

それに、その男には前は負けてしまったから今度は容赦しないよ。

「
最悪の状況だな。

今のあいつにまともにダメージを与えられるのはアリスくらいだ。」

そのアリスは神術と相性が悪い。

「レン、俺とアリスで時間を稼ぐ。

その間にミナとあいつを倒すための策を考えてくれ。」

「よろしくね、お兄ちゃん、ミナお姉ちゃん。」

「………3分だ。

その間にあいつを倒す策を立てる。」

「任せろ。」

「後で褒めてね。」

頼んだぞ。

「レン、状況は確認してきたわ。

この広間には今誰もいない。

フリッグとあの神もどこかに行ったみたい。」

いくつか柱があるとはいえ姿を隠すには小さすぎる。

障害物にもならないだろう。

それに天井も高い。

つまり、ほぼ何もない平地だと考えていい。

「今のあいつにまともにダメージを与えることができるのはアリスだけだ。

しかし、アリスは神術と相性が悪い。」

「あの神に強化されてるってことね。」

フリッグが倒すまで粘ればいいんだけど。」

「フリッグが勝てるか、勝てたとしてどれくらいの時間がかかるか、不確定要素が多すぎる。」

どうにかして、アリスから意識を逸らせればいいんだが……。」

意識を逸らすには相手の意識を他に向けるしかない。

意識を逸らす……。

「「それだ!!」」

「レンも思いついたみたいね。」

「ミナと同じなら心強い。」

後はこの作戦を2人に伝えるだけだが

side アリス

いくら力を増したからってアリスのようにお姉ちゃんから使い方を指導されているわけじゃない。

だから、避けるのは難しくないけど見境なしに攻撃されたとてもしゃないけど近づけない。

それなら

「ブラッティランス」

遠距離からの魔法ならどう？

「無駄だよ。」

その程度の攻撃で神の加護を受けた僕は倒せない。」

やっぱり無理。

ジンさんじゃ近づくことはできてもダメージを与えられない。せめて、魔力を練れる時間さえあれば。

「アリス、ジン、目を閉じろ！！」

流石お兄ちゃん、きっかり3分だね。

side out

いくら馬鹿でも、もう閃光弾は通じないか。

だが、閃光が収まるまでの一瞬だけは隙ができる。とはいっても、全力で防御に回るから攻撃は無理だけどな。今回はジンとアリスを呼び戻すための時間稼ぎだ。

「アリス、ジン、時間がない一度で覚えるよ。」

side ジン

「これが俺たちの作戦だ。

この作戦の鍵はジンだ。」

「任せろ。

最近活躍してないから、俺にも花を持たせろ。」

絶対に成功させて見せる。

愚かな俺を許してくれた友の期待にこたえる為。

「それじゃあ行くぞ、あの馬鹿王子の目を覚ましてやる。」

side out

「また、君か。」

「ああ。」

悪いが今回も勝たせてもらっせ。」

「それはないよ。」

神からの加護を受けた今の僕に君たちの攻撃は通じない。

唯一の頼みである吸血鬼でも近づけなければ僕は倒せないだろう？」

「さあ、どうだろうな？」

とりあえず俺が言いたいのは人を舐めるなよ。

人の英知は時に神さえ超える。」

「なにを馬鹿な。」

神は全知全能の存在。

人は神を信じ生きているからこそ繁栄してきたんだ。」

流石は信仰の国か。

ここまで行くとは狂信だな。

だがな、神は世界のバランスをとるだけの存在。

どれだけ貧しくても、どれだけ危機に晒されても、人はその知恵と
勇気で今まで生きてきた。

考えることを忘れ、神に頼り切っているお前に人は導けない！

「証明してやるよ。」

人を治めるのは結局人だ。

神に頼り切ってるお前は王にはなれない。」

「戯言はここまでにしよう。

僕の将来のため、消えてくれ。」

s i d e ジン

人を治めるのは人か。

俺もいずれ上に立つ者としてここは負けられないな。

「行くぞ、ジン!!」

「おう!!」

作戦の第一段階、それは

「また、それかい？

いい加減無駄だよ。」

それくらい織り込み済みだ。

だが、一瞬でも目は閉じられる。

その隙に、俺とレンが肉薄する!!

s i d e o u t

あいつは油断はしないと云った。

それはそうだろう。

生れて初めての敗北。

それが、ただの人間ならなおさら警戒してしまう。
こいつはアリスと同様俺のことも無意識のうちに警戒する。
その俺が肉薄すれば嫌でもアリスから意識が離れる。

「はああ!!」

「そんな攻撃が通じると思ってるのかい？」

やっぱり無理か。

「後ろがガラ空きだ!!」

「愚かな。」

これが君の作戦かい？
例え背後でも神の力に死角はない。」

「ジン!!」

「これで1人だ。」

次は君だ。」

おしゃべりに付き合ってくれてありがとうよ。

「お兄ちゃん!!」

side ミナ

レンがいる限りアリスへの意識はかなり逸れる。

私なんて眼中に入っていないだろうけど、その余裕後悔させてやるわ。

「アリス、行くわよ。」

「うん。」

私の役目はアリスへの魔力供給。

これでも補助系統の魔法の腕なら一級だ。

レンがあいつの気を引いている間に陣を描き大気中の魔力をすべてアリスへと収縮させる。

すべてはこの一撃にかかっている。

レンが注意を引けても1分が限界。

急いでアリス。

side out

side アリス

1分。

たったそれだけの時間である神術を破る魔法を用意する。

普通ならまず無理。

神から強化された神術の守りは常人の魔力の何百倍もある。

でも、アリスは真祖の吸血鬼。

人の中でも頂点に立つ者、生まれながらの絶対者。

例え十年しか生きてないとしても、最強のお姉ちゃんからの指導を受けてる。

だから、これだけ御膳立てされて負けるわけにはいかない。

「お兄ちゃん!!!」

これが人の力だ!!!

side out

これが作戦の第二段階、いけるか。

「ブラッティランス!!!」

血のように赤い槍と神々しい光との衝突。

「神の力の前に人の力など無力だ!!!」

俺たちの最強の攻撃を受けきるとはやはり神の力は強大だよ。
だがな

「前に言ったよな。

不意打ちつてのは相手に気付かれず、一撃で相手を仕留めることだ
つてな。

そう言った俺がああも派手なアリスの攻撃を決め手に使うと思うか
？」

「なにを、がつ!!!」

「終わりだ。

お前は人の力を侮りすぎたんだよ。」

終わったか。

フリッグは無事だろうか。

side ジン

「作戦通り、いい仕事だった。」

「ああも上手く行くとは流石レンとミナが立てた作戦だな。」

今回の作戦の種明かしをすると、まず俺とレンがあいつの意識を引きつける。

レンが言うにはレンが前に出れば無意識に警戒するそうだ。

そこで俺が背後から攻撃し、反撃を受ける。

その反撃で倒されたふりをし、時間を稼ぎアリスの一撃で仕留めると思わせる。

レンが言うにはここが一番の綱渡りだったらしい。

背後から攻撃する俺に反撃が来ても、それを気絶したように見せかけることができるか。

なかなか難しかったがなんとかあった。

いくら神の加護を受けてるとはいえあのフリッグを超える素質を持つアリスにミナの補助、これだけ揃っていれば流石に全力を防御に回さないと防げはしない。

そこで、完全に認識外だった俺がアリスの魔法に意識を回している隙に仕留める。

アリスから意識を逸らすことは難しいなら、すべての意識をアリスに向ける。

よくもこんな作戦を本当に3分で思いついたもんだ。

side out

アースガルド その？ 神の力と人の力（後書き）

レンたちを勝たせるのに苦労しました。
おかしくないですよね？

アースガルド その？ 最強の定義

side フリッジ

「ここは・・・」

「ここは、私が管理する世界の裏側。
ここならだれにも邪魔はされない。」

「私たちがぶつかれば世界の均衡が崩れますよ。
そんなことすら分からない程落ちぶれたのですか？」

「ふふっ、あそこには貴女の大切な仲間がいるんでしょう？
そうなれば、貴女は手を出すことはできないわよね。」

つまり、レンたちは人質と言うことですか。

「私はあなたを殺せれば世界なんてどうでもいい。
だから、貴方と違って加減なんて必要ない。」

どこまで醜態をさらせば気が済むんでしょうか。
これを拝めている人が可哀相です。

「そうですね。」

さっきも言いましたけど私は観光の続きがしたいんです。
貴女ごときの為に使う時間がもつたいないです。」

まったく、くだらない嫉妬のためにレンと一緒に時間を潰されたと
思うとその代わりにレンを押し倒したいくらいです。

でも、最初はレンから求めて欲しいですね。
できれば最初だけじゃなくずっとがいいですが。
はあ、レンに強引に奪われるシチュエーションが一番ですね。

「あの時もそうやって見下してくれたわね。
10万年も生きていない小娘に見下されるなんて屈辱の極みだった
わ。

でも、今回は私が貴女を見下してあげる。」

まだ続いていたんですか。

せっかく、どうやったらレンが押し倒してくれるか考えていたんで
すがいい加減耳障りですし時間の無駄ですね。

「御託は結構です。

無駄な時間を取らせないでください。

アースガルドは今日を入れてあの2日しかないんですよ。」

3日後にはアルフヘイムへ帰っていつも通りの日常にもと通りです。
それはそれで悪くないんですが、アリスは私たちの娘という位置で
納得してくれないですかね。

もちろん私とレンの娘です。

でも、レンとの子供も欲しいですね。

レンが望むなら2人や3人でも大歓迎です。

「消えなさい!!!」

む。

流石に世界の均衡を壊さないようにしながら戦うのは難しいですね。
それなら見せてあげましょう。

私が”鮮血の女神”と呼ばれた理由を。

「最強、これはどういふことを指すと思いますか？」

「それは誰にも負けないことよ。

貴女を倒して私が最強になる。」

はずれです。

「最強というのは誰も寄せ付けず圧倒的な力を持つからこそ最強なんです。」

そこに勝敗など関与することはありません。」

見せてあげましょう。

私の世界を。

「なにを・・・したの・・・」

「そういえば見たことなかったんでしたね。

これこそ私が”鮮血の女神”と呼ばれた理由ですよ。」

世界の創造。

今はもういない原初の存在、ユミルのみが使ったとされる究極の術。それは悪魔の身でありながら神力を持ち、数多の神と悪魔を生み出した存在。

その遺体から今存在している世界が作られた。

そして、膨大な神力と魔力を有する私のみに許された術。

「ここはすでにあなたが管理していた世界ではありません。

ここは私が創り出した世界。

ここには何もなく、なにも要りません。」

ここに必要なのは殺戮のみ。

私がこの世界にいる限り敗北はあり得ません。

「世界を作ったからって何なの。」

そんなもの壊してあげる。」

愚かですね。

そんなことができれば既に私は死んでいます。

「どうして……。」

「言っただけですよ。」

ここは私が創った世界。

私がすべてを決定し、創り上げた世界。

故に、ここにいる限り私は絶対です。」

あらゆる法則すら通じず、私の思う通りの世界となる。

私が思えば大地は牙となり敵を喰らい、天は顎となりすべてを押しつぶす。

「ここでは私以外に神術は使えません。」

これが最強というものです。」

あらゆる努力すら掻き消す程の圧倒的な力。

だからこそ、私は常に1人だった。

でも、今は

「仲間を待たせているので、消えてください。」

・ ・ ・ ・ ・
さて、レンたちは無事でしょうか？

「久しぶりだな、フリッグ。」

「こんなところいていいんですか？
主神・オーデイン。」

「いきなり行方をくらました問題児が現れたと聞いてな。
駆けつけてみれば珍しいものを見た。」

確かに以前の私ではありえないことですね。

「まさか、お前が敵を殺さないとは。
どんな心境の変化だ？」

可能な限り殺しはしない。
レンの信条ですからね。

レンの傍にいる者としてレンの信条は曲げられません。

「たまには人の世に下りてみれば分かるかもしれませんよ。」

「お前を変えた存在か。」

それは興味をそそられるな。」

「分かっているとありますが私の日常を脅かすことがあれば神界を滅ぼします。」

あの時はあくまでも自己防衛。

襲われたから返り討ちにしただけです。

けして自分からは動いていませんがこれ以上干渉してくるといふならば容赦はしません。

「いいだろう、私もお前を敵には回したくない。

この世界を管理する神も変えておく。」

それは助かりますね。

いちいち潰すのも面倒くさいですし。

「話は終わりですね。

それでは私は仲間のもとへ戻ります。」

「すまなかった。

我が娘よ。」

もう怒っていませんよ、お父さん。

side out

俺としたことが馬鹿王子を倒した後のことを考えてなかったな。

「動くな!!--」

城の中であれだけ派手に戦えば人は集まってくるし、王子が気を失っていてそこにいる俺たち。

偶然通りかかった観光客で通ればいいんだが無理だよなあ。

「どうするレン？」

「どうもこうも、相手は王子だったんだ。

どう転んでもまずい。」

「それじゃあ貸し1つね。」

「は？」

『僕の花嫁の為に消えてください。』

それに、その男には前は負けてしまったから今度は容赦しないよ。

』

これはあの馬鹿王子の抜け目ないな。

「聞いたでしょ？」

これは正当防衛で私たちが仕掛けたわけじゃないわ。

それに王子も気を失っているだけで死んでないから医者に見せることをお勧めするわ。」

「何の騒ぎだ。」

見ただけで分かるな。

あれは王だ。

「なにかあつたんですかレン？」

いいタイミングで戻ってくれた。

「グレイ王子が私の妹を無理矢理連れ去ろうとしたことを止めようとしたら殺されそうになりました。

そこで、その措置として意識を奪わせてもらいました。

証拠はこれです。」

本当にミナがいてくれて助かった。

証拠がなければ信じてくれなくても無理はないから。

「なるほど。

我愚息が迷惑をかけた。

詳しい話を聞きたい、謁見の間まで来てもらおう。」

今は証拠があり警備員の前だ。

これだけの人が聞いていたならもみ消しも難しいし証人にもなる。わざわざ、相手の土俵に行つてやるほど馬鹿じゃないんでね。

「詳しい話も何もありません。

私の妹、名をフリッグ・カザミネと言いますがアルフ Heim からアースガルドに向かう途中の街でグレイ王子と遭遇しいきなり妹を嫁に欲しいと言ってきたのですが妹には既に心に決めた人がいるので何度も断つたのですがそれでもしつこかったので、アースガルドへ逃げたんです。

そして、今度は街中に犯罪者の指名手配のように妹の捜索を行い、観光の為、城に来てみれば力づくで奪われそうになり先程説明したとおりになります。」

これで証人はできた。

ミナのことださっきの証拠は複数持っているだろう。

「迷惑をかけた。」

その代わりに褒美を取らせよう。」

「いえ、グレイ王子に言い聞かせてもらえればそれで結構です。」

「我に恥をかかせる気か？」

「うち、やっぱりあの馬鹿王子とは違うな。」

「分かりました。」

この後も予定がありますので手短にお願いします。」

side ミナ

あの後、私たち全員は個室に通されて王様と対面。まさか、王様と個人で対面するとは思わなかったわ。流石レン退屈しないで楽しいわ。

「やってくれたな。」

「なんのことでしょう?。」

あれだけの人前で暴露されたら広まるのは時間の問題だろう。

「食えん奴だ。」

「用件は分かっているな。」

「今回のことは口にしないということでもいいですか？」

「そちらから要望があれば応えるが。」

今頃、城内では箝口令が引かれているところだからね。

まあ、人の口に戸棚は立てられない。

それでもやらぬよりはましだろうけど、張本人を黙らせない限り意味がないからね。

「グレイ王子を言い聞かせてくれれば結構だと言ったはずですが。」

レンとしてもここは貸し一つの状態で引いておきたいところだろうけど

「それでは気が済まん。」

これを言われたらどうしようもないのよね。

「では、迷惑料として城の立ち入り禁止の所を見せてください。」

は？

side out

「ここが王の間ですか！！」

あの後結局、迷惑料として城の立ち入り禁止の観光と金貨百枚を渡された。

貸し一つの状態で出来るだけ干渉を避けるつもりだったが簡単には

いかないか。

「凄いですよレン!!」

この構造、装飾、空気、この城を建てた人は天才ですね!!」

はしゃぎ過ぎだ。

たしかにこの空気を出せることは凄いと思う。

ここも人の英知の結晶の産物。

そういえば、あの神はどうなったんだ？

「レン、早く次に行きましょう!!」

まあ、どうでもいいか。

「お兄ちゃん、抱っこして。

ちょっとつらい。」

「今回はアリスには頑張ってもらったからな。」

「ごめんね。」

アリスがもう少し強かったら良かったんだけど。」

「気にするな。」

それに最後の一撃は殺さないように加減してくれただろう。」

「気付いてたの？」

フリッグさえ超える素質を持つアリスがミナの補助を受けた状態で
の一撃を神の加護を受けたとはいえ防げるはずないからな。

「本当にアリスはいい子だな。」

それにしても今日は疲れた。

明日は平和な観光ができますように。

アースガルド その？ 最強の定義（後書き）

気付いている方もいるかと思いますが街の名前と神の名前はすべて
北欧神話に登場する名称です。

アースガルド その？ 王の器

「疲れた。」

「確かに今日はしんどい戦いだつた。」

結局あの後もフリッグに連れ回されて城中を隅々まで見て回った。その間アリスはずっと背負っていたから余計に疲れがたまる。

言っておくがアリスは決して重いというわけじゃない。

言うなれば人が重いんだ。

それにしても、金貨百枚つてそれはそれは重い。

札のありがたみが滅茶苦茶実感できるな。

「流石に明日は大丈夫だろう。」

いくらなんでも、そこまで性急に動きを見せるとは思えないしな。」

「分からないぞ。」

なんといつてもレンがいるからな。

なにかあつても不思議じゃない。」

俺だつて好きで厄介事に巻き込まれているわけじゃない。

嫌でも向こうから寄ってくるんだよ。

「とりあえず今日は休もう。」

観光は明日までで次の日にはここを出るんだ。

今日苦労した分、明日楽しもう。」

金はあるしな。

「そうだな。」

明日は何事もありますように。

・
・
・
・
・
・
・
・
・

「レン・カザミネという奴はおるか？」

この世に神はいないのか。

「呼びましたか？」

一応いるんだつたな。

それじゃあこれは運命というやつか？

厄介事から逃げられないという運命。

だが、俺は運命なんて認めないぞ。

見たところ顔を知らないみたいだから、このまま離れてしまえば

「そのの、レン・カザミネという者を知らぬか？」

なぜ、そこで俺を指名する。

やはり、逃げられないのか……

「知りません。」

「そうか。」

この宿にいるという情報だったが、既に発った後だったか？」

よし、この隙に逃げよう。

俺が関わる美少女は必ず厄介事を運んでくる。

それが、高飛車だったらどんな無茶振りをされるか分かったもんじゃない。

「グレイを倒したものがどんなものか気になったのだが仕方あるまい……」

王子の次は姫か！

これに見つかつたら終わりだな。

不幸中の幸いとして顔を知られていないのは助かった。

「なんて言うと思ったか？」

は？

「貴様がレン・カザミネであろう。」

また期待させた落とすのか……

「人違いです。」

「くだらない言い訳で時間を取らすな。」

これは詰んだな。

「はあ、それで姫が何の用です？」

「あのグレイを倒した者を見てみたいと言ったであろう。どんな豪のものかと思えば意外と細いな。」

あれを力で倒すことができないなんて、それこそ神か人の中でも頂点に立つ者だけだ。

「満足したならもう行っていいですか？」

「まあ、待て。」

力で倒してないというのなら、智でグレイを倒したのであろう。それに父上に対しひるむどころか貸しを作ろうとしたその度胸。どうだ、妾の夫とならぬか？」

落ち着け俺。

ここで判断を誤ったらもう無理だ。

この時点で後ろからの殺気が洒落になってない。

ミナとアリスは許せたとしても流石にこれ以上増えたら本気で記憶を消される。

「謹んでお断りします。」

「そうか？」

妾は別に愛人は許可するぞ。」

物理的に突き刺さってくる視線には慣れたつもりだったがこれは別格だ。

「王族と籍を入れるつもりはありません。」

「そうまで言われた仕方あるまい。

では、妾の側近とならぬか？

そなたの智は必ず役に立つ。」

「お断りします。

今の生活が気に入ってるので。」

話しが分かる相手でよかった。

これがあの馬鹿王子のような奴だったら終わってたな。

「ふむ、そこまで言うのなら潔く引くとしよう。

妾の名はフリユネ・セシリア。

王位継承権第1位、なにかあれば訪ねて来るといい。」

つまり、次の王はこいつか。

「一つ聞いてもいいですか。」

「なんじゃ？」

「この街は信仰の街だと聞いています。

姫は神を信じますか？」

「ああ、神は居るぞ。

ただし、神は何もしてはくれぬがな。」

「ありがとうございます。」

「ふむ、やはり妾のもとへと来ぬか？」

「お断りします。」

この人が王となるなら問題はないだろう。
確固たる己を持つてる。
できれば敵対はしたくないな。

side フリユネ

『神を信じるか?』か。

この妾を試すとは面白い奴じゃのう。
馬鹿な弟にも見習わせたいところじゃ。

「随分と機嫌がよさそうだな。」

「ええ、面白い人材を見つけたもので。
まあ、断られてしまったのですが。」

レン・カザミネの情報はあらかじめ集まっておるからこちらから出向
こうと思えば出来るがな。

「確かに彼はいい人材だ。」

王である我を相手取れる人物だからな。」

「おや、妾はまだ誰だと言ってはいませんが。」

「我は王だぞ。」

それくらいのこととは分かる。」

「では王たる父上に1つ尋ねます。」

父上は神を信じますか？」

「もちろんだ。

だが、神とて万能ではない。

それに、神が定めたものなどこの世にはない。

すべて人が定め、神は世界に影響を及ぼすことはない。

だが、神の定めというものは影響力がある。

信仰と行政、上手く折り合いをつけなければ王は務まらない。」

やはり、父上は王だな。

これを越えねばならぬのか。

「それは、彼に尋ねられたのか？」

「ええ、会っていきなり妾を試すようなことを言う者は初めてでした。

本当に側近に欲しいところです。」

あれほどの者たちを傍に置いているのだ、近々また会うことになる
じやろうがな

「父様、なぜ情報提供の掲示を撤回しているのですか！！」

「グレイよ。

我は神の教えに背くとはないようにと聞いたはずだぞ。」

「彼女は僕にこそ相応しい人です。

あのような男に騙されている彼女を救うことは教えに背いておりません。」

まったく、相変わらずの狂信ぶり。

これが血の繋がった姉弟だと思つといい気分が台無しじゃな。

「グレイ、そこまでにしておけ。

見苦しいぞ。」

「姉様、いつまでも僕が下にいると思わない方がいいですよ。」

ほう、確かに前よりは力が増しておるようじゃの。

これを、智で屈服させたか。

ますます興味が湧くの。

「それ以上醜態をさらすな。

王族としての品が下がる。」

「僕を見下すな!!！」

「無様」

「がはっ!!！」

所詮はこの程度。

多少神力を有しているからと努力を怠つたからじゃ。

「相変わらずだな、フリユネ。

流星は神の力を受け賜わつた者。」

「王を継ぐ者として不必要なものです。

このような力より彼のような人材が欲しいものです。」

それに、周りにいる者も優秀そうだったからの。
いずれ会おうぞ、レン・カザミネ

side out

「レン、次はあっちに行きましょうー！」

「分かったから、少しは落ち着け。」

一時はどうなるかと思ったがどうにかなったみたいだな。

「大丈夫か、アリス？」

「ちょっとつらい。」

アリスは昨日、散々に城の空気に当てられた所為かぐったりとして
俺が背負ってる。

「何か欲しいものはあるか？」

「お兄ちゃん。」

「それは諦めてくれ。」

「それじゃあお兄ちゃんの血。」

「周りで見られないようにするならいいぞ。」

信仰の街で吸血鬼だと知られたら迫害されるのは目に見えてる。

「それじゃあ、いただきます。」

こうなったら、しばらくはこのままだろう。

「今回の旅はなかなか有益なものだったわ。

アースガルドの街並みも見れたし、なにより王と面会もできた。なにより、いろいろ面白いことが起きたし言うことなしね。」

「できれば、もう少し穏やかな旅を用意してくれ。

王子の次は王でその後は姫だぞ。

特に姫に関しては、また会いそうな予感がする。」

本気で俺を側近にするためにアルフ Heim まで押し寄せて来るくらい平気でやってきそつだ。

「その時はその時で考えればいいでしょ。

レンはいちいち先のことを考えすぎよ。

もつと今を生きなさい。」

そう言うが変わろうと決意したところでそう簡単に変わるほど単純じゃない。

「努力するよ。」

「そう言えるってことは少しは変わってるってことよ。」

確かに今までの俺だったら無理だったな。

いつもなら、いつこの関係が終わっても傷つかないように、相手を負つけないように信じていることなく諦めていた。

今は少しくらいは信じてもいいと思える。

「そうだといいな。」

「レン！！」

これ家に飾りましょう。

人の感性は素晴らしいものばかりです。」

「分かったから、はしゃぐな。」

そういえばフリッグはいることが当たり前のように感じるんだよな。まあ、俺の平穩の一部だから変わらず当たり前なのは当然なんだが、こつも違和感がないってのも変だな。

「どうかしましたか？」

「いや、そのまま変わらないでくれ。」

「分かりました？」

平穩が逃げ道だとしても平穩が大切なことには変わりはない。俺が変わって人を傷つけることで傷つくことに慣れたとしても、やっぱり傷つけずに済むに越したことはないな。

「それで、いくらだ？」

「金貨50枚だそうです。」

いろいろと言いたいことがあるがここは我慢しよう。いつも世話になってると思えば、それに金はある。

「あ、これもいいですね。」

ちなみに金貨80枚。

前言撤回、こいつ計算もできないほど馬鹿なのか？

「この馬鹿。」

いくら金があると言っても限界があんだぞ。」

「その分は帰ってから働きます。」

そりゃ、お前が1人でやれば簡単に稼げるだろうが無駄使いを続けていたら駄目になる。

「駄目だ。」

どっちかにしろ。」

「うう、ちょっと待ってください。」

具体的にはあと1時間ほど。」

そんなに迷うものなのか？

確かにいいものだと思うが。

まあ、今回だけは特別に許しやるか。

「分かったよ。」

今回だけは両方買ってもいいぞ。」

「本当ですか！！」

大好きですレン！！」

買ったものは銀のネックレスと一枚の絵画。

「あの、レン、これ着けてくれませんか？」

久しぶりにこういう表情見たな。

具体的は顔を赤くして上目づかい。

前にも言ったがこれを断れる男なんていない。

「これでいいか？」

「はい」

悔しいが滅茶苦茶可愛い。

もう見慣れた思ったがこういう笑顔を見ると違うな。

それでも、女というよりは妹って感じだな。

となるとアリスは娘か？

まあ、どちらにせよ大切だったことに変わりはないか。

「レン、ずっと一緒にいましょうね。」

「百年が限界だ。」

「まだ言ってるんですか？」

いい加減諦めて私とずっと生きましょう。」

「それは考えられないな。」

そう思わせたいなら頑張ってくれ。」

変わろうとは思わがやっぱり百年が限界だと思う。

それもいつ変えられるか分かったもんじゃないがな。

「はい

いつも通り尽くしてレンに振り向いてもらえるよう頑張ります。」

これが病んでなければ本当に最高なのになあ

アースガルド その？ 王の器（後書き）

ネタが思いつかなくて連続更新が難しくなってきました。

姫の命令

「なんだかんだで我が家が一番だな。」

「観光は楽しいですけどやっぱりここが安心というか居心地がいいですね。」

流石に姫が現れてからは特にこれといったトラブルもなく翌日アースガルドを出発し中間の街で一泊しアルフヘイムへと帰ってきた。

「早速これを飾りましょう。」

アースガルドで買った絵画だが一応プロの作品らしいがそこまで名の売れていない画家の作品らしい。
フリッグ曰く、後に有名になるだそうだ。

「アリス、着いたぞ。」

「んにゅ〜、もうちょっと〜」

アリスは寝ぼけてても可愛い。

もう最近ではシスコンと開き直ろうかとすら考えてしまうほどだ。

「アリスにアースガルドの空気は辛かったみたいですね。」

「アースガルドっていうより、城の空気だな。」

もつとも、アースガルドを出る頃にはほぼ元通りだったんだが長旅で疲れが出たんだろう。

そもそも、王族がそう簡単に外を出歩いていいのか？
やばいな、かなり混乱してる。
とりあえずこれだけは言っておきたい

「どなたですか？」

「ふむ、どうやらよほど妾に喧嘩を売りたいと見える。
よいぞ、妾の権力の限りを尽くしてやろう。」

「すみませんでした。」

やっぱり人違いじゃなかったか。

「なぜ妾がホームギルドにいらっしやるんですか？」

「その姫という呼び方は止めよ。
妾の名は教えていたはずじゃが。」

「では、フリユネ様はどうしてここにいらっしやるんですか？」

「そう他人行儀になる必要はない。
妾とお前の仲であらう。」

どんな仲だよ！！
それともうホームギルドの男連中の視線に本気の殺意が混じってん
だよ。

そりゃ、何人も美少女を連れて来ていれば気持ちは分かるが誰一人
として俺が連れてきたわけじゃないんだぞ。

「いえ、フリユネ様に対してそのような無礼な態度をとるわけには

いきません。」

「そうやって距離を取ろうとしても無駄じゃぞ。

それに、お前は妾に対して敬意なんぞ持ち合わせておらぬじゃろ。」

そりゃ、厄介事の塊どこか爆発して厄介事を飛散させそうな爆弾に持ち合わせる敬意なんて持っていない。

「いえいえ、私はフリユネ様を尊敬していますよ。」

「くだらないことで時間を取らせるな。

はつきり言って気持ちが悪い。」

そこまで言うか。

こっちは姫を相手しているだけで命がけなんだぞ。

フリッグはいま仕事を貰いに行ってるからいいもの見つかったらどんな目に会うか。

「それでは私はこれで、連れを待たせおりますので。」

「まあ、待て。」

今回のアルフ Heim 訪問はお前目的ではないにしろ、せつかく再開じゃ、世間話でもしていくのが礼儀というものじゃろ。」

限界だ。

これ以上相手をしていけばフリッグが戻ってくる。

「残念だが厄介事を運んでくる相手に持つ礼儀は無いんでな。」

「ようやく素を出しおったか。」

「取り繕っても無駄みたいなんでな。
アルフ Heim 訪問が俺目的じゃないんならもういいか？
俺は仕事で忙しいんだ。」

「相変わらず面白い男じゃな。」

ちなみ今回の目的はただの視察じゃ。

護衛がない理由は付きまとわれるのが嫌だったからじゃ。」

どんなわがまま姫だよ。

まあ、あの馬鹿王子よりでしたが。

「レン、仕事貰ってきたま・・し・・たよ・・。」

・・・・・遅かったか。

「・・・・・・説明してくれますよね。」

「偶然会った。」

それ以上の説明は無理だ。」

こういうときは下手嘘は逆効果だ。

「そうですね、それでは早速ですが仕事に行きましょう。」

「ああ。」

穩便に済んでよかった。

「まあ、待て。」

なぜ呼び止める！！

お前がいると秒ごとに機嫌が悪くなっていくんだよ！！
そのしわ寄せは全部おれに来るんだぞ！！

「なんででしょうか？」

「興が湧いた。

妾がこの街に滞在する間、妾の護衛を命ずる。」

「却下です。」

なんだこの展開。

どうして、アルフ Heim にいてまで厄介事に巻き込まれなきゃいけないんだ。

「もちろん拒否権はないぞ。

断れば不敬罪で処罰することも妾の自由じゃからな。」

この世界の奴は権力の濫用を当たり前とか思っていないか？
よくこの国成り立ってるな。

「権力の濫用は王族としてどうかと思っぞ。」

「なに、ばれなければいいんじゃないよ。

それにそこの娘は神じゃろ。」

なぜばれた？

神術は使わせていないはずなのに。

「妾は過去最高といわれるほどの神力の持ち主での、流石に離れていては感じれぬがこう近くによれば感じ取れる。まあ、愚弟は分からなかったようじゃがの。」

油断していた。

あの馬鹿王子が噂の神の力を受け賜わりしものだと思っていたがこの姫のことだったか。

「どうじゃ？」

このことをアースガルドに広めれば担ぎ挙げられることは目に見えるじゃろ。」

「確かにそうだが、いくら姫が強かろうとフリッグには勝てない。悪が記憶を弄らせてもらう。」

こうなった以上罪悪感がどうと言っている状況じゃない。フリッグが神だと知られたら厄介どころの話じゃない。

「そう脅すな。」

妾は護衛さえ引き受けてくれればこのことは胸の内にはしまっておくつもりじゃ。」

「そんな言葉を信用しろと？」

記憶を弄った方が確実に安心できる。」

「それなら妾を監視下においてはどうじゃ？」

父上がいる限り、私はアースガルドにいる必要はないからの。

それより、神と吸血鬼を傍に置いているお前の近くにいた方が楽しそうじゃしの。」

「冗談はほどほどにしてくれ。
誰が厄介事の塊である姫を抱え込むんだよ。」

「妾が姫だと知っておるものなどたかが知れておる。
それに知っておるとすればなおのこと妾にちよっかいなど掛けてこぬ。」

「悪いがそんなことは関係ない。」

「ふむ、意思は変わらぬか。」

「残念だがな。」

出来るだけ記憶に矛盾がないようにしてもらってから悪く思わないでくれよ。

俺だけなら問題ないんだがフリッグだけじゃなくアリスにも被害が及ぶなら放ってはおけない。

いくら甘いとは言っても俺にも優先順位くらいはある。

片方しか取れないのならばもう片方が切り捨てることに躊躇いは持たない。

「ちなみに、妾は護衛を撤くときにレン・カザミネの所に行くと言つて来ておる。」

「っち、やってくれるな。」

いくら姫の記憶を操作しても見つかった姫に護衛が何があった聞き、俺の名を聞けばいずれ行きあたる。

どれだけ巧妙に記憶を弄ろうとも矛盾は発生してしまう。

そうならば記憶を操作されたと気付かれる可能性もある。

「目的はなんだ？」

「いったであろう、ただの視察じゃと。」

これでも王位継承権第一位なのでな、国の内情を把握しておくのは当然のことじゃろ。」

「大丈夫ですよ、レン。」

私の力ならこの世界のすべての人から記憶を抹消することもできます。

その人だけでなく王やあのストーカー、アースガルドすべての人から記憶を抜き取ります。」

それしかないか。

「流石にそこまでされてはとうしようもない、潔くよく諦めよう。」

じゃが、記憶を改竄されようともいわずれ会つと思つがの。」

嫌なことを言ってくれろ。

「………滞在日数は？」

「レン!？」

「今日を入れて3日じゃ。」

「今日はすでに仕事を貰ってきている。」

それが終わってからなら引き受けよう。」

「いいじゃろつ。」

報酬は後に出そう。」

「行くぞ、フリッグ。」

「はい。」

side フリユネ

ふむ、助かったというべきか、いやはや、やはり面白い男じゃ。

本気でここに留まるのも悪くないかもしれぬの。

あの娘、フリッグといったか。

あれは流石に妾でも勝てるとは思えん。

確かにあれなら世界全ての人から記憶を抜き取るくらい出来るじゃろつ。

だが、神である娘より興味があるのはあの男の方じゃ。

今回引き受けたのは打算半分、甘さ半分、転んでもただでは起きぬ

という奴じゃの。

あの男にも勝てる気はせぬな。

精々引き分けに持ち込めればいい方じゃな。

どうにか側近に出来ぬものか……

side out

「どういってもりなんですか？」

「あの姫の言うとおり記憶を消したとしてもいずれまた会う気がする。」

それなら、こちらに引き込んで情報操作をしてもらった方が得だと思ってな。

それに、もしばらされたらその時は頼んだぞ。」

予感なんて不確定なものを信じさせられる姫の迫力には脱帽だな。俺やミナのような策略を張り巡らせるのではなく、その天性の力リスマだけで成功させるタイプだ。

ミナとは別の意味で敵に回したくない相手だ。

「分かりましたが、必要以上に関わらないでくださいね。

これ以上、レンの周りに女が増えるようであれば監禁しなければいけませんから。」

虚ろな目で言われても怖いんだが、平然とした顔でさらりと言われる恐怖は洒落にならないな。

普通なら冗談で笑い流せるところだが、相手がこいつだけに流せない。

これ以上増えると本気で監禁されるんだろうな。

想像しただけで怖気が走る。

本気で気をつけるとしよう。

姫の命令(後書き)

予約投稿するつもりが間違っ
て投稿してしまいましたので明日投稿
するか分かりません

神と姫

「では、姫を頼みます。」

まさか、夜まで護衛するはめになるとは。

「どうした？」

お前の家に案内せよ。」

「はあ！？

なぜ姫を家に案内する必要がある！！

そこらへんの宿にでも泊まってりゃいいだろう。」

家にはアリスだっているんだぞ。

フリッグは神力を完全とはいわずとも遮断できるし、魔力を纏ってるから問題ないが姫のような神力を纏ってる人をアリスに近づけたくない。

「退屈なのじゃ。」

それに今は雇い主と労働者であろう？

それなら妾の言うことは絶対のはずじゃ。」

このわがまま姫は……

「フリッグ、ちょっと姫を頼む。

3日間はアリスをミナに預けてくる。」

「分かりました。」

「別に妾は吸血鬼だからといってどうもせぬぞ。」

何かされたら問答無用で記憶を抹消する。

「アリスはまだ子供なんだよ。

だから姫みたいな神力を持つてる奴の近くに長くいると体調を崩すんだ。」

「ふむ、それは済まん。

妾も可能な限り抑えてはいるが流石にその神のようにまでとはいかぬからの。」

3日間、アリスへの血はどうするか。

輸血パックみたいなものをミナにでも渡しておけば大丈夫だろうか？

side フリッゲ

それにしても毎回毎回よくも厄介なことに巻き込まれますね。

「さて行つたか……」

神よ先程のまでの無礼をお許してください。」

は？

いったいどうしたんですかね。

「これでも信仰の街、アースガルドの後継ぎとなるものでございませぬ。

神である貴女様に対して無礼な発言は許される立場ではないのです。がどうかお許してください。」

「は、はあ。」

調子が狂いますね。

本当にこの人はあのストーカーの血縁なのでしょうか？

「貴女様が神であることは誰も言わず墓まで持っていくことを誓います。」

立場上、平民である貴女様に対しこのような態度をとっていけば周りから怪しまれる故、無礼な態度をお許しください。」

人の考えに染まってきた私にここまでされると逆に申し訳なくなりますね。

「別に気にしませんけど、私の仲間に出すことだけは止めてくださいね。」

特にレンに特別な感情を持つことだけは許しませんよ。」

「承りました。」

レンから手を出すことなんてあり得ませんからこれで大丈夫でしょう。

side out

side フリユネ

「失礼ですが、あの男とはどういう御関係で？」

神力は感じずとも、肌で感じる圧倒的な存在感。

アースガルドで感じた神とは比べ物にならぬ。

「難しいですね。」

戸籍上では兄妹なんですけど、もちろん血なんてつながっていません。レンは私が片思いしている相手という表現が正しいですね。」

これ程の神の寵愛を受けているとは本当に面白い男じゃ。

しかも、これほどの美貌を持つ神に手を出さぬとはいろいろな話を聞いてみたいものじゃ。

「ありがとうございます。」

これはあの男を側近にするのは難しそうじゃの。

しかし、それができればこの神を側近にしたも同じ、どうにかならぬものか。

「先に言っておきますがレンに手を出そうものなら首都ごと消滅させますよ。」

私は既に神として役割なんて放棄していますし、私を世界一つで抑えられるのなら最高神でも喜んで差し出しますよ。」

「申し訳ありません。」

私が見つ力のすべてを用いて貴女方の生活を守ると誓います。」

「なにもする必要はありませんよ。」

ただ、私たちのことを誰も話さず黙っていてくれればそれでいいです。」

妾の考えは筒抜けというわけか……

「それと、レンには今まで通りに接してくださいね。」

突然、態度が変わったなら心を読んだことを気付かれる可能性がありますから。」

「なぜ気付かれてはいけないのですか？」

「私は最初にレンに心は読まないって約束してるんです。今回はレンがいなかったので特別です。」

これはあの男は敵に回しせぬの。

side out

「ミナ、いるか？」

「レンがこつちに来るなんて珍しいわね、なにかあったの？」

ちなみに今いるところはミナやジンの実家。

出来ればあまり目立つ行動はしたくないんだがアリスの為というこ
とで割り切ってる。

「アリスを後3日預かって欲しいんだが。」

「それはいいけど、本当にどうしたの？」

「姫が視察でこの街に来ててな、偶然か必然変わらないが再会して
興が乗ったらしくて俺たちに護衛を依頼しやがった。」

「また面白そうなことになってるわね。」

確かに視察はあるけど普段は姫なんて大物はこないわよ。」

ということ、あの再会は必然だったってことか。

「今アリスはどうしてる？」

「寝てるわよ。」

起きていた時は元気だったからもう大丈夫みたい。

でも、アリスはきっと帰りがかるわよ。

そうだったら、説得はお願いね。」

説得できるかなあ？

俺が命令すれば聞いてくれると思うが、できれば命令なんてしたくない。

だが、アリスには元気でいて欲しいから姫に近づけるわけにもいかないからな。

「とりあえず、今日だけでもどうにかしておいてくれ。」

アリスには明日説明する。」

「分かったわ。」

これで貸し2つ目よ、お返し楽しみにしてるわ。」

お返しか……

女に贈り物なんてしたことないからどんなものを送ればいいのか困るな。

フリッグに相談する勇氣なんて持ち合わせてないし、アリスにしても面白くないだろう。

どうしたものか……

side フリッグ

気まずいですね。

私を神として敬われても正直迷惑です。

そもそも、このお姫様の方が気品がある気がします。

敬われるどころか、逆にこっちが気を使わなければいけないような
気すらしてきます。

「お腹すいてませんか？」

もうすぐレンも帰ってくるでしょうから食事にしようと思うんです
が。」

「神が食事の準備をしているのですか？」

最初はレンと交互だったんですがだんだん楽しくなってきたので最
近は私とアリスで作ってます。

女として料理くらいはできた方がいいでしょうし。
それにしても

「敬語は止めませんか？」

私は一応神ですけどこの世界上では一般人です。

お姫様から敬語を使われると変な気がするんですけど。」

「神がそうなのなら。」

「できれば神というのも止めてくれませんか？」

私の名はフリッグといます。」

この人なら名前で呼ばれても許可できます。

本当にあのストーカーと血が繋がってるんでしょうか？

あのストーカーも美形といえば美形でしたが気品というか纏ってる
オーラが違いますね。

「分かった。」

では、妾のこともフリユネと呼んでくれ。」

なんかしつくりときますね。

レンはこういう気品のある女性はどつなんでしょう？

ないよりあったほうがいいですよね。

私もフリユネを見習うとしましょう。

「ただいま。」

帰ってきましたね。

「おかえりなさい。」

「ご飯にしますか、お風呂にしますか、それとも」よく飽きないな。」

相変わらずつれないですね。

ちなみにさっきのセリフは私がレンより早く帰ってきている時は毎回言っています。

まあ、最初から冷めた態度で返されましたけど。

「とりあえず飯にしよう。」

明日からの姫の予定も聞いておく必要がある。」

「その姫というの止めよと言ったはずじゃが。」

「そういえばそうだったな。」

それにしても、フリユネはお姫様なのに敬語をまったく使わないレ

ンは凄いですね。

side out

「なかなかの腕じゃな。」

「本当ですか!!」

聞きましたかレン、フリユネに料理を褒められましたよ!!
家事も仕事も完璧にこなす、こんな器量よしの私を放っておいていいんですか!!」

お前が病んでなければ考えてもいいところが、欠点が致命的すぎる。
まあ、料理の腕は認めるがな。

「客人の前で騒ぐな。」

早速で悪いが仕事の話だ。

明日の予定を大まかでいいから教えてくれ。」

「食事中に仕事の話とは無粋じゃの。」

「金を貰ってるんだ。」

準備を怠ってミスしましたじゃ話しにならないんでな。」

俺だって食事中に仕事の話なんてしたいわけじゃない。

いつもなら、アリスとの食事を楽しんでるってのに。

……やばいな。

無意識でアリスのことを考えるほどになってるとは。
もう俺ってシスコンじゃね?

「ふむ、明日はアルフヘイムの代表との会談の後、街を見て回るつもりじゃ。」

調査の方は専門の者が行う手筈じゃ。

そもそも妾は今回ついてきただけみたいなものじゃから、そんなにやるべきことがあるというわけではないのじゃ。」

本当に迷惑な姫だな。

勉強熱心なのはいいことだが俺を巻き込むな。

「つまり、俺たちは会談後の後の街の探索の間が仕事ってわけか。ちなみに狙われる心当たりはあるか？」

「そんなもの数え切れぬほどあるに決まっておろう。」

王位継承権を持つ者は妾も含め十人以上おるのじゃぞ。

その中で一位の妾が邪魔だと思つ者がおらぬ筈がなかるう。」

そんな、内輪もめのごたごたに俺を巻き込まないでくれ。

「実際、襲われたことはあるのか？」

「数え切れぬな。」

だからといって妾に勝てる者などそうそうおらぬ。」

そんなことを言うなら俺たちが護衛に着く意味なんてないだろう。

「故に仕事といってそう固くなる必要などないということじゃ。」

妾もただ街の普段の様子が見たいだけじゃからの。」

それで安心できるような人生は送ってない。

こういふときは何かとんでもないことが起きる可能性がある。

可能な限り根回しはしておくか。

胸騒ぎ

「どうだった？」

「レンの予想通り、いかにもって連中が十人以上はこの街に来てるわ。」

フリユネはこの視察にはついてきたと言っていた。つまり、それを知っている者は絞られてくる。

「姫様も大変ね。」

身内からこうも露骨に狙われるなんて。」

大変なのはこっちだ。

何が悲しくて王族の相手を敵味方両方ともしなけりやいけないんだ。

「ところで、アリス、いい加減に機嫌を直してくれ。」

「アリスに構ってくれないお兄ちゃんなんて嫌い。」

アリスに嫌いといわれるのは心に突き刺さる。

だが、アリスをフリユネに近づけるわけにもいかないし、これも仕事の一環だから個人的な事情で長く離れるわけにもいかない。

くそ、これもあのわがまま姫が来るから！！

「本当にレンってアリスには弱いわよね。」

悔しいがアリスの為ならシスコンと呼ばれてもいいと思う俺がいる。もちろん、そこにやましい感情なんて一切ない。

純粹な家族愛だ。

「分かってくれ、アリスがフリユネに近づくとまた体調を崩すかもしれないんだ。」

頭が悪くないから理解していると思うんだが女心は難しいな。

side アリス

「分かってくれ、アリスがフリユネに近づくとまた体調を崩すかもしれないんだ。」

お兄ちゃんがアリスのことを想ってくれてることは分かるけど、
3 日もお兄ちゃんと離れるなんて絶対に嫌

アリスがこうしてれば少なくともお兄ちゃんはここにいます。
だから、絶対に許してあげない。

「後で埋め合わせは必ずする。
だから今回は許してくれ。」

うっ、お兄ちゃんが本気で困ってる。
で、でもお兄ちゃんが悪いんだよ。

お兄ちゃんがたくさんの人に好かれるから……..
アリスだってもっと甘えたいのに。

「じゃあ、アリスを妹じゃなくて女の子として見てくれるなら許し
あげる。」

side out

「じゃあ、アリスを妹じゃなくて女の子として見てくれるなら許してあげる。」

くっ、そう来るか。

正直言つてアリスを妹以外で見ることなんて不可能に近い。

まず、見た目が10歳の幼女だ、手を出そうものなら即通報される。それを除いてもこの構つてやりたくなる空気を出してるアリスを妹以外で見るなんて……

「お兄ちゃんの馬鹿!!」

ぐおっ!!

なんだこの痛み!?

これに耐えてたジンはとんでもないな。

「本当にアリスに弱いわね……」

仕方ないだろ!!

あの容姿である性格だぞ!!

シスコンにならない方が不思議だ!!

「仕方ないわね。」

アリスは何とかしておくからレンは早く姫様の所へ戻りなさい。」

side アリス

「仕方ないわね。」

アリスは何とかしておくからレンは早く姫様の所へ戻りなさい。」

そう言つてアリスを揺さぶろうとしても無駄だよ。

お兄ちゃんがアリスから離れるわけ

「……ごめんなアリス。
ミナ、頼んだ。」

えっ!?

お兄ちゃん、どうして!!

「これで3つ目、素敵なお返しを期待してるわよ。」

「期待せずに待っててくれ。」

「駄目!!」

side out

心苦しいがここはミナに任せておいた方がいいだろう。

「……ごめんなアリス。
ミナ、頼んだ。」

「これで3つ目、素敵なお返しを期待してるわよ。」
「ちゃっかりしてるな。」

「期待せずに待っててくれ。」

「駄目!!」

っと、抱きとめられてよかった。
反応が遅ければそのまま押し倒されてたな

「お兄ちゃんが行くならアリスも行く!!」

「だが、フリユネに近づくと体調が「それでも行く!!」

どうしてものか・・・

アリスを力づくで引き剥がそうとして出来る奴なんてフリッゲくらいなものだろうし、このまま行ったらアリスが体調を崩すだろうし・

「後でいっぱい構ってやるから、我慢してくれ。」

「・・・だもん。」

これはフリユネの方をどうにかするしかないな。

「寂しいんだもん。」

「ごめんな。」

side アリス

アリスが吸血鬼だって知って、それでも構ってくれたのはお兄ちゃんだけ。

お姉ちゃんもミナお姉ちゃんもジンさんも大好きだけどやっぱり最初はアリスを受け入れてくれなかった。

でもお兄ちゃんだけは最初から受け入れてくれた。

アリスの居場所を作ってくれた。

「寂しいんだもん。」

寂しい……

お兄ちゃんから離れたくない。

もっといっぱい甘やかして欲しい、もっといっぱい甘えたい。

大好きなお兄ちゃん

「ごめんな。」

やっぱり駄目なの？

「寂しがらせてごめんな。」

出来るだけ寂しくないように一緒にいてやるから泣かないでくれ。」

「うん。」

温かい

ここがアリスの居場所

side out

「どうしてアリスを連れてきたんですか!?!」

「フリッグ、アリスが耳元で寂しいと言ってきて置いて行けるか?」

「無理です。」

あれで置いて行ける奴がいたらそいつは人じゃないな。

「アリス大丈夫か？」

「ちょっと気分悪いけど大丈夫。」

「ちょっとという割には顔色が悪い。」

「アリス、魔力を体中に纏わせてください。そうすればかなり楽になるはずです。」

確かに顔色がよくなってきた。

これなら大丈夫か

「最初は会談だったな、とりあえず城に行くか。」

それにしてもフリユネを相手取るにしては十人程度では少なすぎる。なにかあるのか？

「どうしたんじゃ？」

「街に厄介な連中が入り込んでるそうだ。」

俺たちがいるから大丈夫だと思うが気をつけといてくれ。」

「ふむ、まだ懲りぬ輩がおるようじゃの。」

恐らく今回の敵は王族からの刺客だろう

フリユネのことを知らないならともかく知っていてなお無駄な手を打つはずがない。

「いままで、身内から襲われることはあったか？」

「もちろんじゃ。」

次の王になるには十人以上の中で一位にならねばならぬ。そのためなら、どんな手段を使っても許されておる。」

とんでもない決め方だな

気を抜いた瞬間に蹴落とされるってわけか

「まあ、心配せずとも妾に勝てる者などおらぬから大丈夫じゃよ。」

アリスが近付くだけで体調を崩すような神力を持っているフリユネを正攻法で倒そうと思えばそれこそ神を呼んでくるくらいのことではないと無理だ。

だが、フリユネがここにいるということを知っているということは王族という可能性が高い。

それなのになった十人程度の刺客しか来ていない。

こんなことをするってことは相当の馬鹿なのか、もしくは

「なあ、対神力の方法って存在するのか？」

「少なくとも妾は知らぬ。」

「あるにはありますけど、ここで起こすには難しいですよ。」

「説明してくれ。」

「神力は端的に言ってしまうえば聖なる力です。

なので、周りが負の感情なんかで穢されてしまえば神力は弱まります。」

確かにそれは難しい。

こんな街中でそんなことを起こそうと思えば大災害レベルのことを起こさない限り無理だろう。

それに、それだけのことを起こしたとしてもフリユネの神力を抑えることができるかどうか分からない。

それなら、ミナが言っていた奴等はただの偶然？

「レン、着きましたよ。」

「では、少々待っておれ。」

考えながら歩いてても、人とぶつからないって凄いな。

「フリッグ、他の神力を抑えられる方法ってないのか？」

「私はもともと魔力ばかり使っていましたからあんまり詳しくないんですが生半可な方法では神力を封じることができません。」

となると、やはり俺の考えすぎか山賊まがいのことをやるつもりなのか馬鹿なだけか……

「ちなみに穢れってのはなんだ？」

「簡単に言ってしまうと負の感情が長く一定の場所に多く存在してしまうと人の生気が下がりますよね。」

例えば、一つの村で流行り病が流行し多くの人が病死すれば悲しみや恐怖なんかで村が覆われてどんどん穢れは大きくなりその穢れが新しい病を運んできたり悪霊や悪魔なんかを呼んだりします。」

嫌な予感がしてきたな。

病をばらまいたところで負の感情が街を支配するには時間がかかりすぎるし、なによりフリユネが率先して治療するはずだ。だが、死霊使いみたいなものがこの世界に存在するとすれば

「レンの嫌な予感当たってるみたいですよ。」

この嫌な空気は悪霊のようです。」

死霊使いが10人以上いるとすれば、一時的にでも空気を穢すことくらいはできるだろう。

それに、悪霊を使役できれば戦力に支障はない。

さらに言えば悪霊をどうにかする為に街の警備団は使えないと言っている。

考えられた作戦だが残念だったな。

「フリッグ、いけるか？」

「悪霊程度では私に傷一つつけられませんよ。」

それに私の神力を封じたければ世界全体でこの現象を起こしてもしない限り無駄です。」

流石は最強クラスの神だな。

「アリスもいるよ。」

あの程度の悪霊ならすぐに被える。」

仕掛ける場所を誤ったな。

これが他の街なら成功していただろうがアルフヘイムでは通用しない。

「とりあえず、フリユネと合流するぞ。」

「一人で動かれた敵の思うつぼだ。」

「なんだ、この胸騒ぎは？」

「この騒ぎにはまだ裏があるのか？」

裏で蠢く者

「フリユネ、無事か!!」

「これが神力封じか、力が上手く出せぬ。」

「どうやら無事のようにだが効果はてきめんのようだな。事態を收拾するには死霊使いをどうにかするしかないか。」

「アリスはこの場所を守ってくれ。」

「フリッグは死霊使いを倒しにいくぞ。」

「レンはどうするんですか?」

「俺も死霊使いをどうにかする。」

「場所さえ分かれば狙撃できる。」

俺だってこの世界に来てから何もしていないわけじゃない。200m離れた場所からの狙撃なら敵に気付かれることなくやれるだろう。」

「分かりました。」

「場所はばらばらですのでいくつか場所を覚えておきます。」

「油断しておつた。」

「済まぬが後は頼む。」

「報酬は弾めよ。」

「アリス、頼んだぞ。」

「任せて。」

俺も行くとするか

side フリッゲ

なかなか優秀な死霊使いのようですね。

使役する悪霊のレベルが高い。

これならば、フリユネを完全とは言わずともある程度封じることが可能でしょう。

しかし、私がいる限りこの街に危害は加えさせませんよ。

「とりあえず1人目ですね。」

後何人が倒してしまえばジン率いる警備団も問題なく動けるようになるでしょうしフリユネも回復するでしょう。

意外と簡単に収まりそうですね。

side out

side アリス

お姫様の場所が分かっているのかさっきから何体も悪霊が押し寄せてくる。

「消えて。」

でも、所詮は悪霊、穢れなんてアリスには関係ない。

「くっ、無様じゃな。」

こんな時何の力にもなれぬとは……」

アリスとしては神力が抑えられて助かってるけど街をこのままにもしておけないしお兄ちゃんたちには頑張ってもらわないと。

「フリユネ・セシリアだな、死ね。」

次は傭兵、警備団は出払ってるからすんなりと入ってこれるみたいだね。

やっぱり、お兄ちゃんの判断は間違ってるね。

「駄目だよ、ここはお兄ちゃんに任せられてるんだから。」

真祖の吸血鬼の力を見せてあげる。

side out

これで2人目。

街の悪霊の数もかなり減ってきた。

今頃、フリユネの所に傭兵が来ている頃だろうな。

フリユネがここにきていることを知っているぐらいだ。

フリユネを連れてきた誰かが内通していることくらい予想済みだ。

それにしてもあっけなさすぎる。

確かに、俺たちがいなければこの作戦は成功していたかもしれない。だが、なぜここで仕掛けた？

ここはニーズヘッグを一斉検挙したことで有名な街だ。

アルフヘイムを視察に来るくらいなら他の街にも視察に行くだろう。こんな作戦を実行するなら、少なくとも俺は他の街で実行する。

……ニーズヘツグ？
まさかこの騒ぎは……

「まずい！！」

間にあつてくれ！！

side ミナ

姫1人を殺すために街に喧嘩を売るなんてとんでもない度胸ね。
まあ、この街にはフリッグとアリスがいるし武力制圧なんて不可能
なんだけど。

「ミナ・レグスだね。
早速だが死ね。」

「っ！！！」

いつの間に！！

「戦闘向きじゃないと思っていたんでけど悪くはないようだね。」

まさか、混乱に乗じて私を狙いに来るなんて

「油断してたわ、まさか、直接私をこの街で狙いに来るとは思っ
てなかった。」

「そつでだろうね。」

そもそも、今回は一応姫を狙うついでという事になってる。

まあ、僕たち二ーズヘッグにはこちらが本命だよ。」

くっ!!!

やばいわね、どうやっても私が勝てる相手じゃない。
時間稼ぎもそろそろ限界に近い。

「限界のようだね。」

二ーズヘッグに関わらなければもう少し長生きできただろうに。」

これまでか……

約束破つてごめんね、レン……

「っ!!」

えっ!?

「そこまでにしてもらうか。」

side out

危なかった……

銃で剣を撃ち落とすなんてよくできたな

「そこまでにしてもらおうか。」

「まさか、気付かれるとはね……」

「まさか、あれだけ派手にやったミナに何の対策もせず放っておいたと思ってるのか?」

「……………なるほど。」

「どうやら見くびっていたようだ。」

「大人しく捕まってもらおうか。」

「それは困る。」

「それでも僕はニースヘッグの幹部なんでね。こんなところで捕まるわけにはいかないんだ。だから、ここはいったん引かせてもらおうよ。」

「それをやらせると思つか？」

「その時は彼女を道ずれにするだけだよ。」

「それに、君に僕を倒せるのかい？」

「……………次は無いと思え。」

「君の名前は？」

「誰が教えるかよ。」

「そう、僕はアビス・ラクライマ、覚えておいてくれ。」

「……………行ったか」

「ちょっと、どうしたのレン!？」

「緊張の糸が切れたただけだ。」

「なんだ、あいつは？」

はったりが通じてよかった。
この街は完全に安全だと思っていたからミナには何もしていない。
あの場ではこれ以上時間をとると援軍が来ると思わせて引かせるし
か手はなかった。
あれは俺が勝てるような相手なんかじゃない。

「ありがとう、助かったわ。」

「これで借り一つ返せたか？」

「ばかぁ……こわかったよう……」

「あゝ、よしよし怖かったな。」

本当に守れてよかった……

side アビス

「話が違どうぞ!!」

まさか、あれで気付かれるとはね。
完全に姫に目を向けたつもりだったんだけど、どこで気付かれたの
やら。

「聞いているのか!!」
フリユネを殺すどころか死霊使いと傭兵全員捕まっただぞ!!
なんのために高い金を払ったと思ってる!!」

おそらく真祖の吸血鬼も彼の元にいるはず。
確かにそれならこの騒ぎをこつも簡単に抑えられるはずだ。

「おい!?!」

「うるさいよ。」

「っ!?!?」

「君にはこの騒ぎの首謀者として捕まってもらう。」

ニーズヘッグに齒向かうとどういう目に遭つか見せしめのために動いたというのに、失敗してこれ以上動きずらくなったら敵わないからね。

王族の1人がこの騒ぎの主犯となる証拠は捕まった者たちが話すだろうし、雇った者たちは僕のことを知らない。

彼ら以外この件にニーズヘッグが関わったとは思わないだろう。

「それじゃあね。」

side out

あの騒ぎはすぐにフリッグが死霊使いを全員鎮圧しアリスが押しかけた傭兵を捕えた。

そいつら全員が王族の1人に雇われたと口を揃えて白状して、その王族は捕まった。

確かにこの騒ぎはフリユネを狙った王族の犯行だろうが裏で手を引いていたのはアビスとか言う奴だろう。

「ミナ、近いうちに俺たちは家を買って引っ越すから、ついでに家に来い。」

こうなった以上、この街だからと言って安心できない。

「私はいんだけど……」

「私は反対です。」

「アリスは条件付きならいいよ。」

お前らは……

「ちなみに反対の理由と条件は？」

「私とレンの愛の巢に入れたくありません。」

お前は本当に馬鹿なのか？

そもそも、アリスがいるだろう。

「お兄ちゃんにべたべたしないこと。」

気持ちは嬉しいんだが、だんだんフリッグに影響されてないか？

「フリッグ、ミナがどうなってもいいのか？」

「レンとの甘い生活には代えられません。」

俺はまだこいつのことを甘く見ていたかもしれない。

ここまで病んでるとは……

「今度デートしてやるから妥協しろ。」

「……………絶対ですよ。」

背に腹は変えられない。

こいつとの問題は俺が何とかすればいいがミナとの問題は個人で出来る範囲を超えている。

「約束だ。」

「それじゃあ、許可します。」

でも、あんまりべたべたしたりしちや駄目ですよ。」

はあ、また厄介な約束をしてしまったな。

「そういうわけだ、フリッグもアリスも条件さえ守ってくれば大丈夫だそうだ。」

「嫌よ。」

……………は？

「その条件を受けるってことはレンを諦めろってことでしょう？
そんなの絶対に嫌よ。」

お前もなのか……………

「仕方ない、お前ら3人で一緒に住め。
俺は別の所に1人で住む。」

俺は死なないし、いざとなってもフリッグが駆け付けるだろうから問題ない。

「そんなの駄目です!!」

レンが一緒じゃないとどこにいても同じです!!」

「それはアリスも困るよ。

お兄ちゃんと一緒じゃないと嫌。」

「私は別にチャンスさえあれば別の場所でも構わないけど、少なくともフリッグかアリスの傍にはいたいわね。」

「もてもてじゃの。」

フリユネいたのか

それよりどうするか?

一番手っ取り早い方法はミナが諦めてくれることだがこれは無理っ
ぽい。

「私がミナの周囲に危害を加えようとしたら感知する結界を張れば
いいじゃないですか。」

確かにその案は悪くないな。

「ちなみに感知したらどうするんだ?」

「その結界がミナの防御壁に変わります。」

こいつにしてはまともな意見だ。

「だそうだが、どうする？」

「いいと思うわよ。」

それじゃ、それにするか。

「それではミナ、何か文字が刻めるものを身につけてませんか？」

「私、装飾品はあまりつけないのよ。」

「それじゃあ、明日にでも買いに行くか。」

「それじゃあ、レンが選んでね。」

だから、どうして俺を追い詰めるようなことを言う？
途端にフリッグの機嫌が悪くなってるだろう。

「ま、まあ、いいでしょう。」

レンは私とラブラブな同棲生活を送るんですから。」

いちいち突っ込むのも面倒くさいからスルーだ。

「アリスにも何か買って。」

「それじゃあ、アリスも明日一緒に行くか。」

「私だけ仲間外れにしないでください！！」

面倒くさい奴だな。

「とてころで妾はどこに住めばいいのじゃ？」

さて、今日は疲れたしもう寝るか。

「どこへ行くのじゃ？」

「幻聴が聞こえるくらい疲れているみたいだから今日はもう寝る。」

「ほう、その幻聴とはどのような内容じゃ？」

「何をとち狂ったのかフリユネがどこに住むかなんてことを聞いてくるんだ。」

幻聴だろ？

幻聴だと言ってくれ。」

「ふむ、ならばもう一度言っておこう。」

妾はどこに住めばいいのじゃ？」

やっぱり幻聴じゃなかったのか……

「もちろん私たちの家は駄目ですよ。」

「それは残念じゃ、妾はフリッグの料理は気に入っているのじゃが。」

「

「ご飯は食べに来ていいので住み込みは止めてください。」

夜はそのうちレンが来てくれるはずなので邪魔されたくないんです。やっぱり初めては奪って欲しいですから。」

「アリスがいるところでなに言ってるやがる!!」

アリスはまだ10歳なんだぞ!!

お前のように病んだらどうするつもりなんだ!!

「アリスも意味くらいは分かるよ。」

「お願いだアリス。」

アリスだけは純粹に育ってくれ。」

「お兄ちゃんがいつぱい愛してくれれば大丈夫だよ。」

家族愛のことだよな?

あれの意味で言ってるやないよな?

「それじゃあ私の家に来るしかないわね。
部屋も余ってるし1人くらいな問題ないわ。」

「ふむ、それではそうするとしよつ。」

今日は疲れた.....

我が儘姫

昨日はいろいろと会って忘れていたんだが

「どうして帰らないんだよー!」

「食事中に叫ぶな。」

せっかくの食事が台無しじゃぞ。」

「フリッグって料理上手ね。」

本当に美味しいわ。」

「すべてレンへの愛の証です。」

「お兄ちゃん、血貰うね。」

お前らは気にならないのか？

既に視察団は帰ってるんだぞ？

昨日の話だとこの街にしばらく住むことが決定してるんだぞ？
そもそも、どうして自然に俺の家に飯を食いに来てるんだ？

「大丈夫か、レン？」

分かってくれるのはお前だけか、ジン。

だが、なぜお前とミナまでここにいる。

「美味かったぞ。」

さて、先ほどの質問じゃが興が乗ったとしか答えられぬ。」

「帰れ。」

そんな我が儘でただでさえ少なくなってる俺の平穏な時間を削ろうとするな。

俺を変えようと頑張ってくれている3人には感謝しているがそれとこれとは別だ。

適度な休憩がないと逃げ出したくなる。

「いいじゃないですか。」

フリユネがミナの家に住み込むことになればより安全ですよ。」

「お前はいいのか？」

これ以上俺の周りに女が増えても。」

あれほど嫌がっていたのにどういう心境の変化だ？

「フリユネはレンを狙いませんからいいんです。」

もちろん、レンがフリユネを狙うというなら話は別ですけど。」

「それはない。」

「失礼な奴じゃな。」

これでも妾はそこらの男なら通りすぎるだけで見惚れるような美しさじゃぞ。」

それは分かるが自分で言うな。

そもそも、今現在で一番の問題を抱えている奴に惚れるほど俺はMじゃない。

「そう言うわけじゃ。」

しばらく厄介になるぞ。」

お前の場合本当に厄介だから嫌なんだよ。

「はあ、もういい。」

それより、今日は買い物に行くんだろ？

どこに行くか決めてるのか？」

「大体は決めてるわよ。」

でも、最終的に決めるのはレンだけだね。」

やっぱり俺なのか……

「そういえば、いつデートしてくれるんですか？」

「は？」

それはミナが引っ越す家に住むのを許す代わりだから、ミナが引っ越してこない以上約束は成立しない。」

「いいじゃないですか!!」

日ごろお世話になってるお返しとしてデートくらいしてくれたって
「!!」

それは絵とネックレスを買ってやっただろ？

それに、お世話になってる分俺の精神的な負担になっていることを
忘れるな。

「却下だ。」

「いいんですか？」

もうご飯作りませんか？」

「別にお前が作ってくれなくても自分で作れるから問題ない。」

そもそも、家事は分担しよう和前から俺は言ってる。

「その時はアリスも手伝うね。」

「本当にアリスはいい子だな。」

「もつと褒めて。」

ああ、アリスには本当に癒される。

「私の前でいちゃいちゃしないでください！！
記憶を消しますよ！！！」

朝っぱらから物騒なことを叫ぶな。

最初のころは虚ろな目になるから分かりやすかったが最近は自然にスイッチが入るから困る。

「レンの食事を作るのは私の役目です。」

だからレンは私が作った物以外食べたら駄目です。」

相変わらずの暴論。

しかも、これを無視するとまたスイッチが入るから手に負えない。

「とりあえず買い物に行くとするか。」

「そうね、それじゃあ行きましようか。」

side フリッゲ

まったく、レンには困ったものです。

だいたい、最近私に対する態度が酷くなってる気がします。

………思い出し見ればそんな変わらない変わってませんね。

でも、その分たまに見せてくれる優しさでますます好きになっちゃ
うんですけどね。

「こづいつのを俺に任せるなよ。」

それにしても、レンが私以外の女のことと悩んでいる姿を見ると黒
いものが湧きあがってきますね。

具体的には監禁したいとか記憶を消して2人で新しく始めようとか
私になびくように精神をちょっとだけ傾けさせるとかです。

「なあ、ジン、これはいいと思うか？」

「ミナに送るものだろ？」

それはやっぱりレンが決めてようが いいと思うぞ。」

それにしても、レンは私の限界を知ってるような立ち振る舞いで
すね。

ジンに聞いたことを私に聞こうものならアウトです。

「それじゃあ、アリスにはどうだ？」

「いいんじゃないか？」

センスがないと言ってもレンは十分にあるんじゃないか？」

それに最近はアリスが本気で甘えてます。
アリスに弱いレンがそれを断れるわけありませんし、相手がアリスだけに私も強く言えません。

今はまだいいですが後5年後はまずいですね。

今は妹としてしか見ていないからいいですが5年も経てばアリスも成長して立派な美少女になるでしょうし。

その時、レンがまだ妹として見られるか………
見るかもしれませんね。

というかレンがアリスを妹以外で見ている事態が想像できません。
でも、油断はできません。

レンがどう見ているもアリスが押し倒さないとは限りませんからね。
そうなる前に私が押し倒しておくべきでしょうか………

side out

っ!!

なんださっきの悪寒は!!

「どうかしたか？」

限界を見誤ったか？

俺の見立てではまだ大丈夫な範囲だと思っていたんだが。

どこかで一度発散させる必要があるな。

だが、デートなんてやってしまったらミナとアリスともするはめになっちゃいます。

そうなれば意味がない。

世界って本当に理不尽だな。

「何があつたか知らないが、頑張れ。」

優しさが目にしみる。
目の前が霞みそうだ。

「ふむ、確かに悪くないセンスじゃの。」

本当にこの我が儘姫は帰ってくれないかなあ。

「なにか言いたいかはだいたい分かっておる。

故に言っておこう、妾は帰らぬぞ。」

いちいち希望を打ち砕くようなことを言いやがって。

「希望を持たせるぐらいなら早めに諦めさせておく妾の優しさじゃ。」

そんなところで気を使うくらいならさっさと帰れ。

「まあ、そんなことはどうでもよい。

それより、もう少しフリッグに気を使ってやたらどうじゃ?」

「あいつは加減が難しんだよ。」

日ごろの感謝と言って下手に気を使うとそのまま押し倒されてバツトエンドだ。

だから、基本的に突き放すくらいでちょうどいいんだよ。

「それにしても分からぬの。」

あれほどの美人どころがそろっておるといつの日にキス以上のことはしておらぬのじゃろ?」

そのキスもその場を収める為か向こうからだけと来ておる。
もしやと思うが男がいいとは申さぬよな。」

「ああ、そういえばフリユネはまだ知らないんだな。」

言っておくが俺はノーマルだ。

間違っても男になんて欲情はしない。

俺が手を出さないんじゃないよ。

「なにを知らぬというのじゃ？」

「俺たちと一緒にいればその内分かるさ。

とりあえず知っておいて欲しいのはフリッグの前で俺と仲良くするのは止めた方がいい。」

俺としては分かるような状況になって欲しくないんだがな。

「ふむ、こついうことかの？」

この馬鹿！！

あいつ冗談は通じないんだぞ！！

「……………レン。」

どうしてフリユネと腕を組んでるんですか？
いったい何度言えば分かるんですかね？

それとも監禁して欲しんですか？」

……………終わったんじゃね？

ただでさえ我慢ぎりぎりのラインを保ってきたのに。

言うなれば、爆弾にギリギリ引火しない距離に火を置いていた状況

の所に爆弾を放り込んで誘爆させたようなものだ。

「俺の弁解を聞いてくれるか？」

「聞きましょう。」

「まずフリユネがなぜ俺がお前たちに手を出さないか聞いてきたんだ。

俺が手を出さない理由はフリッグが知ってるだろ？

それをはつきり言わなかったから、フリユネがどういうことか試すために腕を組んだだけでそこに何一つとして特別な感情は無い。」

「す、済まぬ。」

妾も度が過ぎたようじゃ。」

「今度デートをしてくれるというなら許してあげます。」

「わ、分かった。」

それで記憶リセットされるよりはましだろう。

「フリユネもこんなことをしては駄目ですよ。」

優しく言ってるように聞こえるが、まず目が笑っていない。久しぶりに見る虚ろな目は洒落にならない恐怖だ。

「き、肝に銘じておこう。」

「そうですね。」

では、私はもう少し向こうを見えますね。」

……行つたか。
背中が冷や汗でびっしょりだ。

「分かつたか？」

あれに手を出したらどういう末路をたどるか？」

「済まぬ。

確かにあれを見せられたら手を出せぬ。」

もし、フリッグに手を出すならとりあえず一生縛り付けられることは当然として、ちょっとでも他の女に目を向けたら酷い目に遭わされる覚悟必要だ。

「あれを見ても引こうとせぬ、ミナやアリスは凄いのじゃ。」

本当だよ。

フリッグが神じゃなくてもあれを見せられたら普通に諦める。

「フリッグも俺が関わらなければいい奴だから仲良くしてやってくれ。」

あいつは俺たち以外の関わりが薄いからな。」

「それは約束しよう。」

神としてではなく人としてでよいのじゃな？」

「それがあいつも喜ぶだろう。」

もう少し他に目を向ければ少しはましになるかもしれないし、友達がいないってものだらうしな。

我が儘姫（後書き）

また予約投稿を間違えてしまいました。
明日の投稿は無理です。

フリユネと平和な1日

とりあえず昨日のことだが、フリユネにフリッグの恐ろしさを学んでもらった後、ミナには紅い宝石が付けられているブレスレット、アリスには黒い髪飾りを買ってやった。

その時のミナはやばかった。

正直、フリッグがいなければ普通に落ちてたかもしれないってくらい可愛かった。

誰にでも分かるくらい赤面させながら

「その、大切にするね……」

照れ隠しに顔をそむけながら言われた時はマジでくらくらとした。

俺も年頃の男というわけで人並みの性欲くらいはあるわけでこの状況はなかなかつらい。

適当な店をジンにでも紹介してもらった方がいいのか？

ちなみにアリスは満面の笑顔でお礼を言われた。

それはもう可愛かった。

これも我慢できた理由の1つかもしれないな。

「そういうわけなので、デートは次の街へ行ったときにしましょう。」

まったく話を聞いていなかったからどういうわけか分からないが次の街ということで決まったらしい。

美少女とのデート、聞こえはいいが相手がフリッグだからな。

とりあえず蘇るヴァナヘイムの悪夢。

そして、限度をわきまえず優しく過ぎると押し倒されてバットエンド一直線。

これはデートと言えるのか？
俺にとつては何かの試練だぞ。

「楽しみです。」

では、私は次の街はどこにするかミナと相談してきますね。」

ちなみに今日の仕事は午前中で終わり。

俺たちが仕事を取り過ぎているということとで他の人に回らないそうだから、俺たちが受けられる仕事数に制限がついた。

それでも十分に暮らしていけるんだがフリッグとアリスがいれば1つ1つはすぐに終わるから時間を持って余してしまう。

言うておくが俺も戦いには参加しているぞ。

前衛はあの2人が無双しているから後衛からの援護射撃。

ぶつちやけ必要ないが腕を磨いておかなければ先日のような事態に対応できなくなる。

最初は動いている敵には反動の強い銃は扱えなかったが今ではそこそこ使えるようになってるし、遠距離からの狙撃も最大400m位なら当てられるし罫を張る技術もちよつとずつ上達してきた。

「これから何をするのじゃ？」

我が儘姫ことフリユネは相変わらずミナの家に住み込んで俺たちの家に飯を食いに來てる。

「この際だからフリユネに街を案内しておくか。」

アリスもミナの教育を受けていないし、家に帰っても特にやることもないしな。

「ぶむ、そうじゃな。」

エスコートは任せたぞ。」

「はいはい、仰せのままに、お姫様。」

俺もそのうち適当に趣味を見つけるか。

・
・
・
・
・
・

「で、まず、ここがこの街の役所だ。」

「最近は何数戸籍を持つとうとしている者が多いからどうにかしなければならぬな。」

確か、魔力の色とか波長で識別してるんだっただな。

「魔力を誤魔化すってそんなに簡単にできるものなのか？」

「妾も見たことはないが、特殊な装置が必要となると聞いておる。それが高価ということと普及はしておらぬようじゃが最近は何技術の発展は著しいものがあるからの、早めに対策を考えねばならぬ。」

「姫っていつでも遊んでるだけじゃないんだな。」

「妾はもう19じゃからの。」

妾より下の王族はまだ遊んだりしておる者もあるが妾くらいの年と

なると社交の場に出たり、結果を出そうと努力したりするものじゃ。

「

俺のイメージでは王子とか姫って家庭教師みたいな人からしか学んでないってイメージだったんだが違ったみたいだな。

「次はミナがお勧めする甘味処だ。」

「では、休憩がてらに寄って行くかの。」

いちいち文句を言っても仕方ないか。

「ちなみにグレイはいまだに何もしておらぬ。」

「想像できるな。」

神の力を持つてるから優遇されているとでも思ってるんだろう。

「実際、グレイは妾にはおよばぬがそこそこ優秀じゃから手に負えぬ。」

神力を有しておるのは次期王候補のなかでは妾とグレイだけじゃかな。

「フリユネの血筋は特別なのか？」

王位継承権を持つ王族ってのは現王の兄妹の子供でも持つてる。

だから、王位継承権を持つてるからと言って全員が王と血が繋がってるってわけじゃない。

「分からぬ。」

父上も母上も神力は有しておらぬ。
ほう、確かになかなか美味しいの。」

偶然ということか。

「ちなみにフリユネと王子が戦ったらどうなる？」

「妾の圧勝じゃな。」

これまでも幾度か挑まれておるが妾が負けた覚えはない。」

本当にあの時は運が良かったな。

一度も負けたことがないって前提で作戦立てたからな。

まあ、神力を持っているフリユネは例外とでも捕えていたんだろう。

「それにしても今考えてみれば不思議じゃの。」

アリスがいればグレイ程度にてこずるはずなかるう？」

ちなみにアリスとフリユネが本気で戦えばアリスが勝つらしい。

いくら神力が苦手といっても真祖の吸血鬼とはその程度では覆すことができない壁があるらしい。

「あの時はアースガルドにいた神から加護を受けてたんだよ。」

たぶん、フリユネより強かったんじゃないか？」

「ほう、よくもそれを殺さずに倒すことができたものじゃ。」

「根が単純だからな。」

いくつか思いこませて不意打ちしただけだ。」

確かに殺そうと思えばアリスが本気になれば1分程度時間を稼ぐだ

けで殺せたからな。

「本当に面白い男じゃ。

ふむ、美味かったぞ。

では、次に行くとするかの。」

「そうだな。」

金はもちろん俺が払った。

視察団が帰る前にかなり金を貰ったから1人位面倒を見ても問題ない。

「そういえば聞きたかったのじゃが、フリッグとはどこで会ったのじゃ？」

面白いとはいってもレンはただの人間じゃろ？

あれほどの神と出会う機会などないはずじゃが。」

そついやフリユネには言っただけじゃな。

「俺はこの世界の人じゃない。

魔法なんて存在しなくて科学ってやつが発展していたところでフリッグが間違えて殺してしまったから転生させてやるってことで転生したんだ。

俺が何も無いところから武器を出すのはその時貰った能力だ。

ちなみに、俺が未だに死んでないのはフリッグが限定的な不老不死にしたからだ。」

「なるほどの。」

しかし、よく転生などを承したもののじゃの。」

「俺がそんなこと望むと思うか？」

会った時、ちよつとからかったら泣きだしやがったんで仕方なく転生した。

で、転生した瞬間自殺したんだが今度は不老不死とフリッグがおまけで付いてきた。」

いまだにあの時からかったことは後悔してる。

あれさえやらなければ惚れられることもなかったというのに。

「まあ、あれじゃ、頑張れ。」

こいつに励まされると情けなくて泣きたくなるな。

「おつと、ここは一回来ただろうが議員が働いたり会議で使ったりする城だ。」

城にする意味はないと思うんだが街を象徴する為にとの街にもあるそうだ。

「流石にアースガルドと比べると小さいがな。」

「あれは王族が住む場所じゃから仕方ない。

あまり質素にしても面子が立たぬからの。」

俺はあんなところになんて絶対に住みたくないけどな。

「フリッグと知り合った流れは納得じゃがアリスはどうやって知りあつたんじゃ？」

真祖の吸血鬼というものは絶滅していてもおかしくない種族じゃが。

「

強すぎる力はうとまれる。

そんなわけで真祖の吸血鬼ってのはそう簡単に見つからないそうだし、そもそもアリス以外にいるかどうかすら疑問だ。

「フリユネなら聞いたことがあるだろう？」

アルフヘイムでニーズヘッグの影を一掃したって。」

「確かに報告は受けておるがそれがどうしたのじゃ？」

「あの時、なにも分かってなかったアリスがニーズヘッグに血を提供するってことで着いてきてたんだが血が足りなくて逃げて逃げ出したんだ。」

そんなわけで、吸血鬼の噂が立ったからミナが確かめに行くってことで探して拾った。」

「何とも波乱万丈な過去じゃのう。」

ニーズヘッグの一掃はレンの指揮じゃったか。」

すべて巻き込まれたか振り回されるだけなんだよ。

そして、その波乱万丈の過去の中にお前も含まれてるってことを自覚しろ

「そうはいっても、俺は指示を出したただで個々の力があってこそこの策だったからな。」

ミナがいなければ成功していたかすら怪しいもんだ。」

ジンの役割も大切だったが、代用は効くしかなかったら影からフリッグとアリスが倒せばいいだけだしな。

「確かにミナは天才じゃな。
あの魔法の腕といい、発明といいどれをとっても一流のものばかり
じゃ。」

ミナが作った物を公表すればかなり儲けるそうさ。

魔力で走る車つてのはあるにはあるらしいんだがミナが作った物に
比べると見劣りするらしい。

その理由として研究があまり積極的行われていないらしい。

だから、ミナが作った物を公表すれば研究も進むし魔力が少ない人
でも使える便利な足になる車はかなり売れるだろう。

その分犯罪や事故は増えそうだがな。

「こう並べてみるととんでもない面子から迫られておるものじゃ。」

本当だよ。

全員俺なんかにはもったないといしか言いよつのない奴ばかりだ。

「そろそろ日が暮れる、そろそろ帰るか。」

「ふむ、有意義な話が聞けて楽しかったぞ。」

「満足そうだなによりだ。」

晩飯は食って行くんだろ？」

「もちろんじゃ。」

フリッグの料理は美味いからの。」

「それじゃあ、帰るとするか。」

久しぶりに平和な1日だったな。

縁談（前書き）

総合PV20万突破しました。
これからもよろしくお願ひします

縁談

「レン、ちょっとお願いがあるんだけど。」

「あゝ、やばいなこれ、ちょっと熱あるみたいだ。それに吐き気もするし、風邪だな。」

「そう言う訳だからちょっと寝てくるわ。」

俺の厄介事センサーが反応してる。

いつも厄介事ばかり巻き込まれてるせいか反応してしまっ。出来ればこんな物に目覚めて欲しくなかったな。

「レンは不老不死でその間は健康状態が保てるんですよ。ばればれの嘘はつかないで。」

くっ、やはり回避できないのか……

「まあ、待てミナ。」

それは俺じゃないと解決できないものなのか？

それは無いはずだ、ミナならきつとできるはずだ。だから頑張ってくれ。」

せっかくフリユネが来てから2週間、ようやく安定してきたというのに。

どうせ、旅先では何かしらに巻き込まれるのは決まってる。せめてこの短い間くらい夢を見せてくれ。

「それができれば頼んでないわよ。」

「だからなぜ俺なんだー!!
フリッグにでも頼めばいいだろうー!!」

荒事なら俺より遙かに早く片がつくはずだ。

「レンも知ってると思うけど、私はヴァナヘイムの長の息子からずつと求婚されてるのよ。
いつも適当にかわしてただけで父さんが縁談を進めちゃって私一人じゃ難しくくて。」

ああ、聞いてしまった。
しかも街同士のトップの問題。

「お願い。
私はレンが好きだからあんな奴と結婚なんてしたくないの。
そもそもレンがいなくてもしたくない相手なのよ。」

「ミナ、ここは私たちの家ですよ。
ここではレンを誘惑しようとしなさいてください。」

「朝から修羅場とは見てて飽きぬの。」

「お姉ちゃん、出来たよ。」

「はい、上手にできましたね。」

「妹さん、これはこれでいいか?」

「あ、これも持って行ってください。」

なんだこれ？

いつのまにか、当然のように皆で朝食を食べるようになってる。そのことにまったく違和感を覚えない程だ。

そもそも、ジン、お前のシスコンはどうした？
こういう時はお前の出番だろう。

「最近、私にはレンがいるってことで妹離れし始めた見たい。それに、彼女もできたみたいでそっちで忙しんでしょ。それでも大切には思ってくれてるみたいだけど。」

それはいいことだ。

ようやく真人間になったんだな。

友達としてそれは祝福したいがせめてこの問題をどうにかして欲しかった。

「とりあえず話は聞こう。」

俺に何をして欲しんだ？

もうこの話の流れからある程度は予想はつくが認めたくない。そもそも定番の流れになったとしてもフリッグが絶対に止める。

「私の恋人の役を「駄目です。」そう言われると思ってたわ。だから、レン、一緒に考えて。」

まあ、予想通りの展開だな。
予想通り過ぎて泣けてくる。

「お兄ちゃん、これアリスが作ったんだよ。」

ああ、俺の癒しはアリスだけだ。

この可愛い笑顔を見てると和む。

「アリスも上達してきたな、偉いぞ。」

「うん。」

それじゃあ、あ〜ん。」

「ん、美味しい。」

「レン！！」

どうしてアリスの時はそう簡単に食べてるんですか！！
私の時は全然食べてくれなかったのに！！」

「食事中に叫ぶな。」

結局食べただろうが。

それも大観衆の目の前という公開処刑のような場で。
それに、アリスは妹だからいいんだよ。

「レンがそのセリフを言う日が来るとは驚きじゃ。」

「俺だつて好きだ叫んでるわけじゃないんだよ。
なにもなければ俺だつて静かに食べたい。」

「私を無視しないでください！！
もう容赦しませんよ。」

次のデートの時は嫌というほど甘えますからね。」

お前は手加減なんてしてたのか？
そして、今でも十分嫌だからな。」

「覚悟しててくださいね。」

デートの間はずっと腕を組んで、街中でこれでもかかってくらいべたべたしますよ。」

「却下だ。」

俺がそこまでする理由がない。」

デートするだけでも崖っぷちを歩いているようなものなのに、なぜ自分から崖底にダイブしなきゃならないんだ。

そこが天国ならともかく、落ちたらクモの巣に絡まった蝶のように抜け出せなくなる。」

「そうですか。」

では記憶を消します。」

は？

「待て！！」

どうしてそうなる！！」

「このデートはレンがフリユネと腕を組んでいたことを反省して私に対する謝罪の意味もあるんですよ。」

それなのに反省の色がまったく見えないようではまた繰り返すかもしれないし、私もレンを監禁したくありませんからね。」

そんなぶっ飛んだことを平然と言っな。

しかも、俺が他の女を引っかけたら監禁は決定事項なのかよ。

「わ、悪かった。」

フリッグの言うとおりにしよう。
だから、記憶を消すのは待て。」

「そうですか。」

私も友達は失いたくありませんからね。」

俺ってすでに逃げられなくなってないか？

フリッグ以外の選択肢を選んだら記憶消去。

他の女にしようとしたら監禁。

俺が何をした………

「そう言う訳で今日はレン借りていい？」

「~~~~~」

そこまでか？

そこまで口に出したくないのか？

「………アースガルドで約束しましたから我慢します。」

それにミナが知らない馬の骨に取られるのは避けたいですし。」

こいつの価値観はどうなっているんだろうか？

ミナが馬の骨に取られることと、俺がミナと対策を考えることでギリギリミナの方に天秤が傾くって。

あれ？

俺の意思なくね。

「それにそういう問題ならフリユネもいた方がいいですよね？」

そう言う訳でフリユネも一緒に考えてくださいね。」

「まあ、いいじゃろう。」

しかも、フリユネを監視に着けるか……
そこまで警戒するのか。

「それじゃあ、私とアリスは仕事に行きます。
くれぐれも間違いがないようにしてくださいね。」

「頑張つてね、お兄ちゃん。」

「俺も仕事に行ってくる。
ミナのこと頼んだぞ。」

「……諦めよう。」

こうなった以上、逃げることもできないだろうし、逃げたところで
罪悪感に苛まれるだけだ。

「まずはどういふ流れで縁談が進んだのか教えてくれ。」

「フリユネが狙われた騒ぎで私つて殺されかけたでしょ。
それで父さんが危ないことに関わらないように私を仕事から遠ざけ
たいみたいで縁談を進めちゃったの。」

俺としてはその気持ちは非常に分かるところだがミナが納得してな
いし、既に身の安全はフリッグが保証してるから大丈夫なんだよな。

「つまり、ミナが今のままでも安全だと証明すればいいわけか。」

「そう言うことになるわね。」

難しいな。

目の前でフリユネに本気で攻撃してもらえば安全なのは分かってもらえるがそれでも納得はしてもらえないだろう。

俺だってアリスが強いとはいえ危険なことには関わって欲しくない。

「妾が説得してはどうじゃ？」

「王族としての命令なら従うしかないだろうがそんなことに使ったら権力の濫用でフリユネの立場が悪くなる。

個人として説得してもあの騒ぎで役に立たなかったフリユネが言ったところで説得力がない。」

「ふむ、難しいものじゃ。」

本当に厄介な問題だな。

説得できればそれが一番手っ取り早いがそれは難しい。

もう一つの方法としては嫁入り先を潰してしまえばいいんだが正直言ってそれはやりたくない。

「ミナは仕事を辞めるつもりはないのか？」

「当然よ。」

私が仕事をやめられればこんなことになってないわ。」

自分の仕事に誇りを持つてるしな。

実際、この歳で十分な戦力にもなってるし実績もあげてる。

ミナはいい指導者になれるだろう。

「……………」

はあ、俺が一肌脱ぐしか方法はないか。

「これで貸し借りはなしだぞ。」

俺だっていきなり誘拐しようとした奴なんかミナを任せられないしな。

「うん!!」

ありがとう、レン。」

「礼を言うのは無事終わってからにしてくれ。」

とりあえずミナはヴァナヘイムで縁談を行うように操作してくれ。」

「分かったわ。」

後はジンだな。

「今回はどんな手を使うか見物じゃの。」

見物料とるぞ。

「妾は何もしなくてよいのか?」

「フリユネの役は一番最後だ。」

その時になったら頼むぞ。」

それにしても俺はいつからなんでも屋みたいになってるんだ……

攻城戦

とりあえず、いろいろと根回しをしていたらあっという間に縁談当日。

いつものメンバーでヴァナヘイムまで来ていた。

「本当に私たちは何もしていいんですか？」

「今回はその圧倒的な力は邪魔になるからな。」

今回の依頼はミナを結婚させないこと。

前にも説明したがヴァナヘイムには森の民っていう人外が街を守っている。

そうはいつでも、フリッグやアリス、フリユネには勝てないんだがな。

話は逸れたが、ミナの親がヴァナヘイムに嫁がせ用としている理由はこの森の民に守られているヴァナヘイムなら安全だと思っているからだ。

実際、ヴァナヘイムの治安は9つの街でトップだからな。

結論から言ってしまうと縁談をしているところを襲撃し信用を落とそうということだ。

街のトップ同士の縁談ということは少なくとも両方の長は来てる。

そんな重要なところを落とされたら信用もガタ落ちだろう。

そこで、有名なフリユネや、女で圧倒的な力を持っているフリッグやアリスが前に出ても効果は薄くなる。

「行くぞ野郎ども！！」

俺の妹に手を出したことを後悔させてやる！！」

民の目を引く必要がある。

「はあ!?!」

とは言ったものの森の民つてのは1人1人が少なくとも俺と同レベル、倒せないことはないが俺以外では難しい。

だからと言って時間をかけ過ぎると城以外から森の民が集まってくる危険性がある。

だから、あまり時間はかけられない。

「くっ、一旦退くぞ。」

数は20くらいか、これくらいならなんとかかなりそうだな。

side out

始まったか。

やっぱり、森の民つてのは強い。

1対1でジンと互角に戦ってる。

そうになると、他の兵では森の民には勝てないんだがそれは1対1の場合。

魔法が得意なエルフなら、他者に身体強化をかけることができる。

もちろんそれだけ勝てるとは思っていないが時間は稼げる。

その隙に第2班は潜入し、内部で一気にミナの所まで攻め込む。

「レン!?!」

そして、引き寄せた森の民を一網打尽にすれば俺の役目は成功。

「第三班、やれ!?!」

後方支援に置いていた第三班にはあるものを持たせていた。
俺の読みが確かならこれでかなり動きをにぶらせることができるはず。

side ジン

来たか!!

「気合入れる!!」

「 \$!! 」

鼻が曲がりそうだな。

普通の嗅覚をもつ俺たちでこれだ森の民には気絶しそうな臭いだろう。

レンの予想通り、並はずれた五感だったみたいだな。

「第一班、第三班と合流して森の民を捕えろ!!」

とはいっても全員鼻を押さえて悶えている状態だ。

捕まえるのは苦じゃないだろう。

side out

とりあえず外はどうにかなったか。

後は内部だが、数が減っているとはいえ油断はできないな。

臭い玉も、向こうにはばれてるだろう。

あれは奇襲以外で使っても風で押し戻されたら意味がないから2度は通じない。

後は個々の力で押し通す。

「レン、状況は？」

「まだ、中にも残ってるみたいで今のところ数で押ししてるがそれもいつまでもつか分からないな。」

「それなら、数を増やせば「駄目だ。」どうしてだ？」

「もし、外の森の民が駆け付けたら挟み撃ちにされて終わりだ。第一班と第三班は外を見張ってもらわないと困る。」

「つまり、後は俺たちでどうにかするしかないってことか。」

「そういうことだ。」

ジン、行けるか？」

「その役目はレンの役目だ。」

囚われの御姫様を助けるのは王子様の役目だろ。」

「俺よりジンが行った方が成功率は高い。」

俺は前衛では戦えないが後方からの援護はできる。」

撃った弾を視認して弾くような相手に俺が勝てるはずもない。

「それでもだ。」

ミナは俺じゃなくレンの助けを待ってる。

レンは何も見ず走りぬける。

俺が道を作る。」

まったく、俺はそんなキャラじゃないってのに。

「はあ、分かったよ。」

「それじゃあ行くぞ。」

「ああ。」

ここまで来て失敗は許されない。

失敗したら、俺だけじゃなくアルフヘイムの評判も落とすことになる。

こんなプレッシャーを一般人の俺に背負わせるなよ。

「野郎ども!!」

もう少しだ、気合入れる!!」

今だ!!」

「ここは通さん!!」

「どけ!!」

最後の最後にボスっぽい奴って、あれはジンより上だ。考える、俺に何ができる？

このまま走ったところで捕まるだけだ。

「ジン、目を閉じる!!」

side ジン

「ジン、目を閉じる！！」

そんな大きな声で言ったら相手にも伝わるに決まってる。
何を考えて、この臭いは！！

「敵の言つことを簡単に信じたら駄目だぜ、おっさん。」
相変わらず頭が回る。

「後は頼んだ。」

「ああ、ミナを奪ってきてくれ。」

本当に頼りになる奴だ。

s i d e o u t

s i d e ミナ

「安心してください。」

この街は森の民が守ってくれます。
時期に騒ぎも収まるでしょう。」

あのレンがなんの策もなく仕掛けるはずがない。
だから、私は信じる。

「では、そろそろ若い物同士に任せましょうか。」

「そうですね。」

「これでもう安全だからな。」

心配してくれるのは嬉しいけどこんなところに閉じ込められるような生き方をするなら私は街を捨てても逃げる。
それでも、レンたちは受け入れてくれるはずだしね。

「それでは行こうか、みなさん。」

こいつから名前で呼ばれると鳥肌が立つ。
結婚どころか生理的に無理ね。
だから、早く来なさい、レン。

「遅くなったな、ミナ。」

「あと少し遅かったらフリッグの目の前でキスでもしてやるうかと思っただわ。」

s i d e o u t

「遅くなったな、ミナ。」

席を立とうとしているところを見るとギリギリだったな。
それにしても、相手の方は普通に整った顔だな。

「あと少し遅かったらフリッグの目の前でキスでもしてやるうかと思っただわ。」

俺の記憶を消すつもりか？
そうじゃなくてもひどい目に遭うのは目に見えてる。
遅れなくて本当に良かった。

「誰だね、君は？」

「この城を襲撃した集団の一味だよ。そついうわけだ、動いたら死ぬぜ。」

ま、そんなことするはずないけどな。

「な、なにが目的だ!!」

ああ、ミナが毛嫌いする理由がなんとなく分かったな。

「それは……」

「妾が説明しよう。」

なんとか無事に終わったな。

「どうして姫がここに!？」

「それも含め説明しよう。」

先日、妾がアルフヘイムに視察に来た時、襲撃されたことは知っておろつ。

アルフヘイムの警備団は実に優秀じゃった。

じゃが、他の街はどうなのかと思つての、抜き打ちでチェックしようということだ。今回の騒ぎを起こしたのじゃ。」

この理由なら権力の濫用と咎められることもない。

実際、この街にも王族や身分の高い人が来る可能性があり突然の襲撃に対処できるか抜き打ちで訓練しても何も不思議はない。

「しかし、森の民とやらは確かに強いがこつも簡単に突破されるのはいざという時に心配じゃの。」

「そ、それは……」

そして、森の民より遥かに性能が劣るエルフが制圧できれば反論もできないだろう。

「早急に対策を考え、突然の出来事にでも対処できるよう考えることじゃな。」

後はミナが説得すれば少なくとも結婚という事態は避けられる。そこから先は分からないが、ミナなら上手くやるだろう。

「さて、妾はこれで失礼するでしょう。行くぞ、レン。」

「御意。」

せっかくヴァナ Heim まで来たんだ。今日はいろいろ食べて回るか。

次の旅先

「それじゃあ次の旅先を発表するわよ。」

ミナ縁談騒動から1週間、ミナの親もあも簡単に制圧されてしまったヴァナヘイムの警備を信じることなんてできるはずもなく縁談はそのままご破算となった。

それに、フリユネが常に一緒にいるということの仕事の方も渋々ながら納得させた。

「次の街は、氷の街、ニヴルヘイムよ。」

氷の街、ニヴルヘイム、そう言われるだけあって年中氷で覆われている極寒の街。

だが、氷や雪が多いせいかわそれで像を作ったりしている内にどんどんレベルが上がりそれを聞いた芸術家たち氷で覆われた幻想的な風景を描くため訪れたりするようになり、いつの間にか芸術の街という2つ名がついた街だ。

「人の芸術は素晴らしいものばかりで今から楽しみです。」

「無駄な買い物はするなよ。」

「分かってます。」

調べたら美術館のようなものもあるみたいですからデート先はそこを見て回ることしましょう。」

はあ、せっかく思い出さないようにしていたことが……別に芸術に興味がないわけじゃないから楽しみといえば楽しみなん

だがフリッグのテンションがおかしくなりそうで怖い。

フリッグは絵画、音楽、建物、舞踊など人が長年をかけて進化させ続けている芸術に目がない。

そっちに没頭してくれればそこまで問題はないんだが、ヴァナヘイムが愛の街として既婚率が一番高い街として有名だがニヴルヘイムはカップル成立数が一番多い街だ。

ただでさえ、芸術に描きたいと思わせるような場所で、月明かりに照らされた氷で覆われた幻想的な風景。

そこで告白すれば結ばれるって触れ込みまである。

実際、ニヴルヘイムで結ばれて周囲に認められなかった時はヴァナヘイムに逃げるっていうことも結構あるらしい。

話は戻るが美術館で散々テンションが上げられたフリッグが最後に見たいとか言い出して連れいて行かれたらこっちの言うことなんてお構いなしで押し倒されそうだ。

「相変わらず大変そうじゃの。」

だからお前が言うな。

「そつえば、フリユネも来るつもりなのか？」

「当然じゃ。」

こんなおも・・・妾もいろいろな街を見回ってみたいからの。」

こいつわざとだろ？

本音を隠すつもりなんて微塵もないな。

「レン、悪いが今回の旅にはついて行けそうにない。」

待て、ストッパーを俺一人でやれと？

「ミナから聞いているかもしれないが俺も彼女が出来てから出来るだけ一緒にいてやりたいんだ。」

くっ、それを言われると何も言えなくなる。

そうなると、このメンバーを俺1人で抑えるというのか？

先日の騒ぎで外堀を固め来て、前より積極的になって来てるミナ、最近ベッドの中に潜り込んできているアリス、俺の気持ちなんて度外視で猛アツクしてくるフリッグ、我が儘で厄介事の塊であるフリユネ、これを俺1人で？

外見だけならとんでもない美少女集団でちょっと前なら眼福と癒されていたところだというのに今見ると癒されるどころか胃が痛くなりそうだ。

「まあ、大変だと思うが頑張れ。」

しかし、ジンもようやく春が来ているのに邪魔するわけにもいかない。

「出発は1週間後でちよつと遠いから一日目は途中で一泊、2日目の夜には到着する予定よ。」

そして、観光は3日目から5日目までの3日間。

6日目の朝から来た通りに帰るから戻ってくるのは1週間後ね。」

この予定という言葉が怖い。

この前は馬鹿王子と遭遇したせいでアースガルドで厄介事に巻き込まれた。

ついでに言えばそのせいでフリユネがここに住むようになってる。

次はどんなことが起こるか怖くて仕方ない。

「今回はどんなことが起こるか楽しみじやの。」

「レンがいる限り何も起きないってことはないから楽しみだわ。」

この2人は俺の苦勞を楽しみにしやがって。

それにフリユネはもう建前さえ言っていないな。

「お兄ちゃん、アリス寒いのが苦手だから向こうでは暖めてね。」

ああ、やっぱりアリスには癒される。

でも最近の行動はちよつとまずい。

だんだん、行動がフリッグに影響されてる。

しかも、フリッグと違って計算されているから性質が悪い。

ベッドにもぐりこんでもフリッグには気付かれないようにしてるし、フリッグが怖くて俺がそのことを言えるはずもない。

「フリッグに目をつけられない程度ならな。」

「約束。」

まあ、どれだけ計算されていて、それが分かっていたも許してしま
うと思うがな。

side フリッグ

もうすぐ、もうすぐレンとデートができます。

私たち神にとって一年なんて一瞬のことですが人として暮らしてい
くようになって一日一日がとても楽しくて充実してます。

楽しみなことを待つことはこんなにも長く感じるものなんです
ね。しかし、この時間を黙って待ってるだけではレンは落とせません。

せつかくのデートなんですからいい加減にレンを落とすまではいかなくても関係を前進させたいものです。
でも、どうやればいいんでしょうか？

押してダメなら引いてみてもレンは喜んで突き放しそうな気がしますし、変な駆け引きだってレンに勝てるわけありませんし……

結局、いままで通り押すだけですな。

一回でも手を出してくれれば後は全力で尽くして逃がさないようにするんですけど。

でも、レンは露骨に迫ると絶対に手を出してくれません。
どうすれば……

side out

side ミナ

今回はどんなことが起きるか楽しみね。

アースガードでは本当に楽しかったから今回も期待できるけど、フリッグだけがレンとデートするのは気になるわね。

あの状態のフリッグに何を言っても無駄だろうから何も言わないけどね。

でも、レンを譲る気はない。

前から好きだって思ってたけど、ヴァナ Heim で助けてもらった時からますます気持ちは強くなった。

助けてもらったからの数日は恥ずかしくて顔を合わせることもできないくらいに心臓が高鳴って顔が熱くなってたくらいだしね。

ああ、私がこんなになるなんて思わなかったわ。
責任は取ってもらわないとね。

side out

side アリス

む、お姉ちゃんだけずい……

アリスだってお兄ちゃんとデートしたい。

後5年早く生まれてたら、アリスも妹じゃなくて女の子として見てもらえるのに。

せっかくお姉ちゃんのをかいくぐってお兄ちゃんのベットに潜り込んでるのに手を出すどころか、計算して行動してること分かって許してくれてる。

うう、完全に妹としてしか見てくれてない……

お兄ちゃんの馬鹿!!

side out

うお!!

な、なんだ!?

さっき、いろいろやばいものを感じたぞ。

この感じはあの3人か……

「どうしたのじゃ?」

「なんでもない。」

ちなみになぜフリユネと一緒にいるかという準備という準備がないからだ。

フリユネは1人執事みたいなのを連れてきて部屋の管理やらをさせてるらしいからその人に準備は任せてるらしい。

俺は男だからそんなに準備という準備は必要ない。

精々何か起きた時の為に準備しておくくらいだ。

「ふむ、レンもなかなかの腕じゃな。」

フリッグは準備で忙しいそう。今日は俺が作ってる。

というか飯の準備すらできないほどに旅行の準備をする必要があるって、それは女だから仕方ないと思いたいが相手はあのフリッグだ。デートの時何が起こるか怖くて仕方ない。

「それにしても楽しみじゃの。」

妾とこんなふうに接する者などおらぬ故、妾も気が楽で助かる。」

「それは良かったと言いたいが、本気で帰らないか？」

別にフリユネ個人は嫌いじゃないが姫という立場が嫌過ぎる。旅先でもフリユネが姫とばれたら何が起こるか分かったもんじゃない。

「前にも言ったであろう。」

妾は帰らぬ。

こんなに楽しい時間というのは生れて初めてじゃ。

それに、父上がいる限り妾がいてもあまり意味がないからの。」

この前は王になる為に何か結果を出すと行ってなかったか？

「はあ、今更帰る必要はないが姫という立場は隠してくれよ。」

「それくらいはしてやる。」

妾も無駄に騒ぎ立てられるのは好きではないからの。」

「それは助かる。」

「一応言っておくが俺はフリユネの下に就く気はない。」

「こう言っただけなんだが俺が就かなければ他のみんなも同じだ。」

「俺たちを狙っているならまず俺を説得するんだな。」

「こいつのことだから武力行使はしなと思うし、なによりフリッグとアリスが抑止になっているからないと思うが念のためだ。」

「こいつは俺たちの中に深く入りすぎて、警戒が薄れているが姫という立場上有能な人材はのだから手が出るほど欲しいだろう。」

「承知した。」

「まずは、レンを口説くことに専念するでしょう。」

「しかし、どこで気付いたのじゃ？」

「フリユネのような存在がただ面白いがために時間を潰すとは考えにくい。」

「そうなれば人材確保のため仲良くなっておこう思うのは自然だろう？」

「まあ、半分は面白いからという理由だろうがな。」

「相変わらず頭が回る。」

「しかし、そう身構える必要はないぞ。」

「妾は今の生活が気に入っている。」

「王族の立場を捨ててもいいと思えるくらいにな。」

「思っても実行には移さないだろう？」

「王族としての誇りは捨てられないからな。」

「まったく、人の心と呼んでいるかのようじゃな。」

「その通りじゃ、王族とは民あつてのものじゃ。」

いままで、生かしてもらって置いて捨てるわけにもいかぬ。」

俺には到底無理な話だ。

王になれば必ず切り捨てなければならぬ時が来る。

俺はその重圧に耐えられない。

俺と同じような年でそれに耐えられるフリユネは本当に凄いと思う。

「フリユネが王になった時には割安で依頼を引き受けてやるよ。その代わり、あいつらとは今まで通り友達でいてやってくれ。」

「面白い男じゃ。」

よからう、レンを含め妾の友人じゃ。」

姫が友人ね……

また、死ねない理由が出来てしまったな。

嵐の前の静さ？

「みんな準備はいい？」

なんだかんだで1週間後、出発当日となった。

移動法はもちろん、ミナ自家製の魔力エンジン自動車。

さらに、フリッグの結界を張っているから魔物なんかも寄ってこない。

「それじゃあ行くわよ。」

無駄だと分かってはいるんだが何事ありませんように。

・ ・ ・ ・ ・

とりあえず何事もなく中間地点である街に到着。

そもそも車で走っていてフリッグの結界が張られている時になにも起こるはずない。

起きるとしたら隕石でも落ちてくるくらいだろうがこのメンバーで隕石が落ちてこようと問題はない。

「それじゃあ、おやすみなさい。」

「ああ、おやすみ。」

いつもなら中間地点で何か起こるんだが、今回は何も起きてない。ヴァナヘイムではミナが仕掛けてきたし、アースガルドでは馬鹿王子と遭遇した。

結果的に、それぞれと深く関わることになったから今回も同じようなことが起きると思ってたんだが何も起きてない。

なにもないことは本当にいいことで助かるんだが嵐の前の静けさと勘繰ってしまう。

となると、起きるのはニヴルヘイムか。

しかし、芸術の街で何が起きる？

少なくとも、アースガルドのような派手な問題にはならないはずだ。それに、街の長が出てこようとフリユネがいる限りどうとでも出来る。

ニーズヘッグが総出したところで神に人として最強と呼べる2人がいる。

はあ、なにもない方が逆に不安って厄介事に慣れ過ぎてるな。とりあえず寝るか。

・
・
・
・
・
・
・
・

「結局昨日は何もなかったわね。」

翌日、朝食を取った後出発。

「つまらぬな。」

これでは何のために妾がついてきたか分からぬ。」

「帰れ。」

せめて、ニヴルヘイムの視察くらいの建前くらい言え。

「私としては平和にデートができそうに嬉しいですけど。」

これが今回の厄介事なんじゃないか？

それに、平和と言っているが少なくとも俺に対しての平和ではないだろう。

「ちなみにデートはいつするんだ？」

「明日です。」

出来れば滞在中は毎日したいところですけどミナとアリスが駄目と
いうので仕方ないので初日だけで我慢します。」

良くやったと、ミナとアリスに言ってやりたい。

3日もびくびくしながら過ごさないといけないなんて拷問に近い。

「その分、明日は楽しむつもりですからよろしくお願いします。」

これを断れないから駄目なんだよな。

こいつが明日をどれほど楽しみにしてたかは嫌でも知らされる。

だから、俺も楽しませやりたいのは山々なんだがやりすぎるとバツ
トエンドってのが難しい。

本当に厄介だ。

「手加減はしてくれ。」

俺はデートなんて経験はないんだから期待されても困る。」

ヴァナヘイムのあれはノーカウントだろう。

そういえばフリユネとは2人で街を案内して事があつたな。

そう思えばあれが初デート？

フリユネが初デートなんていろいろ嫌過ぎる。

だから、あれもノーカウントだな。

「なにやら不快なことを言われ気がするのじゃが。」

「気のせいだ。」

時々こいつは人の心を呼んでいるんじゃないかと疑問に思う。

「大丈夫です。」

デートプランは全部私に任せてください。

もちろん、レンが行きたいところがあつたらその度に変更しますけど。」

男として何か駄目な気がするがこの際気にしないようにしよう。

「今回は日ごろの感謝も含めてるんだからフリッグが行きたいところでもいいよ。」

俺が行きたいところって言うてもなにも調べないから分からないしな。」

日ごろの感謝もあるが半分はいつもギリギリのラインで保ってる我

慢させてるものを発散させる為というのものもあるがな。

「レンが私のことを気遣ってくれなんて!!
ついに、私の思いに添えてくれるんですか!?!」

そんなわけないだろうが。

だから、ミナとアリスよ睨まないでくれ。

「この際だからはっきり言っとくわね。

私はレンを誰にも渡すつもりはないわよ。

例え、それがフリッグでもね。」

渡すも何も俺は誰の物にもなった覚えはないし、フリッグを挑発しないでくれ。

「それはこちらのセリフです。

レンは絶対に渡しません。

誰が何と言おうと私はレンを手に入れます。」

スイッチが入ってない状況でこんなことを言うとは少なくともミナをライバルと認めているってことか。

それでも、こいつに言われると悪寒がする。

「ちなみにアリスも負けないから忘れないでね。」

アリスはこういうところまでしっかりとしてるな。

2人が火花を散らしてる時にアピールしてくるとは……………

「なあ、アリス、妹としてじゃ駄目なのか?」

「駄目。」

アリスだって女の子だから好きな人には一番に愛してもらいたいだよ。」

今のところ一番愛していると言えばアリスなんだが家族愛としてはやっぱり駄目なのか。

そりゃ、恋人として愛されるってのは特別だと思うがどうなったとしてもアリスは愛していると見える気がする。

「でも、俺は百年後には何もしなくても寿命で死ぬぞ。」

アリスがずっと一緒にいたいと言ってるが俺は人間だ。

限定的な不老不死じゃアリスの願いはかなえられない。

フリッグなら、限定的を永久的に変えられるだろうがアリスを選んだ俺にそこまでしてくれか分からないしな。

「それは大丈夫だよ。」

お兄ちゃんにはアリスの眷族になってもらうから。」

「それは俺も血を吸わないと生きていけなくなるってことか？」

それは無理だ。

俺が変わったとしても誰かを傷つけてもで生きたいとは思えない。

「それも大丈夫だよ。」

眷族には2種類あってね、片方はお兄ちゃんが言ってた通り吸血鬼になるんだけど、もう一つは吸血鬼が生きていくため血を吸うだけ為だけの人形になるものがあるんだ。

本来は人形には意思なんて与えないのが普通なんだけどそんなことはしないから安心していいよ。」

それなら今の状況とほとんど変わりはないな。
確かにそれなら永久的に生きることにはできるだろう。

「だから、そのことを気にしてるなら気にせずアリスを選んでね。」

「その時が来たらな。」

これだけ言われてら流石に自殺は出来てもしなと思うがやっぱり死にたいという願望はある。

アリスには悪いが百年後には別れることになるだろう。

「それにしても本当に油断ならないわね。」

「アリス、私とレンの娘になりませんか？」

そうすれば、レンとずっと一緒にいられますよ？」

こいつらは俺の意思をなんだと思ってやがる。

口に出したところで意味がないだろうから言わないけどな。

「相変わらずじゃな。」

これだからレンの周りは飽きぬ。」

そしてこいつは所々で引つ掛かることを言いやがって。

俺を挑発でもしてるのか？

まあ、フリユネが俺を恋愛対象として見ていないってことが分かるからまだ許せる。

フリユネまで加わったらもう抑えられる気がしない。

「このまま争っていても不毛なだけだからここらで止めましょう。」

「そうですね。」

結局、レンが決めることですし私たちが言い争っても無駄ですね。」

「うう、お腹すいた。」

お兄ちゃん、血、貰うね。」

もう毎日のことだから、正面から抱きついてきても誰も何も言わないようになってる。

血を飲んでる時のアリスは何もしないって分かってるしな。

「そういえばもういい時間だしご飯にしましょうか。」

そんなわけで昼休憩となったわけだが

「なんだあれは……」

馬鹿みたいにでかい牛のような魔物が俺たちを見下ろしてる。

「あれはベヒモスじゃな。」

この辺りが生息地と聞いておったが滅多に見ることができない魔物じゃぞ。」

それはいいものを見たと言いたいが明らかに敵意を向けてないか？

「フリッグ、結界はどうした？」

「あの結界は敵意のあるものだけを排除するものなんですけど一度中に入ってしまうと効果がないんです。」

恐らく寝てたのでこちらに敵意が向いてなかったんじゃないでしょ

うか。」

なるほど。

それじゃあ、偶然昼休憩で止まったところに偶然歩いてきたってのか？

「！！！」

「あれって人が勝てるものなのか？」

「本来なら国を挙げて討伐する対象じゃな。

まあ、妾なら1人でも倒せるがの。」

どうやら運がなかったのはあの魔物の方だな。

俺たちじゃなければ痛い目を見ずに済んだのに。

「ふむ、妾の運動の為に付き合ってもらおうとしよう。」

……あり得ない光景だな。

山のようにでかい魔物をあんな細腕で殴り飛ばしてる。強いとは聞いていたがあそこまでとは。

「！！！」

「ひるたひ。」

ん？

まだ飲み終わるには早いな。

「邪魔。」

もつとあり得ない光景を見てしまった。
幼女が山のような魔物を投げ飛ばした。
しかも、100m以上は飛んだな。

「アリスの至福の時間を邪魔した報いだよ。
お兄ちゃん、もうちょっと貰うね。」

このメンバーに勝てる奴なんているんだろうか？
ミナはともかくとして残りの三人は1人1人の力で世界征服できる
んじゃないだろうか。

ニヴルヘイム その？ デート

喜ぶべきなのか嘆くべきなのか何事もなくニヴルヘイムについてしまった。

なぜ、相対する二つの感情があるかという何事もなく無事に着いた喜びと、何事もなくニヴルヘイムに着いてしまいフリッグとのデートが避けられないものとなってしまったことに対する悲観だ。

昨日の夜はどうにかデートを避けられないものか考えていたが結局何も浮かばずデート当日を迎えてしまった。

ここまで、来て欲しくないと思ったことなんて過去にないくらいだ。それほどまでにフリッグの病みっぷりは洒落にならない。

「待ったか？」

「今来たところですよ。」

デートといえばというやりとり。

同じ宿に泊まっているのに待ち合わせなんてする必要ないが

「デートと言えば待ち合わせです。」

そう言う訳で、街の広場で会いましょう。」

ということ待ち合わせることになったわけだ。

「それじゃあ行きましょうか。」

「っ！！」

前に言ってやがったが本気で腕を絡めてくるとは！！

確かにこいつのヤンデレは厄介だが、こいつが美少女ということも厄介だ。

しかも、こいつはかなりスタイルが良い。

こっ密着されると胸が腕に当たる。

だが、それを指摘すると主導権を渡してしまうようなものだ。

だから、何事もないように振り舞わなければならないのだが俺も男だ。

美少女にこんなことをされては嫌でも意識させられる。
耐えてくれよ俺の理性……

side フリッゲ

効果は上々のようですね。

このことを教えてくれたフリユネには感謝です。

レンが顔を赤くしているところなんて初めて見たような気がします。

これはいけるかもしれません。

ついにレンと……

もっとくっつきましょう。

「っ！！」

ふふっ、動揺してます。

いつも私が翻弄されっぱなしですからたまにはこっいつのも悪くありませんね。

それにしても、やっぱり指摘してくれませんか。

言ってくればそこから攻められるのですが流石はレン。

この程度の駆け引きなんて通用しませんね。

「それで、どこに行くんだ？」

「美術館といってもそれぞれの分野で複数あるようですから、最初は絵画を見に行きましょう。」

おっと、動揺しているレンを見ているのも楽しいですがせっかくのデートですし私も楽しまなければ。

side out

どうやら、美術館の方に関心が行ったようだな。

あのまま攻められてたら少しやばかったかもしれない。

俺は百年以上生きるつもりはない。

だから、誰の想いにも応えるつもりはないし応えちゃいけない。

俺は残す方だからいいが残されるものの痛みはつらいものだ。

それにフリッグに伝えてしまったらそれこそ永遠にフリッグだけを見るくらいの覚悟が必要だ。

だから、絶対に手を出してはいけない。

よし、理論武装完了。

これで多少のことでは揺らがないだろう。

「レン、着きましたよ。」

流石芸術の街、でかいな。

こんなものが複数あるのか。

「早速見て回しましょう。」

「分かったから引つ張るな。」

本当に子供みたいなやつだな。

side フリッゲ

ああ、いいですね。

どれもこれも素晴らしいものばかりです。

絵を見るだけで圧倒されるようなものを感じます。

これが人の芸術、一つのことに対して短い一生でここまで極めることが出来る人は本当に感心します。

一枚一枚にそれぞれの生きざまが描かれ、表現の仕方はこれまで積み上げられてきた人の歴史が感じられどれだけ見ていても飽きませ
ん。

いっそのことニヴル Heim に引越したいくらいです。

でも、アリスが寒いところは苦手なので無理ですね。

どこか人のこないところに座標指定の目印をしておくしましょう。

そうすればすぐに来れますしね。

そうなると家の方にも必要になりますね。

いえ、こうなればすべての街に目印をつけておけば一瞬でいけるようになりますから今度から行くところには付けるようにしましょう。

side out

本当に好きなんだな。

腕は離さないが真剣な表情で一枚一枚見て回ってる。

まあ、確かに素人目でも凄いと分かるような絵ばかりだ。

俺も見ていると楽しいと思える。

「はあ、いいものばかりでした。」

「もういいのか？」

「他の所にも行きたいですし、そろそろお昼ですから。」

また、ヴァナヘイムの悪夢が繰り返されるのか？

いや、ここはあの街じゃないから観衆の前ってことはないだろう。だが、念のためやられたらおとなしく食べるとしよう。

「それでは行きましょうか。」

美味しいと評判のお店があるそうなのでそこに行きましょう。」

・
・
・
・
・
・
・

「あ〜ん。」

やっぱりこうなるのか。

心構えをしても恥ずかしい。

「美味しいですか？」

「ああ、確かに美味しい。」

「それは良かったです。」

「レンも食べさせてください。」

まあ、今回は大衆の前じゃないし周りにもしてる奴がいるからかな

りましたな。

「ほら。」

「美味しいです。」

もう、周りから見たら私たちは恋人同士ですよね。

私はレンさえよければいつでも大歓迎ですよ。」

束縛されて喜ぶようなMじゃなければいくら美少女とはいえないやがるに決まってるだろう。」

「俺にその気はない。」

ずっと言ってるだろう?。」

「相変わらず強情ですね。」

レンが応えてくれれば、そ、その溜まってるものも私がしてあげ
るんですよ……。」

恥ずかしいなら言わなければいいのに。」

「馬鹿なことしていないで食ったら次に行くぞ。」

「女の子にここまで言わせて手を出さないなんて男としてどうな
んですか?。」

うるさい。

そんな、ハイリスク、ローリターンの行為をする奴なんてどこに
いる。」

いるとしたら後先考えてない馬鹿だ。」

「女の子って年じゃないだろ。」

「だから私は最古参の神と比べると千分の一も生きてません!!
人に換算すると生れたばかりの赤ちゃんのようなものです。」

だから神と人を比べようとするな。

「それならなおのこと、赤ちゃんに手を出す程落ちぶれてない。」

「ああ言えば、こう言う人ですね。」

そんな人は嫌われちゃいますよ。」

「フリッグにしか言わないから大丈夫だ。」

「それは私が特別ということですか!!」

お前も意味を歪曲して取るだろうが

「馬鹿なこと言っていないで次行くぞ。」

「つれないですね。」

まあ、いいです。」

いつか、レンに貰ってもらいますからね。」

そんな日が来ないことを祈る。

side フリッグ

絵画の次は剣や装飾品など過去の王様や騎士たちが所有していたものです。

人の武器は私たち神が作るものと比べると圧倒的に格が落ちますがこれは仕方ないことでしょうが見栄えは人の武器の方が美しいです。この外見をベースにして私が鍛え上げれば質も見栄えも最高の物ができますね。

ちよつと考えておきましょう。

見て回ると、中にはどう見ても武器として使いづらい物もありますが見栄えのある物だと偉い人だと分かりますからその為というものもあるんでしょう。

装飾品は本当に美しいものばかりで本当に複製してしまおうと思っ
てしまいます。

それに私がいろいろ手を加えれば最高の神器になります。

あんまり目立ちたくないレンですから派手なことはできないんです
けど家の中だけなら問題ないですよね？

時間があつたら1人でちよつと来ましょう。

「もうこんな時間か。」

氷の街というだけあって日が沈む時間はアルフ Heim よりかなり早
いですね。

それに楽しい時間は本当に早く過ぎてしまいます。

「それじゃあ最後に行きたいところがありますからそこに行きまし
ょう。」

大好きです、愛してますよレン。

side out

やっぱり最後はこういうところか

「綺麗ですね。」

確かに街の淡い光と月明かりに照らされた風景は綺麗だ。

「レン、好きです。」

レンの心を私にください。」

「残念だが無理だ。」

そう言えばこういう直接的な言い方は久しぶりだな。

「はっきり言われるとやっぱりつらいですね。」

「いつものことだろう?。」

「失礼ですね。」

私はレンに告白するたびに緊張で胸が痛いくらいなんですよ。」

確かに、押しつけられてる胸から分かる。

だが、それでも受けられない。」

「レン、抱きしめてくれませんか。」

「変な勘違いはするなよ。」

「暖かいです。」

ああ、これはやばいかもしれない。

フリッグもだが俺も心臓が高鳴ってる。」

「レン、私の心臓の音聞こえてますか？」

「ああ。」

やばい、フリッグが滅茶苦茶可愛く見えてしまう。
なんでこんな時に限ってしおらしいんだよ。

「好きです。」

あらゆる世界の中で誰よりも愛しています。」

「俺はそこまでフリッグを想えない。」

「今はいいいんです。」

いつかそうなってもらいますから。

今はこうやって抱きしめてもらえればいいんです。」

いつもみたいに俺の意思を無視するぐらいに迫ってこいよ。

その方が流しやすいつてのにこうしおらしいといういるやばいくな
つてしまう。

いくら病んでいるとはいえフリッグは俺が見た中で最高レベルの美
少女で、こんなにもはつきりと好きといわれて揺らがない男なんて
いない。

「レン、キスしてくれませんか？」

これは私の我が儘でキスしてもレンが応えてくれたとは思いません
から。」

俺の目の前にいる美少女は誰だ？

フリッグってこんなに可愛い奴だったか？

「勘違いするなよ。」

「これは日ごろの感謝の気持ちだからな。」

「はい、んっ。」

顔が熱い。

俺の心臓の音もフリッグに伝わってるな。

「幸せです。」

どうするんだこの空気。

もう最後まで行くのか？

もう行ってしまうてもいいとすら思えてしまうっ。

「レン……。」

「フリッグ……。」

「号外だ!!！」

「っ!!！」

さっき俺は何をしようとした？

自分からキスを？

「怪盗、ダークハートの新しい予告状が出されたぞ!!！」

あのまま流されてたらフリッグを抱いていたかもしれない。
やっぱり、こいつは危険だ。

たった、数カ月でここまで俺の心に入り込んでいる。

「そのままじゃ、本当に奪われかねない。」

「帰りましょうか。」

「ああ。」

ニヴル Heim その？ 怪盗、ダークハート

side フリック

結局あのはあれ以上のことはなく皆の所へ帰ってその日を終えました。

ただ、帰ってからのレンは私に対してまた壁を作ったんですけどね。前から私には一枚壁を置いていたんですけどさらに増えたようです。でもそれは、壁を置かないと私に心を奪われることを恐れているという証拠でもありますから喜ばしいことでもあります。

それにしても、怪盗だか何だが知りませんがもう少しでレンを落とせたというのに良くも変な騒ぎを起こしてくれたものです。

会うことがあったら捕まえて警備の人に突き出してやりましょう。

side out

「レン、ダークハートを捕まえるわよ。」

「寝言は寝て言うから許されるんだぞ。」

まったく朝っぱらから訳の分からないことを。

「寝言じゃないわよ！！」

昨日、フリユネと話してただけこのままじゃ何も起きそうになりじゃない？

それなら、こっちから動こうという話になったのよ。」

「このままでは本当にただの旅行じゃ。」

そんなもの妾は許さぬ。」

お前ら2人は特に狙われていることを自覚してるのか？

それに、せっかく何事も起きそうにないってのにどうしてわざわざ首を突っ込んでまで厄介後に関わらなきゃならないんだ。

「捕まえたきゃ、勝手にやってろ。」

俺は適当に観光してる。」

「アリスはお兄ちゃんについて行くよ。」

「私は個人的に怪盗には思うところがありますので協力します。」

ということはアリスと2人が。

アリスに美術館は退屈だろうから適当に歩いて回るとするか。

「3対1よ。」

レンも協力しなさい。」

「却下だ、俺を巻き込むな。」

昨日回ったところでいいところがあったからそこら辺をもっ一回見て回るか。

「みなよ、ここは妾に任せよ。」

レン、少し表に出よ。」

なんだこの嫌な予感は……

「何の用だ？」

「妾が命じよう、妾に従え。」

「却下だ。」

何を言ってるんだこの我が儘姫は。

「妾は姫じゃぞ。」

その妾の言うことが聞けぬというのか?」

「残念だが今のフリユネは姫という身分を隠しているということになってるんでな。」

それに姫だからと言ってきく理由がない。」

俺がフリユネの我が儘を聞いてやる訳ないだろう。

そんなにわがままを通したかたっいたら帰れ。

「ふむ、ならば昨日のことをミナとアリスに言ってもよいのじゃない?」

「なんのことだ?」

そんな鎌をかけたところで無駄だ。

「レンとフリッグがキスをして、さらにレン自らフリッグにキスしようとしたのじゃろう?」

「知らないな。」

落ち着け、もし俺たちの後をつけていたとしてもフリッグが気付か

ないはずがない。

「いつまでとぼけていられるか見物じゃな。

今回のデートでフリッグのことを意識して不自然にならぬように壁を作っておるじゃろう。

それほどに、夜景での告白は効いたようじゃの。」

「……………どうして知ってやがる？」

ここまで来ると本当に知っているとしか思えない。

しかし、どうやって、って、まさか……………

「分かったようじゃの。

フリッグ本人から聞いたのじゃ。

今回のデートは妾がいるいろとアドバイスしたのでな、その結果を聞いたのじゃよ。」

あの馬鹿女、よりもよって一番知られたくない奴に全部話しやがって。

「さて、これをミナとアリスに教えればどうなるか楽しみじゃのう。」

「この我が儘姫が……………」

「もし、協力をすると言っのならばこのことは妾の胸にしまっておいてもよいのじゃが、どうするのじゃ？」

このことがミナとアリスに伝わりでもしたら考えるだけでも恐ろしいことになる。

「つち、協力してやるよ。」

「ふむ、交渉成立じゃな。」

一番面倒な奴に弱みを握られたな。

side アリス

「レンが協力してくれるそうじゃ。」

「良くやったわ。」

む、せつかくお兄ちゃんと二人きりになれるチャンスだったのにお兄ちゃんが帰って来てからお姉ちゃんに対して壁を作ってるみたいだからデートの時何かあったってこと。
アリスも負けてられないのに。

「お兄ちゃん、アリスと2人は嫌？」

「俺としては大歓迎なんだがいろいろあつてな。
今度埋め合わせするからアリスも手伝ってくれ。」

よし、言質は取った。

お兄ちゃんは約束は破らないからこれでデートできる。

「約束だよ。」

「ああ、約束だ。」

「こらそこ、朝からいちゃいちゃしない。」

最近はお姉ちゃんたちもアリスをライバルとしてみてるのか、血を吸う時以外でべたべたしていると牽制される。

でも、肝心のお兄ちゃんが妹としてしか見てないならなんの意味もない。

せめて、もう少し成長できたらいいのに……

side out

「で、ダークハートってのはどんな奴なんだ？」

「昨日、ある程度聞いて回ったんだけど数ヶ月前からニヴルヘイムを騒がせている美術品を狙う怪盗で素性はもちろん不明、仮面をつけてるから性別も分からないって話よ。」

「それだけにしてはやけに注目されてるな。」

ただそれだけなら一般の人がそこまで興味を持つものか？」

ここが芸術の街ってことは分かるが全員が芸術家ってわけじゃない。確かに、正体不明の凄腕怪盗ならある程度の注目を集めるのは分かるが、予告状が送られたくらいで騒ぎたてるものか？

「それはダークハートがどういう訳か盗んだ美術品を返してるからよ。」

ダークハートが狙ってるものって一般公開があまりされてないもので盗んで数日後、一般人でもの目に止まるようなところに置いてい
るらしくて受けが良いのよ。」

なるほど、納得いった。

確かにそれなら人気が出てもおかしくない。

芸術の街ってことで芸術家にとっては最高の環境なんだろうがそれ以外からすると娯楽も何もないとこるだから、そういったゴシップには過敏に反応するだろう。

「そして、ダークハートが次に狙う美術品は『墮天使の楔』って呼ばれてる剣よ。

なんでも、この世界に現れた墮天使を地に縛り付けた剣らしいわよ。

「

また物騒な名前だな。

しかし、一般公開がされていない美術品。

それは、何か公開できない理由があるってことだ。

魔法が存在しているこの世界で公開できないって理由は山ほど思いつくな。

「レンも気付いてると思うけど、ダークハートが狙う美術品ってそうとう危険なものらしいんだけど、返されてる美術品は一般人が見てるんだけど被害は無いらしいわ。

それに一度盗まれたものは一般公開されている物もあるそうよ。」

そうなるって疑問が生まれてくるな。

一般公開ができないほど危険な物をいくつも安全なものにしてるってのになぜ追われる？

盗んでも返してくれるというなら一度盗ませて安全なものにした方が良いに決まってる。

それにダークハートの目的に裏を感じる。

表向き、一般公開させるために一度盗んで安全なものにするってふうに取れるが、そもそもなぜ一般公開されていない美術品を知っているんだ？

危険だからこそ保管されている美術品ということはそもそも名前すら表には出ないだろう。
何か嫌な予感がするな

「それにしても、捕まえるってどうするつもりなんだ？
予告状が出されてくるらいなら警備くらいいついてるだろう？」

それも何度も盗まれてるくらいならかなり大掛かりなものだろう。

「毎回、盗まれてる警備なんてすぐに突破されるでしょうから盗んで逃げようとしたところを捕まえるつもりよ。」

まあ、こつちには1人1人が世界を相手取れるような奴が3人もいるからな。

いくら凄腕だからといって逃げられはしないだろう。

「それで、捕まえてどうするつもりだ。」

「私の勘が捕まえた後になにかあるって言ってるのよ。」

「考え直せ、たまには平和な観光でもいいだろう？」

ミナが言つと洒落にならない。

捕まえた後ってことはその怪盗との関わりが続くってことだ。
下手をすれば俺たちまでお尋ねものになってしまう。

「嫌よ。」

ああ、レンがデートしてくれるって言うなら考え直してもいいわよ。

「

「駄目です。」

レン、ダークハートを捕まえましょう。」

くっ、昨日のことがあったせいでいつもより意識してしまっな。表に出さないようにしなければ。」

「分かったよ。」

さっさと捕まえて突きだすか。」

ただの怪盗ならいいんだが………

ニヴルヘイム その？ 怪盗、ダークハート（後書き）

我ながらネーミングセンスのなさに泣きたくくなります。

ニヴルヘイム その？ ミナの尋問

ダークハートの予告状によると今夜の0時に『墮天使の楔』を奪いにくるそうだ。

一般公開されていないものだからもちろん俺たちがどこにあるかなんて分かるわけがない。

警備員なんかをつけてたらそこにあると言ってるようなものだから警備員も目立たないようにしてるだろう。

知ろうと思えば街の長の所に行ってフリユネの名前を出せば聞くことはできるだろうが話しをこじらせたくないから却下だ。

つまり、俺たちは騒ぎが起きた方に出向い手捕まえるしかない。完全に後手だ。

「そう言えばダークハートの手口とかは分からなかったのか？」

「狙われてるものが非公開のものだから一般人じゃ盗まれた後のことしか分からないから詳しく聞けなかつただけど、追っている最中に見失ったかと思うと離れた場所で見つかつてそのまま逃げられるらしいわよ。」

「それは、ダークハートは複数犯っていう線は無いのか？」

「さあ、実際警備に着いた人からの話じゃないから詳しくは分からないわ。」

でも、聞いた話では可能性高いわよ。」

そんなに単純な相手なら簡単に捕まえられるんだが何度も警備の目をかいくぐって来てる凄腕の怪盗というくらいだ。

逃げ道くらいは念入りに確認してるだろう。

「配置はどつする？」

「俺とミナが高いところからダークハートを見つけて残りの3人が捕まえるってのが無難だな。」

危険な物ってことは人が寄り付かないところに保管されてるはずだからどこかの建物の中か地下に保管されてるだろうから3人は適当な位置に待機だな。」

「どつやって合図を送るつもりじゃ？」

「それは私が遠くにいてもこれを持っている同士なら連絡を取れるものを作ったから問題ないわ。」

なんでも一定の魔力の波長を発して、その波長の魔力だけを感知するらしい。

魔法に関してはまったくの素人なので凄いのか分からないが流通してないところを見ると凄いんだろう。

遠距離で連絡を取り合えるってのは本当に便利だ。

地球では携帯があつて当然だったから無くなつたら改めてその便利さに気付かされる。

ちなみにこれはコストが高すぎて量産はできないらしい。

それに、常に一定の波長を発する物を作るにはかなり精密な制御が必要らしくミナレベルじゃないと作ることにはできないそうだ。

「それじゃあ夜まで時間あるし、皆で観光に行きましょうか。」

「昨日は何してたんだ？」

「3人で適当にぶらついてたわよ。」

「ここは見る物は山ほどあるわけだし退屈はしなかったわね。」

「今日はどこに行くつもりなんだ？」

「特に決めてないわ。」

「いつも何か起きるから観光なんて少ししかできないと思ってあんまり調べてなかったから。」

「一応、旅行だよな？」

「期待すること間違ってるかい？」

「それじゃあ適当にぶらつくか。」

「昨日は美術館だったから今日は街並みを見て回るか。」

.....

「やっぱり今回は何も起きないらしく午前中の観光もあいつらが軟派されるくいのことしかなかった。」

「カップル成立率が高いこの街ってことで芸術家の他にも出会いを求めてこの街を訪れる人も多い。」

「そんな中、美少女4人がうろついていたら声もかけたくなるだろう。もちろん俺もいたがあの4人と一緒にいると存在なんて霞んでしま

う。

結果はもちろん一蹴、しつこい奴等は言うまでもなく無残な結末を迎えた。

「そろそろね。」

「しかし、わざわざ予告状を出すなんてよほどの目立ちたがり屋が馬鹿かどっちかだな。」

いや、目立ちたがり屋が馬鹿だから結局は馬鹿な奴になるのか？

「いろんな人がいるってことよ。」

それより、フリッグとのデートはずいぶん楽しかったみたいね？

「………なんのことだ？」

まさか、ミナにまで言ってないよな？

「気付かないと思ってるかもしれないけどレンを良く見てる私たちからすればあからさまにフリッグから距離を置いてるわよ。わざわざ距離を置くってことは昨日のデートで危なかったってことでしょ？」

くっ、いくらなんでも鋭すぎるだろう。

距離を置くと言っててもあくまで不自然にならない程度だぞ。

「ちなみにアリスも気付いてるわよ。」

それで、昨日はいつたい何があったのかしら？」

「黙秘する。」

まさかアリスまで気づいてるとは……
だが、何をやったとまでは知られていないのは唯一の救いだな。

「言えないほどのことだったてことね。」

フリッグの様子からすると手を出したようには見えないけどその一歩手前ってところ？」

これだから頭のいい奴は厄介だ。
迂闊に反応することもできない。

「沈黙は肯定と取るわよ。」

「想像にお任せする。」

俺は何も悪いことはしてないよな？

それなのになぜこんな尋問を受けなきゃならないんだ。

「そう、あんまり悠長なことを言ってられないところまで来てるってことね。」

流石はフリッグでことかしら。」

極寒の街なのに背中汗でびっしょりだ。

徐々に追い詰められてる。

「昨日はフリッグとキスした、それだけだ。」

こうなったら開き直った方が良いだろう。

別に知られて弱みとなるものじゃないし、このまま追い詰められたらどんな約束を取り付けられるか分かったもんじゃない。

「どっちから?」

「フリッグが頼んできたからした。

一応俺からってことになるな。」

「ふん。」

これで終わってくれればいいんだが

「本当にそれだけ?」

どうして、デートの内容を根掘り葉掘りしゃべらされてるんだ?

お前は俺の保護者か

「それ以上のことがあると思うか?」

「質問に質問で返すってことは話しを逸らしたいってことよね?」

くっ、まずい。

本当のことを言えばさらに積極的なるだろう。

そんなことになれば俺の身が持たない。

「まあ、いいわ。」

た、助かったのか?

「私ね、アースガルドではレンが幸せになってくれれば私じゃなくてもいいと思ってたんだけど、最近アルフ Heim でもヴァナ Heim でも助けてもらったじゃない?」

ああいうところ見せられたらやっぱり私を見て欲しいって思ったやうのよ。」

俺にどうしろと？

あの場面で助けられないわけにはいかないだろう。

「だから、レンがフリッグの方を向いてると正直良い気分って言う訳にはいかないわけよ。」

「別に俺はフリッグを特別視してるってわけじゃないぞ。」

確かに、昨日は雰囲気にもまれて危なかったが落ちたという訳じゃない。

「特別視してなくても警戒はしてるでしょ？」

私はフリッグみたいに縛り付けたいわけじゃないからあんまりレンを追い詰めるようなことはしたくないんだけど、それでレンがフリッグを選ぶっていうなら私も考えを変えざるを得ないわけよ。」

やけに、遠回りに追い詰めるような言い方をしていたのはそのせい
か。

「……………何が望みだ。」

「フリッグにお願いされてキスしたんでしょ？
それなら私もお願いしたらしてくれるわよね？」

断るという選択肢はもうないな。

ここで断るということはフリッグが2人に増えるようなものだ。
流石にフリッグのようにヤンデレになるわけじゃないと思うがそれ

でもフリッグのように迫られれば正直やばい。

「このことは誰も言わないでくれよ。」

「もちろんよ。」

こう振り回されてばかりはまずいな。

フリッグもいないし少しからかうとするか。

「んっ！！」

「どうかしたのか？」

「い、今、し、舌……」

「キスはキスだろう？」

このくらいで恥ずかしがってたら本番は無理だな。」

「そ、そんなわけないでしょ！！

これくらいなんともないわよ！！！」

こうなったら俺のペースだな。

「そうか？」

それじゃあもう一回キスしてやる。」

「うっ、ちょ、ちょっと待って！！！」

顔を真っ赤にして、フリッグもだが攻められると弱いんだよな。

「どうしてだ？」

「何ともないんだろう?。」

「そ、それはそうだけど、心の準備が!？」

「冗談だよ。」

それより、ようやく来たようだ。」

「へ?。」

どんな手を使つか見させてもらおうぞ。

ニヴルヘイム その？ ミナの尋問（後書き）

どうやら今日か明日が連続投稿の限界のようです。
そこからは更新が不定期になると思います。

ニヴルヘイム その？ 鬼じっし

「おい、本当に消えたぞ……」

街を一望できる所から双眼鏡で姿を捕えてたはずなのに、突然見失った。

「ふん！！」

からかいすぎたか……

キスするのもダークハートを捕まえようと言ったのもミナなんだから多少のことは許して欲しい。

「悪かった。」

だから、ダークハートを探してくれ。」

こういう時は素直に謝っておいた方がいいか。

でも、フリッグやミナのこういうところを見るとどうしても加虐心が湧くんだよな。

アリスにそんなことできるはずないし、フリユネなんかは皮肉を返してきそつだ。

「絶対、いつか見返してやるんだから。」

駄目だ、またいじめたくなってきた。

だが、真面目にやってないとフリッグたちに気付かれるから我慢しよう。

「他の場所に転移するって難しいのか？」

「空間転移の魔法は既に失われてるはずよ。使えるなんて人がいるなんて聞いたことないけど。」

しかし、そうとしか思えない消え方だった。

「いた!！」

「どこだ!？」

「いま、フリユネの方に向かってる。」

「分かった。」

フリユネ、聞こえるか？

いま、ダークハートがそっちに向かってる。空間転移のようなものを使うから気をつける。」

『それは面白そうじゃの。捕まえているいる吐かせたいものじゃ。』

せめて、話を聞くという表現にしろ。

side フリユネ

「どうやらあれのようじゃの。」

妾の娯楽のために頑張ってもらおうとするかの

「そなたがダークハートじゃな？」

大人しく捕まってもらう。」

「……………」

何もしゃべらぬのか？
つまらぬな。

「妾が逃がすと思っておるのか？」

少々足が速かろうと逃げ方が上手からろうとそんな小細工が通用しない相手がいることを教えてやるとしよう。

「！…！」

鬼ごっこことは久しぶりじゃの。
神力で強化した妾が負けることなどないがの。

「どうしたのじゃ？」
お得意の空間転移は使わぬのか？」

「……………」

ほう、本当に空間転移を使えるものがあるとは驚きじゃが

「その程度で逃げられると思っておるのか？」

神力を広げれば最大半径5kmまでなら誰がどこにいるくらい把握するくらいお手のものじゃ。

「さあ、妾を楽しませて見せよ。」

そして、神力で強化した体なら空を蹴ることも可能じゃ。簡単に言つと空を飛ぶことができるということじゃな。

「見つけたぞ。」

「!?!」

「ほう、妾と戦つつもりか？」

『ダイヴァイン・セイバー』

ほう、これは古代魔法。

確か、大気中の魔力を圧縮し放つ、空間転移と同じく失われた魔法のはずじゃが

「その程度か？」

その程度の魔力密度ならアリスの方が10倍は強い。古代魔法の使い手とは面白者じゃがこの程度の実力者ならその辺に五万とおる。

「!?!」

まだ逃げるか。

「よかろう。」

どこまでも相手になるぞ。」

どうやらあの方向はアリスがいる方向じゃな。

挟み撃ちで捕まえるとするかの。

「アリスよ、ダークハートがそっちに向かっておるようじゃ。妾も向かう、挟み撃ちにして捕まるとしよう。」

『分かった。』

それにしても真祖の吸血鬼を良くもここまで手懐けたものじゃ。アースガルドの王宮騎士など束になったところで妾には勝てぬが、アリスと本気で戦えば妾もただでは済まぬじゃろう。そして、アリスはレンに懐いておるし、なおのことレンを敵に回せぬな。

side out

side アリス

あの黒いのがダークハートみたいだね。

「あなたがダークハートだよね？」

アリスはどうでもいいんだけどお兄ちゃんのお願だから捕まえさせてもらうね。」

「!?!」

お姫様は何をしたんだろう？
凄く怯えてるようだけど。

「逃がさないよ。」

その程度で逃がすはずないよ。

それに、せっかくお兄ちゃんと2人きりなれるチャンスを潰されてアリスもちよつと機嫌が悪いから遊ばせてもらっね。

『エンシエントフレイム』

へえ、アリスが知らない魔法だ。

これがミナお姉ちゃんが行ってた古代魔法。

『ブラツティランス』

ちよつと面白くなってきた。

炎属性の魔法に浄化の効果が付いてる。

それもかなり強力な、でもその程度じゃアリスには効かないけどね。すぐに倒すこともできるけど、もう少し古代魔法を見せてもらおう。

『アブソリユートエンド』

次は絶対零度で凍らせてばらばらに砕く古代魔法。

アリスは見た目は、人間と変わらないんだけど根本の構造が人間とは掛け離れてるから絶対零度の中でも普通に生活できるんだよ。

『ブリザードテンペスト』

無数の氷の刃を暴風が同時に襲ってくる風と氷の混合魔法。

ここまで多彩に使えるって中々の術者だけでもういいや。

『エンシエントフレイム』

「!!--」

古代魔法って言ってもこんなものなのかな？
確かに、普通の魔法より強い気がするけど範囲が広すぎて使いどろが悪い。

「どうしたの？」

ああ、こんなに近くで術式を見たらそれを真似ればいいだけだからアリスだって使えるよ。」

とは言っても、こんなことアリス以外で出来る人なんてアリスが知る限りお姉ちゃんしかいないけど。

「っ！！」

本当に空間転移が出来るんだ。

あればっかりは一回見たくらいじゃ難しいかな。
まあ、気配は覚えたから逃がさないけどね。

「ようやく追いついたようじゃな。」

「もう逃がさないよ。」

「っ！！」

後はお姉ちゃんの方に追い込めば捕まえたも同じだね。

「いい加減、飽きてくるものじゃの。」

そろそろ終わらせるとしよう。」

「アリスも古代魔法は面白かったけどもういいや。」

あ、また逃げた。

でも、狙い通りお姉ちゃんの方に行ったからいいか。

「妾達も行くとするかの。」

「そうだね。」

それにしてもこのお姫様、アリスについてくるって本当に人なのか
な？

side out

終わったな。

あの2人にしたら空間転移だろうが古代魔法だろうが意味ないな。

「少しダークハートには同情するわ。」

まったくだ。

「空間転移つてのは物は移動させられないのか？」

「さあ、空間転移なんて使える人なんて見たことないから詳しいこ
とは分からないわよ。」

まあ、あの様子からなら自分以外は出来ないみたいだがな。

そんなことが出来ればアリスたちを他の場所に飛ばせば逃げられる。
そうになると、わざわざ姿を見せてるのは力を誇示したいだけか。

「案外小物だったわね。」

私も勘が鈍ったのかしら。」

そうだといいいんだが、そんな小物が古代魔法なんてものを使えるのか？

それに盗んでいる物が物だ。

これは裏になにかいそうだな。

「もう、私たちも行きましょうか。」

「ダークハートもフリッグの所に追い詰められてるみたいだしこれ以上は逃げられないでしょう。」

「そうだな。」

「一応聞いとくが、捕まえた後はどうするつもりなんだ？」

「さあ？ その場の流れ次第よ。」

それくらい考えておけよ。

まあ、いざとなれば警備に突き出せばいいだろう。

side フリッグ

どうやら来たみたいですね。

私とレンの邪魔をした報いは受けてもらいましょう。

「ようこそ、ここが貴方の終着点ですよ。」

どうやら、後ろからアリスとフリユネも来てるようですね。

「っ！？」

「ああ、ここでは空間転移はできませんよ。」

少し空間を閉じさせてもらいました。」

「どうやら鬼ごっこも終わりのようじゃな。」

「早く帰ってお兄ちゃんに暖めてもらいたい。」

「アリス、私が暖めてあげますからレンは駄目ですよ。」

「もう、お兄ちゃんと約束したよ。」

くっ、可愛い妹と思っていたら本当に油断ならない相手のようです。まあ、レンはアリスを妹としか思っていないので今はいいでしょう。

「仕方ありませんが、手を出してはいけませんよ。」

「アリスも最初は奪って欲しいから、そこは大丈夫だよ。」

「そういう話は捕まえてからにせよ。」

そういえば忘れてましたね。

もう、正直どうでもよくなってきましたね。さっさと警備に突き出しましょう。

「な、なんだよお前等!!」

俺は危険な物を安全にしようとしてるだけなんだぞ!!
邪魔するな!!」

「そんなもの知らぬ。」

これは妾の娯楽じゃ。」

私が言うのもなんですがかなり横暴ですね。

「っ!! 『メテオストライク』」

まったく、こんな素晴らしい街にあんな物を落とすなんてどうかしてますね。

『クリア』

「あああ……………」

こう言うてはなんですが、どれだけ凄かろうと所詮は人が起こすもの。

神である私が処理できないものなんてありません。

「どうぞやら捕まえたようだな。」

side out

「どうぞやら捕まえたようだな。」

これで一件落着か。

「まったく、所詮は出来そこないというところか。」

「あんたが黒幕ってことか？」

もうお出ましとは……………」

「いかにも。」

私がそれに美術品を集めさせてた者だ。」

ニヴルヘイム その？ 神船『フリングホルニ』

まあ、突然現れた怪盗があれじゃ誰だって黒幕の存在を疑うな。問題はどうやって古代魔法なんて力を与えたかだ。

ここにいる3人は規格外すぎるから相手にならなかったが俺が見る限りまともな人じゃあれは防げない。

「取引をしよう。」

『墮天使の楔』を渡してくれるなら君たちが知りたいことと私が出ることなら望みも叶える。」

「断ると言ったら。」

「力づくで奪うことになる。」

あれを見ても力づく奪えると言えるってことは相当腕に自信があるみたいだな。

こつちにはフリッグがいるから負けることはないが無駄な戦闘は避けるべきか。

「渡すかどうかは今からする質問に答えてもらってからでいいか？」

「………いいだろう。」

「1つ目、これはなんだ？」

俺が見てもただの剣にしか見えないものをあれほどの奴が求めるってことはただ危険な物だけってわけじゃないはずだ。

「それは『フリングホルニ』という船を動かすための鍵だ。今まで盗ませていた物もすべてその船を動かすための一部であり、その剣が最後のピース。」

「レン、『フリングホルニ』とはバルドルという神が所持していた船の名です。」

とある事情で行方不明となっている物なんです。がもしかしたら本物かもしれない。」

まさか、神の船とは。

もし、それが本物だしたらこいつの正体は……

「2つ目だ、その船を使って何をするつもりだ？」

「ただ、見たいだけだ。」

遙か昔、『鮮血の女神』と呼ばれる神に落とされるまで難攻不落といわれ何人も動かすことすらできなかった最強の戦艦という物を。」

まさか、こんなところでフリッグの武勇伝を聞くことになるとは……
確かにこのことを知っていれば絶対に盗まれたくなかったってのも納得だ。

「最後の質問だ、あんたは神か？」

「いかにも。」

神といっても元だがな。

今の私は神の役目を放棄し数多の世界に存在する神器を見て回っているだけの存在だ。

だが、これでも追われの身なのでな目立つわけにはいかない。」

「それで、人に力を与えて回収させてたってわけか。」

確かに、それなら突然現れた怪盗がここまで力を持っていることに納得できる。

問題は本当に渡していいかどうかだ。

「さあ、それを渡してもらおう。」

「最後つて言ったがもう一つ質問だ。

そいつのことを出来そこないといったがどついう意味だ？」

「意味も何も言葉の通りだ。

あれだけの力を与えたというのにまったく使いこなせていない出来そこない。

それ以上の意味などない。」

使いこなせていないかどうかは分からないが、腰抜かしてる様子を見ると言ってることも分かる。

「最後といつて何度も悪いがこれが本当に最後の質問だ。

あんたは見たいだけといったがその後どうするつもりだ？」

難攻不落の戦艦というくらいだ。

そのままにされて、誰かがそれを利用したらフリッグ以外に止められないからな。

「ふむ、私は1度見ればそれで満足だからな。

その後は好きにして構わない。」

「分かった。」

ただし、妙なことをすれば問答無用で沈める。」

「愚かな。」

人の身で落とせるならば難攻不落などと呼ばれてない。」

「それは心配に及びません。」

私が『鮮血の女神』ですから。」

「ま、まさかこんなところで会えるとは!！」

それにしても本当に有名だな。

本当に何をしたんだ？

「これは下手のことはできないようだ。」

では、君たちも来るといい。」

彼女がいるということは私が去った後に沈めるつもりなのだろう。」

『フリングホルニ』、最期の姿を見るといい。」

side フリッグ

まさか、この船をまた見ることになるとは思いませんでしたね。」

完膚なきまでに壊したつもりでしたが伊達に難攻不落は語っていませんでしたか。」

「時に姫君、私はあの事件の時にはまだ生まれていなくてね。」

『鮮血の女神』と呼ばれた姫君の力を知らない。」

『フリングホルニ』を沈めるところを見ても良いかな?」

「別に構いませんよ。」

その代わりに、少し力を使いますので他の神に見つかりますよ?」

「それについては心配せずとも大丈夫だ。

姫君でさえも私が神であることには気付かなかった、そう簡単には気付かれないはずだ。」

確かに、この私が神力を感じ取れないほど神力を遮断していれば気付ける者などいても少数でしょう。

「レンたちはここにいてください。

あれを沈めるとなると少々本気を出さないといけないので。」

「分かった。

もう2度と動かせないくらいばらばらにしてきてくれ。」

レンの頼みとあらばただ沈めるだけでは駄目のようですね。

「では、行ってきます。」

・
・
・
・
・
・
・
・

「JJJJは……」

「ここは私が創った世界。」

これが私が『鮮血の女神』と呼ばれる理由の1つですよ。」

前にも説明しましたがこの世界のルールは私の望むままになります。あの時は、神力、魔力共に私以外はすべて使用できなくなりました。まあ、今回はただ崩壊に耐えられる世界ということになっているんですけどね。

「素晴らしい。」

これが姫君の力か。」

「では、沈めますよ。」

これを抜くのはあの時以来ですね。

「それは!！」

「これが『鮮血の女神』と呼ばれた本当の理由ですよ。」

聖剣・グラムと魔剣・ダインスレイブ、この2振りの剣で数多の神を殺し、その返り血で刀身を赤く染め上げたからこそ『鮮血の女神』と呼ばれました。

いくら神力、魔力を封じようとも神には神器がありますからね。

それを相手取るにはこちらもそれ相応の武器を用意する必要がありますがありました。

それが、グラムとダインスレイブ。

両方とも神界にある中で最高峰の神器です。

「それが、伝説言われるグラムとダインスレイブ……素晴らしい、まさかその2振りを見ることが出来ようとは!！」

他にもいろいろな神器は持っているんですけどね。

私を襲ってきた神を殺した時に奪ったものですけど、かなり有名な物も含まれてます。

ちなみにダインスレイブはその1つです。

魔力を持たない神がこの剣の魔力に囚われて暴走していたところを殺して奪い取りました。

「もう2度と見れない光景かもしれないので目に焼き付けておいてくださいね。」

私がこの2振りを抜くときは最古参レベルの神でないと相手にすなりませんからね。

side out

「今回は地味だったわね。」

神の戦艦を見て、それしかないのか？

「妾はそこそこ楽しめたから満足じゃ。」

本当に哀れだなダークハートは。

その後、フリッグが戻ってきてあの神はそのまま他の世界に旅立った。

ダークハートは警備に突き出して『墮天使の楔』も返したんだが『フリングホルニ』を動かすためにその力を使い果たしたそう。今はただの剣となってる。

「まあいいわ。」

今回は思わぬ収穫もあったことだし。」

そうなのだ。

あの神がダークハートに与えていた古代魔法が使えるようになる宝石を

「いいものを見れたお礼としての対価だ。」

と言って俺たちにくれた。

ダークハートにそのまま持たせておくとまた同じことになるから俺たちが持つておくということになったんだがフリッグにそんなもの必要はないし、フリユネは魔力を持っていない、アリスはある程度見たから必要なし、俺は使おうにも魔力が足りなすぎる、そんなわけでミナが持つことになった。

古代魔法つてのは古代の戦争時に使われていた魔法で主に攻撃系統の魔法で周囲の魔力を利用するものばかりだから、ある程度の魔力があれば誰でも使えるらしいが、最終的にはどれだけ制御できるかになるらしい。

魔法の腕は一級のミナがそれを持てば鬼に金棒、流石にアリスやフリユネには勝てないがそれでも人外の力を得たことになる。

「これで私もレンを守ってあげられるわね。」

「それには及びませんよ。」

私がいる限りレンには傷一つ負わせませんから。」

「アリスもいるから近づくこともできないと思うよ。」

「このメンバーで戦争を仕掛ければ3日で国を落とせそうじゃ。」

俺の男としての立場は皆無だな。

本格的に俺も新しい職を探さないと。

このメンバーの中にいたところで足手まといにしかならないからな。

「そう落ち込むでないぞ。

このメンバーが強すぎるだけでレンが弱いという訳じゃないのじゃぞ。」

「それは嫌みか」

こいつが俺を慰めるなんて気持ち悪い。

明日は槍の雨が降らないか心配だ。

「いやいや、これだけ迫られて手を出さない、戦いでは後方支援と男としてどうなのかと思っただけじゃ。」

前言撤回だ。

やっぱりフリユネはフリユネだな。

「やっぱり追い出すかどうか考えた方が良くようだな。」

「まあ、そう言うでない。

これくらい挨拶じゃ。」

こんなイライラさせられる挨拶なんてあるか。

はあ、フリユネを相手にしていると疲れる。

ニグルヘイムも今日で最後だからもう少し見ておくとするか。

おもいだしたきた……
ようやく、ニヴル Heim から帰ってきたかと思えばこの我が儘姫が
ついに頭がおかしくなったのかアースガルドに行くとか言い出しや
がって、その後は……

「いろいろと言いたいことがあるがとりあえず一つ聞きたい。
ここはどこだ？」

「アースガルドにある城の妾の部屋じゃ。」

俺が何かしたか？

ようやく一安心できると思ったら無理矢理眠らされて、起きたかと
思えば城の中。

しかも、それを許されているということはフリッグたちは買収済み
ということだ。

俺の安息はどこだ？

「そう落ち込むでない。

今回はおそらくそんなに面倒にはならないはずじゃ。」

それなら、おそらくなんて言葉をつけるな。

「最初に言っておく。

俺は協力しない。」

拉致されて俺が従う訳ないだろう。

「そついでにじやろつと思っておったが、とりあえず話を聞いてから
にせよ。」

「却下だ。」

聞いたら戻れなくなりそうだから、俺は帰る。

「ちなみに、その扉は妾が封印しておる。妾が許可しない限り帰ることは出来ぬぞ。」

もう何を言っても無駄だろう。

人間諦めは肝心だ。

「ようやく諦めたようじゃの。」

さて、ここに連れてきた用件とは年に数回、王位継承権を持つ者が集まる集会があるのじゃ。

その場では何をしてきたかを自慢しあうわけじゃが正直今回は特に何もなくて困っておつての、そこで、レンを含めた有能な人材を部下にしたと言えば妾の株も上がると思うたのじゃ。」

「事情は分かったが俺は前にフリユネの下に付く気はないと言ったはずだが。」

「それは分かっておる。」

今回はふりだけで十分じゃ。」

信用できない。

連れていかれてそのまま本当の部下にさせられそうだ。

悪い奴つてわけじゃないが良い奴つてわけでもないからな。

「レンにとっても悪い話ではないはずじゃ。」

この件を断れば流石に妾もアースガルドに戻る必要が出てくるが、

受ければ王位継承権第一位の妾とのコネが続くのじゃからな。」

確かに何をするにしてもフリユネの立場は役に立つが、フリユネが帰ってくれるというのも捨てがたい。

「もう一ついいことを教えてやろうかの。」

今もなお、グレイはフリッグを諦めておらぬ。

流石に表だって動いてるわけではないが裏で情報を集めておるようでの、妾としてもそれは避けたいものじゃから情報操作や妨害をしていたのじゃが断るといふなら、それもどうなるか分からぬの。」

こいつは何枚切り札を持つてるんだ。

少なくともこれで終わりという訳じゃないな。

出来ればもう少し切らせたいところだが何もしなければこれ以上は切ってこないだろう。

「確かにいい話だが、俺が生きて行く上でコネなんて必要ないしあの馬鹿王子が来たところでまた返り討ちにすればいいだけだろう？それに今度は言い訳が聞かないような状況に貶める。」

あの単純な馬鹿王子だ。

こつちが煽ってやればそんな状況を作ることも難しくない。

それに、神の力で強化されていない馬鹿王子なんてアリスどころか今のミナでも勝てる。

「ふむ、ならばフリッグの正体を公表すると言ったらどうするつもりじゃ。」

「それは無いな。」

理由はフリユネが一番知ってるはずだろう？。」

「気付いておったか。」

ニヴル Heim でもだが所々でフリッグを推していたからな。

フリッグにそこまでする理由といったら信仰の街の姫という理由しかない。

「やはり、一筋縄ではいかぬようじゃな。

仕方あるまい、もう一枚切るしかないようじゃの。」

「切らなくていいから帰らせてくれ。」

ここで切ってくるってことは今の俺ではどうしようもないものだろう。

「先程、グレイがフリッグのことを探していると言ったのじゃが、それはなにもグレイだけではない。

あの騒動の後すぐに箝口令が敷かれたのじゃが人の口に戸は立てられぬ。

知ろうとすれば知る方法などいくつもある。

じゃが、父上が箝口令を出し、グレイの件は表向きなかったことになり表だって証言できるもがおらぬ。

その場にいた者たちは王である父上の決定に逆らうようなことはせぬ。

だからこそ、父上の手が届いていないレンたちを手に入れようとしている者も少くないのじゃ。」

確かに一応は口封じをされたが俺たちはしゃべってもなんの罪に咎められることもないし職を追われることもない。

それに俺たちがいればあの馬鹿王子はすぐにも蹴落とせるからな。

あれでも王の直系だからそれなりに順位も上の方なんだろう。

「故に、妾の下に付いておけばそうそう手を出される心配もない。グレイのように単純な者ばかりではない。

中には、王になる為にどんな手をおうとする者もある。

それを、1人1人対処していくのは面倒じゃろう。」

流石にこれは無理だな。

別に国を敵に回したところでフリッグがいる限り負けはないが平穏な生活は望めないものになるだろう。

「最後に一つ聞かせろ。

なぜ、最初に俺を拉致した？

最初の条件をフリッグにでも持ちかけたらもう少しスムーズに事が運んでいたはずだ。」

そもそも有能な部下を示すつもりなら、フリッグの力を目の前で見せつけた方が効果的だ。

あの馬鹿王子のこともフリッグなら認証をばかして別人に思わせるくらい簡単にできる。

「妾に友との約束を破れと？」

あんな口約束をこんな重要な場面でも守ろうとするなんて、変なところで律儀な奴だ。

「分かった、その話受けてやるよ。

だが、もう拉致なんてするなよ。」

「それは分からぬな。」

そもそも、こつでもせぬと話しすら聞かぬじやろつ。」

まあ、そうだな。

向こうなら閉じ込められてもフリッグかアリスが助けに来てくれるだろうしな。

「本題だが、結局俺は何するんだ？」

「レンは実際に何もする必要はない。

すぐに力を示せと言われて示せるものではないからの。」

俺に派手なことを求められても無理だしな。

それなら、あの3人の中から1人くらい連れて来るべきか。

「ちなみに誰かほかに連れてきたりするのか？」

「全員来ておるぞ。」

何かいろいろな感情が浮き上がっては沈んでくる。

「それならアリスも連れて行こう。」

フリッグは念のため連れて行くわけにもいかないし、アリスの力を見せてこれ以上と言っておけば十分だろう。

ミナはニースヘッグのことを言えば実績は示せる。

それに、真祖の吸血鬼を従えたとなれば評価も良いものになるだろう？

俺はアリスの従者つてことでいいだろう。

俺が血の提供者と知れば血を吸われるという危険性を指摘されるのも完全とは言えないが避けることが出来る。

それに指摘されたらなされたで反撃も出来るしな。

「ふむ、ならばそうしよう。」

集会は明日になっておる。

他の者は客室に案内させておるから説明しに行くとしよう。」

「一度引き受けたからにはきっちりやってやる。」

フリユネの価値を高め、敵に回すとどれほど厄介かを示す。」

そうなれば、結果的に俺たちにもちよっかいを出そうとはしないだろつ。

友達とは言っても今は雇用者と労働者の関係だ。

お互いに利用しあうとしよう。

集会（前書き）

PV30万突破!!

これからもよろしくお願いします

集会

「ふむ、まだ全員ではないようじゃの。」

「しかし、意外だな。」

王族ってのはもつと時間に厳しい物だと思ってたんだが。」

常に忙しいというイメージがあるせいでどうしても時間に厳しいと思ってしまうがどうやら違っらしい。

「まあ、半分は甘やかされて育った者ばかりじゃ。常識は期待せぬ方がよいぞ。」

確か王継承権を持つてるのは十数人だったか？

その半分もあの馬鹿皇子みたいなやつがいるのか。

フリッグもだがミナも連れてこなくて正解だったようだな。

あんな美少女を見せたらどんな反応するか簡単に想像できる。

それはそれで弱みになるから、潰そうと思えば連れて来るべきなんだろうが流石にそこまででしてやる義理もないしな。

「王位継承権を持つてる奴ってのは何歳くらいだ？」

ロリコンはいないと信じたいがアリスと同じくらいの年の奴がいるとアリスに目をつける可能性がある。

それは駄目だ。

アリスは俺の唯一の癒しだからアリス絡みで何か起きて欲しくない。

「最年少は10歳程度じゃがこの場には成人した、と言っても分からぬか、15歳以上の者しか出席せぬ。」

「一応安心なのか？」

それにしてもやけに視線が気になるな。

そりゃ、どの王子や姫も御供をつれてるとはいえ俺みたいな若い奴じゃないから珍しいのは分かるがな。

「そついえば、アリス大丈夫か？」

この前は体調を崩したが？」

「お姫様の近くにずっといたからこの程度なら何ともないよ。」

流石真祖の吸血鬼、適応力が強すぎる。

その内、神力を克服するんじゃないだろうか。

ちなみにこれは余談だが、アリスもミナが使える古代魔法はすべて習得してる。

その中にある空間転移も使えるそうだから帰る時は一瞬だな。

こっちに来る時もフリユネの神力が一番濃く残ってるところを座標にでもしたんだろう。

「それにしても時間を過ぎても来ないってのはどうなんだ？」

「後数人なんじやが、その数人が問題児での。」

妾が王位継承権第一位なのじやが自らが王になると疑っておらぬ者ばかりじや。」

こう言うてはなんだがここにいる連中の中に王やフリユネのようなカリスマを感じない。

所詮素人目から見たらなの話だから、いや素人でも分かるほどに違うと感じるってことは大した奴らではないってことか。

「どうやら来たようじゃの。」

「待たせたな、これより集会を始める。」

20歳前後の男女が2人ずつ、どうやら王位継承権を持つてゐるなかで最年長組みたいだな。

たしかに、フリユネと同等のカリスマを感じるがそれだけのようだな。

フリユネのような能力は持ってないだろう。

「ん？」

フリユネよ品のない輩を連れてくるがそれはお前の連れか？」

俺はともかくアリスは見た目は華がありそうな感じだが、あいつにはそう映らないみたいだな。

「人を見た目でしか判断できぬようでは器が知れませぬ。」

「相変わらずの減らず口だ。」

まあいい、各自、前回の集会からこの日までのことを報告せよ。」

一触即発とはこのとだな。

年下のフリユネに負けているからか他の3人からもやけに嫌な視線が向けられてる。

この中にフリユネの味方はいなさそうだな。

・
・
・
・

報告とやらを聞いてるが正直本当か疑わしいものかたいしたことして
ていないかどつちかだ。

例えば、街同士の連携を強める為にお茶会を開いたただの犯罪組織の
尻尾をつかんだだの聞いてる感じでは何かしらやってるようだが、
最初の奴は確かにミナが行っていたみたいだが本当にただのお茶会
でたいたこと話してないようだし、犯罪組織の尻尾をつかんだと
言ってもどの程度のことを言ってるのかはつきりと公言してない。
大丈夫なのかこの国は？

「妾の番じゃな。

妾は各街を視察、民がどのような生活を送っているか見て回ってお
った。

その中で有能な人材を何人が発掘し、その一部をここに連れてきて
おる。

ここに来ておらぬ者はニーズヘッグを摘発し一斉検挙を指揮したミ
ナ・レグス。

妾を越える強さを持つフリッグ・カザミネ。

そして、ここに連れておるのが真祖の吸血鬼、アリス。

その横にいるものはアリスの従者じゃ。」

ミナの名前を出した途端波紋が広がったってことは王族にも名が知
れてるみたいだな。

それにフリユネより強いフリッグに真祖の吸血鬼ってのはインパク
トが強かったみたいだ。

それにしてもフリッグの名を出した途端にあの馬鹿王子が驚いてたな。

「さて、こう口に出しただけでは信じられぬ者もおるじやろう。そこで、真祖の吸血鬼の力の一部を見せてやるう。」

流石にここでは派手なことではできないがどれほどの力を持っているか示す方法がないわけじゃない。

今回はシンプルにアリスの魔力を一部開放するだけ。

それだけでも常人なら圧迫されてまともな口がきけない。

ここにいる奴等も例外ではないみたいだな。

「ちなみにアリスと妾は主従の契約を結んでおる。

血は従者からしか吸わぬから安全も保障しておるぞ。」

これで釘はさせたな。

少なくともアリスにちよっかい出そうとはしないだろう。

「最後は俺だな。

俺はアースガルド治安維持及び強化に取り組み、前年度に比べ半減した。

後に、他の街にもこれを取り入れようとしている。

また、ギルドと連携をとり魔物による被害の減少や小さな村などに物品の流通を強化した。」

言ってることは凄いいし、ちよっと調べれば分かることだから本当のことなんだろうが、なんとも曖昧だな。

治安維持に強化に取り組んだと言っていたが実際にどんなことをしてどんなふうに関わったかまったく触れてないしギルドの連携も同じだ。

確かに、部下に任せるといふものも大切だと思うが方向性、指針を立てるのは上の仕事だ。

「どうだフリユネよ。」

俺はお前と違い、民に貢献しているというのに呑気に視察とはこれでは順位が変わってもおかしくないな。」

「ふむ、確かにそのようです。」

何か言いたいことがあるようじゃのう、レン。」

ここで俺に振るなよ。

お前でも十分に対処できるだろう。

俺を試してるつもりか？

「そうですね。」

では、少々お聞きしたいことがあります。よろしいでしょうか？

「お前のような「妾が許可する。」くっ！！」

「では、治安維持強化とおっしゃいましたが具体的にはどのような対策を立てられたのですか？

また、前年度とおっしゃいましたが比較対象が1つだと分かりにくいので複数示してもらえると分かりやすいのですが。」

実際、去年は天候が悪かったらして豊作とはいえない状態だったよ。うだしな。

そうなれば治安が悪くなるのは必然だ。

その去年を対象に持ってきても説得力はない。

「そ、それは警備員の人員の強化及び1人1人の能力向上だ。」

比較対象は今手元に資料がないので提示は出来ない。」

「では、その費用はどこから賄われているのですか？人を雇うというものはいろいろなところでお金がかかるものです。それに加え能力向上のためにも必要な経費が出るはずですよ。もし、その為に増税となった場合、お金がなく仕方なく犯罪に走る人もいるでしょう。」

そのせいで治安が悪化し、それをまた同じ方法で抑えていては悪循環が出来ますよ。」

「くっ！！！」

「これは、ギルドの連携の話にも言えることです。確かに治安維持は大切なことですが民の生活を脅かしているようでは本末転倒です。」

フリユネ様はご自身の力と私たちの力でアルフ Heim 襲撃を治め、ニグル Heim を騒がせていた怪盗を捕えています。さらに、先ほど紹介されたミナ・レグスですが彼女はいろいろな開発を行っており、それが成功すれば民の生活はより便利、豊かとなり、それに対し投資することは十分に民に貢献していることとなります。」

我ながらよくまあ、こうべらべら口が回るものだ。だが、こう苛めるにしても男相手じゃつまらないな。やっぱり、フリッグがミナみたいな反応じゃないと面白くない。

「今回の集会はこれで終わりとする！！！」

逃げたか。

それは一番やつちやいけないことだぞ。

自分に非があることを認めるようなものだ。

「なかなか良かったぞ。

あそこまで完膚なきまでに叩きのめすとはよほど鬱憤がたまっていたのか？」

誰のせいだと思ってやがる。

最近フリッグは安定しているし、ミナも前よりも積極的になったとはいえそこまで被害という被害はない。

アリスは俺の癒しだからアリス絡みで鬱憤なんてたまるわけがない。つまり、最近、俺を悩ませている原因のすべてはお前なんだよ。

「しかし、レンよ、本当に妾の側近とならぬか？

今、職に悩んでおるのじゃろう？」

確かに俺にはこっちの方が向いてし、いろいろな思惑からフリッグたちを守れると思うが、フリユネだからなあ。

「その不快な視線は止めよ。

まあ、いますぐには言わぬ。

それに、もし受けるといふならばそれなりの教育は受けさせるつもりじゃ。」

悪くない、悪くないんだが上司がフリユネ、どんな要求を突きつけられるか分かったもんじゃない。

「先程から不快なことばかり言われておるようじゃ。

妾はこう見えても部下は労わる方じゃぞ？」

「その疑問形はなんだ？」

「妾は今まで部下というのは部下は持つておったことがないのじゃ。いたとしても、すぐに変えられるからの。そもそも妾に部下など必要なかつたからの。」

基本的にハイスペックだからな。

俺たちの中で総合的に評価したらフリユネが一番だろう。俺なんかは特にこういった裏方の仕事に偏ってるからな。

「まあ、考えるだけ考えても良いがいつかは妾の側近になるのじゃぞ。」

そこは考えるだけでもいいからというところだろう。
あいからかわらず横暴なやつだ

日常（フリック視点）

side フリック

「フリック、ちょっといいか？」

レンから用があるとは珍しいですね。

「大丈夫ですけど、何かあったんですか？」

「まあ、あれだ。

そろそろ答えを出そうと思ってな。」

「そ、それって……」

まさか、ついに私を……

「ああ、フリック、俺はお前が好きだ。

ずっと傍にいてくれ。」

「っ……」

嬉しすぎて頭が真っ白になってるのに顔が熱いです。

「やっぱりそういうところは可愛いな。」

「か、からかわないでください……」

もしかしてさっきの告白もこのためじゃないですよ……」

「俺がこんな冗談を言う訳ないだろう。」

聞き間違いじゃないですよ？

ついにこの時が来ました。

この時をどれほど待ち望んだか……

「フリッグ、好きだ。」

「レン……」

ああ、これです。

自然に顔を近づけてキスして、そのまま……

・
・
・
・
・
・

「レン……」

あれ、ここは？

「まあ、レンがあんなことを言う訳ないですか。」

なんとも欲望に忠実な夢でしたね。

それにしても夢なら夢でももう少し先の方まで行ってくれもしいと思
うんですが、夢の中までガードが堅いとは流石レンですね。

「いつまでもこうしても仕方ありませんか。」

レンが起きてくる前に朝食の準備を始めなければいけませんしね。

「おはよう。」

とはいっても、いつもレンは私より早く起きてるんですけどね。

「おはようございます。」

今日も行くんですか。」

「ああ、今から行ってくる。」

こっちの世界に来てからレンは毎朝ランニングをしています。私やアリスと違ってレンはあくまでも一般レベルですからね。

努力していないとすぐに衰えて何かあった時の為に対処できなくなるということ毎朝走り込んでいます。

私はレンが帰ってくる前に朝食を準備し終えておく、これがカザミネ家の朝です。

「おはよう、お姉ちゃん。」

「おはようございます。」

私起きてからしばらくした後、アリスも起きてきます。

アリスは朝は弱いんですけど朝食の準備を手伝うために頑張って早起しています。

ちよつと寝ぼけてるアリスは本当に可愛いです。

これを見るたびに私とレンの娘にしたいと思うのですがレンもアリスも納得してくれないんですね。

「アリス、いつも通りお願いしますね。」

「うん。」

ちよつと前までならアリスを含めても3人分だけでよかつたんですが最近はそのに加え3人分作らなければいけないですからアリスの手伝いは助かります。

「おはよう。」

「おはようございます。」

レンと2人きりというのも捨てがたいですが、食事はみんなで取った方が楽しいですしこつやってみんなで集まるといいのはいいもです。

「レンはまだ帰ってないんだ。

本当に頑張るわね。」

「まあ、妾達のような規格外という訳にもいかぬからの。

しかし、毎日続けられるというのは素直に褒められることじゃな。」

ちなみに、ジンは途中でレンと合流して一緒にランニングです。

それにしても、私は神ですから体型を維持することは容易なのですがミナとフリユネはどうやって維持しているのでしょうか？

アリスは成長期ですから問題ないんですが、ミナとフリユネは特に運動をしているようには見えないのにあの細さは反則だと思います。

「ただいま、もう揃ってるみたいだな。」

「妾を待たせるのはレン以外におらぬ。」

「そりゃ、悪かったな。
待ちたくなけりゃ城に帰れ。」

毎朝恒例となりつつあるレンとフリユネの言い合いなんです。最近レンとフリユネがやけに一緒にいることが多いような気がします。お互いにその気はないと思いますが、やっぱり他の女性と仲良くしているというものは良い気分にはなれませんね。

「それじゃあ食べるとするか。」

「……そうですね。」

相変わらず私が不機嫌になるとすぐにその空気を察知してきますね。そんなに分かりやすくしてるつもりないんですがレンには隠せないようです。

これは私をよく見ているということでしょうか？

「レン、今日はどうするんですか？」

「いつも通り、適当に仕事を貰いに行つて終わったら自由行動だ。」

となれば午後はほぼ予定はないということになりますね。

今日はアリスの講習の日ですからいませんし

「レン、今日、買い物付き合ってくれませんか？」

とは言いつつも本命はデートですけど、表向き買い物という理由がありますから止められる心配もありません。

「別にいいぞ。
何を買うんだ？」

「普通に食材ですけど、そろそろ新しい料理でも覚えようと思ってるのでお願いします。」

作れる料理ではレンより上という自信はありますがレパトリーの豊富さではまだまだレンには勝てません。

将来の嫁として夫に家事で負けていては嫁として立場がありませんしね。

「それじゃあ行くか。」

「はい。」

「うん。」

・
・
・
・
・
・

「それにしてもいつも仲の良い兄妹ですね。」

「その内、夫婦になりますから。」

「その時は私も呼んでくださいね。」

毎日、仕事を受けているおかげですっかり受付の人とは仲良くなっています。

「今日はどんな仕事がありますか？」

「これなんてどうですか？」

フリッグさんにはちょうどいいと思います。」

内容 畑を荒らす魔物の討伐

人数 最大5人

報酬 金貨5枚（1人当たり）

「確かに悪くはないんですけどどうして私たちに回すんですか？」

「フリッグさんたち以外では割に合わないですよ。」

魔物の数もはつきりしていない上にどんな魔物かも分かっていますから経費だけで報酬を上回ってしまいますから。」

なるほどそういう訳ですか。

確かに私たちならドラゴンがいても相手になりませんしね。

「それじゃあこれをいつもの3人をお願いします。」

「分かりました。」

それではお気をつけて。」

・
・
・
・
・

・
「今回は魔物の討伐か、俺は役に立ちそうにないな。」

フォローしたいんですが出来ませんね。

もともと、レンがこの職に就いたのは最低限の自衛が出来るようになるためです。

だからと言ってはなんですがレンには別の職についてもらってもいいんですけどね。

「アリスはお兄ちゃんの物なんだからお兄ちゃんは弱くないよ。」

「ありがとうな。」

事情を知らない人から見ると微笑ましい兄妹に見えるんでしょうが私から見ればレンはまだしもアリスは思いつきりアピールしてるようにしか見えません。

アリスの可愛さはロリコンでなくてもロリコンにしてしまうくらい可愛いですけど、レンなら大丈夫でしょう。

もし、そうなるものなら……………

「ど、どうした？」

早く行こう。」

監禁だけでなく調教も加えなければいけないようです。

・
・
・
「そうですね。」

・
・
『ブリザートテンペスト』

アリスも魔力の扱いに随分慣れてきました。

とは言いましてもアリスが古代魔法で外の魔力を使うより持っている魔力の方が大きいのであまり古代魔法は意味がないんですけどね。

「しかし、アリスは強くなったな」

「確かに最初にあつた時は力の使い方をまったく知りませんでしたからね。」

『エクスプロードノウア』

「終わったな。」

「終わりましたね。」

これでもう魔物も寄ってはこないでしょう。

・
・
・
・
・
「お疲れ様です。」

思った以上に早く終わりましたね。

「なるほど、確かにそう言われればそうじゃの。」

「どうしましょう、いざレンが求めてきた時に満足させられないなんて……」

これではレンを縛り付けることができません。

「まあ、落ち着くがよい。」

とりあえず聞いておくがフリッグは処女じゃな？」

「な、なんてこと聞くんですか!!」

聞くにしても、もうちょっとオブラートに包んで聞いてくださいよ!!

「いや、これは重要なことじゃ。」

あの他人を傷つけることが嫌いなレンのことじゃからな。」

た、確かにそうですけど……

「故に、レンを満足させたいなら、まずフリッグが気持ち良くなる
ことが優先じゃな。」

そしておそらく、その後の心配はないはずじゃ。」

フリッグのような美少女を抱いて満足せぬ男などおらぬ。」

それより心配すべきはレンはああ見えてかなりサドだということじゃ。」

そう言われれば私も最初にあった時は相当苛められた気がします。」

「レンにとって純情なフリッグやミナは絶好的のじやからな。あのレンのことじゃから痛みを伴う物や精神を壊すほど酷い事をするととは思えぬが、相当に恥ずかしい思いをさせられる覚悟は必要じやぞ。」

「だ、大丈夫です!!」

「レンならどんな性癖でも受け入れてみせます!!」

「そうです、レンにならどんなことをされても……むしろ、ちよつといじめて欲しいかもです。」

「ふむ、よく言った。」

「では、レンに……で……と言って来るがよい。抱くかは分からぬがかなり効くはずじゃ。」

「はい!!」

「ありがとうございます。」

「よいよい。」

「妾はフリッグの友じゃぞ？」

「友の恋路を手伝うのは当たり前のことじゃ。」

「やっぱりフリユネは良い人です。」

「何かあった時には必ず力になります。」

・
・
・
・
・
・

「レンー!」

「ど、どうしたそんなに興奮して……」

おかしいですね、まだ私は何もしてないんですがもう引いています。そんなに私は日ごろから酷いことしてますかね？

まあ、今はそんなことどうでもいいです。

周りにはだれもいないようですし

「そ、その、わ、私を……」

は、恥ずかしいです。

フリユネには恥じらいを忘れないようにと言われましたがそんなの意識しないでも恥ずかしいです。

「な、なんだ？」

「私をいじめてくだひゃい!」

うう、恥ずかしく泣きそうです。

レンはどうなんでしょうか？

「そ、それは誰の差し金だ？

いや、聞くまでもないか……」

やっぱり駄目なんでしょうか？

「馬鹿なことやってないで飯の準備でもしてろ。」

やっぱり抱いては貰えないんですね……

うう、あんなに恥ずかしい思いをしたのに……
あれ？
何かしたが騒々しいですね。

「てめえ、フリッグなんてこと吹き込んでやがる！！」

「くっくっ、レンが喜びそうなことを吹き込んだつもりじゃ。
どうじゃ、満更でもないじゃろ？」

「もう、我慢の限界だ。

今日こそ帰らせてやる。」

「出来るものならやってみよ。」

「手加減はなしだ。

お前だけは殺してもいいと思えてきた。」

「ふん、レンごときに殺されるほど軟ではないわ！！」

レンがあそこまで怒ってるのは初めて見ました。
本当に効果があったみたいです。

「ほれ、フリッグが見ておるぞ？」

「っち！！」

いつか絶対に追い出してやる。」

「やれるものならやってみよ。」

「あの、レン？」

「もうあんなことは言つなよ。」

次に言つたら二度と口を利かないからな。」

どうやら本気で怒ってるみたいです。

そこまで怒ることだったんでしょうか？

「ふむ、効果は上々のようじゃが次は止めておいた方がよいな。確実に落とせるならば問題ないがそうでない場合は本当に口を利かなくなるやもしれぬ。」

「フリユネ、レンをあんまり怒らせてはいけませんよ。」

「気をつけるとしよう。」

レンの機嫌を取るためにも今日は腕を振るうとしましょう。
今日もいつもの一日でしたね。

宝探しに行こう

平和だ。

一週間前にフリユネに拉致られた事を除けば怖いくらい平和だ。だが、それを口にはしない。

その行為は明らかにフラグを立ててしまう。

だから俺は次の旅行まで静かにこの平穏を満喫しなければならない。

「平和ですね。」

「フリッグ、フラグという言葉を知ってるか？」

「レン、宝探しに行くわよ!!」

まるで計ったようなタイミングだな……

「一応聞いておくが拒否権はあるのか？」

「そんなものないに決まっておるじゃろう。」

「帰れ。」

「こんな鉄の塊で妾を倒せるとでも思っているのか？」

俺の世界では銃弾を素手で掴む奴なんていないんだよ。

まあ、だからこそ遠慮なく撃てるんだがな。

次は、ロケットランチャーでも試してみるか。

「本題なんだけど、最近何も起きないじゃない？」

でも、ニヴル Heim の時もこつちから動けば何かしら起きるみたいだから今回も何か行動しようと思ったのよ。」

「さて、お前等はなににもなかったかもしれないが俺はフリユネに拉致されて面倒な集会に参加させられるというしっかりとした面倒事があつたぞ。」

「あれくらいでぐちぐちと、器の小さい男じゃの。」

最近本気でフリユネに殺意が湧くことが増えてきた。いつたい誰のせいでここ最近俺が疲れてると思ってるんだ。

「私が楽しくなければ意味がないのよ。」

そこで、前々から噂になつてた『妖精の導』って言う水晶を探しに行きましょう。

なんでも、未来が見えるようになるって言われてるらしいわよ。」

とりあえずフリッグがいないときにミナはいじめよう。

これだけ振り回されてるんだ、それくらいは許されるだろう。

「その噂の出所は確かなのか？」

「さあ、レンがこつちに来る前からあつた噂で、結構な人が探しに行ってるみたいよ。」

でも、そこって魔物が強いから半端な人は近づけないし、強くても長居はできないそう。誰もまだ見つけられてないそうよ。」

胡散臭い。

誰も見たことないのに随分具体的な噂だな。

誰かが適当なデマを流しただけじゃないのか？

「例え噂だけだとしても行動を起こせば何か起こるはずよ。私の勘では結構大きな問題が起きるっばいし。」

なぜ、そんな洒落にならないフラグを次々立てて来る。

行きたくないなあ・・・

生きたくないなあ・・・

「言っておくが俺はお前等が何を言おうと俺は行かないぞ。」

拒否権がないなんて知ったことが。

少しは俺を労われ。

「私はどつちでもいいですよ。」

「アリスはお兄ちゃんが行くならいく。」

今のところ賛成が2票、反対2票かここは确实フリッグを引き込む。

「フリッグ、新しい料理をいろいろ教えてやるから宝探しなんて行ってる暇ないぞ。」

「本当ですか!!」

それなら済みませんが私も反対です。」

勝った。

「これで3対2だ。」

多数決には従ってもらおう。」

「フリッグよ、妾に力を貸してくれぬか？」

「……フリユネの頼みならば仕方ありませんね。」

くっ、この我が儘姫め、俺にとって迷惑極まりないことばかりして
るくせにしっかりとフリッグには借りを作ってやがる。

「3対2じゃな。」

レンの負けじゃ。」

この我が儘姫、俺が多数決の話を持ちかけるのを読んでやがったな。
俺が勝ちを確信して多数決の話を持ちかけ、確実な言質を取った後
フリッグを引き抜くとは……

「お前は絶対にいつか泣かしてやる。」

「妾はいつでも受けてたつぞ。」

「話はまとまっただみたいね。」

場所はアースガルドの近くにあるそうで、そこに近くに小さな町が
あるそうだからそこを拠点にして宝探しに行くわよ。」

ミナはその内泣かせよう。

いや、でも幼児退行されたら面倒だな。

適度に手加減しながらからかうとしよう。

「出発は明日ね。」

出発と言ってもアースガルドには空間転移でいくからアースガルド
からなんだけど。」

前回は行ったときに人気がないところに目印を置いてきたらしい。
便利なものだ。

「それじゃあ、私は準備があるから。」

「ふむ、妾も帰るとしよう。」

二度と来るな。

「すみません、レン。」

「気にするな。」

俺としては借りたものを返さない奴の方が嫌いだ。」

だから、別にフリッグを恨んだりはいらない。

恨むべきはあの我が儘姫だからな。

「ありがとうございます。」

でも、いつか料理は教えてくださいね。」

「その内な。」

さて、俺も準備に取り掛かるか。

「お兄ちゃん、最近アリスに構ってくれない。」

服を摘ままれてるだけなのに動けない。

これ以上したら服が破けるし、アリスが寂しそうだな。

「俺だって構ってやりたいんだがなかなか。」

厄介事には巻き込まれるしアリスばかり構っているとフリッグとミナがうるさい。

「なら、今ならいいよね。」

そういえばフリッグは買い物に行ったんだっとな。

「別にいいが、俺は何をすればいいんだ？」

「なにもしなくていいよ。」

「んっ！！」

やばい、ついに恐れていた事態が！！

恐れていた事態とは普通に押し倒されることだが、力で俺がアリスに勝てるはずがない。

つまり、アリスがやりたいようにされてしまう。

「お兄ちゃん、アリスはこんなにお兄ちゃんのこと好きだよ。」

キスだけでこんなに嬉しいし、幸せになれる。

お兄ちゃんはどうか？」

また答えずらい質問をしてくれる。

確かに気持ちいいことは気持ちいいんだがそれを表に出すわけにはいかない。

だが、あまり時間をかけてるとフリッグが帰ってくる。

この状況を見られれば俺だけでなくアリスまでまずいことになる。

「アリスはお兄ちゃんがいてくれればそれでいい。」

お兄ちゃんがいてくれればなにもいらない。」

男としてここまで想われてくれていることは嬉しいんだがアリスの為にも俺は今応えるわけにはいかない。

「それは駄目だぞ、アリス。

今のアリスにはフリッグやミナ、ジンにフリユネだっている。

アリスはもう1人じゃないんだ。

だから、そんな寂しいこと言うな。」

「でもそれはお兄ちゃんがくれたものだよ。

お兄ちゃんがいなくなったら、また1人になっちゃうかもしれないよ。」

「もつと、他の奴のことを信じてやれ。

みんなアリスのことが大好きなんだ。

もちろん俺もアリスのことは好きだし出来るだけ傍にいる。」

しっかりしてると言ってもアリスはまだ10歳程度だ。

まだまだ、誰かに甘えたいに決まってる。

だが、それを俺一人にしてしまっただけはアリスの為にならない。

「アリスだつてみんなのことは好きだよ。

でも、やっぱりお兄ちゃんは特別。

世界で唯一、アリスのことを助けてくれた人。」

困ったな。

意外と根が深いらしい。

この空気ならこれ以上のことはないが今のアリスを放っておけない。

そもそも押し倒されてる時点で動けないんだがな。

「アリス、俺がアリスの物になったらもう寂しくないのか？
そこにみんながいなくても。」

「寂しいと思う。」

でも、それでお兄ちゃんがアリスだけを見てくれるならそれでいい。

「

「なら、みんなに祝福されればそれが最高だよな。

俺がいて、みんながいる。

それが一番だろ？」

「うん。」

「それじゃあ、こんなことはしちや駄目だ。
待たせてる俺が言うことじゃないがな。」

「ごめんなさい。」

「うん、いい子だな。」

とりあえず何とかなったか。

これからはアリスが寂しがらないように出来るだけ構ってやらない
とな。

「お兄ちゃん、大好きだよ。」

おい、相手はアリスだぞ、妹だぞ。

そのアリスにどうして見惚れてるんだ。

「お兄ちゃん、最後にキスしていい？」

「あ、ああ・・・」

「んっ・・・」

やばい、アリスが滅茶苦茶可愛く見えてきた。

いや、今までも可愛かったがそれは妹としてだ。

今は女の子として見えてしまう。

「大好き。」

妹だからといって油断しすぎてた。

まあ、妹と言っても血の繋がりなんて全くない義妹だから、むしろ良くここまで完全に妹として見てくれた俺も凄いが、これからは妹としてはもちろんだがもう少し女の子ということも視野に入れておこう。

未来予知（前書き）

総合PV35万、ユニーク3万突破！！

未来予知

「しかし、未来予知が出来るようになるって、そもそも未来予知なんてできるものなのか？」

アースガルドまで空間転移した後、いつものミナ車で目的地まで走ってる。

ダークハートは自分しか転移させられなかったらしいがミナは普通に俺たちだけじゃなく物も転移できる。

ますます、哀れだ。

「出来ますよ。」

未来予知と言っても2つあるんです。

1つ目は誰でもやってることです。

例えば、レンと私が戦うとすればレンと私のことを知っていれば私が勝つことが予想できますよね。

でも、私たちのことを知らなければ普通男であるレンが勝つと思います。

つまり、私とレンのことを知っていれば誰でも結果が分かります。

これも立派な未来予知です。

情報を読み取り先のことを視通す1つ目の未来予知です。

未来予知を出来るほとんどの人がこっちの方で凄い人となるとその人を見ただけで情報を読み取り未来予知ができます。

でも、これは数多の未来の中の1つですから100%そうなるとは言えないんです。

これも、才能の差が出ます。」

そう言われればそうなるな。

しかし、見ただけで情報を読み取るって凄すぎだろう。

「2つ目は望む未来への道が視えるものです。

これは神でも持っている者は少数です。

簡単な例を出しますと、私が美味しく料理を作るためにはちゃんとした手順があります。

2つ目の未来予知を持つてる人はどうすれば美味しく作ることができるかの手順を視ることができません。

これは1つ目の未来予知と違って100%成功します。

そうはいつてもレンが私に勝つことは不可能なので不可能なことを可能にすることはできないんですけどね。」

恐ろしい能力だな。

つまり、1%でも可能であればどんなことでも出来るってことだ。

まあ、退屈しそうな能力でもあるがな。

その能力があれば失敗なんてありえないし、どうなるかすべて分かっってしまう。

いうなれば、先の分かってる物語を読んでいるのと同じだ。

「どちらにせよ、先天的な才能の持ち主でなければ使うことはできません。

未来予知を持っている者の脳の構造は普通の物とは違います。

普通の脳が扱える情報を遥かに超えていますからね。

もし、無理矢理使おうとしたらあまりの情報量で脳が焼き切れるんじゃないでしょうか。」

なんとも役に立たない宝だな。

いや、俺なら死ぬ覚悟でやれば一応使えるのか？

「こつ話を聞いていると胡散臭さが増したな。

町興しのために流したデマじゃないのか？」

9つもでかい街があるんだから人は基本的のそっちに流れるだろうし、そうなれば小さい村や町は衰退してくる。

「別に宝探し云々はこの際どうでもいいのよ。用は面白そうな何かがおこればいいんだから。」

頼むから建前だけでも言ってくれ。本気で挫けそうになる。

「アリスは何があってもお兄ちゃんの味方だよ。」

「アリスは本当にいい子だな。」

くっ、あんなことがあった手前少しぎこちなくなってしまった。気付かれなければ良いんだが……

「レン、どうかしましたか？」

「なにもないが、どうしてだ？」

「いえ、何か変な感じがしたんですが気のせいみたいです。」

危ねえ！！

いつも通り、アリスの頭をなでる動作が一秒ためらっただけで気付かれそうになるとは……

「見えてきたわよ。」

「とりあえず今日は情報収集ね。」

本当に気をつけよう。

特にミナは勘も良ければ頭もいい。

何かあればすぐにばれてしまう。

俺は浮気をしてるだけでもないのにこんなことに気を払わなきゃいけないんだろつか・・・

・
・
・
・
・
・

「では、行くとするかの。」

「ああ。」

「うん。」

町に着いた後、宿を取り情報収集に行こうとした時、全員一緒に行動しても効率が悪ということと2手に別れることになった。

パワーバランスを考えた結果、フリッグ、ミナと俺、アリス、フリユネに別れた。

フリッグは最後まで反対していたがミナとアリスが抑え込みこの編成となった。

「その者、『妖精の導』というものを知っておるか？」

「それはもちろん。」

この町のはずれにある洞窟に在るそうで屈強な魔物が守ってるそうです。」

「それは誰から聞いたものじゃ？」

「友人から聞いた話ですが突き詰めれば結局噂で聞いたにたどり着くと思いますよ。」

「ふむ、礼を言う。」

結局噂か。

その噂から最も近いこの町でさえもその真意は知っていない。

これは妙だ。

アルフ Heim まで届くほどの噂だというのにこの町でも噂でしか知っていない。

こうなれば、誰かが意図的にこの町に人を集めるために所構わず噂をばらまいている感じた。

ただの町興しのためには規模がでかすぎる。

「すまない、もう一つ。」

『妖精の導』ってのはどんな物と聞いている？」

「未来を見ることができる鏡のような物と聞いています。」

「この町にそんな物が登場する伝承はあるか？」

「分かりません。」

詳しく知りたいなら町長のところを尋ねみてはどうでしょう。

この町に宝探しに来た方はほとんどの人が訪れていますよ。」

これはやっぱりデマの可能性が高いな。

伝承のようなものが存在するなら噂に一貫性が出るはずだがそれが

ない。

ミナは水晶と言っていたのに今度は鏡だ。
ただの偶然かも知れないが適当に噂をばらまいどこかで内容が変わったんだろう。

だが、そんな噂が俺たちがこの世界に来る前、つまり少なくとも4ヶ月は消えていない。

悪戯にばらまいただけならすぐに鎮静化するはずだというのにまだ広まってる。

そうなればこの噂に信憑性があるか誰かがこの町に人を集めるために今も噂をばらまき続けてるってことだ。

「ふむ、どうやらミナの言うとおり背後に何やら大きいものが付いているようじゃの。」

本当によく当たる勘だ。

少なくとも町興しなんてレベルじゃないな。

情報が足りなすぎてまだ決定的なことは言えないがこの町に人を集めてるってのは間違いない。

「とりあえず町長の所に行ってみるか。」

・
・
・
・
・
・
・
・

「あなた方も『妖精の導』を探しに来たのですな。」

あれはこの町に北西にある洞窟にあります。

ですが、周囲には魔物も多く、洞窟には『妖精の導』を守っている魔物もいると聞いています。

出来るだけ準備は怠らないよう気をつけてください。」

さてどうするか。

町長としては噂のおかげで町が賑わってきたのに余計なことを知られてそれを台無しにされたくないから何か知っていてもしゃべりはしないだろう。

「この町に『妖精の導』のような物が出てくる伝承か何かあるか？」

「ええ、ありますよ。」

この町の市役所に行けば貸してもらえenと思います。」

それがあると俺の推測が間違いということになるが、そんなものがあるなら何故、この町の住民がそのことを知らない？

もう少し調べる必要があるだろう。

「もう一つ、『妖精の導』を守っている魔物がいると言ったがそれは誰から聞いたんだ？」

「あくまでも噂の話です。」

私が聞いた話では帰ってきた人がそう言ったと聞いています。」

・
・
・
・
・
・

「どうにも胡散臭いわね。」

「こつちもいろいろ調べてみたが、『妖精の導』なんて大層なものはなかった。」

確かに伝承にそれっぽいものは書いてあったが、小さくしか書かれてないし未来予知じゃなくてあくまで占いのようなものだった。

そもそも、『妖精の導』なんて名称は無かった。

確かにあれならこの町の住人が知らなくてもおかしくないし、それっぽいものはあるんだから噂に信憑性を付けることができる。

誰れもが俺たちみたい調べてるわけじゃないからな。

「それにしては規模が大きいよね。」

誰かが裏で糸を引いているにしてもこんな辺境の町で何をしようって言うのかしら？」

「今分かってることは、誰かがこの町に人を集めてるってことだ。」

そつちに、『妖精の導』を探しに行つて帰ってきたって奴を聞いたか？」

「ないわね。」

それなのに、『妖精の導』を守ってる魔物がいるって噂が出回ってる。

これは町で物を買わせるためのデマだとしても、誰1人帰ってこないってのは流石におかしいわね。」

面倒な話になってきたな。

ここまで来ると個人で出来るレベルを遥かに超えてる。

つまり、後ろに組織がいるってことだがそれがこんな辺境の町のレ

ベルじゃない。

そこそこ大きい組織だ。

下手をすると『ニーズヘッグ』レベルの組織が控えてる可能性もある。

「これ止めた方がよくないか？

嫌な予感なんてもんじゃないぞ。」

聞き込みをしえていたときに分かったことだがこの噂が広まるまでこの町はここまでの賑わいどころか町として保っているのがやっとだったって話だ。

つまり、かなりの人が集まっている。

そうなると、誰かは知らないがこの町に人を集めている奴の目的はもうすぐ果たされるはずだ。

「そうねえ、とりあえず明日洞窟とやらを見に行きましょう。

それで何もなければ帰るわ。」

本当に何事もなければいいんだが………

『書をなす魔法の杖』

「それじゃあ行きましようか。」

翌日、一泊し『妖精の導』があるとされている洞窟へ向かうことになったんだが

「言うほど魔物が強くないよな？」

「ええ、私とレンでも倒せるくらいなもの。」

いくら古代魔法が使えるといっても人外一歩手前のミナや素人に毛が生えたくらいの俺で十分に対処できる。

これならアルフヘイム周辺の魔物の方が圧倒的に強い。
一流の冒険者ならこの程度で帰れなくなるようなことがあるはずがない。

もうデマは確定だな。

「あれが言ってた洞窟みたいね。」

「ふむ、噂がデマだと分かった以上、レンとミナは出来るだけ前に出ぬようにせよ。」

前は妾とアリス、後ろはフリッグという形で進むぞ。」

さて、鬼が出るか蛇が出るか……

「どつやらここに誰か来たってのは間違いないな。」

分岐点に目印のようなものが複数付けてある。

帰り道に迷わないようにここに来たやつが付けたんだろう。

「そうになると魔物が『妖精の導』を守ってるってのは本当なのか？」

「結局確かめてみないことには分からないわね。」

好奇心は猫を殺すって言葉を知らないのか？

いくら、人外の規格外が三人いるとはいえ絶対ってことはないんだぞ。

「何か聞こえない？」

「これは戦闘音のようですね。」

先客がいたみたいだな。

だがこれは好都合だ

「案内してくれ、噂の真意を確かめる絶好の機会だ。」

・
・
・
・
・
・
「あそここのようです。」

両方とも人だな。

「ねえ、あれって……」

「ああ、あれは確かアビスって奴だな。」

『ニーズヘッグ』の幹部まで出払ってくるってことは並大抵のことじゃない。

それに、その幹部が押されているってのも問題だ。

実際の実力は見たことないが半端な実力では幹部にはなれないはず。

「どうするのじゃ？」

妾としては生け捕りしたいところなのじゃが。」

「そんな事情は知らん。

今はできるだけ情報を集めるのが先決だ。

流石にやばくなったら助けに入ってもいいがもう少し様子を見よう。」

ついでに『ニーズヘッグ』の幹部を捕えたってことフリユネが公表すれば株も上がるし、他の王位継承権を持つてる奴も焦って手柄を立てようとしないはず。

そうなれば、なおさら犯罪組織は表立って動きにくくなるしな。

side アビス

「まさか、ここまでやるとはね。」

「たった1人で来るとは迂闊だったね。」

良く言う。

大勢で来たらそっちの思うつぼだろうに。

「どつやら噂を本当のようだ。

「旦那引かせてもらうよ。」

「させると思うかい？」

「出来ないと思う？」

実際の所かなり厳しい。

どんな手段を使ってるか知らないけどこっちの動きを読んだような動きをしてくる。

でも、このことを伝えなければ世界が危うい。

「君ほどの魔力の持ち主ならそこらの冒険者の10人以上にはなる。」

私の目的のため大人しくしてもらおうよ。」

万事休すか……

side out

「この辺が潮時だな。

フリッグはあの男を仕留めてくれ。

フリユネとアリスでアビスを拘束、俺とミナは念のため出口を固めておく。」

いくら強くてもフリッグ相手に勝てる奴はいないだろう。

「行くぞ。」

side フリッグ

「これは可愛らしいお嬢さんだ。
君も『妖精の導』を探しに来たのかい？」

「ええ、なのでおとなしく捕まってください。」

「残念だがこんなところでは捕まるわけにはいかないのね。
君に勝てる方法は今のところないようだ。
ここは逃げさせてもらおうよ。」

「逃がすと思いますか？」

例え世界の反対側においても逃がしませんよ。

「いいのかい？
君が本気を出せば世界は沈むが。」

「あなたはいつたい何者ですか？」

私が神だと知っているのはレンたち以外を除けば誰もいないはずで
すが……

「そうだな、『害をなす魔法の杖』とでも名乗っておこう。」

「……………どうやら思っている以上に危険な人のようですね。」

「それほどでもないよ。
それよりも連れの2人はいいのかい？」

っ！！

「レン！！ ミナ！！」

「ふふっ、ではまた縁があれば会おう。」

くっ、姿を消したくらいで私から逃げられるとでも思ってるんですか！！

「これは……………」

同じ気配が複数ある。

最初から逃げる準備はできていたということですか……………

side out

「レン、大丈夫？」

「ああ、助かった。」

いきなり洞窟が崩れてきやがった。

別に死にはしないんだが痛いのは嫌だからな。

ミナにはフリッグの障壁が発動するから近くに行けば守ってもらえるから、それで事なきを得た。

まあ、男がすることじゃないな。

「レン、ミナ、大丈夫ですか？」

「ああ、その様子だと逃がしたみたいだな。」

「すみません、取り乱した一瞬の間に逃げられました。」

まさかフリッグから逃げられる奴がいるなんてな。

「レン、こっちは拘束で来ておるぞ。」

「やあ、また会ったね。」

「俺は会いたくなかったけどな。」

まったく、俺は本当に厄介事に縁があるようだ。

まさか、『ニーズヘッグ』の幹部と2度も会うことになるとは。

「とりあえず落ち着け、ミナ。」

殺されかけた奴を目の前にして冷静でいられる方が凄いと思うがこいつからは聞かなきゃいけないことがある。

「……………分かってる。」

「さて、どうしてここにいる？」

「見ての通りだよ。」

さっきの男の目的を確認及び阻止しようとしたら逆に捕まりそうになった。」

随分とあっさり答えるな。

何か裏があるのか？

「君たちは『妖精の導』を探しに来たのかい？」

「一応な、まあ、さっきの場面を見たらそんな物ないと思うがな。」

「いや、『妖精の導』は存在する。」

もつとも、噂で出回ってるような物じゃないけどな。」

「やけに、素直にしゃべってくれるがどういふつもりだ？」

「はつきり言って、今回の件は僕一人じゃ無理だ。」

かと言って中途半端な構成員を連れただころで彼の思いつぼ、そこで君たちが倒してくれば僕たちも助かるからさ。」

辻褄は合うがこいつは正真正銘の悪党だ。

平気で人を騙すし殺せる。

そんな奴の言葉をすべて鵜呑みにするわけにはいかない。

「お前が知っている『妖精の導』ってのはなんだ？」

「詳しくは分からない。」

だが、裏の世界でここ数年で急激に力を増している『スルト』という組織がこの町で何かをやるうとしていると噂になっているんだ。

だけど、『スルト』の幹部を捕まえても何も知っていないからただの噂かと思っていたんだけどどうやら違うようだ。」

予想はしていたがやっぱり裏の組織が絡んでいたか。

そして、あいつが言っていた言葉を考慮に入れるとこの町に人を集めている理由は

「おそらく『妖精の導』は大量の魔力を集めて起動することができ
る何かだと思う。」

その生贄の為に表にも裏にも噂をばらまいている。」

もう考えるのも嫌になるようなことを言ってくれ。

「レン、さっきの男は自分のことを『害をなす魔法の杖』と名乗りました。

その名称は魔剣レヴァンティンの別名です。」

おいおい、確かレヴァンティンって

「レヴァンティンはかつてすべての世界を滅ぼした究極の魔剣です。さらに、あの男、もしかしたら2つ目の未来予知の持ち主かもしれません。」

そうなる则该の男の目的は……」

ああ、聞きたくないがもう俺の中でだいたいの予想がついてしまっている。

「世界を滅ぼすことかもしれません。」

ついに世界規模になったか……

勝率0%の勝負

流石に世界云々の話しになってくると沈黙が重い。

「どうするつもりじゃ、レン？」

「逆にこっちが聞きたい。

どうするんだ？」

フリッグの予想が正しければこの計画は確実に成功する。

いや、フリッグがこの辺りを一掃すれば計画も何も無いと思うが。

「妾は奴を追うぞ。

妾は次期王じゃ、民の危機をこのまま放っておくことは出来ぬ。」

「個人でどうにかできると思ってるのか？」

いくらフリユネでもこればかりは無理だ。

望む未来を作ることが出来るあの男相手に勝とうとするなら勝てる方法がない状態に持ち込まなければ勝つことはできないし、その状況を作らせてくれるとも思えない。

「無理じゃろうな。

じゃが、レン、御主が協力してくれるというのなら話は別じゃ。」

「それは過大評価しすぎだ。

そもそも何の情報もなしに俺が役に立ってる場はない。」

「ならば、情報さえあればどうにかできるといふことじゃな？」

「それでもあいつの未来予知がある限り俺たちに勝ち目はない。フリッグがここら一帯を消滅させるというなら話は別だがな。」

それに、この噂は俺たちがこの世界に来る前から広め始めてたってことは、すでに完成間近という状況でもおかしくない。

「ふむ、ならば他の者はどうじゃ？」

「私はレンに任せるわ。」

今回ばかりは無理矢理引き込んでいい内容じゃないみたいだしね。

「

「アリスはお兄ちゃんに従うよ。」

「私もですね。」

レンがやれというのならばこの辺り一帯を滅ぼしこの世界から消し去ります。」

「どうするのじゃ、レン？」

御主の一言で妾が1人でいくか全員で行くか決まるのじゃが？」

自分を人質ってか、本当に性質が悪いな。

「分かったよ。」

その代わり貸し1つだからな。」

勝率0%の勝負か……

部が悪いとかいうもんじゃないな。

「まずは『妖精の導』だが詳しいことはなにも分かってない。だから、世界を滅ぼすつてのも俺たちの推測だ。先入観は視野を狭めるから、まず、それは忘れる。」

正直、今あの男の目的なんてどうでもいい。

「次は俺たちの勝利条件だ。

俺たちがやることはあの男を捕まえることじゃなく、『妖精の導』の奪取、または破壊。

未来を作ることが出来るあの男を捕まえることはかなり難しいが『妖精の導』は別だ。」

「どうしてですか？

もし、あの男が持ち歩いてたり見つからないように未来を作っていたりしたらそれも難しいんじゃないですか？」

「これは推測だが『妖精の導』は持ち運びはできない物だ。

持ち運びできるならわざわざ人を集めるなんてことはせず転々と移動しながら魔力を集めた方が遥かに効率的だしな。

後者だが、動かせない物を見つからないようにする未来なんて作れないはずだ。

動かせない物を見つからないようにするには物かその場所を隠蔽する必要がある。

だが、フリッグですら気付けないような巧妙な隠蔽を魔法でなんて人が出来る筈がない。

分からない場所にあったとしてもあの男が見つけてるということは俺たちにたどり着けない場所じゃないはずだ。」

あの男が出来ることは未来を作るということだ。

未来を作る過程でどうすれば成功するかが視えるんだろうが、それ以外ではどうすれば成功するかなんて視えるはずがない。つまり、完全に見つからない方法がない限り未来は作れない。俺の推測が正しければそんな方法はない。あくまで推論だから間違つてたらそれまでなんだがな。

「ふむ、ならば早速『妖精の導』を探しに行くぞ。」

「さて、確かに見つかるとは言ったがそこに何も無いはずがない。見つからないようにすることはできなくても排除することはできる。こういっちゃなんだがフリユネは規格外だが死なないわけじゃない。このこ出向いたら殺されるのが落ちだ。」

「ならばどうするつもりじゃ？」

「それは今から考える。」

とりあえず、こいつの処置を考えないとな。」

「そうじゃな。」

「私は即殺で。」

物騒すぎるぞ。

そこまで恨みがあるのか？

「妾はこのままアースガルドに連行して妾の株をあげる、じゃな。」

悪くはないんだが、もう少し言い方はないのか？

「私はフリユネよりですね。」

「アリスはミナお姉ちゃんの方かな。」

ふむ、2対2か・・・

俺もどちらかと言えばフリユネよりだが

「俺はこいつを利用するだな。」

正確には『ニーズヘッグ』をだかな。」

この辺りにあるとは思うが、人出は多いに越したことはないしな。

「それを僕が認めるとでも？」

「認めざるを得ないだろ。」

この状況を止められるのは俺たち以外いない。
ならお前は少しでも止められる可能性をあげる必要があるからな。」

それに、その人手を囿にあの男が手を出そうものならフリッグたちのセンサーに引っ掛かるしな。

さらに、幹部を連れてきてくれればフリユネに借りができる。

「君にはこつちの世界の才能があるよ。」

「そりゃ、どうも。」

で、どうする？」

「協力させてもらおうよ。」

連絡を取るから少し待ってくれ。」

って、これじゃあ他の意見を集めた意味がないな。

「みんなはこれでいいか？」

「レンが決めたことに誰も文句は言わないわよ。私たちがじゃどうしようもなさそうだしね。」

期待するのは良いが正直勝てる気がしないぞ。

こっちは勝てる未来が作れない切り札とも言えるフリッグがいるからあの男さえ見つければ勝てる可能性はあるが見つからないという未来を作られればこっちの位置が知られているような物だ。

「連絡が取れた、それでどこを探させればいい？」

「この町周辺すべてだ。」

それらしい物が見つかったら近づかないように言っといてくれ。死にたいなら別だがな。」

死なれた目覚めが悪いし、生け捕りの方が後々いろいろ聞き出せるしな。

「探させてる間はどうするんですか？」

「アリスとフリユネはここでこいつの見張り、俺とミナとフリッグは『妖精の導』を探そうと思う。」

手傷を負ってるはいえ油断できる相手じゃないしこの2人は置いておきたい。

フリッグにはいつでも動ける状態じゃないと困るしミナじゃ太刀打ちできないかもしれないからな。」

な仕掛けは打ってないはずだ。」

何か大きな思い違いをしてるのか？

こういうところは抑えておかないと後々効いてくるんだよなあ。

「なにせよ私がいる限りどんな仕掛けを打っても問題ありませんよ。」

頼もしい限りなんだが相手も一筋縄ではいかない。

俺たちのこの行動さえもあいつの作った未来かも知れないんだ。

『レン、どうやら見つかったようじゃ。』

詐欺師（前書き）

初レビューを書いてもらい作者のモチベーションが一気に上がりました。

頑張って2日に1回は更新したいと思います。

ワタナベヨウリョウ様、レビューありがとうございます。

詐欺師

「ここだ。」

まさか、犯罪組織の人に案内されることになるとは人生いろいろあるものだ。

「ところで、なぜここだと分かった？」

「怪しい男が入って行くのを見たそうだ。」

明らかに罠だろ・・・

まあ、罠でもフリッグがいる限り意味なんてないし、情報を集める為に入ってみるか。

「2人とも、私の傍から離れないでくださいね。」

「ミナの近くにいれば大丈夫じゃないのか？」

むしろフリッグの近くにいたらフリッグの邪魔になるだろうし、ミナの近くならフルオートで障壁が展開するしな。

「そんなにミナの近くにいたいんですか？」

そういうことか・・・

こんな時にまでそんなことを気にするなよ。

「フリッグ、頼むぞ。」

「はい!!」

まあ、下手に突っ込もうものならヤンデレのスイッチを押してしま
うかもしれないから口が裂けても余計なことは言わないがな。

「緊張感ないわねえ。」

フリッグに畏なんて仕掛けても意味ないから警戒なんてしても無駄
に精神をすり減らすだけ。

それなら、気を楽しんでいざという時に備えていた方が効率的だ。

「それにしても畏らしきものがないな。」

「案外本当にここにいたりするんじゃない?」

そんなご都合主義な人生は送ってない。

そもそも見間違いつて言う線もあるしな。

「どうやら、当たりみたいですよ。」

は?

「ようこそ。」

なにもないところだけど歓迎するよ。」

まさか本当にいるとは・・・

「大人しく捕まる気にならなっただか?」

「なぜ、私が捕まえられなければならないんだい?」

私は私の住処に無断で踏み込んできた愚か者たちを処罰していただけだというのに。」

確かに推測ではこいつが人を集めているということになってるが、所詮は推測だ。

偶然と言ってしまうえばそれまでなんだが……

「それなら何故俺たちの時は逃げたんだ？」

「信じられないかもしれないけど、私は成功への未来が視えるんだ。それがその彼女には勝てる未来が見えなくてね。

自己保身のために1度逃げただけで、どうやら君たちは話が分かるようだからこっやって改めて挨拶に出てきたという訳だよ。」

筋は通ってる。

だが、こいつこの言葉を鵜呑みにするにはあの噂が引っ掛かる。それに『害をなす魔法の杖』と名乗った理由も分からないままだ。

「『妖精の導』っていう物を知ってるか？」

この近くにあるっていう噂なんだが？」

「ああ、あれは私が持つてるものだよ。

どこから漏れたのかそれを求めて私の住処を荒らす愚か者が増えて困ってるんだ。」

「それを使うには大量の魔力が必要だと聞いたんだが？」

「それはあの男から聞いたのだろう？」

犯罪者の言葉をそうそう信じていいものなのかい？」

やりにくい相手だな。

ここであの時の会話を聞いていたと言っても適当にかわされるだろう。

それとも、本当に俺の考えすぎなのか……

「『害をなす魔法の杖』と名乗ったみたいだがそれはどういうことだ？」

「世界を滅ぼすため……とでも言うと思ったかい？」

いくら成功への未来が見えると言っても私1人の力では世界なんて滅ぼせない。」

「その為の『妖精の導』じゃないのか？」

「どつやらどつしても私を世界を滅ぼす魔王にでもしたいようだね。」

『スルト』って組織名乗ってるんなら魔王も同然だろう。

「ふむ、どつやったら信じてもらえるのかな？」

「『妖精の導』を見せてくれたら信じてやってもいいぞ。」

「いいでしょう。」

「こっちですよ。」

やけにあっさり答えたな。

「レン、今ここで捕まえた方が早くない？」

「まだあいつが黒だとは決まっていけない。
まんまと口車に乗せられてる感じだな。」

この思考さえもあいつの作った未来の内なのか？
疑心暗鬼に囚われそうになるな。

『レン！！ あの男が現れおったぞ！！』

「ちょっと待って、今俺たちの目の前に……」

まさかこいつは偽物！？

「どうかしたんですか？」

もしこいつが本物なら……

「ああああああ！！ 腕があああ！！」

「ちょっとどうしたのレン！！」

「こいつは偽物だ。」

「どうやら俺たちは時間稼ぎのためにおびき寄せられたみたいだな。」

もしこいつが本物なら銃弾くらいなら簡単にかわせるはず、簡単に
当たってことは偽物確定だな。

さっきまでの会話もあらかじめ仕込まれてたってことか。
こんな単純な手にひっかるなんてな。

「フリッグ、そいつの傷を塞いだらフリユネの所まで転移してくれ。」

「分かりました。」

まずいな、今この辺りには『ニーズヘッグ』の構成員がいる。
まんまと生贄を呼び出されたってことだ。

「行きますよ。」

間にあうか……

・
・
・
・
・

「フリユネ、状況は!!」

「見ての通りじゃ、かなりの人数がやられておる。
妾達が駆け付けた時には既に逃げられておった。」

「フリツグ、奪われた魔力をたどれないか？」

あの男自身の魔力なら誤魔化されるかもしれないが奪われた魔力ま
では誤魔化しきれないはずだ。

「捕えました。」

すぐに転移しますか？」

「ああ、フリユネはアビスの監視を続行してくれ。」

「うむ、そつちは頼むぞ。」

これもあいつが作った未来の上なのか？

それならば気付かれることは承知のはず。

気付かれてなお成功させる手段があるとでも？

今から転移するところには『妖精の導』があるだろう。

そこならたとえあの男が逃げようと『妖精の導』を破壊すれば俺たちの勝ちだ。

つまり、破壊させないつもりか、それとも他になにかあるのか・・・

「行きます。」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「やはり、来ましたか。」

この余裕、やはり何かこの状況をひっくり返すことができるジョーカーを持っているのか？

「悪いがおしゃべりするつもりはない。

問答無用だ破壊させてもらう。」

「君に人の願いを踏みにじることができるのかい？」

「っ!!！」

「確かに君は守るべきものと秤にかければできるだろう。

だが、今の私は君たちに危害はまったく加えてもいなしこれからも加えるつもりはない。」

落ち着け、落ち着いて論理を展開させる。

何故、俺の性格を知っている？

それすらもこいつの未来予知の力？

フリッグの時もそうだ。

まるで、フリッグが来ることを知っていたかのような罠だった。

こいつがやっていることは『妖精の導』を発動させる未来を視ることのはず。

それならば噂を広め人を集める手段が見えるはずなのに、その過程で発生した俺たちという問題にまで対応できてる。

「私は成功への未来が見えるが成功した後どうなるかまでは見えな
いんだ。

例えば話をしよう、ある男とある女がいるとしよう。

私はその2人を結婚させる為の未来が見える。

だが、その後のことまで分からない。

私はその後を見たいんだよ。

自ら作った設定の上で紡がれる物語を読みたい。

私は作者であり読者だ。」

考える、何故俺たちが来ることを知ることができた？

「なら『妖精の導』を使ってどんな物語を作るつもりだ？

そもそも、『妖精の導』とはなんだ？」

こいつはフリッグと初めて対峙した時、勝てる未来が視えないと言った。

それはおかしい。

すでにフリッグに対する対策を立てておきながら何故その場で未来を視ようとする必要がある？

「『妖精の導』とは未来予知を行える者の為の演算装置。

さらに遠くの未来を確実に視通すことができ、さらに精密な未来を視ることができる。

それがあれば、多くの者が望みながら今もなお成すことができない世界平和を成すことができる。」

さらに言えば、この計画が始まるころは俺たちはまだこの世界にいなかった。

そんな無名の俺たちに対して対策を立ててる。

まるで、俺たちが来ることもフリッグの強さも知っているかのよう

に。

「どうだろう、もしよければ君たちも協力してくれないか？

君たちと私が手を組めば世界平和も私1人で取り組むより、早く実現できる。」

「それもお前が作っている未来なのか？」

「騙されているように感じるだろうが、世界平和は誰にとってもいいものだろう？」

私は世界平和を成した世界がどんな物語を紡ぐか見てみたい。

争いのない世界がどんな道をたどるかを。」

……知っていたかのように？

「フリッグ、1つ目の未来予知は視ただけで情報を読み取ることが
できるって言うてたよな？」

それなら災害が来ることを予知なんてなぜ出来るんだ？」

「それは世界から情報を読み取ってるんです。
何故今そんなこと聞くんですか？」

なるほど、どういうことか。

「まったく、とんだ詐欺師だな。
危うく騙されるところだった。」

最悪の真実

「……………どういうことかな？」

「最初に言つとくがこれは鎌かけじゃない。

あくまで推測だがこの仮説ならお前がやった不可解な行動にも納得がいく。」

さあ、解答編だ。

その仮面はぎ取ってやる。

「まずこれは確認だが俺がお前を銃で撃つとしよう。

そうなればお前は銃弾が当たらない未来を作るよな。」

「……………そうだね。

痛い思いをするのは誰だって嫌なことだからね。」

そう余裕ぶっつていられるのもいまのうちだ。

「つまり、お前は俺がお前に対して銃を向けている状況を知っておく必要がある。

もつともお前が俺に銃を向けられる未来を作ってるというなら話は別だがな。」

「随分回りくどい言い方をするね。

何か言いたいことがあるならはっきり言ったらどうだい？」

「いいだろう。」

俺の仮説の結論、それはお前は未来を作ることなんてできない。

お前に出来ることは未来を予知することだけだ。」

今思えばかなり単純なことだったんだがフリッグが与えた情報のせいで変な先入観が生まれてたな。

まったく、自分で言ったことだったのに。

「でもそれはおかしくないですか？

彼は私から逃げる事ができたんですよ。

いくら私の動きが視えていたとしてもあんな罠を仕掛けられるものなんですか？」

「それについてはフリッグが言っただろう？

未来予知するのは数多ある未来を視通す力。

それは情報があつてこそ初めて役に立つ。

こいつはこの計画を始めてから起きる未来を視た。

それも世界から読み取れるほどの力の持ち主なら俺たちが来ることを予知できてもおかしくない。」

「なるほどね。

私たちが来る事が分かっていたら私たちのことを調べて私とレンが弱点となりうるくらい簡単に想像できる。」

さっきの俺のことを知っているかのような会話もそれで納得がいく。いくら俺が裏で動いてるとはいえ最近が目立つ行動があつたからな。そうなれば必然的にアルフヘイムの2つの事件のことに行きつく。そこで誰も殺してない、甘い措置ばかり取っていれば俺の性格くらい把握できるだろう。

「その通りだ。

それに頭が切れる奴ならある程度俺たちの動きを予測することもで

きる。

それだけでなく俺たちがどう行動するか予知すればいいだけだしな。

「

「やれやれ、やはりこうなっちゃいましたか。

こうならない為に可能な限り手を打ったんですが覆すことができなかったようですな。」

よくもここまで嘘を真実に見せられたものだ。

さっきまで話していたこともすべて真つ赤な嘘。

真実を曲げれば必ず歪み発生する。

それが矛盾として現れるがそれも最小限に留めてる。

こいつは根っからの詐欺師だな。

「予知した未来ではこの先どうなってるんだ？」

「『妖精の導』を破壊されますよ。」

なので最後の悪あがきといきましょう。

レン・カザミネ、君に私の願いを壊せますか？」

「この期に及んで今更世界平和の素晴らしさを説こうってのか？」

「いえ、私の本当の目的は未来を変えることですよ。」

「それくらいいつもやってるだろう？」

未来予知で見れるものはあくまで可能性の1つ。

実際、俺たちのことを調べなければあの場で捕えることだってできたはずだ。

「ええ、確かに君が私を撃つたという未来が在ったとしても私がそれをかわせば未来を変えているということにはなりません。しかし、世界には大きな流れ、俗に言う運命という物があるんですよ。」

「どれだけ私がその流れを乱そうとしても世界はそれを修正し、乱そうとする者を排除しようとする。」

「君たちが私を止めようとしていることも世界が定めた未来なのかもしれないですね。」

「そんなことしてどうするつもりだ？」

「未来なんて大多数の人には見えない。」

「例え運命に流されていようが人が生きていく上で何の支障もない。」

「確かにそうです。」

「例え未来が視える者であっても支障はないでしょう。」

「しかし、先ほど私は作者であり読者といいましたが私は生粋の読者です。私は今の世界がたどる物語を読み終わってしまった。」

「だから、私は流れからはずれ、新たな流れが紡ぐ物語を読みたい。」

「その為の『妖精の導』か？」

「街と街を繋ぐ街道があるように流れにもたどるべき道筋があります。」

「『妖精の導』があれば街道に別れ道があるように流れがたどる道筋にある分岐点を見ること出来ます。」

「その分岐点さえ分かればやりようはいくらでもあるんですよ。」

「これが真実か」

「あんた最悪だな。」

「褒め言葉として受け取っておきますよ。」

流れが外れた世界がどうなるかも分からない、それ以前に多くの人の命を奪ってる。

その目的が物語を読みたいから。

そんなことの為に世界全てを巻き込むことができる精神。まともな思考回路じゃ到底たどり着けない結論だ。

「さて、私の目的は話しました。

改めて尋ねましょう。

君に私の願いを壊せますか？

いえ、君に私が殺せますか？」

こいつは殺さない限り、また流れを外すために別の方法を考えるだろう。

その度に多くの人の命が奪われ、その中に俺の知ってる奴が入る可能性もある。

だが……

「流れからはずれ、新たな流れをたどる世界は私にも予知できませんん。

しかし、その流れが今より悪くなると言えますか？

それに、私が流れを読み終わるまで数十年かかりました。

『妖精の導』を使ったとしても流れを変えることができるのは数年後、もしかすれば十年以上後のことかもしれません。

その後、流れを読んだとして次に流れを変えようとした時には私は死んでいるでしょう。

そもそも流れを変えることができないかもしれません。

しかし、私が奪った命はもう戻らない。

それならば、『妖精の導』を破壊せず私のことを黙認しておくのも悪くないでしょう。

『妖精の導』さえあれば分岐点を変えること以外で命を奪うこともない。」

世界の均衡を保つ神が何もしてこないということは流れを変えたところで世界の均衡は崩れないということ。ただ、たどる未来が変わるだけ。

「しかし、『妖精の導』を破壊するというのなら私は新しい方法でアプローチをします。

その過程で再び命を奪うこともあるでしょう。

だが、君はそれを容認できない。

ならば私を殺すか、このまま黙認するかどちらかしかない。」

「好き勝手言ってるけど私たちが貴方を殺すことだってできるのよ。」

「確かに、実際に私を殺すとなればそのお嬢さんがやるでしょう。しかし、たとえ彼女が殺すことになったとしても彼は自分を責めることになりますよ。」

「っ!！」

この詐欺師め、俺の性格を理解したうえで言葉を選んできやがる。

「レンよ、妾が命じてやろう。」

その男を殺せ。」

「その時はアリスたちのせいにしてもいいんだよ、お兄ちゃん。」

「どっしてここに？」

「してやられての。」

下っ端を囷にして逃げおった。」

堂々と言うな。

完全に『ニーズヘッグ』から注目されることになるだろうが。

「レン、例えレンがあいつを殺したって引つ張ってきたのは私なんだからレンの責任ばかりってわけじゃないんだからね。」

「それに実際に殺すのは私ですしね。」

まったく、お前等格好良すぎだろう。

俺の男の立場だな。

「フリッグ、『妖精の導』を破壊してくれ。」

「分かりました。」

「フリユネ、その男を絶対に逃げられないよなところに閉じ込められるよう手配を頼む。」

「いいじゃろう。」

「ふふっ、どこまでも甘い判断だ。」

もし私が脱獄したらどうするつもりだい？」

「その時はまた相手してやるよ。」

その度にお前の願いを壊してやる。」

俺だって人を殺したくない。

なにより、こいつ等に人を殺させたくない。

こんなことでしか俺がこいつ等を守ってやれる方法はないしな。

「本当に君は面白い。

君のこれからの未来には第二、第三の私が現れるだろう。

君はその度に背負って行くつもりかい？」

お前は本当に魔王か。

それに未来予知ができるお前が言つと洒落にならない。

「それが俺に出来るこいつ等を守る方法だからな。」

「では、改め尋ねましょう。

君に私の願いが壊せますか？」

「ああ、あんたの願い俺が壊してやるよ。」

終結

終わったか……

「また一から振り出しですか。

この計画は3年かけてここまでやってきたというのに。」

最後の最後まで嫌がらせのつもりか？

まあ、確かに罪悪感を感じるが今回はいつもよりまだ。これもこいつ等のおかげか。

「これに懲りたらこんなことはもう止めることだな。」

「それはありえませんかよ。

私が私でいる限り止まることはないでしょう。」

こいつが死ぬまで一生付き合い続けなきゃいけないのか。フリッグに記憶を消してもらってもものも1つの手だな。

「嫌でも止まってもらう。

未来を視る力だけでそう簡単に脱獄はできないだろう？」

投獄はこの3人がいる限り避けようのないものだからな。

「ええ、簡単には出来ないかもしれませんが不可能ではありませんからね。

いずれまた会いましょう。」

「俺は二度と会いたくなんてないな。」

・ ・ ・ ・ ・

宝探しの一件から早一週間、そろそろ次の旅先が決まるころだな。

あの後、あの男は投獄。

フリユネは『スルト』を壊滅及び『ニーズヘッグ』構成員に加え幹部に近い奴も捕まえて評価は鰻登り。

他の継承候補は読み通りやっきになって手柄を立てようとしているから犯罪組織もより一層表には出にくくなっただろう。

「レン、どうやらあの男が脱獄したようじゃ。」

「いくらなんでも早すぎないか？

あいつを投獄した監獄は誰も出したことないところだろう？」

「どうやらと動く前から仕掛けられておっいたらしく簡単に逃げられたそうじゃ。」

未来が視えるんだから確かにそれくらいの前準備くらいはやってるか。

「心配せずとも、また現れれば倒せばよいことじゃろう。」

「簡単に言ってくれ。」

もしあの男がフリユネやアリスと同等の駒を手に入れたとしたら簡単に勝たせてくれないだろう。それでも負けてやる気はないがな。

「レン、フリユネ、朝ごはんですよ。」

「行くか。」

「そうじゃの。」

俺は俺の出来ることごとくいつ等を守って行く。

後99年と半年、俺が死ぬまでは……

俺がこんなふうに思えるようになるとはちょっとまで前は思わなかった。

・
・
・
・
・
・
・
・

「それじゃあ次の旅先を発表するわよ。」

次はムスペルヘイム、ニブルヘイムの反対にある常夏の街よ。」

ムスペルヘイム、確か常夏の街ってことでリゾート地みたいなのだったな。

近くにはもちろん海があるいろいろな娯楽施設なんかもあったりするそうだ。

付いた2つ名はそのまま娯楽の街。

「たまにはのんびりするの悪くないと思ってね。それについ最近、大きい問題が起きたから今回はちょっとした羽休めよ。」

「ミナ、熱でもあるんじゃないか？」

「……私そんなにおかしなこと言った？」

「大切なミナが熱を出したかもしれないんだぞ？ そりゃ心配するだろう。」

宝探しの一件でミナをいじめるところじゃなかったからな。

俺は恨みは忘れないんだよ。

「えっ!!」

そ、その大切に思ってくれるのは嬉しいけど、なにもこんなみんなの前で言わなくても……」

くっ、やはりフリッグとアリスからとんでもないプレッシャーが掛かってくる。

だが、ミナの真っ赤に染まった顔を見られればこれくらいは……

「何を言ってるんだ、俺とミナの仲だろ？」

そんなこと今更気にするな。」

「レ、レン……」

そろそろ落ちをつけるか。

もう少しからかってもいいんだが、いい加減2人からのプレッシャーがやばい。

「ミナはジンの妹なんだから俺の妹みたいなものだな。」

「そ、そうよね。」

「レンにとって私は……え？」

「だから親友の妹で俺もミナのこと妹みたいに思ってるからな。大切な家族が熱を出したら心配するだろ？」

「え？」

「どうしたんだ？」

「もしかして他のなにかと勘違いしたのか？」

「ああ、これだこれ。」

「この羞恥で真っ赤に染まった顔でおろしてるこれが見たかったんだよ。」

「レ、レンの馬鹿ああ!!!!!!」

「行っちゃいましたね。」

「少しからかいすぎたか？」

「フリッグとアリスがいなければもうちょっといじめられたんだが、やりすぎると幼児退行するからこれくらいでちょうど良かったのか？」

「悪趣味な男じゃの。」

「お前にだけは言われたくない。」

お前こそ俺が上手くたちまわってなんとか均衡を保ってる関係を面白がって崩そうとするだろうが。」

「で、ムスペル Heim にはいつ行くんだ？」

「いつもと同じ一週間後です。」

移動もいつもと変わらずミナ車で、それと今回はジンも同行するそうです。」

最近はお前の方に飯を食いに行ってるらしいからこの場には来なくなっただよな。

「ちなみにジンの彼女さんも来るそうですよ。」

なんでも婚約関係で婚前旅行に行くらしいです。」

俺が知らない内にそこまで進んでいるとは……

しかし、これはまずいな。

ジンとその彼女がいちゃついていることを見てフリッグたちが刺激される可能性がある。

このタイミングでミナをいじめたのは失敗だったかもしれないな。

「結婚ですか、羨ましいですね。」

この流れはやばいな。

「そついえばあの男の名前ってなんだっただよ？」

「ふむ、式は妾が開こう。
アースガルドにはいい教会があるからの。」

この野郎、話を逸らそうとしてるってのに……

「レ、フリッグ、この前頼んだことはやっておいでくれたか？」

「……はい。」

まさか、あそこまでしつこいとは思いませんでした。」

よし、なんとか逸らせたか。

「うち、あの男の名はアニメ・メストじゃ。」

舌打ちしやがった。

分かってはいたがここまで露骨に態度に出されると流石に殺意が湧
くな。

side アニム

「ふふつ、『妖精の導』が破壊されることを知っていて本物の近く
で人を集めるわけありませんよ。」

偽物が壊された瞬間に本物の方に集めた魔力が行くように仕掛けを
打っておけば私が脱獄した後起動できますしね。
流石の彼もここまででは読めないでしょう。

「さあ、私に新しい物語を読ませてください『妖精の導』よ。」

新しい流れが紡ぐ物語を。

「……………これは。」

『残念だったなこの詐欺師。』

あれが偽物だったことはお前が堂々と『ニースヘッグ』を襲撃した時に分かってたんだよ。

だから、お前が投獄された後魔力の流れをたどって破壊させてもらった。

あなたの願いは悉く俺が壊してやるよ。

レン・カザミネより』

「ふふっ、これは一本取られましたね。

しかも、その場で破壊せずにわざわざ脱獄した私が見ることを予測してこの手紙を置いておくとはなかなか鬼畜なやりくちじゃないですか。」

いいでしょう、レン・カザミネ。

「次の舞台で再び会いましょう。
楽しみにしていますよ。」

side out

終結（後書き）

次話はミナのターンです

妹の理由

参った、確かに前もそう簡単には行かなかったがここまでとは・・・

「いい加減機嫌直せ。」

「ふん!!」

あれからすでに3日、まともに口をきいてもくれない状況だ。

フリッグならからかっても次の日になれば元通りだから同じ調子でやったらこれだ。

さて、どうするか・・・

「ミナ、腹減ってないか？」

昨日試しに作ってみたから食べて見てくれ。」

昨日この状態だった時点で今日もこれだろうと思ったからな。作戦その？ 甘い物でご機嫌を取ろう

「・・・おいしい。」

「向こうの世界には結構普通に売ってあった物なんだけどこっちはやなかったみたいだからな試しに作ってみたんだが問題ないみたいだな。」

久しぶりに出すが、向こうの世界では義妹が甘い物が好きだったからお菓子作りはそこそこできると思ってる。

今回はシュークリームを作ってみたが腕は鈍ってないようだ。

「ふうん。」

会話が續かない。

どうやら失敗のようだな。

しかし困ったな、作戦その？とか行ってみたがこれ以上何も浮かばない。

下手に物を送ろうものならフリッグやアリスにも買ってやることになつてしまふ。

それで機嫌が良くなつてもまた悪くなるだろう。

しかし、妹つてのはそんなに悪いものだったか？

ある意味一番近い存在のはずだ。

まあ、ミナの気持ちを考えれば脈なしつてことで機嫌も悪くなるだろうがここが俺が最大で譲歩できるところだ。

ゲームなんかでは義妹から恋人にランクアップなんて良くあることが現実ではありえない。

世間から後ろ指をさされたり、身内からの受けもよくないし、他にも色々なリスクがあるからな。

それを差し引いても妹を恋人にしようなんて思わない。

だから俺は妹というフィルターを敷いてそれ以上進むことはない
自己暗示をしてる。

正直言つてそうでもしないと本気で襲つてしまいそうになる。

本当にこいつら可愛いんだよ。

「レン、私つてそんなに魅力ない？」

「いつもジンが言つてるだろう？」

「ミナは十分に可愛い。」

「私はレンの意見が聞きたいの。」

「いつもはぐらかそうとするんだから。」

誤魔化しきれなかったか。

この程度ミナを誤魔化せるなんて思っていなかったけどな。

「可愛いと思うぞ。」

向こうの世界と合わせてもミナ以上の美少女はそうそういない。」

「うっ……」

こういう直接的な言い方に弱いのか。

次にいじめるときに参考にしよう。

「それじゃあ、どうして私はレンにとって妹なの？」

どう答えたものか……

正直に答えようものなら何が何でも妹というフィルターを外させようとするだろう。

そうなれば理性を持たせる自信なんてない。

「前にも言っただろう？」

ジンは俺の親友だからその妹は俺の妹のようなものだって。」

「そんな当たり前のような顔して嘘つかないで。」

確かに兄さんとレンは仲いいけど兄さんは私とレンをくっつけようとしてるんだから、なおさら妹としては見れないはずよ。」

くっ、これだから頭が良い奴は面倒だ。

どうやったら誤魔化せるんだ？

「もしかして私がレンのこと好きって信じられない？」

あれだけはつきり言われて分からない奴なんているわけないだろう。それにあれが嘘だというなら女優にでもなることお勧めする。

「私、レンになら何をされてもいいよ・・・」

やばい、この空気はやばい。

どうしてこんな時に限って誰もいないんだよ!!
これ程フリッグがいて欲しいと思ったことはない。
今ならあのプレッシャーが喜べるような気がする。

「お、落ち着け。」

フリッグが帰ってきたらいい訳が効かなくなるぞ。」

「ちょっとずるいけど、私が本気だつてこと教えてあげる。」

駄目だ、こつちの話まったく聞いてない。

熱にうなされてるような表情になってる。

あれはまともな思考が働いてない。

やばい、脱ぎ始めやがった!!

「待てミナ!!

そついうのはちゃんとした関係になってからだつて言っただろっ!

「!

「だって、こつでもしないとレンは私のこと妹だつて言うもん。」

ここにきて幼児退行・・・

まずい、まずいぞ。

ミナの体は目の毒だ。

まだ服をはだけさせてる程度だがそれでもあの朱に染まった白い肌に細い腰、形のいい胸・・・・・・・・・・はっ！！見惚れてる場合じゃない。

「落ち着け！！」

もつと自分を大事にしろ！！」

「してるもん！！」

ずっとずっとレンの為に大事にしてきたんだよ！！だから、私の初めて貰って。」

耐える俺の理性！！

頼むからそんな誘うような表情で俺を見るな！！

「レンは私の体じゃ興奮してくないの？」

そんなわけあるか！！

俺は向こうの世界ではまだ高校生だぞ。

相手がミナじゃなかったら確実に襲ってる。

「私はレンが助けしてくれた時なんて自分で慰めてたんだよ・・・」

とんでもないことをカミングアウトすんなああ！！

なんだこの可愛い生き物は？

こんな生き物が存在していいのか？

「ミナ！！」

「あっ・・・」

ああ、どうして女の体ってこんなに柔らかくていい匂いがするんだよ！！

本当にこのまま押し倒してくなってくる。

「俺がミナを妹だつて言ってる理由はなそう見てないと本気で好きになつてしまいそうだからだよ！！」

どこの世界にこんな美少女に迫られて揺らがない男がいるんだ！！」

「それほんとう？」

「本当だ。」

正直、今ミナを抱きたくて仕方ない。」

「それじゃあ」でも、それはフリッグやアリスを裏切ることになる。

「……」

「俺に家族を裏切らせないでくれ。」

ちゃんとした関係になるまでお互いに手を出さない。

俺が言つてフリッグやアリスは従つてくれる。

まあ、たまに暴走する時もあるが……

それを俺が破るわけにはいかない。

「……ごめんなさい。」

「分かつてくれればそれでいい。」

「でも1つだけ確認させて。」

レンは私の子と1人の女の子として見てる？」

「そう見ないように妹として見るよう努力してる。」

「そっか、ごめんね。」

フリッグやアリスはちょっとづつでも進んでるのに私だけ置いてかれてるみたいだったから。」

俺ってそんなに分かりやすいか？

フリッグの時はともかくアリスの時は誤魔化せたと思ったんだが。

「本当にこんなのはこれっきりにしてくれ。」

心臓が破裂しそうだ。」

「本当、レンの心臓の音が伝わってくる。」

普段凜としてるイメージからのこれだ。

これがギャップ萌えてやつか？

威力が高すぎだろう……

「レン、もうちょっとこうしてていい？」

「あと3分ならな。」

フリッグが帰ってきたら問答無用で記憶を消される。」

半裸のミナと抱き合ってる状況なんて見たら説得の余地なんて皆無だ。

アリスに押し倒されたことといい、最近こんなの多いな。

「ありがと。」

はあ、今夜眠れるかなあ……

・ ・ ・ ・ ・
「ミナ、機嫌直ったんですね。
どんな手を使ったんですか？」

「甘い物で機嫌を直してもらった。」

「本当に美味しかったわ。
今度また作ってね。」

フリッグに尋ねられることくらい分かってるから、ミナとは前もって口裏を合わせてる。
これって本当に浮気してるみたいだな。

「本当にそれだけなのじゃな？」

「それ以外になにかあるのか？」

うち、どこまでもひっ掻きまわそうとしやがって。
見る方は面白いかもしれないがこっちはこれまでの記憶と貞操がかかってるんだぞ。

「ふむ、つまらぬの。」

「帰れ。」

まったくこの我が儘姫は

「お兄ちゃん、ミナお姉ちゃんと抱き合ったりしたでしょ。」

「……なんのことだ。」

アリスが血を吸っていた状態でよかった。
これなら誰にも聞こえない。

「お兄ちゃんからミナお姉ちゃんの臭いがするよ。
一応確認しておくけど最後までやってないよね？」

今までこれほどアリスが怖いと思ったことはないな。

「心配せずともキスすらしてない。」

「抱き合ってたことは否定しないんだね。」

アリスも頭がよくなったなあ……
こんな徐々に追い詰めてくやり方でくるなんて。
アリスには純粹でいて欲しかった。

「何かして欲しいことあるか？」

「どうしてそんなこと聞くの？」

本当に頭良くなったなあ。

ここでそう返してくるのか……
しかも満面の笑みで。

いつもの状況なら可愛いで済ませられるが今は恐怖しか湧かない。

「ふふつ、冗談だよお兄ちゃん。
後でキスしてくれれば許してあげる。」

はあ、心臓に悪い。

背中が冷や汗でびっしょりだ。

どうしてアリスとこんな駆け引きをするはめになってるんだ？

「2人になれたらな。」

「うん、大好きだよお兄ちゃん。」

ああ、あの純粹で真っ白だったアリスが黒くなっていく。

お願いだからこれ以上黒くならないでくれよ。

まあ、どんなに黒くなくてもアリスは俺の癒しなんだけどな。

婚約者 ユーリア（前書き）

2件目のレビューで嬉しいやら恐れ多いやら・・・

期待を裏切らないように描き続けたいと思います。

最後にシェイド様、レビューありがとうございます

婚約者 ユーリア

「フリッグ、アリス、準備できたか？」

なんだかんだで出発当日。

いつも通りにホームギルドで仕事を貰いながら新たな職を探してたらあつという間だった。

この世界にないお菓子でも作って売ろうかと思っただがそこまで売った腕じゃないし、この世界の職人に同じ物を作られたら勝ち目ないしな。

そうになると、やっぱりフリユネの補佐に付くべきかなのか本気で悩む。

給料はいいだろうし国の内情を知ることができれば今の生活を守っていけるんだが、上司がフリユネという点がどうにも引掛かる。どうしたものか……

「今行きます。」

アリス、忘れ物は無いですか？」

「うん、大丈夫。」

「それじゃあ行くか。」

はあ、今回は何が起きるのか果てしなく不安だ。

今回は羽休めつてことだからこっちから動くことないんだが、向こうからやってこないということじゃないからな。

「レン、眉間にしわが寄ってますよ。」

何があっても私たちが何とかしますから楽しみましょう。」

「そうだよ、お兄ちゃん。
お兄ちゃんは頑張りすぎだからもう少しアリスたちを頼っていいんだよ。」

だから、どうしてお前等はそんなに格好いいことばかり言えるんだ？
裏でこそそそしてる俺が惨めに思えてくる。

「考えるのは俺の仕事だろ？
ちよつとは見せ場を作らせてくれ。」

「私としてはなにもせず私なしで生きられないようになってくれて
もいいんですよ？」

さらりと怖いこと言うな。

「アリスはずっと一緒にいてくれればそれでいいよ。」

やっぱり、アリスは可愛いな。

最近ちよつと黒いけどそれも含めてアリスは可愛い。

「あつ、レンたちも来たみたいね。」

これで全員揃ったことだしとりあえず紹介しておくわね。」

「ジンの婚約者のユーリア・レヴィンです。
いつもジンがお世話になってます。」

おお、なんとという美形カップル。

しかもお淑やかな物腰、俺の周りにはいないタイプだな。

ちなみに今まで会ったことがなかったのはいろいろ巻き込まれてそ

れどころじゃなかったからだ。

「俺はレン・カザミネでこっちが妹のフリッグとアリスだ。」

いまさらだがフリッグって俺より年上だから姉だよな？
手のかかる姉・・・やっぱり妹って感じが強いな。

「紹介も終わったみたいだしそろそろ行きましょうか。」

・
・
・
・
・
・

「それにしてもいい人見つけたな。」

「ああ、俺にはもったいないくらいだ。

ユーリアは俺の部下なんだが仕事はできるし、家事もできる。
それに加えあの容姿と正確だからな。」

いきなり惚気が来たか。

もともと極度のシスコンだった分、今度は極度の愛妻家になりそう
だ。

ユーリアさんって人もかなりいい人みたいだし親友の俺も喜ばしい
限りだ。

「ところで聞きたかったんだが3日くらい前から随分ミナの機嫌が
良いんだが何かあったのか？」

「ちよつとからかつて機嫌を悪くした時、甘い物を作ってやった
かなり好評でまた作ってやるって言ったからじゃないか？」

本当に良くもとっさにこんな嘘を吐けるもんだ。

親友を騙すつてのはいい気分じゃないが本当のことを言えるはずな
いしな。

「そうか、関係が進展したと思ったんだがどうやらまだみたいだな。」

っ！！

落ち着け、動揺を気取られるな。

ジンのことだから黙ってくれるとは思いが知られないことにこした
ことはない。

「まあな、それにしてもユーリアさんとは出会ってまだ数ヶ月だろ？
婚約って少し早すぎないか？」

「確かにそうなんだが俺もユーリアもいい歳だからな。
親同士の勧めもあって婚約は済ませたんだ。」

よし、どうやら話は逸らせたな。

「そうだったのか。」

なにはともあれおめでとう。

幸せにしてやれよ。」

「ああ、ありがとう。」

レン、俺はお前が出した答えならどんな物でも受け入れる。

例えそれが死でもだ。

だが、俺は友としてレンには死んで欲しくない。
それだけは知っておいてくれ。」

死にたがりの俺には誰かを幸せになんてできない。
俺に出来ることは誰かの幸せを俺の届く範囲で守ってやることだけだ。

「今の生活は気に入ってる。
だが、大事だと思えば思うほどそれは俺を苛む。
だから、今は何も言えない。」

「……そうか。
俺はレンの親友だ。
愚痴くらいは聞いてやれる。」

「ああ、その時は頼む。」

side ジン

やっぱりまだ駄目だったか。
大事だと思えば思うほどレンはミナ達を悲しませる罪悪感で死ぬことができない。

それでも、究極的に信じることができないレンは失う恐怖から逃げ出すために自殺を諦めない。
今でこそ、レンは妹さんが強制的に生かしているからこそそれを支えに正気を保っていられるかもしれないが、もしその支えが無くなったら……

それに、ミナ達の前では決して弱さを見せることもしない。
親友が苦しんでるのに俺は無力だな。

俺に出来ることは誰かがレンの心を溶かしてくれることを祈ることしかできない。

「どうかしたの、ジン？」

「ちょっと考えことをな。」

「先程のレンさんのこと？」

いくら親友と妹でも色恋沙汰に手を出すのはだめよ。」

「それは一度やってミナに本気で怒られたよ。」

「……ユーリア、俺は無力だな。」

親友が苦しんでいるのが分かっているのに何もできない。」

「そんなことないわよ。」

ジンにはジンにしかできないことだってあるはずよ。」

男同士でしか話せないことだってあるでしょ？」

「……そうだな。」

俺が落ち込んでても仕方ないか。」

祈っていても何も変わらないか。」

俺に出来ることをやって行くしかないか。」

とりあえず

「ユーリア、愛してる。」

「私もよ、ジン。」

俺たちが幸せなところを見ればレンも羨ましがって誰かを愛そうと

思つかもしれない。
いろいろやってみるか。

side out

うおおお・・・

ジン、頼むから俺たちの前でいちゃつくのは止めてくれ。
幸せそうで何よりだがあの3人がどんな反応を起こすか分かったも
んじゃない。

「仲が良いようすで何よりじゃのう、レン。」

この我が儘姫、ここでそれを俺に振るな！！
ニヤニヤしながら言われると本気で殺意が湧いてくる。

「・・・そうだな。」

ところでミナ、ムスペル Heimにはあとどれくらいで着くんだ？

「あと数時間で着くはずよ。」

このまま逸らしきってやる。

「なら今日中には着くのか。」

観光は明日からでいいのか？

「そうね、着いたところにはいい時間だろうからそこは自由に行動し
ていいわよ。」

「うち、この甲斐性無しめ。」

やっぱりこいつの下で働くのは良く考えた方がよさそうだ。

「レ、フリッグはどんなとこみて回るつもりなんだ？」

危ねえ……

何を言おうとしたかは知らないが間違いなく面倒なことを言おうとしたはずだ。

「とりあえず初日は皆で海に行くつもりです。

2、3日目からは何かしら巻き込まれるでしょうから特に何も考えてません。」

流石に学習したか。

しかし、予定で何かに巻き込まれるって悲しすぎる。

「娯楽の街って言われてるくらいだから万が一何も起きなくても退屈はしないから大丈夫でしょう。」

万が一とまで言うか。

最近アルフヘイムにいても何かしらに巻き込まれるから平穩に過ごした覚えがない。

やばい、泣きたくなってきた。

「大丈夫、お兄ちゃん？」

「心配してくれるのはアリスだけだ。」

本当にアリスはいい子だ。

これで押し倒したりしなければ最高の妹なんだけどな。

「キスのこと忘れちゃ駄目だよ。」

「……アリス、最近ちょっと黒くないか？」

ちよつとした悪戯のつもりなんだろうがこっちは洒落にならない。

「ふふつ、ホームギルドの受付のお姉さんがちよつと黒いくらいが女は魅力的って言ってたから。」

それに、お兄ちゃんもちよつとは警戒するようになるでしょ？

そしたら、完全な妹として見れなくなるよね。」

あの人はアリスに何を教えてるんだ………
しかも、悪戯のレベルじゃない計算された行動だったとは。

「お兄ちゃんには妹には絶対手を出してくれないけどそうじゃなくなつたらどうなるのかな？」

黒い、黒いぞアリス。

ちよつと前までの真つ白だったアリスはどこへ………

「まったく、悪戯もたいがいにしないと駄目だぞ。」

「そうやって、丸めこもうとするのも駄目だよ。」

「何のことだ？」

アリスは俺の可愛い妹なんだからちよつとくらい悪戯しても許してやれるけど、他の人に悪戯すると駄目だから注意してるだけだぞ。
悪い事をした子にはちゃんと注意してやらないと将来困るからな。」

「む………!!」

絶対妹つて言えなくしてあげるから覚悟してねお兄ちゃん。」

行ったか……

はあ、まさかアリス相手に絡め手を使うことになるとは思わなかった。

今度ホームギルドに行ったら余計な事を教えないように言っとかないとな。

side フリッグ

本当に羨ましいですね。

私もいつかレンと……

しかし、レンを相手にしているとどうしても話が逸らされてしまいます。

私がレンを無視できるはずもありませんし、どうでしょうか？

「悩んでおるようじゃの。」

「はい。」

ちよつとは進んでいるとは思いますが本当にレンは難攻不落みたいです。」

レンを落とす難しさに比べたら神界を落とす方が簡単そうです。

「ふむ、フリッグよいくら話を逸らされようと今回ばかりはそうもいかぬ筈じゃ。」

「どづいつことですか？」

「今回の旅先はムスペル Heim じゃ。」

そして、海ともなれば水着になるじゃろう？

どれだけ難攻不落であろうがフリッグの水着姿を見ればなんとも思わぬということはないはずじゃ。

その動揺した時こそチャンスじゃ。」

流石フリユネです。

本当に頼りなりました。

「はい！！

私頑張ります！！」

「ところでフリッグはどんな水着を選んだのじゃ？」

「アルフ Heim にはあまり良い物がないそうなのでムスペル Heim で選んだほうがいいと、ホームギルドの受付の人に聞いたので着いてから買おうと思ってます。」

「ならば、妾を選んでやろう。

レンは意外と単純じゃからどんな物が好きかくらいはおおよそではあるが予想がついておる。」

こ、これが大人の女性です！！

年は私の上ですけど、フリユネは大人という感じがします。

「くっくっ、これは面白くなりそうじゃ。」

s i d e o u t

婚約者 ユーリア（後書き）

先に言っておきます。

水着の描写に期待しないでください。

もうどんな種類の水着を書くので精一杯です。

まあ、女性の水着に詳しい男にはなりたくないですけど……

ムスペルヘイム その？ 海といえば

「なあ、ジン、明日って雨降らないよな？」

「雲を見る限り降ることはなさそうだがどうしたんだ？」

悲しい程の晴天、これで明日雨が降るっていうなら異常気象を疑う必要があるな。

しかし、この世界は基本的に魔力でエネルギーを補ってるから環境汚染は心配ないよな？

戦争も起こってないみたいだし異常気象が起きるとなると誰かが意図的に雨を降らせるということになる。

雨を降らせる魔法ってあるのか？

なにセファンタジーの世界だから俺がいた世界の常識は通用しない。つまり明日雨が降る可能性は0じゃないはずだ！！

翌日
・
・
・
・
・

「まあ、そんな都合のいい展開なんて待ってるわけないか……」

天気は晴れ、もう悲しいくらい太陽がまぶしい。

「どうしたんだレン？」

昨日から天気のことばかり気にしてるが。」

「海つてことは水着だろ？」

「ああ、そういうことか。」

そうなんだよ、水着なんだよ。

普段着は見慣れたから何とも思わないが水着だ。

水着になれば普段見れないところまで見えてしまう。

それがあの美少女の3人だ。

いや、フリユネにユーリアさんもいるから5人か。

あの2人は正直どうでもいいんだがあの3人が水着で迫ってきたら流石にまずい。

「ジン、悪いが俺は逃げる。」

「悪いがミナから逃げようとしたら引つ張って来いって言われてるんだ。」

なんだと……

「俺たちは親友だろ？」

頼む見逃してくれ。」

「親友の頼みを聞いてやりたいのは山々なんだが妹の頼みは断れな
いんでな。」

まだシスコンは直ってなかったのか。

「まあ、待て。」

たまには男だけで遊ばないか？

「ここ最近お互い忙しくて機会がなかっただろう?」

「レンからの誘いは嬉しいが俺もユーリアを待たせてるんでな。」

くっ、ジンは絶対に愛妻家になるな。

諦めてなるものか。

「ジン、ちょっと忘れ物をしたから取りに行ってもいいか?」

「俺もついてくぞ。」

それくらい予想済みだ。

外ならこの手は使えないが部屋の中なら別だ。

「悪いなジン。」

「っ、レン!?!」

部屋の中なら煙が霧散せず留まる。

流石のジンでも目が使えなければ俺を捕えることはできないはず。

「無駄な抵抗は止めるレン。」

出口は俺がいるんだぞ。」

それも対策済みだ。

ここは4階だが鎖をロープのように使えば降りれない高さじゃない。久しぶりに武器創造の力を使った気がする。

「レン!?!」

「ミナには後で俺が謝っておくから気にするな。」

あいつらの水着なんて見たら妹フィルターが壊れかねない。

「どっやって時間を潰すか。」

娯楽の街っていつくらいだから適当に見て回って退屈はしないだろ。

「それじゃあ行くか。」

「ほづ、どこへ行くつもりじゃ?」

「そりゃ、海以外のどこ・・・か・・・に・・・。」

気のせいか、後ろから今一番聞きたくない声が聞こえたんだが。よし、ちょっと後ろを向いてみよう。

「・・・・・・・・・・はあ、気のせいだったか。」

「残念じゃったな。」

レンが逃げ出すことくらいお見通しじゃ。」

「っ!」

いきなり目の前に!!

いちいち希望を持たせて落とすようなやりかたをしゃがって!!

「フリユネ、俺はお前に貸しがあつたはずだ。」

だからここは見逃せ。」

「却下じゃ。」

「こんなおも・・・フリッグたちが待つておるといつのと同じ女として見過ごせぬ。」

わざとらしく言い直すな。

本音を隠すつもりなんてないくせに。

「ここで見逃せば補佐に付いてもいい。」

「それも却下じゃな。」

妾はレンだけじゃなく他の者も部下に欲しいのじゃ。

この取引に応じてしまえば他の者が付いてこぬからの。」

ぐっ、何か逃げる方法は！

「諦めよ。」

妾から逃げられると思うておるのか？

例え視覚を潰されようが、聴覚を潰されようが妾は逃がさぬぞ。」

「はあ、分かったよ。」

なんてな、更衣室は別々だ。

その隙に逃げてやる。

フリユネの最大補足範囲は確か5kmだったはず。

フリッグの強化が施されたこの体なら10分からはらないはずだ。

「ふむ、分かればよいのじゃ。」

ジンよ、次は逃がす出ないぞ。」

「まったく、手間をかけさせるな。」

．．．．．終わった。

．
．
．
．
．
．

「頼む、ジン。

逃げさせてくれ。」

「諦める。」

来てしまった。

白い砂浜、青い海、雲ひとつない空。

俺だってこんな景色でこんな気分になりたくない。

「そもそも逃げたところでフリユネからは逃げられないだろう。」

くっ、あの我が儘姫めどこまでも俺の邪魔ばかりしやがって。

「それはレンが逃げるからじゃ。」

毎度毎度心を読んだような発言をし．．．．．

「どっじゃ？」

妾も捨てたものではなかつ。」

いやいや、姫がそんな恰好していいのか？

確かに長い金髪にフリユネはスタイルが良いから黒い水着は似合うと思うが布面積少なすぎだろう。大事なところしか隠せてない。

「一応信仰の街に住んで、おまけに姫ならもう少し控えるよ。」

「なんじゃその反応は？」

男ならこういう露出度が高い物が好きじゃないのか？」

それは好みによるだろうが俺としてはあんまり好きではないし、なによりフリユネ相手に今更興奮しろなんて無理だ。

「ジン、待った？」

「いや、それより似合ってるぞ。」

ユーリアさんは紺色のビキニ。

穏やかな雰囲気にあって俺も似合ってると思うが早速いちやいちや始めてる2人は放っておこう。

「む、本命のお出ましじゃぞ。」

ついにこの時が来たか……………

「どうお兄ちゃん、似合う？」

「ああ、似合ってるぞ。」

白のワンピースの水着。

年相応で、元の素材が良いから危うくロリコンに目覚めるところだっ

た。

「ふふっ、お兄ちゃんお腹すいたから血貰っていい？」

「こんな人の多いところで駄目に決まってるだろ。」

「理由はそれだけ？」

本当にアリスに妙なことを教えた受付の人恨むぞ。

「それ以外になにかあるのか？」

「うーん、例えばアリスに抱きつかられたらまずいとかかな。」

「そんなことないぞ。」

そもそも、毎日血を吸う時に抱きつくくらいしてるだろう。」

実際はかなりやばい。

いくら露出が少ないとはいえいつもより薄着であることには変わらない。

「ふふっ、じゃあそういうことにはしておいてあげる。」

「……なんだか負けた気分だ。」

「レ、レン……」

次はミナか……

もう、俺の理性は結構やばいつてのに。

「その、似合ってる?」

「………やばい。」

この前のあれでも分かってたがミナは外見もだが中身も可愛すぎる。赤のビキニパンツはもちろん似合ってる。

それに加え、恥ずかしそうに顔赤らめてそわそわしてる。

「ね、ねえ、どうなの?」

「あ、ああ、似合ってるぞ。」

「あつ………嬉しい。」

本当になんなんだこの生き物は!!

いつもの勝気で凜とした態度からこれは反則だろう。

やっぱりもう駄目だ。

ちよつと休憩を入れないと

「どこへ行くつもりじゃ?」

まだ、フリッグが残っておるぞ。」

「待て。」

今は本当にやばい。

ちよつと休憩を「レン!!」「」

遅かったか………

「どうですか?」

………可愛い

「あ、あのレン？」

見惚れてるって分かってても目を逸らせない。

少し幼い顔立ちに肩くらいまである銀髪、それに合わせるような水色のビキニスカート。

露出は少ないがその分だけ清楚さを際立させてる。

「本当にどうしたんですか？」

声が出ない。

顔が赤くなってる分かるくらい顔が熱い。

「そ、そんなにじっと見つめられると恥ずかしいんですけど・・・」

「わ、悪い。」

覚悟はしてたつもりだったが甘かった。

本気でこの3人はやばい。

フィルターなんて一発で壊れそうになる。

「それで、似合ってますか？」

「ああ、似合ってるよ。」

「本当ですか！！」

やっぱり、フリユネは頼りになります。」

この・・・

「そう睨むでない。」

最初はフリッグの水着だけ見てやるつもりだったんじゃが偶然他の2人とも遭遇したのでな、ついでに選んでやったのじゃ。」

つまり、最初に現れたフリユネは後に出てくる3人の為の囷か。

フリユネの水着姿を見ても何とも思わなかったから警戒が緩ませられたか。

「くっくっ、レンも結局は男じゃのう。」

皆、上着を羽織ってやるがよい。

そうでもせぬと直視も出来ぬようじゃからな。」

ぐっ、確かにこのまま見続けると本気で惚れてしまいそうになる。フリユネに助けてもらおうというのは癪だが仕方ない。

「頼む。」

「くっくっ、これを見ただけでも来たかいたというものじや。」

こいつだけはいつか絶対に泣かせてやる。

・
・
・
・
・
・
・

「そろそろお昼にしましょうか。」

「そうね、いいお店があるみたいだからそこに行きましょか。」

「悪い先に行つてくれ。」

「ちよつとトイレに行つてくる。」

ふう、上着を着てるとはいえ刺激が強すぎる。

少し落ち着いてから合流するか。

「……………止めてつて言つてるでしょー!!」

ん？

あれはユーリアさんか？

「いいじゃん、俺らと遊ぼうよ。」

「だから、一緒に来てる人がいるつて言つてるでしょー!!」

はあ、ただの軟派か。

まあ、ユーリアさんも相当な美人だから分からないわけじゃないがな。

「おい、お前等その人は俺の連れだ。」

「あつ、レンさん。」

「おいおい、適当なこと言つて横取りしようとしてんじゃねえよ。」

両方とも名前で呼んでるつのに適当も何もないだろう。

そもそも俺が来なかったら今頃ジンに殺されてるぞ。

「はあ、行きましょう。」

「勝手に行くこうとしてんじゃねえよ!！」

本当にただのチンピラだな。

流石に半年も戦い続けるとこの程度の連中に後れは取らない。

「ぐはっ!！」

「てめえ、調子に乗ってんじゃねぞ!！」

相手にするのは面倒くさいがユーリアさんがいる以上逃げるわけにもいかないしな。

「おとなしくしろ!！」

この街の警備団か？

ようやく面倒事から解放されるな。

「全員、連行させてもらおう。」

は？

「抵抗するなよ。」

「ちよつと待て、俺は絡まれたんだぞ!！」

「話は後で聞いてやる。」

全員捕まえたな。
連行するぞ。」

はああああ!?

ムスペルヘイム その？ 囚われのレン

「だから、俺は連れの人絡まれて助けようとしたただけだって言うてるだろう。」

「嘘をつくな！！」

お前が怪我をさせた男たちは少し話を聞いていたらいきなり殴られたと言っているぞ。」

「それじゃあ、証人を連れてくればいいだろう。」

それではつきりする。」

「あの女性も同じことを言っている。」

話しにならない。

どうやっても俺を犯罪者に仕立て上げるつもりか？

「今日はこちらまでしておいてやる。
続きは明日だ。」

はあ、どうしたものか……

side ミナ

「はあ！？」

レンが連れてかれたですって！！」

まさか、本当に巻き込まれるなんて。

「はい。」

私が弁明しようとしても門前払いで……」

ただ連れて行かれたってわけじゃなさそうね。

でも、レンを犯罪者にしてどうするつもりかしら？

「こういう時こそ権力の出番よね。」

そんなわけで頼むわよフリユネ。」

「いいじゃろつ。」

レンには借りを返さねばならぬからの。」

「そんなわけだからその2人は落ち着いて。」

さつきから本気で切れかけてる。

特にアリスはレン至上主義だから下手すれば強引にレンを連れ出す
かもしれないわね。

そうなれば今度は本当の犯罪者だ。

「分かってます。」

アリスも落ち着いてください。

フリユネがなんとかしてくれますから。」

「……うん。」

ほっ、フリッグがまだ冷静でいてくれて助かったわ。

あの2人が暴れ出したら誰も止められないでしょうし。

「とりあえず行きましようか。」

・ ・ ・ ・ ・

「すみません。」

いくら姫様の指示でも容疑者を解放することはできません。」

「妾の言うことが聞けぬと申すか？」

「申し訳ありません。」

まさか、フリユネの言葉を聞き入れないなんて。
もしかして……………

「ねえ、これって……………」

「十中八九、王族が絡んでおるな。」

それもフリユネと同等の地位にいる存在。
レンが聞いたら嘆きそうな事実ね。

「どうするつもりですか？」

このまま何もしないと…というなら記憶を操作してレンを連れ出します
が。」

私は別にそれでいいんだけど、それを知ったレンがどう思うかよね。

「本当にごめんなさい。
私を助けたばかりに。」

「ユーリアさんは気にしなくていいんですよ。
レンがそんな場面を見たら助けないはずありませんから。」

それに、レンが助けなかったら兄さんが酷いことになってただろうしね。

『ああ、聞こえるか？』

「「「レン！」「」」

そういえば非常用に渡してたんだった。

『悪いんだが、フリユネの権力で出すよう言ってくれないか。』

「それじゃが、どうにも王族が圧力をかけておるようで妾でも出来ぬようじゃ。」

『俺を捕まえてフリユネの評判を落とすつもりか？
どこまで暇な連中なんだ。』

本当よね。

私たちのような街の長の子息子女でさえも経験を積むためにいろいろな仕事をまわさてるのに王族は遊んでばかりなもの。

『フリッグ、アリス、絶対に強硬策に出ようなんてするなよ。
そんなことをしたら本物の犯罪者になってしまうからな。』

「あと2日待ちます。」

それまでにレンが出て来れないというのなら無理矢理にでも連れ出します。」

「アリスもお姉ちゃんと同じ。」

『分かった。』

俺が出るまではミナかフリユネの指示に従って動いてくれ。

出来る限り俺も手を貸すが見張りが来てる時に使えないからな。』

後2日、別にフリッグたちならお尋ねものになっても誰も捕まえられないと思うけどそんな物にならないにことしたことはないわね。

『とりあえず、ユーリアさんに絡んでいた連中を見つけてくれ。』

そいつらに本当のことを吐かせれば俺の無実は証明できる。』

「でも、あの場にいた人は全員連れて行かれたはずよ。」

『牢屋に入れられる時に一通り見てみたがそれらしい奴等はいなかった。』

王族が絡んでいるとなると俺に罪をかぶせる為に雇われた奴らだろう。』

最悪殺されている可能性はあるが探してみてくれ。』

死体に口なし、余計な事を喋られる前に殺されてる可能性の方が高い。』

アビスやあの詐欺師なら確実に殺してるわね。』

「しかし、顔を知っているのはユーリアだけじゃ。」

全員で行動しては見つからぬかもしれぬぞ。」

『それについては考えがある。
俺としてはあまりお勧めしたくはないんだがな。』

side out

後はあいつらに任せるしかないか。

それにしても、つい先日に見方を変えれば世界を救ったともいえることをしたつてのに今度は犯罪者か。

まったく、人生なにかあるか分からないな。

「出る。」

「随分早い出所だな。」

俺が無実ってことが分かってくれたのか？」

こんな最初にヤがついてる職業みたいな奴がここにきてる時点でそれは無いと思うがな。

「で、俺をどうするつもりだ？」

「.....」

何も喋らないか、出来るだけ情報を引き出しておきたかったんだが無理っぽいな

だからと言って何もしないわけじゃないんだがな

「これは俺の推測だが俺を犯罪者に仕立て上げたいのは王族の誰か

だ。」

「・・・・・・・・」

「俺が問題を起こせば俺が仕えてるフリユネの評判を落とすことになる。」

「・・・・・・・・」

「しかしだ、それを狙っていてもなかなかぼろを出さないことに痺れを切らし、さらにフリユネがさらに功績を立ててすることに焦り無理矢理行動を起こした。」

「・・・・・・・・」

「だが、無実の俺を無理矢理犯罪者にするにはどこかで必ずぼろが出る。」

なら、ぼろが出る前に俺を裁き公表する必要がある。」

「・・・・・・・・」

「だがこれにも問題がある。」

俺を裁くと言つても、まず証拠がない。

今でこそ適当なことを言つて拘束はしているものの詳しく調べられれば真実なんてすぐに明らかになる。

俺を嵌めた男たちを証人に連れたところでユーリアさんが否定すればそれで終わりだ。」

「・・・・・・・・」

「そうなるよ、俺を裁くには告白させるしかない。
つまり、俺が連れて行かれる場所は拷問部屋ってところか？」

「そこまで分かっておきながらえらく余裕だな。」

やっと反応してくれたか。

もしかしたら推測が外れて見当違いのことを自慢げに話してる痛い人になるところだった。

「そうでもないさ。」

告白させるつもりだってことは分かっていたから心構えが出来ていただけだ。

それよりも、こつも早く行動を起こすってことはどうやらこの状況をひっくりかえせるジョーカーがあるみたいだな。」

「俺はお前を告白させるとしか聞かされていなんぞな。」

なるほど。

つまり、外部から雇ったってことか。

フリッグ達は無駄骨だな。

「それなら今言ってるやろ。」

俺がやった。」

「………どういっつもりだ？」

「拷問のプロ相手に俺が耐えられるはずがない。

それなら痛い目を見る前に白旗をあげた方がいいだろう？」

それにあんたも無駄な苦勞をかけずに済むしな」

いくら死なないとはいえ痛みを感じないわけじゃない。
拷問なんて受けたら5分で白旗を揚げる自信がある。

「いいのか？」

「これでお前は犯罪者だぞ。」

「確かにこのままいけばな。」

例え俺の自白があつたとしてもジョーカーを手に入れば引つ繰り返せるかもしれない。」

それに言ってしまうえばジョーカーは一枚じゃないんだよ。

俺はすでにこの状況を引つ繰り返すことができるジョーカーを持つてるからな。

「いいだろう。」

後でクライアントの前で自白してもらおう。」

「ああ、ご苦労様。」

もう一枚のジョーカー、これはたぶんあの男たちのことじゃないな。
あんな物騒な連中を雇ってるくらいだからすでに始末されてるだろう。

「なら、ジョーカーは……。」

ムスベル Heim その？ 亀裂

side フリッゲ

「いい加減に視線が鬱陶しくなってきました。」

「それは私もよ。」

「ただ、この方が効率いいんだから我慢するしかないわよ。」

レンが言った作戦はユーリアとジンを除く4人で適当にうろついて注目を集め、その中にいるかもしれない犯人をユーリアが見つけるというものです。

確かに、私たちはかなりの美少女ですからレンとジンがいないと声をかけたくなるのも分かります。

しかし、何度も声をかけられ、視線を感じれば鬱陶しくもなります。私の肌を見ていい男はレンだけでいいんです。

それなのに肝心のレンはいません。

これはご褒美にキスくらいねだつてもいいですよ？

思い返せばニヴル Heim のデートの時からキスすらしてませんね。

そうしてる間にもミナとアリスは進展があるようです。

まったく、レンが女として見いいのは私だけとあれほど言ってるのに、ここは一度分かせてあげる必要があるようです。

「もう日が暮れるわね。」

「今日はこの辺りにしましょうか。」

私の水着姿にはしっかりと反応がありましたから女としてはレンの中で問題ないはずですよ。

そうなることやリレンが死にたがりという問題ですね。

本当にどうやってたら変わってくれるんでしょうか？

こっちの世界に来て半年、レン自身も変わるうとしてしているみたいですが簡単にはいかないみたいです。

これがある限りレンは絶対に私の想いを受け取ってくれません。

「ふむ、そうじゃな。」

レンからの連絡を待つしかなさそうじゃ。」

でも、レンともっといちゃいちゃしたいです。

もうお互いのことしか見えないくらい、所構わずキスしたり、お互いに食べさせ合ったり、毎晩のように愛しあったりしたいです。守りが堅い分、落としたらそれくらいやってくれそうです。

「お兄ちゃん……」

「大丈夫よ、アリス。」

あのレンがそう簡単に負けるはずないわ。」

やっぱり最初はいいムードで、でも言葉で攻められながら激しく求められるというのも……
やっぱり私はMなのでしょうか？

レンに求められればなんでもできるような気がします。

恥ずかしいと思いますがそれが気持ちよくなりそうです。

でも、それはレン限定ですね。

レン以外に辱められでもしようものなら即殺です。

「ところでフリッグ、さつきから何やってるの？」

「レンとの甘い生活の過ごし方を考えてました。」

「正直なのはいいけど今考えること?」

「レンは私のすべてなのでいつでもレンのことを考えてます。」

もう、レンがいない生活なんて考えられません。

「……もういいわ。」

「重症じゃな。」

「お兄ちゃんは渡さないよ。」

アリスはともかく2人から相当呆れました。

でも、もう半年も片思いで相手はその想いを知ってて満更でもない感じなんですよ?

それにキスマまでしてる関係で一緒に住んでるんですよ?

それなのに本人どころか夢の中までガードが堅いんですよ?

ちよっとくらい妄想しても許されるはずですよ。

「とりあえず今日は戻りましょう。」

side フリユネ

「明日も今日みたいにするんですか?

これでは見つからないかもしれないよ。」

「そうねえ、レンも言ってたけど最悪殺されてる可能性も捨てきれないからこれ以上は無駄かもしれないわね。」

「もう無理矢理に連れ出しちゃおうよ。」

ふむ、そろそろころあいじゃな。
これも外の人である妾の役目じゃろう。

「皆の者、少し妾の話を聞け。

今日の様子では明日も見つからぬじゃろう。

しかし、レンの無実を証明する方法はもう一つあるのじゃ。
のう、ユーリアよ。」

「裁判の時に私がレンさんの無実を主張するんですか？」

「それは無理じゃな。

そもそも、冤罪で拘束するつもりならその後のことなど予想済みの
はずじゃ。

おそらくじゃが今頃レンに自白を強要されておる。

レンの自白があればそれで終わりじゃ。」

いくらレンでも拷問には耐えられまい。

「それは本当ですか！！

それなら今すぐ助けにいきます！！！」

「落ち着くがよい。

レンを助ける方法はもう一つあると言ったはずじゃ。

それは、レンを犯罪者に仕立て上げようとしている王族を断定でき
れば助けることができる。」

ここまでいえば分かるじゃろう。

「それはユーリアさんがこの件に関わってるってこと？」

「そうじゃ。」

「いくら姫だからといって言って良いことと悪いことがあるぞ。」

「ジンよ、妾達のように上に立つ者が疑うべきはまず身内じゃ。」

そもそもおかしいと思わぬか。

偶然にも1人でいるユーリアのもとにレンを嵌めようとしている者たちが絡み、それを偶然レンが見つけ、通りかかった警備の者に捕えられるなど出来過ぎておる。」

「それは本当？」

「.....」

「アリスはお兄ちゃんの為ならなんでもするよ。」

ただお兄ちゃんを悲しませたくないから誰かを傷つけるようなことはしたくないんだ。

だから本当のことを言って。」

この魔力、また一段と大きくなっておる。

後数年もすれば妾でも歯が立たぬかもしれぬな。

「落ち着きなさい、アリス!!」

フリユネも場を乱すこと言わないで!!」

「しかし、ミナ、フリユネの言うことは筋が通ってます。

これが本当ならレンを助け出せます。」

これだけの面子が共生出来ていたのもレンがいたからということじ

やな。

だからこそ、ここでレンを失うにはいかぬ。

『あゝ、なんだか騒がしいがなにかあったのか？』

「レン、お前から言ってやってくれ！！」

『落ち着け、ジン。』

誰か冷静な奴、この状況を説明してくれ。』

「えっとですね。」

フリユネがユーリアとレンを嵌めた敵と通じていると言ったんです。

「

『あゝ、そういうことが。』

分かった、大体状況はつかめた。』

意外と余裕があるようじゃな。

拷問は妾の思いすごしだったかのう。

「どうなんだ、レン！！」

『落ち着いて聞け、フリユネの言ってることはたぶん本当のことだ。』

『

「レン！！」

『だから落ち着け。』

これじゃあ話が進まない。

まったく、フリユネももう少し穏便に済ませることぐらい出来ただ

ろっ。』

「それは済まなかったの。」

妾も随分レンに頼り切っておったようじゃな。

『とりあえずだ、俺とフリユネの言ったことは推測でしかない。だから本当のことを聞かせてくれないか?』

「……本当のことです。」

「ユーリア!!」

『だから落ち着け!!』

お前はいい奴だがすぐに熱くなるのは悪い癖だぞ。』

「っ、悪い。」

『それにユーリアさんもジンの為にこんな裏切るような行為をしたんだろっからな。』

「何故それを!？」

『これでも嘘を見抜くのは得意でな。』

ユーリアさんが演技でジンに近づいていないってことはここに来るまでに分かった。

それなら、誰かを人質に取られてるってことだ。

まあ、身内の誰かって可能性もあったがどうやらジンで正解だったようだな。』

妾ももう少し思慮を深める必要があったようじゃな。
それにしてもレンの嘘を見抜く能力は使えるのう。
ここにいる全員をまとめていいことはいいやはりレンを手に入れねば扱えぬか。

『それより、ユーリアさんを脅した奴は誰か分かるか？』

「それは……」

「どうしたんだユーリア？

誰がこんなことをさせたんだ？」

「ごめんなさい。

言えません。」

「なぜじゃ？

後にジンに何かしようものなら妾が息の根を止めてやるから心配はいらぬぞ。」

流石に今回の件だけでは失墜させることは難しいじやろっからな。

『まあ、そう簡単に信じろってのも難しいか。

仕方ない、それじゃあ最強のジョーカーを切るか。

フリッグ、ミナ、アリス、フリユネ、4人には少し働いてもらっぞ。』

「私たちは何をすればいいんですか？」

『宣戦布告だ。』

s
i
d
e

o
u
t

ムスペル Heim その？ 宣戦布告（前書き）

新しいパソコンを買ったのはよかったんですが手痛い出費に泣きそうです。

とまあ、暗い話は置いておきまして投稿を再開します。
これからまたよろしくお願いします。

ムスペルヘイム その？ 宣戦布告

side フリッグ

「宣戦布告ですか？

しかし、そんなことをすれば私たちの存在は隠しようがなくなりま
すよ。」

「それはもう仕方ない。

そんなことよりユーリアさんとジンを守る方が大切だ。」

レンらしい答えですね。

また、レンのことを好きになってしまいました。

「作戦の概要だが近いうちにフリユネのところに招待状でも来るはずだ。

さつき、告白させられた時にムスペルヘイムに王族を集めるような手紙を送りだしていた。

そこでフリユネの汚点を広めておくつもりなんだろう。」

本当に暇な人たちなんですわね……

「当日はフリユネは王族が集まるだろうからそこで待機。

フリッグ、ミナ、アリスは怒った演技をしながらそこへ乱入する。」

「でもそれっていいの？

無理矢理にレンを無実にしようとしてるように見えるわよ。」

「だからこそ、俺が無実で捕まえられてることに怒ったように見せ

かけるんだ。

俺がやったっていう証拠は俺の自白だけだ。

逆にやってないっていう決定的な証拠はないが状況証拠はある。

それを説明してやれば例え俺が本当にやっていたとしても王族が全力で調べようとすればはずだ。

そうならば、真犯人は炙り出せる。』

本当にレンは生前何もやっていなかったんでしょうか？

いくらなんでも慣れ過ぎてませんか？

あ、そういえば！！

「レ、レン、自白させられたってことは拷問を受けたんですか！！」

もしそんなことをしようものならレンが味わった苦しみを倍にして与えます。

『確かに、拷問されそうになったがやられる前に自白した。

俺が拷問なんて耐えられるはずないからな。』

「根性無しめ。」

『なんとも言え。

それに今回の件は王族が絡んでるってこと忘れるなよ。』

「分かっておる。

次はないよう徹底的に躡っておこう。」

躡って、王族の中にはフリユネより年上の人もあるんじゃないんですか？

『最後に注意点だがユーリアさんが関わってることは知らないふりで通してくれ。』

『それなら報復の心配もないからな。』

「本当にありがとうございます。」

『気にするな。』

ジンにはユーリアさんが必要なんだ。

これからも仲良くしてやってくれ。

それより、フリッグとアリスはともかくフリユネとミナは乗ってもいいのか？

一時的だが完全に国を敵に回すことになる。

これからフリユネやミナの立場は危うくなる可能性がある。』

「お兄ちゃんの敵はアリスの敵、お兄ちゃんが言ってくれればすぐにでも殺してもいいよ。」

「アリス、やりすぎはいけませんよ。

それで心を痛めるのはレンなんですから。

レン、私とアリスはどんなことがあってもレンに付いて行きます。」

「未来の義姉と恋人を貶められて黙っていられるほどお人好しじゃないわよ。」

「ミナ、レンは私の物です。

勝手なこと言わないでください。」

「違うよ、お兄ちゃんはアリスの物になるんだから。」

さっきまでの空気が嘘のようです。

やっぱりレンは私たちに必要不可欠な人です。

「これでは妾だけ反対するという訳にはいかぬようじゃな。もつとも、最初から妾も乗るつもりじゃ。身内の恥は身内で拭わねばなるまい。」

『それじゃ後はお前ら次第だ。』

俺たちの家族に手を出したことを後悔させてやれ。』

うう、今全世界にこれが私の好きな人だって自慢したくなりそうなくらい格好いいです。

もう、レンが好きって気持ちを抑えられなくなりそうです。

昨日は私とレンが結ばれたら今までの分愛してくれそうだと思いますがこれでは逆に私が求めてしまいそうですね。

早く会いたいです。

その為なら……

side out

こ、この寒気は……！

おかしい、どこでスイッチを押すようなところがあった？

はあ、出たくなくなってきたな。

俺はなにも悪いことはしてないはずなのに拘束されるわヤンデレに付きまとわれるわ……世界って理不尽だなあ。

とりあえず今日はもう寝よう。

数日はこのままだろうし、そろそろ新しい職も決めたいしじっくり考えるとするか。

それにしても、あの時アリスを見せた意味を本当にただの紹介と受け取ってる無能がいるとは思わなかった。

ちよっと考えれば俺たちに手を出すリスクなんて分かるだろうに。

それなのにフリユネ本人を貶めるならともかく俺を標的にする時点で無能さが分かる。

確かにフリユネの評判を落とすことはできるかもしれないが、それを補っても余るほどの功績を立てるし俺を切り捨てれば微々たる効果しかない。

まさにハイリスクローリターン。

国を導く者として一番やってはいけないことだろうに。つと、無駄なこと考えないで寝るか。

side フリユネ

「まったく、これだから品のない輩は。」

そんな者を部下にするなんて気が知れる。」

「本当ですわ。」

我々、王族としての品を落とすような真似はしないでいただきたいものです。」

「それに、いつも周りに女を侍らせるなど相当な遊び人のようだな。」

鬱陶しいの一言じゃな。

これ見よがしにこそこそと、これが未来の国を支える者など情けなさすぎる。

これをあの3人が聞いたら本当に国が滅ぼされそうじゃ。

「人を見る目がないのはお前の方だったようだなフリユネ。」

「これが本当のことならその通りじゃな。」

まだ、集会のことを根に持っておるとは器の小さい男じゃ。

「本人が自白したのに本当も嘘もないだろう。」

これまでの功績もすべて自作自演だったんじゃないか？」

「そう思いたければそう思っておけばよい。」

それよりそろそろ始まるようじゃぞ。」

「その余裕も今日までだ。」

それはこちらのセリフじゃ。

「お忙しい中お集まりいただきご苦労様です。」

裁判はこれから2時間後となります。

そのかん「アリスの従者を返してもらいに来た。」だ、だれだ!？」

扉が木っ端微塵じゃ。

あれはどこから費用が出るのじゃろうか。

「アリス、落ち着いてください。」

どうも、レン・カザミネの妹のフリッグ・カザミネと申します。」

「私はミナ・レグス、どうもお見知りおきを。」

くだらない前置きは省かせてもらっわ。

私たちはこの国、ユグドラシルに宣戦布告を宣言するわ。」

「貴様ら何を言っているのか分かっていないのか!！」

国家反逆罪だぞ!！」

「それはもちろん。
でも、私たちが国を落とせばそんなこと関係ないわよ。
私たちに干渉した罰を受け貰うわよ。」

この中の誰かは知らぬがレン以外を狙っておればここまで大事にならなかつたものを。

精々、おのれの行為がどれだけ愚かな行為だったかを反省するがよい。

「フリユネ、あれはお前の部下だろう。

早くどうにかしろ！！」

「無理じゃな。

いくら妾でも真祖の吸血鬼には敵わぬ。

それに後ろにおる、レンの妹は妾では手も足も出ぬ。

そもそも、あの集会でアリスを紹介した時点であの者たちに干渉すればこうなることくらい分かっておったことじゃろう。」

「そ、それは……」

これくらいのことすら分からぬようでは無能と言われても仕方あるまい。

「ミナも少し落ち着いてください。

御集りの皆さん、私たちが調べた限りどうにもこの件は人為的に起こされた可能性があります。

兄がやったという証拠は明白だけです。

それも拷問を加えられ無理矢理明白させられた可能性が高いです。

しかし、この件は偶然にしては出来過ぎたところがいくつもありません。

なので、この件を調べ直し兄の冤罪を証明し、この件を企てた者に罰を与えるというのであれば先ほどの宣言は取り消しましょう。」

反応は上々じゃな。

これならば確実に1人は蹴落とすことができるじゃろう。

もし誰がやったか分からなくとも生贄として誰か出すはずじゃ。

「では、私たちはこれで失礼します。

言っておきますが次はありませんよ。」

妾でも勝てるイメージが微塵もわかぬような圧倒的な力。

これを目の当たりにすればくだらぬ考えはもう浮かばぬじゃろう。

しかし、少々やりすぎじゃ。

まともに気を保っておる者は妾とグレイしかおらぬ。

これから本格的に目を付けられることになるからこのつ。

より一層妾は目を光らせておく必要があるじゃ。

s i d e o u t

ムスベル Heim その？ 支え

出たくない。

まさか、ホームレスでもないのに牢屋から出たくないなんて言う時が来るとは。

「どうした、早く出る。」

1日でフリッグのスイッチが元に戻っていればいいんだが、出た瞬間拉致監禁なんて冗談でも笑えない。

だが、いつまでもこうしてるわけにもいかない。
いい加減覚悟を決めるか。

・
・
・
・
・

「俺が出てこれたってことは成功したみたいだな。」

「はい。」

あの後すぐ、犯人が見つかりまして王位継承権を剥奪するということとで話しが付いたみたいです。」

それはご愁傷さまだな。

それにしても意外と普通だな。

「おにいちゃん、昨日血を貰ってないから貰うね。」

そういえばそうか。

その内俺がいなくてもアリスが血を飲む方法を考えておく必要があるな。

そう何度もこんな目には遭うとは思わないが。

「予定では明日には帰る予定だから今日は遊びましょう。」

・
・
・
・
・

心構えがしてたおかげで最初の時よりましか。

最初はまともに見ることさえできなかったが今ではそれくらいなら問題ない。

「つまらぬ。

もつと動揺せぬか。」

「黙れ。

妹にそう何度も欲情してたまるか。」

あの時は本気でやばかったが、今は可愛い妹として見れる。

俺もかなりシスコンが進んでるな。

ちよつと前までのジンよりはましだと思いたい。

「そんなことより、今更誰もフリユネを追い出そうなんて思わないんだから憎まれ役を買ってやる必要はないんだぞ。」

「それをレンの口から聞けるとは驚きじゃな。

じゃが心配は無用じゃ。」

妾はこれまでも結果を出すために他の物から恨まれることなど数えれないほどあった。

それが今更1つ2つ増えようと問題はない。」

「だからこそ、支えが必要だろ？」

あいつらはフリユネに懐いているんだから裏切るようなことはないはずだ。

俺も貸しを作れるから大助かりだしな。」

「最後の部分は余計じゃな。

そこは、絶対に裏切らないくらい言えぬのか？

そうすれば妾を口説き落とせたかもしれぬのう。」

「冗談じゃない。

この際言っとくが俺はお前の性格が気に入らない。」

「それはこちらのセリフじゃ。

このへタレめが。」

やっぱりこいつとはこうでないとな。

女友達との距離ってこんな感じなんだろう。

好き勝手言える相手ってのは大事だよな。

「まあ、悪くないからいいか。」

「そうじゃな、悪くない。」

「そういえばフリッグの様子はおかしくなかったか？」

「レンとの甘い生活を想定していたようじゃ。」

それくらいないつもやってる気がする。

あの悪寒はこのレベルじゃないはずだが、俺の気のせいかな？

「妾も今更フリッグのことを好きになれとは言わぬ。

じゃが、もう少し気にかけてやるがよい。

あれは神じゃが中身はまだまだ子供じゃ。

自らの感情を制御できておらぬ。」

分かってはいるんだがそこに関しては本当に扱いが難しい。

加減を誤ると抑えているものが溢れ出しかねない。

「忠告は受け取っておく。

悪いが、フリユネからもフォローしてやってくれ。」

・
・
・
・
・
・
・

「ん、遊んだわね。」

「はい、またいつか来ましょう。」

今度来るときは何もなければいいがな。

何度も使っていたらフリユネが王になってからが大変になる。
できるだけあれは使わないで済むようにしないと。

「あっ、レン、ちょっといいですか。」

「どうした？」

「相談したいことがあるんです。」

この場面で2人になるのはかなり危険だがフリユネにも言われたばかりだからな。

「分かった。」

他の皆は先に行っててくれ。」

「上手くやりなさいよ。」

簡単に言ってくれる。

この旅行の一番の厄介事かもしれないってのに。

「いったな。」

それで、相談つてのは、っん!!」

「レン、レン、レン、レン、レン、レン、レン、レン……!」

くっ、さっそく恐れていた事態が……

「お、んん、ちっ、んん、け……」

「もう駄目なんです。」

抑えようとしても抑えきれません。

もうどうしようもないくらい好きなんです。」

「話を聞け!!」

「嫌です!!」

また、そうやって私を丸め込もうとしないでください!!

苦しいんです、レンがミナやアリスに優しくしてるところを見るたびに心が締め付けられるんです。

お願いです、レン、私に同情してください。

私を助けてください。

私を抱いてください。」

そういうことを泣きながら言うなよ。

俺が女の涙に弱いつてもどこまでも甘いつてもお前が一番知ってるだろ？

お前の為にならないってことがわかってるのに俺は優しくなれないって知ってるだろ？

「嘘でもいいんす、ぐすつ、嘘でもいいですからあ、うっ、愛してると言ってください。

私はミナみたいに聡明じゃないんです。

その嘘に騙され続けますから、ひっく、愛してるって言ってください。」

俺はまだまだ甘く見ていたな。

半年もの間この感情を抑えつけることがどれだけの苦痛だったか俺には分からない。

少なくとも泣き絶つてくるほどの苦痛だ。

それを俺の尺度で考えてずっと抑えつけさせてた。

まだ、自分の感情を制御する術を知らない子供に・・・

「フリッグ、俺はたぶん今から残酷なことを言つと思つ。それを拒みたいなら拒んでもいい。その時はフリッグの望み通りにしてやる。」

俺は変わると誓った。

アースガルドでジンに対して犯した過ちを繰り返さないためにも俺はこの痛みを乗り越えなければならぬ。

「俺はアースガルドで過ちを犯した。

後に苦しめることになるかとわかつていてもその場の罪悪感から、痛みから逃げたいばかりに無責任なことを言ってしまった。

その時はミナに本気で怒られて、俺なんかの為にここまでやってくれるお前たちに俺も変わろうと思った。

でも、やっぱり俺は弱いから今もフリッグを抱いてこの罪悪感から逃れたいと思つてる。」

ああくそ、こんな時でも本能が拒否する。

喉が渇く、目の前がちかちかする、体が震える、体に意思が引つ張られる。

本当に情けない。

「フリッグ、ちょっと抱きしめていいか？」

「は、はい。」

まったく、情けない。

こうでもしないとすぐに逃げてしまいそうになる。

フリッグは神であっても心は子供で、そんな心ですつと俺を支えてくれた。

その思いに報いるためにもいい加減に俺も負けられない。

「俺は弱くて脆い。」

特に痛みに関しては何となく脆弱だ。

何をすることも自分を納得させる理由がなければそれだけで潰れてしまふ。

たぶん、お前たちが支えてくれなければ俺はすでに発狂してたかもしれない。

だから、これからも俺を支えてくれないか？」

これからも今まで通りでいてくれと、今の気持ちを抑えてほしいと言ってるようなものだ。

それができなくて苦しんでいるフリッグにはあまりにも酷な言葉。だから

「そして、俺もフリッグを支える。」

はつきり言ってフリッグはまだまだ子供だ。

今まで対等に扱ってもらえず、俺に会ってようやく対等と呼べる関係を築くことができた。

だから、感情を上手く制御できてない。」

こいつのヤンデレもそこから来てるものだろう。

1万年生きてようやくできた関係だ。

それを奪われそうになると過敏に反応するのは当たり前だ。

「フリッグも俺と一緒に変わっていく。」

俺にはフリッグが必要だ。」

俺ができるのはここまでだ。

あとはフリッグ次第。

「……酷いですよ。」

そんなこと言われたら頑張ろうと思っちゃうじゃないですか。まだまだ、頑張れると思っちゃうじゃないですか。」

「フリッグは俺に騙されてくれるんだろ？」

もう少し騙されてくれ。」

「レン、好きです、狂おしいほど愛してます。

その強さも弱さもすべてが愛おしいです。

だから、レンにもこうなって欲しい。

私しか見えないくらい好きになって欲しいんです。

だから、私を支えてください。

きつと、レンが振り向いてくれる私になって見せます。」

「ああ、こつちこそよろしくな。」

俺は少しは変わったんだろうか？

まだ、死にたいという思いは変わらない。

だから、大切なものを作らないようにしてきた。

だが、今の俺はこいつらを置いて逝けそうにない。

今までは、俺がいなくても悲しまないようだったがこれからは俺がいなくても強く生きていけるように見守っていこう。

それは、最後に悲しませることになるがそれを受け入れられるよう99年と半年、こいつらと一緒に頑張っていこう。

side フリユネ

なんとかなつたようなじゃな

「アリスはいつもお兄ちゃんに抱き着いてる。」

だから、羨ましくない、羨ましくない・・・」

事情を知らなければどう見ても恋人同士じゃからなアリスやミナは羨ましい限りじゃろう。

「やっぱり駄目ー!!」

「待ちなさい、アリス!!」

「ミナおねえちゃんは羨ましくないの!!」

「羨ましいに決まってるでしょ!!」

私だってレンにあんなこと言われてみたいわよ!!」

レンは弱みを見せぬからのう。

もしかしたらこれが初めてじゃなからうか。

「ほれ、2人ともそろそろよいじやろう。

あれ以上のことはおきぬはずじゃ。」

「分かってる、分かってるわよ。

でも、羨ましいのよ!!」

「うう、お兄ちゃん・・・」

レンも大変じゃのう。

異世界からの漂流者

「レン、アースガルドに行くぞ。」

「・・・・・・・・」

ムスペル Heim から帰ってきてまだ2日目だぞ？

これまでの経験から一週間くらいは大丈夫だと思っていたのに、俺は何か悪いことをしたか？

「レンよ、いくら妾でも背後から何の気配もなく撃たれれば危ういぞ。」

「悪い。」

いつもの癖だな。」

本当に慣れは怖いな。

我ながら洗礼された動きだった。

しかも、無意識に。

日頃どれだけフリユネに対し鬱憤が溜まっているかわかるな。

「まずは用件を聞かせる。」

「ほう、少しは成長したようじゃな。」

前回は話すら聞かぬで拉致するしかなかったからのう。

今回もそうするつもりじゃったが手間が省けて助かる。」

そうだろうよ。

俺もお前がそうするとわかってるから逃げ場がある家で話を聞こう

としてるんだよ。

「アースガルドでは行事の1つとして祭りがあるのじゃ。知っての通りアースガルドは信仰の街、祭りの内容としては一般的な祭りと同じなのじゃが最後に選ばれた者が神に感謝の言葉を告げるといふものがあつてのう、その選ばれた者が問題なのじゃ。選定の方法は清らかな者という条件さえ満たしていれば誰でも良いというものでな、毎回ランダムに召喚され、アースガルドの者が選ばれておるのじゃが今回はどうやら異世界から召喚されたようなのじゃ。」

とりあえずご愁傷様だな。

いきなりわけのわからない場所に、しかも異世界だ。

いや、魔法とかに憧れているならむしろ喜ぶべきところなのか？

「しかし、どうやって異世界から来たつてわかったんだ？

もしかしたら、混乱して適当なことを言ってるだけかもしれないだろう。」

「それなのじゃが、召喚された者は黒髪に黒目だそうじゃ。

この世界にいないとは言わぬが、かなり珍しいのじゃ。

さらに、昔話というか童話じゃな。

黒髪に黒目をした者が天より遣わされ人々を脅かしていた魔王を倒し世界に平和をもたらしたというものじゃ。

ここまで言えばあとは分かるじやろう。」

「つまり、そいつが勇者だとか魔王が現れるとか適当な噂が蔓延してるってことか。」

そもそも魔王なんていたところでフリッグがいれば文字通り秒殺だ。

フリッグがいなくてもアリスやフリユネもいるしな。

「さらに言えば政治の道具として使われる可能性もあるのじゃ。妾が言っていることではないのじゃが信仰は個人によって捉え方など千差万別じゃ。」

誰もが神を信じているというわけではないのじゃ。

特に政治を行う者にとって信仰とは1つの道具としてしか見てる者もある。」

「大体の事情は分かった。」

だが、どうしてフリユネがアースガルドに行く必要があるんだ？」

フリユネが手を掛けなくとも恩を売っておきたい奴も多いだろうから、お互いに牽制し合っつてすぐに下手なことにはならないはずだ。

「それなのじゃが、召喚された者がかなり錯乱しておつてのう。」

押さえつけようにも齒が立たぬようなのじゃ。

そこで妾が呼ばれたというわけじゃ。

じゃが、妾が押さえつけようと何度も暴れられたはかなわぬ。

そこで、同じ黒髪、黒目のレンを安定剤として連れて行くことというわけじゃ。」

なるほど、それなら納得がいく。

どちらにせよ、祭りの日になればフリユネも戻る必要があるだろうし他の皆も呼ばれることになるだろうしな。

「分かった。」

それくらいならやつてやるよ。」

もちろん貸し1つだ。

断ったところで俺以外の奴は懐柔済みだろうしな。

「早速じゃが行くぞ。」

「俺とフリユネ以外で誰が行くんだ？」

「フリッグとアリスじゃ。」

「ミナとジンは仕事があるそうじゃからな。」

俺たちにも仕事はあるんだがな。

まあ、いつも報酬をもらってるから別にいいんだが。

「そういうわけじゃ。」

「フリッグ、頼んだぞ。」

できればアースガルドにフリッグを連れて行きたくないんだが元の世界に帰るためにはフリッグがいないとどうしようもないから仕方がないか。

「はい。」

「それじゃあ行きますよ。」

これって俺がどう返事をしようか結果は決まっていたんじゃないのか？

フリッグとアリス、もう行く準備万端じゃねえか。

・
・
・
・
・

・
・
「それじゃあ、私とアリスは街に行ってきますね。」

「無駄遣いはするなよ。」

早速か……

いざという時には来てくれるだろうからいいか。

「俺たちは仕事と行くか。」

案内してくれ。」

「うむ、こつちじゃ。」

せつかくアースガルドまで来たんだ。

俺もいろいろ見て回りたいしさっさとおわればいんだが

「この部屋の中にいるそうじゃ。」

入ったら、気を抜くでないぞ。」

「分かってる。」

何とか対話に持っていければ平和的解決ができるんだが

「誰だ？」

「妾はこの国の姫であるフリユネ・セシリアじゃ。」

どつやら少しは落ち着いたようじゃの。」

「おい、俺は女だとは聞いてないぞ。」

しかも、これまた美少女ときてる。

つい先日、フリッグにあんなことを言ったばかりなんだ。下手な刺激を与えたくないってのに……

「聞かれなかったからのう。」

それに、レンに惚れるフリッグたちが特殊なのじゃ。

特段美形でもないレンに特別な感情など抱くはずなからう。」

……そう言われればそうかもしれない。

あんな美少女が俺に惚れるなんてことあるはずないか。

「用がないなら消える。」

どうやら落ち着いてはいるようだが今の状況が理解できず苛ついる感じか。

これなら無駄な戦闘は避けられそうだな。

「では、単刀直入に聞こう、お主の望みはなんじゃ？」

「元の世界に戻ることだ。」

これ以上城を壊されなくなかったら早く方法を見つけれ。」

武器らしいものは持っていないようだが素手で壊したのか？それとも魔法か？

俺には異世界補正なんて付かなかったのになんだこの差は。

「いいじゃろう。」

レン、フリッグを呼べ。」

いや、当然のように言われてもあいつは通信機なんて持ってないんだぞ。

俺にどうしろと？

「フリッグならレンが呼べば駆けつけるはずじゃ。」

「いくらフリッグでもそんなこと「呼びましたか？」……」

どうしてここにいるとか、まだ呼んですらいないとか、どうやって俺のいる場所が分かったとか突っ込みどころが満載すぎる。

「レンを想う私の気持ちに私に不可能はありません。」

どうしてだろうな、お前が言つと本気で怖い。

「まあいい、あいつを元の世界に返せるか？」

「……レン、もちろん手を出そうなんて考えはありませんよね。」

「ない。」

確かに、美少女だがこれ以上厄介事を抱え込むつもりはない。そもそも、手を出したところであの様子じゃ無理だろう。

「それなら問題ありませんね。」

少し待ってください。

元の世界を特定しますので。」

最近忘れそうになってるが流石は神。

世界間の移動なんて朝飯前ってところか。

「もうちょっと待ってくれ。」

すぐにこいつが「私を名前で呼ばないと止めますよ。」フリッグがどうにかしてくれる。」

まさか、第三者に紹介する際でも名前で呼ばなければならないとは別にそれくらいならいいんだがその内、さらにいろいろな条件が加わるかもしれないな。

本当に外見だけなら最高なのに……

「……すまない。」

いきなり異世界だといわれて気が立っていた。」

「気にするな。」

それが普通の反応だ。」

「……黒髪に黒目、お前も異世界から来たんだろう？
どうしてそんなに落ち着いていられるんだ？」

「俺はこっちに来てもう半年だからいい加減に慣れた。
それに、こっちに来るときに一度死んでるらしい。」

だから元の世界に戻ったところで面倒になりそうだからな。」

「そうか、だが、私には帰らなければならない理由があるんだ。
だから、本当に助かる。」

どうやら悪い奴ではなさそうだな。

それに、力はあるようだ。が戦闘に関しては素人だ。

これならもし暴れられてもフリュネなら問題ないだろう。

「……あの、レン、ちょっといいですか。」

「どうした？」

「彼女のいた世界は特定できたんですけど時間の流れがこの世界とはかなり違っていて今すぐ帰ったとして一年くらい進んだ状態になると思います。」

一年か、今頃行方不明ってことで処理が済まされていることだろう。親がいれば今も探してくれてるかもしれないが一年は長すぎる。

「元の時間に戻すことはできないだな？」

「私が創った世界ならできるんですが既に存在してる世界には誰も時に干渉することはできないんです。」

彼女が妥協してくれれば問題なく帰してやることができるが、見た目から俺とそんなに歳は離れていないようだから学生だろう。それでなくとも帰る理由に期限がついているのかもしれない。どちらにしてもショックを受けるだろう。

結局こうなるのか……

異世界からの漂流者（後書き）

新しいレギュラーキャラにしようと思っ
ていますがヒロインにする
か迷ってます。

意見・感想待ってます。

ちなみにフリユネはヒロインにはなりません。

フリユネはあの立ち位置が一番書きやすいし一人くらいはあの立場がないと物語が成立しないからです。

閉ざされた夢

さて、どう説明するか。

説明せずに帰してもいいがそうすると彼女が混乱するだろうし、なにより帰りたいたいという理由が意味をなくしてしまう可能性もある。一度帰りた理由を聞き出してみるか。

「おい、さっきの話は本当なのか？」

さっきの話が聞こえていたのか？

だが、フリッグは小声だったし、距離だって離れていたんだぞ。

「さっきの話ってのは何のことだ？」

「今帰っても1年進んでいるという話だ！..」

聞こえていたか。

ここは正直に言ったほうがいいな。

下手な嘘をつく信用されなくなる。

「ああ、残念だが本当の話だ。

それでよければ今すぐにでも返すことができるがどうする？」

「嘘だ、どうしてこんな.....」

帰る理由は期限が切れていたのか。

これは少しまずいな、自暴自棄になって暴れだす可能性もある。

「フリユネ、少し下がれ。」

「うむ。」

「私がなにをした……
私は何をしたあああ!!」

やっぱり、こうなるのか。

だが、彼女は完全に被害者だ。
下手に傷つけるわけにもいかない。

「レン、私が意識を奪いましょうか？」

「それだと起きたらまた暴れだす可能性が高い。
ある程度発散させる必要があるんだが、いけるか？」

「……フリユネくらいまでなら落とせると思いますがそれ
以下となると難しいです。」

最高に手加減してフリユネレベルってどれだけ強いんだよ。
だが、気が済むまで暴れさせることが目的だから躲し続ければ問題
ないか。

「いいかフリッグ、攻撃せずに躲し続ける。
20分経つても落ち着きそうになかったら少々荒療治になるだろう
が俺がやる。」

「……随分肩を持つてるようですがもしかして彼女に一目
惚れしたとか言いませんよね。」

こんな時にまで気にすることか？

・・・することなんだろうな。
そういえばアリスはどうしたんだ？

「やっぱり、黒髪、黒目がいいんですか？
レンが望むなら私もすぐに変えますよ？」

ちょっと見てみたい気もするが

「フリッグは今のままが一番だ。
だから変に变える必要はない。」

こいつの髪と目は本当に綺麗だしな。

「分かりました。

でも、何かリクエストがあったら言ってくださいね。
レンのためだったらどんな格好でどんなプレイでも喜んで受け入れますから。」

微妙に危険な発言をするな。
今のところお前を抱くつもりなんてない。

「いちゃいちゃするのはいいのじゃが、そろそろ手伝ってくれぬか。
妾一人抑えるのは少々つらいのじゃが。」

「フリユネが？
見た限り戦闘の心得なんて持ってないのか？」

「うむ、先ほどから何をやっているのかわからぬ。
それに、防御してもそれをすり抜けてくるのじゃ。」

流石は異世界補正とでもいうべきなのか？
俺も少しは欲しかった。

「どうやらあれは音、というより振動を操ってるようですね。
音で発生する波に魔力を載せてその波をいくつもぶつけ合ってその
衝撃でダメージを与えているんだと思います。」

また、反則的な能力だな。

振動なんてちよつと手を動かすだけで発生する。

それを武器として利用できるどころか、最悪、脳波まで操ることが
できれば意識を奪うことも殺すことも簡単にできてしまう。
さっきの会話が聞こえたのもこの能力のおかげってことか。

「レン、あれを躲すのは難しそうなので防ごうと思いますが、そう
なると神力を使うことになりますけど、使っていいですか？」

こればかりは仕方ないか。

幸いにもフリユネがいるし神力を使ってもフリユネがやったと勘違
いしてくれるだろう。

「ああ、だがあまり派手なものを使うなよ。」

「では、『レヴォルト』」

「何をしたんだ？」

「私たちの周りを別世界に置くことで外部からの干渉を一切できな
くしたんです。」

相変わらず規格外すぎるだろ。

そんなもの世界を壊せる力でも持つてない限りどうすることもできない。

「そんなもの使つて、フリユネがやったと誤魔化せるのか？」

「これはフリユネでも使えますよ。」

ただ、神術は神が行使用する術なのであまり人には伝わってないんです。」

「なるほどのう。」

フリッグ、妾に神術を教えてくださいぬか？

最近アリスも力をつけてきたようじゃしな。

妾も負けてられぬ。」

これ以上強くなってどうするんだよ。

王になったら戦うことなんてないだろう。」

「それは構いませんが、彼女が落ち着きそつにありませんよ。」

「城の修繕費もばかにならぬからそろそろ止まってくれぬかのう。」

そろそろ潮時か。

この方法はあまりとりたくないんだよな。

効果は抜群だと思つが痛いだろうなあ。

「フリッグ、俺が今からやることを邪魔することも、終わった後に怒ることもなしだ。」

「………そうですね、私が蕩けるような熱いキスをしてくださいたいですよ。」

「人の弱みに付け込むのはどうかと思うぞ。それにこれ以上城を壊されたらフリユネだって困る。」

「城を壊されても私が直しますし彼女がどうなっても私が知ったことではありません。」

このまま放っておいたらその内力尽きるでしょうしね。

それでも助けたいということは、レンが個人的にあの美少女を助けたいということになります。

美少女だから助けたいという理由なら私は絶対にここから出しません。

そうじゃないなら、証明として私にキスをしてください。」

やけに饒舌だな。

しかも、究極の選択だ。

確かに俺には彼女を助ける理由なんてないが放ってはおけない。

力尽きた後落ち着いていればいいんだが俺たちだつてずっとここに
いるわけじゃないから、確実に落ち着いてもらいたい。

そうなる、やっぱ俺が行くしかないわけだがそうなるフリッ
グにキスをする必要がある。

「言っておきますが後でなんて許しませんよ。」

キスしてからじゃないとここから出しません。

もちろん、レンさえよければキスの後も構いませんよ。」

逃げ道を潰されたか。

言っておくが俺はこんな人前で情事に励むような変態じゃない。

「ええい、このヘタレめ、さっさと覚悟を決めぬか。」

お前はフリッグがどれだけやばいかわらぬ身をもって知ってるだろう。

「分かった。」

そういうことなら諦める。

「一応仕事だからやろうと思ってたが、俺が頼まれたのはあくまで抑えつけた後のことだしな。」

「え!？」

「でも、いいんですか、このままじゃ城が壊されちゃいますよ。それに、力尽きてもまた暴れだしますよ。」

「城はフリッグが直してくれるんだろう?」

「それに城がどうなるかと俺の知ったことじゃない。力尽きた後に暴れだすという保証もないしな。」

「悪いとは思いますが俺も自分の身が惜しい。」

「まだ、永遠を生きていく覚悟なんてない。」

「うう、レンの馬鹿ああ!！」

「フリユネ、レンが、レンがあ!！」

「分かっておる。」

「へタレのくせに頭が切れるレンが悪いのじゃ。」

「酷い言われようだな。」

「人の弱みに付け込んだフリッグが悪いとは思わないのか?」

「そうです、レンが全部悪いんですよ!！」

「ムスペルヘイムの時だって、あんないいムードなのにキスの一つも

してくれないですよ!!

私のこと必要だって言うならご褒美くらいくれてもいいじゃないですか!!」

こいつは何を暴露してるんだ。

ここにミナとアリスがいたら問い詰められるのは俺なんだぞ。

「まったくじゃな。

傍から見れば完全にプロポーズをしてる恋人同士にしか見えぬというのにこのへタレは……」

「ちょっと待て、なぜそんな見てきたような言い方をしてやがる。」

「それは見たからに決まっておろつ。

ちなみにミナとアリスも見ておったぞ。

2人とも流石に我慢しておったようじゃが相当に羨ましがっておったぞ。」

やはりこいつとは雌雄を決する必要があるな。

「うう、レンの馬鹿、でも大好きです!!」

俺に断われたことがかなりショックみたいだな。

若干壊れかかっている。

「もういいです、行けばいいじゃないですか。

レンが私を好きになったら今まで我慢させてきた分離してあげませんからね。

嬉し恥ずかしな思いをしてればいいんです。」

どんな捨て台詞だ。

余計にお前を好きなるわけにはいかなかったな。

しかし、こうなるとは予想してたがまさか本当になるとは。

単純というか操作しやすいというか、本当に手のかかる妹みたいだ。

久しぶりの……

「ちょっとは落ち着いたか？」

「うるさい!!」

私は、私はずっとあの日の為に……」

夢半ばで理不尽にその夢を閉ざされる。

ありふれた悲劇だがその苦しみを知ってる者はどれほどいるんだろうか。

俺は死という願いをフリッグに壊されたが壊れたものは直せる。

だが、失ったものはどうしようもない。

だからと言ってこのまま暴れさせておくわけにもいかないんだけどな。

「なあ、よかつたら帰りたい理由を教えてくださいませんか？」

「……うるさい。」

もう終わったんだ、終わってしまったんだ!!」

「っ!!」

第六感も案外捨てたものじゃないな。

見えない攻撃でも躲すことができた。

そう何度もやれと言われてできると思えないがな。

「仕方ない。」

少々荒療治になるが無理やり落ち着いてもらっぞ。」

side フリッゲ

はあ、レンとキスしたかったですね・・・
ムスペル Heim でしたと言えましたがあの時は私もどうかしてましたからゆっくりキスを堪能することもできませんでした。
そう考えると最後にキスしたのはニヴル Heim のデートの時ですか。
また、あの時のようなキスがしたいです。

「いったいレンは何をするつもりなのじゃ？」

「分かりません。」

ただ、私が怒るようなことをするつもりみたいですけど。」

はっ、もしかして無理やりキスして落ち着かせようとしているのでは！！

もしそうなら許しませんよ。

約束なんて知ったことではありません。

手始めにレンを監禁して1日中キスしましょう。

ふふっ、覚悟はいいですね。

「じぶっ・・・」

・・・え？

「レン！！」

あの女！！

「落ち着くのじゃ！！」

「離してください!!」
「よくもレンを!!」

殺す

レンを傷つける者は例外なく殺す

「落ち着かぬか!!」
レンとの約束を忘れたか!!
それにレンならばフリッグの加護で死ぬことはないじゃろう!!」

「……っ。
すみません。」

「落ち着いたのなら少し神力を抑えよ。
流石に妾がやったといっても無理がある力じゃ。」

「……はい。」

レン、あとでしっかりと説明してもらいますよ。

side out

ああ、そういえばまともに死を実感するような痛みを味わうのはアリスと戦った時以来か。
痛いことは痛いがこの程度で死ねるのならと思ってしまうな。
死に伴う痛み、それが怖くて自殺を踏みとどまる人も多いが俺はその程度じゃ止まれないな。

「……おい、おい、嘘だろ？」

返事をしてくれ。」

どうやら作戦も成功のようだな。
人を殺したこともない奴が故意的にはないとはいえ人を殺してしまつたら流石に動揺する。

これで早々暴れだすことはないだろう。

「死なないでくれ、お願いだ、返事をしてくれ!!」

そろそろ起きるか。

あまりやりすぎると次は自暴自棄になって自殺しかねない。

「少しは落ち着いたか？」

「お前生きて……」

あれだけ血を流せば普通なら死ぬな。

今でも信じられないといった顔をしてるし。

「詳しい説明は省くが俺はあれくらいじゃ死ねない。
めっちゃくちゃ痛いかな。」

「よかった、本当に良かった。」

どうやら悪い奴ではないみたいだな。

これなら力に溺れるようなことはないだろう。

「レンー!!」

ああ、絶対に怒ってるな。

乱入してこなかったってことは多少落ち着いているようだがあとで
どんなことをさせられるか……

「説明してくれますよね？」

疑問形だが目が説明しろと言ってる。

美少女なだけに睨まれるとかなり怖い。

「説明するのはいいんだがとりあえず城を直せ。」

「嫌です。」

レンがキスしてくれたら直してあげてもいいですよ。」

「レン、何をしておる、早くキスでもなんでもせぬか。」

もう放っておこう。

彼女の方も気になるしな。

「落ち着いたか？」

「ああ、すまない……」

かける言葉が見つからない。

なにせ、生きる目的を失ったんだ。

俺のような生きる目的を持つともしない奴が何を言ってもただの
綺麗事だ。

彼女より酷いことを経験した奴が言えば効果はあるだろうがないも
のをねだっても仕方がないか。

「私はこれからどうすればいいんだろう……」

「無視なんてしてもいいんですか？
本当に直してあげませんよ？」

空気を読め。

この空気の中そんなことを言えるってのは逆に凄い。

「俺からは何も言えない。

もし、死を望むなら俺が幕を引いてやる。」

できれば選んでほしくないが俺には止める権利なんてない。
その時は……

「あの、レン？

軽くでいいんですよ、触れるだけのキスでいいんですよ。」

「私がここに連れてこられたのはただの偶然なんだろう？

誰も悪くない、それは分かってる。

なら、私はこの感情をどこにぶつければいい？」

これが誰かの仕業なら復讐という目的を、やり場のない感情を向けることができる。

だが、実際は召喚した人たちも純粹に祭りの行事で召喚しただけ。

俺が止めてしまった以上、次に暴れだしたらもう殺す以外では止まらないだろう。

だが、逆の道をとるとなると夢が閉ざされたことを認め、受け入れなければならぬ。

それがどれだけつらいことか、俺も似たような経験をしたがその比じゃないだろう。

「なあ、教えてくれ、私はこれからどうすればいい？
何を支えにして生きていけばいいだ？」

「これ以上無視するなら大変なことになりますよ。
いいんですか？」

「本当に大変なことになりますよ。」

「俺は死にたがりだ。」

そんな俺が他人に生きる目的なんて見つけてやれない。

もし、生きる目的を見つけれられたなら協力くらいはしてやる。

・・・逆に死にたくなつた時もある。

俺は死ぬなどと言わない。

死は一番確実な逃避だからな。」

死んでしまえばすべてから解き放たれる。

痛みからも苦しみからも

「・・・・・・・・少し考えさせてくれ。」

「ああ、しばらく俺たちはこの街に居るだろうから考えがまとまらないうちでも声をかけてくれ。」

最悪の事態は避けられたか？

いくら本人が望んでいるとはいえ人殺しはやりたくない。

「そんなわけだフリユネ、しばらく部屋を貸してやってくれ。」

「それはいいのじゃが・・・・・・・・」

ん？

「ぐずつ・・・えぐつ・・・」

・・・まだ生きてたのか泣き虫設定
いい加減安定してきたと思ってたんだが情緒不安定なのは相変わら
ずだったか・・・

「うつく・・・レン・・・レン・・・」

「俺が悪かった。」

だから、泣き止んでくれ。」

俺も相変わらず女の涙には弱いな。

「ぐずつ・・・いいですか、私は寂しいとすぐに泣いちゃうんです
からね。」

もう、無視なんてしないでください。」

「分かった、分かった。」

「もうちょっとぎゅっとしてください。」

ここはおとなしく従っておくか。

わざとではないといえ、泣かしてしまったわけだしな。
しかし、罪悪感を感じる反面、もうちょっといじめたいと思ってし
まった。

やっぱり俺はSなのか？

「はあく、レンの匂いは安心します。」

フリッグは確かに美少女なんだがこうやって抱きしめててもまったく動揺も興奮もしない。

それ自体はいいことなんだがここまでなんともないと逆に怖い。

俺はノーマルだよな？

フリッグは妹だから興奮しないだけだよな。

うん、きつとそうだ。

・・・そうだよな？

「・・・んっ、レン、私変な気分・・・」

こいつは・・・

「痛っ、女性に暴力は感心しませんよ。」

「馬鹿なことを言うからだ。」

side フリュネ

「この部屋じゃ。」

「すまない、城を壊したのにここまでしてもらって。」

「気にするでない。」

城はフリッグが直して帰りおった。

それにレンには借りがあったからそれを返済できて妾としては大助かりじゃ。」

それに、この者を押さえつけたということまで妾の株も上がるしなのう。

「そのレンとはどういう奴なんだ？」

・・・これはまずいかのう。

これ以上レンに負担をかけては妾の部下としての仕事に支障が出る
かもしれぬ。

それを抜きにしてもこれ以上周りに女が増えればフリッグだけでな
くミナやアリスもいい気はせぬじやろう。

「妾の部下になる予定の者じゃ。

詳しいことは本人から聞くがよい。

そして、これは忠告じゃ。

あまりレンに関わりを持たぬことじゃ。」

とは言ったものもうすでに遅い気がするのう。

「それはどうしてだ？」

「今のお主は支えがなく何かに縋りたいはずじゃ。

そこに体を張って止め、こうやって落ち着かせたレンを男して見て
しまわぬと断言できぬ。

それは何よりレンを苦しめることになる。」

それにこの者フリッグと同じ感じがする。

周りに頼れるものがなく誰にも頼らず生きてきたフリッグと同じよ
うな境遇を過ごしてきたような雰囲気。

そんな者をレンは放っておけぬ。

「言いたいことは分かった。

その忠告は受けておく。」

「そういえばお主の名はなんというのじゃ？」

「あまがさりんね
天笠鈴音だ。」

近状報告

「あのく、アリス？」

私が悪かったです。

なんでもしますので、機嫌を直してくれませんか？」

「じゃあ、今日お兄ちゃんと一緒に寝る。」

「そこで俺を巻き込むのか？」

彼女を落ち着かせた後、アリスがいないことに気づいてフリッグに聞いたら置いてきたそうなんだが、ただおいてきただけならアリスも空間移動が使えるから普通に追ってくればいい。

だが、間の悪いことに食事中にいきなりフリッグが消え、お金もフリッグが持つてる。

なのでアリスはフリッグが戻ってくるまでそこに居続けるしかできなかったというわけだ。

「ううく、できればレン絡みのことは止めてほしいんですけど。」

「アリスが大変な時にお兄ちゃんと抱き合ってる。」

やはりアリスの鼻は誤魔化せないらしい。

どうでもいいが抱き合ってるではなくて抱きついてきたにして欲しい。

「うっ、わ、分かりました……」

フリッグもアリスに嫌われることは避けたいらしいな。

最近、小悪魔化してきたとはいえアリスが可愛い妹だということは俺にとっても変わらない。

「ところでアリスがいない間何があったの？」

お兄ちゃんからは血の匂いもするけど。」

「そつえばまだ説明してもらってませんね。」

「簡単に説明すると、異世界から召喚された奴が錯乱して暴れていたので、落ち着かせた。」

そして、落ち着かせるために俺を殺したと見せかけたんだ。」

「どうして、そんなことしたんですか？」

「それが一番手っ取り早いし、人を殺せる力だと認識させる必要があったからだ。」

俺だからよかったがあれを一般人にやると簡単に殺せる。」

人殺しはやったことがあるかないかでかなり違ってくるからな。

一度殺してしまったら二度目は一度目より簡単にその結論にたどり着いてしまう。」

「納得はしておきますけどあんまり心配させないでくださいね。」

レンは私のすべてなんですから。」

「その考えは頑張って変える。」

「無理です。」

そもそもレンが悪いんですよ。」

要所要所で私の心を奪うようなこと言ってますから。」

もう何も言うまい。

「この話はもう終わりだ。

あとは彼女がどんな選択をするかにかかっている。

もう、俺たちができることはない。」

「そうですね。

家族水入らずで観光しましょう。

もちろん私はレンのお嫁さんです。」

「それはアリスの役だよ。」

「お前たちは2人と妹だ。

あんまり時間があるわけじゃないんだから行くぞ。」

「仕事終わったことだし俺もゆっくり観光するか。

「前来た時はストーカー王子に絡まれるわ、フリユネに捕まるわでそれどころじゃなかったしな。」

「そういえば、新しい職は決まっただんですか？」

「いや、なかなかこれといったものが思いつかなくてな。」

「元の世界の技術をこっちの世界に流用できればいいんだが、そんな専門的な知識をただの高校生が持つてるはずない。

「武器を創造して売ってという手段はあるんだが俺がまともに作れるのは銃くらいだし、下手にばらまけば子供でも人を殺せる力を持つことになってしまっから簡単には売れないんだよな。」

「そうですね。」

私に協力できることなら何でもやりますから相談してくださいね。」

「最初に言っておくが手伝ったからって変なことを要求するなよ。」

「変な事とは失礼ですね。」

私は純粹にレンに愛してもらいたいだけです。」

それが変な事だっというんだよ。

泣き虫なの変わらないのに遠慮はなくなってきたな。

「ふあ、お兄ちゃん、眠たくなってきちゃった。」

「ほら、おぶってやるからいい。」

「うん。」

もう寝たのか。

よっぽど眠かったらしいな。

「レン、これってもう夫婦ですよね。」

いい加減に認めませんか？」

「残念だが百年後に別れるんだ。」

俺は妻を置いて逝けるほど薄情にはなれないんでな。」

「はあ、本当にレンは頑固ですね。」

まあ、そんなところも大好きなんです。」

「いってろ。」

本当に平和だ。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「あ、おかえりなさい。」

いや、今更来るなどは言わない。

だが、確かに戸締りはしたつもりだったんだがどうやって入ったんだ？

「家にいると兄さんとユーリアさんがいちゃついてるから居づらくてね。

あ、ご飯は作ってるから食べましょう。」

そういえばミナも空間転移が使えるんだった。

しかし、ジンよ、夫婦円満なのはいいことだがせめて周りを気にしてほしい。

「で、仕事はどうだったの？」

「とりあえず俺が頼まれたことはやった。」

下手に彼女のことを伝えて藪をつつく必要なんてない。
適当に濁してまおう。

「ふん、何か隠したいことがあるみたいね。」

「何のことだ？」

なぜ、ばれた？

あの眼は確信してる時の眼だ。

まさか、フリッグがまた余計なことを……

「誰からも聞いてないわよ。」

レンは嘘をつくとき自然すぎて逆に不自然なのよ。

それに、ばれた時には誤魔化そうとして『何のことだ？』って口癖
になってるしね。」

くっ、自然すぎて不自然ってどういうことだよ。

このままでは、ミナに隠し事ができなくなってしまうっ。

「別に隠すことじゃないんですし言っちゃってもいいんじゃないで
すか？」

お前は構わないんだろうが俺が構うんだよ。

ミナはフリッグほどじゃないがそれでも俺の周りにこれ以上女が増
えることに不満を持つはずだからな。

「召喚された奴を落ち着かせるために少し無茶をしてな、別に何と
もないがあまり心配をかけたくなかったんだ。」

嘘じゃない。

ただ、真実を言ってないだけだ。

「まったく、本当にレンは甘いんだから。」

「悪かったな。」

フリッグは前もって言っておいたがそれでも切れかけてたからあまり刺激を与えたくなかったんだ。」

何とかなったか？

「本当にレンは甘いわね。」

私をその程度で誤魔化せると思ってるの？」

本日2度目だな。

笑顔が怖い。

・
・
・
・
・
・
・

「ふん、事情は分かったわ。」

結局掘り葉掘り、あったこと全部しゃべらされてしまった。

これは早急に何か対策を考える必要がある。

「で、その娘はレンの好みだったの？」

ここでミナの方がいいと言えれば直接的な言葉に弱いミナに反撃できるんだがそれを言ってしまうと間違いなくフリッグにも言わなければならなくなる。

そうなる次はフリッグとミナを比べることになりかねない。

その質問はどっちに転んでも面倒くさいことにしかならないから絶対に避けたい。

「ぱつと見ただけなら相当な美少女だったからな。

好みと言われればそうかもしれない。

そういう意味じゃあミナのこともちかなり好きだ。」

「そ、そう……。」

俺にできることはこれくらいか。

それでも、あの顔を見る限り効果は十分みたいだな。

「レン、私はどうですか？」

「もちろん、フリッグもだ。」

アリスが寝ててよかった。

止めた後のことを聞かれたらミナも何か要求してくるだろうしな。

「今更だが、ミナって料理できたんだな。」

しかも、普通に美味しい。

フリッグと比べても遜色ないくらいに。

「まあね、家事はなんでも一通りできるわよ。」

最近はフリッグに任せっぱなしで腕が鈍ってないか不安だったんだけど心配はいらなかったみたいね。」

本当にハイスpekだな。

10人中9人は振り向きそうな美少女に加え、魔法のエキスパート、権力も金も持っていて、さらに家事もできるとは。

これで男を見る目と幼児退行がなければ完璧なんだがな。

「それで、明日も行くの？」

「ああ、約束したしな。

流石に1日2日で出せる答えじゃないと思うからしばらくは通うことになりそうだ。」

「そう、私も行きたいところだけどちょっと立て込んでるから行けそうにないのよね。」

「近々何かあるのか？」

「来月は建国記念日の日に全部の街の代表が集まって会議があるのよ。」

流石に私は参加しないけど資料作りを手伝ってるの。」

ミナの立場ともなると何もなくていいってわけでもないか。

毎月、旅行に行ってるからそのあたりは適当だと思ってたが真面目にやってるらしい。

「そんなわけだから、一段落するまで旅行には行けそうにないわ。」

旅行に行くたびに厄介事に巻き込まれるから本気で助かる。

とはいっても、最近はフリユネが厄介事を運んでくるんだがな。まあ、しばらくは祭りやら会議やらでフリユネも忙しいだろうから何事もないと思うが。

「ん、こごごご……」

「起きたか、もう家だぞ。」

「お兄ちゃん、早く寝よう。」

……しまった。

「どういふことか説明してくれるわよね？」

「ふあゝ、お兄ちゃんのベッドだよ。」

起きたときいないとおこ……るから……ね……」

最悪の爆弾を落として寝るのか……

「フリッグが何も言わないってことは何かあったのよね？早く白状しなさい。」

だから、笑顔が怖い。

「……明日でいいか？」

アリスをこのままにしてたら可哀想だ。」

「……絶対に説明してもらおうよ。」

はあゝ、明日が憂鬱だ……

カウンセリング

「何やら疲れておるようじゃが何かあったのか？」

「ミナに昨日のことを全部しゃべらされた。」

「もうよい、大体分かった。」

まさか、朝から来るとは思ってた。なかつた。

いや、いつも朝食は食べに来てるから可能性はあったわけだが忙しいだろうからその場くらは誤魔化せると思っていたんだよ。

まさか、出勤時間をずらしてくるまでとは思ってた。なかつた。

はあ、いつたい何を要求されるのか……

フリッグをからかうと本当にくるくなことにならない。

「で、俺に何をさせるつもりだ？」

「リンネが話をしたいと言ってきたのう、こちらとしてもリンネには祭りの最後の締めくくりをやってもらいたいからのう、できるだけ要望をかなえて貸しを作っておきたいのじゃ。」

リンネって名前なのか。

見た目は日本人みたいだった。が他の世界に日本に似たところがあつても不思議じゃないから俺と同じ世界から来たとは限らないか。

「それにしても俺に話してもう答えが出たのか？」

「そんなことは本人に聞くがよい。」

妾はレンと話がしたいとしか聞いておらぬ。」

ある程度落ち着いたとはいえ不安は残ってるからか？

まあ、万が一力が暴走した時に俺だったら死なないからそういう意味では安心だが・・・

「分かっておると思うが、気を引くようなまねはせぬことじゃ。」

「当たり前だ。」

俺だってこれ以上あいつらを怒らせたくない。」

だが、つり橋効果で一時的に勘違いする可能性は捨てきれない。そこは時間が解決してくれるだろう。

「妾は空けていた分の報告と仕事がある故、一緒には行けぬ。アリスかフリッグを連れてきた方が良かったのではないか？」

「俺たちにも生活はあるんだぞ。」

フリッグとアリスは仕事に行ってもらってる。」

まあ、あの2人ならどんなものでもすぐに終わらせそうだがな。俺としてはアリスだけじゃなくフリッグにも余計なことを吹き込まれないかが心配だ。

前にちよつと話をしたんだが全く反省の色はないどころかアリスに庇われたおかげで結局何も変わらなかったしな。

「苦労しておるのう。」

「そう思つたら度々厄介事を運んでくるな。」

今のところフリユネ絡みの厄介事が一番多いんだよ。

金にはなるんだがその分、仕事後もきっちりしておかないとあとあと響くようなものばかりだ。

「何を言っておる。

レンは妾の部下じゃぞ。

部下に仕事をさせるのは上司として当然のことじゃ。」

「俺はいつフリユネの下につくと言った？」

「既にフリッグたちからの許可は取っておる。」

こいつは俺のことをなんだと思っただけやがる。

俺はフリッグたちの物ってわけじゃないんだぞ。

これは一発くらい殴ってもいいよな？

フリユネは女だがこいつだけは殴っても許されるはずだ。

「死ね!!！」

「甘いわ!!！」

「ぐはっ・・・」

「妾を殴ろうなど100年早い・・・月並みなセリフじゃな。

ならば、フリッグがレンを嫌いになるくらい無理じゃ。」

くそ、相変わらずのチートスペックめ。

それに、それを言われたら本当に無理な気がしてくる

「俺にはお前を殴る権利があるはずだ。

だから、殴らせろ。」

「却下じゃ。」

妾も暇ではないのじゃぞ。

さっさと行け。」

絶対にいつか殴ってやる。

・
・
・
・
・

「入っていいか？」

「ああ。」

流石、首都の城だ。

客室一つでも俺の家とは比べ物にならないくらい広いし煌びやかだ。とはいってもこんな所に住みたいとは思わいな。

「態々来てもらってすまない。」

一人で考えているとどうにも悪い方向にいつてしまつ。

少し付き合ってくれ。」

「それは構わないが俺でよかつたのか？」

同じ性別のフリッグがいいと思うんだが

「なんとか彼女と話していると君のことばかり話しそつだったか

ら。

あの姫から君に負担をかけるなどは言われたが私を利用しようとしてる人に気を許せない。」

そういえば遠くの音でも聞こえるのか。

しかも、任意で制御できるってのはいいな。

巻き込まれる前に気づくこともできるし、巻き込まれてからも情報収集が簡単になる。

フリッグもできるだろうが、ちょっと頼りないしな。

それにしてもフリユネが俺を気遣うとは、槍の雨が降らなければいいが……。

「そうか、それじゃあまずは自己紹介からだな。

俺は、レン・カザミネだ。」

「私は天笠鈴音。

ファーストネームがリンネでファミリーネームがアマガサだ。」

ますます日本人っぽいな。

「聞いている通り俺もほかの世界から来ててな、そこでは俺もその名乗り方だった。」

もしかして、日本人か？」

「いや、そんな名称は聞いたことがないな。

異世界があるくらいなら似たような世界があっても不思議じゃないんだろう。」

男っぽいしゃべり方。

だが、それにあまり違和感を感じない凜とした感じだ。

「風峰は一度死んでこの世界に来たとも死にたがりとも言っていたな。
ならなぜ今生きていられるんだ？」

なるほど、自分に似た境遇を持つ俺のことを知りたいってわけか。
俺のことが参考になるとは思えないがな・・・

「それは簡単な話だ。
あんたも一度俺を殺しかけただろう。
だが、俺は生きている。
そういうことだ。」

「つまり、死ねないということか。」
どうやら頭は悪くないらしい。
俺が試したこともばれてるみたいだ。

「それなら、なぜ彼女を恨まずにいられる。
私と違って夢を奪った相手がわかってるのに。」

「俺が死ねないといっても期間限定だ。
そりゃあ、最初は恨みはしたがあいつが殺さなくても結局元の世界
でたらだら生きていただけだからな。
いくら死にたがりだからと言って俺が自殺してそれで終わりにはな
らない。」

俺に関わってきた人たち、具体的に言えば家族や、俺が通っていた
学校、俺の身勝手に迷惑をかけるわけにもいかないしな。」

それに今は今で放っておけない妹たちがいる。

「・・・そうか。」

「参考にならなくて悪かったな。」

「気付いてたのか？」

「まあな。」

ある程度考えを読めるようにならないと騙されそうになる奴らがいるからな。

特にあの詐欺師には本気で騙されるところだった。

「聞かないのか、私のことを。」

「あの時そう言ったのは挑発のためだ。」

落ち着かせるためには俺を攻撃してもらう必要があったからな。

だから、俺からは聞きはしない。

聞いて欲しいなら聞いてやるが。」

「・・・止めておこう。」

私が話して楽になれるがそれを聞いてしまったら風峰は何かしよ
うとしてしまうだろう？

今でさえ話し相手になってくれてるんだ。

これ以上迷惑をかけるつもりはない。」

驚いたな、フリユネから話を聞いていたとはいえ、それだけで俺の
性格を把握するとは。

どうやら予想以上に切れるやつらしい。

「そうか。」

天笠がそう言うなら俺がどうこう言うことじゃないな。まあ、話したくなったらいつでも言ってくれ。

俺にできそうなら可能な限り手は貸す。」

「あの姫のように私に貸しを作ろうとするならばそれもいいんだが、風峰の場合は見返りを求めないんだらう？」

一方的に貸しを作るのは好きじゃない。」

フリユネの意図も聞かれていたのか、推測してたどり着いたのか、どちらにせよかなり有能だ。

案外勇者云々も間違いないのか？

「買いかぶりすぎだ。」

俺だってタダ働きは勘弁だからな。」

「そういうことしておこう。」

これはまたやりにくい相手だ。

どうして俺の周りには頭が切れるやつしかいないんだ。言葉一つでも選ばないとすぐに付け込まれそうだ。

「今日は来てくれてありがとう。」

おかげで少しは気がまぎれそうだ。」

「それは態々来たかいがあった。」

また用があつたら呼んでくれ。

暇だったら来てやる。」

本当はあんまり来たいわけじゃないんだが、俺以外では疑ってかか

るだろうしな。

逆にストレスをため込むだけだ。

- しかし、なぜ俺はカウンセラーの真似事なんてしてるんだろ……

生命の結晶

「明日から私も行きます。」

「私は忙しいから行けないから頼むわよ。」

もうお決まりのパターンと化してるが俺が明日も行くと言ったらこうなった。

ちなみに今日のことでも3人に許可をもらってから行ったぞ。

そうでもしないと勘違いされて酷い目にあわされることは目に見えてる。

「あつ、レン、3日後は空けといてね。」

「……もう嫌な予感しかしない。」

「一応聞いておくが、なぜだ？」

「デートするからに決まってるでしょう。」

フリッグが何も言ってこないってことは懐柔済みか。どうやって懐柔したか聞いてみたいな。

「拒否権は？」

「そんなものないに決まってるでしょう。それともフリッグとアリスにはサービスできて私にはできないって言っの？」

そう言われると何とも言えない。
まさか、フリッグをちよつと無視しただけでここまで話が広がる
は……

「それじゃあ決まりね。

デート先は行ってからのお楽しみよ。

念を押しとくけど、邪魔はなしよ。」

「分かってます。

私はレンに必要なだって言われたんですから、デートの一つくらいど
うってこと……」

ここまで言ってることとやってることが違ってるのは初めて見る。
空気が重くて窒息しそうだ。

「いいですか、絶対に手を出してはいけませんよ!!」

レンが抱いていいのは私だけなんですからね!!」

これは邪魔に入らないのか？

……まあ、これくらい日常茶飯事か。

「もちろん私は手を出しても一向に構わないわよ。」

2人ともこう言ってるけど実際になつたら真っ赤になっておとなし
くなるんだろうな。

からかってやりたいんだが逆上して押し倒されるだろうからしない
が。

それにしてもこれだけ騒いでいても黙々と血を飲んでるアリスはす
ごいな。

「とにかく、レンは私の物なんです。私は浮気なんて絶対に許しませんよ。もし、浮気なんてしたら監禁して、記憶を弄って、私に傾くように感情を操作して、二度とほかの女に目が向かないよう調教しますからね!！」

恐ろしい言葉のオンパレード。

これだからヤンデレは……
しかも、それを実行できる能力があるから本当に怖い。

「とりあえず明日はフリッグも来るってことでいいんだな。そうするとアリスは「アリスも行くよ。」分かった。」

血を飲んででも俺にだけは反応するんだよな。
これは意外と嬉しかったりする。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
「で、今日は3人で来たよ。」

「こればかりは俺ではどうしようもないから諦めてくれ。」

フリッグのことを知ってるなら別にいいんだが、知らない奴に事情

を説明すると尻に敷かれてるとしか思えないな。
・・・実際そうだな。

「私は構わないよ。
賑やかな方が気がまぎれる。」

表向きは立ち直ってるように見えるが、やはり根は深いようだな。
これで祭りの最後を飾るのは無理か。

「それにしても、風峰の周りは綺麗どころばかりだ。
あの姫といい彼女たちといい、もしかしたら私も狙ってるのかい？」

「馬鹿を言うな。」

そんなことをしたら俺は二度と光を見れないかもしれないんだぞ。
「だから、今すぐにその殺気を抑えろ。
明らかな冗談にまで反応するな。」

「言っておきますが、レンは私の物です。
レンを誘惑したらただでは済みませんよ。」

「と、彼女は言ってるが。」

「あながち否定できないところが怖いな。
一応この2人は俺の妹ということになってる。」

よくよく思い出すとフリユネには引つ張りまわされ、ミナの旅行に
は連れて行かれ、アリスに血を与えたり、女が関わると3人という
かぼぼフリッグに許可を取る必要がある。

俺の平穩はどこに・・・

「心配しなくても今のところそんな感情はない。あまり余裕があるわけじゃないから。」

「『今のところ』ですか……」

分かってるから睨むな。

こいつわざと言いやがったな。

「とはいえいつまでもこうしているわけにはいかないから、近いうちには答えは出すつもりだよ。」

あまり風峰を独占しては恨まれそうだな。」

いちいち皮肉ったことを言いやがって、これで落ち込んでいる状態なら立ち直った時が怖い。

まあ、立ち直ったら関わりがあるかどうか分からないがな。

「そういえばその小さい子は随分静かだけど具合でも悪いのか？」

「アリスは人見知りなんだ。」

気にしないでくれ。」

半分はそれであってるんだが、もう半分は俺の膝の上に座ってるからだろう。

アリスにとって俺に引っ付いている時間は至福の時らしい。

……自分で言うって恥ずかしくなってきた。

「そういえば、リンネはここに来るまで何をやってたんですか？」

こいつの空気を読めないとか、気遣いのできなさには思わず脱帽し

たくなる。

顔をうずめてたアリスでさえも信じられないって顔してるぞ。

「ええと、私何かまずいこと言っちゃいました？」

頭は悪くないはずなのにこれが神と人の差なのか？

これは一度言っておく必要があるな。

「いや、何もおかしいことはないよ。

気になるのは当然だ。

「……そうだな、君になら教えてもいいか。」

まさかの展開、やっぱりこいつはこのままにしておこう。

「風峰、これから私は彼女に教える。」

つまり、聞かなかったことにしろと。

そこまで念を押さなくても最初に言われたからどうする気もない。

「さて、話自体はありふれたものだと思うよ。

私にはヴァイオリンと言っても知ってるかわからないけど、そういう楽器を弾いている母がいてね。

それも、世界でそこそこの名が売れているほどの腕前だ。

その影響からか私も小さいころからヴァイオリンを習い始め、いろいろな賞を貰ったりもした。

ここまでは平和で幸せな時間だった。

私が15歳になるころ母が病気で入院、もうヴァイオリンが弾けないくらい衰弱し、一つの夢を私に託した。

内容はあるコンクールで一番になること。

それから私は一心不乱にヴァイオリンを弾き続けたよ。

あらゆる物を捨ててまで母が願った夢を生きている間に叶えてあげたいと。

でも、現実には優しくはなかった。

1年後、母は他界、それでも私にはもうヴァイオリンしかなかった。せめて、母の願いは叶える、それだけが私を生かしていると云っていいくらいにね。

そして、それが1年後、努力の甲斐あってようやくそのコンクールに出られることになった

が、その一週間前に突然この世界に飛ばされ、あとは君たちが知ってる通りだ。」

俺は聞いてないことになってるから何も言えない、言えたとしても何を言えばいいか分からないがな。

さて、フリッグはどうするか見ものだな。

side フリッグ

ええと、なんでしようこの重い話は……

レンに助けを求めたいんですがレンは口を出せませんし。

かといって黙ってるわけにもいけません。

今更ながら聞かなければよかったです。

「別に気の利いたことを言わなくてもいい。

ただ聞いてくれただけで十分だ。」

そ、そういわれましても、はいそうですかというわけには……
何か、何か……

「そ、そのヴァイオリンを弾いてくれませんか？」

「残念だが肝心の楽器がなくては弾けない。
この世界にあるかもわからない。」

ええと、リンネの世界から情報を読み取って……..
あつ、これですね。

いろいろありますが、一番高そうなものでいいでしょう。
これを複製して…….

「これでいいですか？」

「これは……これをどうやって手に入れたんだ？」

そつえばリンネは私が神だって知らないですよね。

レンからはできるだけ知られないようにって言われていますから

「えっと、秘密です。」

「まあいい、何かリクエストは？」

「お任せします。」

「それじゃあ一曲。」

ふあ、言葉に表せないくらい素晴らしいです。
これがリンネの生きてきた証。

やっぱり、人とは素晴らしい生き物です。

「ふう、どうだった？」

「凄いです!!」

上手く言葉にできませんけどとにかく凄かったです！！」

「ありがとう。」

だが、もう弾くことはないだろうけどね。」

「どうしてですか？」

あんなに素晴らしいものはもっと多くの人にも聞かせるべきです。それなのに

「もう、私には弾く理由がない。」

以前の私ならヴァイオリンが好きで弾けていたが、今の私にとってこれは生きる目的を果たす道具ではない。

そして、その目的を失ってしまった今、その役割も失ってしまった。

「

「それなら私の為に弾いてください。」

私に聞かせることを目的にして、これからも弾き続けてください。」

私にこの音を捨てさせることなんてできません。

「君の為に・・・」

確か、フリッグといったな。

私にとってヴァイオリンは目的を果たすための道具であると同時に天竺鈴音そのものだ。

ヴァイオリンがない私は私ではない。

フリッグの為に弾き続けるということは私のすべてを背負うことになるぞ。」

リンネの歳は知りませんが20歳もないでしょう。

たった20年、神である私にとって刹那の時と云っていい程の時なのに重いです。
これが命の重さですか。

「背負って見せます。」

その音を私の為に奏でてください。」

まさかの展開

意外な展開になってきたな。

自分を道具として扱うような生き方をしてきたなら新しい目的を与えてやれば立ち直れるとは思うが、まさかフリッグの為にとは。聞いた感じ俺なんかより男らしくないか？

「分かった。

天笠鈴音という音をフリッグに預けよう。

君を癒し、君を守ることを誓う。」

本当に格好いい。

口調も合わさって普通に俺より格好いいな。

「よろしくおねがしますね。」

これって、また新しい住人が増えるのか？

今回はフリッグが言い出したことだから俺に非はない。

ミナやアリスを説得するのはフリッグに任せよう。

「ああ、こちらこそよろしく。」

美少女同士絵になる・・・な！！

「ふえ？」

「ふう、キスがこれほどいいものだとは知らなかった。」

「え？ え？ 今何をしたんですか？」

流石のフリッグも相当混乱してるな。

いや、俺も相当驚いた。

まさか、いきなり唇を奪うとは。

「言っただろう？」

私は君を癒すと、心も、もちろん・・・体もね。」

なんだこの展開？

予想外にもほどがある。

「い、いやああああ！！

わ、私にそんな趣味はありません！！

リンネには音を望んでるんです！！」

おお、フリッグがこんなにも怯えるとは。

俺を盾にしたところで意味はないと思うが。

それにしても、天笠はフリッグに対しての切り札になるかもしれな
いな。

使ったら使ったでフリッグに記憶を消されると思うが。

「それは困ったな。

私も同性同士というものには興味がなかったが君ならば大歓迎だ。

私を背負ってくれると言ってくれたとき胸が高鳴ってね、君を私の
物にしたくなった。

それに君は神なんだろう？

神と人より同性同士の方が現実味がある。」

冗談には聞こえない。

これは本気で言ってるな。

しかも、かなり説得力がある。

「私はレンの物になるんです!!
レンからも何か言ってください!!」

「風峰、君は何も聞いていないはずだ。

それに私は障害が大きければ燃える性質なんだ。」

「だそうだ。」

そういわれたら俺は何もいえない。

むしろ俺としてはフリッグのヤンデレから解放されるから天竺には
頑張っしてほしい。

「お姉さん……」

「ア、アリス……」

フリッグは何か言ってくれると思ってるんだろうが、期待は裏切ら
れるな。

「頑張って!!」

「ああ、任せてくれ。

君の姉は私が幸せにして見せよう。」

「アリス!!」

見事に外堀が埋められていく。

アリスがこれならミナも簡単に賛同するだろう。

「さて、私もフリッグと同じところに住みたいんだがアリスは了承してくれたようだ。
風峰はどうだ？」

「俺は別に「レンー!!」・・・」

痛い痛い!!
腕が潰れる!!

「風峰にとってもフリッグにとっても悪くない話だと思わないか？
私が君たちの家に行くことになれば風峰はもうここに来る必要はなくなる。」

そうなれば、一緒にいる時間も増えるだろう？」

「そ、それは・・・」

確かに天笠が来てくれれば俺の仕事も終わりだしな。
それに天笠の能力はかなり使える。
仲間にできれば心強い。

「いったい何の騒ぎじゃ？」

「あ、フリユネから何か言ってください!!」

いきなり来たフリユネに何が言えるんだ。
相当混乱してるな。

「レン、説明せよ。」

「かくかくしかじかだ。」

「成程のう。」

フリユネもすぐに陥落すると思うがな。

天笠の力があれば簡単だろう。

「確か姫は私に祭りの最後を飾って欲しいと言っていたな。認めてくれるというならやってもいい。」

やっぱり聞いてたか。

「すまぬフリッグ、妾にはどうしようもないようじゃ。」

あっさりと陥落。

あとはミナだけがもう無駄だろう。

「私は嫌です！！」

寝てるところを襲われたらどうするんですか！！」

それは俺も常日頃から言いたい。

お前が来ても分かるように来たら音が鳴る仕掛けまでしてるんだぞ。なぜか、アリスはそれを躲してくるんだよな。

「なら近くに住むとしよう。」

「どこかいいところはないか？」

「ならば、妾が部屋を借りているところに来るがよい。必ず貸してくれるはずじゃ。」

フリユネも必ずをつけるほどそう思ってるのか。
まあ、俺もそう思ってるけどな。

「レン、私に感情を操作する許可をください!!」

「駄目だ。」

フリッグが背負うって言ったんだ、言葉の責任はとれ。」

俺が日頃どんな思いをしてるか知ってもらういい機会だ。

あわよくばそのまま結ばれてほしい。

フリッグと天笠は結ばれて幸せ、俺もフリッグのヤンデレから解放されて幸せ、最高の結末だな。

「レン!!」

変な事考えてないでどうにかしてください!!」

「好きになったものはしょうがないだろう。」

それに俺がどうこうできる問題でもないし、下手をすると好意が俺に向くってこともあるかもしれないぞ?」

ありえないと思うが、フリッグはそれだけは避けたいはずだからな。

「そうだな、フリッグに捨てられたらショックで風峰に傾いてしま
うかもしれない。」

「うう、分かりました……」

で、でも、私が好きなのはレンだけですからね!!」

「分かってるよ。」

だが、私はフリッグが好きだ。

流石に嫌がってることはしないがいつかその心を開いてもらおう。」

めげないなあ。

・
・
・
・
・
・
・
・

「ふうん、事情は分かったわ。

部屋は余ってるから自由に使っていていいわよ。」

「感謝する。」

フリッグもいい加減覚悟してたのか反応らしい反応はないか。

「ミナ、私たちは親友ですよね。

何かあったら守ってくれますよね？」

フリッグからそんな言葉が出るとは、よほど参ってるな。

「ええ、私たちは親友よ。」

「ミナ……」

「でも、レンは譲りたくないからリンネには頑張ってもらわないとね。」

今日は散々だな。

全員が天笠を応援って現金な奴らばかりだ。

「うう、もういいです!!」

私にはレンさえいてくれればそれでいいです。」

ついに拗ねたか。

流石に可哀想になってきたな。

「天笠、フリッグが拒否してる限り手を出すなよ。」

「それはもちろん。」

彼女を悲しませるようなことがあればここにいる全員から殺されそうだ。」

応援するとは言ってもフリッグは家族だからな。

家族を悲しませて黙っていられるような奴なんてここにはいないはずだ。

フリユネは……たぶん大丈夫だろう。

「レン、やっぱりレンは優しいです!!」

「いちいち抱き着くな。」

ミナとアリスが怖いだろうが。

天笠も違う意味で怖い。

side リンネ

「それでは頼んだぞ。」

「分かった。」

まさか、私の目的を奪った祭りを締めくくるとはな。

これも、私を道具として扱い、フリッグと出会えたからか。

皮肉だな、あのまま目的を果たしていたなら私は死んでいたかもしれない。

この世界に来てフリッグに出会い新しい目的を、この命が尽きるまで私を奏でられる目的を得ることができるとは。

「我らが命を育み、見守り続けている我らが神よ……」

そして、なにより天笠鈴音という音としてではなく人として成した
い目的ができた。

「この命尽きるその時まで貴方を敬い、清く正し生きることを誓います。」

風峰、彼女に合わせたくれたことだけには感謝するが君は私の敵だ。

「この世界に、生きとし生ける命に神々の祝福を。」

必ず奪い取る。

まさかの展開（後書き）

まさかのリンネ×フリッグの百合展開！！

になるか分かりませんがこれ以上レンにヒロインはいらない、かといってフリユネの立ち位置は一人で十分ということでしょうかなりました。

だんだん作品が暴走して無事完結できるのか微妙……

鈴音の力(前書き)

GW、第2話目。

本を読んで、書いて、の繰り返しならなら生活を送ってます。

こんな日がずっとつづけばいいのに……

鈴音の力

「やあ、おはよう。」

「お、おはようございます。」

天笠が来てから翌日、ミナやフリッグが毎日こっちで朝食を取ってるってことで必然的に天笠もこっちに来ることになる。

そして、フリッグの怯え方が凄い。

天笠からできるだけ離れて震えながら俺の腕にしがみついている。自分から言ったからか無下にも扱えないらしい。

「そう怯えないでほしいな。」

何も取って食ったりはしないよ。

「……今のところはね。」

こいつわざと言ってないか？

フリッグの反応を見て楽しんでるな。

微妙にその気持ちかわかるのが嫌だな。

「リンネ、そういうのは朝食の後にいくらでもやっつけていいからまずは食べなさい。」

「分かった。」

「後にもやらないでください!!」

「それで後2日後大丈夫なの？」

私とレンはデートでないのよ。

フリユネも仕事で忙しいでしょうし。」

「アリスはギルドのお姉さんのところに行ってくる。」

気を利かせたつもりか、それとも本当に用があったのか、どちらにせよフリッグにとっては最悪の1日になりそうだな。

「レン、行かないでください!!」

もうレンしか頼れないんです!!」

「そついうのはミナに言ってくれ。」

俺が行かないと言っても俺の意見が通ることなんてないしな。自分で言っけて悲しくなってきた。

「ミナ!!」

「もちろん駄目よ。」

私だってレンとのデート、ものすごく楽しみにしてるんだから。」

ミナがこう面と向かって言うのも珍しいな。

微妙に顔が赤いところを見るとやっぱり恥ずかしいらしい。

ミナはこうでないとか愛くないというか面白くないというか。

「うう、せめてフリユネかアリスは一緒にいてくれませんか?」

「すまぬ、仕事が忙しくてのう。」

「頑張って!!」

フリユネはともかくアリスは誤魔化す気満々だな。

それにしてもアリスは随分押すな。

ライバルを蹴落としておきたいのか、百合カップルを見たいのか、どちらにせよ10歳くらいで考えてほしくないことだな。

「私はこの街に来たばかりだし、案内してくれれば嬉しいな。

皆は忙しうだから、頼んだよ。」

「ぜ、絶対に変な事しないでくださいよ!!!」

「それは振りかい？」

風峰が相手をしてくれないから溜まっているものあるんだろうし、気が利いてなかったようだ。

だが安心していい、皆が出払ったらきつと満足させよう。

ふふっ、これは楽しみだ。」

こいつが男だったらセクハラでここにいる女性陣から殺されてるな。いや、セクハラは性的嫌がらせだから普通にセクハラだな。

「レン、やっぱり無理です!!!」

お願いしますから一緒にいてください!!!

2人になったら私食べられちゃいますよ、リンネに手籠めにされちゃいます!!!」

いざとなったら撃退すればいいだけだろうに。

それすら思いつかないほど混乱してるらしい。

「天笠、そのへんにしとけ。

本気で怯えてるぞ。」

「それはすまない。

フリッグの怯えている姿を見ていとぞくぞくとしてね。
どうやらやりすぎてしまったみたいだ。」

こいつドSだな。

俺も似たようなところがあるが相手を怯えさせる趣味はない。
でも、フリッグは結構Mっぽいし相性はいいのか？

「うう、どうして私が……」

それは俺も言いたい。

どうして俺はヤンデレに付きまとわてれるんだ。

「そついえば天笠は今日どうするんだ？」

「街の案内は2日後でいいとして……」

今日は君たちの仕事ぶりを見ることにしよう。」

変に迷われても面倒だしそれならいいか。

「それじゃあ行くか。」

「あつ、今日はお兄さんも一緒なんですね。」

「ああ、いい加減アリスに変な事をふきこないでくれ。」

「あれはアリスちゃんが聞いてくるんですよ。いいじゃないですか、あんなに可愛い娘に一途に想われてて。」

その一途さが問題なんだよ。

フリッグもだがアリスもミナも一途すぎる。

もつと外を見れば俺以上の男なんているだろうに。

まあ、アリスに彼氏なんてまだ早いから許さないけどな。

「それにしてもまた可愛い娘を連れてきたようですけどまた妹さんですか？」

「いや、今は違うな。」

もしフリッグを落とせば将来的には俺の義妹となるわけだからな。しかし、同性愛なんてものを以上と思わないのはまずいか？最近常識というものを悉く覆すようなことばかり起こっているせいか常識が揺らいでる。

「ということは彼女ですか！！」
駄目ですよ、可愛い妹さん2人にあんなに愛されてるのに浮気なんてしちゃ。」

兄妹同士の家族愛ではない愛をそこまで応援できるこの人は一度病院に連れて行くべきだな。

「心配しなくてもそんなんじゃない。
どちらかといえばフリッグの彼女……というより彼氏だな。」

考えてみるとまともなカップリングがないな。

俺とフリッグだと妹以前に神と人だし、アリスが吸血鬼と妹ということを除いても10歳で犯罪だし、フリッグと天笠は同性だ。唯一まともなのは俺とミナか？

ミナも一応エルフだが人間とエルフなんてこの世界じゃ普通だしな。そうはいつても、ミナも妹みたいなものだからありえないけどな。

「ということは百合ですか！！」

それはそれで素敵ですね！！」

なんとというか何でもありだなこの人。

いや、アブノーマルならいいのか？

なんというかお近づきになりたくない人種だな。

「ところで何か仕事はあるか？」

「それで2人の関係はどこまで進んでるんですか！！」

もしかして、もう人には言えないような関係にまでいっちゃってるんですか！！

そうになると、やっぱり妹さんはネコですよ、ちよつとMっぽい妹さんに……………」

興奮しすぎだろ。

やっぱり、この人にアリスを任せるのは不安だ。

はやくなんとかしなければ。

「……………妹さんは体中を火照らせながらも「おい。」抵抗しようとしてはそんな抵抗も虚しく「おい！！」「っは！！」す、すみません、ちよつとトリップしてしまいました。」

本当にこの人にアリスは任せておけない。

しかし、アリスはなぜかこの人に懐いてるし。
誰かに真つ当な情緒教育を頼みたいが俺の知り合いには癖の強いやつしかいない。

「いっそ、フリユネに頼むか？」

「アリスのためだ貸しの1つや2つくらいどつってこと……」

「あのく、呼びかけておいて無視するのはどうかと思っんですけど。」

「

「悪い、とにかく仕事はあるか？」

「そうですね……」

「これなんかどうでしょう？」

「アクアライトの納品か。」

「この前取ってきたやつはもうなくなったのか？」

「そもそもアクアライトは結構貴重なんですよ。」

「採掘場所は基本的に魔物がうようよいますし、道も悪いですから。」

「それをあんなに安価で売り出したらあつという間に売れてしまいません。」

「それはそうか。」

「あの時は採りすぎて単価が安くなってしまったからな。
今度は必要量だけ取るとしよう。」

「それじゃあこれにする。」

「承りました。」

「ご武運を祈ります。」

この切り替えだけはすごいんだよな。

・
・
・
・
・

「本当にゲームのような世界だ。」

「俺たちから見ればな。」

「この世界に生きてる人にとってはそれが現実だ。」

生きるために魔物を退治するのは当たり前だし、何かを作るために材料を取ってくるのも当たり前のことだ。

この意識の差が異世界に来たときに一番厄介なことかもしれないな。

「まあ、私はフリッグと一緒にいればどこでも構わない。」

「ひっ！！」

そういう反応が天笠を喜ばせてるって分かってないのか？

「風峰、2時と7時の方向に何かいるようだ。」

今のフリッグには期待できないがアリスが気付く前に気づくとは、能力は使えるんだが人格の問題があるな。

「できるだけ接触しないように案内を頼む。」

・

・ ・ ・ ・ ・

本当に一体も魔物と遭遇せずにつけるとは。そんなことアリスにだって無理だぞ。

「採掘するなら早めにした方がいい。臭いで嗅ぎ付かれるぞ。」

「フリッグは・・・駄目か。アリス頼む。」

神をここまで怯えさせたのって天笠が初めてじゃないか？本当に2日後が心配になってきた。

「採ってきたよ。」

「それじゃあ帰るか。」

「アリス、ちょっとそれを貸してくれ。」

「？、はい。」

何をするきだ？

「こんな感じか・・・」

「それは……分解してるのか？」

アクアライトに付着していた汚れを完全に消した。
汚れたものを持ち歩きたくはないから助かる。

「ああ、できるか分からなかったがやってみるものだな。」

分子の結合を振動で分解するとは、俺が思っている以上に汎用性のある能力だな。

流石に分子分解となると戦闘では使えないとは思うがそれを抜いても十分に強い。

しかも、力の制御を誰に習うわけでもなく使える頭脳といいかなり有能だ。

まあ、その分性格に難ありだがフリッグを掛け合いに出せば制御することも不可能じゃないか？

これで少しは平和になればいいんだが……

愛という暴力（前書き）

最近増えてきたシリアスパートです。

- GW期間は頑張って連続投稿を続けていますがそろそろ限界っぽい・
- ・
- ・

それにしても西尾維新先生の本は最高です。

愛という暴力

「それじゃあ俺は行ってくるけど本当に大丈夫か？」

「心配せずとも悪いようにはしないよ。」

そのセリフは悪党のセリフじゃないか？
激しく心配になってきた。

「だ、大丈夫ですよ。」

だから、レンは楽しんできてください。
でも好きになったら駄目ですよ。」

空元気が痛々しい。

これ以上この状態が続くなら本気で考えないとな。

「分かった。」

何かあったら連絡をくれ。」

side フリッゲ

「それじゃあ私たちも行こうか。」

「はい。」

レンにはああ言ったもののやっぱり怖いです。
襲われても撃退できますけど助けてしまったのは私ですし手酷く扱
うこともできません。

「そう言えば、風峰とはどうやって出会ったんだ？」

「それは、私が間違っただけで殺してしまったって転生させるために呼び寄せたときに初めて会いました。」

最初から寝ようとするレンにはびっくりしましたが、そのあと抱かせてくれと言われた時はもっとびっくりしましたね。

今なら二つ返事で承っていたんですが、抱いてくれるどころかキスもしてくれません。

まあ、私がどんな返事をして結局レンは私を抱くことなんてなかったと思いますけどね。

「本当に君は風峰のことが好きなんだな。」

これはついに私のことを諦めてくれたんでしょうか！
でも、それでレンの方に行ってしまうのは困ります。

「あの、リンネはレンのことどう思ってるんですか？」

「そうだな……哀れかな。」

私には風峰がなぜ生きていられるのか不思議でしょうがない。
少なくとも私ならとっくに発狂しているな。」

「そ、それは私が、私たちがどうにかします。」

レンだって少しずつ変わってきてくれています。

最初のころと違って大切なものを持つと、守ろうとしています。

「ああ、勘違いをしないでくれ。」

私が言っているのは風峰が死にたがりだからということを書いてい

るんじゃない。

私が言いたいの君、いや、君たちのことだ。」

私達？

「それは誰のことを指してるんですか？」

「自覚がないということほど恐ろしいものはないな。

いや、自覚がないからこそあそこまで風峰に対して残酷であれるんだらうが。」

何を言っているんですか？

少なくとも私はレンのことを好きで、レンの為になろうとしているだけです。

それがレンに対して残酷？

いくら何でも言っていることと悪いことがあります。

「煙に巻くような言い方をしないではっきり言ってください！！」

「そうか、それじゃあ教えてあげよう。」

「きゃっ！！」

な、なにを！！

「ここなら人目はつかないだらう。

知ってるの通り私は君とことが好きだ。

君が風峰を好きなように君を私の物にしたい。」

「そ、それは分かりますけど私はこんな乱暴にはしません！！」

それはたまに暴走しちゃうときもありますけど結局はレンに宥められちゃいますし。

「そう、君は風峰に愛してもらうことで風峰を君の物にしようとしている。

もちろん、私もその方法で君を手に入れようとしているが、何もそれだけが方法じゃない。」

怖い。

何を言ってるんですか？

何を言いたいんですか？

「君は今私に対して恐怖を感じているだろうか？

それはそうだ、誰もいないところで壁に押し付けられ、風峰の言葉で心理的にブレイキがかかる。

今の君はか弱い女の子と同然だ。

つまり、私は君のことを犯そうと思えばいつでも犯せる。

そして、君はそのことを風峰に知られたくはないはずだ。

私はそれを人質にとってこれからも君を犯し続ける。

そうなれば君はいつまで正気を保っていられるかな？」

「ひっ！！」

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い！！

誰か、誰か助けて！！

「そんな顔をしないでくれ。

本当に犯したくなってしまうだろう。」

「い……や、助けて……」

「この通り、私は君を暴力で手に入れるわけだ。それは君も同じだ、圧倒的な力を持つ君ならば風峰を力づくでものにするくらい簡単だろう？」

それをしないのは君の良心があるからだ。

だが、あれほど疑り深く、この世の何も信じようとしない風峰がそれを信じていられると思うか？」

それは……

「行き過ぎた愛は暴力と変わらない。君達の愛は暴力と言っていない。」

これが風峰でなければ深刻な問題にはならないだろう。」

「で、でもレンはそんな素振り……」

いつも通りで、何も……

「それは風峰が痛みに鈍感、いや耐性があるからか。皮肉だな、風峰でなければ君たちの愛は愛のままであれたというのに。」

しかし、逆に風峰でなければ君達の暴力に耐えられることはなかっただろう。」

私たちがレンを苦しめていた……

「君のように私に対し恐怖だけならまだ救いはあった。単純に拒絶すればいいだけなのだから。」

あれほどの切れ者だ、君たちを諦めさせようとすればいつでもでき

ただろう。

だが、風峰は君たちを家族と認めてしまった。

これがどれほどのことか分かるか？

守るべきものを疑い、恐怖しなければならぬ苦痛が。」

「……………なぜ、それを私に言うんですか？」

「それは単純明快だ、私が君のことを愛しているから、それ以上の理由はない。

いずれ遠くない未来、風峰は壊れる。

それは必ず君を傷つけることになるだろう。

愛すべき人が傷つくことがわかっていて止めないわけがないだろう。」

「

これがいつも私がレンに向けてきたもの……………

レンはこんな、これ以上の暴力に耐えてきたんですね。

「今ならまだ間に合う、風峰を諦めて私の物になれ。

私は君のすべてを受け止めよう。」

「……………必要だと言ってくれたんです。」

「なに？」

「レンは私のことを必要だと言ってくれたんです。

一緒に変わっていきこうって、お互いに支えあおうって言ってくれたんです。」

「それは君に迫られ誤魔化そうとしただけじゃないのかい？
事実、風峰は姫との関係が一番楽なはずだ。」

ギブ&テイク、貸し借りだけの関係、それが一番の距離感だからね。

「

「私はレンを信じます。

きつとレンは私を信じてくれる。

何よりレンはそんなことで潰れるような弱い人ではありません。」

「それは君が思い込んでいるだけだ。

人とは君が思っている以上に脆く壊れやすいものだよ。」

「私の音如きが私の大切な人を侮辱するな。」

もう私はリンネに音になんか怖がってあげません。

レンが私たちの想いをすべて受け入れているように私だって自分の音くらい制御します。

「ふう、参ったよ。

私の予想ではもっと子供だと思っていたのだけれど、どうやら見込みが甘かったらしい。

これは君が成長した証拠かな？

ちなみに私が言ったことはすべて出鱈目だよ。

たった数日でそこまで分かるわけないからね。」

私は少しは成長したんでしょうか？

でも、まだ私はレンの隣は立てない気がします。

もっと強くなりましょう。

「さ、行きますよリンネ。」

「分かったよ。」

頑張りましょう。

私は絶対にレンを手に入れるんですから。

side out

「ただいま。」

「あ。おかえりなさい。」

「ご飯にしますかお風呂にしますか」「いい加減飽きる。」「相変わらず冷たい反応ですね。」

「どうやら問題ないようだな。」

「本当に一時はどうなるかと思った。」

「それにしても意外と過保護だな、風峰。」

「デートを監視するとはシスコンもほどほどにしておかないと犯罪だぞ。」

「やっぱり気づいてやつがたか。」

「いや、私も気づいたのは最後の方だよ。」

「流石はアリスだ、少しでも動けば感知できるんだが空間移動で移動しているとは盲点だった。」

「「どつやって気づいた？」」

「風峰がシスコンだということは姫から聞いていたからな。」

「何もないと逆におかしいと思ったんだよ。」

だから、物理的振動ではなく魔力振動を追って突き止めたというわけだ。

それも、ごく微細だから見つけるのに苦労したかな。」

「抜け目がないというか可愛くない奴だな。」

「別に風峰に可愛いなどと思っただらう必要ない。

私はフリッグさえよければそれでいいのだから。」

面倒くさい奴だな。

「それにしても、私が言ったことは的外れというわけではないはずだ。

苦しくはないのか？」

「そんなもの可愛い妹たちの為なら耐えられる。」

もう開き直ろう、俺はシスコンだ。

妹たちが可愛くて仕方がない。

ジンもこんな気持ちだったんだなあ。

「ふっ、これはフリッグを落としてからも大変そうだ。」

「そう簡単に妹は渡さないからな。」

ミナノデート 上編(前書き)

1話に収めるつもりが下手をすれば3話になるかも……………

時間軸は前話と並行しています。

ミナのデート 上編

一応、アリスを監視に付けたがやはり不安だな。流石に襲うことはないと思うが余計なことを吹き込まれるかもしれない。

フリユネなら貸し借りで扱えないことはないが天笠はフリッグ第一優先だけあって子とフリッグのことに關しては扱いが難しい。

『お兄ちゃん、今2人が出かけたよ。』

「それじゃあ、手筈通り空間転移で限りなく遠い距離で見張っていてくれ。」

『分かった。』

その代わりに約束忘れないでね。』

「分かってるよ。」

監視を頼む対価はアリスのお願いを1つ聞く。

毎回毎回、何を言われるかびくびくしながら過ごすだが今回も例に漏れなさそうだ。

「お待たせ……………なにやってるの?」

さて、どうしよう。

ミナに嘘は通じないし、無駄な抵抗をして機嫌を損ねられても面倒だが、妹のデートを監視してるなんて言えるか? 少なくとも俺には無理だ。

かといって、誤魔化そうとしてもなぜかばれてしまう。

だが、諦めるわけにはいかない。

「ちょっとアリスから相談を受けてたんだ。もう、解決したから気にするな。」

「……嘘は言っていないみたいね。」

内心冷や汗だらけだ。

だが、それを表に出せば瞬時にばれてしまう。頼む、誤魔化されてくれ。

「けど、隠し事はしてるわよね？」

「……やっぱり無理だったか。」

ここは潔く

「私とデート、そんなに嫌だった……」

待て、なぜそうなる？

俺は別にいやというわけじゃないぞ。

むしろ、最近ミナとはゆっくり話す時間もなかったから楽しみにしてたと言っていていいぐらいだ。

だが、それを言ってしまうとアリスのことを説明する必要がある……

「ごめんね、一人で盛り上がっちゃって……」

ミナってこんなキャラだったか？

もっと強気で誰に対しても勝気だっただろう。

「私、ちょっと頭冷やしてくるから……」

……もう駄目だ。

こんな顔をさせてまで隠すことじゃない。

それにデートをしている最中に連絡が入るだろうし説明しておくか。

「ミナ、別にデートが嫌ってわけじゃないん。

ちよつと説明するのが恥ずかしかつたんだ。」

「えっ!?!」

「今日、フリッグと天笠が2人になるだろう。

それが心配でアリスに監視を頼んだんだ。

さっきのはアリスからの報告だ。」

「……シスコン。」

ぐはっ!!

言われることは覚悟していたが予想以上にダメージがでかい。

だが、仕方ないだろ。

手のかかる妹なんだから心配するのは当たり前だ。

それに相手はフリッグを狙ってるんだぞ。

そもそも、フリッグはまだまだ子供なんだから彼氏なんて早いだろ。

そりゃ、俺もヤンデレから解放されるならとは思つが上手くやって

いけるか心配だし。

……もう開き直ろうかな。

「それじゃあ、デートは嫌ってわけじゃないのね?」

「ああ、最近ミナとゆっくり話もしてないしいい機会だ。」

しかし、なぜ今になって俺の意思を聞いてくるんだ？
いつもなら俺が嫌がろうが無理矢理引つ張りまわしてたはずだ。

「なあ、何かあったか？」

「どうして？」

「ミナが俺の意思を聞こうとするし、何より俺が嫌だといったところで引つ張りまわすのがミナだろ？」

「それは……」

これは地雷だったか？

いや、つい2日前までは普通だった。

2日で変わったことといえば、天笠か。

あの女、ミナに余計なこと吹き込みやがったな。

「ミナ、誰に何と言われようがミナはミナのままできてくれ。
それが俺を苦しめていることになって、それは必要なことだ。」

「はあ、レンには隠し事できないわね。」

「ミナは妹みたいなものなんだからいちいち俺のことなんか気にしなくていいんだよ。」

兄は妹の我儘を聞いてやる義務があるからな。」

あくまでも俺ができること限定だけだな。

できるだけ、兄妹間に男女の問題を持ち込むのは止めてほしい。

「私の兄さんはジンだけよ。
レンは私の夫になるんだから。」

「それじゃあ、まずは妹から抜け出せるようにならないとな。」

最近是我ながら完璧に妹として見れてるからな。

それが妹として見れなくなったら即落ちるな。

こう言うってはなんだが俺が死んで悲しませないなんて無理だろう。
それくらい深くかわりすぎた。

だからと言ってはなんだが、フリッグやアリスと違って俺が死ぬこ
とを認めてくれるミナとなら付き合っても問題はない。

だがそうなるに残った2人を悲しませてしまうからな。

俺が俺の意思でミナが好きになるまでは無理だな。

side ミナ

敵わないなあ。

たぶん、今の私じゃあ一生レンに勝てない。

事実、レンに勝ったこともないしね。

気付けば好きになっていて、ずっと追いかけてきたけど全然振り向
いてもくれない。

惚れた方が負けだっというけど、本当に完全敗北ね。

今日だって、ちょっと言われただけで落ち込んで、レンに励まされ
て、また好きになって・・・

レンに助けられて、支えられてるのは私。

これじゃあ妹扱いされても仕方がないわね。

よし、頑張ろう。

レンに必要とされるんじゃないやなくて必要不可欠な存在になってレンを
見返そう。

とりあえず今日のデートね。

いつもみたいに思いっきり振り回してあげよう。

side out

「それで、今日はどこに連れて行くつもりだ？」

「そつえばまだ言ってなかったわね。」

どうやら持ち直したみたいだな。

それはそれで大変なんだが顔を曇らせているよりはましだ。

「私の家よ。」

最近をよく耳が悪いんじゃないかと思うことばかり聞いてる気がするな。

言い換えれば現実逃避をしたくなるようなことということだ。

「もう一回言ってくれ。」

「私の家よ。」

やはり聞き間違いではないらしい。

別にミナの家なら何度か行ったことはあるが、今回はミナの私室と
いうことだろう。

ちなみに、俺は今までフリッグやアリスの私室にすら入ったことは
ないぞ。

入った瞬間、押し倒される可能性が高いからだ。
ミナなら大丈夫だとは思いますが前例があるからな。

「心配しなくても押し倒したりはしないわよ。」

嘘を言ってるようには聞こえない。

だが、ミナはこれで感情の起伏が大きかったりするからな。何かの拍子にスイッチが入るかもしれない。

「信用できないなら拘束しておいてもいいわよ。」

「俺にそんな趣味はない。

……分かった、信じるよ。」

いざとなってもミナなら抑え込むことくらいできるだろう。

いくら古代魔法を使えるといってもあれは狭い部屋の中で使えるものじゃないしな。

・
・
・
・
・
・
・
・

「それで、ここで何をするつもりなんだ？」

読み通りというか当然の成り行きでミナの部屋に通された。

ミナの部屋は、なんとというか本棚に難しそうな本ばかりあって社長の部屋みたいだ。

それに、部屋一つに風呂やトイレなんかも完備してる。

総じていうと年頃の女の子の部屋じゃないな。

「それより、飲み物は何かいい？」

「適当に頼む。」

「それじゃあ、紅茶でいいわね。」

部屋は整頓されているし、こまめに掃除はされてる。

家事全般できるって言ってたくらいだから自分でやってるのか。

……って、いつもの癖で周りの情報を集めようとしてしまうな。

それで、助かった時もあるから止めるつもりないが流石に妹の部屋にまでやることじゃないか。

「お待たせ。」

こういうことを自分でやれるってところがお嬢様らしくないよな。

そのあたりもミナらしいと言えばらしいんだが。

「結局、今日は何をするつもりなんだ？」

「レンに私のことを知ってもらおうと思って。」

レンなら部屋を見ただけである程度のことかわかるでしょう。」

部屋の中を見回していたとこばれてたか。

「ねえ、レンは私のことどんな風に思ってる？」

「そうだな、頭はいいし、運動能力も低いというわけじゃない。」

何でもそつなくこなすし、自分ができるとの範囲をわきまえてる。その反面、感情の起伏が大きく一度冷静を欠くとなかなか冷静にな

れない。

いつもは勝気な分、冷静を欠くと熱くなったり、逆に極端に落ち込んだり幼児退行したりするな。」

とくに、俺に関することについては冷静になりにくい。
今日がいい例だな。

「まとめると頼りになるけど、どこか危なっかしい妹だな。」

「喜んでいいのが微妙な評価ね。」

「そういえばレンのタイプってどんな娘なの？」

「ミナのことを知ってもらうために呼んだんじゃないのか？
いつの間にか俺への質問が変わってるぞ。」

「まあ、いいか。」

「俺も男だから容姿は良い方がいい。」

「体形は極端に太ったり痩せたりしてなければ大丈夫かな。」

「範囲が広すぎるわよ。」

「もうちょっと絞れないの？」

「確かにはっきりしたことは1つも言っていないな。」

「ミナはその範囲に入ってるから心配するな。」

「~~~~~っ!」

「おお、面白いくらい真っ赤になっていく。」

「このあたりが見ていて飽きないというか、可愛い妹に見えてしまう」

んだよな。

「……………ずるい。」

そんな顔で睨まれても可愛いだけだぞ。

『お兄ちゃん、お姉ちゃんが!!』

「どうした!!

あの女、フリッグに何かしやがったら俺の持てる力のすべてを持って地獄に叩き落としてやる。

「……………シスコン。」

そんな冷たい目で見ろな。

本気でいたたまれなくなる。

「それで、何があつたんだ?」

『お姉ちゃんがお姉さんに抑え付けられて何か言ってるみたい。』

アリスでも気配を悟られない位置からじゃあ音は拾えないか。

『き・み・を・わ・た・し・の・も・の・に・し・た・い。』

「アリス、何を言ってるんだ?」

『読唇術だよ、ギルドのお姉さんに教えてもらったんだよ。』

流石に何をしゃべってるかは雑音で聞こえないけど唇の動きは見え

るから。

それで、何を言ってるかある程度分かると思う。』

本当にあの人はアリスに何を教えてるんだ。

それにしても天笠の奴本気だな。

ミナノデート 上編(後書き)

これってデートになるんですかね？

ミナのデート 下編

』どつするのお兄ちゃん？

言ってくればすぐにでも止めてくるけど。』

俺個人の意見としてはすぐにでも引き離してやりたいんだが……

「悪いがもう少し様子を見てくれ。」

「どうして助け出さないの？」

レンが責任を持ってって言ってるんだから碌な抵抗できないはずよ。」

そんなこと分かってる。

「これはフリッグに必要なことだ。

あいつも成長していくんだから。」

だから、負けるなよ。

頑張れとは言わない、負けたらアリスに助けてもらっただけだ。

ただ、フリッグが変わりたいというのなら負けるな。

『……………君はいつまで正気を保っていられるかな？』

「レン、これ本当に放っておいてもいいの？」

「……………助けるならいつでもできる。

あいつは変わりたいと言っただ。

だから、ぎりぎりまで待つ。」

本当ならフリッグの意思なんて無視して助けてやりたい。だが、それは結局俺の自己満足でしかない。

俺の妹であってほしいと俺が守らなければならぬものであって欲しいという俺の勝手な我儘を押し付けるだけだ。

『……………あれほど疑り深く、この世の何も信じようとしない風峰がそれを信じていられると思うか？』

つち、この話はアリスやミナには聞かれなくなかった。いや、ミナはすでにこの話を聞いてるのかもしれない。

ミナは乗り越えた、アリスにはあとで言うてやらないとな。

side ミナ

これは私が聞かされた話。

私はレンがいたから乗り越えられたけど、好きな人を好きでいることが苦しめているなんて普通なら受け入れられない。

まだ、子供のフリッグにこの事実は重すぎるってことくらいレンが一番わかっているはずなのに。

『……………守るべきものを疑い、恐怖しなければならぬ苦痛が。』

「レン、もう十分でしょう!!」

確かに変わりたいと言ってもこんな言葉に耐えられるほど急激に変わるわけないわ!!」

親友があんなに怖がってるのに放っておけない。

あれじゃあ本当にフリッグの心は壊れる。

「それでもだ。」

フリッグがこれからも俺と一緒にいるつもりならこれ以上のことなんていくらでもある。

いつまでも子供でいられるわけじゃないんだ。」

「っ、アリス!!!」

『アリスはお兄ちゃんが行けと言ってくれた行くよ。』

「~~~~っ、分かったわよ!!!」

見ていてやるわよ!!!

そのかわり、負けたら許さないわよ!!!」

レンだって、助けたいに決まってる。

前のレンだったら間違いなく助けてたはず。

最終的には駄目にしてしまうその場を逃れるためだけに甘やかすレンの自己防衛。

でも、今は自分を守ることじゃなくてフリッグの為に頑張ってる。

だから、私は見守ろう。

それがきつと私の役目だ。

side out

『.....愛すべき人が傷つくことがわかっていて止めないわけがないだろう。』

ああくそ、あの女、俺が聞いていること分かってんじゃないだろうな。俺がフリッグを助けに行くことで俺にフリッグの成長を諦めさせる為に。

そうならば俺はフリッグを保護すべき存在以外で見ることなんて無理だ。

天笠からすれば大喜びすることだろう。

『……………私は君のすべてを受け止めよう。』

血管がぶちきれそうだ。

ジンはよく俺にミナを預けられたな。

俺なら血管が破裂して出血死する。

『……………必要だと言ってくれたんです。』

……………やっとか。

本当に待ちくたびれたぞ。

『私はレンを信じます。』

きつとレンは私を信じてくれる。

何よりレンはそんなことで潰れるような弱い人ではありません。』

ここまで言われたら俺も負けるわけにはいかないか。

実際、天笠の言うことはかなりの的を射ている。

だが、可愛い妹がここまで言うてくれるんだ。

俺がいなくなっても強く生きていることを信じれるように俺自身も頑張らないとな。

『……………人とは君が思っている以上に脆く壊れやすいものだよ。』

そろそろ諦めろよ。

俺は絶対にお前なんか妹は渡さないからな。

『私の音如きが私の大切な人を侮辱するな。』

これならもう大丈夫だろう。
頑張ったなフリッゲ。

「アリス、もういいぞ。」

『それじゃあ、ギルドのお姉さんのところに行ってくるね。』

「ああ、アリスは大丈夫なのか？」

『アリスはそんなに弱くないよ。』

そもそもお兄ちゃんを生かそうとしている時点でお兄ちゃんを苦しめてるんだから、今更アリスは止まらないよ。』

一番年下だというのに一番しっかりしてるのはアリスかもしれないな。

『それに、お兄ちゃんを苛めてるってちょっと気持ちいし・・・』

ちよつと待て、ボソツと恐ろしいことを口にしなかったか!!
それもあの人の影響なのか!!

『だから、アリスのことは気にしないで安心して苦しんでね。
そして、ずっと一緒にいようね。』

「アリスは強いな。」

『惚れた?』

「アリスはすごいな。」

『惚れた？』

「アリスは尊敬に値するな。」

『お兄ちゃん、そろそろデレてよ。』

アリスはお姉ちゃんみたいにMじゃないだからあんまり焦らすとがぶつといつちゃうよ。』

「アリスはいつも俺の血を飲んでるだろ？」

『お兄ちゃん、恍惚方が苦しいよ。』

それともお兄ちゃん誘ってるの？』

「俺が悪かった。」

それよりも遅くならないように帰ってくるんだぞ。」

『うん、お兄ちゃんも約束忘れないでね。』

何をお願いするか相談しなきゃ。』

「待て！！」

そんなことあの人に相談するんじゃない！！」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

本気で心配になってきた。

俺、何させられるんだろっ？

今までアリスの情緒教育をやってきてもらったのは今日のこと適

任だと言わざるを得ないがアリスが変な趣味に目覚めるのは困る。

「ミナ、アリスをどうするべきなんだろうか……」

「普通、好きって言ってる女の前で他の女の話する？」

それは分かるが、アリスはみんなの妹だろう？

アリスが真つ当な大人になる為にもこれは重要なことのはずだ。

「私としてはレンが兄さん以上のシスコンにならないか心配だわ。」

いくら俺でも軟派したくらいで街中を探し回るようなことはしない。俺なら、情報を集めて的確に追い詰める。

「何を考えているか知らないけど、いや、知りたくないけど、ほどほどにしなさいよ。」

「それにしてもこれがデートでいいのか？」

妹のデートをデート中に監視するって男というか人として最低だな。うわ、言い訳のしようもないな。

「いいのよ。」

私のことを知ってもらえて、私もレンのことを知れたんだから。」

本人がいいって言うてるんだからいいんだろうがすつきりしないな。

「不満そうな顔してるわね。」

「……そうね、それじゃあキスしましょう。」

それで、この件はチャラにしてあげる。」

……仕方ないか。

「んっ。」

「それじゃあ、今日はありがとう。」

まあ、楽しいとは言えないけど、なかなか実のある日だったわ。」

くっ、こういうことをすると嫌でも女としてしてみてしまっ。

しかも、ミナの部屋でだ。

嫌でもこの後を意識させられる。

「それじゃあ、俺は帰るな。」

「あっ、私も一緒に行くわ。」

早く出ないと気が狂いそうだ。

そもそも、男を部屋に入れるなんて無防備すぎるだろう。
誘ってるって言うてるようなものだ。

まあ、実際そうなんだらうけどな。

「それじゃあ行きましようか。」

「っ、腕を組むな!!」

腕に柔らかいものが!!

「私は妹なんでしょう？」

なら、別にいいじゃない。」

くっ、いつもの仕返しのもりか。
いいだろう、そっちがそのつもりなら……

「ミナ。」

「何……きゃー!」

「ミナは女の子だから気を付けないとだめだろう。」

「え？ その、もしかして……」

やっぱり、ミナはこっじゃないとな。

「ああ。」

真っ赤な顔に潤んだ瞳、その気がなくてもその気にさせられそうだ。
少し早いが落ちをつけるか。

「ほら、ゴミンがついてるぞ。」

女の子となら身だしなみには気を付けないとな。」

「~~~~~っ、レンの馬鹿あ————!」

いつもの

「レン、仕事じゃ。」

「フリッグ、今日は何か作ってみたいものあるか？
暇だから教えてやるぞ。」

「すみません。」

今日はミナのところに行くんです。」

「レン、仕事じゃ。」

「ミナ、この前は悪かった。
何か言ってくれば聞くぞ。」

「ふんっ！！」

「レン、仕事じゃ。」

「天笠、この世界の常識を知ってて損はないだろう？
暇だから教えてやるぞ。」

「それなら、フリッグに教えてもらうから心配なくていい。」

「レン、仕事じゃ。」

「アリス、この前のお願いことは決まったか？
今なら何でも聞いてやるぞ。」

「アリスはすぐにも抱いて欲しいんだけど、フランお姉ちゃんがまだ駄目って。
だから、まだ決まってないよ。
もうちょっと待っててね。」

「レン、仕事じゃ。」

「ジン、何か手伝うことないか？
暇だから手伝わせてくれ。」

「悪い、今日からユーリアと旅行に行くんだ。」

「レン、仕事じゃ。」

「そういえば、新しい仕事を探してるんだった。
悪いがちよっと出かけてくる。」

「レン、仕事じゃ。」

「……………話を聞こう。」

フリッグがミナのところに行くってことはもうすぐ旅行ってことか。
この前のこと根に持ちすぎだぞミナ。
いい加減諦めろ天笠。

あのギルドの人、フランって名前だったんだなあ、純粹だったアリスを返せ。

相変わらずの愛妻家だなジン。

そして、当然のように仕事を持ってくるなフリユネ。

「仕事の内容じゃが、妾に言いよってくる虫ども追い払ったための恋

人の役割じゃ。」

頭が真っ白になる。

これが悟りを開くってことか？

それとも無我の境地ってやつなのか？

「フリユネ……」

「妾の美貌に地位と権力を合わせれば男が放っておかないのは分かってらぬことではないのじゃが鬱陶しくてかなわぬ。」

少々古典的ではあるがレンの存在をちらつかせれば数は減るじゃろう。」

何かが切れそうだ。

俺の死因は血管破裂による出血死になるんじゃないだろうか。

「もちろん、それだけでなくとは思っておらぬ。」

容姿も平凡で地位も権力も金も持っておらぬレンを表に出したところで納得せぬ者もあるじゃろうがそこはレンに任せる。」

どうして、毎回毎回厄介事を押し付けられて、今回も押し付けられているのに貶されてるんだ？

「公表は2日後じゃ。」

心配せずとも父上には説明済みじゃ。

レンの国ではどうかは知らぬがこの国では王であろうとも恋愛結婚は可能じゃからな。

法に触れることはない。」

OK

「てめえは！！ どうして！！ 厄介事ばかり運んでくるんだよ！！」

少しは俺の事情を気にしやがれ！！

しかも、毎回言うのが遅いんだよ！！

それに、そんなこととしてみる、俺の記憶がリセットされるわ！！」

「レンは妾の部下じゃから仕事を押し付けるのは当然じゃ。

レンの事情など妾が知ったことではない。

遅かろうとそれでもどうにかするのがレンの役目じゃ。

それに、フリッグたちにはすでに許可を取っておる。」

そんなわけが……

「フリユネはレンに手を出さないって分かっていますから。」

「ふんっ！！」

「私が拒否するわけないだろう。

むしろ、姫を選んでくれれば傷心のフリッグを癒して落とせるかもしれない。」

「アリスもお兄ちゃんを苛めたい。」

「頑張れ。」

なんてあっさり……

フリッグはともかくとして。

頼むから加減機嫌を直してくれミナ。

絶対にフリッグは渡さないからな天竺。

あつたばかりの純粹で真っ白なアリスはもう帰ってこないのか・・・
・
・
本当に親友だよなジン？

「頼んだぞ。」

「・・・いつか絶対に泣かせてやる。」

「で、詳しい話を聞かせろ。」

「うむ、概要は先ほど説明した通りなのじゃが厄介なものが数名おる。

そのほとんどが王位継承権を持つものばかりでの、妾に勝てぬとわかったのか手のひらを返したというわけじゃ。」

妥当な判断だな。

いまさら、下位の奴がどう頑張ったところでフリユネに勝てるわけがない。

それなら、フリユネのもとに下った方が甘い汁が吸える。

それに、王女となったフリユネの夫となるのなら形だけとはいえ必然的に王にもなれるしな。

「しかし、いいのか？」

確かに虫は払えるだろうが天変地異が起こっても俺はフリユネなん

かと結婚なんてしない。

つまり、最終的には別れ話も公表することになるってことだ。それはちよつとまずくないか？」

フリユネだつていつかは後継者として子を儲ける必要がある。

その相手が俺でない以上、最終的には他の男が必要になる。

それがいい評判を生むとは思えない。

「それについては心配いらぬ。

最終的にはフリッグに記憶を操作してもらつつもりじゃ。

それはあと5年は先のことになるじゃろうし、その頃には熱も冷めて皆の記憶にはあまり留まってはおらぬじゃろう。」

確かにそれなら大げさなことをしなければ矛盾は生まないだろう。

俺としてはあまりその方法は使つてほしくないんだがフリッグがやると言っているなら俺が口をはさむことじゃないか。

「となると問題はやっぱり俺か。」

「そうじゃな。

妾の部下としてかなりの功績を立ててるとはいえ貴族でもない者を紹介するとなればそれなりに波紋もあるじゃろう。」

「ちなみに、歴代の王の中で一般市民と結婚したって話はあるのか？」

「否、レンも知つての通り、この国は9つの街で成り立っており、その1つ1つが大きな力を有しておるからろう。

ほとんどが友好を深めるための政略結婚というものばかりじゃ。」

それもそうか。

この国の王といっても結局はアースガルド周辺を治めているだけで、他の街の周辺はそれぞれの街の長が治めているようなものだ。

お飾りとまでは言わないが王といってもそこまでの力を持っているというわけじゃない。

「厄介な問題だな。

フリユネの風当たりはどの位なんだ？」

「前ほど酷くはないのう。

逆に、媚び諂うものが増えておる。」

「あの偉そうな奴はまだ諦めてないよな。」

「そうじゃな。

ここぞとばかり悪評をばらまこうとするじゃろう。」

それが一番厄介なんだよな。

俺のことを知ってるってことは俺の周りのことも知ってるってことだ。

悪意ある眼で見なくても、俺の評価は複数の女を誑かしてる軽い男だろう。

フリッグとアリスは妹となってるがこの国で親族だからという理由はあまり効果もないだろうしな。

「思ったんだが、フリユネが鬱陶しいのを我慢すれば何の問題もないんじゃないのか？」

「ほう、ならば妾を狙っている者たちがこの街に来てもいいというのか？」

「うち、そういうことか。」

ミナの家はフリユネを泊めている以上、他の王子や姫どもを泊めないというわけにはいかないだろうしな。

それどころか、最悪俺の家にまで押し寄せてくるだろう。本当にどこまでも厄介な問題だ。

「表立った問題は2つだな。

1つめは、フリユネによってくる虫を追い払うこと。

2つめは、フリユネの恋人役として俺を周囲に納得させること。」

「ふむ、方法はレンに任せる。

必要なことがあれば妾に言うのじゃ。」

簡単に言ってくれるがかなり難しい。

両方の共通した問題は俺がフリユネと釣り合わないということだ。逆にこれがどうにかできればあとは簡単なんだが……

「もう公表は取り消せないのか？」

「できないことはないと思うがいい方法でも思いついたのか？」

「自分より強い奴と結婚するって言えば諦めてくれるんじゃないか？」

「いかにもその場逃れの言葉など誰も取り合ってはくれぬ。」

だよなあ。

一応俺の設定はアリスの従者ってことになってるから親交を深める

為って言えば身を挺して真祖の吸血鬼を抑えているとできなくもないが、アリスを政治の道具として使いたくないからこれは最後の手段だな。

いっそのこと、ここでフリユネと手を切るか？

アルフヘイムから追い出してしまえばこの街に来ることもないだろうし、俺に厄介事が降ってこなくなる。

「先に言っておくが妾を追い出そうとしても無駄じゃぞ。

フリッグだけでなく他の物にも借りを作っておるからのう。」

ときどき思っただが、こいつは俺の心を読んでるんじゃないか？

ポーカーフェイスは得意だから表情には出してないはずなんなんだが。

「とりあえず今日考えてみる。」

「一応、方法はあるがそれは最後の手段にしたいからな。」

「うむ、任せたぞ。」

いつもの(後書き)

・・・解決策が思いつかない。

偶然か必然か

「あつ、どうでしたか？」

「ああ、概ね俺の思い通りだ。」

もう2度とこんな体験はやりたくないな。
俺に寿命があるなら確実に10年は縮んでる。

「だが、これで準備は整った。
後は踊ってもらうだけだ。」

「なんだか、悪役っぽいセリフですね。」

しまらないなあ。

side フリュネ

「どうじゃ、レン。」

何か思いついたか？」

「厳しいな。」

今日で何も思いつかないようであれば最後の手段を使つつもりだ。」

「……そうか。」

いくらレンでも今回の件は難しかったようじゃな。

レンの言う最後の手段とやらはあまり使わせたくはなかったのじゃが、仕方あるまい。

「妾は仕事に行ってくる。」

何かあればすぐに言うのじゃぞ。」

・
・
・
・
・
・

「おはようございます。」

「今日も共に頑張りましょう。」

「うむ。」

鬱陶しい。

ついこの間まで言っていたことをそのまま聞かせてやりたいのう。とはいえそんなことを言うわけにもいかぬし、もし、アルフヘイムまで来られてしまつては最悪切り捨てられる可能性すらある。

フリッグやミナにいくら借りを作つていようとレンが本気でその気になれば妾などすぐに追い出されるじゃろう。

妾の為にもレンの為にも早く何とかしてもらわぬとまずいのう。

「そういえば、フリユネ殿はアルフヘイムに別宅があるとお聞きしましたが住心地はいかがですか？」

これはまずいのう……

「フリユネ様!！」

「すまぬ、話はまた次じゃ。」

「お急ぎ、耳に入れたいことがあります。」

「部屋で聞こう。」

「では、またの機会に。」

危なかったのう。

妾もあの生活は気に入っておるといふのに。

これほど今の立場が面倒だと思ったことはないのう。

・
・
・
・
・
・
・

「フリユネ様、先日こんなものが。」

『フリユネ・セシリア

今すぐ王位継承権を捨てる。

でなければ今晚、貴様の命を貰い受ける。』

「妾に喧嘩を売るとはずいぶん腕に自信があるようじゃな。」

文章を見る限り、送り主は同じ王位継承権を持つものか、妾に王にならなくては困る者。

心当たりが多すぎて誰とは判定できぬか。

「……それも、このタイミングで送りつけてくるということ
はレンの仕業か。」

「これと同じものが多くの者にばらまかれています。」

この話が広まるのも時間の問題かと。」

「よい、どんなものが来ようと妾が負けぬ。」

妾だけのところではないとはどういうことじゃ？

そもそも、暗殺するつもりならばいちいち脅迫状など送らぬはず。

妾を殺さずに王位継承権を捨てさせるつもりだとしても、こんなあからさまな脅迫状を広めればしばらくは護衛が増えやりにくくなる。

「フリユネ様、王がお呼びです。」

父上にまで行き届いておったか。

それも誰にも気づかれずとは余程の手練れか、内部犯か……

・
・
・
・
・
・
・

「フリユネ、脅迫状のことは知っているな。」

これが本気なのかはわからないが、しばらく護衛をつけおとなしくしておくように。」

「・・・・・・・・わかりました。」

例の件はどうするおつもりですか？」

「このような事態では仕方ない。」

安全と分かるまで目立つ行為は避けた方がいいだろう。」

くっ、これではアルフ Heim には行けぬか。

いま、アルフ Heim に行ってしまったては妾に貸しを作るうと護衛をつけようとするじゃろうし、レン達もいい気はせぬじゃろう。

「分かりました。」

用はこれだけですか？」

「フリユネよ、焦る気持ちは分かるが今は耐えよ。」

それにお前は少し働きすぎだ。

しばらく、休暇でもとっておけ。」

「・・・・・・・・失礼します。」

妾が休める場所をあそこだけじゃ。

一刻も早く犯人を特定せねば。

・・・・・・・・

「レン、脅迫状が届いた。

王位継承権を捨てねば命はないそうじゃ。」

『厄介なタイミングで来たな。

今、どういう状況だ？』

「護衛が何人も張り付いて身動きが取れぬ。

その中には他の王子や姫の使いもおるようじゃ。」

『これを機に貸しても作るうって算段か。

一応、フリッグがアリスを付けるか？』

「……この件、レンの企みではなかるうな？」

妾の勘がレンの仕業だと言っておる。

『なぜ俺がそんなことをするんだ？

もし、それを俺がやったとしてよう。

そして、その暗殺者を俺が倒してフリユネに相応しいって認めさせる、ってのは無理があるぞ。』

確かにそうじゃ、誰がどう見ても自作自演じゃ。

妾の勘違い？

しかし、相手はあのレンじゃ、今の状況がすべてレンの手の上だと
言ってもおかしくない。

『だが、不幸中の幸いとして期限が伸びてくれたのは助かる。

最後の手段は本当に使いたくないからな。』

期限を延ばすためにこんなことを？

いや、その場しのぎの為にこんなことをするような者ではない。
だとすれば……………」

『なあ、脅迫状にはなんて書かれたんだ？』

「ん？ ああ、王位継承権を捨てなければ今晚殺しに来るそうじゃ。」

『……………今の状況は？』

「それは城の警備をいつもより強くし、特に妾の部屋周辺に兵を集めておる。」

『フリユネ、今すぐそこらの兵を王のところに向かわせろ。』

「なんじゃと？」

『脅迫状の内容なんて馬鹿みたいに信じるな。
もしかしたら、フリユネに注目を集めて他の奴を狙っている可能性が高い。』

「くっ、その者、今すぐ父上のところへ迎え！！」

「は、はい。」

くっ、妾としたことがこんな単純なことに気づかぬとは。

「皆の者、この脅迫状はブラフの可能性が高い。」

一部を残し、城を巡回せよ。

残りは妾とともに父上のところへ向かう。」

・
・
・
・
・
・

「これは……」

どうやら死んではおらぬようじゃが全員気絶させられておる。
最悪の展開じゃ。

「父上!」

「うち。」

「逃がすな!」

妾が追いたいたいところじゃが、今は

「大丈夫ですか、父上。」

「まさか、あの脅迫状は囷だったとは……」

外傷は特に見当たらないところを見るとぎりぎりだったようじゃな。

「その者、父上の護衛を頼む。」

妾は先ほどの者を追う。」

気配はつかんでおる。

妾に喧嘩を売ったことを後悔させてやろう。

・
・
・
・
・
・

見つけたのはいいのじゃが人が多すぎて動きづらいことこの上ない。
どいつもこいつも手柄を上げようと必死なのはわかるのじゃがこの
ままでは……

「魔法で足を止めなさい!!」

「」「」「おお!!」「」

「馬鹿者!!」

魔法を使つては殺してしまふぞ!!」

くっ、この喧噪の中ではそう簡単には聞こえぬか。

「外に逃げたわよ!!」

「逃がすな!!」

「撃て撃て!!」

「止めぬか!！」

死ななければよいのじゃが、あんなに乱れ撃ちをしたら動きが止まった瞬間死んでしまう。

しかし、こやつらが邪魔で妾もうまく動けぬ。

「当たったわよ。

逃がさないようにもう少し弱らせなさい!！」

まずい、熱が入りすぎて冷静な判断が取れておらぬ。

「落ち着かぬか!！」

城の壁が粉々じゃがこれでようやく妾の聲が届くじゃろつ。

「いますぐ、賊の身柄を確保。

他の者はまだ城に仲間がいないか見て回るのじゃ。」

・
・
・
・
・
・
・

「遅かったようじゃな……」

死体は黒焦げて、ところどころ欠けておる。

これではどこの誰かなど判定するのは不可能じゃな。

「今日一日警戒を怠らぬよう城の警備を強化せよ。
妾は父上のところへ報告に行く。」

死人が出たということはレンの仕業という線は消える。
ということとは、これは偶然？

・
・
・
・

「その様子だとどうやら間に合ったみたいだな。」

「レンか、お主のおかげでぎりぎり間に合った。
今から父上のもとへ向かう、ついてこい。」

「分かった。」

「父上、フリユネです。」

「入れ。」

「失礼します。」

「先程は助かった。」

フリユネが気付かねば私の命はなかったらろう。」

本当に偶然なのか・・・

あれほどギリギリのタイミングで妾が助けに入るなどできすぎている。

しかし、死体がある限りレンの企みであることはありえぬ。

「いえ、妾も部下に言われ気付いたもので。」

「貴様は……」

なるほど、貴様がか。

とりあえず礼を言おう。

そして、褒美を取らせよう。

明日、謁見の間に来るように。」

「……分りました。」

・
・
・
・
・
・
・

「皆の者、昨日は皆のおかげで命を拾うことができた。

賊を討った者には褒美を取らせよう。」

「はっ、ありがたき幸せ。」

「次に、脅迫状の裏を読み取りいち早く気づいた者を紹介しよう。
レン・カザミネ、面を上げい。」

「はい。」

「お主のおかげで命を拾うことができた。
お主にも褒美を取らせよう。」

「王よ、私は褒美などいりません。」

そのかわりと言ってはなんです。聞いて欲しいことがあります。」

「なんだ？」

まさか、今言うつつもりか！！

「フリユネを私にください。」

と、鳥肌が……

気持ち悪くてかなわぬ。

……どうやら、レンも同じようじゃな。

「待つてください！！」

その男は貴族でもないただの一般人です。

それに、女癖が悪い軽い男に預けては王族の品格が落ちます。」

やはり、来たか。

まあ、レンがこの場で言うということは何かしら考えがあるのじゃろう。

……しかし、鳥肌が収まらぬ。

「侮辱しないでいただきたい。」

確かに私の周りには女性が多いのは確かです。

しかし、アリスとは主従関係を結び、フリッグとともに家族のよう

な存在です。

家族を大事にすることは悪いことでしょうか？

それに、ミナ・レグスについては私がその兄、ジン・レグスと交友関係にある為、付き合いがあるだけです。

この事実には、女癖が悪いと言えますか？」

「ぐっ、し、しかし、貴族でもない者が王族と交際するなど前代未聞だぞ！！」

「それは前例がないだけです。

この国の法には王族が一般人と交際することを禁ずることなどありません。」

なるほど、レンが軽い男という噂は覆しようがない為そう簡単には消せぬが、公の場で否定してしまえばその噂は消える。

そして、何より王である父上が認めるのならば誰も文句は言えぬ。

「静まれ。

レン・カザミネよこれまでの功績を讃え、我娘、フリユネ・セシリアとの交際を認めよう。

しかし、これにうつつを抜かすことのないようこれからも精進するようじ。

「はい、ありがとうございます。」

これで、妾に言い寄ってくるものはおらぬじやろつ。

それに、完全とは言わぬがレンのことを認めるものも出てくる。いつのまにか、すべての問題が解決されておる。

これが本当に偶然なのか？

種明かし

「レン、説明してもらおうぞ。」

「ん？ ああ、昨日のことか。」

もう隠す必要もないし別にいいか。
で、何を聞きたいんだ？」

「どこからお主の手が入っておった？」

ここは日頃のお返しと行こう

「どこからだと思う？」

「日頃の仕返しのもりか。
器の小さい男じゃ。」

説明するの止めよう、一生もやもやしたまま過ごせ。

「くだらぬプライドを刺激された程度でいちいちいじけるな。
だから小さいというのじゃ。」

「それが人に教わる態度か？」

「妾は姫で、レンは部下じゃ。」

一般論など通用せぬ。」

なんという傲慢不遜、いつそ清々しいな。

「まあいい、どこから俺の手が入ってたかだったな。それは、最初から最後まですべてだ。」

あの脅迫状だってフリッグに頼んでばら撒いたものだしな。」

「なぜ、最初に言わなかった？」

「フリユネが戸惑っているところを見る為だ。なかなか見ものだった。」

日頃俺がどれだけ悩まされてるか少しでもわからせる良い機会だったし、唯我独尊のこいつに仕返しもしたかったしな。

「そうか……。」

嫌な予感が……

「フリッグ、実は先日レンが妾をはずか「フリッグ、昨日は助かった！」「」

「それは反則だろう。」

そんなことをフリッグに言ったらどんな目にあわされるか。最近おとなしい分、爆発した時が怖い。

「レンが馬鹿なことを言うからじゃ。」

「まあ、それも半分は本当だがもう半分はフリユネに知られたらどうしても不自然なところが出てくるからな。」

フリユネには自然に動いてもらいたかったんだ。」

有能だからこそ無駄のない動きをする。
だからこそ動きが予測しやすい。

「では、あの暗殺者は……」

「あれはフリッグだ。

ちなみに王も共犯だぞ。」

事前に説明するときには2人で話した時は本気で寿命が縮むかと思っ
た。

なんだあのプレッシャー、内心冷や汗だらだらだった。

「どうやって、父上を協力させたのじゃ？」

「ムスペルヘイムの一件があっただろう。

身内内では王位継承権の剥奪で済んだんだろうが、被害者である俺
に何の処置もなかったことを利用した。」

身内の恥をばらされなくなかったら、我ながら悪党にしか聞こえな
いな。

「妾が父上のもとについたときにギリギリだったのはそのせいかな。」

「別に本気で危害を加える気はないが、本気だと見せつけるために
はあれくらいやった方が効果的だっただろう？」

「まんまと乗せられたというわけじゃな。」

「次は、フリユネが追いかけてた時だな。

その時、やけに通る声がなかったか？」

「言われてみればそうじゃな。」

妾の声は届いておらぬのに魔法で攻撃しろといった声だけは皆に伝わっておった。」

「その声はミナだ。」

種を明かすと、あの中にミナと天笠を紛れ込ませてミナの声が届くように天笠に調整してもらってたんだ。」

天笠は魔法を使えると言っても振動に関するものだけだからな。

皮切りとなる魔法を使ってもらったためにミナの力が必要だったというわけだ。

協力してもらったために俺がどれだけ苦労したか……

「後は、フリッグが外に出てからのことだがここまで言えば大体わかるだろう。」

「あの死体は偽物というわけか。」

「ご明察、あれはフリッグに作ってもらった人型を模した人形だ。とはいっても、材質は人に限りなく近いものだがな。」

だから、肉が焦げた臭いなんかで識別しようとしても無理だ。

だが、所詮は人形だから普通に見られた違和感がある。

その違和感を消すために黒焦げにしたり、体の一部を削ったりした。

「ミナの魔法を皮切りにそこにいた奴らが魔法で攻撃し始める。

そこで、ミナと天笠は空間転移で退場。

追われていたフリッグも空間転移で退場。

そして、魔法が放たれている方向にアリスが人形を持って行き黒焦げ

にしてフリユネが来る前に空間転移で退場。

それを、フリユネが見つけた、あとは知つての通りの流れだ。」

公衆の前でフリユネに告白なんて鳥肌が立ちまくって、周りに気付かれないか、そこが一番不安だった。

思い出しただけでも鳥肌が立つてくる。

やっぱり、天変地異が起きてもフリユネとは無理だな。

「まさか、本当に2日で解決するとは……」

「言っておくが、思いついたのは偶然だからな。

同じことをまたやれと言われてもできないぞ。」

今回の件だつて俺1人じゃ絶対に無理だったしな。

「そつえば、全員に力を貸してもらつたんだから礼は行つとけよ。」

「分かつておる。

妾にできることなら何でもしてやるつもりじゃ。」

それは良かった。

いくら俺が頼んだからと言ってこれ以上あいつらに貸しなんて作つたら俺の理性が保てるか分からないしな。

「そつえばあれからの反応はどうだ？」

「表面上は取り繕つておるが、大騒ぎじゃ。

なにせ、一般人を迎えるのじゃからな。」

「まあ、その内治まるだろう。」

だから、下手に刺激を与えるようなことはしないようにしないとな。

「

「分かっておる。」

しかし、よいのか？

あんな派手なことをすれば1日の記憶をすべて消す必要があるじゃろう。」

「それなら問題ない。」

記憶を消すのではなく、記憶をぼかしてもらうことにしてもらった。王が狙われていることに気付いたのはレン・カザミネじゃなくフリユネの部下。

俺が言ったことは思い出せないが、王に対してなにか言ったということだけは覚えておいてもらえば矛盾は発生しないし、言った内容は適当に言っ飛ばせばそれで終わりだ。」

アフターケアまで考える必要があるから本当に厄介だった。

だが、これで今の生活を守れるのなら苦労したかいがあるというものだ。

side フリユネ

「失礼します。」

「フリユネか、このタイミングで来るということは先日の件のことを聞いたようだな。」

「はい。」

そこれで一つ聞いておきたいことがあります。

父上はあれを制御することができますか？」

「無理だな。

我ならば即刻始末する。

あのような狂犬を従えられるものなどおるまい。」

妾も今回のことで思い知らされた。

今回は演技だったからよかったものの、あれが本気で父上を亡き者にしようとしたのならすでに父上は生きておらぬ。

先日は城にいるすべての人がレンの掌の上で踊らせられておった。

「フリユネ、悪いことは言わん。

あれとはすぐに手を切れ。

いつか、喰い殺されることになるぞ。」

「……お断りします。

あれは妾に必要な存在です。

それに、あれを制御できれば妾は父上を超えたことになる。」

今回確かめたかったのはそこじゃ。

これで、明確に父上をを超えた証を見つけることができた。

「そうか、だがもう一度だけ言っておく。

あれは我でも従えさせることはできない。

あれは狂犬の皮をかぶった化物だ。」

「それは重々承知しています。

あれには首輪でなく鎖で手綱を握っているつもりです。」

故に、その鎖を守らなければ妾の命もないじやろつ。

「ならばよい。」

「これからも期待しておるぞ。」

「はい。」

「では失礼します。」

レンがいれば間違いなく妾は王になれる。

後は妾次第、レンを従えられるかその一点じゃな。妾もまだまだ精進せねばな。

種明かし（後書き）

可能な限り論理的に組み立てましたが矛盾はないですよ？

アリスの教育方針（前書き）

久しぶりのアリスメインの話です。

アリスの教育方針

「アリスと2人で仕事するの久しぶりだな。」

「あのドラゴン退治の時以来だね。」

「今回もアリスが頑張るから後で褒めてね。」

いや、俺も半年以上戦い続けてるわけだからそこらの奴らより強い自信はあるんだぞ。

威力の高い銃も使えるようになったし、遠距離からの射撃もできるようになった。

接近戦でもある程度の武器なら一通り使えるし、アルフヘイムの中ならかなり上の実力を持つてると思う。

そりゃ、うちの女性陣に比べたら天と地との差くらいあるが……

「なあ、アリスは学校とか行きたくないのか？」

いくら戦闘に特化した才能があるとはいえまだ11歳のアリスにこういうことばかりさせたくない。

できれば年相応のことをさせてやりたい。

「アリスはお兄ちゃんと一緒にいることが一番なんだから行かない。それに学校なんて行っても学ぶことなんてないよ。」

アリスが俺たちの妹になってから既に半年、ミナの教育もほとんど終わってるから一般的な知識は一通り持つてる。

それに俺とフリッグが家事を教えて、フランからは情緒教育も受けてる。

……確かに学ぶことなんてないな。

「でもな、集団行動の中で得るものもあるんだぞ。」

「ん〜、じゃあ、お兄ちゃんが結婚してくれた行つてあげる。」

そんなにこやかに言われても……

「だって、アリスがいないときにお姉ちゃんたちの誰かと付き合ったりしてたらやだもん。」

「だから、お兄ちゃんがアリスのものになってくれたつて証をくれたら学校でもなんでも行つてあげる。」

「この国では15歳以上じゃないと結婚はできないんだぞ。」

「じゃあ、婚約で。」

「俺を犯罪者にしたいのか？」

「美少女は正義だつてフランおねえちゃんは言つてたよ。」

「アリスはまだ幼女だろ。」

「恋を知つてたらそれはもう少女だよ。」

「俺が言つてるのは内面じゃなく見た目だ。」

「合法口りつて言葉があるくらいだから見た目なんて関係ないよ。」

「アリスの口から聞きたくない言葉が……」

「アリスはちょっと目を離すとどんどん成長していくんだよ。」

「違う意味で目を離したくなるぞ。」

「お兄ちゃん、大好き。」

なんだろう、アリスとの会話が楽しい。

なんだか、誤魔化されてる感じがするが本人がここまで嫌と言っているなら誤魔化されてやるか。

・ ・ ・ ・ ・

「カザミネさん、お話があります。」

「奇遇だな、俺もあなたには言つときたいことがある。」

もはや、俺にとってこの人は宿敵だな。

アリスを変な世界に目覚めさせようとする悪魔だ。

「アリスちゃんに学校に行けと言ったそうですね。」

「アリスの情緒教育には感謝してる。」

だが、流石に見過ごせないところまで来てるからな、ここらで真っ

「当な教育を受けさせようと思つてのことだ。」

「カザミネさんは馬鹿ですか？」

確かに私の趣味をアリスちゃんに話したことはありますが、あれはアリスちゃんの性癖です。」

まさか、変態に馬鹿扱いされる時が来るとは……

「それが問題なことに気付け。」

「11歳の女の子になんてこと話してるんだ。」

「あんたと出会うまでは純真無垢だったつてのに。」

「それこそカザミネさんがアリスちゃんを強制してたんじゃないですか。」

「私はそれを解き放つてあげただけです。」

「だから、アリスにはまだ早いつて言つてるんだ。」

「こんな歳から変な趣味に目覚めて将来性格が歪んだらどうしてくれるんだ。」

「そこら辺の手加減はしています。」

「それに、アリスちゃんは頭がいいですからそんなことにはなりません。」

「アリスの頭がいいことくらい知ってる。」

「それに、家事だって完璧にこなせるんだぞ。」

「もう、俺やフリッグが指導しなくても一通りはできるようになる。」

「俺の周りはハイスペックの奴ばかりだな。」

「アリスちゃんの手料理は本当に美味しいですよね。それにすっごく可愛いですし、アリスちゃんをお嫁にもらう人は本当に運がいいです。」

「何を言ってるんだ？」

アリスを嫁になんてやるわけないだろう。」

「臆面もなくシスコン全開ですか……」

まあ、その気持ちは分からないでもありません。

どこの馬の骨ともわからない相手にアリスちゃんを預けるくらいなら私がもらいます。」

「やっぱり、あんたも天笠と同類だったか。」

言っておくがアリスはやらないぞ。」

「失礼ですね、私はどっちもいけるだけです。」

それに、アリスちゃんはカザミネさんの嫁なんですから冗談に決まってるじゃないですか。」

「確かに俺はアリスのことは好きだがそれは家族愛であって恋愛じゃない。」

ありえないと思うが俺が認められる男が現れたら罵詈雑言を浴びせて祝福してやるつもりだ。」

まあ、アリスが本当に好きな奴を連れてきたら本気で祝福してやるつもりだ。

俺の我儘でアリスを縛るつもりはないしな。

「全然祝福できてないじゃないですか。」

それにしても、アリスちゃんだけでなく他の2人からもあんなに好かれてるのに手を出さないなんて、年上好きなんですか？
それとも、男がいいとか言いませんよね？」

どうして、妹に手を出さないだけで男好きと勘違いされるんだ？
もう、何度か聞いたことあるが失礼にもほどがある。

「あなたには俺が日頃どれだけ苦勞してるか1割でもわからせてやりたい。」

俺の妹は普通の男だったら間違ひなく過ちを犯してるくらい可愛いんだぞ。」

「流石にアリスちゃんと肉体関係を結ぶのは早いのでプラトニックな関係にして欲しいですね。」

でも、どうしてもというなら私は止めませんよ。
アリスちゃんも望んでるようですし。」

「そんなに俺を犯罪者にしたいのか？
だいたい、アリスにそんな話自体まだ早い。」

「言っておきますが、私が話す前からどうすればカザミネさんを誘惑できるか聞いてきましたよ。」

おそらく、妹さんに影響されてのことだと思えます。」

確かに、あんな環境で育つたらしょうがないのかもしれない。

「とにかく、アリスちゃんは学校なんて行く必要なんてありません。必要な知識以上のことも知ってますし、ちよつとカザミネさんには過敏ですけど、それを除けば社交性も協調性も問題ありません。何より、学校なんて行ったら私と会う時間が減っちゃうじゃないで

すか。」

最後以外を除けば、確かに学校には行かなくてもいいように思えるが

「だが、アリスだって友達くらい欲しいだろ。」

「私がいるじゃないですか。」

それに、姫様に、長の娘さん、最近やってきた美少女もいますよ。」

ミナは友達というより姉って感じだし、フリユネは俺が警戒してるからアリスも一枚壁を作ってるし、天笠は来たばかりだからまだ打ち解けてない。
なにより

「俺が言いたいののは同年代の友達だ。」

アリスは意外と寂しがり屋なんだぞ。

俺が相手をしてやれる間がいいが、いつまでもってわけにはいかな
いだろ。」

どんなに頑張っても99年後には俺はもういないんだから。

「そんなの、ずっとカザミネさんが一緒にいてあげればいいじゃないですか。」

あと5年も経てばアリスちゃんは完璧な美少女ですよ。

それから結婚でもすれば万事解決じゃないですか。」

「それにはいくつか問題があるがとりあえず一番大きな問題はフリ
ツグがいる。」

今はおとなしいが、俺がちょっと知らない女と話すだけで監禁され
かけたんだぞ。

祖のフリッグに、アリスと結婚するなんて言ったらどんな目にあわされるか……」

最低でも記憶を抹消&感情操作、最悪世界崩壊だな。

「妹さんはヤンデレちゃんでしたか。

それは難しいですね。」

「フリッグがただの美少女ならまだ良かったんだが、国を一人で落とせるくらいの力を持つてるから厄介だ。」

俺の選択次第で世界が滅びるなんて怖すぎる。

「なんとというか、頑張ってください。

これがもてる男はつらいってやつですか？」

「しらん。」

「あつ、お兄ちゃん、フランお姉ちゃん。」

「どこに行ってたんだ？」

「仕事を選んでたんだよ。

それより、フランお姉ちゃんでもお兄ちゃんは渡さないよ。」

「大丈夫ですよ。

カザミネさんがあと10年若かったら話は別ですけど。」

ストライクゾーンが極端すぎるだろ。

10年も若返ったら10歳満たない子供だぞ。

「アリスはお兄ちゃん一筋だから歳の差なんて関係ないよ。
お兄ちゃんが1歳でもアリスはお兄ちゃんを好きになってるよ。」

流石にそれはまずいだろう。

一歳って、シヨタコンってレベルじゃない。

「さすがの私も1歳は無理ですね。
6歳以上なら問題ないですけど。」

この人は一度病院に連れて行くべきだな。
その内性犯罪を起こすぞ。

「相変わらず、フランお姉ちゃんは面白いね。
それじゃあ、これお願いします。」

「はい、気を付けて行ってらっしゃい。」

「うん、お兄ちゃん、行こう。」

「ああ。」

あまりこの編愛者にアリスを近づけたくないが実際見てみると本当に懐いてるし、もう少し様子を見るか。

「アリス、学校行きたいか？」

「ううん、絶対行かない。」

「そうか。」

それじゃあこの話はなかったことにするか。

賑やかな朝

「皆、次の旅先が決まったわよ。」

次の厄介事も確定だな。

今度はフリユネ絡みじゃなければいいが。

「次は、学問の街、ミズガルズです。

出発はいつも通り一週間後ですので準備しておいてください。」

ミズガルズ、説明の通り学問の街として有名でこの国で一番大きな学校や図書館がある街だ。

普通の常識を教えるような普通の学校もあれば、それぞれの専門的なことを学ぶ学校もあるから国中からいろいろな身分や種族が集まる街。

それこそ平民から王族までだ。

俺としては王族の名前が出た時点で碌な予感がしない。

「参加できないっていう人いる？」

これって任意で選べるものだったのか？

なら、俺は留守番でも……

「もちろん、レンは強制参加よ。」

まあ、こうなるだろうとは分かっていた。

「妾は今回は少々忙しいので辞退させてもらおう。」

フリユネが来ないってことは嬉しい限りなんだがこいつの忙しいが俺に降りかかってこないか不安だな。

「兄さんは旅行から帰ってこないから今回は無理ね。それ以外は全員参加ってことね。」

ジンが来ないと軟派が面倒なんだよな。

戦えば勝てるんだがどうしても見た目が頼りなさそうに見える俺じやあ虫除けにならないらしい。

別にそんなことしないで追いかかれるけどな。

「何度も旅に行ってるのか？」

「そういえばリンネは初めてでしたね。」

最初は、ミナが世界を見て回りたいということとその護衛として私たちも一緒に付いて行ってたんです。

今はそんなこと関係なく友達と旅行に行ってる感じです。」

「なるほど。」

旅先では全員で行動するのか？」

「基本的にはそうですね、私もレンとデートするということでも2人で行動したこともありますから絶対というわけはありませんよ。それに、必ずと言っていい程何か起こって最終日以外観光なんてほとんどできませんから。」

「ああ、なんとなく理解できるな」

俺を見て頷くな。

厄介事を運んでくるのはフリユネかミナだぞ。

「それでは、私とデートしよう。」

「嫌です。」

「反応が淡泊になったものだね。
会ったころはあんなに狼狽えてくれたというのに。」

「もう、リンネに脅かされることなんてありませんよ。」

「ほう……。」

天笠が凶悪な笑みを浮かべてる。

止めてもいいんだが、あとで復讐が怖いからここは様子見だな。

「それは残念だな。」

初めて会ったときにキスされたフリッグの可愛らしい顔をもう一度見たかったのに。」

「変な事言わないでください!!！」

ああ、これはもう天笠のペースだな。

俺が天笠の立場でも同じことをするだろうし、やっぱり天笠もさだな。

「キスされてことに気付かずにきよとんとした顔から、一瞬で真っ赤になり瞳には涙を浮かべ風峰の後ろに隠れていたフリッグの可愛い顔を見たいという私の願望の何が変な事なのかな？」

態々、詳細に説明して煽る。

単純なフリッグにはかなり効果的だな。
もう、真っ赤になってる。

「前にも言いましたが私はレンが好きなんです!!
だから、リンネとは付き合えませんか!!」

「こちらこそ前にも言ったはずだ。
私は障害多ければその分燃えるんだ。
それにしても、恥ずかしがっているフリッグはそそる。
今すぐにでもその綺麗な顔を快樂で歪ませたい。」

こいつ俺より酷くないか?
恍惚とした表情をしてやがる。

「そんな脅しはもう無駄ですよ。
私はもうそんな言葉に負けません。」

おお、本当に成長しているらしいが1枚どころか2枚も3枚も天笠
が上手なんだよな。

「私は脅しているつもりはないよ。
そんなことをすれば怖いお兄さんから殺されてしまうからね。
これは純粹に口説いているだけだよ。」

どんな口説き方だ。

とまあ、それは置いておいて、今、俺の中で2つの矛盾した気持ち
がせめぎ合っている。

1つは、フリッグを助けてやりたい。

まあ、これは当然と言えば当然だ。

もう1つは、天笠にフリッグを口説き落としてほしい。

俺がいなくなるまでにフリッグには俺の代わりとなる人を見つけほしい。
だから、天笠が俺の代わりになってくれるというのなら俺は見守るしかない。
とはいっても、天笠が言った通り脅すような真似をすれば俺の持てる力のすべてで破滅させるがな。

「とにかく、私はリンネとは付き合えません!!
何度でもいいますが私はレンが好きなんです!!」

ちよつと前の俺なら嘆き悲しむところだが、シスコンに目覚めてしまったからか素直に嬉しく思える。
フリッグが恋愛感情じゃなく家族愛で言ってくれているのなら抱きしめたいくらいだ。

「ふむ、それならどうやってたらデートしてくれるんだ?」

しつこいな。

ここにはアリスもいるんだし教育上控えてほしいんだが。

「どうやっててもデートなんてしません。」

「仕方ないか、風峰、先日手を貸してやったな。
その代償として私とフリッグを2人にさせる。」

「あれはあくまでフリユネの部下として依頼したんだ。
報酬はフリユネに要求するのが筋だろ。」

「っち、このシスコンが。」

最初に会った時とキャラが変わってないか？
もっとおとなしい奴だと思っていたがフリッグが絡むとここまで変わるのか。

「仕方がない、今回はフリッグの狼狽えた顔を見れたということ
我慢しよう。」

「もう諦めてください。」

ようやく終わったか。

朝から賑やかなことだ。

「あつ、お兄ちゃん、ミズガルズでデートするからね。」

どうやらまだ終わらせてくれないらしい。
それにしても狙ったようなタイミングだな。

「ちなみに、さっきのタイミングで言ったのはちょっと気が緩んだ
ところで言った方がインパクトがあるかと思ったからだよ。」

なぜ、インパクトをつける必要があるんだ？

「最近アリスの影が薄いような気がしてるからちょっとでも気を引
こうかって。」

どうして口に出していないのに会話が成立してるんだ？

「大好きなお兄ちゃんのことなら目を合わせるだけで言いたいこと
がわかるよ。」

ああ、やばいくらい可愛い
ちよつと頬を赤くしているところが一段と可愛い。

「それにしてもデートって言っても何をするんだ？」

「もう正気に戻ったの？」

もう少し、あのままでよかったのに。」

「悪戯はほどほどにな。」

「はあくい。」

デートのことなんだけど、アリスもミズガルズに行ったことないから2人で歩き回るだけだから心配しなくていいよ。」

あんまりアリスに任せっぱなしってのもあれだから少しは調べておくか。

「レン、最近随分アリスと仲良くないですか？」

「……スイッチはいつた？」

「気のせいだろ。」

俺とアリスはいつもこんなものだぞ。」

「目を合わせただけで会話できるほど仲がいい状態がいつも通りですか……」

くっ、成長して少しは大人になったかと思ったが油断した。
こいつのヤンデレはいまだ健在だな。

「デートだったらフリッグも何度かやっただろう？
ちよつと前はミナともやったし、いまだにやっていないのはアリス
だけだぞ。」

「話を逸らさないください。」

今はデートの話ではなく、日常的にどうしてそんなに仲がいいのか
を聞きたいんです。

これ以上誤魔化すようであれば私が何をするか分かってますよね。」

やばい、前ならこれで誤魔化せはすなのに、成長したのは心だけ
じゃないのか。

「とりあえず監禁してゆっくり調教だよね、お姉ちゃん。」

「アリス？」

「大好きなのはお姉ちゃんも一緒だよ。」

だから、目を合わせればお姉ちゃんが言いたいことわかるよ。」

「そうですか。」

私もアリスのこと大好きですよ。」

どうにかなったのか？

「あと、ミナお姉ちゃんのことも分かるよ。」

他の人はちよつとわからないけど。」

「レン、アリスを引き取りたいんだけど。」

「駄目だ。」

まさか、アリスに助けられるとは思わなかったが本当に助かった。それにしてもアリスの笑顔の威力はすさまじいな。

「お兄ちゃん、お姉ちゃん、そろそろ仕事に行こう。」

「そうですね。」

「今日も頑張りましょう。」

「それじゃあ、私も仕事に行ってくる。」

「妾も行くとするか。」

「私も仕事先を見つけたんでそっちに行ってくる。」

天笠の奴、最近何かやってると思ったたら仕事見つけたのか。俺も探さないとなあ。

「上手くいってよかったね。」

「本当に助かった。」

「それにしても読心術でも使えるのか？」

「うん、フランお姉ちゃんから教えてもらったんだ。それに、人心掌握術もちよっとだけ。」

あの方はアリスをどうしたいんだ？

その内、催眠術でも使えるようになりそうだな。

「それは魔眼を使えば簡単な事ならできるよ。」

「頼むから心を読まないでくれ。」

「お兄ちゃんがそう言うならそうする。」

でも、アリスの読心術は表面上だけだからお姉ちゃんと違ってあんまり深いところまでは読めないんだよ。」

それでも十分凄い。

アリスがますます小悪魔化していく。

それすらも可愛いと思える俺は重傷だな……

ミスガルス その？ 好きの理由（前書き）

遅くなって済みません。

ミスガルス その？ 好きの理由

「それにしても賑わってるな。」

「年に一度のお祭りだからね。」

この一週間はミスガルスにある学校全部が何かしらやってるのよ。」

特別な時期に来るということは特別な何かが起きやすい。

そして、トラブルメイカーのミナがいるこの状況、マイナス思考をしたくはないが予感じゃなくて確信めいて面倒なことが起きる気がする。

「学校の中には料理専門もあれば騎士なる為に戦闘訓練を専門とするものもあるし、学生とはいえ教師はその道のプロフェッショナルだからそこそこ期待はできるわよ。」

「それにしてもやけに詳しいな。」

「ちよっと前までここの学校に通ってたのよ。」

もっとも、すぐに教えてもらうことなんてなくなって止めちゃったけどね。」

最近忘れがちだがミナはかなりの天才だ。

自分でいろいろ役に立つものを開発してる、俺たちが使っている通信機や車も全部皆のお手製だ。

そして、集団生活の中でそんな異端の存在が意味するのは……

「今日はもう日が暮れるし観光は明日からね。」

「そうだな。」

「アリスとお兄ちゃんは明日別行動だからね。」

「分かってる。」

学園祭が開催されているなら退屈はしないだろう。しかし、心配なのは

「ミナ、フリッグと天笠から目を離さないでくれよ。」

「心配性ね。」

いくらリンネでも嫌がるフリッグをどうこうするはずないでしょう。

「

それはそうなんだが……

「分かったわよ。」

でも、シスコンたいがいにしないと犯罪よ。」

「家族を大切に思うことが犯罪なわけないだろう。」

俺がシスコンなのは認めるが、あくまで家族を大切に思うことの延長線だ。

妹に欲情するシスコンは犯罪だろうがな。

「もういいわ、だんだんフリッグが可哀想に思えてきたわね。」

「言うておくが、俺の中ではミナも妹だからな。」

「それも分かってるわよ。
でも、私はまだ半々ってところでしょ？」

相変わらず人の心を読んだような発言。
しかも、的外れじゃないってところが怖い。

「いまさらだけど、あれだけの美少女に迫られて妹扱いできるって
いろいろ心配なってくるわ。」

「何度でも言うが俺は男好きじゃないぞ。」

「そうじゃなければ困るわよ。」

「……………私ってどうしてレンのこと好きになっただけ？」

それを俺に聞くか？

「確かに、何度も助けてもらったし、私を初めて負かした相手だから頭はいいわよ。」

それに、努力家でいつも頑張ってるし、家事なんかも普通にできる。
口ではなんだかんだ言っても私たちのこと大切にしてくれる……………

これって、好きになっても仕方ないわよね？」

いや、だから俺に聞かれても……………

「フリッグはレンのことどうして好きになったの？」

「レンは私が神だと知っても態度を全く変えなくて、どんな時でも私を私として扱ってくれるところですね。」

それに、私が勝手に落ち込んでても励ましてくれますし……………

もう、好きですレン！！
結婚してください！！」

往来で何を言ってるんだ。

どうやら、まだ常識がなってるらしい。

「アリスは？」

「アリスはお兄ちゃんの全部が好きだよ。

アリスがお兄ちゃんを好きになることは生まれた時から決まってるって言われても信じられるもん。」

だから、往来で言うことじゃないだろ。

流石に恥ずかしくなってきた。

「明日は観光するんだろ？

今日は早く休むぞ。」

「流石は風峰、内心は照れているのに微塵も表情に出さないとはいな

」

こいつ、俺に恨みでもあるのか？

「レンでも照れることなんてあるのね。」

「ふっ、そんなに睨むな。」

ポーカーフェイスには自信がある。

そして、ミナが気付かなくて天笠が気付くということとは

「気付いたか？」

いくら表情に出なくとも心音や血流は乱れるからな。それを私に隠し通せるはずがない。」

ここに俺のプライバシーは存在しないのか……

「天笠、俺は体を張ってお前を止めたよな？」

「ああ、そのことには感謝しているよ。」

だが、目の前でフリッグがあんなことを言い出すんだ。おとなしく八つ当たりを受ける。」

理不尽だ……

・
・
・
・
・
・
・

「それじゃあ、行ってきます。」

「レン、手を出してはいけませんよ。」

「こんな人が多いところでやったら捕まるわ。」

もはや定番となりつつなるやり取りだな。

「アリスはお兄ちゃんが望むなら別にいいよ。」

「アリスはそんなに俺を犯罪者にしたいのか？」

公衆わいせつ罪と幼児虐待で言い訳のしようもなくお縄に付くな。

「お兄ちゃんはその気になってくれるなら犯罪者になった後助けてあげるから心配しないでいいよ。」

どこまで本気なのやら。

「それじゃあ俺たちは行ってくる。」

フリッグ、天笠に襲われそうになったらすぐに逃げるんだぞ。」

「それは昨日の仕返しのもりか？」

「どうだろうな？」

「はいはい、そこまで。」

リンネ、私たちも行くわよ。」

「……必ずフリッグは私が奪い取る。」

「私の意思を無視しないでください!!」

行ったか。

天笠の能力には何か対策を立ておく必要があるな。

魔法に関しては完全に素人だし、フリッグにでも聞いてみるか。

「それじゃあ、アリスたちも行こう。」

「そうだな、一応聞くが行ってみたいところはあるか？」

「アリスはお兄ちゃんと一緒ならどこでもいいよ。」

予想通りの答え。

アリスもそう分かってて答えたな。

「それじゃあ、適当にぶらつくか。」

「うん、お兄ちゃん手、繋ぐ。」

「いいぞ。」

「ふふっ」

いつ見てもアリスの笑顔は癒される。
やっぱりアリスはこうでないとな。

・
・
・
・
・

「いろいろやってるな。」

目につくだけでも飲食店だけで10店舗、他には占いに劇、本や学生作の魔法を使った道具の販売、一つ一つ見て回ってたら時間が無くなりそうだ。

「アリス、何か興味があるものあったか？」

「お兄ちゃんの手を握ってるだけでもう満足だよ。」

いつも、血を吸うために抱き着いてるのに手を握るだけで満足とは分からないものだな。

「分からないって顔してるね、お兄ちゃん。」

「そりゃな、アリスのことなんでも分かるわけじゃない。」

アリスは俺のこと何でも知ってるって言いそうだな。

いや、アリスに問わずフリッグやミナなんかも言っつきそうだ。

最近は、フリッグもだんだん鋭くなってきたから隠し事一つもやすやすとできなくなってきた。

俺のプライバシーは何処にあるのやら。

「それじゃあ教えてあげるね。」

アリスはお兄ちゃんを独占できていれば抱きついてても手を繋いでても同じことなんだよ。

正直に言っちゃうと血を吸うために抱き着いてるんじゃないかと、抱きつくために血を吸ってるんだよ。

血を吸ってる間はお兄ちゃんを独占できてる感じがするから。」

「それじゃあ、アリスは血を吸わなくても生きていけるのか？」

「他の吸血鬼はどうか知らないけど、少なくともアリスは平気だよ。会った頃は血が必要だったけど、最近は血がなくても普通の食事で問題ないみたい。」

それは、真祖だからか？

アリス以外の真祖なんてあったことないからはっきりとは分からないか。

「お兄ちゃんの血は美味しいからデザートみたいなものだよ。

だから、吸っちゃダメって言わないでね。」

「別にいくら吸われても死にはしないからアリスが吸いたって言うなら構わないが、もうちょっと視野を広げた方がいいんじゃないか？」

俺に懐いてくれてるのは嬉しいが、あまりにも周りを見なさすぎる気がする。

これじゃあ、俺がいなくなった時が心配だ。

「そんな必要はないよ。」

だって、お兄ちゃんがずっと傍にいてくれればそれでいいもん。」

「だが、俺は100年後にはいなくなってるかもしれないぞ。」

「それはないよ。」

ぞつとする笑みつてのはこれのことを言うんだな。

アリスが考えていることが全く分からない。

「……………どうしてそう言い切れるんだ？」

「ん〜、お兄ちゃんはアリスのこと可愛いっていつも言ってくれてるよね。」

「ああ、それがどうした？」

「でもね、本当のアリスは怖いよ。」

お姉ちゃんのことヤンデレっていつも言ってるけどそれはアリスにこそ当てはまる言葉だって思うもん。」

side アリス

うーん、ちょっとは表情に出るかと思ったんだけどなかなか出ないなあ。

「アリスのどこがヤンデレなんだ？」

少なくとも俺の眼にはそうは映らないぞ。」

「それはアリスが隠してるからだよ。」

でも、いつまでも子ども扱いされるのはちょっと嫌だからアリスの本当をちよつと教えてあげるね。」

アリスも好きって気持ちがかここまで怖いものだなんて最近になって知ってたんだよ。

お姉ちゃんみたいに感情を爆発させるようなものじゃなくてもっと理性的で凶悪な感情。

「ねえ、お兄ちゃん、アリスがまともにしやべることができたころに2人で仕事に行ったことがあったよね。」

あのとき、お兄ちゃんが死ねばアリスも死ぬって言って、お兄ちゃんはそれを駄目って言ったけど、ここまで力をつければ今更主従の契約なんて今すぐ破棄できるんだよ。

今は、お兄ちゃんとの繋がりだから破棄しないけど。」

お兄ちゃんはアリスの命より大事で、お兄ちゃんがくれたものは命の次に大事な宝物。

お兄ちゃんが愛おしくて愛おしくて仕方がない。

「そうはいつでも、俺は死ぬぞ。」

100年後に死ぬるといふ希望があつてこそ俺は今正気を保つてる。それが潰されればどうなるか分からないわけじゃないだろう?」

「それくらいのこと諦められるほど安いものじゃないよ。」

お姉ちゃんたちは優しいから、死に続けようとするお兄ちゃんを見たら死なせてあげるかもしれないけど、アリスはそれをずっと見続けられるよ。

お兄ちゃんの気が変わるまでずっと見てあげられる。

なんだったら、アリスが殺し続けてもいいよ。」

アリスはお兄ちゃんを否定しない。

どんなことも肯定して受け入れる。

ただ一つの例外、アリス以外を選ぶこと以外は。

「それに、アリスがこう言ったらどうする?」

お兄ちゃんが死ぬたびに、他の人を殺す。

お兄ちゃんには一番効く言葉だよね。

見ず知らずの誰かに迷惑をかけたくないお兄ちゃんがそう言われて死ぬる?」

「人を殺してはいけないことくらい知ってるだろう。」

「お兄ちゃんがいるから人を人として見れるんだよ。」

お兄ちゃんがいなかったらただの餌に過ぎないよ。

それくらい、アリスはお兄ちゃんに依存してる。」

もう、お兄ちゃんがいなければまとも生きていない。
アリスは愛の奴隷だね。

「そんなことをすれば、フリッグに殺されるぞ。」

「それでもいいよ。」

それはきつとお兄ちゃんにの心に楔を打ち込むから。

アリスが死んだらお兄ちゃんは誰も好きになれるまま死んじゃうよね。

死んだ後もお兄ちゃんを独占できるなら本望だよ。」

最初は怖かった自分の感情も今では当然だと思える。

フランお姉ちゃんからは距離を置いた方がいいと言われたけど、今更そんなことをしても無駄だって分かる。

「大好きだよ、お兄ちゃん。」

「ああ、俺も好きだぞ。」

え？

「それじゃあ、そろそろ行くか。」

「さっきの話聞いてなかったの？」

アリスが怖くないの？」

「どうして俺がアリスを怖がるんだ？」

確かに言ってることは物騒だが要約すると俺のことが好きだって言

ってるだけだろ。」

こんなはずじゃなかったのに。

反応が予想外すぎて思考が読めない。

「もしかして、アリスが言ったこと信じてない？
なら、見せしめにだれか殺してあげるよ。」

「いや、アリスが言うてことは一つを除いて本当のことだろう。
俺が嘘を見抜くことが得意だっけと忘れたか？」

ううう、やっぱりお兄ちゃんには敵わないなあ

ミスガルス その？ 嘘

「確認のために聞いておくけどアリスがついた嘘ってどれのこと？」

「子供扱いされるのが嫌だから、だろ？」

あれだけのことを平然と言えるアリスがそんな幼稚な理由で心の内を話したりはしない。

それがアリスにとって有利に働くなら話は別だが、俺を脅してもマインナスにしかならないからな。

「む、そこまで分かってるならアリスの思惑通りに動いてくれもいいのに。」

「俺がアリスを怯えれば少しは幻滅できるかもしれないってか？俺が言うのもなんだがたぶん無理だぞ。」

大方、自分の感情が俺にとって危険だと思い、少しでも俺に対する好意をなくそうとしたんだろう。

「何事もやってみないと分からないよ。」

「やってみないと分からない程アリスは馬鹿じゃないだろ？」

「それはそうだけど・・・」

まったく、フリッグが幼すぎるとしたらアリスは大人すぎる。2人を合わせて半分にすればちょうどいいぐらいだろう。

「でも、お兄ちゃんは怖くないの？」

アリスはさっき言ったこと実行できるよ。

今は、お兄ちゃんを大切にしたい気持ちがあるから今日みたいに自分を抑制しようとするけど、そんな気持ちはすぐに消えちゃうよ。」

「それなら、その気持ちが消えないように頑張れ。」

「お兄ちゃん、自分が言ってること分かってる？」

それって、とつても残酷なこと言ってるよ。」

さっきの俺の言葉を訳すると俺のことを諦めると言ってるようなものだ。

確かに俺のことを殺したいほど慕っているアリスにこれほど残酷な言葉はないだろう。

「早とちりするな、俺が言いたいのは両方の気持ちを両立させると言ってるんだ。」

「簡単に言ってくれるけど、それができないから脅したんだよ。」

お兄ちゃんがお姉ちゃんたちと仲良くしてるとお兄ちゃんを殺してアリスだけのものにしたかって思っちゃうもん。」

これがアリス以外だったらどんなホラーよりも怖いだろう。

恐ろしいことを当たり前のように本人に言うんだからな。

「アリスならできると信じてる。」

「それ、嘘だよ。」

お兄ちゃんが何かを信じるなんてできるわけないもん。

それができれば死のうだなんておもわないでしょ？」

この程度の嘘は簡単に見抜かれるか。
普通の奴だったら完璧に騙せるはずなんだが。

「ねえ、お兄ちゃん、そんな嘘でアリスを納得させようとしてるならミスガルスにいる人、皆殺しにするよ。」

「あんまり殺気をまき散らすな。
皆怯えてるだろう。」

「どこまでも余裕だね。
本当に殺してもいいんだよ。」

いつの間にか俺たちの周りに誰もいなくなつたな。
まあ、これだけの殺気を間近で感じたらだれつたて逃げ出すだろう。

「アリスは俺を死なせたくないんだよな。」

「それはそうだよ。
一番はお兄ちゃんがアリスを選んでくれることだもん。
お兄ちゃんを殺したいと思うのはアリス以外を選ぶときだけだよ。」

「なら、アリスは俺に信じさせるんだろ？
俺が言った嘘を本当にするんだろ？」

「……………はあ、お兄ちゃんって詐欺師に向いてるよ。」

「そう言つな。」

こんなことを言うのは家族だけだ。
だから、アリス、俺を信じさせてくれ。

その為にも、自分の気持ちを制御してくれ。」

「これだけやって結局丸め込まれちゃうんだね。」

お兄ちゃんにそんなこと言われたら頑張るしかないよ。」

これは俺も簡単に死なせてくれそうにないな。

すこしずつ納得させないと100年経っても死ねない。

「そのかわりと言っちゃなんだが、今まで好きになりすぎないよう
に我慢してたところもあるんだろ？」

その分、甘えてきてもいいんだぞ。

アリスはまだ子供なんだから。」

「そんなこと言っているの？」

本当に甘えちゃうよ？

お姉ちゃんが嫉妬して怒っても離れないよ？」

「前言撤回、ほどほどに甘えてきてくれ。」

「ふふっ、お兄ちゃんらしいね。」

ようやく笑ってくれたか。

やっぱり、アリスはあんな物騒な殺気をまき散らすんじゃないよって笑っている顔が似合う。

「じゃあ、勝負だね。」

アリスがお兄ちゃんを信じさせるか。」

「俺がアリスを納得させるか。」

「絶対負けないよ。」

「俺も簡単には負けないさ。」

俺が負けたときはアリスは最高の女になってるんだろう。
それを見たくないと言えは嘘になるな。

「お兄ちゃん、キスしよ。」

まあ、デートだしキスくらいならいいか。
いままで、我慢してきたアリスへのご褒美の意味も込めて。

side アリス

「お兄ちゃん、ちょっとトイレ行ってくるからここで待ってて。」

「ああ、気をつけるんだぞ。」

「うん。」

・
・
・
・
・
・

「~~~~~」

やばいよ、にやにやが止まんないよ。

こんな緩んだ顔、お兄ちゃんには見せられない。

「あんなの反則だよ。」

だから、アリスみたいな危ないのに好かれちゃうのに。」

ただでさえ、お兄ちゃんは変な人を惹きつけやすいのに、今の調子じゃあまたライバルが増えちゃうよ。

お姉さんもお姉ちゃんがいなかったら危なかったんだろっなあ。

「お嬢ちゃん、こんなところに一人でいたら知らないお兄さんに連れて行かれちゃうよ。」

「まっ、連れて行くの俺たちなんだけどな。」

ちようどいいところに

「アリス、今すごく機嫌がいいから付き合ってあげる。」

「それはいいところに来たもんだ。」

「それじゃあ行こうか。」

「うん。」

・
・
・
・
・

「ば、ばけもの……」

「やっぱり、お兄ちゃんじゃないと何とも思えないや。」

飛び散ってる血もただの汚れにしか見えないし、虐めても全然楽しくない。

お兄ちゃんならすっごく興奮すんだろうなあ。

「それじゃあね、ちゃんと通報しておいてあげるから命は助かるはずだよ。」

これに懲りたらもうこんなことはしないようにね。」

やっぱり、初めて人を殺すならそれはお兄ちゃんがいいな。お兄ちゃんにはアリスの全部の初めてになってもらいたい。

「そのためにも頑張らないとね。」

そろそろ戻らないと、お兄ちゃんも心配してるだろうし。

ああ、愛しい愛しいお兄ちゃん。

殺したいほど大好きだよ。

side out

ん、なんだか騒々しいな。

何かあったのか？

「ただいま、どうかしたの？」

「やけに騒々しいと思ってな。」

武装した連中が向かってたようだから何かあったのかと思ったんだ。

「これだけのお祭りだから羽目を外した人が暴れたりしたんじゃないの？」

「それもそうだな。」

「駄目だな、何かあるとすぐに悪い方向に結び付けてしまう。」

「そろそろ腹減ったな。」

「アリスは何か食べたいものあるか？」

「ん、食べやすいものがないな。」

「それじゃあ、麺類にするか。」

「これだけの人がいる中で血を吸わせるわけにもいかないしな。」

「それにしても、随分ご機嫌だな。」

「それはお兄ちゃんとキスできたからだよ。」

「普段は滅多にできないもん。」

「そりゃ、普通は兄妹でキスなんてしないだろう。」

「それを抜いてもフリッグが怖い。」

「アリスがどれだけ物騒なことを言っても怖くないんだが、フリッグが言くと怖いんだよな。」

「ねえ、お兄ちゃん、あれってお姉ちゃんたちじゃない？」

「本当だな。」

「何をやってるんだ？」

フリッグたちの周りにはやけに人だかりができてる。
何かやったのは間違いないだろう。

「あつ、レン。」

「今度はいったい何をやったんだ？」

「どうして私に言うのよ！！」

それは日ごろの行いを顧みて自分の胸に聞いて欲しい。

「で、実際のところどうしたんだ？」

学生の自治体か何だか知らないが明らかに一般人じゃないのが数人。
やっぱり何かやらかしやがったか。

「だから、私じゃないって言ってるでしょ！！
今回はリンネがやったのよ。」

『今回は』ということは一応毎回やってる自覚はあるんだな。
まあ、それも俺の為なんだから何ともいいづらいんだが。

「ええつと、一応止めたんですよ。」

「フリッグに触れようとしたからな。
当然の報いを受けてもらったただけだ。」

ああ、成程。

大体の状況は呑み込めた。

「相手の容体は？」

せめて殺しだけはしてないでくれよ。

「心配せずとも意識を奪っただけだ。」

「それがやりすぎなのよ！！」

大方、天笠が切れて派手にやらかしたんだろう。

普段は冷静な奴なのにフリッグが絡むと途端に切れやすくなるからな。

「話を戻してもよろしいでしょうか。」

一応、正当防衛ということにしておきますが今後は我々を呼んでいただければ対処しますので暴力沙汰は控えるようお願いします。」

「迷惑をかけてすみません。」

どうやら丸く収まったようだな。

初日から厄介事に巻き込まれるのは勘弁してほしい。

「レン、すみませんが一緒に付いてきてもらっていいですか。」

私が言ってもリンネが止まりそうにないんです。」

俺は別にいいんだが

「どうする、アリス？」

「ん……別によいよ。」

もう十分満足できたから。」

「本当ですか!!」

ありがとうございます。」

「ふうん、満足ね・・・。」

「他意はないぞ。」

「まあ、いいわ。」

私もリンネの扱いには手を焼いてたところだし。」

「そういうわけでおとなしく貰うぞ。」

「うち、そのかわりフリッグに変な虫を寄せ付けるなよ。」

最初にあった頃の天笠とはもはや別人だな。

どうして、色恋沙汰になるとうちの女性陣はこつも暴力的になるのやら。

「それじゃあ、まともに観光できる日は今日が最後かもしれないからめいっぱい楽しむわよ。」

「縁起でもないこと言つな。」

たまには、何事もなく終わらないものか・・・

ミスガルス その？ 嘘（後書き）

アリスが小悪魔からヤンデレにジョブチェンジしました。

フリッグとは違うタイプのヤンデレですが作者的にはアリスのヤンデレが怖いです。

現実にアリスのような人がいたら腰抜かしますね。

ミスガルス その？ 痲癩

「……………はあ。」

朝目が覚めてここまで憂鬱な気分させられるとは。

今日何か起きるのは間違いないだろうが、何より予測できないというところが怖い。

予測ができれば対策の取りようもないからな。

一応、いくつか起こりそうなことを予想して準備はしてきてるんだがトラブルメイカーのミナに常識が通じるとは思えない。

現に、最初のアースガルドでは王族とことを構えることになるし、ニヴルヘイムではせっかく何事もなかったと思ったのに余計なことするし、言い出したらきりがないな。

だが、フリユネがいなければ王族との問題に絡まれることはほぼないはずだ。

顔は割れてるはずだが下手なことをすれば自分の首を絞めることくらいいい加減理解してるだろう。

つまり、何か起きてもそう大きな問題にはなりにくい……………はずだ。

むしろ、こんな自警団が見回ってる学園祭の中でどうやって大きな問題に発展するか聞いてみたい。

よし、理論武装終了。

・
・
・
・
・

「あら、もつと憂鬱そうな顔してくると思ったのに思ったより普通ね。」

「その原因の一端が言っているいい言葉か？」

まあ、今回はちゃんとした自警団もいるんだ、そうそう大きな問題には発展しないはずだ。」

「しないって言いきらないところがレンらしいわね。でも、ここにはレンがいるのよ。」

面白くないはずがないわ。」

「むしろ、俺がいれば事は小さく済むだろ。」

ひっかきまわしてるのはミナかフリユネだ。」

実際ミナとフリユネがいなかったら何も起こってないんじゃないか？

「まあ、そういうことにはしておいてあげるわ。」

「ああ、それはそうとして、そっちの人は？」

目を逸らしていたかった……..
なにせ、昨日見た自警団だ。

「朝早く申し訳ありません。」

ミズガルズ学連、自警団隊長のクルス・ミラノと申します。」

早速理論武装が砕け散りそうだ。

挨拶だけで聞きたくない言葉がいくつも……

「実は折り入って頼みがありまして尋ねさせてもらっただんですが

よろしいでしょうか？」

「だ「もちろんいいわよ。」……」

「そんなに見つめないでよ。照れちゃうじゃない。」

いつもの仕返しのもりか？

それならもっと冗談が効く時にしてくれ。

態々、隊長を名乗る奴が朝から一般の観光客である俺たちに頼みごとを持ってくるんだぞ。

絶対に碌な事じゃない。

「ありがとうございます。」

では、「ちよっと待て。」なんてしょうか？」

「クルスとか言ったな。」

頼みがあると言ったが、自警団というからには大なり小なり危険を伴うことだろう？

そんな危険があるものをただの観光客に頼むきか？

さらにいえば、俺以外は全員女だぞ。」

こうは言ってるが、この面子で性別なんて関係ないけどな。

むしろ、女性陣が強すぎる。

「それは重々承知です。」

ですが、そちらの黒髪の方は昨日の騒ぎで並みの男より遥かに強い。そして、そちらの少女も昨日、男たち数人を倒したと部下から報告が来ています。

なにより、ミナ・レグスさんがいらっしやるということでも多少の危

険ならば問題ないと判断しました。」

アリスが何をしたか知らないが、天笠同様、まあいいだろう。問題はミナ、お前はいつたい何をやったんだ……

「あら、もう3年も前のことなのにまだ私のこと知ってる人がいるんだ。」

「あなたはこの街の伝説となっておりますから。」

編入試験で全教科満点、編入初日からすべての授業を受け持っていた先生方を論破し、1週間後には独自の魔法論理を作りだし不可能と思われていた魔法陣の再利用を成し遂げ、1月後にはその名を知らぬ者なしと言われ、半年後には突如この街を去っていき、ミスガルスが始まったの天才と謳われてますよ。」

「ああ、そういうえばそんなこともやったわね。我ながらあのころは若かったわ。」

ミナならそれくらいできそうだがやりたい放題やってると言えば今の方が酷いな。

まったく、いつになったら大人になってくれるのやら。

「何か言いたそうね？」

「大人と子供の境界線について考えてただけだ。」

「遠まわしに馬鹿にしてるわよね。」

「そう思うんならそうなんだろ。」

実際馬鹿にしてるしな。

「……………覚えときなさいよ。」

「そんなに見つめるな、照れるだろ。」

「……………っ、表に出なさい!!」

アリスとの会話は面白いし、フリッグは安心するが、からかって楽しいと言えはミナだな。

簡単に表情に出るし見ていて楽しい。

これがフリッグだと危険だし、アリスは素で返されるだろうしな。

「レン、話が進まないなのでその辺にしておいてください。」

おお、正直やりすぎてフリッグが切れるかと思ったがこの反応。兄として嬉しい限りだ。

「分かっていると思いますが、後でお話がありますよ。」

……………人生そう上手くいかないか。

「で、話つてのはなんだ？」

「先日、長が亡くなり、新しい長が就任したのですがその長が傍若無人といいますが、突然すべての学園の学費を上げたり、税を上げたりとミズガルズに住む人に負担をかけ始めたんです。

ミズガルズに住んでいる者はほとんどが学生で、中には街からお金を借りて学校に通ってる者もいます。

なので、それついて抗議したいのですが個人で雇っている兵士がい

て、門前払いにされるんです。

そこで、貴方にはその兵士を押さえつけてほしいんです。その間に私たちが長と対談し何とかするつもりです。」

どこの世界でも学生は大変だな。

この街じゃあバイトも少ないだろうが

「ミナ、この件は断る。」

「……………どうして、私がレンの言うことを聞かなきゃいけないの?」

「ちよつと考えればわかるだろ?

この件は今までとは違う。」

今までは、巻き込まれたのがほとんどだったし、それでも軋轢を生まないようにうまく立ち回ってきた。

こちらから行動を起こした時も、相手は犯罪者だ。

基本的に後腐れがないようなものばかり。

だが今回は話が違う。

確かに、横暴とも思えるがそれは必要なことかもしれないしこの街に住む人にとって重要な問題だろう。

だが、それは犯罪というわけじゃないし、そんな街の問題に他の街の長の娘であり部外者のミナが関わったとなれば後に響かないわけがない。

「ふん、それじゃあ私だけでやるからいいわよ。」

「ミナ!」

「っ、知らない。」

からかうタイミングを間違ったか。

「フリッグ、ミナを頼む。

俺が言っても無駄だろう。」

「分かりました。

ミナが行動を起こした時はどうしますか？」

「基本は俺が指示を出すつもりだが、ないときは天笠に任せる。」

「私は行くと言った覚えはないが？」

「フリッグが言ってお前が行かない理由がないだろう？」

「利用されているみたいで癪だが仕方ないか。」

はあ、また面倒な事に……

「お兄ちゃんはどうするつもりなの？」

「アリスはさっきの会話でおかしいと思うところはなかったか？」

「あ、やっぱり、お兄ちゃんもそう思ってたんだ。

たぶん、お姉さんも気づいてるよ。」

天笠なら上手く動けるだろう。

「きな臭くなってきたな。」

俺とアリスはそのあたりを調べるか。」

「うん、またお兄ちゃんと二人だね。」

「今度は、暴れるなよ。」

「あはは・・・、ばれてたんだ？」

「かすかに血の匂いがしたからな。」

ここに来るまでは俺の血は飲んでないし狭いところで暴れたりでもしたんだろっ？」

半年も戦ってたらそういうことにも敏感になるらしい。

「だって、お兄ちゃんが嬉しいこと言ってくれて機嫌が良くて、ちよんどそんなときに付き合ってたと言われたから付き合ってたあげただけだよ。」

それは不憫な。

もう少しタイミングが良かったらもう少ししましたっただろうに。

まあ、アリスに手を出そうとしたんなら仕方ないだろう。
自業自得だな。

「それじゃあ、行くか。」

「うん。」

ミスガルス その？ 調査（前書き）

総合評価2000p突破。

読んでくれる皆様に感謝を

ミスガルス その？ 調査

side ミナ

・・・やっちゃった。

少し頭が冷えたおかげで自分がどれだけまずいことをやってしまったか理解できた。

他の街の問題にこの街の学生でもない私が関わっていきなり、私の立場上でもいいことなんてない。

「落ち着いたなら戻りましょう。」

常識的に考えたなら今すぐ話を断って、レンに謝るんだろっけどあんな啖呵切った手前顔を合わせずらい。

「謝ればレンだって許してくれますよ。」

だから戻りましょう。」

それは分かってる。

レンは絶対に許してくれる。

だからこそ、決意が鈍る。

自分の発言に責任を持たず、レンに頼りっぱなしのお荷物になりたくない。

「ごめん、フリッグ、ちょっとした間私に付き合ってくれない？」

それなら、レンも安心できるでしょうから。」

「意地っ張りですね、ミナは。」

分かりました、でも、後できちんと謝るんですよ。」

「分かってるわよ。」

上手く立ち回って、事が済んだら謝ろう。

side out

「どうだった？」

「何人かに聞いてみたけど学費なんか上がるのは本当みたいだよ。」

「こつちも同じだ。」

そのことについての不満もあるようだな。」

とりあえず裏はとれたが、やはりあれが気になる。

それに、確証はないがクルスは嘘をついている。

あくまで俺の勘で裏付けるものは何もないがあその発言で信憑性は皆無というわけじゃなさそうだ。

「聞き込みで得られる情報はこんなものか。」

「それにしても賑やかだよな。」

こんなに人が多いところは初めてだよ。」

「ミスガルスは学費以外での収入は難しいだろうからな。」

今こそ稼ぎ時ってやつなんだろう。

それに、研究機関なんかもあるらしいし金なんていくらあっても足りないんじゃないか？」

「…………お兄ちゃん、もう分かったの？」

「証拠もなにもないただの仮説だけだな。どうして、分かった？」

「お兄ちゃんのことなら何でも分かるよ。」

それに、アリスのことを誘導するように情報を与えてたみたいだから。」

「それじゃあ、アリスは分かったか？」

「それは、これだけヒントを貰ったら分かるよ。後は裏付けだね。」

これは、姫様かな？」

「あいつの手は借りたくないんだが、可愛い妹の為だ、仕方ない。まあ、世話が焼ける分そこが可愛いんだがな。」

押し付けられたばかりだから、たまにはこっちが利用しないと。とはいえ、あまり使いすぎたらその分こき使われるだろうから本当は使いたくないんだよな……………」

「ねえ、お兄ちゃん……………」

……………やけに空気が重いな、それに気温が一気に下がったような気がする。」

「アリスと2人の時に他の人、それもお兄ちゃんに好意を寄せてる女の子のことを褒めるのはちょっとデリカシーがないんじゃない？」

「わ、わるかった。
だから、落ち着こうな。」

「お兄ちゃんは鋭いくせに、こういうことには疎いんだから。
いままでは、いい子にしてたけどお兄ちゃんが我慢しなくていいっ
て言ったんだから次は許さないからね。」

次に同じことを繰り返した時にはどんな目に合うことやら……

「アリスは噴水が見たいなあ。」

お兄ちゃんの喉を裂いて吹き出る血を浴びながらお兄ちゃんの血を
飲んでみたいなあ。」

本気で気を付けよう。

死なないからこそ、延々と痛い目を見続けることになる。

しかし、やることがフリッグ以上にやばい。

さすがにちよっと引くわ。

「アリス、もうちよっとかわいい趣味は持てないのか？」

「お兄ちゃんを想ってこそのことなのに。」

でも、お兄ちゃんがそう言うなら考えてみるね。」

もうちよっと、年相応の趣味は持てないのか。

たとえば、本だったり、料理だったり、今のアリスは90度くらい
方向性を間違ってる。

流石に、人形を使って遊ぶって年じゃないんだろっが、それはかな
り癒されるだろうな。

「とりあえず連絡入れるか。」

忙しいらしいからつながるかはわからないが

『ん、なんじゃ？』

滅茶苦茶不機嫌そうな声。

どうやらタイミングは最悪のようだな。

「少し聞きたいことがあるんだが、今いいか？」

『手短にな。』

「それじゃあ……」

・
・
・
・
・
・
・

「やっぱりか。」

『今、まさにその問題で悩まされておる真つ最中じゃ。ミズガルズはその煽りもあって厳しいじゃろうな。』

これで俺の仮説の信憑性は上がった。

だが、これはまた面倒な事に巻き込まれたな……

『まったく、無能なら無能らしく黙ってればいいものの、さらに上への報告なしにやっていたようじゃから救いようがないわ。』

「そいつの処分は？」

『上手く逃れられるじやろう。』

流石にしばらくは満足に動けぬじやろうがな。』

「分かった。」

もしかしたら、そっちの問題も解決できるかもしれない。」

『本当か!?!』

「まあ、決めるのはミナだけだな。」

『そんなものレンが言えば済む話じやろう。』

「どうして、俺がそこまでする必要があるんだ。」

俺はあくまでミナを助けるために動くだけだ。」

『このシスコンめ……………』

まあ、よい。

期待はしておるぞ。』

可能性はどちらかといえば低い。

なんだかんだで、ミナもある程度は俺のことを気にしてくれるだろうから目立つ行動はとらない可能性が高いからな。

「どうだったの？」

「予想通りだ。」

とはいっても、問題の根本的解決はできそうにないな。」

「それはそうだよ。」

お姉ちゃんにだって無理だと思うよ。」

フリッグは正直何でもありだから、裏ワザを使えばどうとでもできると思うが。

「結局はミナ次第か……」

フリッグが戻ってきないから大丈夫だろう。」

最悪、フリッグがいなくてもミナにはフリッグお手製のお守りがあるし、空間転移で逃げようと思えば逃げることもできるだろう。

「ねえ、お兄ちゃん、どうやってミナお姉ちゃんを追いこむつもりなのかな？」

「いくつか手を打ってるだろう。」

その一つがこれだな。」

さつきから尾行されてるし、もし計画が失敗した場合には力づくってわけか。

俺たちとミナが分かれたのは嬉しい誤算だろうから、今のうちに俺たちを人質にでもしておこうという算段だろう。

「まあ、一番の決め手はミナをこの件に関わっていると言い逃れできないようにすることだと思うがな。」

「それって、もうアウトじゃないの？」

「このまま何もしなかったらな。」

とりあえず俺たちは見張りを捕まえて吐かせるか。

アリス、俺には3人しか見つけられなかったが何人いる？」

「6人だよ。」

お兄ちゃんもまだまだだね。」

そりゃあ、スペックの差がありすぎるから仕方ないだろう。

「それじゃあ、半分は頼む。」

「半分でいいの？」

アリスがやった方が早く終わるよ。」

「たまには恰好つけさせてくれ。」

戦闘面では全く役に立ててないからな。

たまには、対人戦もやっとかないといざという時に慣れてませんでしたじゃ通用しない。

「それって、アリスにアピールしてるってこと？」

そんなことしないでアリスはいつでも準備はできてるのに。」

何の準備だ、とは聞けないな。

聞いたら泥沼にはまりそうだ。

「俺の経験値稼ぎの為に半分で我慢してくれ。」

「はい。」

それじゃあ行くか。

ミスガルス その？ 不審な点

これで3人。

意外とたいしたことなかったな。

「お兄ちゃんも強くなったね。」

そりゃあ、とつくに終わってるか。

「いつから見てたんだ？」

「最初の1人の時からだよ。

せつかくお兄ちゃんが戦うところ見えるんだもん。
ぱぱっと終わらせてきちゃった。」

俺が1人倒すまでに3人とは実力の差がありすぎてどれくらい
の差があるのかすら分からない。

「とりあえず情報を聞きたいですか。」

「簡単に話してくれるかな？」

「それは大丈夫だろう。」

何せ、こいつらは所詮学生だ。

やりようはいくらでもある。」

本気で命のやり取りをしたことがないのならアリスの殺気をぶつけ
てやれば簡単に吐いてくれるだろう。

「結局、私たちに何をして欲しいの？」

「私たちの邪魔をしようとする私兵たちを少しの間抑えつけてほしいんです。」

「なので、実際に働いてもらいたいのはそっちの御2人になります。」
聞く限り怪しいところはないように思えますが、私じゃ考えたって分からないですよね。

レンが許可してくれれば思考を読んで何を考えてるかなんてすぐわかるんですけど、絶対に許可してくれないでしょうし。
ここは言われた通り、リンネに従いましょう。」

「リンネ、どうします？」

「私個人としてなら断るべきだな。」

あの男には不審な点がいくつかある。
だが、私たちが断ったところで今のミナを一人にしてはそっちの方が危険だ。

だから、裏で動いてるだろう風峰に任せ、私たちはミナを見守る為にもここは受けておくべきだろう。」

不審な点なんてありました？

この街で知らない人はいないほど有名なミナに付いている私達が普通じゃないと思うのは当然のことでしょうし、それに期待するのもおかしい話ではないような気がします。

「フリッグ、例えばの話だ。」

そうだな、この世界において姫の名を知らない者はいないだろう？

だが、その顔はどうやって知ることができる？」

「それは写真か何かで撮っておけばいいんじゃないんですか？」

「そう、それが可能な世界ならそれで問題ない。

だが、私を知る限りこの世界ではそんな便利なものは存在しない。ならば、なぜ3年も前にこの街を去ったミナの顔を知ってる者がいる？

さらに言うならば、当時のミナはまだ成長期の真っ最中だ。

当然容姿だっただけで変化するだろう。

それを見ただけでミナを識別することは可能だと思うか？」

言われてみればおかしい話ですね。

確かに、この街に来てからミナが来ているのに誰もそれを騒ぎ立てることもありませんでした。

リンネが暴れた時も周囲の注目を集めたのに誰もミナに目を向けることはありませんでしたし。

「つまり、どうということなんですか？」

「ここから先は情報が足りない。

予想はできるが確証は持てない、今頃風峰が裏を取ってるだろう。私たちは風峰が来るまで時間を稼いでおけば問題なはずだ。」

皆、頭良すぎですよ。

レンは気付いているでしょうし、ミナも冷静だったら気付いてるでしょう。

後はアリスですが、どうなんでしょう？

「それではお願いできますか。」

考え直しては……くれませんよね。
まったく、レンがミナのことをお荷物だなんて思うわけないというのに。

嘆きたいことですが一番信頼を置いていると言えばミナだと思うんですよね。

私やアリスは少し感情表現が激しいですから、レンのことになるとちよつとだけ見境が無くなったりします。

だからと言うわけだけではないと思いますけど、レンが関わったりするときはミナに相談することも多いんですよね。

「ミナ。」

「……………ごめん。」

「謝る相手を間違ってますよ。」

「これは私の我儘だから無理に付き合ってくれなくてもいいのよ。」

「私はレンに言われたからミナに付いてるわけじゃありませんよ。」

私にとつてもミナは大切な親友です。

レンの言いつけはできるだけ守りたいと思いますが、手に負えないと判断した場合は私が無理矢理どうにかしましょう。

「ありがとう。」

結局止められませんでしたか。

後は頼みましたよ、レン。

「こら、少しやりすぎだぞ。」

「お兄ちゃんの前だから張り切っちゃって。」

思わず許してやりたくなる可愛さだが全員気絶させてしまったては情報聞き出せない。

「そつえばアリスは読心術が使えるんだよな？」

それで、何とかできないのか？」

「あれは、相手の反応と質問に対する答えを合わせて相手の考えを推測してるだけなんだよ。」

だから、できないことはないけど流石に気絶してる相手には使えないよ。」

そろそろ、向こうも動くころだろう。

早いとこ聞きださないとまずいな。

「とりあえず起こさないと話ならないんだが・・・」

気絶してる奴をどうやって起こそう。

「アリスに任せて、えい」

「じぶっ・・・」

いや、それはないだろう・・・

「起きたよ。」

「……まあいいか。」

「ちょっと聞きたいことがあるんだが。」

・
・
・
・
・
・
・

「……助かった。」

「手荒な真似をしてすまなかったな。」

「いえ、こちらこそ不躰な事をしてすみませんでした。」

「これで聞きたいことは聞けたし、あの様子なら証言もしてくれるだろう。」

「後はタイミングだな。」

「ねえ、お兄ちゃんって新しい仕事探してるんだよね？」

「うん？」

「まあ、一応だな。」

「いろいろ試したりはしてるんだがこれといったものは見つからない。器用貧乏の悲しいところだな。」

「お兄ちゃん、詐欺師になれば？
アリスと一緒にいれば絶対に成功するよ。」

確かに、アリスみたいな子供と一緒にいれば警戒心が薄れるし、いざとなった時に守ってもらえるな。

「いやいや、どうしてそうなる。」

俺が探してるのは真つ当な仕事だ。」

「だって、なにさっきの？」

起きたすぐはアリスに怯えてたのに帰るときは完全にこっちの味方になってくれてたよ。

詐欺師以上にお兄ちゃんに合う職業なんてないよ。」

「詐欺師は嘘をついて騙すものだが、俺は嘘なんてついてないだろ
う？」

俺が言ったのは可能性があるとかかもしれないとか、曖昧な言葉しか言っていない。

「その言葉が詐欺師を匂わせてるよ……」

「だが、ミナが協力してくれれば本当のことだぞ。」

「まあ、いいや。」

「……こうやってアリスたちも誤魔化されてきたんだなあ。」

最後の方は聞こえなかったがとても失礼なことを言われた気がする。

「さて、それじゃあ行くか。」

「もうちょっとお兄ちゃんと2人でいたかったなあ。」

不謹慎極まりない言葉だが藪蛇にはなりたくないからスルーしておくか。

「意地悪……」

聞こえない聞こえない。

side ミナ

「釘を刺しておくけど私が協力したことは誰にも言わないという約束は忘れないでね。」

「はい、では行ってきます。」

これはちょっとまずいわね。
フリッグとリンネなら相手に気付かれることなく倒せるでしょうけど……

「彼は中に入った？」

「はい、数人見張りがいましたが私とリンネで気絶させました。もちろん姿は見られてませんよ。」

「そう……」

結局、最後はレンに頼るしかないわね。

「どこに行くつもりですか？」

「フリッグ、悪いけどレンを連れてきて。

私はちょっとやる事ができたから。」

こんなことやったらまたレンに怒られるかもしれないけど、私の失敗を全部レンに押し付けるわけにはいかないしね。

・
・
・
・
・
・

「これは、これは、レグスの者がこのような場に何の用ですか？」

「白々しい、どうせ私がいることくらい知ってたんでしょ？」

「はて、何のことでしょうか？」

これで1つめ。

「そいつ、いえ、学連と繋がってたんでしょ？」

私を嵌めるためには随分お粗末なものだけだね。」

「私のような凡人には天才の言っていることは理解できませんな。」

「あくまでとぼけるつもりなのかしら？」

「とぼけるも何も私には心当たりがない。」

後はレンが来るまでの時間稼ぎね。

「そう、それじゃあ、聞いておきたいんだけどミスガルスはアースガルドの支援が減らされた今、どうやって財政を維持していくつもりなのかしら？」

アルフヘイムは特に国から補助を受けることなんてなかったから被害は少ないけど、この街は研究、学費や必要な道具、いろいろなもの揃えるために国から支援されている。

だけど、アースガルドで何かあったかは知らないけどその支援を一時的に抑えるとの公表があった。

研究が進み、新しい技術でも発見できればそれを基にどうにかできるんでしょけど、そんな話は聞いてない。

そんな状態でこの街を維持するなんて学費を上げたところで焼け石に水のはず。

「この街が欲しいのは私の知識と技術なんでしょ？」

自分で言うのもなんだけど、魔法を使った道具に関してはこの世界で最高の知識と技術を持つてる。

その私をこの街に縛り付けることで、この街を維持していくつもりだったんでしょ？」

「………素晴らしい推論だ。

確かに、筋は通っていますが証拠がない。

それにしても、この街を救う方法にそんな手段があるとは流石ですな。」

「……私が聞いたかったことはあなたが私がこの街に
いることを知らないってことと、あなたが学連との繋がりを否定することよ。」

「どつやら、そう鈍っていたわけじゃないらしいな。」

「私を誰だと思ってるのよ?」

「そりゃあ、俺の可愛い妹だろ?」

「ふん、そういうところが気に入らないのよ。」

「……あとは任せたわよ、レン。」

「ああ、それじゃあ終わりにしようか。」

ミスガルス その？ 詐欺師への第一歩

「どなたですか？」

「ミナの兄貴分でも思ってくれればいい。

ここに来たのは俺の妹が面倒な事になってるみたいだったから助けに来たんだ。」

「助ける、とは言いますが、こちらの問題に干渉してきたのはそちらのほうからですよ。」

まあ、そうくるよな。

さっき自分が言った言葉がどれほどの意味を持つか身をもって知れ。

「それじゃあ、いくつか質問に答えてもらおうか。

まず1つ目、クルス、お前なぜミナを知っているんだ？」

「この街にいて、その名を知らない者はいないと言ったはずですよ。」

「確かにそうだ、俺も聞いた回ったがミナの名前を知らない奴はいなかった。

だがな、ミナの顔を知ってる奴もいなかったんだ。

それなのに、どうしてお前はミナの顔を知っているんだ？」

「そ、それは偶然知っていただけ。」

苦しい言い訳だがそれを言われるとこっちもこれ以上は何も言えない。

あくまで、なぜ知っていたかという話だがな。

「そうか、俺はてつきりそいつが新しい長に就任した時の顔見せの場で、アルフヘイムの代表として来ていたミナを見ていたそいつから教えてもらったとばかり思っていたんだが、違ったようだな。」

「っー!」

どうやら当たりのようだな。

つまり、こいつはミナの顔を知っていなかった。

とは言え、それを白状してはくれないだろう。

まあ、白状させるんだがな。

「なら、アリスが誰だかくらいわかるよな?」

「なに?」

「あんたがミナを目撃できた場所といえばミズガルズしかありえない。

それ以外でミナとあんたの接点なんてないからな。

なら、ミズガルズにいる間、常に傍にいたアリスのことくらい知ってるよな?」

これはもちろんブラフ。

だが、ミナの顔を知らないということはミナがどんな行動をとっているかも知らないということ。

そんなやつが突然こんな質問をされて答えられるはずがない。

「そ、それは……」

「どうした?」

アリスはミスガルスに来るのは初めてだぞ。
なのに、どうして悩んでるんだ？」

「なっ!？」

これで、ミナの顔を知らないことを証明したようなものだ。
それにしてもみるみる顔が青くなってる。

まあ、あれだけゆさぶりをかけられた後のブラフなんてよほど場馴
れしておかないと見抜けないだろうな。

「お兄ちゃん、嘘ついたからもう詐欺師だよね？」

「これはミナを助けるために仕方なくだ。
詐欺師は自分の為に騙す職業だぞ。」

「誰かの為って言う言葉はね、自分のやりたいことを正当化させる
ために使う言葉だってフランお姉ちゃんが言ってたよ。」

また、あの人は余計なことを……

「話を戻そうか。」

「あ、逃げた。」

やっぱり、あの人とは良く話し合おう。
アリスを抑えようとしてくれたのは助かるが、余計な知識をつけら
れたら厄介だ。

「さて、さっきのやり取りで偶然会ったというのは嘘だよな。
なら、どこでミナの顔を知った？」

「それは私が教えたんですよ。」

「うち、やっぱり素通りというわけにはいかないか。」

「それは、学連との繋がりを認めるってことか？」

「奇な事を言いますね。」

私は、この街の長です。

当然、学連との繋がりはありますよ。

もともと、今回の件は学連の独断ですがね。」

疑わしきは罰せずか。

クルスからの告白を取ればそれで終わりだったんだけどな。

「彼が彼女を知っているのは私が長になった時に教えたからですよ。彼女ほどの天才はいませんからね、知っていて損はないと思います。」

確かに学連の自警団というくらいだから、そんな重要な場所にいた可能性は高い。

おそらく、嘘だろうけどな。

だが、それを証明できない限り否定することもできない。なら、別の方向から攻めるだけだ。

「あくまでこの件について学連との関係を否定するんだな？」

「必要があれば何度でも言いますよ。」

これで俺の勝ちだな。

「あ、お兄ちゃんが凄く悪い人の顔してる。」

「可哀想に。」

いちいち茶々入れるな。

「そうか、それじゃあこの件はクルスの独断ってわけだな？」

「学連の間違いでは？」

「いや、学連のほうには確認を取った。

そんなことは企んでいないそうだ。」

正確には何かあるとは分かっていたが概要までは知らず、クルスからは街を救うためとしか聞いてなかったそうだ。

ここで、長が学連と関わっていないという言葉が効いてくる。

「それは、勇気のあることだと思いますがそれがどうかしましたか？」

「もちろんあるさ。」

なにせ、俺はこの件をもみ消すつもりだからな。

学連という集団よりクルスという個人の方が楽だろう？」

「……そんなことができるんでも？」

「できないと思うか？」

ミナがこの場にいることを知っているのはあんたら2人だけだ。なら、片方さえ押さえてしまえば証拠のなくなる。

ちなみに言っておくと、俺には個人的に王族に山ほど借りを作ってるからな、この程度の頼みなら二つ返事で聞いてくれるだろうよ。それに、アルフヘイムからも圧力をかけられる。それを、ただの一学生に耐えられるか？」

それも、街からの保護もない。

嫌でも首を縦に振らされるだろう。

それに、ここまで来てしまえばミナが関わったかどうかなんて関係ないだろう。」

もし、失敗しても王族の誰かに罪をなすり擦り付ければ問題ない。

悪いとは思うがミナには代えられないからな。

「そんなことをすればただでは済みませんよ？」

「それはこつちのセリフだ。

いい加減、非を認めないというなら俺はあんたを長の座から引きずり落とすこともできるんだ。」

「そんなことが「できるんだよ。」」

「この街は八割以上は学生だ。

そして、その学生が運営している学連、その影響力はこの街すべてに及ぶ。

俺はその学連からの協力を得られるんだぞ？

さらに、アースガルド、アルフヘイム、三つの街から糾弾される。

長について間もないあんたを助けるために三つもの街を敵に回そうなんて酔狂なところもないはずだ。」

「ぐっ……」

チエツクメイトだ。

「クルス、それはお前もだ。

このまま黙っていれば、学連どころかこの街すら追放される。俺が頼めばお前の家族を人質にだってとれる。」

「うっ・・・」

「そうならない平和的解決は簡単だ。

今回の件はあんたらが仕組んだことだと白状してしまえばいい。もちろん、白状したところでどうなるわけでもない。

昨日と同じ日常が繰り返されるだけだ。」

袋路地に追い詰めて逃げ道を作ってやれば長の方はともかくクルスはすぐにでも飛びつくだろう。

我ながら詐欺師のような手口だ。

「よっな、じゃなくてそのものだよ。」

「レンのシスコンって兄さん以上よね。」

どうして空気を壊すようなことを言うんだ。

あと少しなんだからもう少し黙ってるよ。

「・・・認めます。」

「なにをだ？」

「私と長がレグスさんを利用しようとしていたことをです。」

「そうか、これに懲りたらこんなことはしないことだな。」

「一応、学連の要望に応じておくか。」

これで、フリユネの問題も解決の足掛かりができるだろう。

「でだ、どうするミナ?」

「どうするって、何が?」

「こいつらのやったことは確かに正しいとは言えないが、それでも学生に負担をかけないようやったことだ。」

この問題はミナが少し手を貸せば解決する。

ちなみに、俺はどっちでもいいがな。」

「……そうね、私を嵌めようとしたことは許せないけど、一応、私もこの学生だったんだし少しくらい手を貸してあげるわ。」

「ほ、本当ですか!!」

「そのかわり、私の名前を出さないこと。」

これを守るならだけどね。」

「分かりました。」

どうか、よろしくお願いします。」

これで一件落着。

・
・
・

・ ・ ・

「そういえば、どうやって学連を騙したの？」

「騙したとは人聞きが悪いな。

俺はただ、あいつらの企みを説明して、それに伴う利益とリスクを説明してやって、それより、アースガルド、アルフヘイムとの繋がりがあり、尚且つミナと親しい間からである俺に協力した方がこの街に為になるんじゃないかって説得しただけだ。」

「・・・詐欺師だ」

アリスはどうしても俺を詐欺師にしたいんだろうか？
俺をどんな目で見ていいのか気になるぞ。

「さて、ミナ。」

パンツ

「えっ？」

「今回の件、関わらなければそれ終わりだったはずだ。
それくらい、ミナなら分かったはずだろう。」

やっぱり、悪いことをした後には怒ってやらないとな。
叱ってやるのも俺の役目だ。

「…………ごめんなさい。」

「まったく、心配をかけるな。」

「だって、レンのお荷物になりたくなかっただもん。」

予想はしてたが久しぶりに来たな。

「俺はこれでもミナを頼ってるつもりだ。

それに妹を守るのは兄の務めだ。」

あんまり手がかからないってのも寂しいんだから、少しくらい迷惑かけてもいいんだ。」

「レン…………」

あ、これはやばいな。

「さて、明日には帰るんだから今日はしっかりとみて回るか。」

「あ…………」

頼むからそんな寂しそうな顔をするな。

無性にかまってやりたくなる。

「ミナ、行くぞ。」

「うん。」

手を握ってやるくらいなら大丈夫…………とは言えないかもしれないがあんな顔をされて放っておけるわけがない。

フリッグとアリスもそこは理解してくれるだろう。
暴走するかどうかは別としてだが。

「レン、ありがとう。」

やっと笑ってくれた。

これを見たなら多少の罰くらいは覚悟するか。

ミスガルス その？ 詐欺師への第一歩（後書き）

この後のレンがどんな目にあつたかは想像にお任せします。

軟禁

いつかやられるだろうとは思っていたが、ついに来たか……
簡単に今の状況を説明しよう。

ミズガルズから帰ってきた後、フリッグに呼ばれ部屋に行った瞬間、
意識を奪われて部屋の中に閉じ込められた。

ドアはもちろん窓も開かないし壊れない、通信機も通じない。
つまり、外部と完全に隔離された軟禁状態だ。

監禁じゃないだけまだ、救いがあるのかもしれない。

「あ、起きてたんですか。」

「ここから出せと言っても聞かないよな？」

「そのあたりの話はご飯を食べながらにしましょう。」

こんな行動に出るくらいだから相当きてるのかと思ったがやけに冷
静だ。

それに、普通に調理をできたということは全員説得済みとみるべき
か。

「で、どうして俺はこんな目に合ってるんだ？」

「私は前からずっと言ったことですよ？」

レンは私以外を好きになっちゃいけないんです。

それなのに、最近ではミナやアリスにばかり構って私にはあんまり
構ってくれないじゃないですか。

だから、閉じ込めたんです。」

相変わらず滅茶苦茶な言い分だし、なにが『だから』だ、意味が分からない。

「あ、もちろん襲ったりはしませんよ。

そういう約束で皆には許可をもらってるので。

もちろん、レンからなら大丈夫ですよ。」

とりあえず貞操の危機は免れているようだ。

そう長く閉じ込められるわけじゃないだろうから、これなら大丈夫か。

「それと、この部屋の時間の流れは外と比べると十分の一くらいです。ゆっくりできますよ。」

・・・そうきたか。

十分の一ということここで10時間経って、外では1時間。

俺が部屋に閉じ込められて気を失った時がちょうど12時だったはず。

それから気を失っていた時間を5時間とすると、外は12時半くらいか。

どういう約束をしているか知らないが、少なくとも明日の朝には解放するはず。

つまり、残り18時間程度。

この部屋に換算すると180時間、7日と半日か・・・

「1週間もレンと2人きりなんて幸せです。

いっぱい、いちゃいちゃしましょうね。」

冗談じゃない。

1週間もこいつ2人きりだと。

部屋だって特別広いというわけじゃないってのにこんなところに長くいたら気が狂って何をしてしまうか分かったもんじゃない。さっさと説得して脱出しなれば。

「1週間と言ったが、その間の食事とかはどうするんだ？」

食事だけでなく風呂やトイレだってある。

不老不死の体も万能じゃないな。

「それについても心配りません。

ご飯は1週間分作って時間を止めた空間に保存してますから、食べたい時に取り出せば温かいまま食べられます。

お風呂やトイレなんかはその歪と繋げてます。」

最低限のことは考えてるようだな。

「なら「ストップです。」」

「レンにしゃべらせてるといつの間にか騙されちゃいそうですからこれ以上の質問は許しません。」

流石に学習してきてるか。

これがこんな状況じゃなければ成長を喜んでやりたいが現状では悪い方向にしか働かないな。

「それじゃあ、最後に一ついいか？」

「どうぞ。」

「1週間、何をするつもりなんだ？」

「何も決めてませんよ。」

私は、レンと一緒にいられればそれでいいんですから。」

「じゃあ、読書だ。」

やることがないときはこれだろう。

暇も潰せて、知識も増える。

「却下です。」

もっと2人でできることにしましょう。」

そう言われても、広くない部屋の中でできることなんて限られてる。それも同じことを1週間もやり続けたら流石に飽きるだろう。

「それじゃあ、レンのことを聞かせてください。」

レンのことなら大体知ってるつもりですけど、前の世界でのことは聞いたことありませんでしたし。」

前の世界のことねえ。

両親が事故死した後、親戚の家に預けられたこと以外は普通……

・とはいないかもしれないが、ありふれたものだと思うから話しても面白くないと思うが。」

「それはいいが、どんなことを聞きたいんだ？」

「それじゃあ、彼女はいましたか？」

「いなかったな。」

友達は数人いたと言えはいたんだがどいつもこいつも変わり者ばっ

かりだから、普通の奴からは敬遠されていたのかもしれない。」

その中でも特に酷かったのが、暇だからという理由で生徒を人質に立て籠もって休みを増やせとか馬鹿な事交渉しやがった。

もちろん、取り押さえられて警察に連れていかれたんだが、つるんでた奴の中にどう言う訳か圧力をかけられる奴がいて、揉み消された。

我ながらとんでもない奴らとつるんでいたものだ。

「それじゃあ、レンも、その、初めてなんですよね……」

「ん、ああ、そうだな……」

「……どうして目を逸らすんですか？」

自分の胸に聞いてみる。

経験あるとか言ったらこの場で襲うだろ。

「レン、怒りませんから正直に話してください。」

それなら、この窒息しそうな空気をどうにかしろ。

俺じゃなかったら気絶してるぞ。

「わ、分かったから落ち着け。」

「………どうなんですか。」

「正直に言つと、ある……」

弁解の為に言っておくが俺が迫ったわけじゃないからな。

それを察してくれると助かるんだが

「レンがそんな俗物だったなんて……」

そりゃ、彼女がいなくて経験あると言ったら風俗とかだと思っつのは普通か。

だが、これはついてるかもしれない。

勝手に勘違いして幻滅してくれるのなら一番厄介だったフリッグが諦めてくれるかもしれない。

「やはり、ここは私がレンを受け止めるしかありません。」

そっちな……

「勘違いするな。」

確かに、経験はあるがあれは襲われてのことだ。」

「誰ですか、そんな羨ましいことしたのは!!」

名前だしたら殺しに行くなんてことはないよな？

ありそうだから名前を出したくない。

「聞いてどうするつもりだ？」

フリッグどうやってもすでに起こったことは代えられないだろう？

それに、そいつは向こうの世界にいるんだからもう会うことはないだろうから聞いても無駄だぞ。」

あいつが本当に異世界というだけで会えないとは言い切れないけどな。

世界間の移動なんて普通にやってのけそうだな。

「それはそうですけど……」

「それじゃあこの話は終わりだ。」

「1つ聞かせてください。」

その襲った娘に気があるわけじゃないんですよね。」

「それだけは絶対はない。」

あいつに向ける感情は妹以上の感情はありえない。

それはあいつも同じだろう。

あれだって、ただの気まぐれだったみたいだしな。

「それならいいです。」

そのかわり次にレンが抱くのは私ですからね!!」

「それはどうだろうな？」

今のところフリッグを抱きたいなんて微塵も思わない。

最近妹として大事にしたい気持ちが強すぎてフリッグを女として見れないしな。

それはアリスや、ミナも同じだ。

ムスペルヘイムじゃ水着を見ただけで揺らいたが、今なら裸を見て揺らがない自信がある。

今も軟禁されてはいるが妹の我儘程度にしか思えないしな。

流石に監禁されたら洒落にならないが……

「そもそも、抱くって意味わかってるのか？」

「それくらい知ってます!!」
私とレンがその……え、えっちなことを……」

いつも、手を出すとか抱くとか言ってるが、フリッグはかなり初心なんだよな。

ミナも同じだろうが、アリスは違うだろう。

アリスなら平然と言ってくるし、行為にも躊躇なんてないだろうな。

「と、とにかく、レンがだ、抱いていいのは私だけなんです!!」

そんな顔を真っ赤にして叫ばなくてもいいだろうに。

まあ、無理に背伸びしようとしてるところも可愛いんだがな。

「なあ、もし俺がフリッグを好きになっても死ぬことを諦められなかったら、俺と一緒に死んでくれるか？」

何を聞いてるんだ俺は。

「悪い、聞かなかったことに「嫌です。」」

「私は絶対に諦めません。」

レンと一緒にずっと生きるんです。」

「……そうか。」

本当に成長した。

会ったばかりのころは泣いて縋って、子供の我儘のようにしか言えなかったこいつが、今では正面から立ち向かおうとしている。

「強くなったな。」

「レンと約束しましたから。」

なら、俺もあの時の約束を果たせるよう強くなりたいとな。

新婚生活？

「ごちそうさま。」

この部屋に閉じ込められて大体6時間くらい。時計が存在しないというか時間の法則が違うから役に立たない。それは置いておいて、空腹を覚えたから食事となった。いつも、食ってるんだが美味い。バリエーションはともかく味に関してはもう教えるどころか教えてほしいくらいだ。

「お粗末さまでした。美味しかったですか。」

「ああ、いつも通り美味かった。」

「ああ、この夫婦っぽい会話……いいです。」

悦に入ってる奴は放っておくとして、これから何をするか？

「レン、そろそろ寝ませんか？」

意外と早く戻ってきたな。

しかし、気絶してたからそこまで眠くはない。

まあ、軽い昼寝くらいならいいか。

「そうだな。」

それじゃあ、お休み。」

床で寝ることになるが、何とかなるだろう。

「何やってるんですか？」

「何って、寝ようとしてるんだが。」

「レンも一緒にベッドで寝ましょうよ。」

まあ、そう来るとは思っていた。

だから、その問いに対する答えも用意済みだ。

「却下だ。」

「いいじゃないですか。」

「一緒に寝ましょうよ。」

いくら妹だからと言って俺の理性にも限度がある。

俺だって年頃の男だし、目の前に飛び切りの美少女が無防備に
いて心が揺らがないわけがない。

2、3日くらいならともかく一週間は流石にまずい。

一度許したらその後もって流れになるだろうからな。

「いいじゃないですか。」

私、寂しいと死んじゃうんですよ。

この前、ミナと手をつないでた時も我慢したじゃないですか。
だから、ご褒美をください。」

それを言われるとなあ。

あの状態のミナを放っておけるわけないってことくらい誰だって分
かるし口を出さないことくらい常識なんだろうが、こいつにとって

は大変な事だったんだろう。
それに、寂しいと言われるとどうしても構ってやりたくなる。

「今日だけでいいですから、お願いします。」

「……今日だけだぞ。」

「ありがとうございます!!」

結局、俺は厳しくはなれないらしいな。

こればかりは、なおせるようなものじゃないし、なおそうとも思わないけどな。

シスコンという自覚はあるがそれを堂々と自分をシスコンと言えるほど羞恥心は捨ててない。

だが、シスコンと言われても仕方ないと思えるくらいには大切に思ってる。

それを、泣かせることになると思うと、やはり二の足を踏んでしま
うな。

「こら、引っ付くな!!」

「狭いんだから仕方ないんですよ。」

その割には押し付けられている気がするぞ。

「こうして、同じベットで寝るのはヴァナヘイムの時以来ですね。」

あの時のこいつは、それはもう手が焼ける厄介事の塊だったな。

すぐに、記憶を消すだの監禁するだの物騒なことを言い出すわ、す
ぐに泣きだすわで大変だった。

「レン、私はあの頃から変わってますか？」

「ああ、手のかかる子供から、手のかかる妹くらいには成長したな。」

「それって成長してるんですか？」

手がかからなくなったら俺は軟禁なんてされてないだろう。

それに、俺としてはいつまで手のかかる妹でいてほしい。

これは俺の我儘でしかないんだがな。

「もう、半年以上も言い続けてるのにちっとも傾いてくれないんですから。」

レンから苛められるのは好きですけど、放置されたり焦らされたりするのは嫌ですよ。」

「そういうことを堂々と言っな。」

もう、自分がMだと認めてやがる。

別にそれは構わないんだが、それをオープンにするのはいろいろ危ないな。

「レンが構ってくれるならそれでもいいんです。」

もちろん、優しく接してくれる方がいいですけど。」

「はあ、もう分かったから寝ろ。」

ちよっと前なら優しくするといろいろ危なかったが、今なら少しくらい感情の抑制はできるだろうから前みたいに距離を置く必要はな

いか。

よくみると、本当に成長したものだ。

「レン、私が起きた時に最初に視界に入るのはレンですからね。

私^が起きた時に隣にいなかったら泣きますよ。」

私^が泣いたら、いつぱいキスしてくれないと泣き止みませんからね。

「

・・・本当に成長してるのか？

side フリック

ん、こんなに気持ちよく寝れたのは初めてです。

約束通りレンもいてくれてます。

寝ぼけて、抱きしめてくれるという素敵なイベントはないみたいですよけど。

「レン、まだ寝てるんですか。」

・・・どうやら、まだ寝ているみたいですね。

気絶していた間も寝てたんですから、レンは睡眠時間が長いんですよか？

しかし、これはチャンスです。

レンが寝ぼけて抱きしめてくれないなら、私^が寝ぼけたふりをして抱きついちゃえばいいんです。

「それじゃあ、失礼します。」

ああ、最高です。

今まで生きていた中で1、2位を争う位幸せなこともしれません。

それにしても、こつちの世界に来てからずっと鍛えていますから、レンの体って遅しいです。

・・・まだ、起きませんよね。

いつも焦らされてるんですから、キスくらいしても許されますよね？いえ、許されるべきです。

私をここまで好きにさせておいて、一向に手を付けてくれないんですから我慢させている分キスの1回や2回、これは権利のようなものです。

それじゃあ・・・

「なにをしてるんだ。」

・・・本当にガード固いですよお。

・・・

「で、どういづつもりだ？」

うう、苛められるのはレンのものになってる感じがしていいんですけど、怒られるのは嫌です。

「その、私が寝ぼけててレンに抱き着いちゃってたんですよ。そしてら、キスをしたくなっちゃいました。」

半分くらい嘘ですけど、証拠なんてありませんからばれないはず
です。

これで、少しは許してくれないでしょうか。

「フリッグ、俺に嘘が通じると思ってるのか？」

「な、なんのことでしょうか……」

や、やっぱりレンは鋭いです。

でも、このまま黙っていれば

「俺はフリッグが寝付いてから大分後に寝たが、寝相は悪くなかつ
たし寝返りも打ってなかった。

それに、抱きついてきて俺が起きないとも思ってたか？」

「うっ、お、起きてたんですか……」

これじゃあ言い訳のしようもないじゃないですか。

それなら、こんな回りくどく言わなくても……

「鎌をかけたただだったが、やっぱりそういうことか。」

「……レンって本当に詐欺師に向いてますよね。」

「どうやら、反省してないみたいだな。」

あんな自然に鎌をかけられたって分かりませんよ。

結局、レンに嘘はつけないんですね……

「すみません。」

「はあ、もうするなよ。」

でも、ちょっとくらいいいじゃないですか。別に減るものじゃないんですし、レンはもっとサービスするべきですよ。

だいたい、ガードが固すぎです。

これなら、フリングホルニを墜とすほうが何倍も楽です。

「で、今日は何をするんだ？」

「レンと私の将来設計なんてどうですか？」

「これからも兄と妹だ。」

ここまできっぱりと言われ続けると流石に泣きたくなくなりますね。諦めるつもりにはなりませんけど。

しかし、本当に何をしましょうか？

こうなるのなら、少しくらい考えておくべきでした。

「何もないなら、この機会にいろいろ教えとくか。」

いろいろって、もしかしてついに抱かれちゃうんでしょうか！！
レンにエッチなことを体に教えられながら身も心のもレンの物にされちゃうんですね。

「それじゃあ、やるぞ。」

・
・

・
・
・
・
・

「そこはよく混ぜておけよ。」

まあ、こんなことだろうとは思ってましたけどね。

よくよく考えれば、キス1つでも全然やってくれないのにその先なんてやってくれるはずありませんか。

「こうしてると新婚夫婦みたいですね。」

まあ、レンに料理を教わりながら一緒に作るというのも悪くないんですけどね。

「仲のいい兄妹にしておけ。」

「でも、最近は兄妹同士っていうのもあるそうですよ。」

レンの住んでたところには血の繋がった本当の兄妹同士っていうのもありましたし。

「どこで聞いたか知らないが、現実では絶対とは言い切れないがありえないからな。」

やっぱりですか。

まあ、いいです。

今はこうやっていちゃいちゃできてればそれで……

・ ・ ・ ・ ・

なんだかんだであつという間の1週間でしたね。

料理を教わったり、おしゃべりしたり、ゲームをやったり、一度も勝てませんでしたけど・・・

初日だけと言いながらも、結局毎日隣で寝てもらいました。

「後数時間ですね。」

「よつやく出られるのか。」

「余韻を台無しにするようなこと言わないでください。」

まったく、レンにはデリカシーがたりないんです。たぶん、わざとでしょうけど。

「レン、どうして1週間もいてくれたんですか？」

レンなら、1週間を待たなくても出れたはずですよ。

「まあ、確かに出ようと思えば出れたな。」

「それじゃあ、どうしてですか？」

「寂しいと死ぬんだろ？」

俺はフリッグに死んでほしくいし、泣いて欲しくもないからだ。」

うう、顔が熱いです。

どうして、こつピンポイントで言ってくるんですか！！

レンはあれですね、ツンデレです。

口ではいろいろ言いながらも、結局は優しいんですから。

「レン、大好きです。」

「兄妹としてなら、俺もだ。」

いつかデレさせて見せます！！

愚痴と盗聴と・・・(前書き)

遅くなって済みません

しかも、内容薄いです・・・

愚痴と盗聴と・・・

「なあ、レン。」

最近、ちよつとしたことでユーリアが嫉妬するんだがどうすれば抑えられると思う？」

「それをつい最近軟禁された俺に聞くか？」

このことはミナとアリスには言えないが、ジンになら問題ないだろう。

というかたまには愚痴をこぼさないとやってられない。

「・・・ついに、そこまでやられてたか。」

「監禁じゃなかった分まだましと思ってる。」

軟禁されてた時も特に何があつたつてわけでもなかったしな。」

一緒に寝はしたが、俺を信頼しきって寝ているところ見たら手を出す気にもならかつたしな。

「2人ともなんて羨ましいこと言ってるんですか！！」

あんな綺麗な奥さんや妹さんから嫉妬されるなんて世界中の男から殺されても文句は言えませんよ！！」

ちなみに、今はジンの部下と一緒に飲みに来ている。

未成年だがこの世界じゃ関係ない。

「それに隊長はまだしも、レンさんは可愛い妹2人にあのミナさんからも迫られてるなんて、一時期は本当に闇討ちしようかと皆で相

談してましたよ。」

ミナはこの街じゃアイドルみたいなものらしい。

才色兼備を素で表しているような奴で、性格も勝気なところはあるが自分の立場を鼻にかけないということで影ではかなりの人気者。

なぜ、影かという表立って言えばジンがいたからだ。

最近は表立って言う奴もいるが俺がいるということを狙っている奴はいないようだがな。

「俺が言うのもなんだがそんなことしたらフリッグかアリスに殺されるぞ。」

「あの2人に勝てる存在っているんですかね……」

「そういえば、最近また可愛い娘が来たじゃないですか。1人くらい俺たちにも紹介してくださいよ。」

「天笠のことか？」

別に紹介してやってもいいがたぶん一蹴されるぞ。」

いまだにフリッグのことは狙っているからな。

昨日なんて、ベッドに潜り込まれて大騒ぎだった。

「どうしてレンさんの周りにはあんな可愛い娘ばかり……」

「羨ましすぎる……!」

「俺たちにも出会いを……!」

酔ってるなあ。

まあ、気持ちは分からないでもないんだがな。
俺がこんな状況じゃなくて、俺みたいなやつがいたら多少はいらっ
とするだろう。

「話を戻すがどうすればいいと思う？」

「ユーリア以外の女性と会わなければいいと思いまーす。」

「仕事があるから無理だ。」

「毎日、愛し合えばいいと思いまーす。」

「それはやってる。」

「さっきマジで殺意湧いたんですけど……
よく話し合えばいいんじゃないですか。」

「やっぱりそれしかないか。」

「俺から言えるのはとりあえず、フリッグとアリスに会わせるな。
冗談抜きで監禁されるぞ。」

いや、フリッグなら監禁で済むかもしれないがアリスの場合は血を
見るかもしれない。

「いつも監禁とか軟禁とか物騒なこと言ってますけど本当にあんな
可愛い娘がそんなことするんですか？」

まあ、確かに外見だけなら普通そう思うよな。

俺だって普通にすれ違っていたらそんなこと思わない。

「ためしにアリスと話してみるか？
どうなってもしらないが・・・」

「しゃべるだけで何が起るんですか!？」

「まあ、あれだ、精神崩壊を起こすかもしれない。」

読唇術やら人心掌握やらいろいろなスキルを持つてるからな
精神崩壊に追い込むくらい普通にできそうだ。

「よく、そんな子を妹だと思えますね・・・」

「まあ、多少はやんちゃなところがあるが可愛いものだろ。」

「それを可愛いですませるところがもてる秘訣なんですね。」

「俺たちじゃあ絶対無理だな。」

「いや、レンさん以外無理だろ。」

とはいえ、アリスが俺たち以外の前で素で接するとは思わないけど
な。

アリスの演技は一目見たくらいじゃあ見抜けない程上手い。
まあ、俺には通用しないけどな。

「でも、付き合うことになったら尻しかれそうですよね。」

「そうでもないぞ。」

妹さんもアリスもレンに好かれるためってことでいろいろやってる

からな。

尻に敷かれるというより尽くされすぎるって感じた。」

「本当に羨ましすぎる……。」

「そのかわりに、一度許したらその後は酷いぞ。」

尽くされて尽くされて、逃げ場を潰されて、それでも逃げようとしたら監禁されるんだぞ？

誤解されるようなことをしたら、その誤解を晴らすまで何時間も説得しないと納得してくれないんだぞ？

ちなみに説得に失敗したら冗談抜きで血を見ることになるからな。」

アリスなら首を引き裂くとか、四肢を壁に打ち付けるとか平気でやれる。

というか俺みたいな死なない体じゃなければアリスと付き合いなんて無理だ。

「……すみませんでした。」

「まあ、基本的にあいつらは無害だから怒らせるようなことだけはないようにな。」

「そうなると安全に付き合えるのってみなさんくらいですか？」

確かに、フリッグやアリスと一緒に過ごしていながら真つ当な恋愛観を持っているミナならフリッグとアリスをどうにかしてしまえば問題はないだろう。

それがどれだけ難しいかは置いておくが。

「そういう意味では確かにミナが一番なんだが、どうしてもそっい

う感情を持ってないんだよなあ。」

「どうしてです？」

あんなに可愛いのに。」

「確かに可愛いとは思っただが、ミナを見てるとからかってやりたくなるからな。」

そういう対象としてはみにくい。」

「ミナさんをからかうなんてレンさん以外やりませんよ……」

side フリッジ

「まったく、好き勝手に言ってくれますね。」

「そう？」

全部的を射たものだとおもうけど。」

「というか、盗聴つてもはやストーカーよ……」

「そういいながら、ミナもしっかり聞いてるじゃないですか。」

「それは、それよ。」

それにしても、私たちの前では本音を言わないだけと少し思っていました。完全に妹扱いですね。

そして、私とアリスは完全に危険者扱いされています。

「分かってないなあ、お兄ちゃんは。」

お兄ちゃん以外の人を苛めたって楽しくないんだからそんなことす

るわけないのに。」

「ちょっとまちなさい、するわけないって、やるうと思えばできる
ってこと？」

「実際にやったことはないけどできるんじゃない？
やり方は一通り教わったよ。」

ア、アリスがなんだか遠い存在に思えてくるこのごろです……
これって私のせいなんでしょうか？

「やりすぎるとレンに嫌われちゃうよ。」

「それはないよ。」

だって、お兄ちゃんはどうなアリスでも受け入れてくれる。
その上で正しい道を示してくれる。

アリスはアリスのままです。

だから、お兄ちゃんが大好きなんだよ。」

アリスの心酔ぶりは私以上かもしれないときどき思います。

言っておきますが私ですよ？

日常的にレンを閉じ込めたい、ずっと私を見てもらいたいと思い、
今このときでも盗聴と自分でもストーリーカーじゃないかと思う位のレ
ベルです。

その私が私より凄いと思うアリスは本当にレンがいなくなったら死
ぬかもしれないね。

「それにしても私を見たらからかいたくなるってどういふことよ。」

「とは言いつつも結構嬉しかったりしてるよね。」

「そんなわけないでしょ!!」

顔を真っ赤にして言っても説得力がありませんよ、ミナ。

「だって、からかわれてる間はお兄ちゃんはミナお姉ちゃんに付きっ切りだし、その後もご機嫌取りの為にあれやこれや考えてるわけだから嬉しくないはずないもん。」

「うっ……」

「お姉ちゃんとは違う意味で嬉しいんだよね。」

「っ、そうよ悪い!？」

あのレンがずっと私のこと考えてくれるのよ。
嬉しいに決まってるじゃない!!」

「あっ、お兄ちゃんの気持ちちょっとわかるかも。」

アリスはレンより酷いDSですね。

アリスと将来過ごす子になる人は大変そうです。

もちろん、レンは私の物なので関係ありませんけどね。

「で、お前らはいったい何をやってるんだ?」

あれ?

なぜ、レンの声が聞こえるのでしょうか?

「お姉ちゃんが盗聴してたよ。」

売るのが早くないですか!?

これはアリスもミナも聞いていたんですから連帯責任です。

「アリスも「アリスは止めようって言ったのにきいてくれなくて。」

「この子は悪魔ですか？」

吸血鬼だから悪魔の一種であるかもしれないけどいくら何でも酷すぎます。

「俺がそれで納得すると思うか？」

「ううん。」

でも、アリスが止めようとしていないってことを証明できないとお兄ちゃんはなににもできないよね。」

「なんでしょう、先ほどの会話にとてもレベルの高い探り合いが行われているように感じます。」

「はあ、もうこんなことするなよ。」

「は、はい!!--」

「ごめんね、お兄ちゃん。」

「どうして、アリスが謝るんだ？」

「言わなくても分かるでしょ？」

それにしても、最近やけにレンとアリスの仲がいいような気がしま

すね。

「ねえ、フリッグ、レンとアリスってあんなに仲良かった？」

「私もそう思ってたところです。」

レンが私以外の女性と仲良くしているところは何度見ても胸がもやもやしますね。

「レンー!!」

「……なんだ？」

「私は絶対に負けませんよ。」

side out

「………驚いた。」

また、変なスイッチが入ったと思ったんだが、どうやら俺が思った以上に成長しているらしいな。

「ちえ……」

アリスもこれは予想外だったようだな。

大方、嫉妬させてまだまだ子供だっことを俺に示すつもりだったんだろう。

「それはいいが、ストーカー行為はもうやめろよ。」

頑張れよ、フリッグ

甘い誘惑（前書き）

遅くなつて済みません>><

甘い誘惑

「今日もお疲れ様です。」

「それじゃあ、私たちは先に帰って晩御飯の準備をしときますね。」
肉体的疲労はないものの、やはり戦闘になると精神的疲労はたまるものだな。
俺も今日は早めに帰るとするか。

「風峰さん、あの噂を聞いてますか。」

「あの噂というと、また吸血鬼が現れたってやつか？」

「はい。」

単刀直入に聞きます、それはアリスちゃんではありませんよね？」

流石にアリスが吸血鬼だつてことは知ってるか。

アリスもこの人にかなり懐いてるようだから話していても不思議じゃない。

「アリスは俺以外の血は飲まないと言っていたし、真祖の吸血鬼は生きるために血を必要としないらしい。」

アリスが態々、外で血を吸う理由はないな。」

「……そうですか。」

そうだ、アリスが外で血を吸う理由がない。
だが、万が一アリスが噂の吸血鬼だったら……

・ ・ ・ ・ ・

「ちょっと散歩に行ってくるね。」

「遅くならいように帰ってくるんですよ。」

「うん、じゃあ、いってきます。」

こここのところ連日で夜になると出かけてる。

しかも、アリスが出かけた日に吸血鬼による被害が出ている。

これが偶然なわけがない。

そうなると、可能性は2つだ。

アリスを貶めようとするやつがいるのか、それともアリスが犯人かだ。

だが、前者だとするとアリスが態々外を出歩く意味が分からない。

同族と言っただけで庇ったりするような甘い考えなんて持ってないはずだろうし、例えそうだったとしても、アリスならこんな噂を立てさせることなんてへまはしないはずだ。

「フリッグ、また吸血鬼が現れたって話は知ってるか？」

「はい、でも、血を吸われたというだけで特に怪我もしてないらし

いですし放っていました。が、どうかしたんですか？」

「その吸血鬼はアリスじゃないよな……」

アリスが犯人じゃないと信じたい……が、それを本能が拒絶する。

「それはありえませんか。」

「どうしてそう言い切れる？」

「それは、アリスがレンのことを好きだからです。」

あのアリスがレン以外の血を飲むなんてありえませんか、悪戯はしても本気でレンを困らせることなんてしませんよ。」

「……そうか。」

フリッグは確実に成長している。

ミナも夢を現実にするために歩き続けている。

それなのに、俺は……

「俺も少し歩いてくる。」

「……はい。」

「応気を付けてくださいね。」

side フリッグ

「まだ、変わっていないんですね……」

たぶんですけど、アリスが犯人ではないことくらいレンは分かっているはずですよ。

それでも、自分を信じることができず結果的にアリスを信じることもできないんですね。

自分を信用できないということはどういうことなのでしょう？

レンの眼にはこの世界はどう映っているんですか？

「私にはレンの苦しみは一生理解できないんでしょうね。でも、私は諦めませんよ。

苦しみは理解できなくても、傍にいて支えることはできます。

私は絶対に諦めませんからね。」

side out

不気味なほど綺麗な月だ。

月明かりが恐怖を連想させる。

「あ、お兄ちゃん、こんなところで何をしてるの？」

「それはこっちのセリフだ。

足元に倒れている奴は誰だ？」

生きてはいるみたいだが、どうやら意識はないようだな。

「ん〜、偶然通りかかっただけだよ。

見た感じ血を吸われているだけみたいだからお医者さんのところにも連れてってあげようかなって。」

月明かりに照らされたアリスはより一層神秘的で底知れない力を感じさせる。

そして、体の芯から凍てつきそうな冷たい空気

「どうしたの？」

アリスのことが信用できない？」

いったいどういつつもりなんだ？

状況はアリスが犯人だと示している。

「まあ、お兄ちゃんが信じることなんてできないって分かっているだけだね。」

それじゃあ、もし、アリスが犯人だったらどうするの？」

落ち着け。

落ち着いて思考を展開させる。

相手はあのアリスだぞ。

ろくに思考もまわらない状態でどうにかできる相手じゃない。

「これ以上被害を拡大させるつもりなら相応の対処はするだろうな。」

「ふふっ、お兄ちゃんにはお姉ちゃんがいるから、できないことなんてほとんどないもんね。」

アリスもお姉ちゃんが相手だと流石にどうにもできないから捕まるしかないけど……」

もし、アリスが犯人だとしたら動機はなんだ？

アリスにとって吸血は娯楽と言っているもののはず。

だが、アリスのあの言葉は信じていいものなのか？

もしも、あれが嘘だとしたら……

「お兄ちゃんはアリスになにもできないよ。」

「なに？」

「だって、アリスはお兄ちゃんの大事な大事な妹だもん。」

アリスの為に切り捨ててきたニーズヘツグの人たちや、この街の役員の人、他にもアリスの為に支払ってきた代償はいろいろあるよね。だから、その代償に見合うだけの理由がなければお兄ちゃんはアリスに手を出せない。

そして、お兄ちゃんが渋ればお姉ちゃんも足踏みしちゃう。

あのお姫様ならアリスに拮抗できるかもしれないけど、今のアリスに勝てる存在なんてこの世界にお姉ちゃん以外いないよ。」

っ、的確に揺さぶりをかけてくる。

アリスが犯人だったら俺はどうする？

いや、アリスの言うとおり俺は相応の理由がなければどうすることもできない。

死人どころかけが人1人として出していないこの状況ならアリスを説得し続けるしか……

「うーん、もうちょっと苛めていたい気もするけどそろそろ種明かしにするね。」

そろそろ、帰らないとお姉ちゃんも心配するだろうし。」

「……これはアリスの仕業じゃないのか？」

「当然だよ。」

アリスがお兄ちゃんの血以外飲むわけないもん。

これは、この街に流れ込んだ他の吸血鬼の仕業だよ。

その吸血鬼ももう捕まえてるからもうこの事件は終わりだよ。」

こんなことで嘘をついても調べればわかるから嘘ではない。
そうなるよ、なぜアリスは自分が疑われるようなことを・・・

「それはね、お兄ちゃんを試しかつたからだよ。」

「試す？」

「そう。」

ミズガルズでお兄ちゃんにアリスを信じさせるって言ったでしょ？
だから、今どれくらいなのかなあって気になっちゃって。」

「それだけの為にこんな騒ぎを起こしたのか・・・」

「お兄ちゃんは鋭いから、下手な手を打ってもすぐに躲されちゃう
んだもん。」

だから、アリスの目的がわかりにくいようにことを大きくしたんだ
よ。」

一応言っておくけど流れてきた吸血鬼をこの街に呼び寄せたってわ
けじゃないよ。」

偶然見かけたから、ちょっと利用してあげたんだよ。」

ここまでとは・・・

正直、まだアリスは俺に及ばないと踏んでいたが見込みが甘かった
か。」

「意外と大変だったんだよ。」

吸血鬼の行動を把握しておかないとその場に居合わせられないし、
下手にけがでもさせたからお兄ちゃんが捕まえに来る可能性もあった
から血を吸わせたなら離れていくように仕向けたりね。」

でも、収穫はあったから頑張ったかいがあったかな。」

ここまで用意周到ということはフランも一枚かんでるってことか。ごく自然にその噂に興味を持つようにわざとアリスの名前をだし、アリスの行動に注目させた。

「収穫だと？」

「うん。」

でも、その前に喉乾いちゃったから血を貰うね。」

こんなに小さな体だというのに人類最強クラスの力を持ち、悪魔のような知略を持っているなんてだれが信じるだろうか。

「んー、やっぱりお兄ちゃんの匂いは落ち着く。」

どこまでも純粹で一片の穢れもないような笑み。

だからこそ、アリスは自分の行為に躊躇いを持たない。

「ごちそうさま。」

それで収穫の話なんだけどね、お兄ちゃんは変わりたいっていつてるよね？

何かを信じることで、それを支えに他人を傷つける痛みから逃げ出さないように強くなるって。」

「それがどうしたんだ？」

「うんとね、アリスはお兄ちゃんが変わりたいって言うてることは信じてるけど、お兄ちゃんが変われるとは信じてなかったんだ。」

だから、今回それを確かめたんだけど、やっぱりお兄ちゃんは変わ

れないね。

お兄ちゃんにとって生きていく理由にすらなっているアリスを信じ
てなかった。

これじゃあ、いまだに一步も前進してないってことだよな。」

『兄さんは一生変われませんかよ。』

その暗闇の中で一生怯え続けるんです。』

っ、嫌な言葉を思い出させてくれる。

俺はあの頃から全く進めていないのか！

「あ、勘違いしないでね。

別に責めてるわけじゃないんだよ。

アリスはどんなお兄ちゃんでも受け入れられる。

お兄ちゃんがどんなアリスでも受け入れてくれるように。」

やはり、俺は変わらないのか？

死に逃げることもできずただ狂っていくのをまつだけなのか？

「ねえ、お兄ちゃん、アリスに溺れていいんだよ。」

「……なに？」

「誰かを傷つけることも、誰かを助けることも、息をすることです
えアリスの為ってことにしていいんだよ。

何も信じていけないお兄ちゃんには理由が必要でしょ？

お兄ちゃんのすべてアリスに捧げて、アリスに尽くして、アリスの
為だけに生きれば、きつと楽になれるよ。」

それは……

「お兄ちゃんは頑張ったよ。

だから、もう休もう？

アリスがずっと守ってあげる。」

これが俺の救いなのか？

変わることも死ぬこともできない俺には・・・

「ふふっ、それじゃあ誓いのキスでもしようか？」

俺は・・・

「大好きだよ、お兄ちゃん。

これからは、アリスの為だけに生きてね。」

「そこまでです！」

譲れない想い

side アリス

「ねえ、お兄ちゃん、アリスに溺れていいんだよ。」

ふふっ、もうお兄ちゃんの心は折れてる。

あと少し、あと少しでお兄ちゃんはアリスのものになる。

「……なに？」

「誰かを傷つけることも、誰かを助けることも、息をすることさえアリスの為ってことにしていいんだよ。

何も信じてることができないお兄ちゃんには理由が必要でしょ？」

お兄ちゃんのすべてアリスに捧げて、アリスに尽くして、アリスの為だけに生きれば、きっと楽になれるよ。」

さあ、アリスの手を取って。

アリスがお兄ちゃんを救ってあげる。

誰にも傷つけさせなんてしない、ずっと、ずっとアリスが守り続ける。

「お兄ちゃんは頑張ったよ。

だから、もう休もう？」

アリスがずっと守ってあげる。」

だから、アリスを愛して。

強くて、脆くて、誰よりも臆病な愛しのお兄ちゃん。

「ふふっ、それじゃあ誓いのキスでもしようか？」

アリスは一生お兄ちゃんに尽くすことを誓うよ。
だから、お兄ちゃんは一生アリスに尽くしてね。
お互いに隷属してずっと一緒にいようね。

「大好きだよ、お兄ちゃん。」

これからは、アリスの為だけに生きてね。」

残念だったねお姉ちゃんたち。

これでお兄ちゃんはアリスのもの。
もう、誰にも渡さない。

「そこまでです！」

side out

side フリッジ

何とか間に合ったようですね。

「はあ〜。」

なぜでしょうか・・・

凄く馬鹿にされてるような溜息をつかれています。

「せつかくお兄ちゃんと結ばれるところだったのに、ちょっとくらい空気よめないのは仕方ないけど、あれはないよ。
それにあんなべたな登場の仕方もないよ。」

まさか、そこを駄目だしされると思いませんでした・・・

「とにかく！」

私は認めません。」

「別にアリスはお姉ちゃんに認めてもらう必要なんてないんだけど、お兄ちゃんが後味悪いだろうからちょっとだけ付き合っただけあげる。」

こんなに年下だというのにやけに見下ろされてるような気がしますね。

・・・確かに中身はアリスのほうが大人なのかもしれないけど。

「それにしても、お姉さんを仕向けたはずなんだけどよくこれたね？」

あれはアリスの仕業でしたか・・・

リンネを撒くのにどれだけ手間がかかったと思ってるんですか・

それに、本気で貞操を奪われかけたんですよ！

「まったく、皆お姉ちゃんに甘いんだから。」

まあ、誤差の範囲内だからいいんだけどね。」

・・・本当にアリスは10歳なんでしょうか。

実は姿だけ幼くしているだけで1000年くらい生きていると言われても信じてしまいそうです。

10歳の子供が心を折ったり、私を妨害したり、それ以前にもこの計画の為に裏で手を回したり、こんな子供怖すぎますよ！

「ところで、お姉ちゃんはどうするつもりなの？」

アリスならお兄ちゃんを救ってあげられる。

だから、お兄ちゃんが大切ならアリスに任せてくれない？
別に今いるところから出ていくわけでもないから、何も変わらないよ。

あ、でも、夜の営みはじゃましないでね。」

思ったんですけどアリスが一番悪影響与えているのはレンじゃないんでしょうか。

話し方がなんだかレンに似てるような気がします。

「レンを手に入れるのは私です。

それにレンは簡単に負けません。」

「ふう〜ん、お兄ちゃんを信じてるんだね。」

「当然です。」

レンは絶対に負けません。

レンが自分を信じられないというのなら私がレンの分まで信じます。

「お姉ちゃんはすぐに何でもできるようになるよね。

半年とちよつとでずつと家事をやったお兄ちゃんに追いつく勢いだし、神としての力を使えばでないことなんてほとんどない。」

「だから、どうだというんですか？」

このもったいぶった言い方、レンにそっくりですね。

それも、勝気を見出してる時の。

「でもね、アリスが一番すごいと思うところはどんな時でもお兄ちゃんを信じていることだと思うんだ。」

だって、お兄ちゃん自身がお兄ちゃんを信じていないのに微塵の疑いもなく全幅の信頼を置いてる。

アリスだってお兄ちゃんを信じてるけどお姉ちゃんみたいに疑わないなんて無理だもん。」

「いい加減回りくどい言い方はやめて、はっきり言ってくれませんか。」

レンを信じるなんて当然のことです。

むしろ、レンを疑えという方に無理があります。

「じゃあ、はっきり言っね。

アリスはねお姉ちゃんが一番をお兄ちゃんを苦しめるとおもってるんだ。

お兄ちゃんが一番の不幸はお姉ちゃんとお会ったことだとさえ思っよ。」

「なにを「考えてみてよ。」」

「お姉ちゃんと出会わなければお兄ちゃんはもっと早く死ぬことができたんだよ。

アリスたちを守るなんて言い出すこともなかった。

お姉ちゃんは考えたことある？

他人を傷つけることを死ぬほど嫌うお兄ちゃんが自分が信用できない策に皆の安全を掛けるプレッシャーが？

きつと不安に押しつぶされそうになると思うよ。

安全が保障されるまでずっと張りつめっぱなし、余裕を見せせててもアリスにはいつ緊張の糸が切れるか冷や冷やして見てられなかったよ。」

「私がレンを苦しめていたことくらいわかっています。そのことから言い逃れしようとは思いません。それでもレンは変わりたいと言ったんです。だから、私はそばで支え続けます。」

レンは絶対に変わるはずです。

今はまだでも、少しずつ進んでいけるはずですよ。

「また、それかあ。」

アリスはその言葉を聞いたたびに憎しみさえ覚えるよ。」

っ、この殺気は今まで感じたことがない程強いですね。

アリスの実力は把握しているつもりでしたけどどうやら私の前では抑えていたようです。

「初めのころはただ羨ましかっただけだったけど、時間がたつにつれておかしいって思い始めた。

お兄ちゃんはこのことでも精一杯なのに、不安とプレッシャーに押しつぶされそうになりながらアリスたちを守ってる。

それなのに、お姉ちゃんが信じてるからっってお兄ちゃんは頑張り続ける。

もう、ぼろぼろなのに、立っていることさえやっとなのに、それでもお姉ちゃんが期待をかけるから!!」

っく、いったいどれだけ力を抑えていたんだすか。

この力はすでに神に匹敵するだけの・・・

「もう無理をして傷ついていくお兄ちゃんは見たくない。

お兄ちゃんはアリスを守る。

もう誰にも傷つけさせない!!」

あのアリスがここまで感情をむき出しにするなんて……
ですが

「だからといって私も諦めはしません！
私がそうであったように人は変われるんです！！」

「……そうだよね。」

「ごめんね、お姉ちゃん。」

お兄ちゃんのことになるとすぐ熱くなっちゃうみたいだから。
まあ、治そうとは思わないけどね。」

この空気……

やはり、こうなるんですね……

「それじゃあ、戦おうか？」

アリスは意思を曲げるつもりはないし、お姉ちゃんもそうでしょう？
だったら、折るしかないよね。」

「私に勝てると思ってるんですか？」

「かなり難しいと思うよ。」

でも、万に一、億に一でもいい。

たった一回それを掴み取ればいいんだから。

それに、もう気づいてると思うけどお姉ちゃんが見てきたアリスと
思わない方がいいよ。」

「分かっています。」

どんな隠し玉を持っているか知りませんが圧倒的な力の前には無駄
だということを教えてあげます。」

「ふふっ、お兄ちゃんも言ってたけど人を舐めない方がいいよ。」

3つの契り

side フリッジ

「ふふっ、お兄ちゃんも言ってたけど人を舐めない方がいいよ。」

得体の知れない相手には様子を見ながら戦うのがセオリーですけど、いつまでもレンをあのままにしておけませんし、アリスに無駄な怪我を負わせる訳にもいきません。

ここは、一撃で！

「分かりやすいなあ、お姉ちゃんは。」

くっ！！

完璧なタイミングでカウンターを・

「呆けてる暇なんてあるの？」

私の訓練の時は本当に手を抜いてたようですね。

今の状態でさえいつもの倍以上の動きをしていますし、本当に底が知れませんね。

ですが、まだまだ遅い！

「おっと、流石お姉ちゃん。」

あれくらいじゃ、全然効かないね。」

まるで、私の動きを読んでいるかのようですね・・・
いえ、実際読まれているんでしょうけど。

「そつだよお姉ちゃん。」

アリスはずつとこの時のためにお姉ちゃんを見てきたんだもん。お姉ちゃんの考えてることなんて手に取るようにわかるよ。」

「まったく、未恐ろしい才能ですね。」

アリスが私と同じ年月を重ねてたらと思うとぞつとします。」

10000年、いえ10000年の歳月が経っていれば私に迫ることすらできているかもしれませぬね。」

「それはそつだよ。」

アリスのこの力はお兄ちゃんを救うために手に入れたものだもん。

それに、お姉ちゃんを倒すのに1000年もいらぬよ。」

だつて、この日にアリスが勝つんだから。」

言ってくれますね。」

明らかな挑発だということは分かっていますが私も伊達に最強を名乗っていませんよ。」

力の差は今一度教えてあげます！」

「ふふつ、本当にお姉ちゃんは単純なんだから。」

「最近のアリスは可愛くないですよ！」

「アリスはお兄ちゃんにそう思ってもらえればそれでいいんだよ。」

お兄ちゃんはお小悪魔みたいなアリスでも可愛いつて言ってくれるもん。」

「どこがお小悪魔ですか。」

魔王と間違っていますよ。」

「そろそろ守ってばかりも飽きちゃったしこっちから行くね。」

くっ、本当に私の時はどれだけ手を抜いてたんですか！

「確かにお姉ちゃんは最強だと思うよ。」

でも、全力を出せなければ最強も名折れだね。」

「やはり、気付いていましたか・・・」

「神力は少量でも大きな力になるけど、それは本来世界には存在しない異物。」

お姫様くらいが世界が許容できる限界だよね。」

それ以上使用すると世界が崩壊しちゃうから、お姉ちゃんは全力出せない。」

だけど、アリスは世界を構成する1つの魔力のみを使用してるから加減なんて必要ない。」

これなら対等に戦えるよ。」

私とアリスの魔力はほぼ互角、神力がある分力では私が上ですが、行動を完全に読まれているとなると戦況は5分ですね。」

「本当にアリスを甘く見すぎだよ。」

「なっ!?!?」

「お姉ちゃん専用のトラップだよ。じっくり味わってね。」

side out

side アリス

「ごほつ、ごほつ、まったく、お気に入りの服が台無しですよ。初めてはこの服にしようと思って買ったんですけど、これじゃあもう着れないじゃないですか。」

うーん、お姫様くらいなら簡単に殺せる威力だったんだけどね。ダメージがないわけじゃないけどこれくらいじゃ倒しきれないかな。

「お兄ちゃんはアリスのものになるんだからそんなこと考えても無駄なのに。」

「それにしても、あんなもの私じゃなければ死んでますよ。」

「それはお姉ちゃん専用だもん。半端な威力じゃ意味ないでしょ？」

ちなみに街中に仕掛けてあるから早めに倒されちゃってね。」

とは言ったもののおれって仕掛けてる中でもかなり威力の高いもだから、畏だけで倒すのは無理みたいだね・・・
まあ、他にもいろいろあるからアリスの手で踊ってもらおうよお姉ちゃん。

「……………本気なんですな。」

「そんなの今更だよ。
だって、お兄ちゃんを賭けて戦ってるんだよ？
アリスのすべてを投げ打つても絶対に勝つよ。」

アリスが生きる上でお兄ちゃんがそばにいることは当然のことだも
ん。

お兄ちゃんがいて、その後にお姉ちゃんたちがいる。

お兄ちゃんがいらない世界じゃ生きることさえ無理だもん。

「……そうですね、途中で考え直してくれるなんて思っていた
私が甘かったようです。」

ここからは、手加減はしません。

帰ったら、たつぷりとお説教してあげます。」

「そんなの嫌だよ。」

帰ったらお兄ちゃんとあま〜い一夜を過ごすんだから。」

「ませすぎです！」

「ふふつ、初心なお姉ちゃんには刺激が強かったかな？」

「なつ、わ、私だって！」

「顔真っ赤にしちゃって、お姉さんの気持ちがちょっとわかるかも。」

つと、流石に地力の差が出てきたかな……

いくら行動が読めるって言っても実戦経験が違いすぎる。

さつきは不意を突いたから当たったけどお姉ちゃんなら罠が発動し
てからでも十分避けることができる。

お兄ちゃんが賭かってなかったら絶対にこんな分の悪い勝負なんて
やりたくないよ。

「戦いの最中に考え事とは感心しませんよ。」

「愛しのお兄ちゃんのことだから大目に見てよ。」

誘い込んでることくらいわかってるはずなのに追ってくるなんて、
真正面から力の差を見せつけて諦めさせるつもりなんだろうけど・・・

「特大サービスだよ。
しっかり味わってね。」

仕掛けた罠の中で最強の威力を持つてるもの。
流石のお姉ちゃんも守りに入るはず。

『レヴォルト』

それを待ってたよ。

いままでの罠はすべてこのための布石、これでアリスの勝ちだ！

side out

つく、俺は何をやってる！

フリッグとアリスが戦ってるんだぞ！

止めたいが、今の俺が何を言ったところでアリスは止まらない。

確固たる信念を持つアリスに、何も無い俺が何を言ったところで・・・

「レン、いったいあれはどういうことなの！？
どうしてフリッグとアリスが戦ってるのよ！？」

「それは・・・」

「いえ、大体の想像はつくけど、どうして止めないのよ!」

「今の俺が何を言ってもアリスは止まらない。

説得して止めらなければ、あのフリッグでさえ手を焼くアリスに俺がなにをできる？」

なにをしようと、すぐに無力化されるだけだ。」

悔しいが、ここはフリッグに任せるしか……

「ああ、もう!!」

うじうじするな、それでもこの私に勝ったレンなの!!

理由がどうであれあの2人をこのままにしておいていいわけないでしょ!!」

「だが、俺に何ができる!!」

アリスは俺を救えると信じ切ってる。

俺もアリスのやり方が間違ってるとは思わない。

俺が変われないというのなら、死ぬかアリスを頼る方法しかないんだ……」

実際、フリッグが来なければ俺はアリスの手を取っていただろう。

アリスの手を取ってしまえばどれだけ楽だろうか……

「いい加減にきなさい!!」

「うほっ!?!」

この、おもいつきり殴りやがって……

「なにを「アースガルドで私に言った言葉はなんだったの?」「

「ムスペルヘイムでフリッグと約束したことは?

アリスとも契ったことがあるでしょ?

それは、そんなに簡単に諦めていいものだったの?」

そうだ、俺は何をやってる?

アースガルドで過ちを犯した俺を叱ってくれたミナに何を思った?
ムスペルヘイムで泣いていたフリッグと誓ったことはなんだった?
ミズガルズですつと抑えさせていたアリスと約束したことは?

「レンはまだ何もしてないでしょ?

だから、考えなさい。

レン1人じゃできなくても私や兄さんがいる。

まだまだ、諦めるには早いわよ。」

いい加減目を覚ませ。

俺が不甲斐ないせいでフリッグとアリスが戦ってるんだぞ。

「ミナ、力を貸してくれ。」

「もちろんよ、絶対に止めるわよ。」

待ってるよ、フリッグ、アリス。

月の庭（前書き）

気付けば1ヶ月も更新してませんでした・・・

月の庭

side フリッグ

『レヴォルト』

この規模と威力、おそらくこれが一番強いものでしょう。視界を遮り何を仕掛けてくるか分かりませんし、少々卑怯ですが神力がなければ破ることのできない壁で防ぎ、戦意を削ぎましょう。

「これで終わりですよ、アリス。」

いくら私以上の魔力を持っていたところで神力のないアリスにこの壁は破れません。」

「何事もやってみないと分からないよ。」

やはり、諦めてはくれませんか。

それならば、少し痛い目を見てもらおうとしましょう。

「隙だらけだよお姉ちゃん。」

攻撃を防いだところに追撃を加えて終わりです！

side out

やばいな、正直動きが全く見えない。

基本的な能力が桁違いすぎる。

「どうするつもりだ、レン？」

「今の状態のアリスを説得するのは不可能に近い。だが、このままフリッグに止めさせてもアリスはまた繰り返すはずだ。」

「だからこそ、俺の力で止める必要がある。」

「俺の力を示せばアリスも話を聞いてくれるはずだ。」

「けしかけた私が言うのもなんだけど本当に止められるの？ 私なんて影さえ追えないわよ。」

「それは俺も似たようなものだ。」

「だが、フリッグと戦ってるんだ、消耗がないわけがない。」

「それでもだ、俺でも一瞬止まっているところを目で追うのがやっとのアリスに、消耗しているだけというアドバンテージで勝てるとは思えないぞ。」

「今のアリスなら俺たちを戦闘不能に追いやることなんて簡単にやっ
てのけるだろう。」
「だが」

「俺に考えがある。」
「綱渡りの部分はいくつかあるが上手くいけばアリスを止められるはずだ。」

「それを最初に言い出さなかったってことは何か問題があるのね。」

「……ああ。」

命の危険はないにしても2人にはかなり危険な役をやってもらうことになる。

ほぼ確実に軽くはないけがを負うはず。

それを成功するかもわからない作戦に2人を巻き込むとなると二の足を踏んでしまう。

「ねえ、レンにとって今の生活ってどうなの？」

「悪くはないな。

少なくとも俺が死ぬのを躊躇いたくなるほどにはな。」

フリッグとアリスと一緒に住んで、ミナとジン、親友と呼べる者がいて、頻繁に厄介事を運んでくるフリユネに何かと難癖をつけてくる天笠、アリスに変な事ばかり教えるフラン……………
こんな俺が守りたいと思えるほどに大切な日常。

「だったら、何が何でも取り戻なさい。

私だって今の生活は気に入ってるの。

このまま、ばらばらになってレン達が来る前の退屈な日常に戻るなんて私はごめんよ。」

「……………そうだな。

時間がない、一度で覚えるよ。」

side フリッグ

……………なっ!?

「アリスの勝ちだね、お姉ちゃん。」

「っ!！」

「おっと、やっぱりそれくらいじゃ倒れてくれないみたいだね。」

なぜ、アリスの攻撃が!？」

あの剣に特別な力は感じませんし、神力を持たないアリスが世界の壁を破れるはずが・・・

「ねえ、お姉ちゃん、神力がなければ世界の壁を破れないんなんで誰が決めたの？」

それって、人の力を侮ってた神が勝手に決めたことなんじゃないの?」

「それは・・・」

確かにそうですが、世界を構成する一部である魔力で世界の壁を破れるはずがありません。

しかし、実際にはアリスの剣は私を貫いて・・・

「お姉ちゃんをそのままにしとくのも可哀想だしそろそろ教えてあげるね。」

アリスは世界の壁を壊すことなんてできないよ。

でも、アリスは世界を塗りつぶすことができるんだよ。」

「そんなことが「できないと思う?」「」

もし、そんなことができるとしたらアリスは私の天敵となり得る存在に

「よつこそ、お姉ちゃん。」

「ここがアリスの世界、名前は『月の庭』にしとこうかな。」

場所を移動したわけでも世界を移動したわけでもないというのに景色が!?

何も無い一面の草原に、今にも落ちてきそうなほど大きな月、何よりこの異質な感じは……

「どう、お姉ちゃん?

綺麗な場所だと思わない?」

「そうですね、こんな状況じゃなければゆっくり景色を楽しみたいところですよ。」

この感じは以前フリユネの神力を封じたものですね。

ここまで来ると、流石に何ともないというわけにはいきませんか。何より、先ほどの一撃が予想以上にまずいですね……

「予想はしてたけど、これくらいじゃお姉ちゃんを封じることが無理みたいだね。」

ここはアリスの力を最大限に引き上げる場所でもあるけど、もともと、この世界は対神用に作ったものなんだよ。

でも、まだ改良の必要があるみたい。」

「いえ、ここまでの規模と力なら、高位の神格を持つ神でなければかなり行動を制限されますよ。」

少なくともシエヴン程度では立つことさえ不可能でしょう。

あれから半年、たったそれだけの期間でこれほどの成長を遂げるなんて、私をも超える才能ですね……

「それじゃあ、意味ないんだよ。」

アリスはたとえお姉ちゃんであっても倒せる力を持たないと駄目なんだもん。

お兄ちゃんはいずれ神すらも関わる事件に巻き込まれる。

その時、神だからって理由だけで負けるわけにはいかない。」

「だからと言って私も負けるわけにはいきません。

レンを支えるためにも私は最強であり続ける必要があるんです。」

まさか、神でもない相手にこれを抜く時が来るとは思いませんでした。

「それがお姉ちゃんの神器かあ。

凄いよ、世界が震えるてる。

流星はお姉ちゃんが愛用してる武器だね。」

グラムとダインスレイブ、ただの人であるなら抜いた瞬間に命を奪いかねない物なのですが眼前の敵に手加減は必要ありません。

思い出しなさい、あの戦場の感覚を、敵は今までで最強の存在と言っても過言ではありません。

冷静に冷静に思考を研ぎ澄ませ、眼前の敵を倒す！

「っ、ちよ、ちよつとくらい驚いてもいいんじゃない？」

「今更一撃を受け止めたくらいでは驚きませんよ。」

あの神船『フリングホルニ』すら沈める一撃を受け止めるなんて、本来なら驚嘆を通り越して呆れるところですが、私の想像を遥かに超えているアリスがそれをやってもやはり程度にしか思いません。

「流石にこれじゃ、役不足みたいだね。」

一応、最高級の物を使ってただけど神器相手じゃあと数合打ち合ったら折れちゃう。

お姉ちゃんも、神器を出したんだしアリスも見せてあげる。」

「それは……」

見た目はただの鎌ですが、あの刀身は

「やっぱり、わかるんだね。」

そうだよ、これは刀身お兄ちゃんの血を混ぜてるものだよ。

普通なら、自分の体の一部を使うんだけどアリスとお兄ちゃんの相性はばつちりだから自分の体の一部を使うより魔力伝導は良いし、効力も良い。

羨ましいでしょ?」

わ、私だ最近は熟年の夫婦のように目を合わせるだけやって欲しいことがだいたいわかるんですよ。

だから羨ましくなんて……

「お兄ちゃんって頭いいから半年も一緒に過ごしてればある程度行動が読まれちゃうんだよね。」

だから、夜這いを掛けようと思っても何かしら対策打たれて、本当にガード固いと思わない?」

「……そうですね!」

ちょっとくらい夢を見せてくれもいいじゃないですか!

レンは本当に私のこと妹扱いなんですよ?

美少女がこんなに尽くしてるのに見向きもしない、レンが悪いんで

す!!

「つく!?!」

「うん、おしいな」

私としたことが戦闘中に集中を乱すなんて……..
まあ、レンのことだから仕方ないにしても、それすらも利用して
くるアリスは本当に容赦ないですね。

「ちえ、もう落ち着いちゃったんだ。

もうちよつと集中乱してば楽だったのに。」

「それで勝てる相手なら良いんですが、油断していたら首をおとさ
れるかも知れませんかね。」

「やだなあ、アリスは神じゃないんだよ?

お姉ちゃんを殺せるわけないでしょ。」

「今更神であろうとなかろう関係ありません。

それに、いくら手負いとは言え私とここまで戦えるものなど神です
ら数えるほどしかいませんよ。」

「……..そっか」

そろそろお兄ちゃんを迎えにもいきたいし、そろそろ決めるね。」

「望むところです。」

待っていてくださいね、レン。
必ずアリスを止めて戻ります。

月の庭（後書き）

フリッグvsアリス、次回決着

・・・早く日常パートに戻りたい

世界vs世界

side アリス

「はあ、はあ、これでアリスの勝ちだね。」

最初にあれだけの傷を負わせて、アリスが最高の能力は発揮でき、尚且つお姉ちゃん的能力を少なからず制限したこの世界、手枷足枷つけてやっとう角・・・

それでも、神器は弾き飛ばした。

この状況で出してきた位だからあれ以上の神器はもうないはず。これでチエックメイトだ。

「まさか、私がここまで追い詰められることになるとは、夢にも思いませんでしたよ。」

「ここまで、追い詰められたのは過去でも主神以外いません。」

「違うよお姉ちゃん。」

これは追い詰めたんじゃないで、詰んだんだよ。

もう、お姉ちゃんに戦える力はない。

アリスだって、本気でお姉ちゃんを殺すつもりはないんだから早く降参してくれるといろいろ助かるんだけど。」

早くお兄ちゃんのところに行きたいしね。

ああ、あと少し、あと少しで救ってあげられる。

だから、もう少し待っててねお兄ちゃん。

「確かに私にはこれ以上戦うことはできません。

しかし、これで終わりというわけではありませんよ。」

苦し紛れの嘘とは思えない。

でも、今のお姉ちゃんが近接で戦えないことは事実。となると、遠距離かトリッキーなものはず。

どちらにせよ、この世界で神器は十全に能力を発揮できない以上アリスの脅威じゃない。

「これを使うことは2度とないと思っていましたよ。」

っ!?

「な、なにそれ・・・」

さっきの神器みたいな神格は感じないのに震えが止まらない。あんなもの勝負にすらならい、対峙した瞬間終わってる。

「アリス、世界はどんな形をしていると思いますか？」

「まさか・・・」

何の飾りもないようなただの槍が

「そう、これは数多ある世界の1つです。」

side out

「これが俺の作戦だ。

何か質問はあるか？」

「いくつも不確定要素はあるし、綱渡りの部分が多いけど、あのア

リスを止めるとなるとこれくらいクリアしないと無理ね。

私はフリッグみたいに完全に信じるとまではできないけどレンのと信頼してる。

そのレンがたてた作戦なんだから、不安要素はあっても降りる理由にはならないわね。」

「レン、俺にはユーリアがいる。

だから、俺は絶対にユーリアのもとに帰らなくちゃならない。」

「ああ、逆に命まで掛けられても困る。

可能な限りで力を貸してくれ。」

「ああ、もちろんだ。」

こんな作戦に2人を乗せるなんて今までじゃ考えられなかったな。

これも、皆のおかげか……

だから、次は俺の番だ。

待ってるよ、フリッグ、アリス。

side アリス

世界そのもの？

いくら、アリスが『月の庭』を展開してたところでここはあくまでも元いた世界。

世界の中に世界を内包するなんてそんなのが……

「信じられないと言った顔ですね。

まあ、無理もありません。

我ながらとんでもないことしているという自覚はありますから。」

「……1つの世界に世界を内包なんてしたら世界は沈むよ。お姉ちゃんはこの世界を沈ませるつもり？」

「確かに、世界というものは酷く繊細です。だからこそ、世界は矛盾や異物を嫌い全力で排除するよう抑止力が働きます。

ですが、抑止力そのものである神には世界からの干渉はありません。もっとも、今はそんなこと関係ありませんね。」

お姫様程度の神力ですら世界が許容できるぎりぎりなのに、世界なんて内包した瞬間沈むはず。それなのに……

「答えは単純です。

この世界が世界を内包できないというのならば可能な世界に作り替えればいいんです。」

「……はあ、本当に滅茶苦茶だよ。

そんなことができるならもっと早くやればいいのに。踊らされたみたいで馬鹿みたいだよ。」

「いえ、できるようになったはついさっきです。

どうやら私は追い詰められれば強くなれるようです。」

お姉ちゃんがまだ強くなるってとこまでは計算に入れてなかったなあ……

計算に入れてたとしてもここまで急激に強くなれたらもともとアリスに勝ち目なんてないか。

一から作り直すより、既存の世界を作り直す方が圧倒的に難しいはずなのに。

それを、あの短期間で使えるようになって、疲弊した状態から使うなんて本当に滅茶苦茶だよ・

「アリス、最後の忠告です。

こればかりは私も手加減が効きません。

負けを認めてください。」

世界を作り直したってことは神力も全力で使えるはず。

それなら、時間を稼いでもすぐ回復さちやう・

「どうやら、これを見ても退く気はないようですね。」

「当然だよ。

もともと、分が悪いどころか、奇跡が起こらないと勝てない戦いだっただよ？

その奇跡が起こしにくくなったぐらいで諦める理由にはならないよ。

「

1%が0・1%になったからって今更諦められない。

ほんのわずかな可能性がある限り絶対に。

それくらいの奇跡が起こせないでお兄ちゃんを救えるはずがないもん。

「そうですか・

1つ教えてください。

なぜ、いまなんですか？

レンが苦しむところを見たくないというのは分かりますが、いくら何でも性急すぎます。

あの吸血鬼が現れたのは偶然だとすれば、この計画は短期間で練ったものはずです。

アリスならば、もっと時間をかけ、念入りに計画を立てるんじゃないですか？」

「単純だよ、お兄ちゃんを救うのはアリスじゃなきゃ意味がない。お兄ちゃんが誰も好きにならないのは、そこまで進んでしまえばもう戻れないと知っているから。」

誰かを好きになって、それでも自殺志願を捨てきれなかったら最悪だもん。」

あのお兄ちゃんが心中なんてするはずないし、愛する人を置いてもいけない。

「ただ、死にたくてたまらない。」

「どっちもこれ以上ない強い想いだけあって、今より酷い苦しみが待ってる。」

「だから、お兄ちゃんが誰かを好きになるときはどれだけの苦しみが待っていても生きていく覚悟ができたとき。」

「つまり、お兄ちゃんを変えられた人がお兄ちゃんが好きになる人。」

「それは分かります。」

「しかし、それでは急ぐ理由にならないはず。」

「うん、本当はアリスももっと時間をかけて変えていくつもりだったんだよ。」

「その間、苦しむお兄ちゃんを見ることになるけど、期限が決まっていれば我慢できないわけじゃない。」

「アリスがお兄ちゃんを苛めたいと思うのは、アリスに構ってほしいから。」

「そんな子供みたいな考えだと分かっているけど、止められない程お兄」

ちゃんを愛してる。

「ただどね、そうも言ってられなくなっただよ。

お姉ちゃんじゃお兄ちゃんを変えることなんてできないと思ってた。アリスは、どうしてお兄ちゃんがお姉ちゃんを警戒するのか理解できなかつたよ。

ミナお姉ちゃんならと思うけど、結果が出るのはまだ先のはず。だから、ゆっくりでもいいから確実に変えていこうと思ってただけど、1つ予想外のことが起きちゃったんだ。」

本当にお兄ちゃんは鋭い。

アリスが見たって全然気づけなかったことにお兄ちゃんは気付いてた。

「それはお姉ちゃんが予想以上に成長してること。

お兄ちゃんを妄信的に信じてあげるだけじゃ、お兄ちゃんは絶対に救えない。

でも、お姉ちゃんは信じられないくらい短期間で成長してる。

焦ったよ、いつ、お兄ちゃんを取られるか分からない。

だから、少し無理があっても行動に起こさざるを得なかったんだよ。

┌

そして今ならわかる。

お兄ちゃんがお姉ちゃんを警戒してた理由が。

お兄ちゃんはお姉ちゃんがこうなることを予測してた。

お兄ちゃんも変わるくらいなら警戒なんてしなかったんだらうけど、それでも一生一緒に生きていくこととは別問題。

今とは別の理由で死にたくなる可能性も予測してお姉ちゃんと距離を置こうとしてたんだと思う。

「……そうだったんですか。」

それなら、なおのこと私は負けるわけにはいきません。レンを手に入れるのは私です。

そして、アリスの決意と覚悟を評し全力でいきます。」

お姉ちゃんも勝利を確信してる。

油断はしてないだろうけど、それでもそれは隙になる。

「世界の重さを知りなさい『ラグナロク』」

「これが真正銘最後の奥の手だよ『月落とし』」

例え神力を全力で使えたとしても今なら完全に傷が癒えてるわけじゃない。

そして、手加減ができないとは言ってもアリスを殺さないように無意識に手加減するはず。

たとえ相手が世界であっても、ここはアリスの世界。

その世界の中心であり核でもある月をぶつければ！

「押し潰せ！」

悪夢でも見てる気分だよ……

あれが世界そのものだとならなかつたら、あんな細い槍で月を抑えてるなんて……

「人の力、確かに見せてもらいました。

ですが、まだ最強（私）には及びません。」

つく、『月の庭』の核となる月が破壊された以上、『月の庭』の維持も……

「これで終わりです。」

ここまでかな……

ごめんね、お兄ちゃん……

「まったく、2人とも暴れすぎだ。

こんなに街を壊しやがって、後で請求されるのは俺なんだぞ？
帰ったら説教してやる。」

前哨戦

「フリッグ、なんだその物騒なものは？
どう見たって、やりすぎだぞ。」

そこにあるだけだっというのに、膝をつきそうになるような圧倒的な力。

いや、この感覚は死に続けていると言ってもいい。

ミナとジンをこの場に連れてこなくて正解だったな。

いくら、相手がアリスだとは言えあれはやりすぎだということくらい素人でも……

「これを使わざるを得ない状況だったんです。

実際これを使わなければ私は負けていましたよ。」

「……おいおい、アリスはいつたどこまで強くなってるんだ？
フリッグの言い方だと、あれは全力か、あるいはそれに近いもの
はずだ。

ということは、アリスの力は神に迫ってるってことか？

「だが、もう決着はついたんだろう？

さっさと、それをしまってください。」

「……分かりました。」

フリッグはこれで大丈夫だとして、問題は

「いいの、お兄ちゃん？

この程度の怪我ならアリスは数日で回復する。

アリスがお兄ちゃんを諦めない以上、アリスが生きている以上、アリスは何度でも繰り返し返すよ？」

「分かってるさ。」

「だから、1つ提案がある。」

アリスとの力の差は正直測りきれない。

だが、それは神に迫る前も後も同じことだ。

2重3重の罫を張り、あらゆる枷をつけさせ、疲弊した状態ならば、万に1つは勝ちを拾えるかもしれない。

そして、万に1つを勝ち取るための策は組み立てた。

「俺がアリスを止めたら、しばらくおとなしくすること。」

俺が負ければ、俺はアリスを受け入れる。」

「今のアリスはこんな状況だよ？」

それにお姉ちゃんがそつちに付けばアリスに勝機はない。

そんな条件で受けると思う？」

「もちろん、フリッグは参加させない。」

それに、今じゃなくても、アリスがある程度回復してからでもいい。」

流石に全開のアリスと戦って勝てるとは思わない。

あくまでも、ある程度疲弊してる状況での策だ。

アリスなら、用心を重ねて全快するまでまつだろうか？」

「お姉ちゃん、ちょっとだけ魔力を分けてもらっていい？」

「………分かりました。」

「今やるつもりか？」

「もちろん。」

だって、これはアリスが予想した通りの展開だよ。」

「なに？」

「よく考えてみてよ、アリスがお姉ちゃんに勝つなんて奇跡でも起こさない限り絶対に勝てないんだよ？」

それなら、アリス自身を人質にお兄ちゃんをこの場に呼び出し、お兄ちゃん自身に戦わせる。

ふふっ、全部アリスの思惑通りだよ。」

「嘘だな。」

アリスがそんな思惑を持っていたとしたら腑に落ちない点がある。」

「アリスに鎌をかけたって無駄だよ。」

お兄ちゃんは詐欺師なんだもん。」

今まで騙され続けてきたんだから、そう簡単には騙されないよ。」

失礼な、俺がいつアリスを騙したっていうんだ。」

「レン、自覚がないんですか？」

「ぐ、ま、まあ、そんなことはどうでもいい。」

腑に落ちないん点ってというのは、明らかにやりすぎているってこと」
るだ。」

「何を言うかと思えば、相手はお姉ちゃんだよ？」

最初から全力でいかないと「それじゃない」「

「俺が指しているのは、フリッグじゃなく俺だ。」

「っ、あんまり察しが良すぎると嫌われちゃうよ?」

どうやら、気付いたようだな。

まあ、フリッグは分かっているようにだから説明してやるか。

「お前たちがいてくれればそれでいいさ。」

話を戻すが、仮にアリスがこの状況を作るつもりなら、俺をあそこまで叩き潰す必要はないはずだ。

あそこから立ち上がれるかも分からない、仮に立ち上がったとしてもその時は迷いは振りきってる。

アリスが態々、俺に勝機を与えるようなことをするわけがない。本当にアリスがこの状況を作るつもりだったのなら、俺を迷わせる程度にしておくはずだ。

俺がその状態なら、まともに思考も回らない上に、いざ対峙した状況で潰せばそれでアリスの勝ちだからな。」

まったく、あの短い時間に俺の戦意を削ぎに来るとは、未恐ろしいにも程がある。

だが、それでもアリスは俺の妹だ。

ここで負けやるわけにはいかない。

「ちなみに、俺はアリスが受けると予測してたぞ。

アリスは確かに天才だ。

だからこそ、相手がどう動いてくるか漠然とだが予測することができる。

だが、逆に予測できない相手には警戒を強めざるを得ない。

そして、今まで俺の近くにいなながら予測できないことばかりやってきた俺に余計な時間は与えたくないはず。

それこそ、アリスの体力が回復するよりもな、だろう、アリス？」

「ここまで見透かされると、お姉ちゃんのを借りてアリスの思考を読んでるじゃないかって思っちゃうよ。

お兄ちゃんの言うとおり、アリスが一番怖いって思えるのはお兄ちゃんだよ。

戦闘において最強なのはお姉ちゃんだけど、戦わなければ大した脅威じゃないからね。

だけど、お兄ちゃんは違う。

いつもアリスの予想を超える策略、有能で信頼できる人もいる。

だからこそ、余計な時間は与えたくないんだよ。

今なら、使える人材が限られて、選択の幅が狭く策が読みやすい。

それがたとえお兄ちゃんの思い通りに動いていたとしても、アリスは読み切って見せるよ。

そして、必ずお兄ちゃんを手に入れる。」

俺もフリッグとアリス、どちらかを敵に回すことになるならフリッグだろう。

最強とは言え、知性があり、良心があればそれを利用して戦わずに治める方法がないわけじゃない。

しかし、優れた頭脳と能力を持ち、自身の行動に絶対の自信を持つアリスが敵に回るとなると手を焼くどころじゃない。

それこそ、国が持つ力を総動員させてもアリスを捕まえることは至難を極めるだろう。

「その考え自体、俺の罠に嵌っている証拠だ。もつとも、それも承知だろうがな。

だからこそ、アリスには読み切れないさ。」

「ふふっ、やっぱりお兄ちゃんはそうでないかね。
今度こそアリスに服従させてあげる。」

前哨戦（後書き）

今回はちょっと短めでした。

次回はいよいよ、アリス編最終章！！

神に迫る力を持つアリスに対してレンは！？

次回『約束された勝利』

どうぞ、期待せずにお待ちください（^^）／

約束された勝利

「いつでももきていいよ。」

初手は譲ってあげる。」

「いいのか？」

油断してると痛い目を見るぞ?。」

「別に油断してるってわけじゃないんだよ。」

ただ、お兄ちゃんの力を見てみたい。」

アリスとお姉ちゃん以上の差をどうやって埋めるてくるかをね。」

余裕を持っているが油断をしてるってわけじゃないか。」

まったく、楽しそうな顔しやがって・・・」

「ふふっ、ぞくぞくするよ、この緊張感。」

お兄ちゃんの一挙一動、一語一句、そのすべてからお兄ちゃんの策を読み取るうとしてる。」

ここまで集中できることなんて、お姉ちゃんと闘っている時ですらない。」

お兄ちゃんがいればアリスは何処までも強くなれる!。」

「随分期待されてるみたいだが、あまり饒舌すぎるとそこから人物像を読み取られる。」

読み取ることに関しては上手くなってると、隠すことに関してはまだまだだな。」

とは言ったものの、今日までフリッグにすら本当に力を隠し通せていたぐらいだ。」

本来なら、こんなミスはしないだろう。
そして、こんなミスをしてしまうほど昂揚してるってことか。

「その余裕も、減らず口も今の内だよ。
そろそろ、来ない？」

興奮しすぎて襲い掛かっちゃいそうだよ。」

「ああ、言われずともそろそろ行くぞ!!」

初手は俺の能力で作れる手榴弾の中で最も火力が高い物をジンと両側から投擲。

もちろん、こんなものでアリスを倒しきれんとは思ってない。

だが、アリスは死なずとも、ジンなら死ぬ威力の爆弾。

アリスは俺を屈服させるために誰も死なせずに勝利しようとするはずだ。

故に、アリスは手榴弾を処理しながら、両側から襲ってくる俺とジンを対処しなければならなくなる。

手榴弾が爆発するまで3秒。

俺たちを死なせないでくれよ、アリス。

side アリス

あれが爆発するまで3秒。

アリスが知っていると分かっているこれを使ってきてるね。
でも、アリスの読み通りだよ

3秒

手榴弾の数は両側から2つつつ。
適当に投げたからか位置はばらばらだけど視認できれば、空間転移で上空に飛ばせる。
全快だったら力づくで即発動できるけど、今の状況じゃそれは望めない。
空間転移発動まで1秒、前方後方ごとにやってたら間に合わない。
だから、まずはお兄ちゃんを

「がつ!?!」

ジンに投げつける。

2秒

そしてこの位置なら、4つの手榴弾が一度に視認できる。
ジンはお兄ちゃんが邪魔で、アリスの妨害はできない。

1秒

空間転移発動

次は2人を戦闘不能に追い込む

「よくも好き放題街を壊してくれたわね!!」
『イグニッションブラスト』

side out

アリスなら手榴弾を処理しながら俺たちを対処できることくらいや
つてのける。

だが、いくらアリスでも余裕とはいかないはず。

そこに、ミナの全力の古代魔法。

範囲にジンが入ってる以上アリスに避けるという選択肢はないが

「悪くないけど、ちょっと火力が足りないよ。」

「って、冗談でしょ!？」

ミナには悪いがこの攻撃には期待はしてない……

だが、これで完全に余裕は消えたはず。

そこに、俺たちが用意した切り札

「この借りは高くつくぞ、レン。」

ここに来るまでに、ミナにフリユネを運んでもらっていた。

ここまで余裕と余力を削られ、アリスには及ばずとも高い戦闘能力
を持つフリユネ

「つく!？」

「悪く思っ出ないぞ。」

恨むならレンを恨むことじゃ。」

「なんてね」

「なっ!？」

フリユネの足元が爆発した!？

いつの間にあんな罫を……

「アリスが本当にただで初手を譲ると思った？
お兄ちゃんとしやべってる間にアリスが何もしないとでも？
アリスに致命的な一撃を与えるにはお姫様を連れてくるしかない。
それがわかっていれば、お兄ちゃんの策に乗せられた振りをして、
お姫様に罫を仕掛けておけばいいだけだよ。」

ああ、そうだろうな。

少し考えればフリユネを決め手に使うってことくらい分かる。
だが、フリユネに対応できることも俺の読みの内。

「まさか、本当にこれを使うことになるとはのう。
未恐ろしい限りじゃ。」

戦いが終わった思っている時こそが最も隙がきやすい。
このチャンスを生かすため、フリユネには罫にかかったふりをして
もらった。

そして、アリスの罫からフリユネを守るために、以前フリッグがミ
ナに渡したお守りを渡しておいた。

「これで終わりじゃ！！！」

「うん、これで終わりだよ。」

side アリス

ミナお姉ちゃんが持っていたお守りは、世界の壁を作る『レヴォル
ト』が発動する物。

『月の庭』の展開は流石に厳しいけど、『レヴォルト』を抜ける程度

なら問題ない。

「アリスもこの時を待ってたんだよ。
今のアリスがお姫様とまともにやりあえば負けはしないけど、かなり消耗させられる。」

だから、勝ったと思って油断させるためにわざとここまでお兄ちゃんの策に乗せられたふりをしてたんだよ。」

これでお兄ちゃんにはアリスを倒す術がなくなった。
そして、これで詰みだね。

「これでアリスの勝ちだよ。
まだ諦めないのはお兄ちゃんの勝手だけど、あんまり諦めが悪いとミナお姉ちゃんがどんどん傷ついていくからね。
確かに、アリスはミナお姉ちゃんを殺しはしないけど、痛みつけることならいくらでもできるよ。」

誰かを傷つけることが嫌いなお兄ちゃんは今これでも何もできない。
勝った、アリスは読み切った！！

「そうだなあ、負けを認めるんだったらキスしてもらうかな。」

「レン、諦めちゃだめよ！！
まだ、なにか・・・くっ!？」

「せつかくいいところなんだから黙っててね。
それに、ミナお姉ちゃんを盾にしてる以上お兄ちゃんは何もできない。」

たとえば、お姫様が動けたとしてもアリスは負けない。」

お姉ちゃんが動けるといふのなら話は別だけど、お兄ちゃんは嘘はついても約束は破らないからお姉ちゃんを使いはいはしない。

「さあ、終わりにしよう、お兄ちゃん。」

「アリス、こんなこと間違ってると思わないのか？」

「思わないよ。」

お兄ちゃんが変われないなら、お兄ちゃんを救えるのはアリスのやり方しかない。

それは、誰よりお兄ちゃんが分っていることでしょ？」

「ああ、本当に情けない限りだ。」

俺が弱いばかりにこんなことになってしまった。お前たちを守ると言ったのに、結局は守られてる。」

「それでいいんだよ。」

お兄ちゃんは十分苦しんで頑張った。もう、休んでいいんだよ。」

「だから、俺はいい加減乗り越えないといけない。」

これからも、お前たちを守っていくために。死への逃避から、信じることへの恐怖から。」

まだ、目が死んでない。

この状況を覆す策がある？

ミナお姉ちゃんを人質に取って、アリスにダメージを与えられるお姫様は気絶させてる。

どうやったって、覆せるはずがない。

けど、相手はあのお兄ちゃんなら……

「無駄口はそれまでだよ。」

これ以上無駄な時間を稼ぐつもりなら、まず、爪をはがす。
次は指を、耳を、アリスはいくらでも傷つけることできるんだよ。」

「止める、今いく。」

ジンじゃ、アリスに致命的なダメージは与えられない。

あの刀にも特別な処置を施している様子はなかった。

お兄ちゃんが創る武器もアリスの脅威じゃない。

ミナお姉ちゃんが何かやろうとしても、瞬時に止められる。

アリスの勝ち揺るがないはずなのに……

「レン、やりなさい!！」

「ああ!！」

……ありえない!？

お兄ちゃんがお姉ちゃんを撃つなんて!!

side out

side ミナ

くくくくくつ!？

流石に痛いわね。

「ミナ!！」

「分かってる。」

レンが私を撃つ。

これはレンが変われないと思ってるアリスにとって最も予想外なこと。

それこそ、人質の私から気を離してしまうほどに。

そして、その隙に私とレンは空間転移で脱出。

「いまだ、フリユネ!!」

「任せよ!!」

『イノセント・ジャッチメント』

そして、アリスがお守りを抜けてくると予想していたフリユネはあの一撃で気絶せず、守りを固めていた。
全ては、この時の為に!!

「くっ!？」

まだ、まだアリスは負けない!!」

レンもこの一撃で倒せるとは思っていなかった。
だからこそ、ここで最後の切り札を用意した。

「ごめんなさい、アリスちゃん。

嫌われても仕方ないけど、ここは止めさせてもらっわよ。」

「フランお姉ちゃん……」

そして、ここまですれば私たちの勝ちだ。

side out

「……よく、私がお姫様と同等の力を隠してる分かりましたね。」

「やはり確かに天才だ。」

だが、それだけでフリッグ相手にあそこまで善戦できるとは思えない。

なら、誰かが指南をしているはず。

そして、アリスにいろいろな事を吹き込んでいるあんたなら、アリスに教えることができるかと踏んでな。

正直、来てくれるか微妙な賭けだったよ。」

そして、あいつが俺に手を貸してくれることもだけだな。

「はあ、はあ、もう終わってるつもりなのはいいけど……アリスはまだ……はあ、まけてないよ……」

「アリスちゃん……」

「心配しなくても、はあ、はあ、アリスはフランお姉ちゃんのこと嫌いになんてならないよ。」

だって、お兄ちゃんは詐欺師だもん。

騙されたも仕方ないよ。」

そんなボロボロになってまで、まだ立つのか……

「くっ、流石にミナお姉ちゃんごとアリスを撃つなんて予想外だったよ。」

でも、アリスはまだ負けない!!」

アリスはどんなことしても立ち上がるだろう。
なら、ここからは俺の役割だ。

取り戻したもの

「まだ、起きませんか・・・」

「あれだけの怪我を負ったんだ、2、3日は目覚めなくても仕方ない。」

フリッグとの激戦の後、休みことなく俺たちと闘ったんだ。いくら、アリスといえど相当な疲労がたまってるだろう。

「いえ、アリスのことは確かに心配なんですけど、こんなにアリスにべったりじゃ私がレンといちゃいちゃできないじゃないですか。」

こいつはどうしてこんなに残念なんだろうか？
黙っていれば文句なしの美少女だというのに。

「仕方ないだろう、アリスと約束したんだから。」

「それは分かってますけど・・・
もう、丸々1日ですよ！」

こんなに長い間レンを独占されてるんですよ！
アリス、いい加減に起きてください！」

はあ、またか・・・

この約束をするときにこねて、この部屋に来るたびにこの繰り返し。それに1日が長いと言ってるが、お前は1週間も2人でいただろう。

「フリッグ、いい加減にしなさい。
まったく、少し目を離すとこれなんだから。」

「ミナはおかしいと思わないですか!!」
今回の主犯はアリスなのに、そのアリスにレンが付きつきで看病して
るんですよ!
私だって刺されたり、切られたり、いろいろ力を使ったりして疲れ
てるんですよ!
私だってレンに看病してほしいです!!」

「あー、はいはい、分かったから行くわよ。」

「うう〜、レン〜」

まったく、甘えられるのは悪くないんだがTPOくらいは考えてほしい。

その点、ミナは分かってくれて助かる

「ああ、分かっているとと思うけどアリスが起きたらこの借りはきっちり
と返してもらおうからね。」

……全権撤回だな。

「ところでアリス、いつまでそうしてるつもりだ？」

「あはは……、やっぱりばれてたんだ。」

「半信半疑だったけどな。
他の誰かがいる状況で言えるほど確信はしてなかったが、誰も聞いて
ないんなら多少恥ずかしいだけで済む。」

他の誰かがいる状況で違っていたら恥ずかしすぎるけどな。

まあ、誰もいなくても違っていたら恥ずかしいが・・・

「もう、お兄ちゃんがそんなことするから勘違いしちゃうんだよ？これを狙ってやってるんだとしたら誘ってる勘違いしても仕方ないよね？」

「目を覚ました時、すぐ傍に居るって言ったのはアリスだぞ？それに、寝てる間も手を離してくれなかったんだ。どこかに行きたくてもいけない。」

「ふ〜ん、それじゃあ約束しなかったらいてくれなかったんだ？身を挺してお兄ちゃんを助けたのに薄情だな〜」

仕返しのつもりか？

こういうところはまだまだ子供っぽいな

「いや、アリスの可愛い寝顔を見ていたから暇ではなかったぞ。」

「なっ！？」

おお、アリスでもこういう反応するのか。
なんだか新鮮でいいな

「うう〜、うう〜、お兄ちゃんのばかあ〜」

どうもこういうところを見せられると苛めたくなくなってくるのはSだからなのか？

常識的に考えてアリス位の歳の子供を苛たいとはいろいろ疑ってしまつところだが、そこはアリスだからという理由でいい気がしてくる。

「どうした？」

まさか、いつも年齢のそぐわないことばかり言うアリスがこれくらいで照れてるのか？

いや、安心したよ、アリスにもこういう子供みたいところが残ってたんだな。」

顔を赤くして睨まれても全く怖くない。

10人が10人可愛いとしか言わないだろう。

もちろん、俺もその中に含まれる。

とはいえ、そろそろやめないと危険な気がするな

「それじゃあ、そろそろいく」お兄ちゃんがその気なら「

まずい！

「おち、ぐえ・・・」

「ふふっ、言い負かされた分たっぷりお返ししてあげる。」

ぐっ、この負けず嫌いめ。

これはまずい、本気でやられる!？

side フリッゲ

「離してくださいミナ！

レンの貞操が危ないんです!」

「何馬鹿なこと言ってるのよ!？」

アリスはまだ寝てるんだからそんなことあるわけないでしょ!!--!」

「いえ、私にはわかりません。だから、行かせてください！」

「そういつて、レンに会いたいただけでしょ！もう、何度同じこと言ってるのよ！」

「今度は本当なんです！証拠もあります！」

「証拠って……フリッグ、確かそれって……」

「前に仕掛けた盗聴器です。こんなこともあるつかとこっそり仕掛けておきました。」

「フリッグ、私あなたと友達でいれる自信がなくなってきたわ。」

あれ、なんだかすごく退かれてる気がします。

これはあくまでレンの安全を確保するためのものであって、レンの声を聴きたいからとかレンのプライバシーをちよっと覗きたいとかそんな目的じゃないんですよ？
本当ですよ

「というわけで、どいてくださいミナ！」

「あ、こら、待ちなさい！」

「レン！」

「フリッグ、助かった。」

「もう、お姉ちゃんはいつもいいところで邪魔するんだから。」

レンを押し倒してる決定的な現場でよくもあんな余裕な態度が取れますね。

フッフ、これは1度たっぷりおはなしする必要がありそうですね

「あ、やっぱりあった。」

え

「……アリス、それはなんだ？」

「この部屋にいらなくてもこの部屋の音が聞けるようになるものかな。」

「ちょ、ちょっとまってください!？」

それは「つまり、盗聴器だね」「

あ、なんだかあの優しいレンにとっても怒ってるオーラが見えます・

「さて、フリッグ、詳しく説明してもらおうか。」

side out

「ふえーん、レン、許してください」

「少し反省してろ。」

あれから、俺の部屋もアリスに見てもらったところいくつも盗聴器が見つかった。
幸いと言っていいのか、俺の部屋では主に寝ること以外しないからほとんど意味がない。
だが、流石にこれは注意しておかないと次は何をされるか分かったもんじゃないからな。

「ねえ、お兄ちゃん。」

「どうした？」

「今更だけど、あんな約束しちゃって本当にいいの？後悔しない？」

・ ・ ・ ・ ・

「どうしたの？」

いくらアリスがこんな状態でもお兄ちゃん1人なら簡単に無力化できるんだよ。

それとも、まだなにかあるのかな？」

「いや、もう俺に手は残っていないし、これ以上戦うつもりもない。」

「アリスを説得でもするつもり？」

「ごっほ・・・はあ、はあ、アリスは止まらないよ。」

「どうしても止めたいって言うなら力づくで止めてみてよ。」

「アリス、ミズガルズで結んだ約束覚えてるか？」

「それはもちろんだよ。」

「でも、ごめんね、お兄ちゃんを信じさせる前にアリスがお兄ちゃんを信じ切れなかった。」

「それは俺のセリフだ。」

「俺が不甲斐ないばかりにお前たちにはいつも苦勞ばかり掛けさせて、拳句の果てにはこんなことになってしまった。」

「だが、いい加減に俺も目を背けることを止めよう。」

「いつでも、こいつらは本気で俺に向かい合ってくれた。」

「生きることから目を逸らし続けている俺に、懸命に向かい合ってくれた。」

「だから、俺は死に逃げることは止めにする。」

「俺は苦しんで足掻いて、最後に生きてて良かったと思えるように頑張る。」

「それは、アリスたちに苦しみながら生きていくお兄ちゃんを見守り続けるってこと？」

「お兄ちゃんはまだ、お兄ちゃんだけの物じゃないんだよ。」

お兄ちゃんが傷つけばアリスも傷つくんだよ？
それでも、お兄ちゃんは立ち向かうの？」

「ああ、俺はもう逃げない。

俺の負けだ、お前たちには負けたよ。」

俺にとって死ぬことは何よりの救いだつた。

生きている限り誰も傷つけずに生きていくことなんて不可能で、誰も何も信じる事ができない俺に支えなんてなかった。ただ、きつとこいつらとなら生きていける気がする。いつか、生きたいって思えるはずだ。

「そっか、おめでとうお兄ちゃん。

きつとこれから地獄の苦しみが待っているかもしれないけどアリスはずつと支えるからね。

愛してるよ、お兄ちゃん。」

「俺も家族としてなら大歓迎だ。」

「ふふっ、お兄ちゃんらしいや。

ちよつと、眠くなつってきちゃった……。」

「ああ、ゆつくり眠れ。」

「ねえ、お兄ちゃん、アリスが目を覚ました時一番に目に入るのはお兄ちゃんがいいな。」

「分かった。

アリスが目を覚ますまでずっと傍にいる。」

「うん、約束だよ。
それじゃあ、おやすみ・・・」

・
・
・
・
・
・
・

「後悔なんてしないさ。

これから途方もない苦しみが待っていても、取り戻せたものもある。

」

例え狂いそうになっても、皆がいるこの生活を取り戻すことができた。

俺がすべてをかけても守りたいもの。

これを守るのならばどんな苦しみとも付き合っていくさ。

「そっか、それじゃあ次は本格的にお兄ちゃんを落とすしにかからないとね。」

「手加減はしてくれよ。」

「それは無理だよ。

アリスが命を懸けても手に入れたい愛しのお兄ちゃんなんだから」

ああ、これが俺の幸せの形なのかもしれないな。

取り戻したもの（後書き）

終わりっぽいですがまだ終わりませんよ><

更新は相変わらず不定期になりそうですけど・・・

次の街は

「アリス、立ちなさい。」

この程度では私はおるか、上位の神格を持つ神には勝てませんよ。」

「はあ、はあ、簡単に言わないでよ、お姉ちゃん。」

今、俺たちはフリッグが創った世界とやらにいるらしい。

曖昧なのはいきなり変なところに飛ばされて、ここはフリッグ作った世界としか説明されてないからだ。

フリッグが強いのは知っているつもりだったがどうやらまだまだそこが知れないらしい。

「確かにアリスの『月の庭』は強力です。」

前代未聞の対神術であり、神器を持った私と互角に戦えるほどまでに能力を引き上げる一種の神器といってもおかしくないでしょう。

ですが、突然襲撃があった時あんな大がかりな仕掛けを敷いておかないと発動できないものなどないものと同じです。」

フリッグの声は聞こえるのだが、目で追うどころかどこにいるのか全く分からない。

いったいどんな速さで動いてるんだ・・・

「ねえ、レン、これってあれよねえ・・・」

「ああ、おそらく訓練という建前のもと先日の鬱憤を晴らしてるんだろう。」

あの後、アリスは俺にべったり、いつもならフリッグが引き離すと

ころだが盗聴器なんてものを仕掛けた罰としてしばらく、アリスが俺に何をしてもよほどのことがない限り干渉しないと約束を取り付けられた。

なぜ、アリスが決めているのかというと

『アリスが気付かなかつたらずつとあのままだっただよ？』

そのお礼くらいしてもいいんじゃないかな？』

まあ、特に俺に損害があるわけじゃないということでも頷いてしまったというわけだ。

それからというもの、フリッグに見せつけるように引っ付いてくるものだからフリッグの機嫌が日に日に悪くなっていき、ついに限界がきてこうなつたわけだ。

「むう、お兄ちゃん慰めて。」

「あー、よく頑張ったな。」

本当に負けず嫌いというかやられたらやり返さないと気が済まないらしいな。

「アリス!!」

まだ終わっていませんよ、早くレンから離れなさい!!」

「少し落ち着きなさい、フリッグ。」

「ミナは何も思わないんですか!？」

あんなこと起こしておきながら、どうしてあんなにレンにべたべたしてるんですか!」

「それは、フリッグが余計なことしてたからでしょ。

それに私は別に何の制限もないわけで……」

「って、おい!？」

「三十まで何やってるんだ。」

「つく、もう何度目か分からないが俺は健全な男だぞ。」

「体を押し付けるように腕に抱き着かれたら何の反応もないわけがない。」

「な、なによ、減る物じゃないんだしいいじゃない!！」

「そう言うなら、その赤面はやめる。」

「そこまでしてフリッグをからかいたいのか。」

「ううゝ、ううゝ・・・。」

「ほら見てみる、もう泣きそうになってるだろ。」

「そして、最後にとばっちりを受けるのは俺だから・・・。」

「アリス、もういいだろ?」

「アリスはお兄ちゃんがそう言うなら、アリスはいつでもいいよ。」

「というわけだ、もういいぞフリッ!」「レン!」「っ」と

「いや、まあ、予想はしてたが、やはりこうなったか。」

「ふふっ、お兄ちゃん両手に花どころじゃないね。」

「そう思っんなら離れてもいいんだぞ?」

「それじゃあ、お姉ちゃんをダシに抱き着いてるミナお姉ちゃんが

離れたら離れてあげようかな」

「こ、これはそういう流れだったからで・・・」

「ああ、言い方が悪かったね。」

本当はお兄ちゃんに甘えたいのに、ツンデレだから素直になれず、
こつこつという機会じゃないとお兄ちゃんに抱き着けないミナお姉ちゃん
が離れたらアリスも離れてあげる。」

そ、そこまで言うのか・・・

気持ちは分からないでもないが、俺でもそこまではしないぞ。

「う、うるさい!!」

絶対、誰にもレンは渡さないんだから!!」

ああ、久しぶりの幼児退行・・・
どんどん、状況が悪くなる。

「こつこつなったら、しばらくミナお姉ちゃんは離れないからアリスも
離れられないね。」

「・・・・・・・・・・もう、好きにしてくれ。」

ミナとアリスを離れたところで・・・

「私は後3日は離れませんよ!!」

この数日、私はずっとこの時を待ってたんですからね!!」

一番の難関が待ち構えているんだからな。

・ ・ ・ ・ ・

「つ、次の旅先はニダヴェリールよ。
いつも通り、出発は1週間後だから各自準備しておいてね。」

流石にあの後3日間も離れないはずもなく、ミナが正気に戻ったところでアリスも離れ、2人ががりでフリッグも引き離れた。ミナが正気に戻るまで、6時間は掛かったがな・・・

その間何をするわけでもなく、ただ他愛のないことはしゃべったりしただけで何もやましいことはしていないぞ。

我ながらよくやったと褒めてやりたい。

ちなみに、その6時間の間、ジンはいい加減見慣れたのか同情の眼差しを向けられただけだったが、フリユネは「3人とも娶る甲斐性を見せぬか。」なんて言いやがった。

どんな甲斐性があったらそんなことが可能なのか是非とも聞いてみたい。

3人とも仲はいいが、独占欲が強い。

ハーレムなんてものは絶対に認めないだろう。

「ちなみに今回は兄さんも参加するそうよ。」

「たまには、友達遊んで来いと言われてな。

それに、ニダヴェリールには見に行きたいものがある。」

これは本当に助かる。

ジンがいなくときは軟派が多い。

俺は見た目が冴えないからか、俺と一緒にいても声を掛けられるしな。

それに、男1人というのはいろいろ堪えるものもあるから、大助かりだ。

「それじゃあ、私たちはそろそろ帰るわ。
しっかりと準備しておいてね。」

・
・
・
・
・
・

ニダヴェリール、通称、錬鉄の街。

腕のいい職人が集い、この国の武器の9割がここで生産されているらしい。

ジンが見たいものもおそらく武器だろう。

武器、つまりは戦うための物だ。

この街で巻き込まれる厄介事が流血沙汰にならなければいいがな・
・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1562q/>

死にたがりな主人公とその仲間たち

2012年1月6日06時45分発行